

---

# 黄巾無双

味の素

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄巾無双

### 【Nコード】

N5565Q

### 【作者名】

味の素

### 【あらすじ】

戦死した黄巾の将、波才。だが彼は現代の日本へと転生、愛する家族を守り死んだ……はずだったが目を覚ますとそこには。

駄文&キャラ崩壊&字間違い&変なノリのネタ&シリアスプレイクのゆっくり更新ですがそれでも「かまわん、やれ」と言ってくれるもの凄いい心の広い方。駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

現在黄巾党編終了。

第一話 第二の人生、そして新たな外史（前書き）

救済法をあれこれ持ちだして、一体どういうつもりだ。  
最上の救済法は、この現在の瞬間を精一杯生きる事だ。

くゲーテく

## 第一話 第二の人生、そして新たな外史

どうも、私は波才と申します。

歴史的には黄巾党に属し、指揮官やってみました。

みんなもよく知っている三国志の世界にいたんですよ!!

三国が成立する前に戦死しましたけど。

いやあね。

そもそも黄巾党自体がなんの変哲もない民（農民）で大部分が構成されてましたから数で押すしかないんですよ。

難しい戦略とかは訓練しないとダメだし。

それ以前にそんな戦略立てられるほど私頭良くないんですよ……。

それでもがんばって右中郎将の朱儁を撃破！

皇甫嵩・朱儁の連合軍の籠る長社を包囲！

これで勝つる！！

って思ってたら

あれです。ある夕方、大きな風が吹き始めたんですよ。

おかげで皇甫嵩による火計で大変な目に！！

あれ、張角様？

天は俺たちの味方じゃないんですか？

蒼天已死　？天當立　？在甲子　天下大吉（訳：俺たちの時代が来たんや！！）じゃないんですか！？

おかげで敗走。

その後参戦した人物マニヤのチート野郎のせいで更に追い詰められて戦死しました。

それが私、波才という人間の一生です。

それでもやっぱり神様っているんですかね？

その記憶を持ったまま転生して日本という所に生まれました。

生まれたときはびっくりしましたよ。

なんせ周りにある物は意味が分からないものばかりでしたし。あまりにも別世界すぎてどこにいるのか解りませんでしたし。

でも、私を産んだ両親はとていい人達でした。

私のことを愛し、育ててくれました。

生前の私、結構荒れてたんですよ。

国は何も助けてくれない。

重い税を課して私達を苦しめるだけ。

そして家族を殺されました。

そんな国ではいけない！

そう思い張角様率いる黄巾党に入り漢に反旗を翻しましたが・・・。

ここはすげえ。

一般の私のような者まで教育を受けられて、食べ物に困らない。

この世界の全員ではありませんが、少なくともこの国の人たちはそうです。

それに世界の料理が食べられるんですよ！！

「すばげつてい」とか「ぴぎ」とか「ふらいどちきん」とか!!  
もう感動の連続ですよ!!

私はこの私を育てている両親に恩返しをしたいと思い、一心に勉学に励みました。

私は勉強などという者は生前には受けられませんでしたが・・・なるほど楽しいですね。

あの時代にはこんなにもすばらしい知識はないとは思いますが、なにも学んでいなかった私達が負けたのは当然かも知れません。

こんなすばらしい軍略や政策や医学、農学をあの時の私が持っていたら・・・いえ、もはや叶わぬ夢です。

他にも調べるうちにその後の黄巾党のことが解りました。

民がこのような巨大な情報の塊を自由に出来るなんて・・・すごいですね「いんたーねっと」って。

この世界に来てから驚きが絶えません。

ついつい毎度のこと子供のようににはしゃいでしまいます。

まあ今は子供なんです。

張角様・・・まさか病でお亡くなりになるなんて。

さらに漢の將軍達は張角様の墓を暴いてその首をはねたそうです。

そのことを知ったとき、私は齒を噛み締め、爪が肉に食い込み血が出るほど手を握りしめました。

確かに私達はなんの罪もない民から物を奪い、殺した。

それは許されざること。

この時代に生きていて強くそれを感じます。

でも、その私達も元は民なのです。  
最後はあのような賊となりはてましたが、それでも最初は私達は国を憂い、立ち上がった。  
戦った。

・・・いまさら何を思い、考えても変わりませんね。

もはや1800年も前のこと。

波才という人間も過去の死んだ人間。  
もう終わった話です。

でもあの人材マニアが国を立ち上げるとは・・・それも最終的には晋となつて滅びたんですね。

劉備。

かなりの不良でしたが人望はすごかったようで。黄巾の仲間だったものもこの人の下に行つてますしもし違う形で会えてたらって考えてしまいます。なかなかの粹な心を持つてたみたいです。

曹操

人材マニア。内政・軍略共にチート。これ知つてたらあの頃戦いませんでしたね。なんかもう調べれば調べるほど別格なんです。



孫堅

勇猛な武。噂には聞いてましたが会ってみたかったなあ。彼の息子達もなかなかだったみたいですね。呉という国には彼の心が受け継がれていたのでしょうか。

孔明

有名ですが内政が一番強かったんですね……。この人がいたらうちの軍も兵糧とかに困らなかつたろうに。ちなみに某ゲームのせいでビームで戦ってたって最近まで勘違いしてましたよ。

周瑜

何故か孔明の影に埋もれちゃってますが赤壁つて実質この人がやってましたよ？他にも病気で死ぬまで呉の大切な主柱でこの人があと五年生きてたらと思うと。

荀？

あの人材マニアの懐刀。いろんな人材を推挙したそうです。この人があの人材マニアの病状を悪化させたんじゃない……。知略もあるし「王佐の才」は伊達ではないって事ですか。

私が死んだ後たくさん英雄が生まれ散っていった。

何を思い、戦い、散っていったんでしょうね。

それを知ることにはもう出来ないですけど。

こちらに来てからはさまざまな分野の勉強をしています。おかげで学校での成績は常に三位以内。

他にも戦死したという嫌な思い出が有るせいかさまざまに武術を習っています。

この間、弓と柔道の大会で優勝しました。  
父と母は

「流石私達の子供!!」

と人前を気にせずにいちゃいちゃしていますが・・・いや、かなり恥ずかしいです。

そう言えば前世の私がゲームに登場しているというので見てみましたが・・・。

某アーケードカードゲームでの私のステータス

武3 知2

特技

復活：撤退したときの再生時間が早い

暴乱：他の味方が暴乱系の計略を使用したら自分も同時に効果を受ける

大軍：最大兵力が1.3倍、城の中での回復速度も1.3倍

うん、なかなかの高評価です。

知力が壊滅的にあれですが。

某戦略ゲームでは

統率：71 武力：74 知力：52 政治：25 魅力：33

です。

内政面が死んでますね。

そしてやっぱり脳筋。

それに魅力ってなんですか？

そんなに私はあれなんですか？

ケンカ売ってるんですか？

決めた。

もっといろんなことを勉強しよう。

そしておしゃれしよう。

そしてなんだかんだで私ももう大学生。

そういえば妹が出来ました。

妹は素直でいい子です。

小学3年生になりやんちゃな時期。

あどけない笑顔でお兄ちゃんと甘えてきます。

私と同じ転生者ではないみたいですね・・・。

でもとってもかわいいです。

私、家族には甘いみたいです。

前の家族はみんな役人に殺されたからでしょう。

税金が払えず、しかたなく食べるための物を底に隠していたのを見

つかって見せしめに家族は殺されました。  
だからかどうも兄ちゃん、兄ちゃんと話しかけてくる妹がかわいく  
てなりません。

初めてのバイトの給料も妹の靴を買ってあげました。  
すごく喜んでくれてこっちまで笑顔になっちゃいましたよ。

今、十字路の交差点で私達兄妹は信号が変わるのを待っています。  
休みの日なので妹を近くの遊園地に連れて行った帰りです。

早く家に帰って笑点見たいですねえ。

私、笑点とヘビメタがすごい好きなんですよ。

妹はアニメのDVD（プリキュアってやつですか？）を見たいと言  
っています。・・・こればかりは妹といえども譲れません。

信号が青に変わり妹が走って渡り始めたとき

車が横からすごい勢いで走ってきました。

「（信号無視！？）」

運転手が携帯をいじってる姿を確認、そしてその先には

「え？」

呆然と立ち止まっている妹が。

やばい！！

私は駆け出します。

早く！！早く！！

「（もう私は）」

妹の2メートル近くまで車が迫る

「もう私は・・・」

運転手の女性が気づき驚きの顔をするがもう間に合わない

「（大切な人を失いたくはない！！）」

間一髪で妹を突き飛ばす。

ごめんね、急だから優しくできない。

そして私に体が吹き飛ぶような衝撃が襲いました。

ああ、目がかすみませす。

妹が私に駆け寄り、おにいちゃんおにいちゃんと泣いている。

近くの男性が携帯に向かって慌てるように声を張り上げ話をしてい  
る。

あ、ありがたいですけどたぶん無駄です。

もう私は数分も生きられないでしょう。

私が前世で槍と弓で体を貫かれたときと感覚が似ています。

死ぬがすぐ近くにあるという感覚。

私を死が飲み込む。

ああ、結局親孝行出来ずに死んじゃいますね。

かわいい妹の花嫁姿見れませんでしたね。

あの時の私は死ぬことに未練は有りませんでした。が今の私は未練た  
らたらずです。

妹が私の顔を見ながら泣き叫ぶ。

ああ、そんなに泣かないでください。

かわいいお顔が台無しですよ？

笑った顔を見せてください。

私は妹に笑いかけます。

でも妹は笑ってくれません。

前世では私の死を誰も惜しみませんでした。

死んでも将が消えただけ。

反乱に加わった賊が消えただけ。

でも今日の前の妹は私の死を惜しんでくれている。

父や母も悲しむでしょう。

それが何故か嬉しくてたまりません。

涙が目からこぼれます。

そうだ。

死ぬ前に一言残すのがいいですね。

「ま・・・」



妹がくしゃくしゃになった顔で私を見つめる。

ホント、死にたくなかったなあ。

でもしょうがない。

だから一言言わせて欲しい。

「また生まれてよかった。みんなありがとう」

そういつて私は今度は笑顔で第二の生を終えました。

本当にいい人生だった。



はずなんですがここはどこでしょう？

なぜか荒野のど真ん中にいるんですが？

今、私は荒野のど真ん中にいます。

おかしいですねえ。

さっきまで町中にいたはずなのに何でこんな所に？

周りを見回してもなんにもありません。

体を調べて見るも傷も何もありません。

ってちょっとまってください？

着ている服がさっきまでの服と違います。

どうみても大河ドラマとかで見る山賊の服装なんですけどかこれ私の黄巾党時代の服なんです。

頭には黄色い布

黄巾党の証と言える布だ。

腰には剣もあるが体つきはさっきまでの自分と同じだ。

もし、前世の波才である私なら体には傷が複数ついているはず。

「・・・ほんとになんなんでしょうね」

思わずそうつぶやきます。

独り言なんて久しぶりにしましたね。

てかほんとここなんですか？

どこですか？

「おい、おまえ」

声が聞こえたと思いい後ろを向くと  
そこには

「なにこんな所でぼうつとつっ立ってんだよ」

頭に黄色い布を巻いた三人の男がいました。

「（まさか、ここは！？）」

ははは、神様？

貴方って本当に何を考えているんですか？

「ああ、すみませんちょっといいですか？」

「ん？なんだ？」

「今この国の名前は？」

本当に本当に

「何いってんだお前。漢に決まってるだろうが」

なにがしたいんですか。

第一話 第二の人生、そして新たな外史（後書き）

波才って結構指揮能力があっただのではないかと思ったり思わなかったり。

次はあの人達との出会いです。

第二話 名将祭（前書き）

生きるべきか死ぬべきか。それが疑問だ。

くシエークスピアく



## 第二話 名将祭

どうも波才です。

前世では黄巾党の指揮官でした。

今は普通の大学生

「何いってんだお前。漢に決まってるだろうが」

だっただけですががたぶん後漢の時代にいます。  
もう本当になんなんだろう。

あれですか？

諸君、私は帰って来たー（棒読み）とでも言えと？

ふざけないでくださいよ。

私はもう平和な日本で一生を終えてあとはあの世で隠居でもするつもりだったんですよ？

日本で転生した。家族を持った。幸せな最後だった。悔いは無かった。神様、チャンス을くれてありがとう。

そう思っていた頃が、私にもありました。

神様、なんでもう一回チャンスという名の嫌がらせするんですか。

「お前その格好、俺らと同じだろ？」

チビな方が私に言います。うん、同じですね。こんな格好で歩いている人間、日本の秋葉にすらいませんよ。即不審者で警察呼ばれますよ。

ってここ日本じゃなかった。中国だった。しかも大昔だった。

「あ、いや。そうであってそうじゃないというかなんというか」

「おいおい・・・意味がわかんねえよ」

真ん中のおっちゃんがあきれかえっています。

そりゃ私でさえ解らないのに解れて言われても困りますよね。・・・

・本当に、何なんだろう。  
と、取り合えず私は記憶喪失だって事にしておきましょう。

「ああ、ちよいと記憶が飛んだみたいで」

「あ、まじかよ？大丈夫か」

「ええ、所で張角様はいずこへ？」

そうそう、せっかくここに来たんだから張角様へお目通りがしたい。  
やっぱり私は張角様を今でもお慕いしているのだ。

少なくとも今の俺なら医療の知識も少しあり病状を送らせることも  
出来るかもしれない。張角様が病気で亡くなっていたと知ってちよ  
つとは医療をかじったからね。

それとなるべく反乱を起こさぬよう諭さなければ。  
起こしてもこの時代の英雄達の雄飛のための贄、新しい時代への糧  
となるだけだ。

そう決心した私でしたが、次の一言で思わず固まってしまった。

「ちようかく？誰だそれ？」

「へ？」

ちよっと待て。

今なんつった？聞き間違い？聞き間違いだよね？

「いや、貴方は太平道を知らないの？」

「おい、お前ら知ってるか？」

「いえアニキ、そんなもんは知りませんぜ」

「し、知らないんだな」

う、嘘だと言ってよバーニイ！？

OKちょっと深呼吸だ。じゃあこいつら何で頭に黄色い布巻いてるんだ？

それ〓太平道の信者だろう？

「その黄色い布はなんで巻いてるんで？」

「あ？趣味だよ」

「趣味ですぜ」

「し、趣味なんだな」

そうか。

趣味ならしょうがねえ。

個人の自由は偉大だ。偉大すぎて涙が込み上げてくる。

なんなんですか、まじでわけがわかりません。漢の時代に来て同胞だと思っただけのあれな人達でした。

まだ張角様は布教し始めたばかりなのだろうか？それともそもそも張角様はいないのか？前漢なのか？

なんかもういいです。

考えても解らないことを考えてもしょうがない。今はまず一つでも多くの情報を得るのです。

「おまえ本当に大丈夫か？」

「だめだと私も思っています。悪いですがまだちょいと不安ですからあなた方に付いていってもいいですか？」

さすがにこんなわけもわからんとこに一人はダメだ。もしかしたら私が知っている漢とは全然違うのかも知れない。

町の間所を聞いたとしても、そこで何か問題が起こっては意味がない。一人、一人でも多くの繋がりが欲しい。ここでは私は一人なのだ。悲しいが一人で何か出来る事なんてたかが知れている。

「んっ・・・まあいいか服装から見て同じ稼業だしな。この稼業は人はいればいるだけいいからな」

「稼業？」

「人の物を俺たちが有効的に使ってやる仕事だよ」

そう言っておっちゃんにはやりと笑いました。

いや賊だよな？どう取り繕ったって賊だよなそれ。

もう私、昔ならともかく今は賊なんてやりたくないんだけど？平和が一番なんだけど？ラブ&ピースなんですけど？

妹よ、お兄ちゃんは今人がやつちやいけない所に行きそうになります。でもお前の笑顔が有ればお兄ちゃんがんばれる。

とりあえずこいつらには労働の尊さと儂さと虚しさを・・・って後半はいらない！働くことのすばらしさをその身に刻んで上げます。

「いや、ちょっと待ってくださいね。そういうことは」

「アニキ！！あそこに三人組の女がいますぜ！！」

「お、早速来たか！！新入りお前も行くぞ！！」

「お、おーなんだな」

そういつて行っちまいやがりました。

……その身に刻んで上げます、物理で。

説教よりO H A N A S I Iの方が良かったんですか？白い魔王みたいに壁すら貫く私の正拳突きかました方がよかったですか？

まったく、人の話は最後まで聞けっってお母さんに言われなかったの  
ですか……。

ちなみに私はむしろ言う側でした。

だって両親が話聞かないで行動しちゃうような人だったんですもの。  
昔妹が生まれる前に、ツアーかなんかで集合時間聞かないで行っ  
ちやっただからすごい時間に遅れて迷惑かけてたなあ。

その時、波才に電流走る！

そんな両親の所に妹が一人だけなの思い出した！

このままだと妹も染まっちゃう！「お兄ちゃん、ちょっとあんぱん  
買ってこいや」とか言っちゃう子になるかも知れない！あ、でもそ  
んな妹も愛せる！ってそうじゃなくて、ああもうなんですか。  
くそつたれです……はやく、はやくなんとかしないと。

ん？なんとかしないと？

「あゝあの人達止めるの忘れてました！！」

くだらない……いや！最重要事項だがしょうがない、早く終わら  
せてこの案件を解決せねば！！そう思って私は彼らの下へ駆け出し  
ました。

追いつき分かったことですが、どうやら狙われたのは女性の三人組  
らしいです。

一人は頭に人形をのせた金髪の少女。……なんか人形が大阪万博  
のあれっばいですけど。なんか口にペロキャン啜えてるんですけど。

あれ？ここ1800年前ですよね？漢ですよね？あ、そうか。実はこの時代にもペロキヤンが……。

ねーよ！！どう考えてもねーよ！！まだ冷や飯食ってる時代ですよ？！？なんでこんな時代に飴細工があるんですか！？

お、落ち着くんです。まだ慌てるような時間じゃありません。そう思い二人目の眼鏡をかけた気が強そうな少女を……。

わ〜眼鏡ですね。目が悪いんですよ。そうだよな〜目が悪かったら眼鏡をかけるもんですよ。

この時代も例外ではない……わきゃねーだろ！！何！？なんで眼鏡なんてあるの！？

し、深呼吸です。も、もしかしたら眼鏡はこの時代にあつたのかもしれない。ほら、孔明とか本の読み過ぎで目が悪くなって眼鏡をかけたんですよ。よし、そう思えばそんな気がしてきました。

そして最後に……。

青い髪、白い服……ああ、ナース服ですか。もう突っ込まない。

そうだ、漢の時代にもナース服はあつたんだ。高校時代に習った世界史は間違いないんだ。

中国は2000年頃にはペロキヤン、眼鏡及びナース服の開発に成功。きつとこれが真実なんです。ええ、真実ですとも。

……。

……何だろう、頭が痛くなってきました。ついでに目頭も熱くなってきました。



もういいや、それよりも。

青い髪女性の手には赤槍が握られている。ぱつと見、それが最初槍だと理解出来なかった自分はおかしくはないと思いたい。

先が二つに割れた赤槍など聞いたことがない。それ以前にあのような槍をこの時代に製造できるものなのか。

纏う闘気は達人のそれと同じ、いやそれ以上。

あの人達それに気がついてない。

このままだと間違いなく死ぬでしょうね。

青髪の女性は人は実際に何人か、何十人が殺しています。その目、己の得物を構えたときの迷いの無さ。

背中に寒気がします。この時代は本当に人の命が軽い。

別にあの盗賊さん達は自業自得、ですが目の前で死ぬのは夢見が悪い。

それにこの格好の自分が頼れるのはあの人達しかいないでしょう。服を買いに行こうにも

「服をください」「きゃー無法者よ!?!」

そんな光景がありありと目に浮かぶ。頼れる人は賊しかいません。

DQNとかそんなレベルじゃありません。

なんかもう涙目です。

つて青髪の殺気が強くなりました。

ああ、なんでまたこんなところに身を置くとは考えもしてませんでしたよ!!! 神様のクソツタレ!!!

＼星 Side＼

まったく。

近頃はこのような身の程知らずの賊が多い。やはり今のこの国は荒れている。

ここに来るまでにすでに数回賊と遭遇し戦闘になった。

そして今も。

「へへへ、嬢ちゃん。持つてる物全て置いてきな」

「おいていけ！」

「お、おいてくんだな」

「まったく、お前達のように民を脅かす連中がいるから人々は安心して暮らせないのだ」

もう何度目なのだろうか。あまりにも多すぎて覚えていない。

国自体が腐っている今、国自体が変わらなければこのような輩は消えないだろう。だからこそ我らは真の主を求めて旅をするのだが…

…やれやれ。

女三人ではどうも軽く見られる。

「このあま・・・女だからって下手に出りゃあ」

「女・・・だからといって油断するとその首が落ちるかもしれんぞ」

そう言って私は笑う。

己と相手の実力がわからない者達の道、その先に待つのは死だ。  
この者達もそれを辿ることになるだろう。

「へ、よくみりゃ上玉じゃねえか。倒した後にわからせてやるよ」

下卑た笑みを浮かべる男。

下衆が。私達のようなものに被害が出ぬよう生かしては返さぬ。

槍を静かに構える。

「恨むなら己の未熟さを恨め」

「ぬかせ!」

そう言って斬りかかる男の剣をはじき飛ばすとそのまま一閃。  
だがその一撃は予想外の部外者によって防がれた。

〔波才 Side〕

あぶねえ。

槍を剣で受け止めたましたがとんでもねえ速さです。

あと数コンマ遅かったらおっちゃん死んでましたね。

少なくとも吹っ飛ばされてしばらくは動けなかったはずですよ。

「貴様・・・何者だ？」

「悪いですね。私の知り合いが迷惑かけました。その剣、引いてもらっちゃくれませんか？」

「外道に引く槍など持ち合わせていない！！」

流石にこちらから仕掛けておいてごめんね、許してくれとか虫がよすぎですよね。

そう言って槍で私の剣をはじく・・・否、弾かれざるを得ない。この少女どこにこんな力が！？

慌てつつも冷静に距離を取る。向こうもこちらの出方をうかがっているようですが・・・一つ聞きたい、貴方人間ですか？一体その細腕のどこにそんな力があるのですか。

おっちゃんはちょっとそこで反省してる。

繰り出される槍の応酬を剣で受け流す。受け流すことしかできない。もしこれをまともに受け続ければ、間違いなく腕が使い物にならなくなる。

私も剣で斬りつけるがかわされ、受け流される。

一撃一撃が重く鋭い。動作にまるで無駄が無い。

「っちい!!」

槍を受け止めたがくそ重いです!! 本当にあの細腕のどこからこんな力が出てくるんですか!?! 私今なら貴方が魔法使っているって言うても信じちゃいますよ!?!

槍を引き戻すと同時に相手の懐に潜り込み突き上げるが余裕を持ってかわされる。

そして反撃に迫る赤槍、髪が何本か持つて行かれましたがしゃがんで回避を成功させ・・・。

だが途中で軌道が変わり頭上に槍が迫る。ここで軌道を変えるんなざありですか!?!

どう考えても人間業じゃない。慌てて槍の側面を拳で弾く。

これには少女も驚いたのか目を見開いて隙が出来た。ここしかない！！

一歩、相手の前に進み出て。

二歩、繰り出される槍をくぐり相手の視界から消え。

三歩、切り上げたたっ切る！！

「!?!」

避けられた！？でもまだ終わりません更に踏み込み肘で突き通す！！  
そう思い付きだした私の肘は彼女がとっさに構えた槍で受け止められた。

ですがそれだけでは衝撃が抑えきれなかったのか、彼女はそのまま地面を足の裏が擦り五メートルほどの距離が出来る。

「(うわぁ・・・この人命のやりとりに慣れてますね)」

まず全く躊躇がない。そりゃ賊相手に躊躇などする必要が無いのだが、あまりにも手慣れすぎている。何故なら彼女が突き、薙ぐ場所は首が主だからだ。

人間当たり前だが、首をはねられれば死ぬ。それは腹を突かれても同じなのだが、重要なのは為す術もなく死ぬかあがけるかだ。

首をはねられれば当然あがくどころの話では無い。即死だ。それを理解するからこそこの少女は隙あらば私の首を狙うのだ。

以前私を厳しい目で見る少女に思わず嘆息が出てくる。

正直殺し合いなんざしたくない。あの平和な世界を体験した俺にとつて人を殺す事は胸くそが悪い物に変わっていた。

だがこの時代は平和などではない。人の命が二束三文の金より安いのだ。

目の前の少女は私を殺したい。だが私は殺されるわけにはいかない。

「(久しぶりに『覚悟』ってやつを決めますかね・・・)」

剣を新たな構えに変える。この構えはカウンター式の構えだ。彼女の攻めに応じ、その命を刈り取る。

だが『覚悟』とかつこをつけたものの、このままだと死ぬかも。

正直私が命のやりとりをしたのはもう20年も前の話です。いくら現代で武を収めたとしても、それは断じて人殺しではなく自衛のも

の。  
負ける気もありませんが勝てる気もありません。ですが乱世の剣と  
治世の剣では差がありすぎるんですよね……。  
話し合いでなんとかならないかなあ……。

「もう一度言います、槍を引いてくれませんか？」

「どちらかが勝つまで我が槍は引けぬ」

「どうしても、ですか？」

「くだい。だがわからない。何故お前ほどの者が賊に身を落とす？」

お？話を聞いてくれるかな？これが最後のチャンスです。

「ならばまず一つ。こんな格好してるが私は賊じゃありません」

「むっ。」

「私はこの者達の行いを止めるためにここへ来ました。この者達を  
かばい立てるのは案内を頼みたいからだであって同じ賊だからと  
いうことではありません。それにこの者達にも今回の件、賊をやめ  
るようよく言っただけ聞いて聞かせることを約束しましょう」

「……」

「お願いします」



「・・・解った」

そう言っつて彼女は槍を下ろす。

「お主の剣と目には曇りが無い。お主を信じよう」

曇りとはなんぞやと突っ込みません。藪をつついて蛇を出すなど体験したくもない。

そう思い肩の力を抜き深呼吸をする。額からこぼれた汗をようやくぬぐえた。

命の削り合いは本当に疲れる。いや、これは疲れたで収まるようなものじゃない。ですが残念ながら私はこれを疲れたで済ませる語学力しか持ち合わせていない。だからあえて言いたい。

本当に疲れました。

もう百年はこんなことしたくない。この世界に来て最初にしたこと  
が殺し合いなんて笑い話にもならない。  
二度としたくありません。

でもこの子何者でしょう？

私は改めて青髪の少女を見つめる。

私のように疲れた様子もなく、平静を保つ青髪の少女。



内心大絶叫を上げた。

頬が引きつり先ほど以上の汗が額から溢れ出てくる。

まあまず落ち着け。ちよつと待つんだ。

趙雲つていったら男だろ！？どう考えたってナース服来た女性なわけ無いんですけど！？

あれですか！？三国志の趙雲は長坂をナース服で駆け抜けたと！？そんなこと三国志ファンに言ったら袋だたきにされますよ！？

あ、もしかして同姓同名さんか？

または微妙に字が違うとか。

そ、そうですね、女の方が趙雲子龍とかないですよ。焦った私が馬鹿みたいです。

「星ちゃん、この盗賊さんとは話がついたので？」

今度は頭に太陽の塔のような人形をのせた女の子が話し掛けて来ました。

この世界のファッションは本当に変わってるなあ。いや、変わってるなで済ませたら本来はいけないんですが。

ちよいと時代を先取りしすぎです。最先端というか最異端です。もう一人の眼鏡の子も結構変わっていますし。

「ああ、かくかくしかじかだな」

「ふむふむ、まるまるばつばつといつことですね」

眼鏡の子と趙雲ちゃんが漫画みたいな話し方してますが何言ってるのか解りません。  
ふむ。

「そこのお嬢さん？」

「風のことですか？」

「はい、実はかくかくしかじかで」

「ふむふむ・・・お兄さんはずいぶんと甘いですね。普通は助ける人なんていませんよ？」

おお！！やってみるとできた！！すげえ！！これが異文化コミュニケーションションなんだ！！

・・・突っ込まない。絶対に突っ込まんぞ。

そういえばこの二人の名前も気になるな・・・。  
まあ流石に趙雲の越えるほどの有名な名前じゃないでしょう。  
ていうかそうであって欲しい。

「ははは、自分でも変わっていると自覚してます。所でおなた方の名前も伺っても?」

「私は戯志才といいます」

「風は程立です」

戯志才：郭嘉が来るまで曹操の軍師役をしていた人物。曹操が死んだときにとても惜しんだほどの実力者  
程立：程?の改名前の名前。軍略と計略に優れた軍師。演技では「十面埋伏の計」を用いた

・・・逃げよう。

巻き込まれる前に逃げよう。

あ、ま、待つんです。そうだよ、この人も同姓同名かも知れない。

「あのくもしかして趙雲さんって字が子龍で、程立さんが仲徳じゃないですよね?」

「あれ?風は字をお兄さんに教えましたか?」

「いや、教えてはいないはず。・・・そなたは何者だ?私の字を何故知っている?」

あ、これ夢だ。

そう思い頬をつねると痛かった。夢じゃねえ。

な、なんなんですか。趙雲がいる蜀関係者だと思ったら私の天敵、曹操の腹心じゃないですか。

というか史実ならこの時期に彼らは旅をしてないし・・・やっぱりここはパラレルワールド？

頭が痛くなってきました。だれか、キャベジンください。

「迷惑をかけて申し訳ありません・・・私は波才と申します。ほら、貴方たちも詫びなさい」

そういつて後ろの空気になっていた黄色い三人組に声をかけます。

「え？いや」

「詫びないなら俺が殺す」

「」「」「すみませんでした！！（だな！）」「」「」

まったく。

もとはといえば原因はあなた達なんですよ？

つて見れば趙雲さんは目を険しくしてますし、程立ちちゃんは目を見

開いて驚き、戯志才さんは冷や汗を垂らしています。

「お兄さんは裏表が激しいですね」

「人間はみんな裏表が激しいですよ」

「貴方はそう言うわけでもない気が」

「気のせいですよ、気のせい」

「今の殺気……波才殿は先ほどの戦いは手加減していたのかな？」

「あれが私の精一杯ですよ」

「ふむ……いずれ機会があつたなら本気でやり合いたいものですね」

ふざけんじゃありません。何が悲しくてあの趙雲とやり合わなくちゃいけないんですか。

そんなフラグはいりませんで。

私は平和にのほほんとすごしたいんです。

そう思つた私だが、ふとはるか向こうから土煙が舞って来るのに気が付いた。

・・・何かものすごい今以上に嫌な予感がします。

「あの土煙はなんでしょう?」

「おそらくは陳留の軍が来たのでしょう。ここらには賊がよくでますから討伐に乗り出したのでは?」

戯志才さんありがとうございます。後ろのバカ共のせいですね。じろりとさつき以上の殺気で後ろのバカ共を睨み付けます。いや別にしゃれじゃありませんよ?

・・・ん? 陳留の太守?

更に嫌な予感が増したんですけど。

「陳留ですか。どなたでしょうね?」

「お兄さん、陳留と言えば曹操さんしかいませんよ?」

へえ・・・曹操かあ。

曹操ねえ。

曹操なのかい?

曹操じゃないかなあ?

曹操・・・



「曹操に天下見るならば、曹操の下におれ！」

頭の中で某漫画の曹操さんが叫びました。あらかっこいい。

「う、うわああああおい黄色トリオさんさっさと町に行きますよ！このままだと貴方たち捕まりますよ！！」

「な！？おいお前らいくぞ！！」

「へ、へいアニキ！！」

「い、急ぐんだな！！」

「は、波才殿？何故貴方までそんな」

趙雲さんに他の二人も啞然としてますが説明してる暇はない！！

「みなさんお世話になりました！！それではごきげんよう！！」

そう言っつて私は全速力で後ろを見ずにその場を走り去りました。なんなんですか！？頼むからこの状況を落ち着いて整理させてくださいよ！！

〈星 side〉

あの者・・・なかなかのくわせものだ。

私の槍を全て受け流した。そして最後のあの一連の動き、下手をすれば負けていたのは自分・・・か。

あまつさえまだ実力を隠していると見える。

面白い。

あのような者達がいるからこの世は面白いのだ。

「お兄さん達は足が速いですね・・・もうあんなところまで」

「風、我々も早くこの場を去らなければなりません。今はまだ、その時じゃありませんので」

「うむ、稟の言つとおりだな。早く離れよう」

ふふふ、波才殿。

また貴方と会う時を楽しみにしていますぞ。

（波才 side）

ん、なんかもの凄い寒気がした気が・・・

でも今はそんな暇はない！！

あの時のトラウマが！！曹操があ直ぐそこまでえ！！曹操があ馬で襲撃！！曹操があ火計でキメタアアツアアア！！って何を混乱しているんだ私！？

そ、曹操。今は私は逃げることしかできません。

ですがいずれかはあの時の借りを返させていただきますよ！！

「だからこれは戦略的撤退なんです！！逃げてるんじゃないありません  
！！」

私は必死に荒野を三人と共に駆け抜けた。  
足が・・・足が痛い。

## 第二話 名将祭（後書き）

今回はあれな回でした。

シリアスはまた書かなくてはいけませんね・・・作者はシリアス苦手です。

戦闘描写とシリアスをつまく書ける人は凄いです。

風が・・・寒いです。

そういえばそろそろ花粉症の時期ですが今年は大変そうですね。薬を飲まないと・・・。

次回は三姉妹と出会う予定です。

### 第三話 出会は唐突に（前書き）

運命は我々の行為の半分を支配し、他の半分を我々自身にゆだねる。

くマキャベリく

### 第三話 出会は唐突に

なんだかんだで近くの町に到着。

この雰囲気は空気・・・懐かしい、本当に懐かしい。

日本では感じる事が出来ないこの感覚に愛しささえ感じられる。やっぱり自分はこの時代の人間なんだと実感した。町並みも自分の知っているあの頃と大差ない。

私は帰ってきたんですね。

正直帰って来たくなかったですよちくしょう。

「波才の旦那、これからどうしやしょう?」

そう黄色一号が聞く。

その後、黄色いおっちゃんとかとチビとおデブさんは私について行きたいと言いました。なんでも趙雲さんとの戦いと二度当てられた

殺気に引きつけられたとか。

正直お断りしたかったですが、私の知る世界とは違うのでやはり一人で行動するのは不安なもの。仕方なく了承しました。

全力で嫌な顔をしながら。

それと自分たちの真名を受け取って欲しいと言っていました。

真名とは自分の持つ神聖な名前らしく、自分が認めた人や大切な人にしか呼ばせないとのこと。

やっぱり私の知る世界と違いますね。私の知る漢ではそんな風習はありませんでした。

でもこの人達の大切な人になった覚えはないし、私はまだこの人達のことをよく知らないので丁寧に断らせていただきました。

それまではアニキと呼ばれる人を一号、チビな人を二号、おデブさんを三号と親しみを込めて呼ぶことにしました。やったね波才さん！あだ名をつけて上げたよ！

へ？投げやり？適当？気にしたら負けです。

案の定微妙な顔をされましたが、そこは私の O H A N A S I をしたら解ってくれました。

流星時空管理局はだてじゃねえ。

魔王式は偉大ですね。いつそ服も白にしちゃいませうか？

「ん〜そうですね。まずは働く所を探しましょう。できれば住み

込みが望ましいですが」

まずはこの人達を真人間にするために、そして明日を生きるために仕事を探さねば。

お金がなければ私達に明日を生きる事は出来ません。

でも兵士はしたくないなあ。もう私戦いたくないんですよ。あの日本に生まれ育てば如何に平和名日常が幸せだったか、この世界に来て改めて再認識させられましたよ。  
血みどろの戦なんかマジ勘弁です。

ぐ

おや？なにやら情けない音が聞こえますね。

後ろを見ると肥満体な三号が申し訳なさそうに大きい体を縮こまらせています。

「お、お腹が空いたんだな」

太陽の位置的に正午、お昼時ですね。

よく見れば周りの飲食店に人が徐々に入り、混み始めています。  
ん、良い匂いです。私もお腹が減った来ました。

「そうですね。お昼ですからねえ。でも私はお金が無いんですがど



うしましょうか？」

「だんな！！俺が旦那の分を払いやすぜ！！」

そう言つて元気な一号さんですけど・・・耳元で

「いや・・・それ人から奪つたものでしょう？」

というと汗をたらたらと乾いた笑いを発しつつ私から目をそらしました。

他の二人も同様です。

うんうん O H A N A S I 成果が出てますね。

「まあ、今回はいいでしょう。後から嫌と言つほど働いて迷惑かけた人たちに償ってもらいますよ？」

といつたら三人が震え出しました。

ふふ、逃がしはしませんよ？

・・・え？私はいいいのかつて？

まあ私も元はあれですからね、そこまでは気にしないことにしましたよ。なんだかこの世界に来てから気分が高ぶつて来ちゃいました。常識は投げ捨てるものなんです。

四人で飲食店に入ります。なかなかの盛況のよう。

案内されて席に着きメニューを開きます。

・・・この時代にラーメンなんて有りましたっけ？冷食中心だぞ？  
なんであるんだよ。

それ以前に天津飯は日本の料理ですよ？

まあ、好きだからいいですけどね。ラーメン。

メニューを閉じてため息を付く。本当にここは自分のいた世界とは  
違いますね。

趙雲が女の子だった時点で重々理解していたつもりだったんですが・  
。。。

さてよ？

趙雲や程？、戯志才が女の子だったんですから他の部将ももしかし  
たら女性になってるのでは？

だとしたらあの曹操でさえも。。。

だめだ。

曹操が女になっている姿が想像できません。ですが人材マニアな所  
は変わってなさそうな気がします。

会いたいとは思えませんがね。。。

内心うすら寒くなってきた、そんな時だ。ふと見ると一号の懐に何  
か隠すようにしまわれている。

・・・何か見えたらいけない文字が見えた気が。

「一号その胸に隠しているのは何ですか？」

「へ？ああこれは山にあった社から拝借してきたもので」

「・・・」

「は、反省してます！だからもうあれは、・・・お話はやめてください！！」

そう大声で叫ばないでください。

周りのお客さんが不思議そうな顔で私達を見ています。

「はぁ・・・あとで返すんですよ？所でちょっとそれ見せてくれませんか？」

「はい！どうぞ！！」

まったく。一体何を・・・。

「一号」

「ひっ!」

「これを置いていた社で何か覚えているものはありますか？」

「いや、なにも・・・そういえばなんでもその山には仙人が住んでいるって言い伝えがあったような。なんていう仙人だっけか？」

「南華老仙」

「そうだ、そんな名前・・・何で旦那が知っているの？」

二号と三号も不思議そうな顔をしている。

もしかしたらこの三人と出会うのは運命なのかも知れない。なんていう嫌な運命だ。ロマンティックの欠片もありやしなないぞこんな出会い。

「この書は『太平妖術の書』ですよ。さまざまな事が書いてある貴重で素晴らしい書です」

三国志演技で張角様が南華老仙から手に入れた書物。

これにより人々からの支持を集め、黄巾党を結成した。この世界はもしかや三国志演義を基準とした世界なのでしょうか？かなりやばいことになりますね。演技だったら趙雲の異常な強さも説明がつく。

特に呂布のチートに磨きがかかりますね。他にも孔明もとてもな

いことになつていゝのでは？東南の風よ吹け〜とか陰陽術に通じているとか笑えないですが。

「これは貴方が持つていかまいませんよ。おそろく渡るべくして私達の所に来たのでしよう」

ほんと、この黄巾の姿でこの地に降りて出会つた三人が黄巾をつけていた。

太平妖術の書持参で。

正直できすぎていて恐ろしいですよ。世界意志とかはたらいっているんじゃないでしょうか？

食べ終わり、食後の運動を含めて町を見て回ります。

商人が、民が、見回りの兵士が町を行き交います。隣を笑顔で走り去つた子供達を見ると平和だなと笑いがこぼれますね。

でもそれはほんの一部。

外の村では大半が貧しく、重い税をかけられ、国に対する不満が高まつていることでしょう。

聞けば国はあいも変わらず腐敗しているみたいです。

権力や地位を手に入れるためには上の宦官などに多額の賄賂を送らなければなりません。

その賄賂を送るために搾り取られるのは民。民がいくら絞り尽くされようと上層の連中は恐らく気にも止めないだろう。胸くそが悪くなる。

特に十常侍は帝すら抱え込んで好きかってしてるみたいですから誰も止められませんね。

いずれ不満は限界まで高まりはじけ、巨大な反乱へとつながるでしょう。

そのためにも張角様は絶対に止めなければなりません。

あの方は親を殺された私に獣の道とはいえ生き方を教えたくれた人です。少なからず恩を感じています。

……ですがこの大陸にいるだろう張角様を始めとした三人を探し出して私どうしたいんでしょうか。

太平妖術の書が今私達の手にある今、彼ら（彼女かもしれない）は無害です。  
・ 考えたくないですが）は無害です。

下手に私達が接触する方がむしろいけないかもしれません。  
会えないのは辛いですが、それがあの人達のためならば。

そんなことを考えつつ歩いていると

「  
」

なにやら楽しそうな歌声が聞こえてきました。  
足を止め、声のする方に向かってみると

「  
」

そこにはこちらで言うアイドルらしい露出が多い格好をした三人の女の子が歌を歌っていました。

もう衣装に関しては突っ込みませんよ？頭のリボンにも突っ込みませんよ？

先の趙雲さんたち三人みたいに、なぜ一部の人たちは時代を先取りしすぎた衣装をしているのか。突っ込んだら負けな気がします。

このアイドルっぽい三人組、大道芸人みたいですね。

一生懸命歌っていますが、立ち止まって見ている人は少ないですね。

一人は紫の色の髪で眼鏡をかけているまじめそうな女の子。あくもこの世界で眼鏡はデフォなんですネ。

一人は桃色の髪で後ろに大きい黄色のリボンを着けたほわんとしている女の子。

一人は水色の髪で・・・サイドポニテだと！？なんて貴重な！！  
気は強そうな雰囲気を感じていますがそれがむしろポニーテールの良さを引き立てている！！

「(グレート!!!すばらしい!!!)」

それにしてもこの三人は大変な美人ですなあ。

趙雲さん達も美人さんでしたしこの世界は美人が多い。実にいいことです。

ちなみに胸の大きさは

桃色リボンちゃん(やばい) > 紫眼鏡ちゃん(普通) > サイドポニ

テ（無）

大丈夫！！私は胸では人は選びません！！ポニテが有る限り私はあと100年は戦える！！

まだ歌もどこかぎこちなく、人を引きつける術を持ってはいないようです。が素質はあると見た！！  
今後に期待ですね。

そう思い胸を膨らませ、その場を立ち去ろうと思ったんですが

「「「・・・」」」

うちの黄色い三連星があの人組に目を奪われてやがります。  
声をかけようが目の前で手を振ろうが何の反応も示しません。そろそろ殴つてでも無理矢理連れてこようと思った時

「みんな〜今日は聞いてくれてありがとう!!」

「また次回もよろしく〜」

どうやら歌い終わったみたいです。  
見ていた観客がお金を渡していく。ですが微々たるもの。  
最後にはあの三人娘もその場を去っていった。なのに。



「」」」」」」」」

こいつらいつまで固まっているつもりですか？

その夜。何とかその日の簡単な仕事を見つけて済ませた俺たちは宿に泊まっていた。

はずだったんだが・・・一号どこ行ったよ？

三バカの一号の姿が見えない。二号、三号に聞いても解らないみたいだ。

軽い荷物は置いてあるからこの町にはいるのだろう。

嫌な予感がする。

この世界に来てからの私の感はバカに出来ない。



「このファツキン糞野郎、テメエ何したか解ってんのかこのダラズ」

夜中なんでなるべく低い声で言ってます。

もちろん殺気増し増しで・・・っち。

気絶してやがる。頬を平手ではたいて目を覚まさせる。

「はっ・・・って旦那！？なんでこんなとこ」「うるさい」・・・はい

「それ貴重だつて言つたよね？持っておけつて言つたよね？何勝手に上げてるの？馬鹿なの？死ぬの？」

「え、俺はてつきり好きにしろということだと思つて「黙れ」・・・はい」

「その書はね、この大陸の張角様の最も重要なものなんですよ？なんでかつてにあげちゃうのかなあ？」

「へ？旦那、今張角つて」・・・「・・・すみません」

「それを、それを何勝手に上げて売つて資金にでもしてください？なめてるの？死ぬの？」

もう魔王だけじゃ収まりがつきません。ひぐらし方式で朝まで実行して解らせなければ。

つてそう言えば太平妖術の書は

「「「・・・」」」

うん、いつの間にか増えた旅芸人のお嬢さん方にばっちり見られました。

「あ・・・旦那の言ってる張角ってもしか「ふんっ!!」ひでぶ  
!!!」

なんか重要な事を言ってる気がしたが構っている暇はない!!  
すぐに一号を黙らせるとお嬢さん方に駆け寄る。

書を持っている桃色リボンちゃん他二人に話しかけます。なりふり  
構っていられるものですか!

「すみません」

「へ?あ、なんですか?」

「その書は実は私の一存ではどうにもならないものでして、よろし  
ければ返してはくれませんか?お金なら私達が今持っている全てを  
お渡しします」

何とか返してもらわないと・・・場合によっては少し暴力的になっ  
てしまうかもしれないが。  
できればそれは避けたい。

それぐらいそれは危険ものなんですよ!!

「・・・もしかしてこれをどうにかするのを決めるのは張角って人なんですか？」

眼鏡の女の子が話しかけてきました。

「ええ・・・それはその人のためにあるようなものですから」

ん？なにやら三人が目を合わせましたが・・・。

「ねえ？その張角って人もしかして姉妹とかいない？それで名前が張梁と張宝とか・・・」

「その名前は!!そういえば彼には兄弟がいると聞きますからもしかしたら姉妹と言う可能性も」

演技ならば彼らは兄弟だったはず。

この世界なら姉妹になってもおかしくはない・・・いや本当はおかしいんだけどおかしくはない。

それにしても第二人の名前まで知っているなんて。もしや張角様を知っている？

「・・・単刀直入に聞きます。あなた方は張角という人間を知っているのです?」

「知っているって言うか」

「ねえ」

「知ってるなら私達が一番知っているんじゃない?」

!!

もしか彼女たちは張角様の知り合いだったとか!?

「すみません。もし知っているのなら教えていただきたい。私はその方を探していたのです」

自分の気持ちに正直になろう。私はあの方に会いたい。  
会ってもう一度・・・話をしたい。私は縊るような思いで彼女達に尋ねた。

「姉さん・・・」

「うん、それじゃ紹介するね」

「ありがとうございます!!それで張角様はいずこに?」

「ん」

そう言っつて桃色リボンちゃんは笑って自身を指さしました。  
・・・え？

「私が張角だよ。それでこの子達が私の妹の・・・」

「私の名前は張梁です。」

「ちいの名前は張宝だよ」

・・・。

それはひょっとしてギャグで言っているのか!？

### 第三話 出会は唐突に（後書き）

三話連続投稿で味の素の頭はオーバーヒートです。

毎日更新できる作者さんはたぶん頭の出来が普通の人とは違つと思  
います。

すげえ。

そんな人に憧れる今日この頃。

そういえばこの小説を書き始めたら恋姫の登場人物が2人も夢に出  
てきました。

季衣さんと流琉さんです。

私を含めた三人でジャンプを読みました。

…私の深層意識はどうなっているのだろうか？



#### 第四話 真名（前書き）

お前の道を進め、人には勝手なことを言わせておけ。

くダンテく

## 第四話 真名

どうも波才です。

あ・・・ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺はこの女性は張角様を知っていると確信したと思ったら、その女性が張角様だった』。

な・・・何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何をされたのかわからなかった・・・

頭がどうにかなりそうだった・・・性転換だとかパラレルワールドだとか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・。

そうだ、こんな時は落ち着いて素数を数えるんだ。

・・・素数ってなんだっけ？食べられたっけ？何味だったっけ？

ブルーハワイ？

「あ、あの〜大丈夫ですか？」

気がついたら目の前に張角様・・・張角ちゃんの顔がありました。

もう疑いませんよ？この世界はあまりにも奇想天外過ぎるからこそ気にしたらきりがないのだ。

「・・・ごめんなさい。ちょっとあまりにも予想外すぎて」

うん、うすうす予感はしてたんだ。  
でもまさかこの人達だとは思わなかった。アイドルやってるとか全く想定外でした。もし想定済みの奴がいたらその人病気です。頭の病気です。

「それで・・・この書はどうしたらいいのかしら」

張梁ちゃんが困ったように言う。  
私が一番困っている気がしてならないんですが・・・。

「あなた方がもらって構いません。それはそうなるべく私達の元にあつたのでしよう」

もうこれは本当に世界意志が働いていると見て間違いないですよ。いくらなんでもたちが悪すぎますから。  
だがここで私は最も気が付きたくはないものに気が付きました。

趙雲、曹操、漢の圧政、太平妖術の書。ここから導き出される答え。  
三国志演義の見所であり、全ての始まり。

『黄巾の乱』

一瞬で冷静になり、熱が引いていくのを感じた。

まさか、この少女達が？否定しようとするが趙雲や曹操も女性なのだ。女だからといってならないという確証は得られない。

やはり大乱は起こるのか？

あの地獄が、全ての始まりが。

そしてこの少女達は犠牲になるのか？時代の礎に、張角様と同じように？

その瞬間思ってしまった。

ならば私はこの娘達を守りたいと。

もう一度機会が回ってきたのだ。

今度こそ守り、彼女たちに幸せをつかみ取って欲しいと。

思わずその場に跪く。

「ただ、できればお願いが一つ」

「なにかしら？」

張宝ちゃんが疑わしい顔で私を見るが、構わず私は言い放つ。

「私は貴方達の配下になりたいのです」

三人が一斉に疑いと驚きの表情を浮かべる。そりゃそうでしょうね。いきなり見ず知らずの男がこんな事言い出したらそんな顔にもなる。

それでも、それでも私は頭を下げ続けた。

「・・・貴方は私達を知っていて捜してるように思えた。なぜ？」

張梁ちゃんが疑わしそうな顔で私を見ています。偽る気持ちなどない、ただ思ったことを。

「私はあなた方に救われたんですよ」

「私達に？」

いかにも不思議そうに、張角ちゃんがかわいらしく顔を横に傾けた。

「ええ。私は親も殺され、どうしようもないこの世をこの国を恨みながらいつ死ぬやもしれない道を進んでいました。そこに救いの手を差し伸べてくれたのがあなた方でした」

「ちい・・・達が？」

「はい。この私に明確な道をしめし、私と共に戦ってくれました。ですが」

そうだ。

あの時のことをいつでもずっと引きずっていた。  
後悔していた。

「私は守れなかった。貴方たちを。いまでも夢に見ますよ。なんで守れなかったのか？なぜ自分は無力だったのか？って。私はずっと後悔し続けてきたんです」

「「「・・・」」」

三人は静かに私の話を聞いてくれている。

「もちろん、それはあなた方本人ではありません。これは私の勝手な自己満足だと解ってます。それでも」

そうだ。

彼女たちはあの張角様達であってそうではない。  
けどどうしてもその姿を重ねてしまうのだ。

もう・・・失いたくはないのだ。  
大切な人を。

「私はあなた方を守りたい、あなた方を救いたい、あなた方の望み

を叶えたい、そのためならばこの波才、命を捨てる覚悟ができています」

そう言っつて私は両手を着いて頭を下げた。

辺りが静かだ。

夜中だからか風が冷たい。

静寂がここ一帯を支配する。

「顔を上げてください」

張角ちゃんがその静寂を破る。

私は顔を上げ三人を見つめる。

「貴方が私達を守りたいという思いは解りました。でも・・・」

そして私に歩み寄り、しゃがんで私の肩にその手を置くと優しくな顔と声で言った。

「命を捨てるなんて言わないでください。私は貴方に死んで欲しくない。貴方に生きていてほしい。そう思ったから」

そう言っつて私に笑いかけてくれた。

その時私は涙が溢れてきました。  
自分でもこの涙の意味は解らない。ですがそれは流れ続け、止まらなかつた

その後、私は彼女たちの配下となりました。

まあ、配下と言ってもお付きのようなものですが。

これはマネージャーなのか？それとも某アイドルゲームたくPになるのでしょうか？

いいでしょう。貴方達を三國一のアイドルにすると誓いましょう。

これより私はゲーセンに通い詰める鬼になります。いや、例えですよ。

まあ、そんな馬鹿なことはいといて、張宝ちゃんや張梁ちゃんも



私のことを『仲間』と言ってくれました。

一号を殴った時の力を見て実力的に護衛としても十分だと感じたらしいです。

ちなみに成り行き上、黄色い三連星も付いてくることになるのだがこのことが決定したとき三人は宿が震えるほどの大声で叫んで喜んだ。

特に一号は「さすが旦那だ！」といって一番喜び改めて張三姉妹の元に挨拶に行ったのだが私が殴ったり叩いたり蹴ったりした後が酷く晴れ上がり、妖怪みたいな顔になっていたので三人は私の後ろに怯えて隠れてしまった。

一号、私が悪かったから血涙を流して悲しむのはやめてくれませんかね。

三人が更に怖がってますよ？

まあそれで私のマネージャ・・・じゃなくてお付きの仕事が始まりました。

それは最初は大変でしたよ。急に大所帯になったわけですからね。

一号、二号、三号は少しでも楽になればと日雇いの仕事に毎日乗り出しましたし、私も向こうで身につけたアイドルマターの知識や見たりした歌やら振り付けやらを張角ちゃん達に教えました。

時代は歌って踊れるアイドルを求めている！

踊れないアイドルはただのアイドルです！

今は張角ちゃん達が歌い終えたので、みんなで一休みとしてお茶飲みしています。

あの太平妖術にはどうやら人を引きつける術が書かれていたみたいで瞬間に人気が出てきました。

あの街角で人がまばらな状態で歌っていたのが嘘のよう。町の広場で歌えばみんなが「張三姉妹の歌が聴けるぞー！」とあつという間に集まり大盛況で終わりを迎えます。

そして今日はついに城の外のでステージを作り野外ライブを行ったのです！！

いるわいるわ、たくさんの人が駆けつけてくれて大成功のうちになりました。一号達なんて鼻水垂らして感涙の涙を浮かべてましたよ。

みんな、苦勞してここまでできましたからね。

私も思わず声を張り上げて三人のライブを楽しみました。

「貴方がいてくれて助かったわ」

そう言うのは眼鏡がトレードマークの張梁さん。

「いえいえ、私には皆さんにこんな風にお茶を入れることしかできませんよ」

「でも、波才さんのお茶ってすごくおいしいよね」

「ちいもそう思うー！でもこのお茶ってちょっと普通のお茶とは違うよね？色も緑じゃなくて紅色だし」

「ああ、これは紅茶というお茶ですよ」

「『紅茶?』」

「ええ、茶葉をある程度発酵させると緑茶とは違う色合いと風味になるんですよ」

知識だけはあつたがいざ作るとなるとかなり手間がいります。

茶葉はたいていが緑茶として売られているので、新鮮な茶葉を手に入れるのはかなり大変です。

幸いにも張三姉妹のファンの方がそういつてがあつたので手に入りましたが、制作にも時間がかかり、最近やっと少量ですが作れるようになりました。

「本当に波才さんは物知りだよね」

「どこでそういうこと覚えたの?」

「私のいたところにはそれこそ世界中と言っても過言ではない程の情報が入った網があつたんですよ」

うん、だいたいは間違つてはいないはず。

でも二人は私がからかつていると思つてる顔をしていますね。美人さんはむくれた顔もかわいいですねえ。

「案外冗談じゃないかもしれない」

「え？人和こんな馬鹿な話信じるの？」

「そうじゃなければ彼が私達に教えてくれた踊りや振り付けなどの新しい技法や、歌や言葉の説明がつかないもの」

おや、張梁さんするどいですね。

「うーん、波才さんってどこに住んでたの？」

「そうですねえ……。とおいとおい所に住んでました」

「またそうやってごまかす！！」

割と全部嘘じゃないんですけど。

「まあ波才さんが言わなくても私は構わない」

「え〜でも人和ちゃんも気になるでしょう？」

「気にはなるけど人間誰だって言いたくないことがあるわよ天和姉さん。彼は私達の事を気遣っているんな手助けをしてくれてるんだからそれでいいじゃない。実際彼がいなかったら私達はここまで来れた？」

お二方が黙ってしまいましたね。

でも私はそこまでした覚えがないんですが・・・。

「張梁ちゃん、それは私を買いかぶりすぎですよ？あの書と皆さんの努力のたまものですって」

「そんなことないよ!!」

張角ちゃんが珍しく大きな声を出しましたね。  
いや、ほんとにたいしたことしてないですよ？

「私達が暴漢に襲われたら助けてくれるし」

そりゃあ主君である前に一人の女の子ですし助けなければ男が廃ります。

「あんなに魅力的な踊りを教えてくれるし」

「すいません。」

某ゲームのまねごとしてるだけなんです。  
ちよっとこっちも趣味と実益をかねてやってることですから。

「それにこんなおいしいお茶を入れてくれるしね」

そういつて張宝さんが私の入れた紅茶の茶碗を上げます。  
どうでもいいですけど張宝さん、それでいったい何杯目なんですか？  
別に構いませんがそれ、結構高価なんですよ？  
皆さんのために作ったので喜んでくれて嬉しいんですが、私の懐は  
常に氷河期状態です。

「そっだいいこと思い付いた！波才さん」

なにやら張角ちゃんが閃いたらしく楽しげに私に腕を絡ませてきま  
した。

たわわな胸が腕に当たる。・・・つく！しずまれ我が息子よ！！  
紳士だ・・・常に紳士であれ！

私は張角様（男）に腕を組まれていると思って心を静めます。  
・・・なんだろう。悲しくなってきた。

「ええ！？なんでそんな悲しい顔をするの！？」

いけないいけない、顔に出てたみたいです。いやでもひげ面の張角  
様に親しげに腕を抱かれるとか虚しくなりますよ？失礼承知で言  
いますけど、張角様以外なら間違いなく蹴り飛ばす自信があります。

「ああ、なんでもありませんよ。それで何を思い付かれたんですか  
？」

「ふふぐん、なんと私達の真名を預けちゃいます!!」

真名。

神聖なもので大切な人にしか教えない名。

それを・・・私に？

「みなさん・・・よろしいのですか？」

「まあ、ちい達にここまで尽くしてくれてるし？」

そういつて張宝ちゃんが笑みを浮かべます。

「さつきも言っただ通り。ここまで来れたのも貴方のおかげだから」

。ライブ以外はポーカーフフェイスな人和ちゃんも笑みを浮かべて・・・  
ほろり。

「な、何で泣いてるのよ」

「いえ、嬉しいんですよ。すごく。感激して泣いちゃいました」

なんて幸せなんでしょう。  
自分の大切な人達の信頼を受けられるというのは。

これが真名を受け取ると言うことなんですね。

一号達には酷いことをしました。

会ったら彼らの真名を受け取らせただきましよう。

「ちいの名前は地和！改めてよろしく！」

「私は人和、よろしく」

「私は天和だよ、貴方の真名も教えて欲しいな？」

「私に真名は無いんですよ。ですから前と変わらず波才とお呼びください。これからもあなた方をアイドルの頂点に立つためにも協力しますよ」

「「「アイドル？」」」

あ……. ついつい悪ノリで現代知識出しちゃいました。  
現に張梁、人和ちゃんは興味津々です。

「わ、私の住んでいたところで使っていた言葉ですよ。皆さんみたくに歌を歌い、人を引きつける若く美人でかわいい女性のことをい  
うんですよ」



正しい意味は信仰の対象に使っていたってブツダとイエスの漫画で見たことがあります。

まあ、ある意味信仰ですよね。  
間違っちゃいないです。

私も一度アイドルライブ行って事ありますがあの熱気と興奮はなかなか味わえませんよ。

ってあれ？何で皆さん赤くなっているんでしょう？

「えへへ・・・ねえ、私ってかわいい？」

「ええ、天和ちゃんは私達の故郷でもなかなかいない美人さんです」

「（ねえ？あれってその気があって言ってるのかな？）」

「（いえ・・・たぶん素だと思っ）」

「もちろん地和ちゃんと人和ちゃんも美人さんですよ？」

「「!？」」

あらら・・・みなさん真っ赤になって顔を逸らしちゃいました。  
なんででしょう？

もしかしてあれですか。

私如きに美人って言われても嫌だと怒ったとか？あはは、身の程を

知らずに余計なことやっちゃいました？

。。。。

私は、私はなんて事をしてしまったんだ。

真名を許してもらったからって調子にのって美人さんだのかわいいだの身の程を知らずにやっちゃいました。

たとえ張角様が女性といえどもご主君。

もうこれ、死ぬしかないですよね？

「急に黙ってどうしたの？」

ああ、天和様。今までちゃん付けで読んだりしてすみません。

そんな無礼な私を気にかけてくれる本当になんてお優しい……。

それに比べて私は……。

「すみません。ちょっと首をつってきます」

「……え？」「」

その後、私は三人に止められて死ねませんでした。何があったか解らないけど死ぬことはダメとのこと。

本当になんていい方々を主にもったのでしよう。

私、もうあなた方のためなら命も惜しみません！！

波才はまったくいろいろぬけていた。

そしてこの時のショックで一号達の真名の件は忘れられた。

「ん？」

「どうしたんですかいアニキ？」

「いや、なんかものすごい惜しい思いをした気がして……」

「き、気のせいなんだな」

「そうかあ気のせいか。よし、旦那と張角ちゃん達のためにもっとがんばって次のセット作るぞー!!」

「「おー！（なんだな）」」

#### 第四話 真名（後書き）

書きだめが消えていく恐怖って異常です。

桃鉄で例えるなら60年終了で50年目ぐらいで1位、こりゃいけると思ったら貧乏神からのハリケーン変化に他プレイヤーの牛歩力ードとのコンボ受けたときぐらいの絶望と恐怖です。

…あの時はリアルファイトになりそうなほど険悪な空気だったのを覚えています。

**番外編 部将紹介／董卓編（前書き）**

ノリと勢いと眠さの中で書いたのでいろいろあれです。  
それでも「構わん、やれ」と優しい方は駄文ですがご覧ください。

番外編 部将紹介〜董卓編〜

「どうも味の素です」

「白蓮だ」

「このコーナーは恋姫に出てくるキャラクターが実際にはどんな働きをしたのか、それを数人だけ、作者が知っていることをちょこっとだけ説明するコーナーです。決してネタ切れで逃げたわけではありません」

「…まあいいや。でもどうしてこんなの作ったんだ？」

「いや…もしかしたら本当はどんな部将だったか知らないんじゃないかなあと思ってというのが作者の意見です。まあどうかかなあと思いますけどね。多分みなさんも知っているのではないかと」

「だよなあ…ってことは私も紹介されるのか!？」

「いえ、この回は董卓を紹介するので白蓮さんはないですよ?」

「そうか…でもいつかは紹介されるのかな。いやあそう思うとわくわくして」

「三国と董卓だけぐらいいしか作者の精神力は持ちません。死にます。あと、貴方が司会役の理由はアニメで解説キャラでしたので」

「…帰る」

「どこへです？正直ここから出られませんけど」

「…もういいや。始めよう、そしてとっとと帰る」

「そうですね、私も早く帰って寝たいです。この話はまあ作者があるかなので微妙に違うところがあるかもしれませんが。というより趣味で見聞きした物を集めたただけなので簡単なまとめとしてみてください。それではどうぞ！」

〔董卓〕

「まずは一人目、董卓さんの紹介です。性は董、名は卓、字は仲穎。では白蓮さん！！董卓のイメージを！！」

「へ？ええと…悪逆非道、いろいろ悪いことをやって最後には義理の息子である呂布に殺された…じゃなつたかな。取り合えず酷いやつって感じかな」

「そうですね…ではまず董卓さんは粗暴で知略に優れ、武芸に秀で、腕力が非常に強く素手で牛を殴り殺す、両方の手で弓を引けるという剛力だったそうです」

「…ちよつと待て。それ本当に人間か？」

「この程度はこの時代ざらですよ？さて、董卓さんは涼州隴西郡臨？の出身。若いころから義？を好み羌族の里へ行き、豪族たちと一人残らず交わりを結んだそうです」

「一人残らず!?なんだそれ!？」

「ここで董卓のすごさが伺えますね。董卓はその後畑を耕そうと帰ろうとしたのですが、彼に惚れ込んでか何人かが付いて来たようです。その際、董卓は彼らを拒むことなく連れて帰り、農耕用の牛を殺して酒宴をひらいたようです」

「農耕用の牛ってこの時代では結構大切だぞ？」

「ええ、この頃の董卓にとって牛は高級品です。ですから凄く喜んだようです。自分たちはここまで歓迎されるのかってね。その心意気に感激した彼らは帰国してからそれぞれの家畜を出し合い、その数は千ぐらいにまで増えたそうですよ？」

「やっぱり恩は返ってくるものなんだなあ。私も参考にしよう」

「…その時点でだめな気がしますけど。そして董卓は才能・武勇の持ち主であり、膂力で太刀打ちできる者は少なく、二つの?を身に帯びて左右に馳せながら弓を射たとかかれています。そのまま多大な功績をあげ身分は郎中に。絹九千匹をもらったそうです」

「本当に凄いなあ…それに絹九千つってこの時代の絹の値段は庶民じや手が出せない。いくらぐらいなんだろう」

「そうですね、確実に普通の民なら遊んで暮らせるぐらいはあるのでは?でもそれ全部部下にあげたようです」

「……はい?」





「……………」

「……………」

「うわぁ……」

「まあ魏の文献なので偏っているかも知れませんが本当かも知れませんよね」

「いや…ちょっとどころじゃなくて本当に地獄だな」

「あ、でもこういう話もあるんですよ」

董卓は良い政治を行おうと各地から名士を呼び寄せるなど積極的に政治を努力していた。荀？と同じように『王佐の才』を持っていたと言われる王允や、辞章・算術・天文を好み、音律に精通した蔡？などの素晴らしい人材を招聘する。

ですが都のお偉いさん、つまりキャリア達は彼を馬鹿にし、下手に出る董卓を無視して取り合わない。

挙げ句の果てには彼が集めた人材の仕事を妨害し始めました。

結果

「あゝ切れたわ。ちょっとOHANASIしようか」

と言って暴政を始めた。

「ちょっと軽すぎないか!？」

「いや、作者は堅苦しいのが苦手で限界を迎えました。後、眠いで  
す」

「もうちょっとがんばれよ!？」

「どうしてこうなった」

「知るか!?!」

「そしてその後丁原を殺害、そしてその兵を吸収」

「吸収って…いくらなんでも殺した相手の兵だぞ?反乱とか危なく  
はないのか?」

「上のようなことしてる人に反乱したくなります?責任者もいない  
の?」

「…ならないだろうなあ。でも危険はあつたんじゃないか?」

「あろうがそうするしかなかったんですよ」

「どうしてだ?」

「問題、董卓が都に入ったときに連れていた兵は?」

「え、1万以上はいたんじゃないか?」



「また急にフランクになつたな!？」

「作者も眠いんです。これ書いてる現在時刻深夜2時です。死にます。明日いろいろあつて朝早いのに」

「なんでもうちよつとマシなときに書かないんだよ!？」

「ノリと勢いでやった。今はすつきりしている。なんか四話を書きだめたやつを投稿した後に変なテンションになつて2時間でまとめられた量がこれだけだつたんですよ」

「…もう少し落ち着いてやれよ」

「本当そうですね。実は董卓さんいろいろ策で乗り切っている場面も凄多いんです。この人が恋姫であそこまで変わったのを見て惚けたのは私だけじゃないはず!!それではこころへんで終わりにしましょう」

「…なんかもう疲れた帰る」

「お疲れ様でした白蓮さん。このような紹介はその場の勢いで作者がやるので次があるのか自体解りません。楽しんで頂けたら幸いです。それではみなさんこれからこんな駄目な作者ですがよろしくお願ひします」

番外編 部将紹介〜董卓編〜（後書き）

眠くて手が震えてきたので途中書けなくなりました。  
明日無事に起きられるでしょうか…。  
とりあえず寝ます。

こんなあれな話を最後までお付き合いしてくれた方々、本当にあり  
がとうございました。

## 第五話 黄巾の将波才（前書き）

怪物と戦う者は、その際自分が怪物にならぬように気をつけるがい。  
い。

長い間、深淵をのぞきこんでいると、深淵もまた、君をのぞきこむ。

くニーチエく

## 第五話 黄巾の將波才

私達がいるのはいつも泊まっている町の宿屋ではない。まるで軍隊の作戦室のような陣幕に私達はいた。

天和様達もいるがその天使のような顔はすぐれない。

一号達も苦虫を噛み締めたような顔をしている。

・・・おそらく私も同じでさぞや酷い顔をしているのでしょね。

「なんで・・・こうなっちゃったんだろう」

いつもは明るい天和様が暗い顔で俯き、そう呟かれた。

一ヶ月前。

私達はいつも通りセットを済ませると、天和様達がライブをスタート始まった。

真名を受け取って以来ますますファンは増え、今では一回のライブで二万人は集まるようになっていた。歌っている三姉妹も『数え役萬姉妹』とユニット名が決まると、今まで以上にはりきってライブを行ってきました。

ファンのみなさんは一号さん（なんでもファンクラブの会長だそうで）にならって頭に黄色い布を着けています。



・・・なんでこの時気が付かなかったのか、今でも悔やまれる。  
きっと私の目は盲目となっていたのだろう。ここでの生活があまりにも楽しかったから。

きっと私は目を背けていたのだろう。そんな事はもう起きないのだと。

「みんな、今日は来てくれてありがとうー!!」

「「「「「ほあっほあっほあー——————!!!!!!!」」」」

「」」

ホントにすごい熱気だったのを覚えている。・・・ちょっとみなさん目が血走って怖かったことも。

ライブも順調に進み終盤、このまま何事もなく終わる。

そう思っていました。全員の盛り上がりが最高に達した、その瞬間。

「私、この大陸が欲しいなー!!」

天和様がライブ会場みなさんにそう声を張り上げて言った。

「（なっ!?!）」

おそらく、彼女は場を盛り上げるために軽い気持ちで言ったのでし

よう。

ですがこの気分が最高潮に盛り上がりトランス状態となったファンの方々にこの言葉は危険では？

私は一抹の不安を覚えましたが、ライブは大盛り上がりでそのまま終了。

気のせいでもよかった、とその場では安心しました。

ですがそれからしばらくして、頭に黄色い布を着けた群衆が県令を襲撃したという話が私達の耳に入りました。

それから瞬く間に各地に広がり、今ではファン以外の人民も含め数十万人という数に膨れあがった。

そしてその首謀者が張角という人間で有るということも同時に大陸中に広がっていった・・・。

私達はもはや町にいるわけにも行かず、旅をするわけにもいかず。彼らが用意した陣幕の中にいる。

「姉さんがあんなこと言うから!!」

「こんなことになるとは思わなかったんだもん!!」

「姉さん達。ケンカはやめて」

「だって・・・」

時期が悪かったのだ。

おそらく平和な治世ならば少女の一言だと、それだけで済ませられ

ただらう。

だが今は国は乱れていた。

重い重税。はびこる佞臣。腐敗した国。

民は求めていた。

新たな時代を、指導者を。

そこに天和様が号令とも呼べる言葉を数万の群衆にかけてしまった。

その数万の群衆の大半はこの国に不満を持っていたに違いない。

それは人から人へ伝わり、噂が噂を呼び、ついには「我らも続け！」と行動を起こすものが現れた。そこからは雪崩のように反乱が起き、みな目印である黄巾をつけて新しい国を！と広がったわけだ。

なんとも、なんとも馬鹿らしい話だ。

何故、誰も少女を旗印に当然のように身代わりにして人を殺すことを厭わない？たかが小娘の戯れ言だと笑わない。

・・・そうか、太平妖術の書か。

私の、私のせいなのか。

「人和様のおっしゃる通り、こんな言い争いをしていても解決はしません」

「波才・・・」

「波才さん・・・」

「遅かれ早かれこのような反乱は起こっていたでしょう。この国の悪政で民達には不満が高まっていましたからね。たまたまそれが起こる条件がそろっている場で天和様がたまたまあの言葉を言ってしまったというだけなんですよ、これの発端は」

まさかライブでの一言が黄巾の乱の始まりになるとは思ってもいなかった。

いや・・・よくよく考えれば解ったはずだ。

数万人のファンという信者が集まるアイドルのライブには、反乱の号令の条件がそろいすぎている。

数万の求心力、アイドルというカリスマ、そして圧政に苦しむ民。

「私の注意不足でした。あのように民衆につけるための発言を盛り上げるために言うべきだと進言したときに注意を添えるのを忘れた私の失態です」

そう、あのパフォーマンスを教えたのは私だ。原因は私にある。

油断していた。天和様は争いを好まないから反乱を起こすはずがないと。

今考えればなんと愚かなことか。御旗がなければ無理矢理にでも掲げればいい話だ。

「波才さん・・・貴方のせいじゃない。私が、私があんなこと言ったから」

天和様が涙を。

私はそつと彼女を抱きしめます。

「・・・私はこうなることが解っていたのかも知れませんが。言うこととは出来ませんがこれは起こるべくして起こったことなのでしょう。」

神よ。何故こんなか弱い女の子を巻き込むんですか？彼女は人が死ぬのを受け止められるような人間ではない。あの張角様や張宝様、張梁様のように彼女達は心が強くない。歌を歌うのが好きでたまらない、そんな女の子なのですよ。

「あの私達が初めて出会った夜を覚えていますか？」

「・・・」

「私は貴方達を守ります。守れなかったものを今度こそ守り通します。例えこの大陸中が貴方達を狙ったとしても私は守り通して見せます」

そうだ。今度こそ守り通す。

もう大切なものを失いたくない。彼女たちには笑っていて欲しい。それだけが私の願い。

「だから泣かないでください、かわいいお顔が台無しですよ？」

そう言って天和様に笑いかけます。

「……ありがとう」

天和様が私を抱きしめてきたので私も彼女を抱きしめる。  
もう泣き止んでくれたようですね。

私も覚悟を決めましょう。

例え私が平和で平穏な世で暮らしていても、そこに天和様達がいなければ意味がない。

今度こそは……守りきる。全ての障害から彼女達を。

もう二度とあのような思いをするものか。

「地和様、人和様。おそらく朝廷も軍を派遣してくるでしょう。指揮官がこの群衆にはいません、なので私が務めたいと思うのですが」

「そんな!?!」

「地和様、何も殺されに行くというわけではありません。こう見えても私、兵法に少し通じていますからね」

思えば日本でさまざまな軍略や兵法を興味本位に見ていたのはこの

ためかも知れない。こんな事ならばもう少し真面目に研究すればよかった。

ともかく今は時間がない。

群衆からめぼしい人材を捜し出して訓練しなければ。数だけでは勝てないことは前世で身をもって知った。

「本当に大丈夫？」

「はい。人和様、私がいままで期待を裏切ったことがありませんか？」

「・・・解った。でも絶対に死なないと約束して。私達が生き残っても貴方が死んだら意味がないから」

「ええ約束します。必ず帰って来ると」

「本当？」

胸の中に顔をうずめていた天和様が顔を上げて潤んだ目で私を見つめてきました。

「うわっ！！」

「なんですかこのかわいい娘！？」

「ええ。私が約束を裏切った事はありましたか？」

「・・・ない」

「だから、安心してください。私は帰ってきますから」

・・・生きて帰ろう。そう私は決心を固める。

前世では最後の最後に妹を悲しませてしまった。

あの泣いている妹の顔は本当に悲しそうで胸を締め付けられた。あんな顔をこの娘達にもして欲しくない。

生きて帰って・・・またみんなで紅茶を飲もう。他愛もない話をしよう。

そう思い、天和様を優しく私の体から離れさせる。

「あ・・・」

「それでは行って参ります」

「旦那！！俺たちも」

「いけません。一号達には彼女たちを守って欲しいのです。こんなこと頼めるのは貴方達だけですから」

「旦那・・・わかりやした。どんな事があっても三人を守ります！！」

「俺たちに任せてくださいませ！！」

「ぜ、絶対に守ってみせるんだな！！」



この三人には暇なときに相手をしてあげてましたから雑兵程度に遅れは取らないでしょう。  
信頼も出来るし、彼らほど頼もしい存在はこの軍団の中にはいません。

「頼みましたよ。みなさん」

「「「はい!! (なんだな!」「「「

そう言っつて天幕を出て行くこととすると。

「波才さん」

張角様が私を呼び止めました。

「あの・・・」

なにやら言いたいことがあるようですね。・・・ここは助け船を出しますか。

「はい、なんでしょう」

「その・・・行ってらっしゃい」

「無事に帰って来てね」

「帰って来たらまたお茶しましょう!」

天和様、地和様、人和様……。

「行つてきます」

そう言つて今度こそ天幕を離れました。

行つてらっしゃいますか……。

帰って来なければなりませんね。

そのためにも今は強く統率が取れた軍隊を作らなければ。あの娘達  
がまた心から歌えるように。

平和を捨てましょう、我が主のために。

平穩を捨てましょう、我が主のために。

情けを捨てましょう、我が主のために。

自分を捨てましょう、我が主のために。

全てを捨てましょう、我が主のために。

今から私は黄巾党の波才となりましょう。

（天和 side）

「行っちゃった」

波才さんが行ってしまった。

本当は戦って欲しくない。

でも、もうこの私の一言から始まってしまったこの反乱は止められない。

私は泣いてしまった。なんであんなこと言ってしまったんだと。大陸なんて欲しくはなかった。ただ、地和ちゃんと人和ちゃんと波才さんがいて、みんな旅をしながら歌えていればそれでよかった。なんであんなことをしてしまったんだと私は後悔の念が押し寄せて涙が溢れた。

そんな馬鹿な私を波才さんは抱きしめてくれた。慰めてくれた。守り通すと言ってくれた。

正直不安だ。彼が死んでしまったら私は耐えられない。

地和ちゃんも人和ちゃんも波才さんの事が心配みたいだ。

彼はもう私達の中で欠かすことが出来ないほど大きな存在になってしまった。大丈夫と言うけれど、それでも不安で私は波才さんに聞いた。

「本当？」

「ええ。私が約束を裏切った事はありませんか？」

そう言った波才さんの目はとても透き通っていて力強く、思わず見とれてしまった。

何故か大丈夫だと信じてしまう、そんな目だった。

天幕から出て行こうとする波才さんを見て思った。

波才さんは私達にいろんな事をしてくれる。守ってくれる。そんな

波才さんに私に出来ることはなんだろう。

そう思ってから波才さんを呼び止めた。

なかなか言えなかつたけど言えた。

「行ってらっしゃい」って。

そう言わないといけない気がした。

そう言ったらきつと無事で帰ってきてくれる気がしたから。

そして波才さんは

「行ってきます」

と返してくれた。

「お姉ちゃんて波才に惚れてる？」

地和ちゃんが、波才さんが居なくなつたあと天幕の出口を見続ける私に聞いてきた。

「え、え！？えつとその・・・うん」

急な質問だつたからしどろもどろになつてしまった。たぶん今私の顔はとても赤くなつているんだと思う。

「やっぱり！！」

「えと、何で解つたの？」

「あんな態度でいれば誰だつて気づくと思うわ」

人和ちゃんが呆れ顔でそう言った。

そ、そんなに解るかな？

「うん」

はつきりと言われてしまった。

なぜか波才さんという楽しくてつい大胆になってしまっからかな？  
・・・今考えれば結構恥ずかしいことしたかも!? ああ! そう考  
えると急に恥ずかしくなってきた!!

そう思い悶えている天和の姿はとても魅力的であり、男としてはそ  
そられるものだった。

もしこの場に波才がいたならば間違いなく内股になっていただろう。

「ふん・・・でも、ちいも負けないよ?」

「え?」

「ちいも波才のことが好きだもん!!」

「ええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「!!!!!!」

大声を上げたせいで武装して外で見張っていた私達のファンクラブ  
の会員さんが慌てた顔で見に来たけど、大丈夫だからと言って出  
行ってもらった。

「ちい姉さん・・・本気？」

「本気よ！最初は強いだけの男だと思ったけど優しいし、気遣いができるし。そ、それにちいのことをか、かわいくて綺麗っていつてくれるしね！！」

そういう地和ちゃんの顔は赤い。

「と、というわけで絶対に負けないから！！」

「むう私だって負けないもんね！！」

そうだよ！この思いは誰にだって負けるつもりはないもん！！  
いくら妹の地和ちゃんだってそこは譲れないよ！！

「姉さん達・・・」

別に悪いとは言わないから時と場所を考えて欲しいんだけど」

「「あ」「」

気がついたら一号さん達を含めた親衛隊のみなさんが絶望した表情で目から血涙を流していた。

嫉妬の炎に燃える彼らは決意した。

波才が無事に帰ってきたら絶対にボコボコにしてやるつと。



## 第五話 黄巾の将波才（後書き）

そろそろ連続投稿は無理気味に。

それでもちよこちよここと確実に書いていくのでよろしくおねがいます。

## 第六話 初戦。そして動き出す英雄（前書き）

今回から黄巾部将として演技・史実に登場した人物を恋姫化（女性化）させて登場させますがそれでも良いという方は、駄文ですがよろしくお願いします。

## 第六話 初戦。そして動き出す英雄

戦いの時が来てしまった。

人材は国への反感が強、く集まった農民を中心に集めて訓練を施した。

厳しい訓練は生半可な心を持つ者では耐えられませんからね。

彼らはそれを耐えきった精鋭。その数総勢15000。

その際に何人かの将となる素質がある者達を見つけました。

「主、準備が整いました」

そう話しかけてくる大人の女の雰囲気を持つ髪の長い女性ははその一人、名を程遠志。真名は美須々みすず）。

私の知る程遠志はもちろん男ですが女になっていました。

山賊をしていたらしいのですが、私が出るのならと参加したらしいです。

普通こういう輩を私は隊に置きたくなかったが目の奥にある武人の光があるのを見つけたため、鍛えたらなかなかの武人に変貌。

最初は粗暴で村を襲ったりしようとしていましたが今では落ち着きがあり、冷静な判断を下せる信頼が出来る存在に。

その時の話をすると顔を赤らめて「お恥ずかしい限りです」と言っていました。うん、いいですね。

「イヨイヨダネエ」

言葉に独特な響きがある少女は名は馬元義、真名は明<sup>あけの</sup>楚。  
同じく女に変わっています。

顔は包帯でぐるぐるに覆われており、表情は読めないが目は嗤<sup>わら</sup>っているように感じられる。

服は袖が異様に長い物を来ており中には暗器を仕込んでます。元は農民で重税に苦しめられていて反乱に加わったらしいです。・・・あくまでらしいですけどね。それしちや人を殺すことに躊躇<sup>ちゅうじゆ</sup>いがなさ過ぎます。あんまり気にしないようにしてますが。

武器は短刀や手裏剣を使うのだが主な役割は間諜に彼女の専用部隊の忍などを使った諜報活動。

なかなか面白い計略を思いついたり、政務もできるので数少ない文官役としても活躍してくれています。

「・・・」

この無言で物静かなのは張曼成、真名は琉<sup>るい</sup>生。  
やっぱり女性です。

山の行き倒れているところを私が見つけて保護したところ、何故か私の下にいたいと書き出し今に至ります。まったくしゃべらない、  
というか話しているところを見たことはありません。

名前とかは筆談でしたしね。  
二本の双剣の使い手であり、軍を率いる統率力も持っているため我が隊の副隊長になっています。

こちらに向かっている朝廷の軍は総勢20000。  
こちらより多いですが所詮はあまり訓練されていない兵隊。  
率いる将も明埜曰く

「アリヤダメダナ。軍隊八統率デキテナイシ、将自体モ私ガヤツタ  
ホウガマダマシダ」

と書いていました。

まあ、所詮は民の反乱と軽く見てるんでしょうね。  
対応が遅すぎる。

おかげでこちらは準備万端で訓練も無事終えることが出来ました。  
前哨戦にはちょうどいいですね。

「主、号令をお願いします」

「ええ」

美須々に返事を返し、私の部隊が見通せる場所に立つ。  
うん、綺麗に並んでいますね。訓練の成果がでている。全員の視線  
を受け止めると私は口を開く。

「さて、みなさん。初めての戦争ですね。敵はどつやら私達をなめ  
ているようで、ゆっくりと進軍してだらけきっているようです。所  
詮は民の反乱だ、すぐに押さえつけられると」

みなさん顔に怒りが浮かんでいます。  
それはあれだけ奪われ、またなめられているわけですから当然です  
ね。

「私は思う・・・ふざけるな!!」

私の怒声が辺り一帯に響く。

「あいつらは我らに何をしてきた？私達に何をやって来た！？あいつらがしたことは私達罪もない民に重税をかけ金を搾り取り、その金で遊び尽くしてきただけだ！！その間私達はただ耐え忍ぶしかなかった・・・だがついにその時は来た！今こそあの愚か者どもに罰を与えるときが来たのだ！！もはや佞臣が溢れ、帝ですらそのいいなりになる漢に未来はない、我々が新しい時代を築くのだ！！」

さあ張角様、いまこそあの言葉を使わせてもらいます。

「蒼天已に死す 黄天當に立つべし ！！」

最初は啞然としていましたが、言葉の意味を理解すると誰もが手を握りしめ、その手を天に突き出す。  
我が兵達も同様に繰り返す。

「『『『蒼天已に死す 黄天當に立つべし ！！蒼天已に死す  
黄天當に立つべし ！！』』」

「さあ行くぞ！！お前達はいいつらのようにだらけきって太りきつた豚ではない！！過酷な訓練に耐え抜いた精兵だ！！あいつらに積もりに積もった恨み、今こそはらしてやれ！！」

「『『『『『おおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！』』』』』」

ふう・・・こんなもんでしょうかね？

慣れないなりにやらせていただきましたが我が軍の士気は十分。  
我が部隊を国税が払えず親を殺された者、家の物を全て奪われた者、自分の娘や妻をさらわれた者など恨みがある者達で構成したのは正解でしたね。

お互いの苦勞と苦痛を共有し連帯感が生まれる。過酷な訓練にも励まし合い、耐えきったことで自信もついた。

これはもはや賊などとは言えない練度と信念と統率がとれた部隊です。

さて、朝廷の軍のみなさんには悪いですが天和様達のためにも敗北してもらいます。

〔朝廷軍將 side〕

我々はこの度の反乱の討伐命令を受けて派遣された。

まったく・・・たかが農民の反乱如きで私が出るとは。

だが、流石に数が多いらしい。その数は十万と聞いているが所詮は農民の寄せ集め。抵抗らしい抵抗も出来ぬままこの反乱は収まるだろう。

他の將軍もすでに各方面に派遣されている。私も負けるわけにはいかない。

「將軍！！向こうから土煙が」

む、来たか。

数は一万ほどか？

こちらは二倍の戦力。

初戦にはちょうどいい。

「迎撃する！！陣形を取れ！！」

兵が横陣に広がる。だが相手の軍は早く、展開が完成するころにはすでに間近にまで接近を許す。



正面には黄巾を身につけた敵将の姿が見える。

衝突。

怒号と悲鳴と血が戦場に飛ぶ。

敵はなかなかやるらしく我々を押ししている。

ちっ！！ただの農民の反乱と言うには統率が取れている。我々に突貫してきた黄巾の女将は自ら先頭に立ち双剣を奮う。

女将が剣を振れば私の部下の体の部位が飛び、悲鳴がこだまする。

・・・あいつは本当にただの農民か！？

すでにかなりの数を切っているのに疲れを見せず、涼しい顔をして剣を振るうその姿は我々に恐怖を与え、逆に反乱軍にはさらに勢いがつく。兵士達の士気は落ち始めていた。

たかが農民と油断していたが、実際に戦うと築かれていく屍は味方の者ばかり。

あのようなすさまじい武を持つ者が自分達に剣を向けていると考えると寒気が走る。

「しよ、將軍。あ、新手が！？」

「なにっ！？」

そう思って左方を見るとそこにはまたもや黄巾の布をつけた部隊が。

「つく！！応対し「將軍あれを！！」今度はなんだ！？」

逆の右方を見るとそこにも黄巾の旗が。

やられた！！

前方のみに気を奪われている隙に両面を挟まれたのか！？

えぐり取るように攻撃を加える反乱軍。

すでに隊は混乱し、陣形が取れていない。

「くそつ撤退だ！！どのような顔をして帰れば・・・」

「ン？帰ルノハイイガ首ヲ置イテイツテクレナイト困ルネ」

不吉な声にとつさに後ろを向くと、そこには顔を包帯で隠した黄巾を腕に着けた反乱軍とおぼしき兵がいた。

もうここまで押し寄せてきていたのか。そう思いその者の後ろを見ると私の兵達がみな首から血を流して倒れている。

まさかこいつが！？

「き、貴様何者だ!？」

「コレカラ死ヌヤツニ教エルコトハネエヨ」

「なんだと!？」

そう言つて剣を構える、が。

ヒュン!グサツ

何か嫌な音が聞こえた。まるで乾きもしない肉に何かを突き刺したような、そんな音だった。

私の体が傾く。私の体は馬から崩れ落ちていく。

「(何が起き……た)」

彼はそのまま地面に落ちると、何が起きたか解らないという表情でこの世を去った。

その首には一振りの小型の刀剣が突き刺さっている。

それを見ていた明埜は、まるでつまらないものを見ているかのように男の体を蹴り飛ばした。

「マジデアツケネエ……才前ラノ大将ハ俺ガ殺シタゾ!!」

明埜の声が戦場に響き渡る。

その声の異質さに驚き、そして言葉の意味を知ると朝廷の軍はもはや形をなせず兵達は逃げ出した。

だが、怒りに燃える波才の部下達はそんな彼らの背に容赦なく剣を振り下ろす。

もはや戦とはいえない一方的な虐殺が始まった瞬間だった。

「波才 side」

どうやら何事もなく終わったようです。

今は追撃を美須々に命じて陣幕で休息中。

全滅はさせずともいいからほどよいところで帰ってくるように伝えてあるし、今の美須々なら問題は無いでしょう。

「アア・・・ホントツマンナカッタ」

そう言ってあくびをするのは大将首を獲った明埜。

「・・・」

無言で寡黙な琉生も不満そうな顔をしている。

兵達には三位一体を徹底させていた。対する敵は倍だったにもかかわらず、統率がとれてなかったからかこちらの被害は少ない。

負傷者二千、死者は千名に満たない。最初に衝突した琉生の部隊がやはりそれなりの被害を受けたようである。

それでも倍の敵に当たってそれだけの被害だったと見るべきか。

私達の隊は左右から挟撃したがあまり被害はない。向かってくる敵よりも混乱で右往左往する兵や、逃げる兵が多かったからでしょうね。

それにしても統率が全くとれていない。

琉生の隊が先行し、正面から攻めたがこちらに気づいて陣形が完成するのがあそこまで遅いのは致命的だ。

そして指揮官の視野が狭いのか正面の敵のみに気を取られすぎいた。挟撃する私達に直前まで気がつかないというのも・・・しかも兵は全くと言っていいほど鍛えられておらず、鍛え抜かれて怒りに燃える私達の兵との差は明確です。

私が敵の流れの中心にたどり着いたときはすでに明埜が敵の首を獲り、それを周りに誇示している姿がありました。

「まあ、あちらさんが弱いというのはいいことですよ」

「ソウナンダケドサア・・・琉生モモウチヨット骨ガアルヤツトヤリタイダロウ？」

「・・・」

無言だが否定の意味ではないでしょう。明埜は更に大きくため息を付く。

「まあ、今の朝廷はこのような軍が関の山でしょう。ですが、この時を雄飛の時への足がかりにしようとする者達はどうですか？」

私の空気が変わったことを感じたのか、明埜が目を薄め私の話を聞くために身を乗り出す。

心なしか琉生も私の話を聞きたそうにしている。

「正直張角様が率いる者達の中でまともなのは私達だけでしょう。他はみな数を頼りに押し込めるような事しかできず、戦の心得や名のある部将には勝てません」

「ホウ？マルデ俺ラガ負ケルミタイナ言イ方ダネ」

「負けるでしょうね」

そう言ってため息をつく。

二人は驚きの表情を浮かべていた。

反乱は下手すれば他の所にも飛び火してしまうのでほとんどの有力者はいい顔をしない。

さらには明確な指示を出さずに続々と各土地で勝手に反乱しているのでほとんどの有力者が全力で潰しにかかります。

しかも反乱は本来入念な準備と下調べと協力者（内部の人間や有力者）を集う必要があるのですが、突発的に起こってしまったために当然ながらそれを行っていません。

史実でさえ内部の有力者である宦官中常侍の封？、徐奉を内応させていました。

え〜と結論。

内部の協力者ゼロ。武器？そんなものはない。しかも明確な指示のない統率の取れない者達が続々と発生、各有力者の土地を荒らしまわる。兵糧もない、つまり兵糧は奪うしかない。頼れる人物も勝手な反乱で敵対者多数のため得られない。

どう見ても詰んでいます。本当にありがとうございました。

「いくら私達が勝とうともそれは個々であり、全体が勝つわけではありません。最終的には押され負けるでしょうね」

「アンナヤツラニカ？」

「・・・」

二人が抗議の視線を向けてきます。

「あの程度に負けるような訓練を私達はしてませんよ」

「ダツタラ」

「ですから言ったでしょう、雄飛のための足がかりにしようとする者達がいると。聞けばちらほらとすでに私達にそれなりの実力を持ち、対抗し始めている者達が居ると来ますよ？」

「・・・ソイツラ二俺達八勝テナイト」

「私達でも間違ひなく苦戦を強いられるでしょうね。下手に油断すれば確実に首をこれですよ」

そう言つて手刀を作り、首にとんつと軽く当てた。

「今戦つた程度と同じにとらえてはなりません。あの人達は将も弱く、統率もろくにとれてはいなかつた。ですが彼らは本物です。皆さんと同等、それ以上の者達はその意志のもとに私達に襲いかかつてくることになるはずですよ。正面から戦わず、計略を用いたりもすることもあるでしょう。そんな者達に我々以外の仲間が勝てますかな？」

その時、私の下へと歩み寄る知つた気配を感じた。

・・・お帰りのようですね。お茶の用意をしましょう。そう思い腰



を浮かす。

「・・・無理ダロウナ所詮八農民ダ」

「だがそうだとすると何故張角様は此度の乱を始められたのでしよう」

聞き慣れた声に二人が後ろを向くと、そこには追撃を命じた美須々の姿があつた。

「この程遠志、ただいま帰還しました。兵達はすでに休ませています」

「お疲れ様でした。まあお茶をどうぞ」

そういつて茶を差し出す。

「ありがとうございます・・・そのような話を陣中で話されても良いので？人払いはしてあるようですが万が一の事もあります」

「大丈夫ですよ。兵が来たなら気で解りますから。・・・まだ三人にはこの話していませんでしたね」

そう言つて黄巾の乱の始まりと真実を話す。

三人は啞然としていた。

あの無表情な琉生でさえ口を開けて驚いている。

「……ソレマジカ？」

「……ええ」

「だとすると困りましたね……」

美須々がため息をついて茶碗を置く。

明埜も包帯の下はあきれ顔になっているのが解る。

「私はあの方達を守るために此度の乱に参加しています。みなさんはこの話を聞いて思うこともあるでしょう。最悪、この軍を抜けても構いません」

だが美須々と明埜はその言葉を笑い飛ばし、琉生は何を言っているのかと眼を細めた。

「ツケ、ナニ言ツテヤガルンダ。私ノ主ハ張角様……モウ様付ケ  
スンノモアホラシイ、張角ジャナクテ旦那ダ。旦那ノ言ウコトニ私  
ハ従ウ」

明埜は口元を三日月のように歪ませる。

「私も同じです、私は主に救っていただきました。その時から主を一生仕えるお方と決めたのでむしろ嫌だと言ってもついて行きますよ」

美須々も明埜に続いて笑う。

「・・・」

琉生も何も話さないが、他と同じなのだという意思表示を頷くことで示した。

「みなさん・・・ありがとうございます」

私は良い仲間を持ちましたね。私にはもったいないぐらいの良くできる仲間を。

これから激しくなるであろう戦いを彼女たちと生き抜くことになる。

誰一人欠けることなく天和様の元に戻ろう。

そう私は決意した。

「????? side」

「?????様これを」

「なにかしら?」

「先日朝廷の軍と黄巾党の軍隊が衝突し、朝廷の軍は将を討ち取られ敗走した。その詳細です」

「なさない!我らだったらこうきんとうなどたやすく打ち破ってみせるというのに!」

「・・・」

彼らの主は口を歪ませ笑っていた。

「?????様、そうなされたので?」

「へえ、なかなか面白いじゃない。秋蘭、この情報にある黄巾党の部隊を調べなさい」

「はっ!」

「?????様、そのごうきんとうの奴らなど私が打ち破って見せます  
!」

「ええ、期待しているわ春蘭。でも彼らを甘く見てはいけないわね」

「そこまで・・・ですか?」

「見る限り優秀な将のもと統率されている、下手すれば私達でも厳しい戦いになるでしょうね。・・・ふふ、彼らに会ってみたくなくな  
たわ」

その姿は凛々しく英雄にしか発せられぬ英気、そばに控える姉妹の  
将もその主の姿に見とれる。

「この曹操の覇道を妨げんとする者をね」

乱世の奸雄が今、彼らに牙を剥く。

## 第六話 初戦。そして動き出す英雄（後書き）

6話目ありがとうございました。

オリキャラって原作キャラみたいに感情移入し難いですよね…。  
オリキャラの何故波才の軍に来たかみたいなの番外編を作ってみたの  
で現実が一段落したら投稿してみます。

駄文ですがそれでも「構わん、やれ」と言ってくれる方、これから  
もよろしくお願いします。

第七話 落ち行く黄天（前書き）

まことに人生はままならないもので、生きている人間は多かれ少なかれ喜劇的である。

（三島由紀夫）

## 第七話 落ち行く黄天

「いえ、当然のことです。所で主はその我らを打倒できる人物を知っていると見ましたが」

「マアダイタイハ私モ目処ガツイテルガ」

「おや？主だけではなく明埜も解るのですか？」

「私ノ本職ハ戦場デ殺シ合イジャナイノヲ忘レタノカ？」

そう言うてにやりと笑う。

おさすがは諜報活動や情報を管理し、統括する立場にある者は解りますか。

彼女には各地に飛んでもらって調べたり、彼女の忍である部下が各地に散布してますからね。

「そうでしたねえ・・・貴方が今回大将首を獲ったので忘れてました」

美須々ちゃんすねてますね・・・。

出陣前に私に「主に大将首を捧げます！！」って張り切っていたからなあ。



「まあまあ。明禁、ならば貴方から言ってくれませんか？」

「了解ダ。マズ八陳留ノ太守ノ曹操ダナ。治安ト統治ガヨク行キ届イテルシ、何ヨリモ城内ノ空気ガ他トハ違ウ。配下ノ夏侯惇ト夏侯淵姉妹モ中々ノ猛者ダ。一度訓練ヲ覗イタガ下手スリヤ俺達以上ダナ」

「曹操の噂は私もよく聞きます。なんでも厳格で厳しく、公正なお方とか。武術や政務もかなりの力があると聞きますね」

ふむ・・・やはり曹操は危険ですか。

なるべく目をつけられないようにしたいですね。

「次ハ袁紹ダナ。河北ノホトンドヲ治メテイルカラカ兵カト財力ガヤバイナ。マア君主ハ残念ダガ」

「はて？残念とは？」

「馬鹿ダ」

「馬鹿・・・？」

「アア。ドウシヨウモナイホド馬鹿ダ。ソレニマトモナ将ハ顔良シカイネエナ」

ええと・・・私の知る袁紹は時期を見て行動するのが苦手で、部下

の進言による判断を誤りましたが、少なくとも馬鹿ではなかったはずです。

「本当にそれは袁紹でしたか？」

「アア、

『この袁本初が華麗に反乱など鎮めて見せますわ！！おーほっほっほっほー！！』

トカゴ大層ナ椅子ニ座ツテ言ツテタカラナ。周リノ奴ラモ袁紹様ツテ言ツテタシ間違イナイダロウ」

・・・なんだか頭が痛くなってきました。

「主、大丈夫ですか？」

「ええ、少し現実から目を背けたくなっただけです。続きを聞かせてください」

「ソシテ次ハ袁術ノ配下ノ孫策ダナ」

「袁術ではないのですか？」

「アンナ猿ナンザホットケ、袁紹ノ方ガマダ優秀ナ部下ガイル分マシダ。アッチニ八ダメナ君主ヲ戒シメルドコロ力助長シテルカラナ。兵モ弱ク敵ジャネエヨ」

「ふむ・・・だがなぜ孫策なのです？正直先代の孫堅ほどあまり名は聞こえませんが」

「・・・アレハ猿二扱エルヨウナヤツジヤナイ。イズレカキツトアノ猿ハアイツニヤラレルサ」

小霸王孫策は健在ですか。間違っても知り合いになりたくはないですな。

「そこまでですか？」

「ソコマデダ。優秀ナ部下、人望、足りテナイノ八名声ト雄飛ノ時ダケサ。ソレモモシ、俺達ガ旦那ノ見立テ通りニナルナラ残りハ雄飛ノ時ノミ。アリヤ曹操ト同ジデ英雄ノ器ダナ」

困りましたね。

こちらが負けるビジョンしか浮かびません。もとより無かった希望が全力で走り去っていく幻覚が見えた気がします。幻覚であって欲しいですね・・・。

まあ、それでも天和様達の首を渡すわけにはいかないんですがここまでくるとため息も出ませんよ。

「残りガ・・・マア今情報ヲ集メテイルガ劉備トカイウヤカラダナ」

「劉備？誰だそれは？」

「何デモ高祖劉邦ノ祖先ダトカイウフレコミダガソナノハドウデモイイ、問題ナノハアイツラノ将ガトンデモナイトイウコトダナ。部将ニ関羽ト張飛、軍師ニ孔明ト鳳統ト共ニ義勇軍ヲ組ンデヤガルンダガ・・・トンデモナイヨアイツラハ。一回戰場ニ出向イテ觀察シタガ見事ナ采配ト武勇ダ」

「・・・今、孔明と鳳統と言う名が聞こえた気がするのですが？」

「主は知っているのです？」

「ええ・・・、もしそうだとすると困りましたね」

早い、早すぎる。

二人の出会いは黄巾の乱が収まり、かなり経ってからのはずだ。

やはりパラレルワールドか。それにもし演技補正がこの世界にかかっているなら孔明はやばいことになる。

軍略及び内政チートってなにそれ？

祈れば風が変わるよ！！やったね孔明ちゃん！！火計ができるよ！！とか・・・。

やばい。

マジやばい。

死亡フラグが私と天和様達にバリバリ立っています。

「ハア・・・劉備軍は今後も警戒の重度を二段階上げなさい」

「了解（曹操並ノ危険度力・・・ソレホド注意ヲ向ケラレル劉備軍トハイツタイ）」

（一ヶ月後）

「・・・義勇軍ですか」

私達はその後も官軍と戦い連戦連勝。

ついには私の「波」の字を見ると逃げ出す軍も出てくるようになった。

だが、各地を転戦する私達に届けられた方は義勇軍が各地で発生。

黄巾党と抗戦しているという報だった。

「義勇軍がどうかされたので？」

「義勇軍は各地で発生していますか？」

「アア、チラホラト民衆が敵対シテクルヨウニナッタ」

「・・・」

「まさか!？」

美須々が声を上げた。おそらく正解だと思いますよ。間違っていたらどれほど救われた事か。

・・・本当に最悪ですね。

「そのまさかでしょうね。おそらく黄巾党の少なくはない数が同じ弱者である民に手を出し始めたのでしょう」

まさかこんなに早い段階で黄巾党の末期症状が起こるとは。

民を傷つける以上もはや我々は正義などでは無い。それこそ害悪だ。おそらく商人も襲っているかもしれないし、商人からの武器や馬の購入は絶望的だろう。

ほんとに何考えてるんだろう。

何も考えていないでしょうね……そう思い頭を悩ませていると。

「……すみません。主」

美須々がその姿を見て私に頭を下げ、両手を着いて謝った。

「何故貴方が謝るのです？」

「私も元はそんな奴らと同じでした。後先考えず金品を手に入れようと……すみません」

「……そうでしたね。でも今の貴方は義に厚く、私が信頼できる一角の部将になりました。もはや山賊であった美須々は死にました。今ここにいるのは私が背を任せられる美須々という仲間です」

そう言つて美須々の頭に手を置き撫でる。

「主……」

「それにしてもこうなってしまうてはもう長くはないでしょうね……。明埜、張角様に貴方の忍を使って私の手紙を届けてもらつても良いですか？」

「アア、任サレタ。無事二届ケテミセルサ」

天和様にはいざというときはお逃げくださいと書いておきましょう。私は天和様の手配表の似顔絵を書き、明埜に各地へばらまいてもらいましたからね。もちろん似てもいないインチキものですが。おかげで天和様の顔を知るものは本陣と信頼できる者達のみ。いざというときでも逃げられるでしょう。

「波才様!!」

そう考えて手紙を書こうとしていると一人の兵士が陣幕に飛び込んできた。

「何事ですか？」

「っは!! 近くの仲間が町を攻めるので協力して欲しいと」

「・・・そうですか、ですが私達も辛い状況なので協議します。報告ありがとうございます」

「いえ、それでは何かあったらお呼びください」

そう言って兵士は去っていった。

「ちて、どつでしゅうねこれは」



「正直受けたくないですね。おそらく罪もない町民たちでしょう」

「俺も同意見ダ。ダガ面白い話ガアルゾ？」

面白い話？

「それは何ですか？」

「ナンデモ曹操ガ来ルラシイ」

一瞬で周りの空気の温度が下がる。あまりにも面白すぎて涙が込み上げてきますね。

「明禁、それは本当ですか？」

「アア、忍ノ情報デ既ニ出陣ノ準備ガ出来テイルラシイ。實際ニヤリ合ウノニハイイ機会ダト思ツテイルゾ？私ハナ」

「そのためになんの罪もない町民を襲撃しろと？」

「ナーニ、曹操ガ攻メテ来タトキニ私達モ出レバイイ。最終決戦デ敵ノ実力ガ解ラナイノハ苦シスギル。セメテ一回ハ当タツテオカナケレバ」

「……でも民を私達は見捨てるのですね」

「ステニ黄巾党ニ正義ハナイ。コノ大陸ノ民全員ニ聞イテモソウ言ワレルダロウヨ。俺達ガ悪徳県令ヲ襲ツタトキニソレハ解ツタダロウ？アイツラ俺達ニ感謝ノ目デハナク恐怖ノ目ヲ向ケテイタノヨ」

美須々が難色を示すが……。明埜の言うこともまた事実。

私達は民に重税をかけたなり、悪い話が絶えず確証を得た者を襲った。最初は歓迎されたが、今では恐怖の視線や侮蔑の目しか向けられなくなってきました。

心当たりがあるのか美須々が悲しげに目を伏せる。

琉生は無表情だが眉が少し下がっているところを見ると美須々と同じようだ。

「ソレニ俺八旦那サエ守レレバソレデイイ、コレハソノタメニ必要ナコトダ。軽ク戦闘シスグ離脱スル。アイツラモ疲レテイルダロウシ、ソモソモノ目的八町ノ救出。俺達ヲ追ウ余裕ハ無イダロウ」

「・・・解りました。伝令を、準備に手間取りますが先に先行し始めてくださいと言ってください。私達は遅れるからと」

明埜が陣幕から報告するために出て行く。

「ハア・・・こうなるとは予期していたとはいえ、もう黄巾党も長くはないかも知れませんか」

「主、私は何が起るとも主を守って見せます」

そう言つて決意した目を私に向けてくる。

「・・・」

一方琉生はお茶菓子を食べ始めていた。

「琉生・・・もう少し我慢できなかったのですか？」

呆れる美須々を後目にお茶菓子をむしゃむしゃと食べ続ける。

「ふふ・・・私達も琉生のそう言つところは見習わなければなりませんね」

「主まで何を・・・」

そういつて美須々はますます呆れてため息をつく。

・・・曹操、貴方の力。この波才しかと見極めましょう。  
時代を築く貴方の力を。

## 第七話 落ち行く黄天（後書き）

連続投稿は出来なくなりました。

書きだめが減る量が半端無いです。

もう少し書いてからやればもうちょっと粘れたかも知れませんが。

これからはゆっくり投稿になりますますがそれでも読んでくださる方。これからもよろしくお願ひします。

第八話 相対する英雄（前書き）

世界を恐れるな。ただ自己を恐れよ。

（杉浦重蔵）

## 第八話 相対する英雄

〔曹操 side〕

町に到着して黄巾党に勝利した際、そこで義勇軍として活躍していた楽進（真名：凧）と李典（真名：真桜）、于禁（真名：沙和）を新たな家臣として引き入れた。

おそらく鍛えれば一角の部将としてこの私の覇道を助けてくれることだろう。

「華琳様!!」

私に駆け寄ってきたのは配下の弓の名手である夏侯淵、真名を秋蘭。いつも冷静であり、平静である彼女が珍しく額に汗を浮かべている。何があったのだろうか？少なくとも良い知らせではないわね。

「何があつたの秋蘭？」

「こちらに黄巾の軍15000が接近中です。進行速度は速く、おそらくあと三刻程でこの町に来るか」と

ずいぶん遅い援軍ね……。

だがそれだけで秋蘭の平静が乱される訳がない、他に何かある。

「黄巾党の旗は『波』、おそらく波才率いる黄巾の部隊かと」

「「「!?!?」「」」

周りの戦勝により浮かれていた空気が引き締まった。誰もがその黄巾党の男の名を聞き顔をしかめる。

「その情報は確かなのね？」

「はい」

そう・・・あの波才が。

まさか向こうから来てくれるなんてね。

波才

黄巾党の將軍であり、彼の部隊は聞く中では負けを知らない。優秀な将があり、統率もとれ、様々な戦略で敵を打ち負かすその姿に恐れられている。

波才自体も優れた剣士であり、彼が戦場で戦う姿は生き残った兵曰く、まるで無人の野を進むがごとくだったとのことだ。

だが彼の部隊は決して民を襲わず、略奪もしない。襲うのは暴政を強いていたり、悪名が聞こえる役人や太守のみで、場合によっては民に自らの食料を分け与えている。

そのため黄巾の中でも義がある将と名が知られ、各地に彼らの勇名が広がっている。

その彼がなぜこのここに……いえ、今はいかにしてこの局面を乗り切るか。

そんなことは波才を生け捕った後に彼自身に聞くことにするわ。

「……この町では籠城して耐えきることは不可能かと」

楽進の言う通りね。

先ほどまでの戦闘でこの町は既に壊滅状態。

そんな町に籠城など愚策もいところ。

となれば野戦ね。

先の戦勝により、士気は大きい。

それに兵に若干の疲れはあるだろうが、問題は無い。

援軍は……まあ期待出来ないわね。

本拠地から離れており、おそらく到着する頃には終わっている可能性が高い。

「各自、すぐに部隊へ戻り戦闘の準備を。おそらくこの町で戦った黄巾の兵との練度は比べものにならないと思うから油断はしないように。賊ではなく一国の軍と戦う気持ちでいなさい」

「……………つは!」「」「」

「凧、真桜、沙和。貴方達はまだ疲労が見えるからこの町で待機。場合によっては民や負傷兵を引き連れて避難させてちょうだい」



「了解!!(なの!!や!!)」「」

さて、名に聞こえる黄巾の將波才。貴方は私を楽しませてくれるかしら？

もし、噂通りの者だったなら私の配下にするのも悪くはないわね。桂花あたりはおそらく反対するでしょうけど、私は欲しい者は手に入れないと気が済まないから。

ふふ、私の目に適う者で在ることを期待させてもらうわね。

〔波才 side〕

「おお、これは壮観な眺めだ」

彼が町まであと五里の所まで来たときそこに見えたのは見渡す限り

の『曹』の旗。

その数12000程か。

兵数は勝ってはいるが完成された陣形。おそろくたやすくは崩せまい。

そして兵の顔はみな死地へと赴く武士のごとく、その士気は天にも昇るようだ。

なるほど、ここまでの覚悟を兵に決めさせる。それが見られただけで曹操という人間を垣間見た気がする。

「ケケケ・・・コイツ八面白ソウダ」

「血が・・・滾ってくるな」

「・・・」

うちの武将達も今までにないやる気を見せてくれている。

まあ、今までまさしく『雑魚』というのがふさわしい者達としか戦ってこなかったですからね。

それが今日、この場所で初めて自分たちが戦い尽くせる相手を見つけた。

周りの兵達はそんな三人が纏う、別格の闘気に当てられて汗を垂らし緊張した面持ちで三人見ている。

私から見たら、今すぐにでも駆けだして遊びに行きたいという無邪気な子供にしか見えないんですがね。

「みなさん、真の目的を忘れてはいませんか？今回は様子見ですよ、様子見。発案した明埜まで忘れてはいませんか？」

「」「」「」

忘れてましたね。

子供そのものじゃないですか。

「まあ構いませんよ、思う存分とやりましょう。様子見という範囲内でね」

「ソウダナ・・・」

「了解です」

「・・・」

うん、ちょっと心配だけど大丈夫でしょう。

・・・たぶん。

「さて、私は曹操に直接会ってみたいのですよ。皆さん、道をしっかりと作ってくださいね？」

三人がその言葉を聞いて驚く。だって興味が沸いちゃったんですね。

曹操という人間に。

「無茶ヲ相変ワラズ言ウナ、旦那」

そう言つて明埜は呆れるが嗤っている。

「それが主です。もはや仕方ないでしょう」

美須々も口元は笑うが目は曹操軍から一度も離さず、猛獣のごとく睨んでいる。

「・・・」

琉生は何も言わない。だがその双剣は何時でも抜けるよう彼女は無形の構えを既にとっている。

「・・・お任せを！（才任せヲ！）（・・・！）「「」

そんな配下を満足げに私は眺めると、視線を曹操軍へと移す。うん、今日は良い天気ですね。

「さて、前々世での借りを少しは返してもらいますよ」

〔曹操 side〕

あれが・・・波才の軍。

「あれが本当に黄巾党なのか・・・？」

春蘭の言葉ももつともだ。

今までの黄巾党といえば数頼みの攻め。陣形などならず、がむしや  
らに攻めてくることしかしない。まさに有象無象の群れという言葉  
がこれ以上に似合う連中はいなかった。

そのため、こちらの兵法や戦略にたやすくかかり、面白いように崩  
れていった。

だが、あの軍は違う。

兵が統率され、陣形を作り、こちらを打ち破らんとする様は正に一  
国の軍隊と同等。いえ、将によっては更にその上をいく。  
そしてあの軍から漂う殺気は普通の軍とは違う。

どす黒く、禍々しい怨と殺気。

面白い。

黄巾党討伐という私の覇道を歩むための足がかりでしかない過程で、あのような者達と剣を交えられるとはなんたる行幸。

私は今笑っている。強者と出会えた喜びに。

あのような者達を殺すなどもつたないわね。

運が良ければ今日は優秀な配下を四人迎え入れることができるかしら。

「春蘭、秋蘭」

「「っは!!」「」

「できれば波才を生け捕りなさい」

「「は?」「」

二人はポカンとしている。

かわいいわね。これが終わったら床でたっぷりとかわいがってあげないと。

「あの将は殺すには惜しい、この曹操の覇道を進むためにも彼は必ず私の役に立つでしょう。できるかしら?」

「お任せを！華琳様のためにこの春蘭、波才を必ずや生け捕って華琳様の元へ帰りましょう！！」

「ふふ、期待しているわ。・・・そろそろあちらも動くようね」

空気が変わった。おそらくあいては動く。こちらにも迎撃の陣形をとりそれを迎え撃つ。

相手の陣形が変わりこちらへと迫る。

そして英雄と黄巾の将との戦いが始まった。

く美須々 sideく

「全軍一つとなり敵陣を突き破るのだ！！」

なるほどこれが曹操の兵！！

強い！

こちらの兵が互角、いやわずかに押されている。

だが我らは主の道を空けるためにも引けない。私を討ち取るうとした三人の兵の胴体をまとめて両断。血と腸が舞い、どす黒い赤が地面と私の鎧を濡らす。

その凄惨な光景を見て立ちすくむ兵士の胴体に一突き。そのまま持ち上げてこちらに迫る敵兵ごと吹き飛ばす。

相手が怯んでいる、今のうちに

「はあああああああああああ!!!!!!」

「!?!」

横合いから斬りつけられた大剣を受け止める。

剣を振る女は赤い服を着ていて、主曰く黒髪にはアホ毛と呼ばれる者が生えている。

なんて重い剣なの!?

ははは楽しい、楽しすぎる!!

大剣を打ち払い、横なぎに槍を繰り出すが受け止められる。

だが、そんなの関係ない!!そのまま押し込む!!

相手を押し込み、吹き飛ばす。だが相手は剣を大地に突き刺し体を固定。

追撃し、槍を振るうが受け流され私の目の前に大剣が突き出される。首を体を反らしたが前髪を数本持つていかれる。さらに剣圧による



風が私を襲い吹き飛ばされるが体を曲げて猫のような形になり着地する。

私は赤い服の女を見る。

すごい殺気と気迫。体が武者震いに震える。

「貴様が波才か？」

赤服が尋ねる。

ああ、何言ってるのかしらこのアホ毛は。

「波才とか波才じゃないとかそんなの今関係あるの？」

「なに!？」

「戦場で武人同士が会ったらやることは決まってるでしょう?そんなくだらないこと持ち込むんじゃないわよ。私を生け捕るなり、四肢を切断するなり戦闘不能にしてからそんなことは聞けばいいじゃない。今は、そう、今は私達がやることは一つなのよ。ここまで言っても解らない?」

そう言っつて私は槍を構える。

会った瞬間解った。

この人は私と同じ。

「・・・そうだな。お前を倒してから聞けばいいことだ!」

「解ったなら続き!」さあ、やるわよ!」

戦闘狂だと。

「レツツパーリイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イ!」

主に頂いたこの言葉!」叫ぶだけで力が湧き出てくるわ!」  
さあ!」殺し合いましょう!」

「秋蘭 side」

姉者は敵の将と一騎打ちをしている姿が見える。

相手の軍は強い。

並の訓練を施していない我が兵と戦い、押されてはいるが負けては  
いない。そして姉者と交えるほどの優秀な将。

華琳様の言つとおりこの者達、ただの黄巾の兵と言つには余りにも

ひゅっ!!

とっさに殺気を感じた私は体をひねりそれをかわす。

「オオ・・・ヤツパリ馬鹿ノ一ツ覚エデ死ヌノハアレナヤツダケダナ」

そう言って嬉しそうな声？を出す人物を私は見た。

顔が包帯で覆われていて目が鋭い。

性別は顔が見えないのと声が異質なもののため判別できない。

「不意打ちとは卑怯な！貴様が波才か!？」

「サアドウダロウナ」

そう言うとは袖から手裏剣を出すと投擲する。

「ちい!!」

それを弓矢ではじき飛ばす。

目を再び先ほどあいつがいた位置へと動かすと。

「（いないだと！？ど！ど！）」

「將軍！上です！」

部下の声にとつさに上に弓矢を放つ。

「ッチ」

そう言つて正体不明の包帯人間は弓矢をかわすが

「はっ！！」

かわした時に体勢が崩れた所へ更に二本の矢を放つ。それをあやつはまたもや袖へ手を引つ込めるとその両手には八本の手裏剣が。投擲し二本の矢を粉碎、そして手裏剣は勢いを止めぬまま私へと殺到する。

とつさに私は馬上から飛び降り回避する。

馬は悲鳴を上げると倒れたが、私自身に怪我はない。

あいつは着地すると先ほど私に注意を知らせた部下へ手裏剣を投げその命を奪つ。

「・・・ケケケ。テメエノセエデー傷モ負ワセラレナカッタジャネ

「エカヨ」

だが言葉とは逆にまったく怒気は感じられない。  
あいつは楽しんでる。この状況を。

「貴様・・・よくも我が部下を」

「戦場ダカラ死ヌノ八当たり前ダロ」

「そうか・・・ならば貴様が死んでも後悔はないな？」

そう言って改めて弓を構える。

もう先ほどのように油断はしない。

「（ヤツパ正面カラダト勝テネエナ。コウイウノ八美須々ヤ琉生ガ  
スル役目ダツテ言ウノニヨ。マア美須々ハアイツヲ引キツケテイ  
ルカラ上々ダナ）」

明埜は美須々や琉生に比べてそこまで戦鬪面に関しては強くはない。  
機転と奇襲、技術や特殊な暗器をいかして戦い、勝利してきた。そ  
の為、この場面のように一騎打ちという形は不利でしかない。  
彼女は隙を作るべく相手の心に隙間を作り上げる。

「ケケケ・・・俺八波オノ旦那ジャナイ、馬元義ツツウ名前ダ」

「なら生かす理由も無くなったな」

そう言つて構える弓の鏃には殺意が込められる。  
だがそれに動じず馬元義は不敵な笑みをもらす。

「ジャア問題、アソコデテメエノ姉貴ガ戦ッテイルアイツハ程遠志。  
波オノ旦那ジャネエ。オ前モココデ私ノ相手。肝心ノ波オノ旦那ハ  
ドコデシヨウカ？」

そう言つて嫌らしく笑うその姿に私の頭には一つの結論がでる。

「まさか!？」

その瞬間、華琳様の近くにいる兵が数人吹き飛ぶのが見えた。

「華琳さ」

「旦那二琉生ナイスタイミング」

わずかに意識がずれた隙、それを逃すほど馬元義という人間は甘く  
はなかつた。

袖から複数の手裏剣を出し、人体の急所へと投げつける。複数の迫

り来る手裏剣を秋蘭はとつさに捌いたが一本の手裏剣が肩に刺さる。

「っぐ!？」

だが秋蘭それに構わず弓を放つ。

「ウオツマジカヨ!？」

弓は相手の足に突き刺さる。バランスを崩し倒れるがすぐに体勢を立て直し刺さった弓を抜く。

私も肩から手裏剣を抜き取る。

激痛が走るが今は痛がっている場合ではない。相手も負傷しているとはいえまだまだ相手は動ける。早く倒し華琳様の元に向かわねば!!

〈波才 side〉

軍の流れの中心へ走る。

どうやら二人は夏侯姉妹の足止めを成功させているようです。

・・・もう有名な部将が女体化してるのは慣れました。

これはあれですね。曹操も女体化してますよね。

あの曹操が女体化・・・どうなっているんだろう？たしか前世では遠くから見た姿はチビだった気がしますね。

つてことはチビかな？

でも程？さんとかは史実では高いのにここでは縮んでいたからなあ。

そんな事考えてる間も剣を振る。一振りごとに命が一つ、また一つと消えていく。

そばに控える琉生も主の道を塞ぐ兵達を無表情のまま切り捨てる。

「（そこか）琉生、後は任せましたよ」

彼の兵の指揮権を琉生に譲り、目をこらし先を見る。  
そして、

「飛べっ！！」

彼の馬が敵兵の垣根を飛び越える。そして飛び越えた先に英雄の姿を見つけた。



「……ここまで来るとは。名を聞かせて欲しいわね」

「おや？人に聞く前にご自分の名前を言うのが礼儀では？」

目を細める金髪のくるくるツイントールの少女。

その髪には二つの髑髏の髪留めがあり、武器が鎌というのはどう見ても死神そのもの。

まあだいたい目星がつかますね。偉そうですし？チビですし？

「何か馬鹿にされた気がするわね……」

そう言って呆れた声でため息をつき、打って変わって鋭い目でこちらを見つめる。

「我が名は曹操」

英雄が放つ覇気に全身を当てられる。

解る、この者は王。王に生まれ、乱世を突き進む奸雄。

目は爛々と輝き、一つ一つの動作に目を奪われる。誰もが引きつけられる魅力。誰もが付き従う魅力。

……すばらしい、これが曹操なのですな。

まさに時代を築き上げるのに相応しいお方です。

「私、波才と申します」

「そう貴方が・・・それで？ここには私の首を獲りに来たと考えていいのかしら？」

そう言つて鎌を構える。いや、ギャグじゃないですよ？

「いえいえ、ちよつと曹操という人物を見に來ただけですよ」

「ふん。それで貴方の目から見てこの私はどう映つたのかしら？」

ええ、凄すぎて一瞬言葉を忘れました。

さて、用事も済みまし、そろそろ引き時ですかね。

「想像通り、いえそれ以上ですかね。来て良かったと思いますよ。それではごきげんよう」

「・・・はい？」

そう言つて私は踵を返すと馬の横腹を蹴つて馬を走らせる。

「待ちなさい！！」

「待ちません」

そろそろ止めておかないと兵がたくさん死にますね。  
これ以上私達のわがままに付き合わせる事は出来ません。

途中で敵を輪切りにしている琉生と合流。うん、文字通り輪切り。

・・・うわぁ。地獄が広がっている。

彼女の周りには人だったモノが散らばっています。

・・・しばらくお肉は食べられない。

「琉生、おうちに帰りますよ」

「・・・」

片方の剣で敵の首をはね、もう片方でもう一人の敵の腕を切り落と  
しながら了解と目を向けてくる。

黙々と敵を殺し続ける姿は味方といえど恐ろしいですね。

それに敵を切りすぎて剣の切れ味が落ちているのかほぼ力ずくで切  
り捨ててます。

切られた面が引き裂かれたようにぐちゃぐちゃです。

・・・この子が味方で本当に良かった。

そのまま琉生が殿を持つ形になる。

それにしてもあれが曹操ですか。なるほどなるほど。

・・・。

自分は今も、必要ないかもしれませんがね。

「……終イミテエダナ」

「まさか!?!」

「安心シナ。タブン旦那ハヤツテネエカラヨ」

「……」

「次ニ殺リ合ウ時ヲ楽シミニシテルゼ」

ケケケと笑うとそのまま明埜は戦場を退く。

それを狙い撃とうと弓を引くが……それを下げた。

「（今はあやつよりも華琳様の安否が重要。だがこの肩の傷、借り

はいつか返させてもらおう」

そう決意し、秋蘭は最愛なる己の主の元へと向かう。

「・・・」

「どうした？」

「いや、主からの命令がありました。引かせていただきます」

「なんだと！まだ勝負はついていないではないか！？」

「ふふ、次に合う時を楽しみにしていますよ」

「までー！！」

そう言って美須々も戦場から退く。

「むむむ・・・なかなか面白いやつだったな。まあいい、次に合うときこそは勝ってみせるぞ!!」

春蘭は何のために戦っていたのかすっかり忘れていた。

「・・・でもあいつが言っていたぱーりいか？あれは中々格好いいな」

そういつてうんうんと頷く。

彼女は頭のねじも数本飛んでいた。

〔華琳 side〕

「華琳様!!ご無事で!?!」

秋蘭が心配した顔でこちらに走ってくる。

「ええ、大丈夫よ。それにしてもあれが波才か・・・」

私は未だに波才が去っていった方角から目をそらせずにいた。

「ああ！！そつだ、すいません華琳様！！この春蘭、波才を捕まえてきます！！」

そつ言つて馬に乗り追撃を仕掛けようとする春蘭を止める。

「いえ、いいわ」

「も、申し訳ありませんでした！！」

でもそつよね・・・なにかお仕置きが必要ね。

「・・・そつねえ罰は受けてもらつわ。私の床でね」

そついつて春蘭の顎をなでる。

「華琳様・・・！？」

恍惚の表情を浮かべる春蘭。だが、その顔は自らの妹を見て変わる。

「秋蘭どうしたその傷は!？」

その声にも秋蘭を見る。

肩口から血が流れ出ていた。見たところ余り深くはないが治療をすべきだろう。

まさか秋蘭と互角以上に戦う者がいたのだろうか。

「敵の将との戦闘でな・・・」

「おのれ!！」

「春蘭、今は町に戻りましょう。秋蘭の傷のこともあるし、これ以上の戦闘は害にしかならないわ」

そう言つて大剣を持ち再び追撃しようとする春蘭だがそれ主により止められる。

「で、ですが秋蘭が」

「大丈夫だ姉者。傷は深くはないし後は残らないだろう」

「秋蘭、すぐに戻り治療をなさい。そして落ち着き次第此度の件の詳しい報告を」



「っは!!」

町へ戻途中、私は考えた。

秋蘭が怪我を負い、春蘭と同等に打ち合い、そして私の目の前に我が兵達を退け現れる。

やはり、あれはただ者じゃなかった。

だが波才が何故私の目の前に現れそのまま消えたのかが気になる。

何のために？彼は私を見てみたかと言っていた。そして想像以上と。

ならば何故あの場で私を討ち取ろうとしなかった？

後方のすぐ近くには彼の将の気配を感じた。

あれ程の気の者ならばおそらく二人がかりで来られたら、私は死んでいたかも知れない。

事実、黄巾の敵である私を生かす意味がわからない。それ以前に私という人間を既に知っているような素振りではなかったか？

...

気がついたら町まであと少しの所まで来ていたわね。まあ、いいでしょう。

貴方が黄巾の者で在る以上いずれかはまた出会うことになる。それを無しにしてもまた会う気がする。

彼がますます欲しくなった。あの将達も素晴らしい。

いずれか…全てを手に入れてみせる。

「（波才・・・次に合うときは貴方に洗いざらい話してもらおうよ  
？そしてきつと貴方を手に入れてみせる）」

第八話 相対する英雄（後書き）

忙しい

何が何って

忙しい

忙しいは季語で良いと思います。

年中使える季語って便利だと思っんで…。

そして修正したと思っていた部分がなおっていないことに気がついて悶絶。

ボタン押した気になってそのまま窓を閉めてしまっていた模様指摘してくださった方、本当にすいませんでした。

**番外編 とある過去〜声〜？（前書き）**

これからさらにゆっくりになる気がします。  
どうかお慈悲を。

今回は前書いたとおりにオリキャラである彼女の過去話的な物を書いてみました。

作者のシリアスの書けなさを改めて自覚。

番外編 とある過去く声く？

私は何の変哲もない普通の農家に生まれた。

両親は私が生まれてたいそう喜んだが、その喜びはすぐに驚愕と恐怖へと変わった。

「オギヤアアアオギヤアアア」

その産声は普通では無かった。

異質であり異形。

まるで化け物上げるが如き甲高く、不愉快な声。

その場にいた全員が怯えた表情をし、私を産んだ母さえ余りの驚きに気を失った。

母は私に乳を与えることを嫌がった。

「いやよ！！なんでこんな化け物に！！」

「この子は私達の子供だぞ！？なんてことを言う！？」

「私達の子供？巫山戯ないで！！こんな化け物が私の子なわけないじゃない！！きつと魔物に取り憑かれているのよ！！」

「・・・例えそうであろうと私達の子に違いない。愛情を注げば」

「貴方だつてこの子を産んだことを後悔しているじゃないの！！知ってるのよ、貴方がこの子の存在を下手に周りに広げないようにし

ているのをね」

「それはこの子のために……」

「嘘よ!！」

そう言つて妻は机を叩く。

「貴方がこの子を見るときの目は哀れみじゃない、恐怖よ!！この子が将来どうなるか怯えているのは貴方じゃないの!？」

私を巡つての言い争いが絶えなかった。

だが乳を与えないと私は泣いた。

その声が知られるのを嫌がった母は渋々私に乳を与えた。

8才。

普通なら外で遊ぶ年頃だが、あいにく私は普通では無かった。

母と父は私を外へ出すのを嫌がった。

私は窓から同年代の子供が楽しそうに走り回るのを見ておもわず母に問いかけた。

「ネエ、オカアサン」

「な、なに？」

無理に笑いを作る母。

「ドウシテワタシハミンナミタイニソトデアソベナイノ？」

「そ、それは貴方の為なのよ。しょうがないことなの」

私は子供心に納得した。

おかあさんは私を守ってくれているんだと。

実際は自分たちを守るためだったが、子供の頃の私は父と母が私を愛してくれていると思っていた。疑うことを知らなかった。

だが

「もう嫌よ！！あの子の相手をするのは！！」

「耐えてくれ・・・あの子が出て行くまでの辛抱だ」

「あの子がいるせいでいつ村の人たちにあの声を知られたらと気が気でないのよ！！おかげで満足に外に出られもしない！！」

「仕方がないだろう！！あんな子でも私達の子供なんだ！！私達が育てるしかないんだ・・・」

見てしまった。

深夜に私のことで言い争う両親を。

私は呆然とした。

何も考えられなくて頭が真っ白になってふらふらと自分の寢床に着いた。

寢床に入ってもさっきの両親の会話が頭から離れなかった。

一つの考えが私の胸の中で渦巻く。

それを否定したかった。

だけど……。

お父さんとお母さんは私を愛してくれていないの？

「ネエ、オカアサン」

母が疲れた顔で椅子に座り、私を見る。

「なに？」

声の不機嫌で、お前は私に話しかけるなど言っているような気がしてあの考えが頭をよぎる。

それでも私は聞いた。



止めれば良かったのに。  
そうなることが解っていたのに。

「オカアサンハ、ワタシガ・・・キライナノ？」

その瞬間母の顔が鬼のように変わった。

椅子から立ち上がると私に近づきその両手を私の首にかけた。

「グウウ!!」

「あんたが・・・あんたが悪いのよ!!」

「オ・・・カアサン・・・ヤメ・・・テ・・・」

「あんたが私をお母さんなんて呼ぶなあ!!!!」

更に私の首を母が絞める。

「あんたさえいなければ・・・あんたさえいなければ!!」

既に私の顔は青く呼吸が出来ない。

それでも母は私の首を絞め続ける。

もう死ぬんだ。

そう思った時、

「何をやっているんだ!？」

父が私と母の間に割って入って母を押さえる。

「あなた!! 離して!! この子を殺すの・・・殺すのよ!!」

「何を馬鹿なことを言ってるんだ!？」

母は殺意のある目で私を見続ける。

私はなんで母がそうなったのか解らなかった。

ただ、謝らないと思ひ、謝ろうと声を出す。

それが更に母の気持ちを逆なでするとは知らずに。

「ゴメンナサイ、ゴメンナ」

「黙れええええええええええ!!!!!!」

母の叫びに声を引つ込める。

「お前の声を聞くだけに不愉快になる!! なんで? なんで普通の子に生まれてこなかったのよ!?!? そうなれば今頃は私達がこんな苦勞

することはなかった！！こんな辛い思いをすることはなかったのに！！」

一つ一つの声が心に突き刺さる。  
もう私の心は既に壊れそうだった。

「お前なんか・・・お前なんか」

「おい、やめろ！？」

父が何か嫌な予感を感じたのか母を制止する。  
だが母は思いをぶちまけた。

「生まれてこなければ良かったのよ！！」

そう言って母はその場に泣き崩れた。

世界が止まった気がした。

涙を堪えきれなかった。

私は泣いた。

誰かに慰めて欲しかった。

誰かに助けて欲しかった。

その時、父が動いた。

もしかして私を慰めてくれるの？助けてくれるの？

そう甘い考えが私をよぎった。

だがそれは私に対してではなかった。

母に父は近寄ると抱きしめ、一言。

「すまない……」

そう母に言った。

私は呆然と、立ちすくんだ。

涙は止まった。

涙の残りが頬を伝いこぼれ落ちていく。

真っ白になった頭で私は理解した。

私は愛されてなんかいなかった。

私は

私はいてはいけない、いらぬ子だった。

それから私はいろいろがんばった。

がんばれば、すごいことをすればきっと褒めてくれる、愛してくれるに違いないと。

声は出すことを止めた。

出せばますます嫌われるから。

そのためか外に出られるようになった。

それから私は家の手伝い、狩り、魚釣り。

いろんな事をした。

だが母と父が向けてくる視線は常にいらぬものを見るような目だった。

12才になったある日、いつも通り狩りをしようと森の中に入った。そしたら何やら見られてるような気がした。

振り向くとそこには黄色い体躯、鋭い牙、獰猛な目と声。

大きい虎がいた。

だがその時の私はこう思っていた。

今までの狩りをしたのはウサギやら魚やら小さいからダメだったんだと。

こいつを仕留めればお母さんとお父さんはきっと褒めてくれると。

「……」

彼女の両親は何も言葉を発することが出来なかった。

何故なら、自分達が見ることが信じられなかったからだ。

目の前には体長2メートル程の大虎が目や体中から血を流して息絶えている。

そしてその隣には自分たちが忌み嫌う子が土まみれで立っていた。

「……お、お前がこれをやったのか？」

コクッ

私は頷く。

褒めて欲しかった。

すごい、よくやったと。

怒って欲しかった。

何でこんな馬鹿な事をしたんだと。

心配して欲しかった。

怪我はなかったか、大丈夫かと。

「ば、化け物!!」

だが彼女望んだどれでもなかった。

母は顔を引きつらせ一歩、また一歩と下がる。

父ももはや顔に恐怖の表情を浮かべて立っていた。

虎を引きずる姿が村人に見られたことで彼女は村人にも忌み嫌われるようになった。

声が異質であり、化け物のようだ。

虎を殺したのに傷一つ無かった。

彼女は村を歩くたびに避けられ、嫌われた。

両親も彼女を避けるようになった。

近づくと軽い悲鳴を上げ、恐れた。

彼女は孤独だった。

恨んだ。

己の声を。

これさえなければ私は愛された。

これさえなければ私は幸せだった。

これさえなければ私は。

私は。

その年彼女に妹が出来た。

それは自分のようにおぞましい声を発さず、普通の子であったため  
たいそう母は喜んだ。

父も顔を綻ばせ自分の子に笑いかけた。

私も妹を見たくて近寄ったが、母親が私を見た瞬間妹を手でかばい、  
私から離れた。

父もそんな母と私の間に入り、私を恐怖の目を浮かべつつも睨み付  
けてこういった。

「妹に近づくんじゃない」

両親は妹までが私と一緒にいたら私みたいになってしまおうと思って  
いた。

もう、私の居場所はこの村のどこにも無かった。

一度誰もいないときに寝ている妹に近づき、頭をなでたいと思っ  
たが母に見つかった。

母は包丁を握りしめて言った。

「あの子に近寄るんじゃない!!」

私はその場を静かに離れた。

後ろでは母が妹を愛しそうに眺め、頭をなでて



「貴方は私達の唯一の娘。きつと守ってみせる」

そう言っていた。

うらやましかった。

妹は自分がどんなに努力しても、望んでも手に入れられないモノを何の苦もなく手に入れていた。

両親の愛情というもの。

私には手に入らないモノを。

18才になった。

私が狩りから帰ると村は燃え、真っ赤に染まっていた。自分の家へ走った。

途中何人もの村人が倒れて息絶えていた。

だがそんなのはどうでもいい。

母さんと父さんは、妹はどうなった？

家は燃えていた。

家の前には、妹をかばいながら死んでいた母さんと父さん。

あの妬ましいとさえ思えた妹も弓矢で死んでいた。

結局私はこの人達に愛されることはなかった。

妹は死ぬまで心配され、死んでいった。

もし私だったら？

決まっている。

私を置いて逃げていくだろう。

私はいらない子なのだから。

涙が頬を伝った。

「な、なんだてめえは!？」

目の前には私の村を襲った賊がいた。

私は復讐の思いなど無かった。

ただ、奪われた気がした。

自分が手に入れたいと思ったものを手に入れる機会を。

それは例え両親が生きていてももらえなかっただろう。

あれ？

・・・何故そう解るのに私はこんな事をしているの？

ああ、そうだ。

解っていた。

ならば・・・何故？

これは復讐ではない。

では、何故だろう。

・・・ああそうか。

私は呪っていた。



いらぬものを今まで追求めたのか。

なんて。

なんて。

なんて滑稽で愚かなんだ。

知らず知らずの内に私はまた泣いていた。

だけど悲しいとは思わない。

この涙はなんなんだ？

まあいい。

こいつは私の恩人だ。

そのことに気づかせてくれる機会を私に与えた。

それ相応のお礼ってやつをくれてやる。

賊の頭は怯えている。

彼の仲間は何十人かいたが全て殺した。

自分は異質な声で笑っている。

まるで自分の誕生を祝うかのごとく。

「アリガトナ」

「な、なんだと!?!」

「才前ノオカゲデ私ハ…俺ハ」

そう言っていると私は賊から奪い取った剣で賊の胸を貫く。  
血が自分の剣を伝い手に当たるのが感じる。  
なんて心地よく、温かいのだろう。  
崩れ落ちる男を後目に私は歩き出す。  
彼女は唾っていた。

空が曇り、雨が降る。

虫の鳴き声が徐々に消えていく。

彼女は歩く。

雨に濡れ、服はびしょ濡れ。

髪も、顔をびしょ濡れ。

彼女は歩く。

「クソツタレ・・・」

去り際に彼女は言った。

それは雨に向かって言ったのか、それとも。

その言葉の意味は誰も知らない。

あるいは彼女自身も知らないのかも知れない。

だがその言葉を聞くものは誰もいなかった。

雨が降り続ける。

番外編 とある過去〜声〜？（後書き）

次回で彼女の話は終了です。

作者の技量ではこれが精一杯。

うまく感情移入が出来るキャラになったらいいのですが。

最近眠いですね。

春が近いですね。

でも不眠症なのか眠れません。

安眠枕とか買ってみようかなあ。



番外編 とある過去へ声へ？（前書き）

希望はいいものだよ。多分最高のものだ。いいものは決して滅びない。

『シヨールシヤンクの空に』より

番外編 とある過去く声く？

あれから数ヶ月。

俺は彼らと同じ賊となり、道中に行く者達を殺して金を奪った。

顔には包帯を巻いた。

顔を見られないためというのもあるがもう一つ理由がある気がする。  
もうあの頃の私とは違う。

あの頃の私は死んだ。

そう思つて巻いたというのもあるかもしれない。

・・・というのは嘘だ。

まず顔が解らないというのがある。

顔がばれたらへたすりゃ手配書が出回っちまうからな。

だけどそれが最重要ではない

一番の理由は相手が怯えるからだ。

俺の声と容姿に驚き、怯えて助けて欲しいと懇願するやつらを殺す  
のは爽快だった。

どうか命だけは？

ばっかじゃねえの。

生かして返したら俺のことばらすだろうが。

荷物を奪つたらついでに命も奪う。

人間の命なんざ何の価値にもなりやしない。

中には旅の武人と思われる人間もいたが俺の手裏剣と不意打ちの前

に死んでいった。

正面からかかってくるやつに罾とか不意打ちや毒は効果的だな。いい刀や武器、珍しい本とか持っているやつもいるしな。

卑怯だとかせいせいどうどう？

あほらしい。

そんな物が命の足枷になってっからてめえらはみんな土の中なんだろうが。

生きている俺がそれを物語っている。

どんなに誇りを持つが、どんだけいい生き方しようが、死んだら全て終わりだ。

息を潜め、気配を殺す。

この時の俺は人ではなく獣のようだ。

いや、化け物って呼ばれてたかな？

まあこの容姿と声のせいで仲間が出来なかったが一人の方が気楽でいい。

俺は化け物なのだから。

あゝ。

黄巾党という集団の噂を最近よく聞くようになった。

なんでも国を変えるのだとか。

アホらしい。

農民がいくら反乱を起こしたところで変わるわけがないだろう。殺した中には文学者もいたからな、そいつらの持っていた本を暇つぶしに読んで多少は学がある。

反乱なんざ後ろ盾もないのに成功するかっての。

・・・でも面白そうだなあ。

たくさん殺せてたくさん遊べるだろうなあ。

適当に遊んで出て行けばいいかな。

たまにはつるむのも悪くはない。

そう思い黄巾党のとある陣地に来たが。

「く、黒神くじらだ。くじらがいるぞ!？」

のっけから変なのに会いました。

なんかすごい目を輝かせてこちらを見えます。

歳は同じぐらいか？

髪は黒く、どこにでもいるような顔立ちだ。

ていつかくじらってなんだ？

それ以前にこいつ誰だ？

やばい・・・頭が痛くなってきた。

ここに来るまで誰もが俺の姿と纏う空気に俺のことを避けて通っていた。  
だがこいつはむしろ寄ってきた。  
正直意味がわからない。

「いや、CCOですか！？CCOの方がいいのか！？」

なんだしおって。

もうこいつあれだ。

殺っちゃおう。

そしてここを出て行こう。

なんかその方が楽な気がしてきた。

「あ、主。急に走り始めてどうなされたの？」

増えた。

よくわからないが増えた。

というかこの騒ぎで周りの連中が興味津々でこっち見てやがる。

こっちみんな。

「あゝすまない、美須々」

「いえ、かまいません。それよりも」

そうやって私の体をじろじろとうさん臭そうに見つめてくる。

こいつ・・・腕は中々のモノだな。

この意味の解らない男を始末してもこいつがいたんじゃただじゃないか・・・。

あゝついてねえ。

「この者がどうかなされたので？」

「いや、目の前にくじらがいたと思ったたらもう体が動き出していて

「……主の奇行には未だ慣れませぬ

だから誰だよくじらって。

あゝもうめんどくせえ。

「イキナリ人ヲ捕マエテナンノヨウダ？」

周りがその声に驚き私を見る。

もうその視線には慣れた。

異質な者を見る目、私が声を出すと必ずそんな目をする。  
きつとこいつも

キラキラ

あれ？なんでこの野郎目が輝いてやがるんですか？

「……美須々。決めた」

「は、はあ。何をでしょう?」

「この人を我が隊へと入れるぞ!!」

「はあ………はい!？」

「ナツ!？」

今こいつ何を言いやがった!?

ていうか何でだ!?

マジで意味が解らないんだが!?

今の過程のどこにそんな要素があつた!?

「チヨット待テ。イツタイドウイウコトダ?」

「今私は有能な人を求めてるんですよ。それで貴方がいました。以上」

「イヤ、ダカラ意味解ラナイツテ!!」

ほんとこいつなんなんだ?

ていうか何「なんでこの人は解らないんだ?」みたいな顔するんじやねえよ!!

知るかよ!?

「アレカ?私ガコンナ格好シテルカラカ?」

「それだけではありません。貴方、かなりの実力があると見ましたよ?」

へえ。俺にねえ…。

「俺達八今会ツタバカリナノニソソナコトガ解ルツテノカ？」

「はい」

そう言つて私を正面から見つめる。

こいつの目はさっきと打つて変わつて真剣そのものだ。  
つち。

変なのに目を付けられちまつたな。

「オ断リダ」

「お断りをお断りします」

「・・・」

「・・・」

マジで意味解らない。

沈黙に耐えられなくなったのか、この意味が解らない男の隣にいた  
女が口を開く。

「主・・・私から見てこのものには昔の私と同じ、嫌な臭いがしま  
す」

ほづ。

こいつ解つてんじゃねえか。

つて事はこいつも昔は私と同業だったつづつことかい？



「ふうん。お風呂入ってないってことですか」

「主!!」

顔真っ赤にして怒鳴る。

「確かに出会った頃の美須々は少し臭かったです」

「いえ、あの、そういうことではありません!!この者からは血の臭いがするのですよ!!」

「そうなの?」

「気ノセイジャナイカ?」

「気のせいだってよ?」

「ええ!?!いや、ですからその……とにかくするんですよ!!」

もうあれだ。

こいつ猫かぶってたのが完璧に剥がれた気がする。

最初は出来る女装ってたのがもうばればれだ。

私が哀れみの目で見てみるとそれに気がついたのか、慌てて取り繕う。

いや遅いって。

「ゲフンゲフン……単刀直入に聞きます。貴方、賊の類でしたね?」

「イエ、農民デシタ。普通ノ」

「嘘だ!!」

突然目を見開いて叫んだ。

いや、農民でしたよ？最近は副業してるけどな。

周りはその声の大きさに驚いたが、男は「オヤシロ様が・・・」とか言っている。

もう突っ込んでたらきりが無いからこいつについては考えるのを止めよう。

「まあいいじゃないか。私は彼女自体を気に入ったのですよ」

「で、ですが」

「美須々」

「う・・・はい」

えらく俺を気に入ったみたいだな。

だがこいつらに付き合うのは疲れる。

正直、山賊稼業に勤しんでた方が数万倍も楽だ。  
って待て今こいつ俺のことを

「・・・才前、ナンデ俺ガ女ダト解ツタ」

「「「「女!?!」「」「」」

隣の美須々という女と周りが驚く。

正直自分は体の凹凸は女の割には全くと言っていいほど無い。

そのくせ顔が包帯で覆われているのだから自分の性別は今まで気づかれたことはなかった。

だからこの周りの連中の方が正しい反応だ。

「そうですねえ・・・貴方が私の部隊に入ったら教えてあげてもいいですよ?」

そういつて子供のいたずらっ子ように笑う目の前の男。

なんだこいつ。

意味が解らねえ。

俺が怖くないのか?

この声になんも感じねえのか?

こっちを見て楽しそうに笑ってやがる。

心地がよい風が俺の横を通りすぎたような気がした。

・・・よくわからないが今のこの空気が心地いい。

今まで私はこのように人として話されたことは無かった。

いつも奇妙な目で、好奇の目で、畏怖の目で見られてきた。

だがこの男は自分をまるで昔なじみの友達のように話す。

俺は自分でも知らないうちにこの男に尋ねた。

「才前ハコノ俺ガ怖クハナイノカ？」

「はて、なぜ私が貴方を恐怖しなければならないので？」

「俺ノ声ヲドウ思ウ」

そついうと男は笑って言った。

「好きですよ？」

「!？」

「だって貴方の声は音が違う。普通とは違い独特の領域を持ち、美しい。普通の人にはきついかもしれませんが私は好きですよ？」

・・・なんだこいつ。

独特の音？美しい？

異質と、魔物と蔑まれ、両親でさえ嫌ったこの声が？

「貴方の歌声とか聞きたいですね・・・（こつちの音楽緩やかなんだもんなあ。天和様がヘビメタやったらファンから袋たたきされそうだし・・・でも天和様のヘビメタ。やばい聞いてみたい！！すごい聞いてみたい！！）」

歌？俺が・・・歌？

は、ははは。

こいつはかなりの大馬鹿だ。

だがこいつの目は真剣だ。嘘をついていない。

俺は幼いときからああいう目を向けられているから解る。  
常に向けられてきた負の感情。

だがこいつにはそういうモノが一切感じない。  
むしろ俺のことを好意的に見ている。  
その目に嘘はない。

嘘を……ついていないんだよ。

「……俺は、12才で虎も殺した化け物だぞ？」

「おお！それは頼もしい！！是非私を支えていただきたいです！！」

「化け物にか……？」

そついうと男は首をかしげた。

「貴方は私達と同じ人間でしょう？」

「……」

同じ……俺が人間？

化け物と、自分の父と母にも言われた自分が？

「もう一度言います。貴方が私達に必要です」

お前なんて生まれなければ良かった。

そう、言われてきた。

ただどこいつは私を必要としてくれている。

俺を・・・私という存在を認めてくれている。

「だから私達の仲間になつてはくれませんか？」

ああ、そうかあ。

俺は化け物になりきれなかったのか。

嬉しい、すんげえ嬉しい。

俺の負けだ。

こいつに・・・こいつに俺は付いていく。

こいつといるとすんげえ楽しい。

よく解らないがすんごいおもしろえ。

あはは・・・俺はこいつらと同じ馬鹿になっちまったみたいだ。

何があるうと離れるもんかよ。  
こんなやつ逃したらもう二度と出会えない。

「俺ノ名八馬元義。アンタニ私ヲ使イコナセルカイ？」

そう言っつて私は笑う。

ああ、初めてだな。

こんな気持ちで笑うのは。

「ふふ、いいでしょう。使いこなして見せましょう！この波才が！  
！」

これが波才の旦那との関係の始まりだ。

旦那は私が真名がないと言うと

「じゃあ私がつけていいかな？」

と面白そうに言ってくれた。

思わず年甲斐もなく泣いちまったなあ。

私の両親は真名をくれなかった。

いや、もう旦那が私の親同然か？

なんたつて名付け親だからな。

そう思うと嬉しいという感情が押し寄せてくる。

私の真名は明埜

明はすべてを明けた者、埜は旦那の国の神様からとつたらしい。  
野の神さまである野社明神、天神からとつたという大層な名前だ。  
俺には大げさすぎないかと言ったがむしろ天神さえも越えちまえ！  
！って言ってた。

うん、よくわからない。

まあそれが楽しいから良いんだがな。

美須々とは旦那の守るためにと気が合いお互いに真名を交換した。  
美須々も俺を仲間だという。

同時に負けないとも言っていたが・・・何がだろうな？ケケケ。

その後琉生も入り、旦那がついに動き出す。

俺は諜報や知謀担当、理由は簡単。

残り二人の仲間が脳筋だから。

あいつら・・・少しは勉強しろよ。

美須々、せめてお前は自分の名前書けるようになれ。

私は賊だった頃に奪い取った書物を読んでいたからか頭は悪い方じやない。

だがやっぱり武も鍛えておくことに越したことはない旦那や二人と訓練して大分腕は上達した。

いや・・・三人が化け物並だから揉まれるうちに強くなっていた。

旦那・・・強かったんだな。

いくらなんでも素手は無いだる素手は。





そう言って私は旦那を追いかける。

ああ、やっぱり楽しいな。

こういう馬鹿げた時間を守るために、私は戦ってるのかもしれないな。

旦那、あんたの道。

いっちょ私も渡らせてもらっぜー！

「いや！？なんで笑ってるんですか！？ていうか今私の首狙いましたよね！？マジで死にます！！いや、本当に死ぬからーーーーー  
ーーーーー！！！！（ブスッ）ぎやあつあああああ  
あああああああああ！！！！」

番外編 とある過去〜声〜？（後書き）

…え？

PVが100000突破ですと？

…。

みなさん！！この作品と作者は駄目だ！！私が身代わりになるので  
すぐに他の作品に逃げてください！！

いや、本当に。

この作品は作者の妄想とこじつけにより構成されているのにそれを  
許す、なんて心が広い方々が多いのだろう。

そんないい人達は作者みたいな人間に騙されるので気をつけた方が  
いいです。

記念に武将紹介またやろうかなあ…。

作者は駄文&ノリと勢い&我が道を駆け抜けていますが、それでも  
「構わん、やれ」と言ってる方、これからはさらなるゆっくりへとな  
りますがよろしく願います。

**番外編 武将紹介(???編) (前書き)**

記念と言いつことでむしゃくしゃしてやった。  
今は後悔している。

それでも良いという方はどうぞご覧ください。

番外編 武将紹介く???編く

「どうもく作者の味の素です」

「何故かまたここにいる白蓮だ。というかなんでここにまたいるんだ？」

「そうですね…他に暇な人がいませんでした」

「せめてそこは説明役だからとかにしるよ!?なんか私が暇みたいじゃん!?!」

「暇じゃないんですか!?!」

「そんな驚くような顔で言うなよ!!仕事あるよ!!太守だよ!!……ハア、もう諦めた。それで?今回も恋姫に登場するキャラの史実部将を紹介するんだよな。でも????編てどういうことだ?」

「はい!!たくさんのDIO様によりこの小説も何故かPV100000&お気に入り200突破!!記念にまた武将紹介でもしようかなあと!?!」

「心が広すぎる優しいすぎる人が多いよなあ。で、そろそろやろう。あんまりここで尺をとるのも駄目だと思うからな。」

「あくそうですね、それでは今日の議題はというか発表、???編はこれです!?!」

【変態十無双〜ドキッ変態だらけの三国志史実〜】

「……………」

「……………」

「おい」

「はい」

「これってさ、恋姫のキャラだけ紹介するんじゃないの？」

「いいぜ、貴方がまず恋姫キャラだけを紹介するんだってなら、まずはそのふざけた幻想を「それ作品が違う！！」というかそれやったら恋姫の世界観終わるから！！」「…最後まで言わせてもらいたかった」

「お前何考えてるんだ！？」

「白蓮知ってるか？作者は何も考えていない」

「そんなの前回でよく解ったわ！！聞いた私が馬鹿だったよ！！というかなんだよこのテーマ！？作者が完璧にやりたい武将紹介だろこれ！？」

「否定はしない！！」「しろよ！！」「三国志には面白変態部将がいるのでその中から三人ほど作者が選んできました。「おい！！無視か！？」無視です。予選を勝ち抜いた彼らは正真正銘の変態です！！」

「そんな力説しなくて良い！！と言つか予選つてなに！？そんなに三国時代は変態だらけなのか！？」

「ははは、こやつめ」

「何がはははだ！！」

「それじゃそろそろ始めます。今回は紹介程度なのでそこまで深くは掘り下げません。うわぁ…と軽い気持ちで見られるとありがたいです」

「その時点で軽い気持ちになってないだろ！？…はぁ。もういいから早く終わらせてくれ……」

一人目

「『少女に国境は無し』」

「……………」







とお持ち帰りした。  
神様最高!!

持ち帰っているいろいろあるとこの少女、なんと夏侯淵の姪だと判明。

「え？むしろその方が燃えるじゃない。愛する人は敵国の重臣の娘とか展開的に熱いよね!!」

と正妻に。

この時この夏侯淵の姪は十四才であった。

「という話です。私は張飛さんが恋姫でチビになったのはこのせいじゃないかと睨んだり……って白蓮さんどうして頭を抱えているの  
で?」

「…いや、なんか鈴々に前みたいな態度で会えない気がしてきた」

「あ、でもこの姪自体に架空説はありますね」

「そうかあ…ならよか「少なくとも皇帝劉禅に嫁がせた二人の娘は夏侯氏が産んだようですが」……」

「……………」

「……………」

「次…行くか」

「そうですね」

二人目

「巫女萌え！！もう全てを捧げましょう！！」

「帰る！！私は帰るんだああああ！！」

「駄目です。それではこの人です！！」

李？（りかく）

性は李、名は？、字は稚然。

涼州出身で董卓の部下。董卓の死後は郭？と共に献帝をその手元に擁護するが、不遜で不誠実な扱いをして献帝に逃げられ、勢力は衰退した。

「というところで李？さんです！！」

「李？つて董卓の部下なのか：でも余り話を聞かないんだけど」

「いや：この人聞かないだけでかなりの凄い人ですよ。横山三国志だとすごいあれでしたが、ちょっとまとめてみたので見てください」

李？のここが凄い！！

- ・後漢の英雄の大司農、朱雋を撃破し捕らえる。
- ・賈？の策を聞き入れ、長安を強襲。曹操を撃破する猛将徐栄を討ち取る。

- ・ついでに呂布も撃破。

- ・長安を占拠し董卓の敵である『王佐の才』、王允を殺害。

- ・馬超の父、馬騰を撃破。

- ・蜀の地を治める劉焉を撃退し息子二人を討ち取る。

- ・曹操と袁紹を打倒するために袁術・劉表・公孫賛らを懐柔させて同盟を成立させる。

- ・これにより中華の三分の二を実質手に入れた。

「まとめてみれば解る、こいつもチートだ」

「おいおい…私までこいつに懐柔って」

「それぐらいこの人外交うまいんです。軍も馬騰を撃退してますしかなり強かったみたいで。まあ最後には馬鹿らしい内部分裂起こしてしまいました」

「それでもすごいなあ。でもなんでこいつが…その…変態なんだ？」

「この人すごい巫女に入れ込んでたんですよ。怪しげな巫術に入れ込んだり、巫女の報告ばかり信用してたんです。恩賞も部下よりも巫女にたくさん貢ぐほどで内部分裂したのはこれが原因じゃね？」

てかそうだとと言われるぐらいです。取り合えずこの時代でもここまで巫女に入れ込むのは異常！！よって巫女マニアの称号を私が独自に与えました！！」

「作者の判断かよ！？」

「天下なんていらぬ…巫女がいればそれでいい。そんな貴方に送られる称号です」

「すべからく辞退したくなる嫌な称号だ……」

三人目

「『私は美しい、脅威の天才ナルシスト』」

「これで最後なんだ…耐えろ、耐えるんだ私」

「白蓮さん、そんな魚が死んだような目でぶつぶつ言わないでください。彼はユダ様や三国無双の美しい人並の人材です！！」

何晏（かあん）

性は何、名は晏、字は平叔

「なんとこの人あの大将軍可進の孫です」

「へえ。でもあれだろ？ナルシストなんだろ？もう帰りたいんだが……」

「まあまあ……。さてこの何晏さん。自他共に認める美しさだったそうですね」

「嘘偽りではなかったんだな。自分も認めるってのはあれだけど」

「ええ、常に女の子の噂が絶えなかったようですよ。そしてこの人、常に自分の顔に白粉を塗り、手鏡を持ち歩いて自分の顔を見て「ふつくしい……」とか言っていました。他にも「僕は新世界の神だ」みたいな面白セリフもよく言っていたそうです。いやまじで」

「うわぁ……」

「そして凄い麻薬が好きで、常に五石散と言う麻薬を持ち歩いていました」

「おまけに薬中だったのか……」

「あ、ここで問題です。この五石散を持ち歩くことからある言葉が生まれました。それはなんでしょう？」

「ええと、五石散を持ち歩くことからあるくことから生まれた？五石散……持ち歩く……五石散……歩く……ってもしかして!？」

「おお！お解りになったようですね」

「散歩！？散歩ってこれから生まれたのか！？」

「そう言う説があります。五石散と言う麻薬は服用すると皮膚が敏感になり、体が温まってきます。これを散発と言うんですが、散発が起こらず薬が内にこもったままだと中毒を起こして死ぬらしいです」

「死ぬって…確定かよ。現代ほど甘くない麻薬だなあ」

「散発を維持する為に絶えず歩き回らなければなりません。五石散を服用した状態で歩きまわること。ここから散歩の語源が出来たといわれているとか」

「へえくなるほどな」

「こつこつというのは結構あるので調べてみるのも面白いですよ？さて、話は戻りますがこの何晏くん。ただのナルシでイケメンで薬中だったわけではありません」

「もしそれだけだったら紹介されないよな。…いや、この作者ならしそつだが」

「えへへ…」

「断じて褒めてない！！」

「酷いですねえ。何晏くんは『論語集解』や『老子道德論』を編集したほどの天才です。これは後の世の人達に大絶賛されています。

おかげで辞書とか教科書とかに載っていることもあります。私の場合は高校の資料集に彼が載っていましたね」

「変態が歴史に名を残しているのか。世も末だ（ハア…）」

「変態と天才は紙一重と言いますからね。彼もその部類だったのではないかと。もう一つ面白い話があります」

「え？なんだ？」

「実はこの人は反乱を起こしたのですが……恋姫で天の御使いが来るって言うて人は誰でしたか？」

「ええと…たしか管輅じゃなかったかな」

「正解です！！実はその管輅さん、この人の反乱を予言していました！！」

「な、何だつてー！？」

「その際の話がこちら！！」

曹爽の側近として羽振りをきかせていた何晏に招待された。何晏は三公に出世できるかと質問し、さらに「蠅が数十匹、鼻の頭にたかって、追っても逃げていかないという夢を見たが、何を意味しているのだろう」と問うた。管輅は「鼻はあなたの地位を表すものです。ところが、そこに蠅という醜悪なものが、寄ってまいりました。これは、険しい所に位置を占める者は転がり落ち、他人を侮り傲るも



のは滅びるといふ徴です」と警告した。

帰宅してから舅にこのことを話すと、舅は発言が明け透け過ぎると責めた。管輅は「死人と話をしているのに、何を恐れる必要がありましようや」と言ったので、舅は怒り、気が狂ったのではないかと思つた。ところが、年が明けて十日もしないうちに何晏たちが司馬懿に殺されたので、舅も敬服したという。

「どこかの人にはインチキ扱いされていた管輅さんですが、案外北郷くんの来襲を予測したのと同じく、結構な占い師であり、他にも訪ねて来た人の生年月日を見事あてたりなど全然インチキじゃありません！！凄腕の占い師でした」

「そ、そうなのか。じゃあ私も占ってもらおうかな」

「…止めといた方がいいかと。白蓮さんのためにも。この人、割と死ぬ日時も当ててるので」

「…怖！！」

「さて、これで二回目の部将紹介も終わりですがどうだったでしょうか？二回目なのに全く恋姫と関係ない人物を紹介しましたが、楽しんでもらえたのなら光栄です」

「ああ、なんか一回目よりもかなり疲れたよ…」

「白蓮様お疲れ様でした。作者は書いていてかなり楽しかったです！！」

「頼むから次は普通に紹介してくれ…」

「日本の政治家と同じ感じで言うと…善処します」

「絶対するきないだろ！？頼むからまともな紹介してくれよ！！」

「しょうがないなあ…それでは公孫贖」

「え、ついに私か！？」

「の説明をちょこっとだけ含めて貴方の宿敵の袁紹を中心として紹介をします」

「おいこら！？喧嘩売ってるだろつお前！！」

「H A H A H A ちゃんと真面目に書きますよ」

数日後。

「…初めて真面目に書いて、ちょっとストーリーも入れたら袁紹の紹介プロットが三部構成になりそうだ。頭が痛い」

番外編 武将紹介(???編)(後書き)

袁紹はホントに長い…下手すれば五部構成もありえちゃいます。でもそんなのは長すぎるのでしません。作者の気力が持たないので。

Q・何故袁紹？

A・ああ!!

Q・作者が好きだけじゃないの？

A・ああ!!

Q・いや、曹操やれよ

A・ああ!!

Q・本編書いたら？

A・ああ!!

次回は本編進めないと…。

第九話 軍を処し、敵を相る（前書き）

鼠の気持ちではチーズしか得られない。大きい獲物を得ようとするなら狼の気持ちになれ。

『錨を上げて』より

## 第九話 軍を処し、敵を相る

「官軍がここへ進軍中ですか・・・」

曹操さんとの戦いから時が経ちましたが、やはり徐々に押されてきています。

最初は勢いがあったもののやはり長期戦になると押されてきますね。そりゃあ策を使う者と使わぬものでは差が大きすぎます。

それに罪も無い民に剣を向けた瞬間、黄巾党の終わりは見えてました。

民によって支えられるべき黄巾党が民にねたまれては支援も受けられません。

商人も敵に回した今、弓矢も馬も全く足りません。

他の人達は何を考えているのでしょうか？

何も考えていないだろうなあ。

これは黄天が沈む時も見えてきましたね。

そして現在、明埜によりこちらに官軍が我が砦に進行中との。なんていうか佳境に入ってますね。

もちろん黄巾党滅亡へ・・・ですが。

それを意識しているのか本腰を入れているように感じます。各地で聞くのは同胞の敗北の声。

同胞と言つてもあれだけ好き勝手やったのですから同情の念なんてまったくありません。

天和様達が無事であればそれでいいのです。

私の隊は基本攻められれば迎撃することに徹します。

こんな何の意味もない戦いに身を投じる必要は部下にはありません。もはや義もなくなりました。

別に私は天下を取ろうなど考えてもいませんから積極的にやる必要もありません。

でも攻められれば話は別です。

死の恐怖を兵士達に思い出させて上げましょう。

でもいくらなんでも目立ちすぎましたね。

本腰を漢は入れてきました。

それもどうやら本気で討伐する気のように。

「アア、將軍八皇甫嵩ト朱儁ダ」

そうですか。

片や後漢末期の英雄、片や後漢末期の勇者。

黄巾の乱を平定した者達です。

黄巾党キラーと言つても過言ではありません。

特に皇甫嵩。

貴方は黄巾党にとってトラウマ以外の何者でもありません。

私が死んだのもこの人の策である火計によって。

広宗の戦いで張角の弟張梁を討つとともに、病死していた張角様の棺を壊し首を刈り取った。

さらに曲陽では張角の弟張宝を討ち、10数万を討ち取って完全に黄巾党を沈めた。

まさに英雄。

演技では劉備が黄巾党討伐で活躍してましたが史実では黄巾党討伐といったらこの人です。

リアルチート過ぎて泣けてきますよ。

それはこの世界でも例外はなく獅子奮迅の活躍を上げています。

これは想像以上に辛いですね。

「兵は？」

美須々もこれまでにない激戦の予感してか顔が険しい。

「総数五万ダ。シカモ向カウトコロ敵無シ、戦勝ニヨリ士気八カナリ高イ」

「約三倍・・・ですか」

「率いる將軍達によつて実力も三倍はあると見て良いでしょうね。

12万の軍と戦うぐらいの気持ちでやらねば私達はここで死ぬでしょう」

最後の最後にとんでもない壁が来ましたね。

これを神様が見ているとしたらよっほどの悪顔で見ているでしょう。



「美須々、馬はどのぐらいありますか？」

「三千頭ほどです。弓矢は五千本しか・・・」

商人からの買い付け以来だいが立ちますからね。矢は使ったあとリサイクルしてますが限界も近い。

「明埜？あとどれぐらいでここまで来るので？」

「見積もって十日後だな」

「・・・」

十日ねえ。

他の黄巾党はあてになりませんね。むしろ皇甫嵩の名前を聞いたら逃げるのでは？作戦の最中に彼らによって無駄にされるのは・・・。

はは〜ん。

いいこと思い付きました。

軍が多いなら減らせれば良いんですよ。

軍の質が高いなら落とせば良いんですよ。

多少民に被害は出ちゃいますが天和様のもとへ帰るためにもそこらへんは切り捨てます。

戦いとは情を持たず死めのですよ。

「美須々々？ここから一番近い黄巾党の拠点は？」

「二十里先に三万の同胞がいますが正直期待しない方が良いでしょう。彼らは賊上がりです。罪も無い民を襲い、我らをここまで貶めた原因の一部です。そのくせ臆病で兵も兵とは見れない農民上がりの賊同様。我らとの共闘は逆に負担になりかねません。下手すれば勝手に逃げるでしょう」

「おお！！うってつけの逸材ですね！！」

「「？」」

うんうん、天運は我にありですね。  
ならば天に見せて上げましょうかね。

美須々と琉生は不思議な顔をしています。

明埜は・・・あれ？笑ってますね。

「明埜は私が考えていることが解ったので？」

「大体ハナ。ダガ主ガソノ程度ノ考工方ナワケガナイ。コレカラドウナルノカ考エルト面白クテナ」

楽しそうに笑う。

私も笑う。

その姿は二人の悪鬼が笑うが如く。  
美須々はその姿を見て引いていて、琉生はぼーっとしています。  
二人は完全に取り残されてますね。

「まずは明埜にそのお仲間への使者になってもらいます。それから残りは森の木をたくさんたくさん切ってくださいね」

「は、は!?!」

「・・・」

「了解。ダガナンテ言エバインダ?」

「それは」

波才。

黄巾党の将にしてその軍は無敗、部下も素晴らしい武勇を持つ。それに慈悲の心と義侠の心があるようだが・・・悪いが黄巾党である限り戦わなくてはなるまい。

彼を倒せば黄巾党全体の士気が下がり、この乱の終わりが見えてくるだろう。

そう思い軍を進めているとある一人からの情報が入った。

「あ、あの・・・どうか俺達の村を助けてください！！黄巾党のやつらが徒党を組んでここらいつたいを襲っているんです！！」

そこまでは特に思うところはない、だが。

その中に『波』の旗があるのならば話は別だ。

その村は波才の拠点から離れている。

「朱儁、どう思う？」

「さあな・・・正直俺も混乱している。もしかしたら見間違えただけかもしれないが・・・もし本当なら何がしたいんだか」

おかしい・・・時間が経って拠点が変わったのか？

どちらにしる捨て置けない話だ。

確かこの近くにはもう一つ黄巾党の拠点があつたな。

そこからだと村人の話は真実に近い。

それが波才の本拠地？

「私は二面作戦を取りたいと思う」

これが現状では良い手段か。

「それが確實だな。兵は皆が二万と噂が三万つてところか？」

「それがいいか・・・私はその村へ向かう。だが何事もなければそのまま戻ってくることにしよう」

「んじゃ！俺は皆か！解った。着き次第、俺の兵に情報を持たせて送ろう」

「解った。油断はするなよ」

「っは誰が黄巾の英雄に油断なんかするかね」

そう言つて笑つて朱儁は皆へ、私は噂の黄巾軍へと別れた。

〈朱儁 side〉

砦に着いたがその光景に驚かされた。

「おいおい・・・波才ってやつはイカレてるのか？」

思わず冷や汗を垂らしてその光景を見ている。

無理もない。

私自身も信じられない。

この軍を見回しても部下は皆、驚きの表情を一樣に浮かべている。それは何故か。

砦が火に包まれていた。

いや、正しくを言うと周りで木が燃えていてそう見えるだけだ。周りに木を敷き詰め、そこに火を放ったようだ。

予想外だ。

このような籠城の仕方など見たことがない。だがこれは有効だ。

近づけず、様子を探ることも出来ない。

「だがいずれかは消える」

そうだ。いずれかはこれは消えるだろう。

そうなったときが彼らの最後だ。

兵の数は一万と五千。

油断などしない。

幾度も官軍を撃退してる彼に油断をするほづがどうかしている。

これは根競べになるのか？

・・・何かおかしい。

この程度で終わるのか？

援軍が来るからこそ籠城する。

援軍が見込めぬ状態で籠城など波才がするのか？

ジャーンジャーン！！

銅鑼の音！？

クソツタレそいうことか！！

「で、伝令！！背後より黄巾軍が我が軍を強襲！！は、旗には『波』の字が！？」

波の字！？だが向こうに波才はいるんじゃないのか！？

ああもつはめられたんだな！！

うまい具合に兵力を分けられた。

だが今はそんなこと関係ねえ。

「解った！！すぐに陣形を取れ！！」

戦い続けた俺の兵達は混乱はあったがすぐさま正面から受け止める  
迎撃の陣形を取らせる。

敵の統率を取れており陣形を組んで向かってくる。

なるほどな、ありやよく訓練されてやがる。

おまけにこの奇襲。

頭も使いやがる。

だけどなあ、それは俺達を甘く見すぎだ。

「はめられはしたが、この程度でやられるほど俺らが弱くねえって  
ことを教えてやる」

だがあいつらは俺らの力を見誤った。

その程度で敗北するなど我が軍にはありえない。

常に倍近くの黄巾兵と戦ってきた。

その度胸と経験を侮っちゃいけないね。

朱儁が取ったその行動は間違っではないなかった。

事実、このまま戦えば勝利していたのは彼だっただろう。

一見何気ない陣の組み方にはそのまま敵の勢いを殺し、反撃で全て  
を刈り取る。

歴戦の猛者による必殺の陣。

だがそれはこのまま戦えばの話だ。



彼は正面の波才と思われる軍に気を取られすぎていた。だがそれはしょうがないと言える。他に敵が現れそうな所など無い。故に彼は正面に集中した。

もうすぐ接触し戦闘が始まる、そう思って彼が身構えた瞬間。

背後より強襲を受けた。

燃えている砦。

誰も出ること出来ず、入る事も出来ない火で出来た籠。

その籠を突き破り、騎馬隊が現れた。

誰もが呆然と口を開き、何が起こったのか理解が出来ない。

ただ、目を見開き何が起こったのかと目に焼き付けようとする。

彼らの目に一人の将と思わしき男がとまった。

そしてその男の叫びが戦場にこだまする。

「ぎゃあつあああああああああ頭が燃えている!!!」

〈波才 side〉

まずは分散に成功。

そして今、官軍さんはみごとに気を正面の琉生の軍に取られて  
いますね。

まあ後ろには炎の壁に覆われた砦。

気を取られ背後に回られた敵軍。

しかもその旗は『波才の旗』。

そりゃ気も取られるものです。

でもそれだけでは不意打ちとはほど遠い。

それで倒せるほど彼らは甘くはない。

だから、それすらも全てはこのための布石。

私と美須々がこの炎の砦から出て背後を突くためのね。

「主、時が来たようです」

「ええ、行きますよ」

この策は真田のYAZAWAが行った策と同じだ。  
城の周りを木で燃やし、まさか出てくるとは来まいと油断していた  
北条の大軍を撃退したときの策。

策というのか無謀というのかまるでわからない。  
というかもはや馬鹿だとすら思う。

それがYAZAWAクオリティ。  
日本の武士のKOKOROだ。

ふふ・・・見せて上げましょう!!

真田のYAZAWAの力を!! じゃなかった我らの力を!!

「開門」

「っは!!! 門を開け!!!」

開かれる門。

見えるのは炎の壁。

ここからでも熱気が私を包む。

ふふふ・・・これはわくわくしてきましたね。

このスリル！！

さあ殺し合いましょう！！

純粹に戦いを楽しむものこそ勝利をも楽しめるのだあ！！

……あれ？いつの間にか平和主義者だったはずなのになんか変わっている気がします。

まあこの世界では気にしたら負けです。

この世界では常識に囚われてはいけないのですね！

つとおふざけもここまでにしましょう。

そろそろ時間ですからね。

「さてみなさん、今日も殺し合いにはもってこいの良い日ですね」

誰もが私を見つめるがその目に恐怖はない。

纏う空気を変える。

ここから先は波才だ。

波才ではない、波才なのだ。

「殺せ、全て殺せ。戦う者は殺せ、刃向かう者は殺せ、逃げる者は殺せ、泣く者は殺せ、懇願する者は殺せ、生きとし生ける敵は全て殺せ。そこに一切の情はなく、一切の迷いもなく、一切の後悔もなく、一切の躊躇いもなく、一切の考えもなく、一切の常識もなく、一切の論理もなく、一切の喜びもなく、一切の救いもない」

嗤う。

もはや私は人が笑える笑いをしていないのだろう。

それもまた一興。

ですがこの姿は主には見せられませんね。

他の皆さんも人が浮かべて良い笑顔を浮かべていません。

子供が見たら泣くぞこの集団。

「サーチアンドデストロイ見敵必殺！！見敵必殺だ！！我々の前に敵はなく、我々の後に敵はなし。全て殺せ！！全ての障害はただ押し込み、潰し、粉碎しろ

！！」

この言葉に誰もが歓喜し、誰もが嗤う。

真の獣とはこういうどうしようもない、泥と血の棺桶で死んでいく者達のことを言うのだ。

今の私達みたいだね。

「全軍！！我に続け！！！！」

私を先頭走り出す我が騎馬隊。

誰もが顔に喜悦の表情を浮かべ炎の壁へと突き進む。

私も浮かべているんでしょうね。

戦いへの期待！！喜びを！！

迫る炎の壁。

今の私達には障害としてはちょっと役不足です。

そして炎の壁を突き破って見えたのは官軍のから空きの背後。  
思わずにやりと口を歪める。

ん・・・なんか焦げ臭くない？

なんか焼けるような臭いが・・・。  
布って言うか炭素が燃えるような嫌な臭い。

熱い。  
頭がほのかというかももの凄く熱いような。

しかもそれが頭からじんわりと言うよりぐわっと・・・。

あ、頭が燃えてるんだな。  
うん、謎は全て解けた。

…。  
…。  
…。

って。

「ぎゃあつああああああああああ頭が燃えている!?!?!」

く美須々 sideく

主は素晴らしいお方だ。

まさかこんな策を思い付くなど誰が考えようか。

外の黄巾兵をおとりにし、兵力の分散。

そして二回もの背後の強襲。

二重、三重の罨。

だが外には炎の壁。

下手をすれば大怪我では済まされない。

恐れがないと言えば嘘になる。

主はどうだろうか？

そう思い隣で馬にまたがる主を見る。

笑っていた。

楽しそうに笑っていた。

歓喜、そう歓喜の表情を浮かべて。

戦うのが楽しくて、待ち遠しくて仕方がないという表情で。

何というお方か。

間違いでは無かった。

この方が主で間違いはなかった。

正真正銘私の主であるお方だ。

私が道を選ぶのではない。



この方が進む道こそが我が美須々という武人の通る道なのだ。

おもしろい。

面白い！！

私まで楽しくなってくる。  
歡喜に槍を持つ手が震え、目を見開き瞳孔はただ一点のみを見続ける。

いったいどの歴史に炎の壁を突き破り敵を討ち果たす者が居るのだろうか。

ここだ。

ここにいる。

はははは。

楽しくてしょうがない。

そんな私達の姿を見てか背後に並ぶ兵達も最初は怯えていたが今や喜悅の表情を浮かべ、今か今かと主の命令を待っている。

これだ。

これこそが波才の軍なのだ。

主がそこにいる限り例え誰もが嫌悪する地獄の園だろうが、我らは口笛を吹き心の底から嗤う。

「開門」

短い主の声。

どこまでも透き通り、心の中に満ちる狂おしいほどの誘惑。

我らを惑わしてやまない甘美なる声。

今の我らには神の声にも等しい。

「っは！！門を開け！！」

ああ、待ち遠しい。

ああ、狂おしい。

まるで恋い焦がれた乙女のような。

この方といるだけで戦場が楽しくなる。

この方がいるだけで私という存在が輝ける。

もはや死すら愛おしい。

そしてその炎の壁を見て主の身に纏う空気が変わった。

その後ろ姿は王。

誰もがその姿に身を奪われ、誰もがその姿に跪く。

我らの王の姿。

ただ唯一なる道を創り、我らを導く。

その姿に我らは思いを馳せ、一つとなる。

「さてみなさん、今日も殺し合いにはもってこいの良い日ですね」

主の声に思わず空を見上げる。

そこには青い空。

どこまでも青が広がっている。

我らを見る主の顔・・・それはもはや悪鬼羅刹の如く。  
見るものは嫌悪し誰もが畏怖する魔の表情。

今の我らにはそれほど愛おしく、美しい顔はない。

「殺せ、全て殺せ。戦う者は殺せ、刃向かう者は殺せ、逃げる者は殺せ、泣く者は殺せ、懇願する者は殺せ、生きとし生ける敵は全て殺せ。そこに一切の情はなく、一切の迷いもなく、一切の後悔もなく、一切の躊躇いもなく、一切の考えもなく、一切の常識もなく、一切の論理もなく、一切の喜びもなく、一切の救いもない」

嗤う。

もはや私は人が笑える笑いをしていないのでしょうか。

なぐんだ、私も悪鬼羅刹の顔を浮かべているのですか。

悪鬼羅刹の集団、だがそれはたった一人の人間のためだけに行動し、戦い、貪る。

やはり主はすばらしい。

サーチアンドデストロイ

「見敵必殺！！見敵必殺だ！！我々の前に敵はなく、我々の後に敵

はなし。全て殺せ！！全ての障害はただ押し進み、潰し、粉碎しろ  
！！」

ああ、すばらしい。

主に、自らの主君に身を捧げるといふのはこんなにも甘美であるのでしょうか。

この方のためならば死ねる。

この方の進む道を妨げる者なら誰であろうが殺す。

その我らが王の命令。

見敵必殺。

了解です主。

全てを、我らを妨げる者全てを殺します。

この場にいる誰もがその命令に一切の迷いも無く、一切の躊躇いもないでしょう。

何故ならそれは主の命令だからですよ。

それ以外に重要なモノがあると？

「全軍！！我に続け！！！」

先頭を走る主に続く。

走る途中に自分の長い髪が邪魔なことに気がつく。

炎の壁を進むには邪魔な髪。

自分の母が褒め、皆が美しいと褒めた長髪。

いらぬ。

そんな過去など不要！！

今ここであるのは戦いのみ！！

槍の先で髪を切る。

炎の壁が迫る。

その時は永遠のようで一瞬。

そして

突き破った。

見えるは敵軍のから空きの背後。  
誰もが驚き我らを見つめる。

ふふ 死のない戦いなど面白くもなんともないわ！

さあ！！戦いを肯定しよう！！  
殺し合いを楽しもう！！

「レツツ「ぎやあつあああああああああ頭が燃えている！！  
！！・・・パアライイイイイイイイイ！！」

・・・今何か聞こえた気がしますが気のせいです!!

主の声に似ていたのも気のせい!!

ちらりと見た主の頭に火が踊り狂っていたのも気のせいに違いない!!

さあ!! 殺し合いましょう!!

第九話 軍を処し、敵を相る（後書き）

いろいろはっちゃけてしまった。

テレビで自分が知っている音楽が流れるのってテンション上がりますよね。

でもマブラヴが流れたのにはびっくりしました…。  
これは恋姫も来るのだろうか？

第十話 さくらさくら（前書き）

人間の野獣性に、虚偽の病的な理想主義の衣を着せるよりも、率直に野獣であるほうが人間にとっては危険が少ないだろう。

く ロマン・ロランく



## 第十話 さくらさくら

波才率いる黄巾の軍は朱儁率いる官軍を奇策で挟撃。

炎を突き破り背後から現れた騎馬隊。

官軍の誰もがそんな彼らをみて啞然として動きを止めた。  
それは将である朱儁も例外ではない。

イカれていると朱儁は彼らを評した。

だがそれは違った。

イカれている所の話では無い。

火は古より人々が恐れ、敬い、自然の恐怖の象徴でもある。  
拜火教であるゾロアスターなどのように火は神の力であり、信仰する者達さえいる。

だからこそ背後より火を突き破り現れた頭の黄巾に火がついた男は  
人には見えなかった。

鬼神

まさに悪鬼羅刹の如く笑い、火の壁すら恐れず突き進み突き破る。

笑う、戦いのために。

笑う、勝利のために。

笑う、天和様のために。

笑う、地和様のために。

笑う、人和様のために。

その姿に彼らは目を奪われ、恐怖し、誰もが目を見開いた。

「レツツ」ぎゃあつああああああああああ頭が燃えている！！  
「・・・・・・・・パアリイイイイイイイイ！！」

戦場にこだまする鬼神と戦乙女の声。

鬼神と戦乙女に率いられた三千の騎兵。

今、生誕の産声を上げて官軍を貪ろうと口を開けた。

すぐさま朱儁は混乱を治めようとする。だが、既に琉生率いる黄巾の兵一万二千が混乱しきつた彼らに食らいついた。血が舞い、千切れた腕が舞い、悲鳴がそれを彩る。貪るように、弄ぶように官軍を抉る攻撃。

混乱は更に拍車をかける。

そして背後より波才と明埜の騎馬隊による突撃。

すでに官軍は軍としての形態を保ててはいなかった。

（波才 side）

な、なんとか黄巾の布を殴り捨てて事なきを得ました。

作戦は成功、後は敵將を討ち取るのみ！！

戦場を駆けていきます。

ほとんどが右往左往し、混乱しきった兵など恐るるに足らず。  
向かってくる兵も、騎馬の機動力に蹂躪される。

・・・あそこか。

全ての物事には流れがあります。そして必ず芯の部分がある。  
軍の中心、つまりそこには。

私を殺したどちらかの將軍がいる。

・・・見つけた。

「貴方・・・お名前は？」

見つけた將は精悍な部將。

見ただけで解る歴戦の部將の振る舞い。

さて、彼はどちらか。

彼は私を見て驚くがすぐに見定めるような目が変わる。そして困ったように頭をかいた。

「お前は・・・ああ、あの火を越えて奇襲した男か。予想外だったよ。あんな馬鹿なことするとは思ってもみなかった。まあその馬鹿げた事だからこそ俺らは負けるんだけどな」

馬鹿とはなんですか馬鹿とは。

否定できないからそんなこと言わないでください。

既にこの戦いは殲滅戦に入っている。包囲も完了し彼らは逃げられはしない。

例え彼を討ち取るのが、私がここで打たれようが結果は変わらない。

「お前・・・名はなんという」

そう言っつて男は剣を抜く。

「私の名前は波才」

剣を肩に担ぎながら男はまたも思案顔になる。

「そうかぁ・・・ってことは見事にはめられたわけか。だが、こっちの方ではどうか？黄巾の英雄殿」

男はさすががしい笑いを顔に浮かべ、剣を構える。

見ただけで解る。この人は強い。  
軽い口調だがその構えは幾多の戦場を渡り歩いた将のそれだ。

この勝負、受ける必要はない。

ただこの男が周りの兵に討たれて死に行くのを待てばいい。

武人をあざ笑うような行為なのは認める。だがきれいな事では勝てない。守れない。

ですが何故私は剣を抜いているのだろうか？何故不適に笑うのだろうか？何故歡喜してるのだろうか？

いつから私はこんな人間になったのだろうか？

・・・ああ、そうか。

過去から・・・過去との自分を消したいのかも知れません。

それに、ここでこの男に負けるようなら私はそれまでの人間。

そんな人間では天和様達を守りきれない。まったく身勝手な男ですねえ私は。

そう自分を納得させる。

「いいねえ・・・俺に付き合ってくれるのか。あんたいいやつだよ」

男も解っているのだろう。己の敗北が、死が。

死ぬ覚悟が既にあるようだ。だからこそ、私も彼と戦いたいと思っただのかも知れない。

「右中郎将朱雋。参る」

「黄巾党波才。殺し合いましょう」

今ここに前世へと決別すべくこの波才、死地へと赴きましょう。  
私は朱雋へ目掛け走った。

（朱雋 side）

俺はこの戦いに負けた。

だが最後の最後に波才は俺に機会をくれた。  
いいねえ・・・どちらが勝つかは解らんが俺が死ぬのは決定事項だ。  
ならば冥土へのみやげにやろうじゃないか！！

波才が俺へ向けて突貫する。

普通は速さは一定の上昇をし、その上で最高の瞬間速度へとなる。  
だが波才はその一定の上昇を吹っ飛ばし、すぐに最高の瞬間速度へと到達。

彼が踏み出した地面は抉れている。

おいおい、こいつ人間か？

ハメートルもの距離をあっという間に詰め一閃。

だが、並の将ならば見切れず、即死という死神を朱雋は受け止めた。  
剣と剣のぶつかる嫌な音が鳴る。

ミシッ

「（つち！！）」

剣が軋む音が聞こえたのを聞き取った朱雋はすぐに波才の剣を横に受け流した。

力が受け流されたことにより、胴体が前のめりになり隙ができる。

「（ここだあ！！）」

朱雋はその隙を逃すまいと波才のから空きの背中へ剣を振り下ろした。

背中へと迫る剣。

波才はそれを流れのままにそのまま転がって避けた。

追撃へ朱雋が間を詰めようとするが、振り向きざまに振られた剣に阻まれ後退。

それを波才は見逃さず瞬時に懐へと入ろうとするがそれを剣を突き上げて振り下ろすことにより再度の間合いをあける。

そして互いの剣が相手の命を刈り取るために軌道をえがき続ける。

瞬きすら惜しいほどの剣の応酬。

だがその応酬の中で勝機を見いだしたのは朱雋。

「もらつたあああああああああ!!!」

朱儁は剣を振り下ろし、波才の剣を空中へはじき飛ばす。

さらに剣を反転、柄を逆手に握って波才へと切り落とした。

敵を討ち取ったと確信するも、その時の波才の行動に目を見開く。

その剣に素早く手を伸ばすと、波才はそれを両手で受け止めた。

剣の側面を両手で挟み込んだ波才。まるで曲芸のような一幕。

その波才と目が合う。

それは永遠のように感じられた一瞬。

俺は笑った。

「（この勝負）」

波才がその手に力を入れ剣を折る。

すぐさま折れた剣先をそのまま掴むと折れた根本に手を押し当て

「（俺の）」

そのまま朱儁の首へと剣先を差し込んだ。

剣を掴んだ手からは血が流れて、朱儁の首から流れる血と混じり合



う。

その血は折れた剣を伝い地面に落ちた。

朱雫は満足げな表情を浮かべたまま、ゆっくりと後ろへ倒れていく。

「……………負けだ」

そして、そのまま彼は地面へと沈み、二度と動くことはなかった。

＼波才 side＼

危なかった。

剣をはじかれた時は死の感覚が押し寄せた。

あの時にとつさの判断で剣を受け止めなければ死んでいたのは私だった。

つてえ。

今になって剣を掴んだために傷ついた手の痛みが襲い、顔をしかめる。

「主!!」

美須々が私への姿を見つけて走り寄る。

手の傷から流れ出る血を見て、美須々は見ていて悲しいほど悲痛な表情を浮かべるが、すぐにいつも私に見せる冷静な将としての顔に変わる。

「主の命令通り、掃討は終了。怪我の治療の用意を手配します」

気がつけば周りには自分の部下しかいない。

官軍の鎧を着けた人間は誰一人と動いてはいなかった。・・・それに気がつかぬほど強者との戦いとは人を引き込むのか。

武人が戦いを渴望してやまない理由の一端、それを知ったような気がする。

「いや・・・今はわずかな時間もおしい。酒と清潔な布を。作戦通り動きます、兵に指示を」

「っは!!」

朱儁ってことはあちらさんは皇甫嵩ですかね。

いやですね。知将が生き残るとは。せめて朱儁がこちらに来ていたら・・・。

「・・・」

ん？あれ琉生じゃないですか。

「琉生、貴方も兵の指示を」

「・・・」

差し出してきたのは酒と包帯。

ああ、わざわざ持ってきてくれたのですか。

「ありがとうございます。どれどれ・・・」

さて、酒で消毒を・・・。

「つつうー！..」

痛いです。もの凄く痛いです。

焼けるような痛みが全身に針を刺す。

でもまだここで休むわけには行きません。

歯を食いしばり痛みを耐え、包帯をぐるぐる巻きにします。  
出来上がったのは無骨な包帯巻きの手。

よし、これぐらい巻けば馬のたずなぐらいは握れるでしょう。

「琉生、そろそろ作業が終わるでしょう。行きますよ」

「・・・」

歩き出すと琉生もそれに続くように進む。

剛毅木訥は仁に近し。

その言葉の見本のような人間ですね、琉生は。彼女のためにも私はここで手をこまねいている場合ではありません。

こちらに来たのは武将である朱雋ですか・・・。

皇甫嵩ならばこの戦いに勝利していたかもしれないのですが・・・。

あの人は常に冷静で頭がいい。

だからこそここで倒さねばならない。

勝つために。

（皇甫嵩 side）

向かった先には黄巾党はいたが波才の旗は確認できなかった。それに黄巾党は私達を見た瞬間襲いかかってきた。

だが統率されていない動きでは我が兵に勝てるわけがない。包み込み殲滅した。

数がは思ったよりも少なかったく、被害は少なくすんだ方だな。兵も疲れてはいるが死傷者や怪我人は多くはない。

・・・だがおかしい。

皆へ向かった朱儁からの伝令が無い。

もしくは何か起こったのか・・・。

「じ、皇甫嵩様!！」

噂をすれば。

送った伝令が返って来た。

だが慌てており、まるで予想外の物を見たような顔をしている。

「何があつた？」

「は!!それが向かう途中、朱儁將軍の兵が二人こちらへ向かっていたのでここへ連れてきました。ですが、それが酷い有様でして。それに將軍に報告したいことがあると」

まさか・・・。

いや、朱儁はかなり用心深く武勇も優れている。

だがわずか二人ばかりの兵、しかもそれが酷い有様となると。

「解つた。その兵をここへ」

連れてこられた兵二人は疲弊しており、顔には絶望と疲労が浮かんでいる。

私の嫌な考えは当たってしまったか。

「何があつた？」

「し、朱儁將軍は戦死。生き残つた兵もおそらく私達だけです」

今、なんと言つた。

朱儁が戦死？

あの男は用心深く、兵は精強。

例え倍の兵であつてもそこまでの大敗をするような男と軍ではない。

「くわしく・・・話してくれ」

話を聞いた私は啞然とした。

なんだその策は。いや、策とそもそも呼んで良いのか？

周りの兵達も啞然としている。誰が考えようか、自らの砦を燃やすなど。誰が考えようか、その火を突き破つて敵軍が現れるなど。

そして生き残りの兵達から聞く戦場の様子から彼らはそもそも私達を生かすつもりが無い。

確実に我らを殲滅するために用意した策だ。

朱儁は敵の将に討ち取られたと聞くが朱儁を正面から打ち破る武勇、そしてこのような奇天烈な策を用いる者達。

これが本当に一介の農民から生まれたというのか。

否、断じて否。思えばあの波才の噂は私達を分散させるための罠。

そしてただ砦から出るだけではなく波才という誘惑のある旗を用いたおとりを使っている。

それによりこのような戦果が生まれたのだ。明らかに兵法に通ずる者がいる。だがそのような黄巾の軍に出会ったことは未だかつて無い。

油断していた。

負けたことが無いという話を聞いていても心のどこかで油断していたのだ。

「(こちらの兵は三万・・・向こうの兵は約一万五千)」

勝てない数ではない。

だがこちらの兵の士気は最悪だ。

この手であいつらを打ち倒したい。

友の敵を討ち取りたい。

・・・だが部下達は違つ。

恐怖。

自分が殺されるのではないかという恐怖。

既に我が陣営に噂は広がっている。敗北し、多くの兵が無残にも討ち取られ、将までも失ったと。

我らは勝ち続けてきた。それ故に忘れていた感情、それを改めて認識させる。

もはや戦意は無いに等しく、率いる将との間にずれが生ずる。

それに気がつかないほど皇甫嵩はおろかな人間ではない。

ここは、難を避け退くときだ。

我らは勝ちすぎた。勝ちすぎた故に油断が生じた。兵達の恐怖を忘れさせてしまった。

信じる、信仰する将の敗北。この光景を見せてはおそらく士気は下がり、戦うどころではない。

せめて一当て……。

落ち着くのだ。

あやつらにはあの朱儁さえも討ち取ったのだ。その彼らが何の備えも無しに戦うのか？

事実、今考えれば兵を2つに分散させるために流したであろう噂と偽兵。その分散させられた我が軍までも撃破する術があるのは当然なのでは？

それに不審な動きがあるという報告を受けた。

何かの考えがあることは確実。

今ここで私までもが倒れては漢の軍は終わってしまったも同然だ。



激情に身を任せればその先に待つのは死。  
それに今漢でまともに戦えるのは己のみだ。  
私のみならず国までもが死ぬ。  
今は・・・退くべきだ。

皇甫嵩は無念からその場から立ち上げると軍を引き上げるべくその場から去る。

数時間後。

さすがに情報によりすぐに撤退したのが功をせいしたのか背後より敵の影が見えることはない。

都に帰ればおそらく高官達からの追求により私は職を辞すことになるだろうか？

いや、まだこの乱は終わってはいない。

それまでは私の首はつながるか。

生きてさえいればこの恥は注げる。仇をとる機会も必ずや訪れる。

今の黄巾党はまだ土気も旺盛だが時が経つにつれ必ず弱る。

すでに各地で勝利する我らの仲間の報告が出始めている。それまで・

・ 臥薪嘗胆の心持ちで今は耐えるべき

ジャーンジャーン！！

！？

この銅鑼の音、まさか！？

（波才 side）

明埜からの情報により皇甫嵩撤退の報を聞きました。

予定通りですね、朱儁ならばこちらに来る可能性もありましたが、皇甫嵩は冷静ですからねえ。

良くも悪くもね。

ですから朱儁が討ち取られた今、おそらく深読みしてこちらに兵を進軍させはしないでしょう。

知恵が在る者特有の考え過ぎってやつです。

疑心暗鬼で何もかもが疑わしくなる。

それに実は投降した兵は我が軍の兵。

嘘の報告をさせることでおさら警戒させる。

それに不審な動きがあると言えばそりゃ、いったん退いて立て直そうとします。

でも撤退は正しい判断なのですよ。

ただでさえ減り、士気が下がっている軍。

明埜による内部工作のおかげでさらに士気も下げました。

おそらくそれも解るはず。

ならば一刻も早くここから離れたいはずですよ。

そう、一刻も早くね。

つまり一番早く撤退できる道で帰るということです。

ちゃーんとそこには雑兵ですが黄巾兵を伏兵として詰めていますよ。

さすがにそこまでは気が回らないでしょう。

撤退&士気はどん底。

そこに二万の黄巾軍を当てたらどうなるでしょうね。

まあ少なくとも無事ではないよね？

先の偽報で流して配置したのは兵一万。

まあ見事全滅してしまつたそうですがもとより罪も無い民に手を出すような獣に墮ちたモノ。

この大乱で生き残つてしまつてもあれですからね。

人間になら情はわきますけどいまさら獣が何匹喰われたかなんて気にしてなんていられませんで。

残つた二万の黄巾兵には派遣した明埜からの指示により皇甫嵩目掛けて突撃かけるようにしています。

あの子はやり方がえぐいですからねえ。

きつとえぐり取るようにねちねちと追い詰めるでしょう。

いくら雑兵で、普通に戦つたら負けてしまつ者達でも敗走している軍への奇襲ならおそらくは皇甫嵩の首も夢ではないです。

彼は人を率いる才はあつても、武を奮う才はそこまでも無いと聞きますからね。

それに残つた獣共残り二万も敗走しているとはいえ皇甫嵩の軍。

それも数も官軍が勝つてますからねえ、かなり間引けるんじゃないでしょうか。

一石二鳥ですね、おいしいおいしい。

「旦那」

その声は明埜ですか。作戦はどうなったので…。  
そう思い明埜の声が聞こえた所へ顔を向けた。

体が凍り、世界が色あせた。

歯を噛み締めた明埜を姿があつた。

服は急いでここまで来たのだろう、汚れており、所々ほつれている。  
目を見開く。

これはあきらかに何か想定外のことが起こつたと見ていいだろう。

「何があつたのだ」

隣に控える美須々がこの場の誰もが思つたことを追求する。

「  
・  
・  
・  
作戦八失敗シタ  
」

## 第十話 さくらさくら（後書き）

最後までうまく行く美談は役者が踊る舞台だけだ。

戦場に美など無く、あるのは血と鉄のみである。

だからこそこの世でもっとも素晴らしい舞台は戦場なのだ。

え？別に誰が言った言葉でもなく作者の妄言です。

作者が書く主人公は決して強くはなく、幸運でもありません。

だからこそ自分で何を書いているのか全く解らない。

大丈夫か私。

そして花粉症がやばい。

## 第十一話 されど黄天は龍と踊る（前書き）

結局のところ、最悪の不幸は決して起こらない。  
たいていの場合、不幸を予期するから悲惨な目に会ったのだ。

くバルザックく

## 第十一話 されど黄天は龍と踊る

「馬鹿な・・・順調に事が運んでいたではないか。全てが主にの思い通りに」

静寂が美須々の声により破られた。

おそらく誰もがそう思っている。

誰もが勝利を疑わなかった。

誰もがこの策は成功すると思っていた。

それは私自身も例外では・・・あ、それフラグだったか。

さっきまでそれっぽいこと言いまくってた気がします。

逆に立てすぎて何もないとかだったら良かったのになあ・・・。

うまくいきすぎると碌な事がない。

思わず頭を力任せに掻き篦ります。

ああ、滑稽ですね。

まるでピエロじゃないですか。

美須々が信じられないと明埜のことを見ている。

・・・ですがこれはもはや起こってしまったこと。

今はそれを否定するよりも現実を見て行動すべきです。

「全テハウマク事が行ツテイタヨ、旦那ノ読ミ通り皇甫嵩ガ来タ。  
ソレニ奇襲ヲカケテ、アノママ行ケバ全テガウマクイッテイタ・・・」



「ならば、ならば何故!？」

美須々が声を荒げる。

おかげで周りの兵にも動揺が広がっていく。  
我を見失っていますね。

これは減点1です。

「美須々」

落ち着いた声で、諭すように呼びかけます。

「あ……申し訳ありません。」

私の声により正気を取り戻しましたね。

将たる者がその有様では兵にも動揺が伝わります。

さらに混乱に拍車をかけてはなりませんよ。

冷静に物事を今は見極めなければなりません。

それが伝わったのか美須々は齒を噛み締めて激情に耐えているようです。

「続きを」

私が促すと明埜は口を開いた。

「劉備ダ。劉備ノヤツガ参戦シテキヤガッタ」

劉備え・・・。

・・・そうですか。

盲点でしたねえ。

忍びをこの度の戦のために彼女たちから一時的に外したのが不味かつたか。

劉備は拠点を持たない。

だからなおさらのこと注意しなければならぬというのに。

・・・失態です。

私達が反乱軍のために起こる問題。

それはこのような突然の乱入者だ。

国として一国と戦うのとは違う。

黄巾党は常に多の者達と戦う。

もちろん情報を集めていて入るのだがどうしてもこのようなことは起こってしまう。

特に劉備のような根無し草には目を常に光らせるというのは決戦に向けて動く私達には無理なのだ。

国という形態ならば人材を育成、つまり間諜の数も増やせるのだが・・・。

まあご存じの通り私達以外はあれなんですよね。

余裕もないですから。

・・・っらいですね。

黄巾党という反乱軍の立場は。

〔明埜 過去視点〕

旦那の言つとおり無様に撤退中の將軍様がいらっしやったようだ。  
これは手厚いお出迎えとしてびっくりな宴を開いてあげるべきだろ  
うなあ。

それこそ喜んで思わず滑稽な踊りでも踊ってくれるような、ね。

頬が歪んで含み笑いを漏らす私に怯えてか、周りの黄巾党は一步彼  
女から離れる。

さてと、そろそろ行くかねえ！！

手を高らかに掲げる。

そして

目の前の官軍に向けて振り下ろす。

それを確認した者達がこぞって官軍に突撃した。

銅鑼の音が当たりに響き渡る。

おおっ、いい感じに混乱しているな。

そりゃあここまできりゃ安心つつう所で敵さんがでてきたらそんなるわな。

中心にいる将はまとめ上げようと必死になっているがこの状況をとっさにまとめ上げるのは神様でもない限り無理だな。

あ？神なんざ信じちゃいねえよ。

つまりあいつらは終わったつつうこった。

右往左往している軍へ食らいつく獣達。

彼らに陣形などというものはない。

ただ思つがままに貪り喰らうのみ。

普段のあの官軍ならば負けるだろうがここまで仕立て上げられた状況ではただの獣にすら蹂躪されるだろう。

さあて、高みの見物と行くかね。

俺は見渡しがいい場所へと移動すると、腰を下ろした。

あんな危険な乱戦状態の所にはいたら命が足りない。

旦那もこいつらはどうなってもいいがお前達は無事に帰れとってたしな。

自らが認める主の、子供に注意を促すような顔を思い出してた彼女は、苦笑をしながら戦場を見る。

さすがは名将が率いる精強な軍。  
がんばって耐えてはいるねえ。  
あくまで耐えているだけだな。  
そこに穴が開いた船と同じだ。  
どんなにあがこうがいずれかは沈む。  
沈む瞬間が面白いんだよなあ。

楽しそうに笑いながら終わる時を彼女は待ち望んでいた。

だが。

風が変わった気がした。

なんだこの感覚は。  
体が震え、全身に冷水をぶっかけられたような冷たさと不快感。  
汗が額に浮かび、包帯にしみていく。  
明埜は辺りを見回す。

少なくとも俺にとってはいい風じゃない。  
不愉快だ、不愉快きわまりない透き通るような風。  
こんな嫌な風は……畜生、なんだってんだ。

何が起こりやがった？

どこだ。

そう思い目を懲らすと、見れば遠くから土煙が見える。顔を前に突きだし首を出来る限り伸ばす。

軍だ。

おこぼれをもらいに来た同胞か？

いや、ここまでくるのか。

他で手一杯のはずのやつらがわざわざ援軍に来るなんざありえない。

更に目をこらす。

頭に俺達の目印である黄巾の布が付けていない。

となるとやはり敵か。

官軍か？

旗は……。

おいおい。

「クソツタレガ・・・最悪ダ」

思わず声に出しちゃった。

くそつたれた風に靡く旗の文字はさらにくそつたれた字だ。こいつはなんの冗談だ？

『劉』

劉の性でここいらで軍を率いる奴らなんざこの大陸には一人しかいない。

あの旦那が危険性を曹操と同様に扱うほどの将。

劉備

そう解った瞬間、私は高みの見物を止めて戦場のご真ん中に向けて崖を駆け下りる。

土埃が体中をなめ回すがそんなこと気にしてる暇はない！！

あいつらはバケモノだ。

倍以上の敵を策と武によつて押し返す。

それも義勇軍だぞ、訓練期間も長くはねえ農民を実戦投入して勝ち続けるなんざ馬鹿げてやがる。

あいつらの将がこの戦に参戦すれば天秤が官軍の連中に傾く。

そうなる前になんとしても敵将を討ち取らねばならない！！

事情は解らないがこの軍の将達に旦那はいい顔をしていない。

ここまで仕組んでまで旦那はあいつらの首を望んでいる。

ならばそれを持って行ってやりてえ！！

旦那の配下として、将として！！

戦場を走る。

旦那は怒るだらうなあ。

いざというときは逃げろつつたし。

ただどな、せつかくここまで旦那が作り上げたものをぶち壊されて  
たまるかよ！！

すれ違いざまにこちらに向かってきた兵の首に手裏剣を投げる。

不愉快な音と共に首に手裏剣がそそり立ち兵は絶命。

崩れ落ちる兵を足がかりにして飛翔する明埜。

見れば既に劉備の軍が交戦中。

遠くに『劉』の旗がいらつかせるほど自己主張してやがる。

しかも黄巾党を押し返してきてる。

まだ押し返してきてるぐらいだが、いずれはその壁すらも決壊して  
官軍の将を討ち取る機会を逃すことになる！！  
それだけは・・・

「（ソレダケハ旦那ノタメニモ許スワケニハイカネエンドヨ！！）」

走る。

走る。

そしてついに彼女は見つけた。

馬に乗り黄巾党と自ら戦う気色が違う人間を。



すぐさま袖から手裏剣を出し、投擲その手裏剣は敵の首へと迫る。死の軌道を描きながら飛翔する死神に将は気が付く、が。気が付いたみたいだがおせえ!!

既に手裏剣は官軍の将がいかなる行動でも避けられない位置にあった。

絶望に将の顔が染まる。

「（獲ッタ!!）」

「はああああああ!!」

だがその手裏剣は突如現れた黒髪を横に結んだ少女によってはじかれた。

「ツツツツチイ!!」

再び数本の手裏剣を投擲。

それは黒髪の少女へと迫る。

だがそれを少女は難儀しながらも全てたたき落とした。

だがここで黒髪の少女は気が付く。  
自分へと向けられていない二本の手裏剣が彼女の横を通り過ぎたこ  
とに。

そう、黒髪の少女へと向けられた数本は囷、真の目的は己の主が望  
む首のみ！！

二本の手裏剣が官軍の将へと飛来。

官軍の将はまさか自身に向けてとは解らず剣を振ろうとするが既に  
時は遅い。

彼の首にそれがそり立つかと思われた、が。

「にゃああああああああ！！！！！」

小さき体の全身をばねにして飛び込む赤き影。

それはその二本の手裏剣を長き槍にてたたき落とした。

着地。

その小さき少女は赤き髪、その身長にあわぬ巨大な蛇矛を持ってい  
た。

明埜はその容姿、武器から彼女たちの正体が解った。

それと同時に彼女は自分の不利に齒を噛み締める。

黒髪の少女は関羽。

赤髪の少女は張飛。

劉備の双壁である誉れ高き武人。

「愛紗！！その包帯なのだ！！」

「ああ、行くぞ！！」

「（本当ニクソツタレガ）」

明埜は実力では彼女たちに勝てないと理解している。

琉生、美須々に正面から勝てない自分ではとてもじゃないが関羽と張飛の双壁を抜くことは出来ない。

理解している、しているのだがそれを認めたくはなかった。ここまで・・・ここまで来てと。

彼女は決断に迫られていた。

だがその答えはそもそも一つしか存在しない。

どんなに悩もうが、どんなに苦しもうが選択はもとより一つしかないのだ。

だからこそ一刻も早く、この場を逃走しなければならない。

その現実に歯が砕けそうなほどに噛み締める。

二人の猛将が明埜に迫る。

だが明埜はそこらにいた官軍の兵を体勢を崩して掴み、迫る関羽と張飛に投げつけた。

「な！！」

飛来する自らの配下。  
まさか味方を切るわけにもいかず二人は素早く二手に分かれる。  
その間に張飛には手裏剣の応酬を浴びせ、  
またも近くにいた官軍を投げつける。

「にやあ!?!」

手裏剣を避けたために体勢が崩れていた張飛は転倒。  
激しい土煙を上げて転がる。

「鈴々!!」

思わず愛する姉妹へ声をかけるべく振り向いた関羽。  
だが明埜はその隙を逃さない。  
またもや袖から手裏剣を取り出し投擲。

その隙に明埜は逃亡するべく走る。

関羽がその手裏剣を捌き、殺さんと見れば目の先には既に誰もいなかった。

走る明埜の口は血で濡れていた。  
敵からの傷ではない。

己の歯で唇の皮を食い破っていた。  
目には怒り。

「ツクソツタレガア！！」

異質な声が戦場に響き渡る。

その一刻後。

その場に黄巾の布を巻いた者は誰一人として立ってはいなかった。

「波才 side」

「旦那・・・スマナイ」

跪く明埜の姿は頼りなく、肩は震えている。

明埜は私の部下であり、明埜にとって私は主だ。

だが彼女が私に抱く感情にまた別の感情が含まれていることを私は知っている。

それは必要、求められる存在でいたいという思い。

彼女の声は異質だ。

初めて私と会った時に彼女から発せられる怨嗟の声を聞く限り、彼女は生まれてから常に疎まれ続けて来たのだろう。

そして彼女が私に向ける目の中に親への愛情を求めるようなものを感じる事もあった。

私は馬を下りて明埜へと近づく。  
唇を噛み締め、血を流した跡があった。

悔しかったのだろう。

信じられたのにその求めを果たせなかったことが。

怖いのだろう。

果たせなかったことで見捨てられ、また一人として生きていくことが。

光を知ってしまった人間はもう闇には戻れない。

例え闇に落ちても光を求め続ける。

私は明埜の頭に手を置き撫でた。

明埜はとても驚いた表情を浮かべて私を見る。

「よく・・・無事に生きて帰ってきてくれましたね」

「スマナイ・・・」

「貴方はよくやりました。この件はどうしようもなかったのです。それに彼らに多大な損害を与えたのは明埜達のおかげなのですよ？必要以上の戦果を求めるのは欲が深いことです」

私は明埜の頭を撫でる。

彼女は目を伏せて震えていた。

私はその震えが収まるまで彼女をなで続けた。

全てが終わわり、私は今陣幕の中にいる。

明埜は休ませている。

誰も彼女を責める者はこの隊にはいないのだが……明埜自身の気持ちの問題なのだろう。

そればかりは例え私が何を言おうがどうしようもない。

明埜が自ら解決するしかないのだ。

劉備は下手に手を出すのは危険と感じたのか私達の所には進軍してこなかった。

いくら敵を討ち果たしたとはいえまだ私の部下達はあの場にはおらず、兵は万全。

そこに感じるものもあつたのだろうか。

それにどうやら偶然に居合わせてしまった可能性が高い。

聞けば劉備の行動にここへ来るといふ情報の類はない。

つまり偶然。

だとしたらただでさえ無かつた怒りのやり場をさらに失ってしまう。明埜は良くやった。

戦果は十分だ。

官軍は多大な被害を受け撤退し、将一人を討ち取った。

それに厄介者を全員殺してくれたと考えれば劉備に感謝すらしてもいいのかもしれないが。

「ハア・・・」

私はため息をつきます。

戦に勝って勝負に負けた気分ですよ。

おそらく彼を討ち取れば黄巾党もまだまだ戦えた。

私は黄巾党の終わりを見たくは無かったのかもしれない。

最後に負けてしまうという運命に抗いたかったのかもしれない。

311

天には蒼天が輝くか。

そう思い空を眺める。

「（この世界にも黄天は昇ることはできないのか）」

そう思う私の目から涙がこぼれ落ちた。



「今私は何を思った」

思わず自分の口に手をかぶせる。

今流した涙の意味に気が付いた私は呆然と立ちすくんだ。

## 第十一話 されど黄天は龍と踊る（後書き）

誰か……作者にシリアスを、文才を書く力をください。  
万年国語がB（中の下）な作者はいつぱいっばい！！

そして忙しい……すごい忙しい。

ただでさえ小説の皮を被ったこの作品がもはや作品とも呼べぬ異物  
に変わりつつある頃、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

私は花粉症でノックアウトです。

秋とか道に生えるブタクサ（花粉の素）を見るとモヒカン兵並みに  
燃やしたくなります。

あれ道に麻薬放置してるのと同様に危険ですって、いや本当に。

第十二話 天下大吉（前書き）

私たちが恐れなければならぬ唯一のことは、恐れそのものである。

〈フランクリン・デラノ・ローズヴェルト〉

## 第十二話 天下大吉

「・・・クソツタレが」

官軍が攻めて来やがった。

だがなあ、そんな腑抜けきった愚か者共に負けるほど俺らは弱くはねえ。

潁川郡にてその官軍を蹂躪し、勝利を掴み取った。

さらに俺達は長社に展開された官軍を追い詰め、有利に戦場を進めていた。

包囲も完了。

後は殲滅するだけだ。

時代は黄巾の世を求めている。

黄天は既に天へと昇り、蒼天は消え去った。

我らの時代が来るのだ。

全てはうまくいくはずだった。

だが気がつけば敗走しているのは己だ。

あと少しでこの戦も勝利する。

仲間の誰もがそう思っていた。

だが急に風向きが変わったと思った瞬間、官軍によって火計が行われ、大敗した。

天は・・・黄天を望んでいるのではないのか？

なぜ、なぜ時代の寵児である我らが今こんな有様で敗走している？

周りを見ても仲間の誰もが傷つき、顔には疲労が浮かんでいた。あの勝利を確信し、笑っていた仲間の半分以上が既に死んだ。歯を噛み締める。

惨めだ。

惨めだ。

惨めだ。

悔しさに身を震わせていた、その時。

ジャーンジャーン

銅鑼の音が辺りに響き渡る。

そして無数の兵がこちらに突撃してきた。

だが官軍からは既に逃げ切ったはずだった。

だとすれば別の敵か!?

「つちい!! あいつらだけじゃ無かったってのか!?!」

旗には『曹』。

見える将は周りの兵達よりも小さいがその目には言いよつのない力がある。

戦って打ち破りたいが士気もなく、そもそも戦える状態ではない。逃げるしか彼らには手はなかった。

「お前ら退け!! 退くぞ!!」

どこに退くというのだ。

既に自分たちの皆は落とされ、兵糧もなく、身を落ち着ける所はない。

それでも逃げなくては殺される。

俺は将だ。

あいつらが一般の黄巾の兵ならまだしも俺を生かす義理はない。

身を翻し、逃げようとする私の腕に『曹』の軍から飛来した弓矢が突き刺さる。

「っぐあー!!」

背後を見るとそこには髭をはやした指揮官らしき男が鷹のような目で弓を構えていた。

普通の人間が狙い撃てる距離からは余りにも遠い位置からの射撃。

「（あの遠さから俺を射貫くだど!?!）」

馬を走らせながら矢を抜き取る。

傷は軽くない。

今すぐあいつを殺してやりたいが、近づけば矢で殺される。

それ以前に満足にこの傷では戦うことは出来ない。

俺は逃げた。

ひたすら逃げた。

あいつらはよっぽど俺の首が欲しいらしい。

俺がどこまで逃げても追ってくる。

数十キロ先の陽?にまで敗走する頃には、仲間は数百名にまで減っ

ていた。

だが俺もここまでらしい。

先に見えるのは俺達の火計を使って大勝利をしゃがった官軍の旗。その数は数万。

対する俺らは数百名、それもこの傷つき、疲労困憊な有様では勝てることはない。

逃げるのにも限界が近づいていた。

「黄巾党の波才も落ちぶれたもんだ・・・」

腰を上げようとするが、焼けるような痛みで顔を歪める。

肩の傷は化膿し、激痛が走る。

剣すらまともに握ることが出来ない。

当然治療などして暇もなくここへ来た。

逃げて、逃げて、逃げて来た。

だが、それももう終わりだ。

数万の官軍の軍勢が雪崩れ込む。

まるで蟻を水の濁流が飲み干すが如く仲間が討ち取られていく。

一人、また一人。

弓矢で、槍で、剣で。

自分の血にまみれて倒れていった。

怪我を負っていない方の手で剣を握り戦う。

既に仲間の姿は官軍の兵に飲み込まれて見えない。

それでも俺は戦う。

一人だろぅが傷を負っていようが知るか。

家族を奪われ、平和な世を奪われ、その上自分さえもこいつらには奪われるのか。

だとすればなんて。

なんて。

なんて惨めな最後なのだ。

一人の官軍の兵士の剣を払いのけ、斬りつける。

その為に足を踏み込んで前進に力が入る。

ツズキ

痛みが傷ついた腕から全身へと伝わり波才の動きが一瞬止まり、隙が出来る。

ツグサ！！

その隙に官軍の兵が俺の腹に槍を突き立てた。

痛いなんてものではない。

燃えさかる火のような激痛が体を駆け巡る。

「うおらあああああああつああああ！！！！！！！！！！」



その槍を切断し、その兵士に剣を突き立てる。

ツグサツグサ！！

体が仰け反る。

顔を下に向けるとそこには槍の先が胸から生えていた。

粘着質でどろどろとしたどす黒いものが服を赤く染めていく。

ツグサツグサ！！

更に数本の槍が俺へと殺到した。

剣を振り上げようとするが腕が上がらない。

声を張り出そうとするが胸から込み上げてきた死の濁流によってせき止められる。

戦場の喧騒がどこか遠くに聞こえる。

だんだんと視界が霞み、暗くなっていく。

冷たい。

寒い。

こんな所で俺は。

死ぬのか？

「ふ……ざけんじゃ……ねえ!!」

虚ろになっていた目に命の強き灯火が灯る。

自分の動きを止めている槍を一刀のもとに切り落とし、兵を吹き飛ばす。

周りから自分を見る兵士達の目には驚愕。

目の前で消えかけていた炎が突如全てを巻き込もうと燃え上がったことに対する恐怖。

倒れ込む兵士に目掛けて剣を振ろうとする、が。

「ぐぼふああ」

口から大量の血液。

込み上げる濁流に抗いきれずはき出す。

剣が力を無くした手からこぼれ落ちた。

そして自分の体も後ろへと崩れていく。

地面へと落ちた衝撃が体を襲う。

だが既にあれだけ疎ましいと思った傷の痛みも、今負っていた火の  
ような焼ける痛みも。

疲労も何も感じてはいなかった。

ただ、冷たく、自分の意識が闇へと落ちて行くのを感じる。  
炎が一瞬の輝きを見せて消えていくのを感じる。

俺の周りに恐る恐る兵士が近づく。

立ち上がるうにも目が霞み、もはや指一本すらも動かせない。  
それでも歯を食いしばり、手に力を戻そうと足掻く。

足掻く。

足掻く。

そんな波才をよそに官軍の兵士共は俺が動けないのを確認すると。

ツグサグサグサグサグサグサ

各々の武器が俺の体に吸い込まれていった。

体が不自然に飛び上がる。

吸い込まれた槍が体の臓器を突き破り、蹂躪する。

声を上げようとするも肺が犯されているために声が出ない。

虚しい、弱々しい消えるような息が口から漏れる。

消える。

俺という存在が消える。

闇へと落ち行く意識の中で

俺は

天に蒼天が輝いているのを見た。

「・・・」

目を開けるとそこには陣幕の天井が見えた。  
体には大量の汗。  
体を起こし、背を伸ばす。

何か気を紛らわすために楽しい事思い出そうとするが、体に貫かれた刃の感触を思い出して背筋が寒くなった。

最悪の目覚めです。

「ハア・・・」

あれは私が黄巾軍として戦ったときの記憶。  
最近よくそれを見る。

理由はまあ・・・あの皇甫嵩との戦闘ですかね。  
あれ以来よくあの頃の夢を見ます。

そしてそのどの夢にも空に黄天が輝いている。

あの戦で自分で解った。

私は天和様達のために戦っていたのだと思った。

だがそれだけではない。

負ける、負けると解っていても私は黄巾党に滅んで欲しくはなかった。

二つのものに気を取られていた。

二つのものを望んでいた。

張角様の黄巾党。

天和様達との平穩。

馬鹿馬鹿しすぎる。

どう望んでも、思ってもその二つは相容れず、片方しか手には入ることはない。

馬鹿だ。

私は馬鹿だ。

だがそんな愚かな事を切望し、叶えようとした。  
その結果があれだ。

あの時心の迷い・・・いや、違う。

私はまだ認めたくないのだろう。

認める、私は怖かった。

あの二人の将軍、皇甫嵩と朱雋が恐ろしく、怖かった。怖いが故に自らを悪鬼という仮面で覆い隠し、戦った。

朱雋を討ち取った瞬間の喜び、あれは歓喜。

武人としてなどそんな崇高なものではない、恐怖として心にすくっていた人間を殺した事による歓喜。

あれから更に時はたった。

黄巾党はもう死に体だ。

体を刃に犯され、蹂躪され、絞り尽くされた。

罪人の報いだ。

弱者を喰らい、平和を喰らい、ぬくぬくと肥えた愚か者達を許すほど人は馬鹿ではないのだから。

だがそんな、そんな豚を愛おしく思う自分。

吐き気だ。

吐き気がする。

余りにも救いようが無く、愚かで。

なりたくなかった者に知らない間になっていた。

力任せ側にあつた机に手を振り下ろした。

机が砕け、破片が辺りに飛び散る。

傷がふさがった己の手を見る。

朱雋はこんな愚か者に殺されたのか。

最後まで武人として戦い、武人として散っていった者に私は邪念を

持って殺した。

自分を許せん。

何故殺したことに後悔をしている。

それならば戦わなければ良いではないか。

戦わなければ後悔することなど無かった。

それなのに私は、自分で決めたことにすら恐怖し、悔やんでいる。

なんと、なんと自分は滑稽で愚かで救えないのか。

私はなんだ。

この先に何を望む？

私は何がしたい？

解らない。

私の望みとは何か。

私を守るべき者は何か。

私はなんのために戦っていたんだ？

殺し、殺され、生きながらえたつもりがいつの間にか自分が殺されていた。

私は何を殺せばいい？

何を殺せば自分が自分で在り続けられるのだ？



「主！！何があったのですか！？」

先の不可解な音に気がついたのか美須々が額に汗を浮かべ陣幕に飛び込んできた。

「！！！」

彼女の目に入ったのは修羅の如く義憤と憤怒が心に渦巻く自身の姿の姿。

禍々しく、歯を噛み締めて血の流れる手を握る様は悪鬼のような姿であった。

「何でもないですよ・・・」

悪鬼が、いや、主が口を開く。

何も無いわけがない。

見たところ誰かが進入し争った形跡はない。

ならばこれは主が起こした所業。

いつもの主とは余りにもかけ離れた様子。

あの戦以来主の調子がおかしいのは知っていた。

だがまさかここまでとは。

だがそこで波才の目を見て美須々はあることに気がつく。

とても悲しく、許しを請い、激痛に身をよじるような目。

今の主は泣いておられる。

そう思った美須々は気が付けば

「・・・」

その場に跪いていた。

「どうしたのですか？」

そう話す主の目には未だ悪鬼のような抜き身の剣の鋭さがある。  
だからこそ私がやらなければ。

私は学は無い。

戦うことしか脳が無く、字すら解らず、兵法や知識などは何も知らない。

だが、それでも解る。

今ここで主がその道に行ってしまうことは誰も望まない。

天和様達も、私も、明埜も、琉生も、主自身でさえも望んでいない。  
止めなくてはいけない。

今すぐ止めなければ、時間を待たずして変わる。

波才という人間が、道が、主が、私達が。

私には明楚のように言葉で語ることは出来ない。  
言うべき、語るべき言葉を知らない。

だから。

「主、命令を」

「・・・」

その言葉に私は美須々がいったいどうしたのか解らなかった。  
何故彼女は命令を私に望む？

「私は主と共にあり。主が迷うのならばそれは私はその迷いを断ち  
切りましょう。それが主の害となるならば私は主の希望すら断ちき  
りましょう」

その言葉を聞いて私は気がついた。  
彼女がいつもとはまるで違う覚悟を決めたことに。

「主が万の屍を築く道を行くならば私はその道を進みましょう。主  
が誰かの死を望むのならば私がそれを殺しましょう。主が悪鬼と成  
りて道を進むのならば私も悪鬼と成りてその道を進みましょう」

そして決意の目で私を見た。

その目は揺るぎない覚悟、そして青い大空のような奥深さ。  
だがとても悲しく、見ていて虚しくなる。  
なんだこれは。  
なんなんだ。

「主、命令を。私は主と共にあり」

・・・。

ああ、そうですか。  
私はそんな姿でしたか。

貴方にそんなくたらない覚悟を決めさせてしまつほどの醜さと醜悪  
さがあつたのですか。

心が清んでいく。  
渦巻く思考が穏やかな湖へと変わる。

やっぱり私は馬鹿ですね。  
彼女の覚悟のように私も覚悟が決まっているじゃないですか。  
この世界に来て、黄巾党ができるずっと前からその覚悟を決めてい  
たじゃないですか。

惑わされた。

過去の幻惑に。  
惑わされた。  
過去の誘惑に。  
惑わされた。  
己の恐怖に。

「私はあなた方を守りたい、あなた方を救いたい、あなた方の望みを叶えたい、そのためならばこの波才、命を捨てる覚悟ができています」

自分が波才としてこの世界で生まれた言葉。  
見えなくなってしまうものを再び見つけた。

「美須々」

「っは!!」

忠義の臣が私を見上げる。  
私はふっきれた笑い顔で言った。

「生きて・・・生きて帰りますよ。貴方には天和様達のボディードになってもらわなければ」

美須々は笑う。

彼女の主が言った言葉の意味は解らない。

だが主が伝えたい意志を理解してくれた。

嬉しくて笑う。

彼女が望み、愛してやまない自らの道がそこにある。

その道に自分がある喜び、主君と歩めるといふ喜び。

ああ、この人が私の主だ。

「御意」

天に黄天は昇らない。

昇ることは許されない。

ただど存在している。

ここに在る。

確かにある。

だから・・・。

私は笑った。

波才として、波才であるとして。

「黄天當に立つべし」

天下大吉なり。

## 第十二話 天下大吉（後書き）

前回感想が多くて嬉しくて気分が乗ってしまい、ついつい熱を入れて返信したために書きだめ補充できなかった味の素です。楽しかった、後悔はしていない。

花粉症は全人類の敵ですね。

でも経済効果もあるよと友達が言っていました。が花粉症患者じゃない者にこの苦しみは解らないんだろっなあ……。

そして時間が無い。

文才もない。

つまりどうしようもない。

この三段論法もどきをどうしてくれよう……。

そして疲れているのか予約投稿じゃなくて普通に投稿してしまった。次回からはいつも通り12時からやります。……ちよっと休んだ方がいいかもしれない。



第十三話 朝が来るまで待って（前書き）

四十九年

一睡の夢

一期の栄華

一盃の酒

上杉謙信の辞世の句

### 第十三話 朝が来るまで待つて

さっそくですが。

もう黄巾党が減びます。

思ったよりはもった方ですかね。

そりゃいくら私達がんばったってそれは一部であり、氷山の一角です。

周りの黄巾党の皆さんは次々と敗北していきました。

私達がいくら勝とうと他の皆さんが勝たないと意味ないんですよ。

それに国は無理としても集団として形態を保てない時点でもう黄巾党は終わりなのですよ。

募るならともかく、募ってもいないのに勝手に増えていく兵士達をどうしろと？

どんなに優秀な人間でもそれら全てを知りて行動するのは無理です。

それに劉備やら孫策やら曹操さんに普通の農民上がりでなんの訓練もしてない人たちに勝てと言う方が酷です。

というか演技補正付きの孔明とか関羽とか呂布とかに勝てる気がしないのは何故だろう？

三国無双の連中が来なかつただけマシと思うべきか……。

あ、でも呂布が黄巾党三万切りしたそうです。

三万かぁ……なんだか重火器使っても勝てる気がしません。

呂布止めるのに核で足りるだろうか？

少なくとも英雄達相手になんの後ろ盾もなくよく持ちましたよ。私だってもうやりたくないですもの。

正直、曹操さんと会った瞬間見定めることができましたが、同時に回れ右して逃げたくなりました。

だってあれです。

後ろからとんでもオーラ出てましたよ？

無理無理、明埜がお淑やかになるぐらい無理。

グサ

・・・最近明埜が心の声を読んでる気がしてならない。

もう人の域越えてないかな。

あれか、ついに異常になったってか。

てことはCOCOじゃなくてくじらだったのかあ。

そんなこんなで私達は本陣に帰還しています。

正直これ以上戦うのは無駄でしかありません。

「……………とうのが現状です。おそろく、もうすぐここもばれちゃ

うでしょうね」

久しぶりに会った天和様達は元気そうでした。  
一号達・・・約束を守ってくれていましたね。  
ありがとうございます。

ですがやっぱりお顔は優れませんね。  
そりゃ私が今死刑宣告したからなんですけど。  
でもやっぱり美人さんには笑っていて欲しいですね。

「・・・私達達、死んじゃうの？」

不安そうな目で見つめてくるのは地和様。  
いつも元気な彼女もこの時ばかりは暗い顔です。

「普通に考えれば死ぬでしょうね」

人和様も何か諦めた顔をしています。

「・・・やっぱり、私のせいで」

天和様も。

もうあれです。

こんな空気はいやですね。

さつさと進言しましょう。

「そうでしょうね。張角様達はここで死ぬでしょう」

「「「・・・」」」

「そ、そんな！？旦那！！どうにか出来ないんですかい！？」

「それはできません。張角様達はもはやこの大陸の敵。例え逃げたとしても地の果てまでこの国の将達が追い続けるでしょう。張角様はどうしてもここで死ぬ必要があるんですよ」

そりゃ大陸を巻き込んだ大乱。

中には罪もない者達も殺されましたし、その大乱の大本が生きているってのは示しがつきません。

それ以前に飛躍の時を待つ龍がそんなおいしいモノを食べずにいられるわけがない。

まあ、食べたモノが何であろうと気にしないでしょうけどね。

龍はなかなか悪食ですから。

口に形だけでも入れば何喰ってももんく言わないでしょうから。

「・・・でも、張角様達が死ぬのであって天和様達が死ぬわけでは  
ありませんよ?」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」」

「そうか、そう言う手が・・・」

おや? 人和様は解ったようですね。

「波才!?!? どういうこと!?!?」

「そ、そくだよ波才さん! 私達が死んで死ぬわけでもないってどう  
いうこと?」

「そうですね・・・私が説明ばかりするのも疲れますし、人和様  
がどうやらお解りのようですが」

「本当なの人和!?!?」

「姉さん落ち着いて。ようするに私達は死ななくちゃこの乱は終わ  
らない。それは解る?」

「うん、でもどういうことなの?」

天和様が不思議そうに顔を傾ける。

え? 何このかわいい主。

は、破壊力がはんばない!!

我が友が「わふう」とか「あうう」とか訳解らないことを最強だ！  
！とか言ってたのを白い目で見てましたけど今なら解る。

これがジャパニーズ「萌え」。

た、耐えるんだ波才。

今はシリアスだと言っているだろう。

あ、無理かも。

だって鼻から溢れ出る忠誠心が

「「「グハア！！」「」」

一号達が血を吐いた！？

うわぁ幸せそうに倒れている。

いい顔してるだろ。萌え死んでんだぜ、こいつら。

たぶん悔いはないでしょう。

私だってもし彼らだったとしたら無い。

むしろ本望。

「つまり、私達が死んだことにするっていうこと」

「そっか！！私達のことを知っている人たちは少ない」

「それに出回っている手配書も別人みたいなんだけど・・・波才さん、私はあんな酷い顔じゃないよ」

三人からは無視されてます……。  
なんかかわいそうでなりません。

つてか天和様の顔が阿修羅になってるんですが。

錯覚だよね？なんか牙生えてるけど錯覚ですよね？

これあれですか、まこ 死ねじゃなくて波才死ねってやつですか。  
ていうか今気がついたけれど天和様の声、コトノ 様に似ていませ  
んか。

死ぬ……。このままじゃ間違ひなく死ぬ。

「天和様！！」

そういつて私は天和様の両手を掴み、天和様のお顔に自分の顔を近  
づけます。

こうなれば恥など知らない！！まず生きる！！生きなければ！！

「／／／！？」

「申し訳ございません……。この波才、この時のためにと天和様か  
ら余りにもかけ離れた醜い姿に手配書を書きました。本当は天和様  
の美しくかわいらしいお姿を大陸中に知らしめたかったのですがそ  
れでは天和様が死んでしまいます。いくら天和様達を守るとは言え



美しい天和様を醜く描いてしまったのは事実・・・この波才、その多大な罰を受けましょう！！」

そう言っつて目を伏せる。

ここまで謝ればきつと解つてくれるはず！！

「うん・・・そこまで言われたらしょうがないかな／＼」

つく、まだ顔が赤いというのは怒っているのか！？

意外と女の子は根に持つからなあ・・・財布が痛い食べ物で気を直してもらうしか

グリッ

「痛っ！？」

何ですか！？

今手に地味な痛みが・・・

「ふん・・・お姉ちゃんにばっかりそんなこというんだ」

鬼がいた。

なんで！？なんでこんなことになってるの！？  
なんで地和様までそんな目で私を睨むんですか！？  
それで手をねじるのを止めてくれない。  
すごい地味に痛い。

つくー！なんだか解りませんが取り合えず地和様を

ツガ

「って今度はなんですか！？」

足にももの凄い痛みが！！

確実に弁慶の泣き所やられました。

こんなの確な一撃いつたい誰が

「・・・」

人和様が怒った顔でバリバリ睨んでいました。

え、なんで一番冷静でまとめ役の人和様まで怒ってるの？

先ほどまで普通にしていたじゃないですか。

それに手配書の件は知っていましたよね？

描かれていたのは天和様だけでしたよね？

「ふうん、なんで人和まで波才をやるの？」

「・・・なんだかムカつてきたから」

「そうかあ・・・人和も敵ってわけね」

「・・・」

・・・何が何だか解らない。

思わず某甘党探偵顔になってしまったけど・・・。  
なんで？ナンデこの人達が急にこんな険悪な雰囲気になっちゃって  
るの？

天和様に助けてもらおうと目を向けると夢心地でぼーっと立ったま  
まです。

え？私死ぬん？

「ま、まあまあそれよりも話すべき事が」

「波才（さん）は黙ってて！！」

「・・・はい」

あれです。

女の人に勝てる男なんていません。

下手したら曹操さん以上のオーラが今感じましたよ。  
だれか・・・ホント助けて。

「主、明埜からの報告が・・・ってどうなされたので?」

美須々ナイス!!

貴方は今の私にとってキリストやブツタ以上の存在ですよ!!

「「「つち」「」」

うわゝ舌打ちしましたよこの子達。

ていうより人和様? 貴方キャラ変わってますよ?

ファンの皆さんが見たら悲しみ・・・一部喜びそうな人もいそうな  
気がしますけど腹黒アイドルって需要無い・・・あれ? ある気がす  
る。

私は何に悩んでたんだろう。

「もしや私、何か粗相を」

「いえ、大丈夫です。それよりどのような報ですか?」

私がすごい大丈夫です。あとでいいこいこしてあげましょう。

「っは、各地で曹操、劉備、孫策などの将がここを見つけたようで軍備を整えている模様。おそらく明日の夕方にはこちらに到着のこと」

おやおや・・・一刻の猶予も無いようですね。

天和様達も目が覚めたようで。

よかった・・・あのままの状態だったらたぶん私の胃がやばかった。

「一号、二号、三号」

「っっは！？俺達は何を（なんだな）」「」

「取り合えずその鼻血を拭いて。どうやら時間がありません、今すぐ天和様達を連れて近くの町まで行きなさい。美須々、貴方は私と共に最後まで付いてきたくれた我が兵に説得をしに行きますよ」

あれからそろそろ限界だと思った私は自分の軍を解散させました。自分たちが憂う存在になってしまったことにうすうす感じていたのでしょうか。

彼らは私のもとを去っていきました。

それでも半分以上がその場に残ったんですね・・・。

いつの間にか私に付いていきたい、波才様の部下のままにして欲し

いつて。

私は時代が変わるときが近いと彼らに言いました。

もうすぐ自分たちが望む時代が来る、我らはその基礎を築いた。だが礎にまでなる必要はないと。

生きて平和に、幸せに暮らして欲しいと。

なかには涙を流している者も居ました。

悔しいですよ、私も悔しいですよ。

なんで時代を憂いて立ち上がった貴方達が、この国だけならまだしも自分達と同じである民からも悪と蔑まれ、睨まれなければならぬと。

この中には罪もない民を襲うような愚か者はいません。

国を憎み、憂い、立ち上がった者だけです。

それが他の多の愚か者のせいでこんな惨めな目に遭うんですものね。

今、それでも私のもとで戦いたいと残った数百名と本当に天和様達を好いて集まっているファンの方約二万を除いて、他の数万の大半は略奪や罪のない人を殺した者達です。

彼らには時代の礎になってもらいましょう。

・・・ファンの方にも逃げてもらいたいですね。

出来る限り時が来るまでに逃がさなければ。

「ちょっと待って」

と、陣幕から出て行こうとする私を止めたのは天和様。

「波才さんはどうするの?」

「そうよ、あんたはどうするのよ?」

「貴方も私達と一緒に・・・」

「それは無理です」

「「「「「!?!?」「」「」「」

「誰かがここに残らねば不審に思った者達が出て行ってしまいますからね」

そうなつては本末転倒だ。

張角様はここで死ななくてはならない。

ここで感づいて続々と逃走されては「張角がいた」という信用が薄くなる。

だからこそ、旗印で在る者が残らねばなりません。

「何も死ぬと言っているわけではなりませんよ。大丈夫です、私もすぐに後を」

「嫌!?!」

私は天和様の声で全ての動作が止まりました。  
それほど力強く、整然とした声だった。  
普段の天和様からは想像も出来ないほどの。

「絶対に嫌!!」

「そうは言っても天和様。誰かがここに残らねば」

「嫌ったら嫌なの!!」

天和様がまるで子供のように私の言葉を一様に拒否する。  
そして私に抱きついて両腕を私の腰に巻き付けた。

「て、天和様!?!」

「絶対にぐす……絶対に嫌にゃの」

その目からは大量の涙がこぼれている。

「ずっと……ずっと後悔していた。私のせいで波才さんが戦争に巻き込まれてしまったことに」

「天和様……あれは前回話した通り、いずれかは起こる」でも原



因は私じゃない!!」「」

「戦に向かう波才さんの姿は・・・とても格好良かったけど、同時にとても悲しそうに見えた。波才さん、本当は貴方戦いたくなんてないんでしょ!?!?」

「・・・そんなことは「嘘だよ!!!」「」

結局私は今でも悩んでいる。

本当は人なんて殺したくない。

平和に、幸せに普通にすごしていたかった。

あの平和な日本での生活を捨てていかなかった。

隠せていたと思っていた。

事実、もっとも戦っている時に近くにいた仲間三人は気付いていなかった。

だけど天和様は気付いていたのですか・・・。

「だからもう戦わなくていい、危ない目に遭わなくていい、私達と昔のようにまた旅をしよう?昔はたくさんの人に私を愛して欲しかった。でももうそんなことは思っていない」

天和様から涙が一筋こぼれる。

赤く蒸気した頬が、艶やかな唇が、優しい目が、私の心の鼓動を早くする。

「今みたいにみんなに好かれなくていい、嫌われたっていい。ただ、波才さんだけには私のそばにいて欲しい。お願い・・・もう、一人にしないで。ここで波才さんが死んでしまったら私・・・私」

守りたい、今すぐに彼女を抱きしめてあげたい。

そうして私も彼女と一緒にここから去っていききたい。

それはとても魅力的で

誘惑が強い

毒だ。

それは無理なんですよ。

逃避行が許されるのは物語の中だけ、現実には許してはくれない。確かに私がここからいなくなっても気付かないかもしれない。でももし、それを知って不自然に思った者達が逃げ出したら？

ここで私が逃げたならもしかしたら追っ手で彼女が死んでしまうかもしれない。

だからそれはできない。

「天和様……」

そう言っつて私は天和様を優しい声で呼ぶ。

「……波才さん」

そう言っつて天和様は伏せていた顔を上げて私を見る。

本当に綺麗で、美しく、それ以上に優しいお人です。

だからこそ……生きていて欲しい。

）天和 side）

体に衝撃を受けた。

「（え・・・？）」

声を出そうとしても出ない。

意識が・・・闇に落ちていく。

落ち行く意識の中で波才さんが私にしか聞こえない声で言った。

「これは悪い夢だったので。逃れられないね・・・。だから貴方は夢から覚めてください」

それはとても優しく、温かい声だった。

でもそれ以上に、とても悲しそうだった。

### 第十三話 朝が来るまで待つて（後書き）

みなさん一ヶ月ぶりです。

活動報告で書きましたが地震によりいろいろ危なかったです。

地震で壊れたPC（基盤がアボン）がまだ帰ってこないのですが、流石に一話ぐらい投下しなければと親友の家にて更新中。

今回の地震は本当に凄かったです。

まず津波が恐ろしい。

津波はあと何分後来ますから逃げてと指定された時間よりもずいぶん早く到着しました。

翌日件の場所へ行くと……あれ？道路から先が海なんだけれど？

潮がまだ引いておらず道路の先には海（色が本当に海で潮の香りが）でした。

356

潮が引き始めた後、現地の友を手伝いに自転車をこいで（ガソリンが手に入らないため）行ったのですが……カラスが何やら集まっているんです。

何だろうと思つてよく見ると人の形をしているんです。

地獄でした。

よく考えれば磯の香り以外にも何かが腐敗したような臭いがするのです。

その原因は……考えるだけでいやでした。

携帯で警察に連絡したくても充電できないから連絡は出来ないし、

ただ手を合わせることでしかできませんでした。  
仮に充電できたとしても通じないから意味はなかったかもしれない。

民家はみんな壊れていて、昔私が家族で食べた食堂が流された跡をみて涙が溢れてきました。

何故か無性に悲しくて、同時に命があつて良かったと安堵してしばらくその場で動けませんでした。

その日はどうしても自分の感情を操れず、友人には謝って後日にまた手伝いに行きました。

メンタル弱くて情けねえです。

今回の地震で犠牲となられた皆様に深く、哀悼の意を表すると共に、被災された方・そのご家族、関係者の皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

パソコンが戻って来たわけでは無いので次の更新は来週か……はたまた再来週か。

書きだめも本編見ないとどうしても書けないので早くパソコン戻って来てほしいですね。

そして四月なのでますます忙しくなるといふ……しかも震災での遅れがいろいろ酷いという。

パソコン戻っても四日に一度更新は無理になるかもしれない。多分週一が限界かなあ。

そんな駄目な作者ですが、それでも「構わん、やれ」と行ってくださる方。

どうぞこれからもよろしく願いします。

IF END 〽我は黄巾党と共に〽 (前書き)

死んでみたところでなんの役に立つのだろうか？

まだ死ぬには早すぎる。せっかく自分のために生まれてきたものを全部自分のものにしもせずにあの世に旅立つなんて、果たして僕の手すべきことだろうか。

〽S・D・コレット〽

IF END 〱我は黄巾党と共に〱

「あら？いらっしやい、どうしたの？」

「あら、貴方は納得できないのね。貴方は『波才は黄巾党であるべき』、『波才がこれから紡ぐ物語は興味がない』と思っているのね」

「分かるわ〱その気持ち。気に入っていたものが嫌な方向へ向かっていくのを好き好んで見たい、なんて物好きな人なんていないもの」

「実はね、さつき本来とは別の新たな外史が生まれたの」

「貴方が望んだからこそ生まれた外史ね」

「これからの物語に不満があるのなら、貴方の中の『この外史』はここで終わらせたらどうかしら？」

「そうね、それがいいんじゃない？それじゃ、貴方が望んだ外史。ちよっと私にも見せてくれないかしら？私も興味あるのよ」



？ 波才が官軍の皇甫嵩を逃した際の慟哭・義憤を誰も発見できず、止められない。

？ 最後に地和と人和による説得を受けない。

以上の条件により I F E N D へ私は黄巾党と共にへが発生する。

？が発生すると事前に配下に逃げると指示しないため、波才の軍の数は変動しない。

更に戦い続けるため、誰もが憎み、恨み、妬み、士気は変わらず疑念を持たない。

？が発生するとこの E N D 時に波才軍は死兵となる。

軍攻撃力大幅上昇。

軍防御力減少。

更に兵達に『死』の特技を付与。

特技『死』

死兵となるため生への執着を持たず、どのような死地にも赴く。

故に殺傷能力が上がるが反対に生存能力が著しく低下する。

城に戻っても復活できない。

IF END 〱我は黄巾党と共に〱

天和様には少し眠ってもらいました。

あの目は絶対に引かない、そう言う目でしたからね。  
でも、女の子に手をあげてしまいましたね。  
うん、死ね。自分。

……。

申し訳ありません天和様。

私は所詮、私でしかなかったようです。

例え、主が私を止めようとも、もう、私は止まることが出来ないのですよ。

「一号さん」

「あ、はい!!」

「天和様をお願いします。地和様、人和様も」

そう言っつて波才は二人を見る。

地和は、人和は波才を止めようとした。  
彼女達は解っていたのだ。

波才をこのまま行かせてはもう戻らない。

二度と、二度と帰らない存在になると。

それだけは誰も望まない。

自分も、天和姉さんも、人和も、一号達も。

口を開こうとする、だが。

「すみません、地和様、人和様。私は黄巾党なのですよ」

その言葉の意味を計りきれず、出るべき言葉が咽の奥に閉じ込められる。

「私は変われなかった。前世と同じで、結局は同じだった。獣が人に戻ろうと足掻きましたが、もう解ったんです。私は変われない、人にはなれない。だから……ここで死ぬしかないってね」

「！？そんなことは……」

否定しようとした。

そうではないんだ。

そうじゃないんだと。

だが、彼女達は波才から発せられる毒々しく、黒々しい何かに気が付いた。

それはとても深く、とても重く、とても悲しい。

なんでと、なんで波才はこうなつたんだと地和は思った。

「ここで生き残つては、ここで死ななければ、私は納得が出来ない。私は認められないんです」

そう言つて波才は笑う。

最後に私達の元から去つて行つた波才はこんな風に笑わなかった。こんなとても寂しく、悲しく、哀れな人間じゃなかった。

どこで、私達がない間にどこでここまで変わってしまったのか。それとも波才が言つたとおり波才はもともとこんな人間だったの？

違う!!!

波才が私達と出会つたとき、あの出会いの晩の波才はこんな人間ではなかった。

誇りを持ち、自分という確たるものを持ち、強く、見る者全てに勇氣と希望を与えてくれる人間だった。

違う!!!

こんな目をする人間じゃない!!!

こんなに弱々しい人間じゃない!!!

こんな人間じゃない！！

こんな、こんな悲しい人じゃない！！

波才を止めようと、波才を止めようと声を出そうとする。だけど出ては来ない。

いろんな言葉が浮かんでくるのに、いろんな思い出が浮かんでくるのに。

涙が、涙が溢れてくる。

波才は涙を流し始めた地和、人和を見ると静かに頭を下げ、臣下の礼をとる。

主が真に求める声に気が付かず、それでもなお臣下の礼をとり、自分の道とする。

そののなんと滑稽なことか。

あの日、出会った日にとつた臣下の礼とはあまりにもかけ離れた、見る者全てが哀れむ。

誰も望まない臣下の礼。

「それでは、行って参ります」

止めようとする。

誰もが、その場にいる誰もが間違っていると気づいているのに止め

られない。

それは波才も同じだ。

内心では地和と人和と一号達が言いたいことを理解している。だからこそ拒絶する。

もう、戻れないと。

地和は、人和は涙を流す。

どうしてこうなってしまったんだろうと。

止めるべき言葉が見つからない自分が、自分が悔しいと。

波才がその場を去った後、二人の姉妹は声を出して泣いた。

目を真っ赤にして、波才、波才と壊れた人形のようにひたすらその名を叫んだ。

一号達は悲痛な表情で見つめる。

彼女達にどんな言葉をかければいいのか。

泣くことすら出来ず、自ら引き離す役目を持った俺達がどう慰めればいいのかと。

「主、よろしかったのですか」

兵達のもとへ向かう主、その背中に私は問いかける。

主は歩みを止め、その後ろを歩いていた明埜も同じように足を止める。

私の隣を歩く琉生は何の感情も無い目で私を見る。

いつもと変わらない声で問う美須々だが、内心は穏やかではなかった。

彼女は気が付いていた。

少しずつ主が壊れていくことに。

最初はほんの些細な違和感だった。

官軍との戦いからしばらく経ち、再度別の官軍と戦闘になった際、その違和感は確信へと変わった。

主の策に容赦がないのだ。

その官軍を全て殺し尽くした主は一人残らずその首を木の杭に刺し、官軍への抑止力として砦の周りに埋め込み、晒した。

私はこの時初めて主が変わったことに気が付いたのだ。

主は人を殺した時必ずどこか辛く、暗い表情を浮かべていた。

だがこの時の主は違った。

笑っていた。

心の底から湧き出る『歡喜』の感情を抑えきれなかったのか口を弧に歪ませて楽しそうに笑っていた。

その狂気に私は魅入られた。

どこまでもどこまでも深く、深く。

まるで底が見えないその狂気に私は魅入られた。

あの朱雫との戦いで感じられた主とはまるで違う。

質も濃さもまるで違う狂気。

それを感じた瞬間我らは修羅道に堕ちた。

民を殺した。

女、子供、老人、赤子。

全員殺した。

理由？

食料が足りなかったからだ。

お金が足りなかったからだ。

それ以外に理由はない。

私も殺した。

逃げる老人を後ろから斬りつけて殺した。

母親の名前を泣きながら呼ぶ子供の首をはね飛ばして殺した。

どうかこの子は助けて欲しいと赤子を抱いて懇願する母親を赤子もろとも貫いて殺した。



返り血を浴び、幾多のも地獄を作り出し、駆け抜けた。

私はその時主と同じく笑っていたのを覚えている。

笑いながら殺して、殺して、殺し尽くした。

なんの迷いも無かった。

主が私達に命令したから。

我らが主がそれを命じたから。

嬉しかった。

主の命令でここまで殺せたことが。

主が望む殺戮を出来たことが。

主の期待に応えられたことが。

だが、そんな狂気もあの会話を聞いて吹き飛ばされた。

私は何をしていたんだ？

主は望んではいなかった。

こんな終わり方を望んではいなかったが認めざるを得なかった。

私は……私は主の望む道とは違う道を進んでしまったのでは？

私は間違っただけでは？

例え殺されようと主を止めるべきだったのでは？

そう思うと後悔しきれない。

天和様、地和様、人和様の悲痛な声。

主の全てを諦めたような声。

聞いているだけで胸が締め付けられた。

聞かすにはいられない。

真の主の心に気が付きもせず、ただ私の道を進み続けた私にそんな資格はないと解ってはいる。

解ってはいるのだが……。

「美須々、聞クモンジャネエヨ」

明埜がさぞ面白くないと言わんばかりに声を荒げる。

顔は見えないためにどんな表情をつかべているのか解らない。

「ソレヲ聞ケバ旦那ガ今マデ積ミ上ゲテキタモンガ意味ガ無クナル。  
例エソレガ旦那ガ望マナイモノデアツテモダ」

だがその声いつもの明埜の覇気が無いことに気が付く。

いつもの人を小馬鹿にするような、明埜独特の響きがない。

微かに声が震えている。

明埜は自分にも言い聞かせるように言う。

それは納得できないことを必死に納得しようと足掻いているように私には見えた。

「ソレヲ聞イチマツタラ旦那ガ生キテ積ミ上ゲテキタモンガ無駄ニナル。ダカラ聞クンジャネエヨ」

「ですが、こんな、こんな終わり方は……」

「聞クンジャネエツツテンダロオ！」

振り向きざまに明埜は手に手裏剣を持つと私の首に突きつける。

思わず私は手に持つ槍でそれを払おうと手に力を込めた。

だが私は明埜の顔を見てそれ以上何も出来なかった。

明埜の目には……涙。

止めどなく涙は溢れ、顔にぐるぐるに巻き付けた包帯を濡らしていく。

それを見て私は初めて理解した。

明埜も私と同じなのだ。

同じだからこそその問いの意味の無さに絶望し、戸惑い、後悔している。

「止めなさい」

波才の制止する声に明埜は音が聞こえるほど歯を噛み締めるとゆっくりとその手を引き、得物を袖の中に収める。憎々しげに美須々々を明埜は一別する。

「琉生」

主は私達に後ろを向いたまま短くその名前を呼ぶ。

声には抑揚が感じられず、今主がどんな顔をしているのか想像できない。

「貴方は何か私に言うことはあるのですか」

何故、主が私や明埜ではなく琉生に話しかけたのだろうか。

琉生に答えを求めたのだろうか。

軍議はおるか、普段の生活する中で一度でも話した事はなく、話す姿も見たことがない琉生に尋ねたのだろうか。

明埜もこの主の言葉にまだ充血した目を細め、主を見つめた後以前何も話すことなくたらずむ琉生へとその視線を移動する。

「……これが主の望んだ事なら、私は何も言うことはない」

私と明埜は呆気にとられた。

あの琉生が返事を動作ではなく声で返したことに驚きを隠せなかった。

そんな二人をよそに主は更に問う。

「私が、望んだ事？」

「真か嘘か。正義か悪か。それを問い、求めるのは愚かなこと」

「……………」

「救済を求めるか、それこそお笑いぐさ。救いなんて無い。あつても振り払うように主は進み、たどり着いた。それがこの結末。今更それを後悔？巫山戯るな。それなら戦うな、殺すな、生きるな」

普段の琉生からは想像できないほどの明確な意志と声。

私も、明埜も、主でさえも声を出せず動けない。

それほど琉生の言葉は強く、心に響いた。

それ以降琉生は口を固く閉ざし、待てども再度開くことはなかった。

冷たい風が私の頬を撫でる。

終わりが無いと思えるほどの沈黙だったが、それを主が破る。

「そうですね。何を戸惑っているのでしょうかね」

振り向いた主は笑っていた。

「地和様や、人和様を見たときに考えてしまったんですよ。彼女達との誓いを裏切り、こんな所で死んでしまう私が正しいのかと」

「正しくはないんでしょうね。正しくはないんですが私はその正し

い道を生きられない」

「なのにつじうじとそれを悔いている」

「琉生が言うとおりですよ、もう戻れない、もう戻れないのならば覚悟を決めなくてははいけませんね」

そして私達の方を振り向く。

その目に迷いはない。

だが私は考えてしまう。

これが本当に主のための道だったのか。

この今の迷いの無い主をもっと早く私達が気づかせてあげればこのような後悔をする必要も無かったのではと。

だが、今主が迷いを振り払ったのは私では無い。

琉生だ。

私はただ自分に酔い、流され、そのようなことを気にも止めない。

琉生のように主に気づかせることなど出来なかった。

やはり私にはその資格はないのだろう。

いや、出来ないのだろう。

ならば、ならば私はどうすればいい？

主を主が望む道へ進ませることも出来ず、ただ流され続けた私は何をすればいい？

「みなさん、これより私は死地に向かいます。生き残りたい、後悔

している人はどうぞ。天和様方と同様に抜け出してください。咎めはしませんよ？だって私は間違っているのですから。もう後悔はしていませんけどね」

……。

私はただ、流され続けた。

だが、それでも。

それでも

「私は主と共に死にます」

この思いだけは、この道だけは後悔したことなど一度もない！！

ここで抜ける？

主を見捨てる？

私は生き残る？

そうした瞬間私は、美須々という武人は終わりをつける！！

波才という主であるからこそ私は私なのだ！！

その場に跪き、頭を垂れる。

「旦那、今更ソレハネエツテ」

嗤いながら手に持つ手裏剣をクルクルと回す。

先ほど涙を見せたような弱さはもはや無い。

「俺達波才軍ノ力、地獄へノ語リグサニシテヤロウジャンイカ」

いつものいやらしい嗤いをつかべてニタアと微笑む。

そして最後に

「琉生？貴方はどうしま……聞く必要無かったみたいですね」

双剣を抜き放ち、静かに目を瞑り、その問いに答える。  
どうやらいつもの琉生に戻ったようだ。

先ほど話したのが嘘のような寡黙ぶりに主は苦笑する。

最後の戦とは思えない。

いつも通り、生きて帰って来るかのような一幕。

だがここにいる誰もがもう戻れないことを解っている。

それでも私達はいつも通り笑い、戦場へと向かう。

それが、波才の軍だ。



「え、みなさん。多分これ最後の演説です」

波才がずらりと並んだ歴戦の兵達に向かっていつもと変わらない口ぶりで発した言葉。

最後とは思えないような口ぶりで和やかに言う。  
だが、誰もがそれを理解している。

「出て行く人は出て行ってもらって全然構いませんよ？行きたいと  
いうのはまあ当たり前ですから」

誰も動かない。

微動だにせず静かにたたずむ兵達を見て

狂気に満ちた笑みで主は嗤い、高らかに声を上げる。

「今まで散々殺してきた！！女子供老人赤子容赦なく殺してきた！

「解っているな、私達は被害者じゃねえんだ！！害だ！！この国に巣くう害虫だ！！」

まるで遠くを見るように手を目の上の位置に動かし、腰を動かして体ごと並んだ兵を見回す動作をする。

だが、それを笑うものなどいない。

兵達は静かな闘志を燃やし、ただ波才を見つめる。

「そしてお前らはそれを理解して行い、私に付いて来たでしょうもない血に飢えた獣達だ！！血に慣れた獣が人に戻れると思うな！！そんな獣はこれから来るであろう平和な時代にはいらぬんだよ！！もしこの場から去っていく馬鹿がいたら背後から明埜に殺してもらっていましたよ！！」

バツと両腕を上げて無邪気な子供のように主ははしゃぐ。

だが、熱が引いたように両腕を静かに下げると、その顔は能面のように凍りつく。

そして先ほどとは打って変わって冷たい声で静かに声を紡ぐ。

「彼らは英雄です。これからの時代を、希望を、夢を、歴史を、全てを紡ぎ出していく英雄達です。私達は彼らの贄、ただ貪られて消えていくどうしようもないろくでなし」

「彼らは間違いなく正しい、対して我らは罪無き民に手を出した愚か者共。我らが憎むものになり果てた獣共。死ぬべき、消えるべき存在」

「そう、我らは消えるべきだ。消えて後世の人々からも蔑まれ、憎まれる。だが我らにも血に飢えた獣として、ただのうのと狩られるなどというつまらない終わり方はとてもじゃないが納得できない！！そうでしょう！！」

返事を返すものはいないが誰もがその答えを肯定している。  
彼らは獣だ。

駆除される獣でしかないのだ。

歴史を、物語を紡ぐことなど断じてない。

だが獣にも意志がある。

獣には獣なりの誇りと意地が存在するのだ。

ただ狩られるだけの獣など波才の軍には一人たりともいない。

「殺せ！！歴史の英雄達を殺せ！！これから生きていく者達を殺せ！！最後まで、最後まで獣で在り続ける！！奴らに我らこそが真の血に飢えた救いようがない獣達なのだと教えてやれ！！命乞いなどするんじゃねえ！！例え腕を切られようと足を切られようと首を切られようと命乞いはするな！！逃げるな！！生きたいと思うな！！それだけのことを私達はしてきたのだ！！」

誰もが予期した。

唯一彼らをつなぎ止めていた楔が今外されることを。

「貴様らに問う！…ただ狩られるだけの獣か！？」

「……否！！否！！否！！」「……」

「貴様らに問う！！醜く生に執着してまで生きたいか！？」

「……否！！否！！否！！」「……」

「貴様らに問う！！我らは生きていいのか！？」

「……否！！否！！否！！」「……」

その怒号に波才の軍以外の黄巾兵は何事かと飛び起き、天幕から武器を持ち飛び出す。

そしてこの光景を見て驚き、引き込まれ、獣としての明確な意志を持ち決意を胸に秘める。

いつしかその怒号はこの皆全ての者達を引き込み、覚悟を決めさせる。

誰もが声を上げ、その士気は天を切り裂き、大地を揺らす。

それを見て美須々は悔し涙を流した。

これほどの人を惹き付け、導ける英雄がここで終わるのかと。

この英雄がただ他の英雄達に英雄とも思われず、明日消え逝くのかと。

それを見て美須々は歡喜の涙を流した。



「策殿！！お怪我は！？」

「大丈夫よ！！それよりもこいつら……」

苦言を漏らす孫策。

黄巾党の砦に火計を成功させ、既に勝利は目前と考えていた。

だが、この黄巾兵達は……。

「まさか賊が死兵になるなんて……」

驚きを隠せない。

こいつらは一人一人が信念も何もない。

脅せば逃げる、勝てないと解れば逃げる、己の命がかわいいどうしようもない連中。

だからこの火計さえ成功させれば逃げ惑い、混乱し、後は攻め込んで張角の首を打つだけだと考えていた。

それが何故

「策殿！！」

黄蓋の声に意識が戻った私は剣を振り上げた黄巾兵の腕をはね飛ばした。

だが黄巾兵は何も持たないもう片方の腕で殴りかかってくる。

「つちい！！」

落ち着いてその兵の首を切り落とす。

死兵だ。

生に執着を無くし、ただ敵を殺す。

おかしい。

賊同様のこいつらに何故そこまでの覚悟を決めさせられる？  
これが黄巾党の言う宗教か？

先手を打って砦に攻め込んだ私達の損害は大きい。

死兵相手では兵も疲弊し、徐々にだが数の多い黄巾兵達に押されてきている。

他の劉備や曹操などの者達も続々と攻め込むがこの死兵に戸惑っているようだ。

「速く、速く張角を見つけないと」

ここで兵を失ってはますます独立した勢力として自立出来ない。

いつまでも袁術のいいなりのままだ。

その為には一刻も早く張角の首を打ち、この砦から引く必要がある。

だがこの逃げない死兵達の波をどうぐり抜けていけばいいのだ！？

一塊となった兵達が私のもとに殺到する。

いくら数が多い、死兵とはいえ所詮は雑兵。

私を討つにはいたらな

殺気を感じた私は体をとつさに捻る。

だが、剣を振る私は兵達の合間を縫って迫る刃に気が付かなかった。

刃物の凍るような冷たい感覚が腕を蹂躪する。

見ると手裏剣が右手の二等上腕筋に突き刺さっていた。

「はぁ！！」

黄蓋、祭の弓が私に殺到する兵達を射貫いていく。

「策殿！？その腕は」

大丈夫、そう言おうと手裏剣を抜いた私だが、一際大きい心音と共に押し寄せた焼け付く激流に思わず手を胸に押しつける。  
熱い、燃えるように体が熱い。

自らの主君の異常に気が付いた黄蓋だが、近づこうとしても死兵となつた黄巾兵達に阻まれる。

息が荒く、何度も酸素を取り入れるがこの熱さは和らぐどころか増していく。

それでも押し寄せる黄巾兵。

一人、二人ともう片方の手で殺していくがそれでもこの波は和らぐどころか更に激しくなっていく。

「オイオイ、マダ戦エンノ？才前本当二人間力？」

更に激痛が肩から体中へと浸透する。

また手裏剣……。

それを抜いて声の主を、その手裏剣を投げたのであろう人間を睨み付ける。

「才前ナンデ剣奮ッテンノ？普通八最初ノアレデ動ケナクハナルモンダガ」



顔には包帯を巻き、袖が長い呂蒙の露出を無くしたような服を着ている。

「貴方がさっきからこれを……」

声を上げようとして私は片膝を着く。

おかしいと思った。

たかが手裏剣二つ、しかも致命傷ではなく血もそれ程流していないのにこの苦痛の激流。

体を食い荒らす熱湯のような熱さ。

「貴方……まさか」

「オ？ヤット気が付イタ？」

楽しそうに嗤い、言った。

「ソノ手裏剣ニ毒ヌツテンノヨ。オ前ヨク生キテルナ」

「卑怯な真似を……」

「卑怯？フザケンジャネエヨ。コレハ殺シ合イ。オ前ラガ誇リゴツコライクラヤルノモ勝手ダガソレヲ押シツケルンジャネエ！！」

さらに手裏剣を投擲。

的確にそれは私の命を狙う急所を狙っている。

振り払おうとするが手が上がらない。

熱い、体が焼ける。

これまでかと齒を噛み締めた私の耳に聞こえたのは

チリン

鈴の音。

「孫策様!!」

迫る手裏剣を全て弾いたのは甘寧。  
さらに

「はあ!!」

「ツクソ!!劉備ノ時ト言イ俺ニ八変ナ呪イデモカカツテイルノカ  
ネエ!!」

周泰が包帯に斬りかかる。

明埜はかわすと周泰を蹴り上げ、下がる。

「孫策様!?大丈夫ですか!？」

「そのお怪我は!？」

二人は私をかばうように前に出る。  
大丈夫、言いたいけれどこの状態は不味いかな。  
心配する二人をよそにケラケラと笑いながら明埜は二人に告げる。

「オオウ、助ケテナンダガソイツ死ヌゾ」

「戯れ言を!!」

「本当本当、ダツテ毒クラツテルシ。ソレデ動キマクツタカラ体中  
二回ツタダロウシ、モウ死ヌンジャネ？」

その言葉に遠くで最後の黄巾兵を射貫いた黄蓋が顔を青くし駆け寄る。

「策殿、早く陣営に戻り手当を!!」

だが私はそれを手で制す。

自分の体のことは自分でよく解っている。

私は……もう、間に合わない。

それを理解した三人は一瞬悲痛な表情になり、そして怒りに顔を歪め明埜を睨み付ける。

甘寧が堰を切ったように怒号を上げる。

「貴様あ!!」

斬りかかる甘寧。

だが明埜は自ら前に進み出て

ツザシユ！！

その刃を体に受けた。

「「「「つな！？」「」「」

四人が驚きに声上げる。

確かに致命傷からはぎりぎり外れているがそれでも剣は深く切り込まれ深手の傷。

現に決して少なくはない血が飛び散り甘寧に返り血として降りかかる。

かわせない一撃ではない、先ほど周泰をかわしたことがそれを証明している。

だがその一瞬、その一瞬甘寧に隙が生じた。

明埜は素早く手を袖の中に戻し、再び現れる手には二本の手裏剣。それに気が付いた甘寧、だが既にとき既に遅し。

明埜はそれを甘寧の脇腹と腕に突き刺した。

黄蓋が弓を穿ちそれが明埜の肩に命中。

更に追撃で放たれた矢も腹部に命中し明埜の体が揺れる。

甘寧は明埜を蹴り飛ばす。

周泰が明埜に迫り背中に収めた刀を一闪、斜めに明埜の体に深く切り込まれる。

くるくる自らの血をまき散らしながら明埜は吹き飛ばされ、大地に倒れ伏した。

だが蹴り飛ばした後甘寧はその場に蹲る。

「思春！！」

「早く孫策様同様に手当を……」

明埜は解っていた。

正面からでは絶対に勝てないと。  
だからこそ毒を用いた。

そして援軍として三人の将が来たとき明埜は気が付いた。  
俺では勝てないと。

既に周りの黄巾兵は掃討されている。  
弓がいるのだから退くことは出来ない。  
前のように逃げることも出来ない  
それ以前に逃げるなど許されない。

その時、波才の言葉が頭に浮かんだ。

「英雄を殺せ」

すでに敵の一軍と思わしき主は死に体だ。

いずれ死ぬ。

そして自分ではあいつらには普通では勝てない。

だから、一人でも多くの時代を築き上げる者達を殺そうと、自らの体を利用した。

一人、一人でもいい道連れにしてやる。

敵将に体を切り込まれ、死が意識を覆い被そうとする。

だが俺は嗤った。

目の前の敵将が啞然としていて隙だらけになっているのだ。

両手の手裏剣を突き刺す。

だがその次の瞬間衝撃が体に飛来した。

見れば敵の将が射たのであろう矢が肩に刺さっている。

さらに弓矢は俺の腹をも突き破る。

意識が飛びそうになる。

だが、俺は未だ手に持つ手裏剣を更に敵将に深くねじり込む。

一人でも、一人でも多く旦那のために道連れにしてやる。

さらに猫のように眼を細めた黒髪の女が俺に迫ってくるのが見えた。

あ、そういえば旦那って黒髪の女が好きだったな。

あいつが髪結んだら旦那喜んだんじゃ……でも俺が毒使った女も髪結んでたよなあ。

何故だか解らないが俺はそんなどうでもいいことを考えた。

これから来る死を避けられるだけの力は既に無い。

自分が死ぬことは解っている。  
あいつが斬りつけてそれでお終い。

そういえば、俺は死んだらどこに行くんだろ？  
少なくともまともな所じゃないだろうなあ。  
いろいろやり過ぎたし。  
きつと地獄とか逝くんじゃないか？

そうだ、最後だけ願いとかしてみるかね。

怒りの形相で刀が抜かれ、斬りかかる将を見ながら嗤った。

死んだら、俺と同じ所に旦那が来ないで欲しいね。

明埜は刀の一閃により肺、心臓、肝臓、重要気管を切り裂かれ絶命した。

体が舞い、吹き飛ばされて大地に横たわる。  
死に際、彼女はとても悲しそうに笑ったことに誰も気が付かなかった。

「はあ!!」

斬りかかるは曹操の将夏侯惇。

その一撃を美須々はいなし反撃。

既に激しい攻防が続いているのか彼女達の額には汗が浮かんでいる。

「ふう……強いですねえ」

「お前こそ!!」

楽しそうに戦う夏侯惇とは逆に、美須々の表情は硬い。

時間が無いのだ。

死兵となった軍は確かに、確かに強い。

だが長続きはしない。

所詮農民あがり賊あがり、正規の訓練を受けた兵には勝てない。

なればこそ将を討ち取り、流れを呼び込む必要がある。

だが目の前のデコ女は強い。

一つ一つの剣が重く、まともに相手をしていては時間だけが過ぎて



いく。

……一手。

一手さえ打てればいい。

ただ一手。

勝てなくとも構わない。

私達は負けている、戦う前から負けているからこそ死兵になって戦っている。

あの方は、主は「英雄を殺せ」と言った。

私にはこの目の前で大剣を振るっているデコ助が英雄なのかは解らない。

だが曹操を支える猛者であることは解った。

私はここで死ぬ運命。

主と共にこの地に骸をさらし、弔われずただ朽ちていく。

だがこの女はこれから時代を紡ぐのだろう。

武人として生きていくのである。

なら、この命捨ててもこいつを殺す。

どうせ無いような命だ。  
武人としての生命を殺してやる。

私は覚悟を決めた。

大剣が髪を撫で、大地を抉る。

私は隙を見せた。

それは致命的な隙。

ここを突かれれば武人としての私の生命は終わりを告げる。  
今まで築き上げてきた武人としての美須々はこれから先生きられない。

だがそれがどうした？。

黄巾党の美須々は、血に飢えた美須々は死んでいないわよ？

その隙を見つけたのか夏侯惇は笑う。

愚かね。

作られた穴に喜んで飛び込んでくるなんて。

素早く大剣を引き戻した夏侯惇はその大剣を振り下ろした。

鈍い音。

骨が抉られ肉が切り裂かれ血の濁流が溢れる。

私の右腕は夏侯惇によって切り落とされる。

デコ娘は勝利に喜んでいるわね。

そうよね〜だって腕を切り落としたんだもの。

もうこの腕は戻らない。

もう両手で主の手を取ることが出来ない。

だからって奪ってもない命の皮算用するんじゃないわねえ！！

吹き飛ばされた腕の持つ槍を空中で掴む。

私の腕だった腕から血の飛沫が頬にかかる。

それを見て夏侯惇は動揺する。

そりゃそうでしょうね。

普通は武器の持つ手を切り飛ばしたら終わりだもの。

波才の兵は普通じゃないのよ！！

その手に持つ槍を袈裟切りに一閃。

舌からすくい上げるような槍に流石と言うべきか武人としての本能か。

夏侯惇はとっさに身を退く。

だがこのチャンスは美須々は逃さない。

踏み込んで強引に槍の範囲内へと引きずり込んだ。

槍は夏侯惇の左目をえぐり取るように切り裂く。

苦痛に声を上げる夏侯惇だがもう片方の目は次こそ己を殺さんと迫る槍を明確に捕らえた。

剣ではその槍を薙ぎ払おうとするが美須々は槍を捻り大剣を大地へとたたき落とす。

スライドするように夏侯惇の左側へ回り込む。

今ままでなら親しんできた視界。

それが突然奪われた夏侯惇は自らの死角へと移動した美須々を捕らえきれない。

美須々は自分の姿を探す夏侯惇の首へ槍を突き出した。

「姉者！！」

だがそれは飛来した矢によって阻まれる。

唯一残った腕にその矢は命中。

これにより槍は虚しく夏侯惇の髪をかするだけとなった。

夏侯惇はその槍に呼応するかのようには大剣を振る。

それによって美須々の武器である槍は中間辺りから切り飛ばされ、衝撃により美須々地震も吹き飛ばされ、着地するも膝をつく。

「姉者その怪我は!？」

「春蘭様!？」

妹であろう女とその部下であろう鉄球を持った少女が夏侯惇に駆け寄る。

私は今の状況を分析する。

腕の出血は激しい。

既に血の何割かを激しい運動により失われたため今にも倒れそうになる。

激痛で上手く体を動かせない。

「春蘭!！」

「華琳様……」

あの夏侯惇が弱々しく様付けで呼ぶ……つまり主である曹操。顔を上げるとそこには険しい顔をした曹操が私を睨んでいる。

これで四人、うち三人はそれほど疲弊しておらず、夏侯惇のような怪我もないと。

対して私は満身創痍。

今にも気を失う寸前。

……詰みか。

「貴方は確か波才の将だったわね。答えなさい、波才は今どこにいるの？」

私はその問いに笑って立ち上がる。

先ほど弓を放った青い髪の女と鉄球を持つ少女が警戒して構える。

「それを言う者が居ると？」

「そうね、なら貴方を捕らえて聞き出すわ」

私……ね。

この状態で聞けないことは曹操も理解しているだろう。つまり助けるから主を売れとこいつは言っている。

私は声を出して笑った。

主を売るなどありえない。

あの方は死んでいた私に生を吹き込み、美須々という武人にしてくれた。

誰かに仕え、役目を果たす喜びを教えてくれた。

だが悔しいがこの状態では勝てない。

既に意識が遠くなりつつある。  
これでは捕らえられる。  
生きながらえてしまふ。

私はその場に両膝をつき、槍を杖のようにするがる形になる。

その意味を理解した曹操が止めに入るように配下に指示を出すか…  
…遅い。

先端が槍のようにとがった木に私は自分の首を突き刺した。

遠く、兵達の喧騒と物が燃える臭いが遠くに感じる。  
黒く塗りつぶされていく意識の中、私は主と出会い、仲間と出会い、  
共に戦った日々が走馬燈のように頭をよぎる。

主、私は……幸せでした。  
もし来世というものがあるのなら、私はまた貴方に仕えたく思います。  
す。

「……………」

「ええ、解ります。美須々と明埜は逝ったのですね」

空を見上げていた波才は静かに琉生へと呟いた。

二人の将星が先ほど流れ星となって墮ちるのを見たからだ。だが同時に明埜の将星は一つの巨星と輝く将星を墮とし、美須々は巨星に寄り添う大きな将星の輝きに陰りを加えていた。

正しくはないのだろう。  
間違っているのだろう。



それでも、それでも私はこれこそが正しいと信じている。

それが、例え誰も望まないものであったとしても。

「琉生、私はこれより張角様の偽装した遺体と共に逝きます。……  
解りますね？」

その問いに琉生はこくりと頷く。

波才の後ろにある陣幕の中には多くの木と何かが入った箱が見える。

波才は皆を見回す。

まだここまでは来てはいないが煙が多く空に立ち上っている。

そしてその中をかき分けて迫る一軍を見て笑った。

彼の周りを囲むようにかれに従い続けた修羅の兵達は無人の野にいるかの如くそれらを平然と見つめる。

綺麗に隊列し、動かない彼らはまるで彫像のようであった

琉生が彼らの前に躍り出ると手を高らかに天に上げる。

前線の者達は槍袞を行い、背後の兵は弓を構える。

そこに現れたのは劉備軍。

旗は関羽、張飛、趙雲。

ただの賊とは思えない陣容にその進撃は止まる。

「なんだこれは……」

「ただの賊……ではないようだな」

「すごいのだ……」

彼らの前に並ぶのは一つの陣を構成した軍と呼べる存在。

ひしひしとその軍から殺気が放たれる。

思わず彼女達は感嘆の声を漏らす。

そしてこれから起こりえるであろう戦いの予感に身を震わす。

だが、その軍は突然二つに分かれる。

そして歩み出てきたのは二人の人物。

一人は腕に布でぐるぐる巻きにした何かを持つ男、一人は両手に剣を持つ女。

「どうも、こんな夜更けにどうしたのでって趙雲さんじゃないですか」

突然自分が知っている名前をその男が呼んだことに驚いたのか関羽と張飛は男から視線を趙雲へ動かす。

その趙雲は苦虫を噛み締めたような顔で男を見ていた。

「やはり波才は……貴方だったのか。波才殿」

「どの波才か解りませんが黄巾党の波才は私ですよ」

そう言つて波才は楽しそうに笑うが反対に趙雲の表情は以前敵しい。

波才!?

その悪名高き名前に驚き思わずその名前を呼んだ趙雲を関羽と張飛は見るが、彼女は未だ敵しい視線を波才へと向けている。声高らかに笑う波才に怒りをあらわにした趙雲は咆える。

「何故だ!？何故貴方ほどの武人が賊の如き狼藉を働く!？」

「貴方はどうやた私という者を計り違えたようですね。私はこんな人間だった。武人ではなく血に飢えた獣だった。ただそれだけの話です」

「……ならばあの時、殺すべきであつたか」

「おやおや……殺せたのでしょうかね？」

「……もう、逃がしはしない。張角もろともお主を討つ」

決意を新たにした趙雲。  
静かに槍を構える。

「後から教えてもらうぞ、星」

「隠し事はいけないのだ」

先ほどから二人の会話について行けずに眺めていた関羽、張飛は不満そうであった。

二人の将も各々の得物を構える。

そんな彼女達が発する歴戦の武人の殺気を飄々と受け流す。

そして口を開き、波才が喋った言葉は彼女達の動きを止めた。

「張角様は病故に先ほど逝かれました」

その言葉に三人は電流が走ったかのように固まる。

波才は布に巻かれた何かを見た後女達を見る。

「この方がそうですよ」

そう言つて目で促したのは波才が抱える布の塊。

それを関羽、張飛、趙雲も同じく目で追う。

関羽は挑発的に笑う。

「そうか、お前が持つその布の塊か……ならばそれとお前の首をもらう」

「おやおや、物騒なこと言いなさる」

関羽の言葉に笑う波才。  
それに激昂し口を開きかけた関羽だったが……。  
唐突にその笑いが不自然なものであることに気が付く。  
関羽をあざ笑うものではなく何かの覚悟を決めた笑い。  
そう解つても関羽はその意志を計りかね、口を閉ざし踏みとどまる。

「ならばどちらも渡しません」

どこまでも平坦な声。

まるで「おはよう」「さよなら」というような抑揚が無い声。  
だがそれは何故か彼らの耳に残り、体中を駆け巡る。  
波才は振り返ると背後の陣幕の中に入っていく。  
それを追いかけようと関羽が号令をかけようとした瞬間。

激しい音が大気を伝わり皆中に伝わる。

見れば先ほど波才が入っていた陣幕が激しく燃えている。

「……っな!?」「……」

それを理解した瞬間三人は再度固まった。  
おそらくは中に予め燃えやすい物を入れていたのである。  
そして先ほどの爆発は火薬も積んでいたことになる。

波才が入ってすぐに爆発したため逃げる時間など無い。  
おそらく生きてはいないだろう。

呆然とする関羽、張飛、趙雲。

「主に……続け」

静かな、されど力強い声。

はっとして三人が見ればそこには敵意を持ち、劉備軍を睨み付ける  
軍勢と先ほど波才と現れた女の武人の姿が在った。

「どうやら……終わりではないようだな」

「ああ、この軍氣。やはりこやつらはただの黄巾兵ではない」

「さっきのはさいの軍なのかもしれないのだ」

その言葉に関羽と趙雲は先の男の姿を思い浮かべる。  
底が知れない男だった。

どこまでも不思議な目をした男だった。

「官軍に無敗、さらには曹操軍と引き分ける存在か……」

琉生は手を上げる。

その目には涙。

涙が頬を伝い地に落ちる。

それは兵達も同様であった。

皆目から涙を流し、殺意を武器に込める。

その光景に敵軍は驚いているようだ。

背後には墓標がある。

名は刻まれてはいない。

なんの供物も供えられることはない。

だが、それ以上に琉生に、波才の軍に力を与える物はなかった。

琉生は思い出す。

主と出会った日のことを。

主と歩いた物語を。

そして静かに眼を細め、劉備軍を見る。

波才の残した獣達は待っている。

その役目を最後に渡されたのは自分だ。

仲間を脳裏に思い浮かべる。

美須々は馬鹿だったがまつすぐだった。

どこまでもまつすぐで最後まで自分で在り続けたのであろう。

明埜はきつと恨まれながらも主の言葉を守り、その命を遂げたのであろう。

最後まで最後まで戦い続けたのだろう。

天に向かって上げていた手を今劉備軍へと振り下ろす。

堰を切ったように駆け出す波才の軍。



「大丈夫、直ぐに僕も逝くから」

そう呟き琉生は自ら先頭となって劉備軍に切り込んだ。

少女は草原立っていた。

どこまでも、どこまでも広がる緑の草原。

唄うことを忘れた少女は立っていた。

少女は後悔していた。

出会わなければ良かった。

出会わなければあの人は死ななかった。

でも出会わなければ私はあの人を愛せなかった。

出会わなければあの人と過ごした日々を感じることはなかった。

沈みかけた夕日。

日の匂いを感じる。

それは消えていった者達が残した言葉のように少女は思えた。

「波才さん……」

その呟きは誰にも聞かれることも、聞こえることもなく夕日へと消えた。

「へ〜これはまた面白いわね」

「それで納得した？満足した？」

「そう……まあいいんだけどね。でもこれは貴方が作った外史じゃないのよ？『波才が作った』物語なのよ？」

「あらもう帰るの？じゃ、暇になったらまた来てみたら。その時は他のオススメの外史を教えて上げるから」

「ん？何？また来たの……って貴方も来たの？今日はよく人が来る日ね」

「え？貴方もこの外史を見たいの？」

「面白くないかもよ？貴方の望む外史ではないかも知れないわよ？だってこの外史は『出来かけ』なんですもの。未完成なんだから」

「それでも見るの？」

「ふふ……そう。貴方は物好きなのね。いいわ、貴方が『構わん、やれ』って言うんなら一緒にこの外史を見ましよう。どうなるのかしらね」

「ちょっと私にも見せてくれないかしら？ 私も興味あるのよ」

IF END 〱 我は黄巾党と共に 〱 (後書き)

本編書けないので番外編的な感じです。

前回後書きで再来週と書きましたが思ったより携帯って書けるんですね。

でも二度と携帯では書きたくないです。

目が……目が痛い。

そして携帯で書いたものなのでいつも以上に文章がおかしいかも……。

いつも文章はおかしいのですけどね(泣)  
本当に上手く書けるようになりたいなあ。

取り合えず波才がBADエンドしか思い付かない、これ波才死ぬんじゃない？

波才が他の軍で働くなんざマジあり得ないという人向けに作りました。

作者はBADエンドでは無くこれも一つの終わり方と見ていますがどうなんでしょう？

作者はこれからいろいろとぶっ飛び、波才もいろいろとぶっ飛びますがそれでも『構わん、やれ』って言うってくれる心が広い方々はこれ以降もお付き合いしてくださると嬉しいですよ。

そしてパソコンが帰ってきました。

ですが相も変わらず恋姫などのソフトを起動するとブルースクリーンに……またPC修理に出すことにしました。

いや、本編書きたいんですがorz

本編は恋姫とか資料とか見たりしないと会話に違和感が……あれ？普通の文章も違和感バリバリのあれだから関係ないかと気が付いた  
作者は所詮、あれな作者ですorz

## 第十四話 恋姫物語（前書き）

歴史家はただ事物の経過を書き留め、評価せねばならないだけであり、みずから事物の決定に参加してはいけない。

くマイネツケく



## 第十四話 恋姫物語

天和様には少し眠ってもらいました。

あの目は絶対に引かない、そう言う目でしたからね。

でも、女の子に手をあげてしまいましたね。

うん、死ね。自分。

でも死ぬ前にやるべきことをしましょう。

・・・なんかどこかで見たとある気がしますね。なんだろう？

なんか仲間もろとも死ぬ気がするのは何故？

デジャヴなんかかってやつですかね。

まあいいでしょう。

確かフラグは立たせなかったはずですよ。

・・・立ってないよね？

「一号さん」

「あ、はい!!」

「天和様をお願いします。地和様、人和様も」

そう言って二人を見ます。

その目は納得しきれてはいない目でしたが、それでも私の決心が変わらないのを理解したのか悲しげに目を伏せた。

「波才さんに残って欲しくないと考えてるのは天和姉さんだけじゃないことは解って・・・だから生きて帰って来て欲しい」

「私も！！帰ってこなかったら・・・絶対に、絶対に許さないんだから」

ほんと、自分は馬鹿ですねえ。

彼女たちにそんな顔をさせるなんて男として失格ですよ。

「ええ、また会う時を楽しみにしてます・・・。それと太平妖術の書を私に渡してはくれませんか？」

あれは存在してはいけない。

太平妖術の影響で此度の乱が起こったとも考えられる。例え起こるべきだったとしてもあの書は危険すぎる。

「ええ・・・そうね」

「いらないわよ・・・あんな物」

二人もそれが解っているのか渋ることなく渡してくれた。

太平妖術の書・・・元凶ではありますが天和様達と出会わせてくれたとも見方を変えれば考えられるんですね。それだけは感謝してもいいのかもしれない。

まあ燃やしますけどね。

売ればどれぐらいになるかは分かりませんがこんな危なっかしい書物を世に出してはいけません。焚書してお空の灰にしましょう。その後、灰は畑に蒔きましょう、きっと美味しい野菜がとれる気がします。

懐に太平妖術の書をしまい、私は地和様と人和様に向き直ります。心配そうに見ていますが大丈夫ですと私は二人の頭を撫でる。

「・・・それじゃ二人共、お元気で」

ボグッ

「グフッ」

なぜか地和様にお腹にボディーブローぶち込まれました。やばい、吐きそう。

この拳・・・世界を取れる。

じゃなくて何で殴られたんですか!?

「・・・それじゃ二度と会えないみたいじゃない」

そういつて元気に笑う地和様。

一瞬言われた意味を理解出来なくてポカンと馬鹿みたいな顔をしちゃいましたけど、分かったとき思わず私は吹き出してしまいました。・・・そうですね。

また会うんですからこんな言葉じゃないですよ。知らないうちに私も弱気になっていたみたいです。ほんとこの人達には最初から最後まで私は救われっぱなしでした。恩を返すためにもちゃんと帰って「ただいま」と言わなければなりません。

「また、会いましょう地和様。人和様」

「よろしい!!」

「うん、また会うときまで」

「旦那!!きつと帰ってくるんですぜ!!」

「俺達、ずっと待ってます!!」

「ま、待っているんだな」

私は陣幕を後にします。

後ろは見ませんよ。

ここで後ろを向いたら・・・お二人の顔を見てしまったら迷ってしまいますからね。

一号、二号、三号、私の代わりに三人をよろしくお願いしますね。

あ、三人の真名聞くの忘れてた。

でも今更戻るのもなんだし・・・。

って何も悩む必要はありませんね。

また、会うんですから。私達は。

夜になりました。

今、私はここに押し寄せた皆さんの軍が見える位置にいます。目の前にはたくさん陣幕。ホントたくさんの方がここに来てますね。あの人達の全てが張角様の命を狙っているんですか。  
・・・私を狙っている人いませんよね？いないよね？

「主、本当に良かったので？」

「・・・」

側には美須々と琉生が控えている。

美須々は特に険しい顔をしていますね。

きつとあの陣幕の中での出来事があったからでしょうね。

「私は近くにいたはずなのに気づけなかった。

主の本当の気持ちに。

そんな私が主の近くにいていいのか？

張角様と一緒にいた方が主の為なのでは？

そんな事が顔に書いてありますよ。美須々」

「！？」

「どうして解ったみたいなの顔してますけど、貴方とどれぐらい戦場を共にしてきたと思っっているんです？それに大切である仲間の貴方の心の内ぐらい解りますよ」

「主……ならばなおさらです。本当に良かったので?。」

「覚悟は天和様達と出会ったときに既にしてましたよ。それに良かったかって……また会うんですから。それとも私はここで死ぬので?。」

「!!、そんなことはさせません。この私が主を守り通して見せます!!。」

男としては女の子にそんなこと言われると正直複雑ですね。まあ實力は彼女の方が上ですから任せるとしましょう。……やっぱり本当は悔しいですけどね。でも、彼女はそれだけ信用に足る人間です。本当に成長したなあ。初めて出会ったときは世紀末武将とレディーヌをたして南蛮で割ったような人間だったのに。ちよつとしたお母さん気分ですよ。

「ええ、私も貴方達を信じていますよ。生きてこの時代の先を見ましょう。」

「主……。」

美須々が心酔した表情でうつとりと私を見る。

……あれです。エロいです。

美須々つて結構美人なんですよね。

琉生も美人……ていうよりかわいい系ですが、美須々とは違い私をじつと見つめています。

「旦那……無事二張角達八着イタヨウダゼ。」

影から明埜が現れたもよう。

明埜には影から天和様達を護衛してもらっていました。そう言えば彼女の忍び達は彼女に死ぬまで付き従うとのこと。私の命で従ってはくれないでしょうし、明埜にこの件は任せまじょう。

それにしても、どうやら無事に町に着いたようですね。

「うん、準備完了ですね」

改めて数多の軍を見る。

曹操軍に孫策軍に劉備軍に袁紹軍。

え〜と・・・武将は関羽に張飛に劉備に孔明に鳳統に曹操に夏侯姉妹に荀？に許緒に于禁に李典に楽進に孫策に周瑜に黄蓋に孫権に陸遜に甘寧に呂蒙に周泰に袁紹に顔良に文醜。

何このドリームチーム。

有名所集めりゃいいってもんじゃないですよ？

これ三国志ファンが見たら鼻血もんです、それで敵だよって分かったら首つりますよ？

それぐらいやばいメンツですもの。

これに董卓軍いたら流石にもう脱出とか言ってられなかったでしょう。

というかこんな連中がいるのに逃げられるんだろうか。

無双乱舞とかしないだろうか？

もしかしたら出会っていない武将がホンダムみたいなモバイルスーツだったりしないだろうか。



それともオーモリーガーとか言っで一撃必殺技使ったりしないだろうか？

某騎士王みたいに黄金の剣で数万の軍勢をなんか出して滅ぼしたりしないだろうか？

どこかの吸血鬼みたいに拘束解放して大量の何かを生み出してM I N A G O R O S I にしないだろうか？

そんなことないよ〜ばかだな〜波才くんはって笑い飛ばせないのが恐怖です。

だって呂布が単身で黄巾党三万蹴散らしたそうです。これ絶対に呂布は無双乱舞習得していることでしょう。

果てしなく不安だ。

「・・・死ぬかも」

そう不安をこぼした私は多分悪く無いと思います。

だが、そんな私に2人は笑い、答える。

「主は死なせません。私の命に代えても守ります」

美須々が凜々しく、凜とした表情で笑い、槍を握りしめる。

「旦那、俺達ノ目ガ黒イウチ八嫌ト言ッテモ死ナセネエヨ」

明埜が不吉に笑い、その両手に手裏剣が現れる。

「・・・」

琉生は表情は変わらない。いつもの姿がそこに在るが二つの双剣を

胸の前で交差し、目を静かにつぶる。

ああ、私は本当に良い仲間を持った。

結局黄巾党はこの世界でも終わりを迎える。

でも、それで良かったかもしれない。

天和様達は生きていて、きっと今後も歌っていくことだろう。

黄巾党の張角は死ぬともアイドルとしての天和は死なない。

私は守れたのでしょうかね。

ま、結局は自分の自己満足の問題ですね。これは。

「それでは黄巾党の波才、黄天が沈む姿を拝みに行くとしましよう」

そう言って三人に笑いかける。

一人は笑い

一人は嗤い

一人は無表情

うん、この時間が私は大好きです。

火が砦を包む。

それはおそらく何者かがこの砦に入って付けた火でしょうね。

曹操でしょうか？

それとも孫策？

いや劉備？

まあどうでもいいか。

その火は新たな時代への儀式のような神秘を感じました。

この場には私以外誰もいない。

私は逃げなくてはいけないのだがこの燃えさかる火を見ていると考  
えずにはいられない。

人は誰もも生きているのに理由があると誰かが言っていたけれど、  
この時代で私がすべき理由とは何なんだろうか。元の世界ではない。  
私がいいた漢ではないこの世界で、黄巾党という組織が無くなった後、  
私はどう生きればいいのかのだろうか。

一つの可能性として私がああ日本へ戻れるかとも考えたがそれはど  
うやらないらしい。

つまりこの世界で生きると言うことだ。

「どろろっちゅうねん」

思わず関西弁になってしまった。私、九州なんですけどね。もやもやする胸の内を整理しながら頼杖して逃げ惑う黄巾党の人間を見つめる。

物が焼ける臭い。

人が焼ける臭い。

鼻をつくような噎せ返るような臭いが鬱陶しくもあり愛おしい。

本当に私がここへ来た意味って何なんでしょう？この世界が私を呼んで来たなら私は世界に愛されているはずだ。でもふたを開ければどうということもない人間の一人。確かに氣の力を習得したりはしたけれど人の粹を出ておらず、所詮はただの人間の域を出ない。

黄巾の乱は起こり、劉備にも負け、今こうして滅亡を目にしている。

それにしばらくは私は天和様達とは行動が出来ないだろう。顔を天和様達とは違い覚えられているし、漢王朝が生きている（と言っても死に体だが）今は私はのほほんと暮らせない。  
それに……。

思わずため息が出る。

曹操が私にご執心らしいと言う報告を明埜から聞いた。これでは休まる暇もない。漢王朝が衰え、形だけの物になる日が近いが曹操が墮ちるといつ日は想像も出来ない。

ようするに曹操が私に死んだと思うまであれだ。  
自由に暮らせない。

明埜辺りに頼んで私が死んだという噂を流してもらったとしてもあの用心深い曹操だからしばらくは無理だろうし。張角様が死んだということでも満足してくれないのかなあ。

しないだろうなあ人材マニアだし。

深いため息が出てきます。

でもよくよく考えてみればこの世界に愛されているのは曹操や劉備なのではないのでしょうか。いくら何でも順調すぎるのです。本来なら居ないはずの将達を引き連れ今が雄飛の時と駆け上がっている。

劉備が代表的な存在ですね。

本来なら例え演技でもまだまだ舞台に上がらないというのに今ではチート軍師二人を引き連れて中国大陸を凱旋中。あの調子ならこの戦いが終われば平原辺りで相にでも任命されるんじゃないか？

だとしたら私って本当に何だろう。

あれか？黄巾党Bって感じか？一号達のこと笑えないぞおい。

またまた深いため息。

だがここで私はここへ近づくと存在が気になることに気が付く。ん？誰だ？敵か？あ、この気配は多分……。

「琉生、こつちに来て座りませんか」

姿を現したのは琉生。

熱風が頬を当てているのにも関わらず、その顔は平静そのものだ。

「・・・」

座らないで私の事をじっと見つめる。

私も見つめるが・・・ああ、よく見ないと解らないですけど急かしてますね。

「急いで脱出しようぜって所ですか」

「・・・」コクリ

「いやあくでもちよっと考え中なんですよ」

呼ばれたのに愛されず。

望まれたのに奪われて。

死ぬべきはずが輪廻に囚われて死ねず。

守れたのに守れず。

「琉生？」

思わず私はたずねた。

答えは返って来るはずはないだろうと知りつつもどうしても誰かに問いたくなつたのだ。

「私は誰なんでしょう？何がしたいんでしょう」

私は結局どうしたいのでしょうねえ。  
何でこんなに迷うのでしょうか？

「巫山戯るな」

え？

思わず声をした方を見る。琉生しか居ない。  
目を見開く。

「もしや、貴方が？」

だが私の問いには琉生は答えず、紡ぐ。

「何になりたい？何の信念を持ち、何を掲げ、何に生きる？」

静かで、落ち着いていて、風に乗り、消えてしまつ。  
そんな声で彼女は私に問う。

「解らない、否、目を逸らすのならば主が今見ているもの全てがまやかしてあり主の望むものだけの世界。張角様にすぎり、己の全てから目を逸らした結果」

動かない能面のような表情が今や憎々しく歪んでいる。  
堰を切った水の激流の如く口からあふれ出る言葉に私は動けない。  
目を逸らせない。

「自分で自分を喰らい、飲み込まれ。迷い、迷いて泣いて子供のよ  
うに無垢にそれを問う。毒、毒以外の何者でもない」

琉生が私の胸ぐらを掴んで引き寄せる。  
息がかかるほど近くに琉生の顔がある。  
私はされるがままに引き寄せられ、頭が真っ白になって何も言えない。  
い。

ただ、彼女の言葉が心に打ち込まれ、抉っていく。

「主が目指したものは正義か？皆に望まれ皆に愛され、誰もが貴方を敬い敬意を表す正義か？」



正義？違う。私が目指したのは天和様の平穩。

そんなものかけらも・・・なかったのだろうか？

いや、私はそうなりたかったのかもしれない。皆に認められ、皆に欲せられる特別な存在。勝ちたかった、特別でありたかった。

それでも、それでも私はみつともなくそれを否定しようと、否定しようと言口を開くが・・・その言葉が出てこなかった。

決して琉生に怯えたわけではない、声が出ないわけではない、何故か、何故か出なかった。

「問う、主はもう逃げられない。天和様のためにと言う言葉を言えば主の首を折る」

その目は嘘をついていない。混じりつけのない殺気。どこまでも深い憎悪。

「何をしようと私は従う。例え親を親友を老人を赤子を殺せと言われてもそれに従う。だが迷うことは許さない、否、我らは許されない。主は主であり天和様でも曹操でも劉備でもない。答えを、主だけの答えを示して」

私だけの答え？

考える。ひたすら考える。そもそも私だけの答えとは何だ？私はそれを求めて足掻いて足掻いてみつともなく迷っているが見つかることはない。

どれだけ求めようとも見つかる事は無かった・・・。

はずだった。

見つけた。

見つけましたよ答えが。

天和様では気が付かなかった。地和様では気が付かなかった。人和様では気が付かなかった。美須々では気が付かなかった。明埜では気が付かなかった。曹操でも、この大陸の英雄達を見ても気が付かなかっただろう。

それは何故か。

彼女達は強いからだ。どこまでもまっすぐで、どこまでも迷わない。自分の道を信じ、自分らしく生きているから。縋ったりしない。誰かに求めたりしない。

だが彼女は違う。

私に縋っている、求めている、答えがあると信じている。そんな彼女だから、琉生だからこそ見つけた答えを見つけられたのかもしれない。

「知りませんよ」

凍った。

今この場の全ての動きが止まったように感じた。戦の喧騒も、熱気も、何もかもが止まった。

「それが答えです。知らないんですよ」

「・・・」

琉生は否定しない。ただ私を見ている。

「私は考えない。私の生き方は考える事に意味がない。もう無いのですよ」

ああ、清々しい。考える事はないのだ。もう考える必要も無いのだ。そもそも答えなんて無い。探すだけ無駄だったんです。

私は答えがあると思っていたんですよ、琉生と同じで。全ての事象に全て答えが用意されていると、森羅万象物事全てに答えがあると？だから私の悩みにも答えがあると。何にでも答えがあると思っている。求めれば得られると思っている。まるで子供のようじ。

特別で在る必要があるのですか？正義である必要があるのですか？求められる必要があるのですか？私に価値がある必要があるのですか？私はこの世界で活躍する必要があるのですか？

無いでしょう？そんな必要は無いんですよ。

無理して無理して英雄達と比べるからいけないんですよ。あの人は英雄ですよ？凡夫たる私と比べてどうするんですか？

愉快だ、どうしようもないくらい愉快だ。

なりたくないものになっていた？

違う、なりたくないものになりたかったからなったんだ。

そんな答えなんて無いって。

だって最初から私には用意なんてされてないんですから。このなのにこの世界の英雄はそれがある。答えを持っている。物事全てに答えがあるんですよ彼らには。解りやすいようなね。

英雄の知りたいことを求めてどうすると。英雄の答えを求めてどうしろと？この世界に来てから舞い上がっていたのかもしれないね。自分は特別かもしれないと。

特別じゃ無いじゃないですか。

私は普通に殺されたし、神様にも会ってはいない。特別な力も持っていないし、あるのは所詮人が築き上げた知識。私は何一つ特別な物は持っていない。才能も能力もね。

私は一般人だ。

戦場で舞う将なのではない、戦場で泥まみれに戦う兵なのだ。

それに気が付かなかった。

いや、気が付いていたのだろう。だが目を背けていた。特別だと、私は普通の人間とは違うのだと。

だからこそ琉生は、私は苦しみ、無理に答えを導き出そうと足掻くんですよ。

「馬鹿げている、ああ、馬鹿げているこの世界は」

許されないんだ。こんな答えは本来認められず、許されない。狂っている、最高に狂っている。こんな馬鹿げた世界が在って良いんだろうか。いいんだろうなあ。だからこそ私はここにいるんだから。

琉生の手を振り解き立ち上がる。

不思議と私を掴んでいた手はあっさりと放された。

「まるで私の想いをそのまま著したような世界ですよここは。優しく、優しく、それでいて残酷」

ああ、正義なんて無かった。

ああ、悪なんて無かった。

ここはそんなものが在る世界ではないんだ。

全てが許されて全てが肯定されて全てが否定される。  
何だろう？

ここほど私を迎えてくれる世界は無いのでは？

「許されない、許されない事がここでは許される！！なんて馬鹿げ  
て」

恐怖だ。

「素敵な世界だ」

私は招かれたのではない。私以外の誰かがここへ来られたわけではない。私だからこそここへ来られたのだ。何が世界意志だ。世界意志なんて無いではないか。私は結局私だからこそ天和様と会い、黄巾党になり、戦ったのだから。

私が私の終わりを迎えない限りここでの私は私なのだろう。

「私はね、私なんですよ。ここに生まれた私が私なんですよ。私はそれまでの私でいようとしたから私は壊れた。認められなかった。だから今ここで飄々と生きるこの私こそがここに相応しく、個々で在りつづけ、此処に見えるのです」

だからね、琉生。貴方の答えなんて無いんですよ。そんな答えないんですよ。

あつたら可笑しいんですから。

笑っちゃいますよ？

「だからこそこの答え。様々な物をモノを者を見る為に、私で在るための答え。でもそれは私の答えであり琉生の答えではないのでしよう」

振り返り琉生を見つめる。

「見つけなさい。琉生の答えを。琉生を道を。信念を。それをこの世界は受け入れる。受け入れられないと今の琉生のように感じているのは琉生自身がそう思い込んでいるから」

多分私は琉生と同じだ。だからこそこれ以上の言葉はいらない。私でさえ気がつけたのだ。琉生がこれを解らないはずがない。

「その道が何なのか、その信念はどんな結果を生むのか。それは誰にも解らず、己しか知らない。その道を選んだことは後悔しないでほしい。他の誰でも無い、貴方が生きて逝った貴方だけの物語」

私は後悔などしない。もう決めた。全てを認める。全てを認めて全てを見てやる。私は見てみたい、これから時代を築き上げる者達を、その勇姿を、その歴史を。

呆然とする琉生の頭を撫でる。

「その物語を見る、楽しむ、それこそが私の道。傍観者では無い、なのに傍観者でもある道」

さあて新生波才の物語もここからだ。やっと、やっと始まる。

特別でも何でもない、ただ一人の波才の物語を。

それはただ散歩で終わるかもしれない、つまらないかもしれない、何もないのかもしれない。

それでもそれは自分が築き、作り上げた物語だ。

「私はその道を見ても知ることは出来ない。知っているのは己だけ。私はその道を知っても理解することは出来ない。理解しているのは己だけ。私はその道の在り方を否定しない、否、出来ない。だから見たい、彼らだけの物語を、彼らの物語を」

琉生は静かに目を閉じた。

そしてゆっくりと目を開く。

その目には私のような、先ほどまで琉生が持っていた物とは違う別ものが宿っている。

「主は……もう、主ではないのですね？」

「ええ、私は波才であって波才ではない」

そう言うと彼女は笑みを浮かべ立ち上がった。

初めて見た琉生の笑顔。

それはとても輝いていて、人としての持てる幸福全てを得たようなそんな笑み。

「なれば僕は主の物語を見たい。美須々、明埜は主の道を歩くけれど僕は物語が見たい。それが僕の答え」

ああ、ほんと。

私の部下が、この場にいたのが彼女でよかった。

「ええ、それが答えなら私は見せなければならぬでしょうね。琉生の物語を紡ぐために」



「主!!そろそろ時間が……」

その言葉に振り向くとそこには肩で息をしている美須々の姿があった。

走ってきたのだろうか?ずいぶんと苦しそうで額には汗が浮かんでいる。

時間ねえ……。

黄巾党の陣営を見ると火が点きまくって敵が侵入。みんなでマイムマイムを踊っている。

あ、なんか楽しそう。

「そうですね、それではちょっと散歩してきますよ」

「はいいいい!!?」

目を見開いて大口を開けて歯茎まで見せている美須々をよそに私は歩き出す。

「ちよつと主!!今、孫策軍が進入して危ないですからすぐに」

私を止めようと走り寄る美須々。

だが琉生に腕を捕まれて逆に止められる。

「琉生、放すのだ!ここで主を行かせては」

「それが主の望みなら止めることはない」

え？と言わんばかりに目を点になる美須々。

余りの驚きに口は金魚のようにはくぱくと意味もなく開いては閉じている。

「る、琉生！？貴方しゃべれって痛い！！」

むんずと髪を捕まれた美須々は引っ張られていく。  
私はそれを笑顔で手を振りつつ見送る。

「琉生！？とりあえず放してください、痛い！！痛いです！！」

「・・・」

琉生は放す必要も話す必要も無いと言わんばかりにいつも通りの無表情と無言で美須々を引っ張っていく。

多分彼女はこれからも今までと同じで話す事はなく、何があってもあの鉄面皮のような無表情を止めることはないだろう。

いつも通り、いつも通りだ。

ただ少し私が変わっただけ。

そんな彼女達を見送り、「さあて」と言っつて腰に手を当て胸を張る。  
どうせこれで黄巾党は終わり。

だったらもう少しこの良い気分のまま散歩するのも乙なものかも知れない。

相も変わらず人が絶命する叫びがそこらかしこから聞こえてくるが、それも風流だ。

そう感じる私は少し壊れてしまったかもしれないが、これが楽で自然体なのだ。

わざわざ自分を偽る必要も無いだろう。

琉生が認めてくれたのだ。

美須々や明埜は大丈夫だろうが天和様達はどうかなのだろうか？  
嫌われるだろうか？

・・・どうやら私は変わったとしても三姉妹LOVEなのは変わらないようです。

思わずそんな自分自身に苦笑する。

「人は魅力に溢れている、琉生や美須々、明埜のように。そんなおもしろい世界だからこそ私は主たるあの人達をここまで慕っているのかもしれない。どれ、私も彼女のように負けてはいられませんね」

なんせこれからは新しい道を考えなくてはいけないし、物語も探さなければならぬ。

やることはたくさんあるのだ。

だからせめて今だけ、今だけは。

のんびりと散歩がしたい。

そう思つて私は喧騒渦巻く戦場へ歩き出した。

美須々 side

「琉生！！お願いですから放してください！！主はもう止めませんから！！」

そう言うと言つと琉生は放してくれた。

いくら髪を短くしたとはいえ、これ以上短くと言つか髪を抜かれるのは一人の女としてきついものがある。

「まったく・・・もう少しやりようはあったのでは？」

「・・・」

先ほど喋ったのが嘘のようにいつも通りの琉生へと戻っている。  
要するに喋らない。

「それにしても貴方声が出せたんですね、真名を交換する際にも筆でやりとりしたのですが」

「・・・」

「突然声が出せるようになったのですか？」

「・・・」

表情から読み取るうにも無表情のため読み取れない。  
思わずため息をつく。

主は読み取れるようだが自分にはまるで解らない。

かといって心を許していないというわけではないというのも解っているのだが・・・いかんせん辛いものがある。

たま〜にこうかな〜と思うこともあるのだが。

美須々は諦めて今頃のんびりと鼻歌でも歌いつつ歩いているであろう自らの主を思い浮かべる。

「主はたいそう機嫌がよかったようですが・・・どうしたのでしょうかね」

「・・・」

いつもの主と違つと美須々は気が付いていた。

前のように禍々しくなくより一層人を惹き付けるものになつていった。

おそらく琉生があの場合にいたということは琉生が何かしら関係しているのだろう。

聞きたいがそれを答えることはないと解っているので美須々は聞きはしない。

だが羨ましく感じるのだ。

私では主を今まで通りの主に戻すことしかできなかった。

だがどうだろう。

今の主は輝いている。

見ているだけで惹き付けてやまない英雄のそれとなっているのだ。だが、そこにかつて感じた曹操のような何かを求めてやまないような気迫はないのだ。

主は何かを求めている。

だがそれは・・・何というか。

違うのだ。

主はまるで英雄であり、英雄ではないのだ。

そこにより一層の魅力を私は感じ、同様にそれを磨き上げたのである。琉生には嫉妬している。

何故私ではないのだろう。

何故私ではなく琉生がそれを・・・。

「・・・知りません、そんなもの」

考えても解らないものを考えてどうするんです。考えるだけ無駄。

べつに琉生だろうが明埜だろうがいいじゃないですか。

主はより一層素晴らしくなった。

我らをより惹き付けるようになった。

格好良くなった。

それで良いじゃないで・・・。

そう思った私の耳にくすくすと楽しくて仕方ないというような忍び笑いが聞こえた。  
えっと思って忍び笑いの犯人を捜すと琉生が楽しそうに微笑んでいるのを見つけた。

多分私はさぞや滑稽な顔をしていたであろう。

今日は琉生で驚くことが多すぎる。

おかげで今の私の頭の中では何故か主が阿波踊りを踊っている。

そんな私を見て琉生はぼつりと。

聞こえるか聞こえないかの声で呟いた。

「主と・・・同じ答え」

その言葉に意識が戻った私は思わず声を出して笑った。

そうですか、主と同じですか。

それはそうですね。

だって

微笑む琉生と悠々と戦場を散歩しているであろう主に聞こえるよう

な大声で言った。

「当然です、私は主の配下!!程遠志ですからね!!」

その言葉について琉生は声を出して笑いはじめた。

楽しそうに、楽しそうに。



#### 第十四話 恋姫物語（後書き）

自分の後書きはぶっちゃけいらぬことに気が付いた。

なんか悔しくなったので、史実武将を簡単に後書きで恋姫オリキヤラっぽく紹介することをこれからやることにしました。

後書きで駄文使いの作者に「この史実武将書いて欲しいなあ」という方は感想覧に感想と一緒に武将名でも書き込んでくれると作者は悪ノリしてやるかもしれませぬ。

だって味の素だもの。ノリで生きているもの。  
だから出来もあれになるから注意です。

今回は呉編の史実武将でもし作者が恋姫化したら。

「だから！！冥琳！！なんでこれ許可してくんないの!?!」

「いくら何でも金がかかりすぎだ……」

「それがいいんじゃない!?!」

何やら騒がしく廊下を歩いてきた波才はとある執務室を覗き込む。  
そこには冥琳と……あ、目があった。  
すると中にいた女の武将はやった！とばかりに波才を執務室の中  
に引きずりこんだ。

「ちょっと波才聞いてよ！！」

「一体なんですか賀斉さん」

この賀斉と波才が呼んだ武将、髪は琥珀色で目はパツチリ、スタイ  
ルもいい美人なのだが、かなり自分の身を着飾っている。

ずいぶんとこった服を着ており装飾は繊細で豪華。

髪を一つに結んでいるのだが、その髪に飾られている金のアクセサ  
リもかなりの名工が手掛けた物だ。

両腕にある腕輪も龍と鳳凰がそれぞれ掘られていて真ん中には玉が。  
首飾りには珊瑚が飾られており、妙にけばけばしいのだが美人のた  
めにむしろ彼女がそれらを身につけるのは当然だと感じてくるのが  
不思議である。

「何ってこれを見てよ！！私の隊の船隊作るために必要なのに冥琳  
がお金出してくれないの！！」

「船隊はこれからも必須なので別にいいのでは……って何でしょう  
？私の目がおかしいのかな？零の数が四つほど多くありません？」

思わず波才は自分の目を疑った。

きちんと詳細な内容が書かれており一つ一つの材料の予算などが綺麗にまとめられている。賀斉がきっちりとした性格なのが見えるのだが……問題はその内容だ。

これ、国家予算じゃないんですよね？船団に使う費用ですよね？

顔だけ動かし冥琳を見るといように疲れた顔をしてため息をついている。

「あの、賀斉？この帆に金を織り込む意味は？」

「だって豪華でいいじゃない!!」

「あの、賀斉？この最高材質の木は何のために？」

「何で私が普通の木で出来た船に乗るなんて絶対いやよ!!」

「……冥琳。私帰ってもいいですかね？」

「……波才、私だけでは役不足だ」

既に冥琳の眉は八の字になり、苦勞がにじみ出ている。

そんな冥琳を無視して賀斉は自信満々と胸を張って言い放つ。

「豪華な船隊を作れば負け無しよ!!それぐらいの値段当然!!」

「あの……その自信はどこから出てくるので？」

波才が思わず尋ねると、彼女は元気に笑いながら、ぐっと親指を突き出し自信満々に言い放つ。

「だって安物の船に豪華な船が負けるわけないじゃない！！」

冥琳と波才は互いに深いため息をついた。

< 賀齊、字は公苗 >

山越などの異民族の討伐・平定に活躍した人物で、武勇に優れたばかりでなく地方統治にも手腕を発揮した有能な人物。

異民族の先頭のエキスパートである。一万数千の兵で山越の抑えを受け持ち、合肥の戦いでも鬼神、張遼率いる部隊から牙門旗を奪い返す活躍を見せるなど戦闘においても武勇を見せつけた。

非常に派手好きな事でも有名であり、常に上質で豪華な武具を着飾

って戦に赴いた。

自身だけではなく配下の軍装も豪華に飾りつけ、遠目に見るだけで彼の軍と分かるほどであったという。

洞口の戦いにおいても、賀齊の軍は武器甲冑や軍用機具はとびきり精巧で上等のものを揃え、船には彫刻・彩色を施し透かし彫りで飾り付け、青い蓋を立て赤い幔幕を垂らし、大小の楯や矛には花文様を彩り鮮やかに画き、弓や矢はすべて最高の材質のものをを用い、蒙衝や戦艦の類いは遠くから見ると恰も山のようにであったという。曹休はその威容に畏れをなし、そのまま軍をまとめて引き返した。

作者が書くと元気&おてんばの浪費家。

赤壁で劉備達が啞然としながら彼女の船団を眺める姿が想像できま  
すね。

第十五話 ヒメキラジカル（前書き）

人生を喜びなさい。なぜなら、人生は、愛し、働き、遊び、星を見つめるチャンスを与えてくれたのだから。

くヘンリー・ファン・ダイクく

## 第十五話 ヒメキリラジカル

「Fac me tecum pie flere」

歩き、歌う私に聞こえるのはかつての同胞の絶命の叫び。

「crucifixio condolere」

血が舞い、赤いヘモグロビンが漢の大地を染める。

「donec ego vixerō」

兵達の怒号と叫びがこだまするこの戦場を眺めつつ私は歩く。

「Juxta crucem tecum stare」

炎が、火が人を妖しく狂わせる魅力を放ち、戦場を謳歌する。

「et me tibi sociare」

人が焼ける臭い。余りにもそれは牛や豚のように食欲をそそるものではない。

「in plancu desidero」

ふと目に着いた旗を見るとそこにはいつぞや自分が演説した例の言葉が書かれている。

「Fac me plangis vulnerari」

それはかつての夢の残照。その夢は私の夢でもあり、ここに集った  
彼らの夢でもあった。

「cruce facinebriari」

空を舞う火の粉がその旗に火を付けた。ゆっくりと、ゆっくりと灰  
になっていく。

「Et cruore Filii」

それを私は唄いつつ見つめる。この感情は何だろうか？後悔？怒り？  
悲しみ？喜び？

「Sit laus deo patri, summo chri  
sto decus」

そしてやけに人の焼ける臭いが濃いと思いなと見回す、一人の人間  
が燃えていた。

「spiritui sancto」

見れば生焼けでうつすらと顔が解る。まだ若い。苦悶の表情を浮か  
べたまま、光のない目は空を見つめている。

私も空を見上げる。

「tribus honor unus, Amen」



どこまでも、どこまでも広がり、星が輝いている。

その美しさに思わず唄うことを忘れ、感嘆の声が溢れる。

本当に綺麗だ。

この空はおそらく現代では見ることが出来ないであろうこの時代の宝だ。

空に手を伸ばす。決して届きはしない星を求め、私の手は宙を彷徨う。

自然と笑みがこぼれる。

これほどの星が空に煌めいて人を魅せる。私は魅せられているのだ、億千万の星空に。

この時代の人間達は宇宙を知らない。ただ、この星空に思いを寄せ、夢を見ていたのだろう。

太古よりこの地球を見守り続け、人を魅せ続けた星空。

もし魔法という定義が世界にあるのならこの星空ほど偉大な魔法はないだろう。

綺麗だ。

本当に綺麗だ。

綺麗だから

「戦う必要ないんじゃないですかね、凜猛な殺気が漏れてますよ?」

「貴方戦場を唄いながら歩くだなんて何を考えているの?」

呆れるような声が聞こえたので振り向くとそこには褐色の美女がいた。

つり目で赤く露出が多い服を纏い、桃色の髪は一つに束ねられている。

手に持つ剣は人を既に何人が切っているのか赤く染まり、だがその輝きは衰えておらず闇夜に鋭い光を放っている。

さぞや名のある名剣だろう。

それに見合うだけの實力も今の立ち姿から感じられる。  
そんな彼女の問いに私は眉間に皺を寄せて考える。  
考えるのだが・・・うん。

「何を考えているのでしょうか？」

「いや、私が尋ねているんだけど」

「そう言われましても困るんですが」

「それ私が言うべき言葉だと思うんだけど・・・」

「え・・・ずるいです」

「ずるいですって・・・貴方ねえ」

頬を引きつらせ、呆れたような声を私に浴びせてくる。

それでも先ほどから私に向けられている虎のような殺気には微塵も陰りが無い。

流石というべきか、さぞや名のある武人なのだろう。

それもこの時代で褐色で赤い服を着ている人間などかなり絞られる。  
それにあの剣、よくよく見れば・・・。  
ふむ、孫呉の姫君か。

それである宝剣を持つ資格がある当代ということはあれだ。

私は首を傾げながら尋ねる。

「それで、『孫呉の小霸王』孫策様が何の用でしょうか？生憎お茶の準備はしていないのですが」

「あら？私の事知ってるんだ。でもその小霸王って初めて聞いたけれど」

「おお、記念すべき一号ですね。今晚は赤飯炊きましよう」

「ちょうど火ならそこらかしこにあるもんね・・・それで」

殺気が濃くなる。

遊びは終わりってことみたいです。

もう少しこのような言葉遊びを楽しみたかったですけど・・・仕方ないですね。

それにしても英雄はみんな生き急いでいるなあ。特に孫家は彼女のように前線に出張る癖がある。先代孫堅もそうだった。少し彼女のことか心配になる。

疲れないのだろうか？若い頃からあんな足の出し方したらリウマチにならないだろうか？前掛け持ってきてあげるべきだろうか？

そんなどうでもいいことを考えている私をよそにますます殺気が濃くなるのを感じる。

肌がぴりぴりしますね。おお、怖い怖い。

「頭にそれ巻いてるけれど」

それとは黄巾だ。

あ、まだ被ってたんだ。  
取るの忘れてた。

「黄巾党で間違いないわよね？」

「ええ、そうでしたよ」

「そう、なら死になさい」

気が付けば振り抜かれ突き出される孫家の宝剣。

何人の血をこの戦いで吸ったのかは知れないけれどまだまだ吸い足りないらしい。

孫策さん自身の目も爛々と輝いてかつて殺し合った漢の將軍を思い出させる。

あの戦いと違うのは私がそれを平坦な目で平然と見ていることだろうか？

私を殺さんと迫る剣に一切の迷いはなく的確に人体の急所である首に向けられている。

よっぽど人を殺し慣れているのだろう。

速い。

並の将や兵なら何故死んだのかも解らずに逝ってしまうだろう。殺すことに慣れ、幾多の戦場を駆け巡った彼女の生き様が愚直なまでに現れている。

というか現れすぎてあれだ、対処できる。

突き出される剣を受け流し、側面を手の甲で叩きはじく。

折るつもりだったのだがその剣は折れない。

よほどの名剣なのだろうなあ。

驚き目を見開く孫策へそのまま掌底を素早く彼女の腹に繰り出す。

「グハッ!」

孫策はその掌底をもろに受け吹き飛んだ。

多分油断してたんだろうなあ。

そうじゃないところはいかなんだろう。

孫策さんとは反対に全く殺気を出していなかったし、彼女が先手を

切って剣を振るっても動かなかったし。

この時代の武將ってみんな孫策さんみたいに先手を行きたがる。そりゃまあ攻めなくちゃ死ぬからしょうがないのだけれど、合気などの『後』の技には見覚えがないのだろうか。

それとも自分が少しこの世界で武人としての格が上がったのだろうか。

どっちにしる油断大敵。

その首に剣を突き立て敵の命が尽きるのを見るまで彼女は油断をすべきでは・・・まあこんな所で説教たれるのもなんだしべつに良いか。

説教とか疲れるから。するほうもされるほうも。

そう思い苦しげに肩で呼吸をする孫策に歩み寄る。

普通なら吹き飛ばされて終わりだろうけれどこの世界にはおかしな力があるから孫策さんはああなっている。

それは氣と呼ばれるもの、氣功ともいう。

存在を知ったときにはどこの格闘漫画だろうと思ったがよくよく考えれば武術にもそれと思わしきものも多いし、この世界ではより一層氣という概念が強いのもかもしれない。

まあともかくそれを私は村のある傷だらけの少女から学んだのだ。

彼女はリアル 動拳を平然と打っていた。

それを見た瞬間土下座して教えて欲しいと頼み込んだ。

あの子供のころ一度は夢見たであろう、めはめ波か波 拳を出来るチャンスなのだ。

私はどちらかといえばソニックーム派だった。待ちガイル使いだつたからな。近所の大会でガイルが禁止されたときは初めてマジ泣きしたのを覚えている。

それで習ったがどうやら凡人たる私には使えないようだった。

二十歳になって初めて二度目のマジ泣きした。

主人公補正だと思ったのが現実補正だったショックに涙が溢れた。まったく波動拳の性能を持ち合わせていないようなのだ。ならば、ならばせめてソニックームだけでもと思ったがそれすらも出来なかった。

私の春は終わりを告げた。同時に夢も終わりを告げた。

だが、私は『内気功』については目を見張るものがあったようだ。

テレビで武道家がバットで打たれてもバットが折れたり、瓦割りをしていたりする姿を見たことはあるだろうか。

長年体を磨き上げ、一種の呼吸法などにより気功によって体を強化しているからこそ出来る芸当だ。

この世界だとそれが化け物級になる。

身体の限界と実力を底上げし、体の内に作用させる。

それが『内気功』だ。

『外気功』？

あれはさっき言った通り波動拳みたいなものと思ってくれれば結構。どうせ身につかないのだったらどうでもいい。

才能があるやつが身につけて「波動拳！！」とか言っていればいいんだ。

才能がない私は地味に『内気功』で生きていくよ。



ちくしょう。

まあともかくそれにより底上げした岩を貫く鋭さに全身全霊をただ一点のみに絞った弓のような一撃。

さらにお得感を出したいがために自分の内気功を手に集中させ、逆に相手の体内の気功を乱すという事に成功。

さも俺TUREEEEみたいな感じで言ってるように聞こえるかも知れないが、恐ろしいことに割とこのぐらいはこの世界常識の範囲内だったりするのだ。

というか聞けば10才ぐらいの女の子が自分の何倍もの大きさの鉄球を扱って黄巾党をぶっ飛ばしていたらしいが、そんな人間がいる世界でこんな小細工してやっとのこさやってる事考えるとちよつとへこんでくる。

いろいろと落ち込んでいるうちに気が付けば私は孫策さんを見下ろしていた。

とりあえず、首でも貰っておくかと剣を抜く。

そんな私を孫策さんは憎々しげに眺める。だがその目は穏やかなものに変わり、閉じられた。

私はその意味が理解出来ず、ただ彼女を見つめる。

やがて孫策はただ一言、言葉少なく言った。

「・・・私の負けよ。殺しなさい」

私はその言葉を深く噛み締め、感嘆の吐息を漏らした。自分の目が子供のように輝いているのを感じる。

・・・格好いい。

朱雫もそうだが死を前にしていったいどれほどの人間が彼女のようにそれを認められるのだろうか。

今、自分の死を受け止め、生を受け止め、全てを受け入れる。これがこの時代の英雄、孫策なのだろうか。だとしたら私は彼女に魅せられている。

この輝きがあるからこそ人の物語は紡がれ、語られていくんだろうなあ。

そう思いこの英雄を見つめる。

なんと、なんと美しいのか。

というか私は首を貰ってどうしたいのだろうか？

ここに来て私はその事に気が付いた。とんだうっかりさんだ。

お土産に持って帰るにしても物騒すぎるし、腐るし、そもそも持って行くところないし。

黄巾党は絶賛崩壊中だし、天和様にこれプレゼントって送ったら卒倒しかねない。

黄巾党の首級みたいに首を洛陽に送って賞金もらえないし・・・むしろ贈っちゃったら血眼で私を殺しに来るだろうし。

それ以前にここで殺したら何やら嫌な予感がする。それに面白くないのだ。私は英雄が紡ぐ物語が見たいのであって終わらせたいわけではないのだから。

・・・どうしよう。

失礼かも知れないけれど知らない。

まさか信長みたいに鬪體酒するつもりも毛頭無いのだ。

ため息をついて剣を引く。

「・・・殺しませんよ」

私の声に殺気がないのを感じたのか顔をしかめる。

「すでに張角様、その弟達も死にました。貴方の首をもらう意味がありません」

そう言つて私は剣を納める。

それでも納得がいかないのか孫策は更に問う。

「・・・復讐とかは考えないのかしら」

「これは必然だったのかも知れません」

そう言つて私は頭に巻いた黄巾を取り、空へ放り投げた。  
もうこんな物私にはいらなからぬ。

「時代は変わります、張角様はその為の礎になる天命であつた。彼ら自身もそれは解つていたのかも知れません」

黄巾を目で追い続ける。あれにどれだけの意味があつたのだろうか？  
少なくとも今の自分には必要が無い。既にあの黄巾は私が身につけているからだ。

「なんの為に私がここに居るのか、日本にいたのか、全ては解りません。でも一つだけ解つたことがあります。張角様は死ぬ、これはもはやどうしようもないみたいです。ほんとくそつたれた天命ですよ。正直ぶつ飛ばしたくなります」

そう言つて自嘲気味に笑う。本当におかしな世界だ、だからこそ面

白く、楽しい。

「・・・」

孫策は黙って私の言葉に耳を傾けている。

「それでも、自分が守りたかった者は守れました。私の心残りがおかげさまで無くなりましたよ。張角様の命と引き替えにね。その分は自分のくそつたれた天命にも感謝しても良いかもしれませぬね」

黄巾が近くで燃えていた火の上に落ち、燃える。

「黄巾党の波才はここで死にました。前と同じでね」

巻き続けた黄巾。

この世界に降り立ちつげ続けていた黄巾が今、燃え尽きた。でもそれは無くなったわけではない、私が私で在る限りあの黄巾は私の下にあるのだから。

「これからは一人の人間、一人の波才として生きていきましょう」

今の自分はさぞや爽快な顔で笑っているだろう。よくわからないが

すごく今の自分は良い気持ちだ。こうやってもう一人英雄見られたしね。

この一人の英雄。孫策の物語、こんな時代の贅と共に滅びるのはあまりにも惜しい。

孫策の顔は驚きと戸惑い。口を開けて啞然としていた。

「時代の英雄よ、私達が成し遂げられぬ時代の足音を聞き、進め。これからは貴方のような英雄の時代なのだから」

そして私を楽しませて欲しい、貴方の物語はとても面白そうだ。そう言っつて私は歩き出す。

ふと、空を見る。

私はここにいる。ここで生きている。

それにしてもいい気分だ。自分というちっぽけな存在を見つめ直して構築してみればなんと無駄のない清んだ美酒になることか。

世俗に囚われ汚濁を啜っていた過去の自分にこの至上の美酒を飲ませていれば・・・いや、過去に汚濁を啜っていたからこそこの美酒は生まれたのか。

更に浮かぶ月のなんと美しきこと。この美しさに気が付かず地ばかりを見つめ、今を見て先を見ない己のなんと愚かなことか。だがだからこそ物語を愛し、今ここでこの月を見上げることが出来る。

今ここで我が宿星を見つけない。出来などしない。だがこ

の広大な天に必ずや輝いているであろう私の宿星を想像するだけで  
不思議と心が躍る。

確かに黄天は堕ちよう、だが我が宿星は未だにこの天から堕ちてい  
ませんよ？

いえ、果たして黄天は堕ちているのですかな？

私は不敵な笑みを浮かべると天に唾吐き歩き出す。

「おお、黄天の堕ちる時よ。なんと心地よい時か」

孫策 side

私は張角を探して先行し、単独で探していた。  
ほとんどの黄巾兵は逃げ惑い、たまに斬りかかってくる者もいたが  
それらを全て私は走り抜ける。

「（張角はどこにいるのかしら・・・）」

私は皆の中心にいる。手に入れた地図ではこの辺りにおそらく張角  
の陣幕がしかれるはずだ。私達は今、袁術軍にいいように使われて  
いるがそのまま終わる気はさらさら無い。独立するためにもここ  
で武功を轟かし、有用な人材を孫呉に取り込まなければならぬの  
だ。

既に戦功第一は私達の火計により得られたけれど、それだけではま  
だ足りない。首級である張角の首を手に入れなければ。

ふと、立ち止まる。

今、何か聞こえなかったか？

耳を澄ませる。



「Dying to survive（生き延びるためにあがく）」

歌だ。

この戦場に不釣り合いなほどその歌はゆっくりと流れ、私の耳に潤いを与える。だがその歌を聴けば聴くほど不思議なことに切ない気持ちになってくる。聞き慣れない言葉で歌われる歌に私の意識は研ぎ澄まされた。

いったい誰が？

もちろん張角の首は最重要事項。だが私はこの歌を歌う人間がどうしても気になって仕方がないのだ。歌の流れを追うように私はゆっくりと、火に惹き付けられる蛾の如く静かな足取りで砦を進む。

見つけた。

どんな人間かと思えば普通のどこにでもいるような、だが何か分からない不思議な男。そして頭に黄巾を巻いている。つまり、私の敵空に何やら手を彷徨わせているが何をしているのだろうか。計りかねて伺いつつ隠れて様子を見る私に男は声をかけてきた。

驚いた。

ここまで気を隠している私を見つけられるなんて。

警戒しつつ私は黄巾の男と話す。だが何故だろう？この男、何かおかしい。まるで雲を掴むかのような錯覚を覚えさせられる。

いけない、取り込まれる。

そう思った私は男との話を強引に切り捨てる。この男はおかしい、話している内にどんどんこの男のことが知りたくなる、もっと話していただく。

「頭にそれ巻いてるけれど」

だけど時間は無い。

今はこの男が黄巾党かそうではないか。私は不思議とこの男が黄巾党だと思えなかった。まるで幼い頃から知り合いで、他愛もない話を今もしていると錯覚させられるのだ。

だからこそこの男は異常だ。

話すだけで親しみが、興味が沸いてくる。場違いだと分かっているのにもっと話していただく。

私の人間としての感情を殺し、内に潜む獣を引きずり出す。

熱い、熱い、熱い。燃えるような熱さが私を蝕み、意識が研ぎ澄まされていくのを感じる。

もう迷わない。殺せる。

「黄巾党で間違いないわよね？」

「ええ、そうでしたよ」

「そう、なら死になさい」

私は剣を抜き、その首目掛け突き出す。男は動かずにそれを眺めている。

既に剣は人が避けられない位置にまで到達、死に神の鎌は確実にこの男の首に手をかけている。

殺した、そう思い勝利を確信した私の心は次の瞬間打ち碎かれる。

男はまるで柳のように剣をかわした。

かわした？あの距離の剣を？

私はその一瞬、驚きによって致命的な隙が生まれた。それは隙と呼ぶには余りに短く、あって無いような物だがこの男には十分だろう。剣の側面を弾かれ、私の剣が宙を舞う。衝撃により剣を持っていた手が宙に躍り、それに流されて体が崩されるのを私は感じた。

腹部に何かが当たったと思った瞬間それは爆発し私を吹き飛ばした。体が大地を転がる。手をつきなんとか押しとどめたが体が思うように動かない。まるで自分ではない何者かの体に入ったような違和感、体がいうことを聞かないのだ。

息が・・・息が出来ない。必死に何度も息を吸い込む。やっと呼吸が呼吸らしくなってきたとき金属が擦る音が聞こえた。

顔を上げれば目の前にはあの男が剣を抜き、私を見下ろしている。

私は負けた。

この時初めてそれを実感できたような気がした。

「・・・私の負けよ。殺しなさい」

まさかここで死ぬとはね。ごめんなさい冥琳。どうやら先に私は逝くみたい。

蓮華を・・・頼んだわよ。

そう思い覚悟を決めた。

だがいくら待ってもその時が訪れない。

不思議に思い、閉じた目を開こうとした、その時。

「……殺しませんよ」

そう黄巾の男は言った。

始めは虚言かと思ったがその声に殺気がないことに私は気付いた。

そうか、この男は私の名前を知っていた。ここで私を捕まえて人質などの利用価値を見いだしたのか？

ならば舌を噛み切ろうかと思ひ、改めて男の顔を見ると

その顔はとてもこの戦場には場違いなほどに穏やかな顔があった。

「すでに張角様、その弟達も死にました。貴方の首をもらう意味がありません」

この者の主である張角とその弟たちは死んだ？だとしても何故このような穏やかな顔なのか理解できない。私は母さんが殺されたときにはこんな顔をしてはいらなかった。復讐に身も心も委ねようとしていた。

なぜだろう？そう思ったときには私の口は声を発していた。

「……復讐とかは考えないのかしら」

「これは必然だったのかもしれませんが」

必然？彼の主が死ぬことが？

そう考えていると男は頭に巻いていた黄巾を上にはり投げた。

「時代は変わります、張角様はその為の礎になる天命であった。彼ら自身もそれは解っていたのかもしれませんが」

解っていた？張角が自分たちが負けることを？

「なんの為に私がここにいるのか、日本にいたのか、全ては解りません。でも一つだけ解ったことがあります。張角様は死ぬ、これはもはやどうしようもないみたいです。ほんとくそつたれた天命ですよ。正直ぶっ飛ばしたくなります」

そう言っつて男は自嘲気味に笑う。

言っつていることが解らない。だが嘘を言っつているようにはどうしても思えなかつた。

ならばこの男が言っつていることは・・・全て真のこと？

「それでも、自分が守りたかつた者は守れました。私の心残りがおかげさまで無くなりましたよ。張角様の命と引き替えにね。その分は自分のくそつたれた天命にも感謝しても良いかもしれませんね」

そう言っている彼の顔はとても楽しそうで今にも笑い出しそうだった。

守りたい者は守れた？

この男は張角こそが守るべき者だったのでは？

それを守れなかったのに感謝する？

張角は生きているのか・・・いや、この男の言葉に嘘はない。ならばなぜ・・・？

「黄巾党の波才はここで死にました。前と同じだね」

思わず目を見開き、正面の男をまじまじと見つめてしまう。

波才・・・波才!?

この男がああ黄巾の将の波才!?

「これからは一人の人間、一人の波才として生きていきましょう」

そう言つて波才は笑った。

私はその姿にみとれてしまった。それほど笑う波才の姿は美しかった。全てを無くし、全てを獲たようなその笑う威風堂々とした姿は私が今まで見た何ものよりも美しかった。ただ、この美しさを『美しい』と言う形でしか表せない自分が嫌になる。

その波才が私に言う。

「時代の英雄よ、私達が成し遂げられぬ時代の足音を聞き、進め。これからは貴方のような英雄の時代なのだから」

英雄ね……。

波才は自分が時代を作ると言っている。まるでこの大陸の未来を語るように。波才とは何ものだろうか。全てを見通すがごとく語り、高い実力を持ち、勇名をこの大陸に轟かす。それはまるで天の者みたいな……天の者？

まさか波才は！！

そう思い声をかけようとするがその姿は既にはるか遠くにあった。

「おお、黄天の墮ちる時よ。なんと心地よい時か」

動けない私の目に遠ざかる波才の背が煙の中へ徐々に消えていき、やがて見えなくなる。

私のかんが告げている。



この男は天に通じていると。  
だからだろうか、波才は魅力に溢れている。  
人を惹き付けてやまない狂気のような魅力。

「へえ〜面白いじゃない」

私は笑った。

あのような男がこの乱世にいるのだ。  
また会う日もあるだろう。

それにしても彼を孫呉に招いたらどうだろうか。  
あの頭の固い妹にあのような飄々とした男をあてがったらさぞや面白くなるかもしれない。

天の人間であろうと無かろうとあそこまでの不思議な魅力を放つ男だ。少なくとも招いて損は無い。実力も十分、武勇も十分。漢王朝も死に体だし、張角が死んでいるなら問題は無い。幸い悪名もたつておらず武名だけが聞こえている。

それになにより、これが一番重要だが。

私は波才を気に入った。

「ふふ、決めた!!」

決めた!!波才を貰っちゃお

## 第十五話 ヒメキリラジカル（後書き）

これにて長かった黄巾党編は終了です。

初めてのことはかりで大変でした。みなさんにこんな駄文にお付き合いましたき光栄の極みです。

というか本当は黄巾党編はあっさり終わるはずだったんです。官軍との戦いもなかったし、明埜の話も琉生との話も無かったし、それでは流石に読んでくれる人に失礼だなあと思ってた慌てて付け足したのを覚えています。

付け足したのも駄文だったわけですがorz

そしてさっそくですがまたパソコン修理です……全く修理を要求した所直ってませんorz

小説書く以前にこのままでは私生活にも問題あります。

なのでだいぶ時間は空くかもしれませんが地震の時みたいに必ず戻ってくるのでどうぞよろしく願います。

さて今回の武将紹介は作者も大好きなあの人です。

リクエストで来たときはマジ天命とか思ってた喜びました（おい

「それで、劉備に馬を盗まれた訳ね」

「……………」(コクリ)

頷いた少女は赤き髪、服はカジユアルであり露出が大きく物静かな空気を纏っている。彼女の名は呂布。天下無双の武人なり。

「で、私に劉備にお仕置きしてこいつてわけね？」

「……………大丈夫？」

対する先ほどからその呂布に物怖じせず女性。呂布とは対照的にまさに武人と言える姿をしている。銀色の輝きを放つ白銀の鎧を身に纏い、短めに切られた茶色のカールストレートは戦いやすさを追求した彼女なりの戦闘スタイルだ。

武具には一切の装飾はなく華はないが、かえってそれが上品に感じる面持ちであった。

彼女は心配する呂布に笑いかける。

「貴方は私の君主様、自信を持って言えばいい。ただ一言ね」

彼女の名は高順、字は語られてはいない。

愚直なまでに武追求し、彼女の隊は落とせぬ陣はない。故に彼女と彼女の部隊は『陷陣営』と呼ばれ、恐れられていた。

呂布はそんな彼女の覚悟を感じ取り、彼女がただ望むままに命令す

る。

「劉備……邪魔」

「了解、我が主君にあの愚か者の首を捧げましょう」

「つく!! 慌てるな!! 落ち着くのだ!!」

戦場で兵を鼓舞する関羽。だが、兵達は混乱し、ただ敵に討たれていく。まるで劉備軍が戦を知らぬ子供であるかのように『高』の旗が戦場に踊り、劉備軍を蹂躪していく。

「愛紗!! もうだめなのだ!! 直ぐそこまで敵が押し寄せて来るのだ!!」

「つく!!」

関羽は歯を砕けんばかりに噛み締める。その時。

「愛紗!!」

妹の声と背後からの殺気を感じ取り関羽はとっさにしゃがむ、すると関羽の首があった位置を一振りの剣が通り過ぎた。反撃を試みようとする関羽を高順が蹴り飛ばし、蛇矛を振るおうと近づく張飛へと剣を突きつけ言い放つ。

その声は余りにも冷たく、地獄から湧き出てきたような激しい怒り。関羽と張飛は本能的に身を震わせる。

「我が主の馬を盗んだのだ、さっさと死ね」

逃がしたか、追い詰めたもののあと少しの所で関羽と張飛に逃げられた。高順は追撃するべく兵に指示を飛ばそうとした。だがここで一人の兵が駆け寄り報告する。

「こちらに向かう軍を発見！！旗の字は『夏』、おそらく曹操より劉備への援軍かと」

「そう、ならば迎え撃つわよ」

さも当然とばかりに言う高順。だが兵達はその言葉に誰一人同様はせず、反論などしない。彼らにとって「たかが」曹操軍だ。その程

度に勝てずして『陥陣営』など名乗れない。否、名乗ることを許さ  
れない。

「盲侯惇如きが我らを止めれると?」

「貴様!」

自らの容姿を馬鹿にされ、怒り剣を振るう夏侯惇を冷めた目で見つめる。愚かだ、一騎打ちに興じて軍全体を見てはいない。徐々に夏侯惇軍は囲まれていく。その事に夏侯惇は頭に血が上っているために気が付かない。

「!?!」

あ、気が付いたの?不適に笑う高順を夏侯惇は憎々しげに見つめる。馬を翻し夏侯惇軍はやっとの事で彼女の軍を突破し退却。それを追撃しようとする配下達を制止させる。

「あんなお馬鹿さんのことは放っておきなさい」

高順は劉備が立てこもる沛城の方角を見ると不敵に笑い、三度目の

戦いのために軍を走らせる。

この数時間後、沛城は落ち劉備は逃げ出す。さらに劉備家族を捕らえた高順だったが一人、つまらなそうにため息をつく。その姿を見て配下の兵は「何故これだけの戦果を上げながらそのような顔をなさるのです？」と聞くと彼女はもう一度ため息をつき、ぽつりと悲しそうに言った。

「だって劉備の首とれなかったじゃない」

<高順、字は不明>

最初はおそらく呂布と同じで丁原に仕えていたのであろう。

高順の人となりは清廉で威厳があり、酒を嗜まず、贈り物も受け取らなかつた。七百人余りの兵を率いて千人だと号し、武器装甲の類はみな高性能でよく管理されており、攻撃をかければ打ち破れないことはなく、「陷陣営」と称されていた

高順は決して忠義は認められながらも呂布に重用されることはなかつた。

呂布は平時には高順に兵を与えず、縁戚にあたる魏統に高順の兵を没収し与え、戦が起きた際には高順に魏統の兵を率いさせ戦わせていた。しかし高順は呂布のこの行いに死ぬまで恨みを持たなかつたと言われている。

198年、劉備に馬を奪われた事に怒った呂布は、高順・張遼に命



じて劉備を攻撃させた。当時、劉備と同盟関係にあった曹操が夏侯惇を劉備の救援に向かわせたが、高順がこれを撃破し、沛城を陥落させ劉備を敗走させた。沛城には劉備の妻子が残っていたため、高順はこれをつかえ呂布へ送ったとされる。

高順は呂布軍の軍師である陳宮と仲がたいそう悪かった。だが私情を戦いに持ち込む事は終生無かった。

あるとき呂布は出陣して曹操の糧道を断とうとしたが呂布の妻である嚴氏が「陳宮と高順は普段より仲が悪く、あなたが城にいなくなつてしまえばきつと軍は分裂してしまうでしょう。」と呂布に進言、これにより呂布は陳宮と高順を信用しきれず出陣しなかった。これが呂布の運命を決めたとされる。

彼が曹操に呂布と共に捕まり、引きずり出された際に一言も弁明しなかったため呂布・陳宮と共に曹操に斬首された。

( 。 。 。 ) ○ミ。 陥陣営!!

( 。 。 。 ) ○ミ。 陥陣営!!

( 。 。 。 ) ○ミ。 陥陣営!!

忠義があり嚴肅な武将で作者も大好き高順さん!!

最後まで男らしく散るといふ……私、高順さんなら尻差しだしてもいいや(おい

恋姫化するならやつぱり嚴肅な武人で、私生活でも華のないような人物に作者は書きます。

でもお酒を飲まない理由はもの凄く弱いからってオチをつけますね。酔ったら夏侯惇みたいになるとかマジ私得です。

ちなみに高順は他にも三国志の人物が女体化している「DRAGO  
N SISTER! - 三国志 百花繚乱」の作品にて女体化に成  
功。他にも李儒や徐栄も女体化しているという……これなんて俺得  
?

番外編 とある過去と夢？（前書き）

禍福は糾える縄の如し。

～老子～

番外編 とある過去〜夢〜？

「行かれるのですね」

私は青空の下、主に平坦な声で淡々と言った。

「ええ、ちよつと旅がしたいのです」

主は青空の下、ちよつと恥ずかしそうに言った。

琉生と明埜は静かに主を見つめている。何も言わず、ただ主を見つめたまま時間が過ぎていく。滅び行く黄巾党の砦から私達は主と共に突撃、ただ嵐のように牙を剥く諸侯を突破したその翌日。既に私達に最後まで従った兵達もここにはいない。主は突破したその日の夜。彼らを集めて言った。

「これで私は終わった。貴方達は平和になる世を生きて欲しい」

だが彼らは一人たりともその場を動かさず、微動だにしない。最初に彼らに言われて去っていった兵達は正しかったのか？今ここで最後まで付き従おうとする彼らは主の意志に反した愚か者なのか？私はそれは違つと断言する。

彼らは彼らなりの忠義を主に示しているに過ぎない。一人一人彼ら

の正義と悪は違う、どんなに不器用だとしてもこれが彼らなりの生き方の忠義なのだ。だからこそ主は彼らの真意に気づき複雑な笑みを浮かべたまま何も言えない。その笑みは嘲笑うものではなく照れくさそうな、嬉しそうな、残念そうな、そんな笑みだった。

主はなおも付き従おうとする彼らにただ一言。

「上がらぬ日を望むなら、永久に日の出を待ってみては」

そう言った。

主は困った顔をして言っていたが、ようするに二度と無いことを望むのかと我らに説いたのだろう。兵達はその言葉を受け止め一人、また一人と離れて去っていく。

私は解る。

今ここで去っていった者達は誰一人として主に失望し、軽蔑している者はいない。もう二度と主が立ち上がることはなく、日は上がらないなどと諦めた者は一人もない。

誰もがその時を切望し、拳兵の時を待つのだろう。

例え主が死に、彼らが老いて死の床にあらうとも。

彼らは死に最後の髪の毛の先を喰われるまでその時を生きる。

主は彼らの覚悟に困った表情を浮かべて頭をかいたが決して彼らを馬鹿にせず、笑うことはなく、評する事は無かった。ただその事実を受け止め、照れくさそうにそっぽを向いた。ただそれだけ。最後の一兵が去るまで主と私達はその場を動かなかった。

気が付けば、朝になっていた。

朝日を眩しそうに見る私達へ向けて主はは旅をすると言いつ。なれば私達もと琉生と明埜と共に志願したが主は首を横に振る。

「一人、一人で旅をしたいんだよね」

一瞬私は主にあの兵達と同様に二度と会うことは無い、去れと言われたのかと愕然とした。だが主の言った意味を知るに連れて私は乾いた笑いをこぼす。

ようするに本当にただ一人で旅をしたいのだ。

明埜も同じように乾いた笑いをしている。明埜の声は決して普通では無いのだが、何故かこの時はかわいらしく聞こえて吹き出してしまった。

まあ次の瞬間私の頭に礫をぶつけられたが。

「うおおお」とその場に蹲り頭を抱えて唸る私に明埜は包帯をしていながらも解るほど顔を赤くして私を罵倒する。心なしか琉生もそれを楽しそうに見ている気がする。

その様子を主は軽く失笑しながら私達へ向けて再度言つ。

「一人で旅をしたいんですよ。明埜は連絡係として時たま私を見つけて欲しいのですが」

明埜はよほど私が忌々しいのか私の尻を蹴飛ばして主へと不敵な笑みを浮かべる。  
いや、尻が痛いのです。ひりひりします。涙目で見上げると明埜は気づいているはずなのに無視して再度私の尻を蹴り上げてきやがりました。

ひ、酷いのです。

「ツタク。見ツケルノガドンダケ大変ダト思ツテナダヨ」

明埜は言っていることとは裏腹にとても嬉しそうだ。

……あれ？私と琉生は？

おずおずと痛む尻を抱えつつ私は手を上げる。

「あの〜主？私と琉生は？」

「大丈夫です、貴方達も一人ぶらぶらしてください。有給もらったと思って黄巾の乱中にやれなかったことをしてはいかがですか？」

言っていることの大半は意味が解らないが要するに見聞を広めてください。そういうことですね。

決して役にたたないからどうでもいいというわけではないのですよね？

そうですね？

やや笑みを引きつらせる私を主は笑いながら頭に手を置きぽんぽんと叩く。

「貴方らしく生きてください。私はそうしてもらえれば十分なのですよ」

私はそう言つて微笑む主を見て、呆然とする。  
この、この感じは。

思い出して私も笑う。

ああ、やっぱり主は変わつても主だ。

「ええ、いつか帰つて来た主に尽くすために」

その応えに意表を突かれたのか主は驚き、直ぐに困つたように頭をかいた。



私の生まれは何の変哲もない村だった。

母は若い頃は漢に仕えた文武両道の文官だったが漢の悪政に嫌気がさして官職を辞め、旅をする内に私が産まれた村で生活して居たごく普通の父と互いに恋に落ち、あれよあれよという間に婚儀を上げて村で暮らすことになる。

その両親の間に生まれたのが私だった。

私は三才の時には髪は長く太陽に反射して宝石のように輝いた。私の髪はよく父と母と村人達に褒められた。

「将来はさぞや美しい美女になるな」と長老に優しく頭を撫でられ、私はくすぐったくて頭をゆらして「いや〜」と頬をふくらませていたのを両親と村人達は微笑ましそうに眺めている。

そんな温かい村が私は子供の頃から大好きだった。

母は私が物心ついてきた時に一組の筆と炭と木の板を差し出した。そもそも字すら読めない人々が多いこの漢のごく普通の村で暮らしていた私はそんな物に全く縁が無く、初めて見たまるで導師が使うまじない用具のようなそれを見て目を輝かせたのを覚えている。

「美須々、貴方は字を覚えなさい」

私は首を傾げた。

「じく？」

「そうよ、字を覚えるの。字を覚えれば先人の残した教えが学べる。私達が教えられることは満足ではないわ。先人の教えを学び、見識を得ることで貴方の世界は広がる。貴方は世界を見るべきなのよ」

「せかい？」

「そう、世界よ」

母は嬉しそうに笑った。私が興味を持ったことが嬉しくてたまらない、そんな思いが顔に表れていた。

「人間はだれだって一人の世界に閉じこもりたがるの。その方が自分にとって嬉しいし楽しいからね。でもそれはとっても可哀想なことよ。多くの人間が生きているこの広大な大地でたった一人の世界に閉じこもり都合が良い世界を見るなんてつまらないの。でもそれは一人の世界に閉じこもっている人は気が付かない」

「なんで？」

「だってその方が傷つかないもの。自分一人の方が都合が良いし思い通りになるからね。でも、私はそれは決して幸せではないと思う。」

例え自分が嫌いな世界でもより多くの世界を知ること不思議とそれを知りたくなってくるの。多くの人と出会い、話し、触れ合うことで人は多くの世界を内に秘めることが出来るの。それはとても幸せなことなのよ」

一通り話を終えた母は不思議そうに頬を膨らます私を見て「あらら」と言って微笑む。

「ちょっと美須々には難しかったかな？」

「ん〜」

その問いに私は満円の笑みを浮かべる。優しげに微笑む母を私は満円の笑みを浮かべて体を弾ませて身を乗り出す。

「私は幸せになりたい!!」

母はあっけにとられたように私をしばらく見つめた後、小さく声を上げて笑って私の頭を撫でた。

「そうね、誰だって幸せになりたいもの。不幸になりたい人なんていないわ。……美須々、貴方は字を勉強したい？」

「うん!! 幸せになるから!!」

「つよし！！ならがんばるぞー！！」

「おー！！」

といった感じで始まった私の字の勉強だったのだが……。

悲しい事に私には何故か「文字」が認識できなかった。

「文字」は母が言うには形が変わらず、一つの言葉に一つの意味を持つらしいのだ。だが私は同じ文字らしくてもそれを同じと認識できないのだ。母の言う同じ文字が私には毎回兎が虎に、虎が犬にと変化したように見え、とても同じ字だとは思えなかった。

母もこれはしばらくすればどうにかなると思っていたのだが二年、三年と経っても一向に変わることはなかった。

母はしょぼくれる私にいつもと変わらない優しい笑みを浮かべ抱きしめ、「誰にだって出来ないことがある、字以外にも世界を知る方法はいくらかもあるわ」と私を慰めた。

それ以来母は寝物語で過去の偉人の話や武勇伝を子供にも解りやすく話してくれた。

このおかげで字は書けず事務系は駄目と言われる私だが過去の偉人の体験を元に進言した所、主と明埜に驚かれたことがある。

母の話は確実に私の中で生きているようだ嬉しく思う。

母がしてくれる話の中で私が好きだったのは孔子や孟子などの話よりも、武人の話が大好きだった。

母の話を聞きながら多くの武人が私の中で戦い合い、消えていき、誕生していくのをわくわくしながら聞いていたのを忘れない。

その中でも私が好きな話は項羽の話だった。

私と同じように字をいくら習っても覚えられず、「文字なぞ自分の名前が書ければ十分です。剣術のように一人を相手にするものではありません。私は万人を相手にする物がやりたい」と答えた項羽に他人ならぬ感情を抱いていたからだ。

項羽が死んだ話を聞いた時は何故だと思ひ母に尋ねた。すると母は私が項羽が好きだということを理解した上で丁寧に私へと問う。

「貴方は戦の時、降って来た兵をどうする？」

「許す、だって罪はないよ」

「そう、なら投降した兵が命令され私を殺していたとしても？」

そう言われた瞬間私は固まり動けなくなった。

そんなの、そんなの決まっている！！

「許せるわけない！！だってお母さんを殺したんだよ！！」

そう怒りに震える私を母や頭を撫でてなだめると、静かに私へと話す。

「そうね、それは人として当然のことよ。でもね、彼らだって私を殺さなければ自分が殺されていたの。彼らにもしかしたら年老いた母親がいたかもしれない、子供が、妻がいたかもしれない。帰ったら結婚するかもしれない」

母は私の肩を掴むと私を抱きしめる。

華に包まれたような気がして私は嬉しくて恥ずかして体を動かす。だが母は話すことはなくただただ抱きしめていた。私は母の顔を見る。するとそこには真剣な表情をした母の顔があった。

私はこの時初めて母がこういう表情を出るんだと理解した。普段の優しい母からは想像も出来ない姿だった。

「聞きなさい、生きたいから殺すの。生きたいから戦うの。その生かす物は生命であれ誇りであれ思想であれ夢であれ、人によっていろいろなのよ。その為には多くの人を使う。使われる人はそれはまた多くの人があるわ。たんにお金が欲しい人、家族を守りたい人、純粹に戦いたい人。でもね、彼らが使われた存在に変わりはないのだからその人達が貴方の思想に反しないのならば貴方は受け入れなさい。過去の者達の事を過去の事柄を忘れ、今を生きなさい。項羽はね、狭い自分の世界しか見られなかったの。かわいそうな人なのよ」

母は初めて私に人としての負の感情を見せた。

「私情による復讐ほど、悲しくて哀れなものは無いわ」

この時の母の言いようのない表情は決して忘れない。

悲しそうで、虚しそうで、辛そうなこの表情を生涯忘れることはないだろうと私はこの時幼い心ながらに理解した。

私はこの母の話を受け入れた。

母の思いを受け取った。

母の気持ちは痛いほど理解出来たし、例え何が起きようとも復讐だけはしないと。

そう心に誓った。

しばらくして私は過去の名将達に憧れて武を習いたいと母に言う。

父はそんな女の子が武器を持つなどと言って私を心配するが私はむしろそう言う父を心配する。この時代別に男だけが武器を持つというわけではない。むしろ今聞く者達は女の人の方が圧倒的に多い。そして何より父よりも母の方が強い。

それを父に言ったら泣きそうな顔になって母に慰められていた。

結局は私の強い希望と母の「やりたいようにやらせてあげましょう」と言う言葉により私は武を母から習うことになる。

森のちょっとした広場で私と母は木刀を持って対峙する。

「それじゃあまずは貴方のやりたいように打ち込んできて」

「技とかは教えてはもらえないのですか？」

「うーん、実戦で役立つ武が美須々は欲しいんでしょう？」

私はこくりと頷く。すると母はいつもの優しい笑みを浮かべ口を開いた。

ただどこかその笑みは恐ろしくて私は一步後ずさる。

「実戦はそんな無駄なことはいらないわ、結局は殺せればいいの。相手を惑わす見せかけの動作をして隙を突き殺すこと、単純に敵を突き殺すこと。どっちが楽？」

「えと……単純に敵を突き殺すこと」

「そうよ。確かに強い技を覚えるのは良いことだわ。でも母さんはその覚える間に一回でも多く単純な基礎動作を練習する方が大事だと思う。強い技で殺さなくとも単純に基本である突きで敵を殺した方が楽でしょ？百回の斬撃を繰り返して敵を殺す技よりもただ一回の斬撃で敵を殺した方が楽でしょ？」

私は確かにと考え込んだ。

戦は一人を殺してお終いではない。次々と敵がやってくる。単純な動作で敵を殺した方が楽だし、体力もそれ程使わない。敵が恐ろしい技を使おうともそれよりも速く敵を斬りつけて殺してしまえば早



い話どうということはないのだ。

「いいかしら？」

「はい、解りました」

「それじゃ、好きにかかってきなさい」

私は母譲りか力が同年代の子よりも強く、ほとんど大人と変わりない力をこの時既に持っていた。私はただ剣を握りしめ母目掛けて振り下ろす。

だがどんなに剣を振ろうともそれは弾かれ、かわされ、当たることはない。

何故だろう？ そう思う私はあることに気が付く。

母はある形を取りそれに基づいて動き捌いている。

それはとても合理的であり、また隙がないのだ。

私は一度距離を取る。

そして母を真似ようと思ったが自分が母のそれをしようとも実力が発揮できない、力を上手く母みたいに使えないと思い模索し、全く違う構えを取った。

母はそれを見てたいそう驚いたように私を見る。

「美須々、その構えは誰かに教えてもらったのですか？」

「構え……?」

「貴方が今している剣の持ち方とその体の形です」

「いえ、これは今お母さんを見て考えました」

そう言うとますます驚いたように「まあ」と声を上げる。  
そしてわくわくしたように私を眺めながら小さく笑う。

「面白いわね、いいわ。打ち込んできなさい」

それからまたも母へ打ち込むのだがやはり年期の違いか、以前より数倍体が動けるようになったものの当てられることはない。  
だが私は母の言う「構え」をとっていてもまだ何かのへんな感じが自分の動きに残っている事に気が付く。どうも木刀が自分には馴染まない。この長さは自分の最も動きやすい構えに適しておらず、また扱う上でどうにもやりづらい。

どうやらこの木刀は自分の動きを邪魔している。

顔をしかめる私に母は打ち込ませながら疑問の声を発する。

「今度はどうしたの?」

「いえ、どうも木刀は扱いづらいのです。もっと長くて刃が短い物の方が私は良いです」

そう漏らした私はふと地面に長い木の枝が落ちているのを見つけて、打ち込むのを止めてその枝へと走り寄る。うん、ちよっと短いけどこれぐらいかな？

そうは言うもののこの時見つけた枝は私の身長ほどあった。いや、それより大きかったと思う。

私はその枝を持ち、自分の構えに合う持ち方をして新たに母と対峙する。

「行きます！」

そして母へと走りよりまた打ち込みが始まる。

結論から言うとまったく当てることは出来なかった。くやしいなあとふてくされていると母は終わった後に何故か言い笑顔で「明日から私も貴方にちよくちよく打ち込むから」と宣言。

私はまだ今日初めてやったばかりだし。一回も当てていないし。などと思っただが言っても仕方ないだろうということで私は渋々納得。

その翌日から私の体には青あざが絶えない事になった。

母は私の事を「このまま続ければお母さんを超えて天下を支える武となれる」と評した。

私は「へえ〜」ぐらいで受け流し母が「最近美須々はお母さんに冷たいなあ」と地面に手で変な円を描き続ける事になり、夕飯までふてくされてその日のご飯がおかず無しになってしまった。父のしょ

ぼんとした顔がかわいそうだった。

何故そんな淡泊な反応なのかといえば自分の力に実感がもてなかった。周りの人間が母よりも弱いことは何となく分かるし、その母に自分は結局一回も棒を当てられてない。この棒も母がしっかりとしたものを作ってくれたのだがそれでも母はすいすいと避けてはしんど当ててくる。

これで「天下支えられる」とかいわれても「へえ〜」としか言えないだろう。常識的に考えて。

天下を支えられるについて自分は特に何にも感じていなかった。ただ支えるということはよく解らなかったが、母はいつも通り笑って

「いずれ貴方の事を理解し、導いてくれる人が現れるはず。きっと貴方はどうしようもなくその人が好きでその人のために貴方の力を使いたいと思う日が来るはずよ。それはね、恋愛とか恋とかと違うの。ぐ〜っと心の底から沸き上がる衝動って感じかな」

と教えてくれた。

今の自分には分からないがそれでもその日が来るのかなと深い感慨に私はひたった。

こんな日が続くと思っていた。

ずっとこの日常がすぐ近くに存在すると思っていた。

私は今父と母の前で佇んでいる。  
いや、違う。

父と母だったものの前で佇んでいる。

二人からは血が流れ、大地を赤く染めていた。呆然と家の中を覗いてみれば中には何もなくなっていた。食器も、イスも、机も、あの思い出の筆と炭も、母が持っていた剣も。何もかもが無くなっていた。

何故？何故？

驚きと衝撃で涙が出てこない。未だに父と母が死んだとは思えなかった。一人で鍛錬しに森へ行った間に何があった？

呆然とする私に周りで私を見ていた村人の一人が話しかけてきた。

「気を、気を強く持つんだよ」

「誰が……こんな事を？」

そう問う私に村人は一瞬黙り込み、意を決して口を開く。

「役人様が……税金が払えぬ見せしめに。お前の父ちゃんと母ちゃんは運が悪かったんだ。ここら辺一体であんな高い税金払えるやつなんてだれもいねえ」

税金……そういえば母は役所へ行って必死に村のために税金を交渉していた。今年は不作だった。天候が荒れ、減らされるべき税金が大幅に今年は上がった。理由は解らない、でもそんな税金払えるはずが無く人が生きられない。

母と父がこうなったのかは理解出来る。幼い心ながらに理解した。

あいつらにとって邪魔だった。だから殺して見せしめにした。

母は兵隊なんかに負けるような人じゃなかった。でも私を、村人達を守るために死んだんだ。

兵隊を殺せば沢山の兵隊が来るから。

私は涙が込み上げてきて俯く。  
だが、ふと私は違和感に気が付き顔を上げる。

あれ？

そう思い周りの村人を見る。村人達はびくつとその視線を逸らす。

こいつらはただ見ていたの？貴方達を守るために母さんは死んだんだよ？なんで？なんでお母さんはこんな野ざらしにされているの？

視線が鋭くなる。私は知らず知らずのうちに涙が止まり、ただ見ていることしか出来ない村人達を睨み付ける。

そんなに、そんなに我が身がかわいいの？みんなのためにお母さんは直訴しにいつて目をつけられたんだよ？

私は手に持つ棍を握りしめ、歯を強く噛み締める。

ねえお母さん？こんな人達が生きていて良いの？助け、助けられ、仲間を簡単に売り飛ばす奴が仲間でいいの？ねえ、こいつらなんて生きてんの？こんな連中のためにお母さん死んだの？こいつら恨んで駄目なの？ねえ答えてよお母さん。

周りの大人は美須々を見て驚き、一步後ずさる。

何故なら彼女は笑っていたからだ。親を殺され、泣くことはあっても笑うなど誰も予期していなかった。

今や黒き髪が風に靡く様は恐ろしさを彼らに植え付け、小さな声で笑い続ける彼女に彼らは恐怖した。

美須々は血の涙を流しながら今は動かず虚ろな目をしている母親に





彼女は殺意のままに走り出した。

「な、なんじゃこのがきは!？」

怯えと驚きの声を上げた役人を睨み付けながら美須々は地に張り付けられていた。

美須々は単身で乗り込み、その棍多くの役人を叩き殺した。足を躓き体勢を崩して転んだ美須々を大の大人数人掛かりで押さえつけ、なんとか彼女を取り押さええている。

「い、言え!!お前は誰の命令でこんな事をしでかした!？」

肥満体の役人は声を荒げて動けない美須々の頭を踏みつけ歪な笑みを浮かべる。

その笑みはあまりにも醜く醜悪であり、弱者を踏みつけて悦にいたるどうしようもない愚か者に美須々は見えた。父と母を思い出して彼女は怒りに声を上げる。

「誰のものでもない！！お父さんとお母さんを殺した！！だからお前ら全員殺す！！」

小さな小さな少女の叫び。

この世の全てを呪ったような地獄から沸き上がる怨蛇の声。ぽかんと役人はそれ見て、次に彼は殺した一組の夫婦を思い出す。だが役人は嘲笑い足に力を込めて美須々をますます強く踏みつける。美須々の鼻は打ち付けられて鼻血が溢れ、彼女の顔をぐちゃぐちゃにする。

「ああ、あの愚か者共か。何度も民が生きていけないと言って税金を渋った馬鹿共が」

私はその言葉に激昂し唸り体を動かそうとするが大人数人掛かりで押さえつけられているために動けない。悔しくて涙を流しながら彼女は咆える。

「殺す！！お父さんお母さんを殺した奴全員殺す！！」

「ふん、ならば良いことを教えてやろう。都のお偉いさん方の命令だ。帝だ帝、税金はその為が上がったし帝に逆らうからお前の両親

は死んだ。お前はまさか帝に手を上げるつもりか？」

「何であろうと殺す！！殺す！！」

役人はたあつと笑う。

「こやつは帝を殺害すると言言した！！この愚か者を見せしめとして殺せ！！役人殺しの未遂に帝殺しの未遂。さらには兵隊の殺害と審議する必要すらないわ！！」

復讐はいけない？それはこういう事？どれだけ弱い民が足掻こうと復讐など企てようとしても潰されるから？虚しい？どこが虚しいのお母さん？私ますますあいつらを殺したいよ。

514

歯を砕けんばかりに噛み締め美須々は血の涙を流す。  
復讐はいけないの？こんな奴らに生き残らせるの？助けない村人にどうしようもない国の愚か者共？全員殺したら駄目なの？復讐したら駄目なの？

悔しいよお母さん。

涙が。涙が溢れ出てくる。

兵士が振り上げた剣。今それが振り下ろされんとした。  
その時。

「ぞ、賊だ！？賊が侵入したぞ！？」

その声に一瞬、私を抑えていた大人達の力が緩まる。

私は嗤った。

「おいおい、なんじゃこりゃ？」

汚れている服に男の髪から流れる汗が落ちる。  
火を使ったためにこの詰め所は火の海になっている。熱風が男の体を当てるがそのために流れ出た汗ではない。

むしろ彼の体はその光景を見て芯から凍り付いた。

人、人、人……人か？

かろうじて人の形をして服を纏っているだけで人だとうやく理解する。顔だと思われる部分に目や鼻や口はなく、腫瘍の固まりのように醜く血だらけになっている。その死体が数人。

そしてその中心には女の子が血まみれで倒れ伏している。

男は賊でありここを襲撃。駆け込むもののこの光景に圧倒され動けなくなった。

だが彼は思いの他心が強いのか直ぐに正気を取り戻すと部屋を物色する。ある程度物色を終えて仲間の元へ戻ろうとするが。

「……………」

剣を抜いて振り返るが誰も立ってなどいない。男が警戒して耳を澄ませるとその声が倒れ伏した少女のものだと理解する。慎重に駆け寄るとその場にしゃがみ、口に手を当てる。

「息をしてるなあ……顔ボロボロだけど」

呼吸を確認した男は困ったように頭をかいた。間違いなくこのままにしておけば少女は火に焼かれて死ぬ。だがこの少女を助けたところでどうしようというのだ？まさか盗賊の自分が育てるといっわけにもいかないだろう。自分たちの立場を男は理解していた。男はため息をついて立ち上がる。

この女の子は悪いがここに置いていく。

そう決心したその時。

「お母さん……お父さん……」

少女が涙を流しながら発した言葉に固まる。

男は昔は普通の農民で妻がおり、子供もいた。だがそれを役人に殺されてからは盗賊に身を堕とした。それ故にこの少女の声を心から理解していた。自分の子が彼を見送るときに寂しげに行かないで欲しいと願う響きをこの声から見いだしたからだ。

男は顔を歪めて少しの間だ唸り黙り込んでいたが、木が崩れ出す音が聞こえると一刻の時間も惜しいと手を強く握り込んだ。

「ああ、つくそ!!俺ってお人好しすぎるだろうが!!」

男は美須々を抱え上げるとその場を走って去る。

仲間達の所へ着くとどうやら自分が最後だったらしく各々の成果を馬に括り付けた部下達が自分をやっと来たかとはばかりに声を上げる。

「お頭!!早くいきや……そのガキは何ですか?まだ食うにしても早すぎるでしょう?」

「あほ、むしろお頭はそういうのが好きなんだろ。たぶん」

次々と自分が抱える少女に対して自分の感想を述べる。そんな部下達をいらだちなが眺めて舌打ち。男は咆える。

「馬鹿な事いつてねえでずらかんぞ！！その尻二つに割られてえか！？」

「お頭、尻は二つに割れてやすぜ」

「じゃあ三つに割ってやる！！とつとと行くぞ！！」

愛馬にまたがり馬を蹴って走らせる。部下達は慌てて各々の馬に乗ると「お頭」と呼んだ人物へと追隨するように走り出す。やがて景色が変わる頃、一人の部下が男の馬へと並ぶと馬の後ろに背負わされた少女を見ながら声を掛ける。

「お頭、そいつは結局の所なんですか？」

男はしばらくそれに応えず黙っていたがやがて顔を赤らめながらぼつりと答えた。

「俺の娘だ」

そらは晴れ、ただ土煙を残して男達は遠ざかる。  
全ては夢の残照。全ては残り香。

されど、物語は綴られる。



## 番外編 とある過去〜夢〜？（後書き）

番外編で武将紹介はあれなんで今回は武将紹介はおやすみ。  
どうでもいい作者のこだわりです。

第二弾〜新しく作ったやつではなく震災後にのんびりと携帯で書いていた物です。なのでいろいろ文法おかしかったりするので後々直すかもしれません。

そして連続して書くシリーズに作者は崩壊寸前だ！！誰か！！誰か北郷君が「俺、最近の趣向はロリババアなんだ。だからちよつとロリババア探してくる」とかい出し出して旅に出る話を書きませんか！？書かないんだつたら作者が書いてやるこんちくしょう！！

……あ、嘘ですからね？そんなの無いですからね？忙しくて新しい書きだめ増やせないしお粗末な文章だわで頭がパーンしただけです。でもどんだけがんばっても直しても所詮作者は駄文使いしあれだから変なのしか書けないんですけどね。みんな！！この小説は見てはいけない！！作者と同じレベルに墮ちるぞ！？

……あ、何だろう。目から塩水が。

パソコンを修理に再度出すのでこれ以降更新がいつになるのか全く解りません。以前みたいに三週間ぐらいはかかるかもしれません。もしくはそれ以上。

感想遅れると思います但最终手段で友達の家からということもあり

得るかもしれませんが。またはネカフェ。

本当に地震はいろいろと置き土産残していきやがりました。やるべき事多すぎてパソコン合っても時間が無い。パソコンが帰って来る頃には以前のようなゆとりある日々に……ならないだろうなあorz

番外編 とある過去と夢？（前書き）

子どもには、すべての最も大きな可能性がある。

〈L・N・トルストイ〉

番外編 とある過去〜夢〜？

「はあああ！！！」

私は槍を薙ぎ払い男の視界を奪う。槍は男の目を捕らえ目玉を抉り、槍の失跡に追隨するよう飛散した血が弧を描き私の頬を濡らす。男は視界を奪われ、姿無き敵目掛けて無様に叫び武器を振り回すがそんなもの当たるわけがない。私は槍をかいくぐると男の首に槍を一突き、男は一瞬痙攣したように体を震わせると地面に倒れて動かなくなる。

次は、そう思い辺りを見合わし探るが挑むものはなく皆血を流して倒れ伏していた。

私は髪をかき上げると額に伝う汗を拭う。切れ味が落ちぬよう槍の先に付着した血を布で拭い一息つく私のもとへ軽い足音が近づいてくのかを感じ手に持つ槍を握り込むが。

「おいおい、やっぱり美須々はすげえな」

聞き慣れた声に私はため息を思わずつく。振り向くとそこには。

「お頭」

「親父って呼べ馬鹿娘。父ちゃんでも可」

無精髭を生やしざんばら頭の男。彼は人好きのいい笑みを浮かべて私に歩み寄る。

苦笑しながら私の頭を小突くこの人はお頭、私達山賊を率いている人であり私を助け出してくれた人。自称親代わりでもある。

お頭は肩を縮こまらせて「うー」っと唸る私を楽しそうに見ながら私の体を見回して大きな息を吐く。

先ほどとは打って変わって真剣な表情になるお頭は周りの倒れ伏した人だった物をどこか達観した目つきで見つめてさらに大きく息を吐き出した。

「にしてもお前は本当凄いわ。十人に囲まれて傷一つ無いってのは異常だ」

「十三人でしたお頭。先に倒したのを入れれば三十は超えるかも」

「大半お前がやったのかよ……てか親父って呼べ。父ちゃんでも可い加減呼べって、意地はんないでよお」

にやにやしながらうりうりと私の頭を軽く押し込む。

私は煩わしそうにそれを見るが決して拒絶はせずされるがままだ。

この人は死ぬはずだった私を助け出してくれた恩人、そして例え賊という形であっても生きる道を示してくれた人だ。何故か父と呼べと執拗に迫ってくるのだが何故だろう？他の仲間も止めてくれればいいのにやけてこちらを見てくる。恥ずかしいので今まで一度も呼んだことはないけれど……。

こんな仲間達がむずがゆくて温かい。例え万民に死を望まれる忌み嫌われる賊という存在であったとしても私は同じ賊であることが誇りに思える。だからこそ私はみんなに真名を預け、預けられた。

……でもさつきから撫ですぎだと思う。私の自慢の髪がぐちゃぐちゃだ。じとじととした目でお頭を見るとふてくされるような顔をしてぶつくさ文句を言いながら手をどかしてくれた。

残念そうな顔で今にも「っちえ」と言い出しそうな顔だ。

「相変わらずつめてえなあ美須々はよ。それじゃいくぞ〜お前が最後で遅かったんだからよお」

「ごめんなさい。思ったよりも数が多くて」

「いいって、むしろお前がいたから今回は楽だったしなあ」

私が殺したのはこちら一体にのさぼっていた違う賊の連中だ。数はあちらの方が多く、手を組むにしてもそれは半ば取り込まれることを意味する。向こうは約七十人、此方は三十一人。下手をすれば元お頭であったこのお人好しは殺される可能性もないわけではない。それを理解して私達はいつらを殺しにかかった。私達は家族だ。家族によそ者が混じる必要は無い。私達は黒ではないのだ。白とは言えずとも混ざればぐちゃぐちゃな色になってしまう紫や青ぐらいの色だ。だからこそ私達は守るために戦う。例え賊であったとしても譲れない確かなものが存在する。

「でも私がいなくてもみんながいれば大丈夫だったんじゃない」

「まあなあ。でも確実にお前がいたから俺ら全員一人も死なずに済んだ」

「………そうですか。誰も死ななくて済んだのですか」

私はほつと胸をなで下ろす。実際私がいなくともみんなは経験も豊富だし負けることはないだろう。だけれど誰も死なないというわけでは決してない。実際に私がここに来てから死んだ仲間の数は少なくはない。だからこそ私は強くなる。今度こそ、今度こそ家族を守るために。私はお頭にこの命、全てを捧げている。あの助けられ、泣いて母に許しを請う私を抱きしめてもらったあの時から。

胸に手を当て新たな決意をする私。だが私はそれを厳しい目で見つめるお頭に気が付かなかった。

「ま、とにかく戻ろうや。あいつら酒と金貯め込んでやがったし今日は宴会だ」

「はい!!お頭!!」

「お頭じゃねえ親父と呼べ、父ちゃんでも可」

笑いながらお頭に頭を小突かれた。ううちよつと力強いですよ。思わずじんじんと響く頭を抱えながら私はお頭を睨む。だが涙目で見える私をお頭は楽しそうに笑った。

「ひゃっはー酒だ!!」

「おいおい、いいのかい？そんなにほいほい飲んじまって。俺はうわばみだろぅが酔い倒してしまう酒飲み男なんだぜ？」

「いいぜ、お前が俺を酔い殺すというのなら、まずはその幻想をぶち壊してやんよー!!」

「こゝこの酒乱め」

「酒乱で……いいぜ。酒飲みらしいやり方で話し聞かせてもらからよ」

「ご覧の通り、貴様が挑むのは山ほどの酒。酒池肉林の極地！ 恐



れずしてかかってこい！！」

「このお酒凄いよお！！流石この山の秘蔵のお酒！！」

「せっかくだから、俺はこの赤の酒をえらぶぜ！！」

「約束しよう。おまえは生きたまま、少しずつ、高熱で溶かすように酔っていくと」

「イツペン飲ンデミル？」

空には無数の星が煌めく夜空に皆が酔い、騒ぎ、唄う。中には脱ぎ出したりするお調子者もいるが酔いが一体の底まで回っているのか止めずにそれを笑い、むしろ「もつとやれ」と手を子供のように叩いて喜ぶ。

いいねえ、こんな星が綺麗な日は飲んで騒ぐに限る。

そう思いお頭と呼ばれる男は一人誰と飲むわけではなくちびりと器をあおる。

咽を刺激が通りすぎた後にぐわつと押し寄せる熱に男はなんともいえない甘美な熱さに身を任せて安らぐ。更にあおろうと口につければ空だということに彼は気が付いて酒をつごとと手を伸ばす。

何気なく辺りを見回した男だが、ふと誰もが酔い騒ぐ中に娘の姿が無いことに気が付く。酒のせいかと頭を振って再度視線を動かせどもその姿は無い。

男は首を傾げながら近くにいた部下の肩を叩いて振り向かせた。

「おい、美須々どこへ行つたか知ってる奴いるか？」

「ん？美須々ならさつき頭冷やすとかいって向こうに行きやしたぜ」

一人の部下が手を上げてそのまま美須々が消えていった方角へと指を差す。だが男はその方角へと行かずにその部下に歩み寄ると思いつき頭をぶん殴る。あわれ男は「何故！？」と言わんばかりの顔で大地に側にあつた酒の器を巻き込んで派手に倒れ伏した。

誰もが驚きの表情で男を見るとそこには一人の修羅がいた。

「人の娘を真名で呼ぶなどアホ」

「いや、美須々が呼んで良いってうわば！？」

「だから呼ぶなって言ってるんだろぅがぁ！！ひっく」

そう言つて再度殴りつける。地面で目を回す部下を後目に男は千鳥足になりながらふらふらと美須々が消えていった方角へと歩き消えて行った。

部下達はそれを楽しげに笑い見つめていた。

男の姿が見えなくなった後、大きな笑い声を全員で発する。顔が真っ赤になつている彼らは口々に修羅になつた父親を話の種に酒をおる。

「ほんとお頭は美須々に執着してんなぁ」

「無くなつた娘さん重ねてんじゃねえか？まあ美須々は良い奴だけれどよ。馬鹿だが」

「馬鹿ほどかわいいつていう奴じゃねえか？まあ美須々がいなけりやこの中にはとつくに死んでる奴も少くないだろ？」

一人の部下の言葉にほどよく酔いが回つた男達は頬を赤くしながら頷く。

その様子から先ほど出た言葉に嘘が無く、一人や二人では済まされない数であることが分かる。彼らもまた美須々を信頼し、家族と認識していた。確かな絆が彼らの間で結ばれているのだ。

「あいつが来てから女攫つたことねえよなあ。なんか美須々がいると別にいらねえんだよなあ」

「美須々がいるから俺らはまだ人として踏み外してねえんだよ。小さじ一杯ぐらい」

「違いねえ」

夜の空に男達の笑い声が響く。だが一人の部下がぼつりと呟く。

「あいつにゃあ賊は似合わん。しかるべきとこに送りだしやあ今頃いい身分についただろつに」

その言葉に一瞬で男達の酔いは冷める。しばらく沈黙が続き、絞り出したようにまた一人の男が声を漏らす。

「あいつは俺らに懐くつつうか依存してる。あいつは俺らがどうなるか心配なんだよ。こんな賊しか脳がない連中を心から気にかけてんだ」

「あほ、俺らだってあいつのこと心配で心配で気にかまわくつてるだろ。こんなかに今日あいつが一人で敵に突っ込んでいってほらはらしなかった奴がいるかよ」

「それをしなかったら俺らじゃねえよ。なんだ、お頭ばかり親面してと馬鹿にしてる俺らも親馬鹿じゃねえか」

「こいつは痛いこと言いやがる!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ん？あいつら性懲りもなく美須々の名前呼んでやがるな。許せん。殺しちやる」

男は何かを感じ取りそう言い放つ。別に声が聞こえたわけでもなく生物の感でそれを理解する男は確かに親馬鹿と言っても過言ではないかもしれない。

当初の目的を忘れて剣を抜いて戻ろうかと思った、が。

目当ての人物を見つけて思いとどまる。

そこには夜空を眺めながら長い髪を靡かせ佇む美須々。

どこか愁いを帯びた表情で空を眺めて口をきつく結んでいる。

それは彼女の美しさも相まって幻想的な空間をかもし出していた。

男はにやりと笑うとそろりと後ろから近づいていき頭に手を伸ばす。

「美須々なにいつちよまうおらばあ！？」

だが美須々それを屈んで避けると両手地に着き低空の蹴りを鋭い速さで繰り出す。哀れ男はそれをしっかりと身に受けて昏倒する。

「つてお頭!？」

「……お、親父と呼べ。父ちゃんでも可だ。てかお前は殺す気か？」

「すみません!!お頭だと気が付かずに!!」

「なあ、泣いて良い?お父ちゃん泣いて良い?」

転倒させられた痛みとは違う、心の痛み。男はさめざめと泣きながら立ち上がる。目をぐしくしと大の男が擦る様はどうにもまぬけなものだが美須々はあえて見ないようにした。どうにも大の男がするのには嫌すぎる動作だ。

「つつかお前何こんな所で何黄昏れてんだ?中二病か?」

「よく分かりませんが馬鹿にされていることは分かります」

「いやあよくわかんねえけど今の言葉がぱつと頭に浮かんだんだわ」

美須々は脱力したようにその場に座り込む。男も笑いながら美須々の隣に「よっこらせ」と腰を下ろした。先ほどの明るい会話が嘘のように二人は黙り込み、ただ星を見つめる。

「っで?何悩んでたんだ?」

男が言った言葉に美須々はびくつと反応する。  
美須々はどこか視線を泳がせて声の高低がおかしい。本人は隠しているつもりだが周りから見れば丸わかりだ。

「何のことですか？私は何も悩んでませんよ？」

「お前嘘付くと左眉が動く癖があるぞ？」

美須々は思わず手で左眉を確認する。それをにやあつと男は笑いながら見ていることに気が付いた美須々。見事にはめられたと深いため息について頬を膨らませる。

「お頭には隠し事出来ませんね」

「だから……まあいいか。言ってみる？聞くだけ聞くぞ？」

「一緒に答えを探してくれるのではないのですね」

「あほ、それは俺達の答えであつてお前の答えじゃない。そんなもんお前自身も望んでいねえだろうが」

「……本当にお頭には勝てません」

美須々は視線を落としてそう呟いた。もっともその言葉はしんとした辺りにまる聞こえのために再び男は心の中で泣いたのは内緒だ。

男は内心でそれをやっとなさ押さえ込むと空を見ながら美須々が話し始めるのを待つ。美須々は馬鹿だが正直だ。きつとこいつなら自分からいいだすさと男は考えていたからだ。

だが美須々は一向に口を開く気配が無い。

それだけ今のこいつは闇を背負ってるのかと改めて実感する。拾ったばかりの頃、美須々は自ら死のうとばかりしていた。男は何度も死のうとするたびに頭を盛大にぶったたき、喧嘩し、抱きしめた。自分を親だと豪語する彼は決して間違っているものではない。親とは何も血の繋がりで無いです、もっとそれよりも強い繋がりで結ばれたものこそが家族なのだ。

美須々は内心男を親だと認めている。ただ、恥ずかしいだけ。

そんな美須々が何も言わない。ならば俺が口開けるわけ無いだろうと男は待った。

一刻、また一刻と過ぎていったように男は感じた。一体どれぐらいの時間が経ったのだろうか。そういえば俺酔ってたと眠りそうになってきたその時。

「お頭は復讐をどう思います？」

そう美須々はどこか力のない声で言った。

男は閉じる意識を無理矢理開かせてゆっくりと答える。

「存在しねえもんだな」



言うやいなや空を見ていた美須々はばつと頭を動かし男を厳しい目で見ると睨み付け、顔を歪ませる。それは怒っているようで泣いているようで。人間らしい、人間しか出来ないような表情。男はそれを正面から受け止めて笑った。

「お前、誰か復讐したいやつがいんのか？」

「ええ、この国の帝です」

「それはまた」

「ひゅ〜」と口笛を吹き出しそんな口の形に美須々は内心男を憎々しく思った。だが男はそれに気づいてかどうかは解らないがそんな視線をかわすようにごろんとその場に仰向けになり空を見る。

「やめとけ。お前の考えているようなことにはなんねえよ。帝なんてな」

「……私には出来ないと？」

「無理だな」

男はいつのまにか美須々と同様に真剣な顔になっていた。だが美須々はその言葉に激昂し男の胸ぐらを掴むと強引に持ち上げる。齒を噛み締め射殺さんばかりの鋭い目で見つめる美須々を男は冷めた目

で見つめる。

「確かにお前は強いぞ？でもお前以上に強い奴なんて帝のお膝元にはいくらでもいる」

「それでも！！成功する可能性は無くはない！！」

「かもなあ……時の運なんざ気まぐれだ。だがな、美須々。よく聞け。てめえの考えを辿って成功した男の言葉だ」

自重するように笑う男だが目は笑ってはいない。逆に険呑な光を秘めていく。

「変わらないぞ？」

その一言に美須々は固まり、動けなくなる。男の言葉に打たれたのではない。男の持つ気迫とその雰囲気にも男以上の武を持つものにもかかわらず動けなくなった。

「変わらない。むしろ悪くなる。俺らみてえなならず者は復讐なんて大それた事やっても満たされることはねえ。むしろ逆だ、既に殺しているのに殺してないと思っちまう」

男は哀れむような目で美須々を見つめる。その目はかつて虚空を眺

めて人としての一面を見せた母の目に似ていることを美須々は気が付く。痛い、胸が苦しい。

美須々は突如胸の内で荒れ狂い始めた感情に戸惑い、男を掴んでいた手を放す。

男はただ諭し続ける。

「要するに飢えちまうんだ。食い足りなくて食い足りなくて堪らなくなる。その結果が俺らだ。いつのまにか同じ立場だった連中すら食いつぶしてやがる、抑えらんなくなんだよ。お前はまた戻れる、戻れんなら戻つとけ」

何を……何を……。

美須々は手に爪がくいこみ皮を破るほど強く、強く握りしめる。

辺りは風が吹き荒れ森の木の葉を荒らし、数多の獣が潜んでいるような錯覚を覚える。

どこまでも静かで、張り詰めている。そんな空間に二人は佇む。

一人は迷い、一人は迷い人を救うために。

「納得……出来るわけ無いじゃないですか」

「だろうな」

男はさもその答えを予想していたように言ったが、それによってますます美須々の眉はつり上がっていく。

もとより男は言っても彼女には理解出来ないだろうと分かっていた。

実際に経験し、行き着くとこまで行った自分の過去の姿と美須々の姿はよく似ている。過去の自分に今のような問答をしても納得できるわけがないのだ。  
目は濁り、何も見えなくなっている。

だが、彼にとつて美須々は『娘』だ。それこそ目に入れても痛くないような男の娘。どこまでも愚直でまっすぐで、だからこそこの生き方をしないで欲しいと彼は心の底から思っている。

それをまた美須々も理解しているのだ。理解しているからこそ彼女はより一層苦しむ。かつて母親が自分に見せた顔と男の顔は美須々から見て変わらない。

そんな顔をしてほしくは無い。

だが、それで納得できるほど、受け入れられるほど自分は素直な人間ではないのだ。

黙り込んでその場に立つ美須々を男は先ほどとは打って変わった優しい声で労るようにゆっくりと、だが力強い声で彼女に語りかける。

「……それでも言う。虚しくなっからやめとけ。変わるもんはなく、あるとしたら己が醜く歪んじまうだけだ」

「っ!!」

美須々はその言葉を皮切りに男を睨み付けると走り去った。

男はそれを引き留めることはなく、ただ見送る。何を言っても無駄だ。結局は他人は他人でしかない。彼女自身でこれは例えどんな結

末であれけりをつけるしかないのだから。  
ただ一人、自分の最後の家族が去った場で男は一人呟く。

「美須々、その領域は……行ったら戻れねえんだよ」

いつしか男の目には涙が浮かび、伝い、落ちていく。

「この世界はどうしようもなく理不尽だ。なんであいつがあんな顔しなくちゃいけねえ。あいつはな、笑顔が似合うんだよ、まだ子供だ。まっすぐとした女の子なんだよ」

拳を握りしめ、男は天に向かって咆えた。

「その道を見んじゃねえ！！来るんじゃねえ！！知るんじゃねえ！！渡るんじゃねえ！！それ以上こっちに来るんじゃねえよ！！歩を進めるな！！聞くな！！寄るな！！解るな！！探るな！！お前の道はこんなすれたどうしようもない道じゃないだろう！？？手に入れる価値などまるでねえ！！変わりきつてからしか気づけねえんだよ後戻りなど出来ないって事はな！！」

夜が漢の大地を覆い隠す。まるで見てはいけない、のぞき見てはいけないと警告するが如く。獣に堕ちてしまった男は口を開く。掠れた力ない声がしんとした森に消えて行く。

「お前には俺のような抜け殻になっては欲しくねえんだよ。お前は  
まだ、戻れるんだ」

森の中、二人の男女が歩みを進める。

一人は長い髪を一つに結んだ女、艶がある髪はいまや汚れて痛み、凜としてきらきらと輝く瞳とは裏腹に体中は傷つき、汚れ、体に弓矢が二本突き刺さっている。

残りの一人の男は更に酷い。背中には槍で貫かれたであろう深い傷、大量の血が溢れて彼の服を真っ赤に染めている。もはや自分の力で歩くことも立つことも出来ないのか彼女に体を預け、引きずられる形で歩みを進めている。

男の顔色は悪く、死相が浮かんでいる。

「あゝ駄目だね。これお父さん死ぬね。ちょっと血流しすぎたわ。あ。やべ〜目が霞む」

「馬鹿な事言わないでくださいお頭！！殺しますよ!？」

「……………まあ言いたいことはいろいろあるが父ちゃんと呼べ」

男は笑うがその笑みは今にも消えそうに感じ、女は泣きそうな顔で、声で叫ぶ。

「治療できる所へ……………医者の中へ!！」

「いや、無理だろ。どう考えてもこの姿じゃ治療なんぞ受けられないし金は無いし。それ以前にここどこだかわからんし」

「そんな……事……言わないでください!!」

「それにしても今回の官軍マジだったなあ。あれ軽く二百人はいたぞ?」

彼らは賊であった。人の命が弓矢一本で軽く失われ、ゴミのように骸がそこらかきこいで晒されているこの世界で彼らの命は余りにも軽すぎる。彼らとていずればこうなることは解っていた。碌な死に方をしないことも承知の上で彼らは賊になった。だからこそ彼は今の自分を受け止めていた。

本当はこんな所を彷徨わずにあそこで仲間と共にあっさり死ぬはずだったが優しく馬鹿な娘のせいで生き残ってしまった。だがその命の灯火も今消えようとしている。

「まったくよ、俺を助けなければお前今頃無傷で逃げられただろうがそんな有様になって俺背負って追われるとかお前やつぱり馬鹿だなあ……美須々」

「自分の……自分の親を見捨てるものですか!! 死なせません!! 死なせません!!」

「……だから、父ちゃんって呼べつつうに。本当に素直じゃねえなあ」

男は例え死の淵にあったとしても笑っていた。



こんな馬鹿な自分にもつたいないぐらいの娘を俺は得たんだ。馬鹿で意地っ張りで優しくてかわいくて。一度は全て失った俺達にくそつたれた神様がほんの一つの詫びのつもりなのか出会った娘。倒れ、傷つきながら気を失い、親を求めた娘。

俺の部下はみんな死んじまった。酒が大好きでどうしようもなく臆病者で、人に戻れなかった馬鹿共はみんな死んじまった。そして俺も今からそっちに行くだろう。

だがな、あいつらは俺を歓迎してもその隣に美須々がいたらあいつらから袋だたきにされちまう。というか例え俺だったとしても殴るね。もう泣いたってそいつを許さねえ。もう一回殺してやっても良いくらいだ。問題なのはその人間が俺だっつうことだな。だめだ、流石に自分を自分で殴るとか気持ち悪すぎる。

既に色を失いつつある目で男は自分を必死に引きずる娘を見る。

嫁にも出せば引っ張りだこ間違いない娘だ。でも出しません。娘さんをくださいとか行ってくる奴がいたらそいつぶっ殺す。それくらい愛しくてかわいい娘だ。弓の雨の中に飛び込んでまで俺を助け、こんな有様になってまで自分を生かそうとする娘だ。

こいつだけは、こいつだけは死なせねえ。

「…………おい」

男は聞こえるか聞こえないかぐらいの掠れた声で娘に呼びかける。

「喋らないでください！！本当に…………本当に死んでしまいます！！」

だが男はそんな娘の声を無視して話し続ける。

「美須々、俺置いてけや。言っちゃなんだがもう助からねえよ。このままだとお前も追っ手に殺されちまう」

「嫌です!！」

「いや、嫌ですってお前」

男は子供のよつな娘の言葉に思わず頬が引きつるのを感じた。

「もう、もう死んでほしくは無いのです!！これ以上家族を失いたくはないのです!！」

「っふ」

「何がおかしいのですか!?!いや、話さなくて良いです!！直ぐに

「ここを抜けますから静かにしてください!」

「いや、お前ってやつば馬鹿だわ」

「何を……」

馬鹿な事をと美須々は声に出そうとしたがそれ以上は声が出てこない。自分の体に異常を感じた美須々は体を動かそうとするもその意志に反して体が後ろへゆっくりと倒れて行く。

その原因が自分の父親であると理解した彼女は消えゆく意識の中で何を思ったか。

「……お父……さん……なん……で？」

そう絞り出すように声を出すと気絶した。

それを見届けた男はやっとこさ立ち上がった男は口からこぼれる血を拭い、まるで何事もなく眠りについた娘に語りかけるように。

「子のお前が思う以上にお父ちゃんはお前が大事なんだよ。もう死んでほしくねえ、家族を失いたくねえは俺の台詞だ馬鹿娘。てか最後の最後にやっとお父さんかあ」

美須々の体を大樹の根元に隠す。自分とは違いこの怪我なら問題は無いだろう。

そう思つて重い腰を上げた男の表情は幸福に溢れていて、今にも歌い出しそうな程上機嫌だった。

「死んでも悔いはないな。どれ、美須々。お父さん、ちょっと死んでくるわ」

「……………!？」

美須々が目を覚ますと辺りは暗くなっており、自分がどれほどの時を眠っていたのを示していた。自分が一瞬どのような状況に置かれていたのか忘れた彼女はその身を焼くような痛み到我を取り戻す。苦痛に顔を歪めた彼女は今自分が一番守りたい人を思い出し、身を乗り出して辺りを見回すがその姿は無い。

彼女は体に刻まれた生々しい傷跡を顧みずに彼女は走り出す。

ただ、生きていて欲しいと。ただ、私の真名を再び呼んで欲しいと。あの皮肉ったような笑みを見せて欲しいと。

森を駆け抜ける彼女の目からは涙が溢れ、口からはひたすら自分の義理の父の名を呼ぶ声が漏れ続ける。

「お父さん……お父さん……お父さん!!」

どれぐらいの時を彼女は走り続けたのだろうか、夜の帳はますます下りていき、既に肉眼では先が見えない。星の光を頼りに彼女はひたすら走り続けた。

どこからか獰猛な獣の声が響く。

美須々はその声に立ち止まり惹き付けられるようにその声へと歩を進めた。

見えたのは毛皮の固まり。いや、違う。獰猛な夜の森の獣達が何かに群がっているのだ。……何に？

固まりから僅かに見えた服の切れ端。それは自分がよく知っている、知りすぎている。

美須々は自分の願いが踏みにじられ、無残に消え去った事を理解し、呆然と目を見開いてそれを見る。

「あ、あ、あああ」

彼女が踏み抜いた木の音で獣達が美須々に振り返る。その口は不気味なほど真っ赤な血で汚されていた。彼らは新たに現れた獲物に警戒し、うなり声を上げる。

「あああああああああああ！！！！！！！」

美須々はその手に握りしめた血が乾ききつたもはや切れ味が無い己の得物を砕けんばかりに握りしめて叫び、獣のように獣達へと襲いかかった。



獣は首がない死体を抱きしめる。

獣は首がないのは人の手によってなされたからだと理解する。

獣はかつて笑いかけてくれた顔が無い死体を抱きしめ夜の森で叫ぶ。

獣は自らの殺意に身を任せようとするがそれは許されないと理解し

呆然と朝日が昇るまで佇む。

獣はその死体を呆然と『無』の表情で埋めてその場を走り去る。

獣はただ走る。

獣はそれしかできない。

獣は心に何も残ってはいない。

獣はただ食ることしかできない獣になった。

獣は何日も何日も何も食さず、飲まずに駆け抜けた。

自分は何にも出来ない。あの人は私が一番したいことを許さない。きっと最後の最後までそれを望んでいた。私は何をすればいい？私はどうすればいい？死ねない、かといって生きる事は出来ない。私は何を……何を求めたらいいの。どうすればいいの？教えて、誰か

教えて……。

「あゝつどこかに孔明とか落ちてたりしないもんですかね……いく  
らなんでもこれ無理ゲーです」

彼女は出会った。

頭に黄巾を巻き付けた、一人の男に。

英雄達と戦い、後の世の人々に語られることも、知られることもな  
くただ英雄だけが知り、語ることができる男に。

番外編 とある過去〜夢〜？（後書き）

（????）<僕と契約して黄巾党になるよ!!>

一回間違つて0時以外に投降したので再投稿。ついでに字間違いを修正して再投稿。でも結局いろいろおかしいし間違っている再投稿。

というより投稿して直ぐ消したはずなのにだいたい三十人ぐらい見ている形跡が……こいつら忍者だ、絶対忍者だ。

というわけでまさかの三話構成。

多分誰もが次で終わりだろ？ぜってえ次の次は董卓連合編だと思っただろう。

董卓連合編だなと思った？残念、美須々ちゃんでした!!

大丈夫です、次で終わります。というかなんか最近文章が長くなる傾向にある。この回はうっかり消してしまつて泣く泣く書き直したのですがなんだろう？一万超えるとか最近デフォになりつつある。そしてシリアス増し増し。

でも大丈夫!!本編に戻つたらはっちゃけるから!!シリアスなんてどっかに置いてきてるから!!（おい

そう言えばfate/zeroが十月ぐらいから始まりますね。もうね、テンション上がるね。

何故かこういう書き方したら波才さん聖杯戦争に参加するとかの前振りみたいに思われるけどそれは無い。作者の脳みそじゃ fate の設定は扱いきれないですからね。

……それ以前にそもそも文章を扱いきれてないことに私は気が付いたんだが。どうしよう、全然作筆能力が最底辺から上がらないorz

番外編 とある過去と夢？（前書き）

人生における大きな喜びは、君にはできないと世間がいうことをやることである。

くウォルター・バジヨットく

## 番外編 とある過去と夢？

「武将もゼロ、内応者ゼロ、弓矢ゼロ、馬もゼロ、鎧ゼロ、槍もゼロ、剣もゼロ」というか武器もゼロ、兵糧もゼロ、周りにはみんな敵だらけ……これどうやったらいいのですか。ゼロだったらギアス使えるようにしてくださいって」

どうも波才です。山の山道をのんびりと歩いていきます。良い天気ですね。すいません、現実逃避しました。目を背けちゃいました。

みなさん、これどうしたらいいですか？正直なんとかなるとか甘いこと考えてましたけど、これ戦う前から負けてませんか？

幸いめばしい人間は集めました。が将がいけません。武器や兵糧は集めればなんとかありますが将は素質が在る者が絶対必要です。

……そんな人はみんな他所に行ってしまった。そりゃそうだよ、賊同様の黄巾党に「ハイハイ、私絶対入る！」とか手上げて入ってくれる人いませんよね。なんで気が付かなかったんでしょうね。いくらなんでも私一人じゃ無理ですから。

その場に立ち止まり思わずため息をつく。

さっきの村に気功を使える傷だらけのかわいい女の子がいましたがあれは凄かった。思わず日本伝統の DOGEZA をして教えてもらいました。習ってみればますます彼女が凄いことが解る。

他にも二人ほど将の素質が在る女の子がいたのですが……どこも無く聞きだした所彼女達は黄巾党嫌いみたいです。

むしろ敵になりそうです。涙目です。

収穫は気功の使い方か……私個人がどれほどがんばろうとそれは個人。軍全体の利益にはとてもじゃないがなりません。せめて私に一騎当千の力でもあればいいのですが……生憎普通の域は出ておりませんしね。

せめて、せめて私に外気功の才能が在れば昇 拳とか めはめ波とかソニックームとか出来るのに。待ちガイル出来るのに。

いけません、過去を悔いるのではなく今を生きなければ。

……って生きられるか!!

無理すぎるわ!! なんですかこのゲームオーバー臭は!? 安西先生が「諦めれば?」とかとち狂って言い出しますよこの状況!? 天和様達を守るとは言いましたけどさっそく心が挫けそうですよ!? 史実だって都の宦官と内応したし名士達を集めたんですよ!? それすら出来ずにどうしろってんですか!? ( 思った以上にきつい状況に相当キテます )



「あゝつどこかに孔明とか落ちてたりしないもんですかね……いくらなんでもこれ無理ゲーです」

コーエーのゲームみたいに助言率100%とかの孔明落ちていませんかね？流石にゲームみたいに「倒したんだから仲間になれやあ！」とか出来るわけないですから。コンティニューも無いんですよ？

……落ち着くのです。

そんな孔明が落ちているわけが

ガサガサ

その時、波才の近くの草むらで音がしたかと思うと、女性とわわしき影が現れた。

波才は思わず冷や汗を垂らしながら一步下がる。流石の彼も驚いたらしい。

……WHAT?マジで孔明来ちゃいました？

奇跡とも思える出会いを想像した波才は鳥肌が立つのを感じ、乾いた笑みを浮かべた。

私は……どうすればいいの？  
復讐も、守る力も、ただ一人の小娘である私には無い。新しく出来た家族、大切な家族も守ると誓ったはずなのに……お父さん、お父さんの言うとおりだよ。

そんな力ない。私は、私は誰も守れないし助けられない。お父さんは私を生かしてくれた。生かしてくれたけど、なんで生かしたの？なんで私もお父さんやみんながいる所に行かせてくれなかったの？

この数日間何度も何度も首に剣を押し当てたり、崖から飛び降りよ

うとしたけれど死ねなかった。

怖いよ、死ぬのが怖いよ。

みんなに守られたこの命が、お父さんとお母さんが、お父さんが守ったこの命。失いたくないよ。

ねえ、死んでも誰も喜べないんだよね。私解るよ、お父さんの思いが。みんなの思いが。でも私は死にたい。死にたいよ。

また家族を死なせてしまった。どれだけ剣を振るっても私は守れない。誰も守れない。

何日も走り続けた美須々は満身創痍であり、怪我の治療すらしてなかったために血を多く失っていた。それでも倒れずに飲まず食わずで走り続けられたのは幼き頃から母親によって鍛え上げられた武人としての素質と身体と強靱な意志のためであったが、彼女の限界は近い。

それでもその手に武器を握りしめているのはもはや武人としての本能であった。

太陽が沈むように何事にも必ず終わりが来る。ガキの喧嘩や女の小言、はては戦争までその法則は変わらない。美須々の体と心は限界を迎えようとしていた。目が暗転し足がまるで宙を浮くような錯覚、木に躓き倒れその意識が闇の中に沈もうとしたその時。

「あゝつどこかに孔明とか落ちてたりしないもんですかね……いく  
らなんでもこれ無理ゲーです」

声が聞こえた。

それはどこにでもいるような、平凡極まりない日常のそこらかしこ  
で聞く。そんな声が彼女の耳へと吸い込まれた。

彼女は何故かその声に惹き付けられた。

もはや立つことすらままならない体を彼女は木によりかかりつつ何  
とか立ち上がると、その声に向かって一歩一歩大地を踏みしめるよ  
うに歩く。

何故自分がここまでして最後の力を振り絞り立ち上がったのか彼女

自身ですら理解出来なかった。だが彼女の本能、そして武人としての消えかけていた炎が自然と先の声で激しく燃え上がり、彼女を突き動かしたのだ。

手で草や木をかき分ける。名も知らない虫が美須々の目の前を横切るが、彼女のその視線はぶれることなくただ声の方向を見つめていた。

茂みを抜けるとそこには一人の男がいた。

頭に黄巾を巻き付け、腰には数打ちであるう剣、顔は平凡的でありその姿はまるで野党のように飾り気が無く実用向け、つまり実戦を意識してる動きやすい服装であった。

彼女は落胆する。

私は、何故この男に惹かれたのだ？こんなどこにでもいるような男に。

男はたいそう驚いた目で私を見ている。そういえば人前に出る姿ではないと私は思い出した。体はお父さんの血と自分の血が混ざり合い赤に染まり、何日も森を走りさ迷ったせいで相当汚らしい姿なのだろう。顔もここ数日間何も口にしていないため糞れているのは間違いない。

それ以前にこの姿では逃げ延びた賊だと丸わかりだ。この男も賊のような姿だが私には解る。この男の匂いは我らの同胞ではない。

自然と口が僅かに弧を描くのを感じた。そうか、私はこの者に討たれるために来たのですね。最後は安らかな死など私達にはあり得ない。泥の棺桶で死んでいくのだ。みんなと同じで。

やっと、やっと死ねるんだ。殺されちゃうのなら、しょうがないよね？みんな……許してくれるよね？

全てを諦めたように薄く笑う私を前に男は。

「まさか孔明ですか!？」

と体を全て使って驚きを表す。

だが私はもはや答える気力は残っていない。亡霊のような足取りで静かに男に近づく。

男は私をしばらく観察してどうやら人違いだと解ったらしい。肩を落としてあからさまに残念そうに息を吐く。

「違うみたいですねえ。でも」

男は私を見て笑った。いや、嗤った。

「その人身の奥に宿る狂気は目を見張りますね。貴方はどこのどな

たさんですか？」

その瞬間私はまるで雷に打たれたようにその場から動けなくなる。  
なんだ？なんなんだこれは？

霞がかつた頭が一瞬で正常な武人としての私へと戻る。思わず手握りしめた武具を構えようとするが力が入らず持ち上がらない。だがそれでも諦めるなど本能が告げる。危険だ、この男は危険だ。この男から感じ取ったこの得体の知れない威圧感は何なんだ？いえ、これはそもそも何？威圧感とは違うこれはなんだ？

私は体温が急激に下がっていくのを感じつつ一歩下がる。

今まで決して少なくはない命をかけた戦いの日々を生き抜いてきた。幾多もの血を浴び、流してきた。

だがそんな自分の経験をもってしてもこの男が放つ得体の知れない毒々しさは殺意以上におぞましく生臭い。まるで爬虫類のような冷たい笑みと瞳の奥に隠れたその「何か」に私は動けない。

動くことを許されない。理解出来ない、したいとも思わない。



この、この男に関わってはいけない。そう思う一方いや、関わるべきだと心の中で叫ぶ自分がいる。  
私は葛藤したのを覚えている。

だが、私はこの時ふと思い出した。

私は死ぬのだ。この男に殺されるなりのたれ死ぬなりして死ぬのだ。  
なら、何も怯える必要など無いではないか。  
思い出せばなんと滑稽なのか。自分は武器を構えて未だに生きよう  
としている。

私は槍を手放した。乾いた音が辺りに響く。

心が穏やかになる。

もう、どうでもいいです。早く楽になりたい。殺してください。

「……私は、誰なのでしょうね。お願いがあるのですが」

「はて？何でしょう？」

「殺してくれませんか？もう生きたくないのです」

もう疲れました。一刻も楽になりたい。  
そう思い目を静かに閉じる。

ですが、中々その時が訪れない。  
暗闇の世界の中に聞こえてきたのは……目の前の男の不思議そうな  
声だった。

「貴方は夢を見ないのでですか？」

私はその言葉に思わず目を開けて男の顔を見る。相も変わらず平凡な顔がそこにあるがその目は先ほどとは違いまた別な鈍い光を放っている。その目に圧倒されつつも私は先ほど男が言った言葉を心の中で何度も自身に問う。

夢とは……何？

「……夢？」

「ええ、私はそんな望みが霞んでしまうほどの夢が貴方にはあると思いますよ。貴方の目は死んではない、死んでいるのなら貴方は今ここで生きてはいない。きっとここに来るまでに貴方は死んでいるでしょう。何が貴方を突き動かしたのかは知りませんが、貴方はやり遂げたいことがある。違いますか？」

私のやりたいこと？

そう思った瞬間私の頭に衝撃が走り、過去の出来事が次々と浮かび、消えて行く。

それは今まで自分という物を、美須々という物を構成してきた記憶のかげら。

まるで走馬燈のように頭を駆け巡る。

「聞きなさい、生きたいから殺すの。生きたいから戦うの。その生かすものは生命であれ誇りであれ思想であれ夢であれ、人によっていろいろなのよ」

私は生きたい？生きたいから戦う？何に？何を求めて戦うの？私を生かすものは……私の夢は。

「過去の者達の事を過去の事柄を忘れ、今を生きなさい」

今を生きる？過去を忘れて？

「やめとけ。お前の考えているようなことにはなんねえよ」

……。

「変わらないぞ？」

……………つるさい。

「……………それでも言う。虚しくなっからやめとけ。変わるもんはなく、あるとしたら己が醜く歪んじまうだけだ」

……………五月蠅い！！

「お前に……………お前に何が解る！？」

気が付けば私は咆えていた。

死を受け入れ枯れかけていた体に活力が戻り虚ろな目に光が宿る。怒りの衝動に身を任せ落ちた槍を拾い接近、男の首に槍先を突きつける。あと数尺という死に男は微動だにしない。視線すら動かさず。ただ私を見る。それがますます私の精神を逆なでする。

何故だ！？何故そんな目でいられる！？死ぬのですよ！？この手を動かせば貴方は死ぬのですよ！？

どれほどの殺意を浴びようと男は動かない。思わず槍の先端を男の首へと押し出した。皮が敗れ肉に達し血が流れ出る。

「私は貴方のことは解らない。人は他人には理解されず、真に理解出来るのは己一人のみ。人は結局一人で生まれて一人で死ぬ。貴方を理解することは絶対に無い、出来ない」

男は目をつぶる。そして再び開いたその目には……嫉妬。私が羨ましくてたまらない、そんな意志を彼は私へと放っている。

私は困惑した。なんで、なんで光を宿す貴方が私を羨むのです？ 貴方を私が羨むことはあれど貴方が私を羨む必要は！！

そう思いその首をたたき落とそうかと手に力を込めた瞬間、私は違和感を覚えた。

この目、この目だ。

私は男の目が誰かに似ていることに気が付く。

一番身近で、私がよく知っている。知りすぎているこれを私は心の底から知ってしまったている。

嫉妬？羨ましい？そんな、そんな目ではないでしょう。

何故ならその目は私と同じだった。

そう気が付いたら分からなくなつた。この男はなんで私と同じ目をしているのに死んでいないのか。全てを奪われ、絶望をしつている。私が死を何度も望んだ時に水たまりに映つた目なのだから。なのにこの人は何故？何故こんな光がある？前へ進もうとする光があるのだ？

「その目はね、かつて私がしていた目そのものなのですよ。誰にも理解されず、この世を憎み、人を憎み、全てを拒み拒まれて。私達は頑張り続けた。どこまでも戦い続けた。地獄を見てさ迷い、希望を見つげ、墮とされて。自分の道を否定されても信じて進み続けた。それでも、それでも世界は残酷だ。例え努力しようと思念を貫こうともこの世界は受け入れない。救われることも報われることはない。そしていつしか自ら死を望む」

そう語る男は苦痛に顔を歪めている。それは傷から来る痛みなどではない、それ以上の痛みをこの人は今思い出しているのだろう。

「私と貴方の違いはね。そこで死んでしまったかどうかです。私は死に、貴方は生きています」

この男が言っていることが私には痛いほど理解出来る。

私は、私は生きています。死にたいと何度も何度も思つたけれど、私は生きています。

それは大切な、大切な……家族がいたから。  
守ってくれる人達がいたから。  
だから私は今ここで生きている。

「心から貴方のことを愛してくれた家族がいたのですね。貴方を止めてくれる、死の道から戻してくれた人達が」

大切なお父さんが、お母さんが、お父さん。

だからこそ私は苦しんでいる。彼らの大切な人の願いに縛られて。

その願いが、生があるからこそ私は苦しみをに喘いでいる。

「私は牙を折られて、貴方は今も牙を研ぎ続けている」

そうですね。

牙があります。

ずっと、ずっと前から研いでいます。

ですがどんなに研ごうと、どんなに望もうとも。

知らぬうちに私の手は槍を手放し強く握りしめられていた。

「研ぎ続けても、届かないのですよ。私の牙は」



「それは何故？」

「何故……なのでしょね。届かなくなったのか、それとも最初から届かなかったのか」

「ここでも違いがあるのですね」

男は笑った。

どこまでも清んでいるこの空のような笑顔。どこまでも続く天を思わせる笑顔。

綺麗……ですね。人はこんな笑顔を浮かべることが出来るのですか。

「貴方は牙を研いでいる。だがその牙は使われることはない」

そう、私の牙は使えない。私が私で在る限り、私が使う限りこの牙は輝こうとも全てを貫こうとも使われることはない。

使えない。

でもそれはこの人も同じ。

私にはこの人が解る。どれほどの苦境を歩んできたのだろうか？どれほどの地獄を見てきたのだろうか？

この人は死んだのだ。嘘ではない、嘘ならばここまで私の心を動かすことは出来ない。人の心を奮わすことなど出来ない。

彼の持つ折れた牙。使いようもない牙。

違いなんてどこにも無い。

はずなのよ。

「ですが私はぼろぼろの、錆びれて折れて、つかいようもないようなどろしよもない牙を今相手の首に突き立てようとしている」

驚きに目を見開く。咽が渴いて仕方がない。なんですか、何なんですかこの人は!?

何故、この人はこんなに獰猛に笑うのですか?

折れているでしょう? 貴方は私を超えた地獄を見たのでしょうか? なんて、なんでそんな顔で笑えるのですか!?

私は突き動かされるように彼に問う。

「貴方の敵は!! その折れた牙で何を殺すのです!？」

男は笑う。

まるで子供のように無邪気に、その身に覇気を込めて。

彼は天に向かって腕を広げ、天を飲み干さんばかりの大きな口を開けて咆える。

「この400年続いた漢王朝!! そしてこの大陸の英雄達!!」

私はその言葉に愕然とした。

私ですら帝という一人の人間だけを狙っていた。そして出来ない、不可能だと諦めて絶望している。

それをこの男はなんて言った？  
漢王朝？英雄達！？

「貴方は……正気なのですか！？」

「正気ではないのでしょうか。どうしようもなく狂っているかと」

「勝算があるのですか！？」

「そんなものはない。なさ過ぎてさっきまで絶望してたぐらいです」

なんで、なんで貴方は笑っていられるのですか！？

国ですよ！？この大陸に逆らえるものなどいないのですよ！？私達  
以上に頭も良く強い者達などいくらでもいるのですよ！？

この男は何なの！？大馬鹿者？頭がイカれているの！？

だが今この男の目は爛々と輝き不敵な笑みを浮かべている。

その目に宿る理性、敗北すると解っているのにも関わらずその体か  
ら溢れる闘気。勝利への渴望。

誰もが愚かだと笑うことをこの男は正気で言っているのだ。

「なんで、なんで負けると解っているのに戦うの！？」

なんで負けるのに戦うの！？勝つんでしょ！？貴方は勝てること  
出来るでしょ！？なのに貴方はなんで今戦えば負けると解っている  
のにそんな顔で笑えるの！？

男は私の問いに「っえ？」と言わんばかりの顔をして、次ぎに腹に  
手を当てて笑い始めた。愉快、愉快と手を叩いて目から涙を流すほ  
ど笑って口を開く。

「勝てないから……戦わないんですか？」

「え？」

「違うでしょう？人は何かをしたいから、何かを守りたいから、成  
し遂げたいから戦うんでしょう？勝利というのはその結果。どちら  
かが勝ったなんて後の人々に好きに言わせておけばいいのですよ。  
人が何を生き、何を信じたか。それを見失ってまで手に入れる勝利  
に、求める勝利に何の意味があると。ただ勝利のために戦うのです  
か？」

「それは……」

違う、私は守りたかった。でもそれは、私のやりたいとは。守ると  
は余りにもかけ離れてしまっている。正反対、真逆の位置に存在し  
ている。

「貴方は、復讐をどう思うのですか？」

「復讐？」

「いけないのですか！？この世で、この世で血の繋がりがあある家族とやつと解りあえた家族を奪われて。それでも一切恨んではいけないと！？復讐心を抱くなと！？」

「そんなこと無い」

え？

その時のこの方の目。今でも忘れることはない。  
まっすぐで、迷いが無くて。心の底から言ってくれているのだと理解した。

「貴方の大事な者を奪われたのでしよう？夢を奪われたのでしよう？魂を奪われたのでしよう？それで恨んだら悪だ？愚かだ？巫山戯た事ぬかすんじゃない」

私は彼に魅入ってしまった。

多くの人に出会った。多くの世界を母に言われたように見てきた。だが彼の持つ世界は違うのだ。まるで遠くに在るが如く此処に在り、その姿は見えるようで見えず、自分という器では触れることすら出来ない。だが触れずともそれを感じることは出来、その温かさと鮮烈さ、威圧感に自分の世界が塗り替えられるかのように錯覚させられる。自分の思い描く理想以上の世界、まるで桃源郷のような夢の世界を私はこの人にこの瞬間見いだしたのだ。

それはなんと、なんとすばらしく心震えることか。この気持ちを表現しようにも言葉では表せない。言葉という枠に収まるものではないのだ。この漢の空のように雄大でどこまでも広がっている。いや、この漢の空ではなく夜に光り輝く星空！？いや、そんなちんけなものでは断じてない！！ああ、私の言葉で言い表せぬこのもどかしさはなんと屈辱であり喜びなのか！！

そうですか……この目、この気迫。この光！！  
私は、やっと見つけたのだとこの時気が付いた。

「それを我慢できたら人間じゃないですよ。人間の道理から外れている」

この人は。

「復讐心は持つ者によって変わるのですよ、英雄か、それとも愚か者にね。復讐しか考えられない愚か者は『何かのために』なんて高尚なことは考えられない。少なくとも、先ほどまでの貴方はそんな愚か者でしたけど……」

そう言っただけで含み笑いをした彼は余りにも……魅力があつて。

「今の貴方はどうでしょうね」

この人こそが私にとっての英雄なのだとは理解した。惚れている。美須々という武人はこの人に惚れている。

「やりたいならやった方が良く。それで地獄に墮ちるのなら地獄の底で笑えばいい。悔いがないのならやりなさい。そうしたのなら」

だからこそ私は最後の力を振り絞ってここまで歩いてきたのだ。この人に会うために。この英雄に会うために。



「気分ぐらいなら晴れるでしょう……貴方、そんな良い笑顔で笑えるんですね。その笑顔、好きですよ」

「っえ」と思い口に手を添えるて初めて私は自分が笑っている事に気が付く。

驚く私を見て男は笑う。その笑顔を見る私はいっしかその笑みを受け入れていて、見ていて嬉しくて、楽しくて。

涙が、涙が溢れる。

やっとやっと見つけたのだ。

自分の英雄を、理解してくれる、私の……私の……！！

「例え死のうとも、信念をとばされようとも、他人から全てを否定されたとしても、あるのですよ。やりたいことが、成し遂げたいことがね」

この人の夢は、この英雄の道は……！！

「貴方の……成し遂げたいこととは？」

「守りたい……ですかね」

男は天を見上げる。

「守りたい、どうしようもなく守りたい。それこそこの命失っても  
良いくらいにね」

その目は嘘を言っていない。剣のように鈍く、鋭い輝きを放つその  
目は何かを捕らえている。

この人は死んでも良いのだ。守るべき人のためならその命を散らせ  
てもいいと。

いいのですか？

この人を殺させて。

この人は私を初めて理解し、認めてくれた。きっといいだろう、  
こんなお方はこの先出会わない。  
そんな人が私の知らないところで死ぬのですか？為す術もなく死ぬ  
のですか？

は、はは。

それはありえないでしょう？

「私が……」

「ん？」

男は不思議そうな顔で空から私へと目を向ける。

私はそれが嬉しくてたまらない、この方は今私を見てくれている。私の言葉を聞こうとしている。嬉しくて、嬉しくてたまらない。こんな感情は初めてです。

「いずれ貴方の事を理解し、導いてくれる人が現れるはず。きっと貴方はどうしようもなくその人が好きでその人のために貴方の力を使いたいと思う日が来るはずよ。それはね、恋愛とか恋とかと違うの。ぐぐっと心の底から沸き上がる衝動って感じかな」

ああ、お母さん。貴方の言うとおりです。この心の底から湧き出る衝動、感動、歓喜、ああまるで世界の中心にたったかのように錯覚させられる。

私ではない、この方が世界の中心にいるのだ。私という世界の中心に彼は存在するのだ。彼の守る道、その道を私も進みたい。共に生きたい。

だから

「私がもし、貴方と共に戦っても負けるのでしょうか？」

私は決めた。

「負けるでしょうね」

男は真剣な目で、見定めるように私を見つめる。

見てください！！見定めてください！！私という存在が貴方に相応しいかを！！

「では、私が共に戦えば貴方は生き残ることが出来ますか？」

私は、貴方に仕えたい。

男は困ったように笑う。予想もしていなくてただ笑うしかないといった所か。

しばらく苦笑いを浮かべていたが私が真剣だ、諦めないと分かるととたんに目を厳しく尖らせる。

「解りませんね、貴方が来ずとも私は生きるかもしれない。死ぬかもしれない。運命という歯車は神でさえも扱えるものではないのですから」

そう、運命の歯車は誰にも扱えない。だからこそ解らない。

「貴方は運命の歯車は扱えずとも、私を扱えるのでは？」

その言葉にこの方は驚いたように私を見る。

私は笑う、ありのままの自分の姿で笑う。

人が見ればまるで狂っているかのような笑み。自分の命すらも殴り捨ててこの方に全てを委ねる。私という存在を、正義を、信念を、道を、全てをこの方に捧げる。

過去も、現在も、未来も全て！！

「貴方は……正気ですか？」

「ええ、私も貴方と同じように相当壊れているようです」

「死にますよ」

「構いません」

「誇りもなく、義もない、ただ私の願いのために戦うのですよ」

「是非にも」

「泥の棺桶で死ぬのですよ」

「喜んで」

「私が死ねと叫びたら死ねますか？」

その問いに私は口の端をあらん限り持ち上げる。きっと私は人がして良い笑みを浮かべてはいないだろうなあ。

「それこそが我が誉れ」

男は私を見て笑う。  
私も笑う。

「貴方は本当に、私と似て壊れているのですね」

「それは、最高の褒め言葉です、主」

我らは笑い会った。

私は誓う、この方のために全てを、私の全てを委ねて歩む。

私は誓う、この方が死ぬときは私が死ぬとき。この方の道が潰えるときは私の夢も潰える。

私は誓う、この方こそが、この方こそが我が生涯をかけるべきお方であると。

「私の名は程遠志、真名は美須々」

「私の名は波才、真名なんて高尚なもんは持ち合わせていませんよ。さて、これから貴方は地獄の道を歩むことになりましたが……その笑みを共に浮かべて進みましょう」

私は歓喜に震える。この方の道を歩めるのだと。共に進めるのだと！！

背を向け歩き始めた主に私は続く。

この時。私は黄天が頭上に輝いていたように感じた事を今も忘れな

これが主と私の出会い、共に戦い、黄巾の時を生き抜いた我らの出会い。

今日の前で旅立とうとしているこの方との出会い。



全てを背負い主は私と歩むことを許してくれた。私の過去、現在、未来。復讐までもこの人は背負っている。この人の幕切れがこれならば私は復讐という存在を捨てる。決して父や母のためではない。お父さんのためでもない。美須々が美須々であるために捨てる。美須々というものが主と歩むのに復讐が必要ではないからだ。ただそれだけ。

主を見る。

この人は生きている。もしかしたら私がいなくてもこの人は生き残ったかもしれない。今こうして旅立とうとしているのかもしれない。それでもここにいる主は美須々という存在と共に歩んできた人間に変わりがない。

それがたまらなく嬉しい。

主が私を知っている、見てくださる、話してくださる、共に戦ってください。

これ以上の幸福を私は知らない。これからも知ることはないだろう。

「旦那、多分マダ旦那ノ舞台ハ終ワツテナイゼ」

「……明埜？それってどう考えてもフラグですよ。いや、楽しそうなんですけど流石にそういう立て方はちょっといやなんですけど」

「ケケケ……何ノ事ヤラ」

明埜は笑っています。が嘘は基本つきません。彼女なりの信条か何か解りませんが軽い嘘でさえも主からの命令でない限りつかないのです。

主の命令では無いみたいです。ですから間違いなく本心でしょう。

さらには明埜、もの凄く『かん』がいいんです。

雨降るかもといったら大抵降りますし、物を無くしたときに明埜に何となく聞くと「ジャネエノ？イヤ、カンツウカナントナクダナ」で高確率発見です。

ほら、主がもの凄い冷や汗を流しています。本当にいやだったようです。

でも、もし明埜の言うとおりまだ主の舞台が終わっていないのだとすら、それは私が望む未来でしょう。配下の将や兵達は皆それを心待ちにしているのが解ります。

私は静かに目を瞑り、自分の決意を新たにす。

この思いだけは、この願ひだけは誰にも譲らない。

真つ暗な世界の中光り輝くものを感じる。

それは……。



主の将星が空で永久に輝かんことを。  
我が将星は生涯主の星の下にあり。

番外編 とある過去〜夢〜？（後書き）

オリキャラって凄い大変だね！！どこまでやっていいのかわからないですね！！でもオリキャラのために三回も使うのはやり過ぎだと思っただ！！

次回作も恋姫書くならオリキャラ無し、北郷君主役の性格改変物で書いてみようかなあ……。

〜北郷君を書いたら編〜

「お前らなんで寄ってたかって俺のアンチ系小説書きやがる。いくら寛容な一刀くんといえ怒っていいよな？」

青空の下執務室で仕事をしていた一刀は突然呟いた。

「アニメにも出られずに三期過ごしてんだぞ？しかも孔明はなんと

か動画でレギュラー獲得してはしゃいでいてうざい。というか主人公無しのアニメ三期もやるとか俺に対する嫌がらせか？」

大きなため息をついて筆を置くと机に肘をついて目の前に積まれた書類を鬱陶しそうに退かす。

「第一俺のこと嫌いっつうけどしょうがねえだろうが。俺がでてんのは鬼畜系じゃなくて友情系だぞ？うざくなるのはしょうがないだろう。しかもエロゲ主人公だから好きなキャラのルート進んでくと最終的にやるはめになるしょ。プレイヤーが好きなキャラに進むと最終的に俺が出てくるという血も涙もないジレンマに陥ることになりやがる！！」

「先程から何を一刀殿は言っているのですか？」

いろいろと我慢できなくなったのか、正面に座って同じく仕事をしていた稟が訝しげな様子で口を開く。

「一刀はやれやれと首を振ると憂いをおびた顔で切なげに呟く。

「稟、君はなんでサーヴァントである俺を召喚したんだ」

「は？」

オーバーに頭を抱えて一刀は歎く。

「なんで俺以外の全員がバーサーカーなんだ。どいつもこいつも理性失いやがって。特にうちの君主様はその代表格だ。色狂いだしまともな理性持ってたらかこの仕事の量は有り得ないだろう」

彼の言うとおり目の前には 山ほどの書類がたまっている。

「つくそ！！この聖杯戦争での願いは俺のいる四期だ！！」

「一刀殿……取り合えず仕事してください」

く終了く

駄目だ！！軽く四分で書いたけれど作者は駄文しか書けないこと忘れてたよ！！もうどうしようもないね！！そして一刀君、仮に四期があってもキミの出番はないよ！！

次回からは本編です。字数が減ります。文面がおかしくなります。原作キャラとのからみです。つまり作者には力量不足です。この小説は恋姫なので本編には当然ながら原作キャラがです。つまり次回です。胃が痛いです。

本編キャラは基本そのままなのがこの小説。華雄の姉さんは猪だし曹操は百合だし張遼はふんどしから脱せません。最後までそのままなのがこの小説の原作キャラ。

いろいろ文章がおかしく、頭が

\*。?。?)

しか回らない作者ですがどうぞよろしくお願いします。

それにしても \*。?。?)。

最近の金髪ドリルは頭良いんですがここまで馬鹿だと愛せてくるのは何故だろう?真の前に一番好きだったのがこの人でした。多分同族意識でしょう。



**第十六話 失踪する黄巾のパラベラム（前書き）**

未来を予測する最善の方法は、自らそれを創りだすことである

くアラン・ケイく

## 第十六話 失踪する黄巾のパラベラム

黄巾党が滅んだ後。

残った者達を連れて正面突破であの燃える砦から脱出しました。

なんとその際たくさん綺麗な美少女や女性に追われたんですよ。羨ましいでしょう？

いや〜モテる男は辛いですね。みんなが波才さん待って〜って激しい声出しながら迫ってくるんですよ。

そう言うときはきっちりとお話して諦めてもらうのが一番何ですけど。

「待て波才!!! 華琳様の命令だ!!! 止まれ!!!」

「そこのお兄ちゃん待て〜!!!」

「悪いが・・・華琳様のためにも逃がさん!!!」

ははは・・・。

「待ちなさい!!!」

「のお策殿、なんで我らまで曹操と同じくあやつを追うのじゃ?」

「そんなこと言ったら曹操のやつに先超されるわよ!」

これ話し合う気ゼロです。

本当にもてる男ってのは困りますよね〜(棒)

ねえ?羨ましいでしょう?羨ましいって言えよ。言ってくださいお願いします。

そりゃあね。私だって産まれて一度ぐらいたくさん綺麗な女性に追われてみたいなあって思いましたよ?私だって男ですもの。

漫画とかで女の子に囲まれて「私が 君と放課後帰るの!」とか「 君は私の物なの!」とか言われる主人公にパルパルしたり、もげるとか思ったりしましたよ。

私もなってみたいなあ、結局前世でも結婚出来なかったしとか思いましたよ。

そして今日なんと私にもその日が来たんですよ!!

見てください!!たくさんの綺麗な女性が私を求めて血糊のついた武器を振り回し、雄叫びを上げながら殺気だった兵を連れて馬で爆進しているじゃありませんか!!

あ、なんか後ろから放たれた矢が頬をかすりました。

ワオ!!刺激的!!

・・・あれ？私が求めたのってこんな命の危険が伴う願いでしたか？  
もうちょっとほのぼのしていて温かくて、周りの人が「波才死ね」  
っていつてくれるようなものじゃないのですか？  
何だか涙が止まりません。

ていうか孫策さん？なんで貴方まで私を追ってくるんですか？  
あれか？張角の首がないなら波才の首でいいじゃないとかいうやつ  
ですか？  
とんだマリーさんです。貴方の場合は赤字婦人が赤血婦人になるじ  
やないですか。どんだけ人の血吸ってるんですか。

それに曹操軍も曹操よりの命令で私を追っている？  
何それ怖い。

前世のトラウマが再起します。これで官軍が来たら私の命は終了で  
すね^^

・・・あれ？もしかして本当に死ぬの？

「人は、人は愛故に苦しまなければ・・・」

「主!!いつものご病気を言っていないで早くお逃げください!!」  
の美須々が主の道の礎になりましょう!!」

「うん、馬鹿な事行つてないで一緒に逃げますよ」美須々

「・・・(馬鹿を見る目)」

「ハイハイ。美須々」血ノ気が多イゾ」野菜デモ食ツテ死ンデロ」

「・・・私の覚悟が」

とか心配していましたが何とか無事に逃げ延びました。

途中美須々が何回も玉砕特攻繰り広げようとしたのをみんなで止め

ました。本人いわく「当たって砕ける！！」だそうです。  
砕けちゃだめだろ。

取り合えず疲れました。みなさんも一度でいいので沢山の殺気だった人達に追われてみましょう、きっと貴重な体験過ぎて死ねるでしょうから。

その後、波才の死んだという噂が流れ、私は天和様達と仲良く過ごしましたとさめでたしめでたし。

その後、波才達の行方を知るものは誰もいなかった

だったらどんなに良かったことか。

案の定疑り深い曹操が私の搜索に乗り出しました。

そこまでして首が欲しいのかと青くなっている懸賞金はどつちから生け捕りじゃないと意味がないらしいです。

・・・まさか私の体が目当てか!?

お前百合レッドじゃなかったのですか！？  
どうやら曹操は両刀レッドに進化したようです。

と言うわけで人相を隠すために仮面をつけて旅をすることに。

天和様方には明埜を通して手紙を送り生存報告。いずれ噂がやんだら向かいますと書いておきました。

この際にメールのすばらしさを実感できましたね、どこにいても送信可能ですから。

旅をしている私にとって送れることはあっても受け取ることは難しい。

旅の資金は黄巾党の砦から拝借。

かなりため込んでました。具体的に言えば年末ジャンボ宝くじの一等数枚分じゃ済まされない、USの軍事予算ぐらいあったかな？でも本当にそれぐらいあるんです。

各地にある分入れたら間違いなく国家予算分はありますね。

この時代のお金は紙幣ではないのでそれほど持つてはいけません。私一人で旅するには十分でしょう。

と言うわけでしばらくぶらぶらとしていました。

広大な漢の大地と自然は圧巻ですね。



でもしばらく旅して飽きてきました。

美須々と琉生はしばらく自由にしているといって放置してきましたし、明埜は天和様達との橋渡しになっってもらってます。

ようするに一人旅に飽きたんです。

それに私は人が見たいのであって、自然を見たいわけでは無いのです。

三国無双で背景グラフィック見たい！！すんげえってなる人見たことないような感じです。

ただ町を巡るだけでは味気ない。

ふと私は足を止めて空を見る。

どこまでも青く、どこまでも広がっている。この空に終わりが無いことを密かに願う自分がある。

この世で一番の罪は退屈だ。

多分人が進化し、進化し尽くしたなら死因の一番は退屈になるだろうと私は思う。死なず、老いず、この世の全てを謳歌し尽くした彼らに残る物は何だろう？

それは退屈。全てを達成した彼らに残るのは何も無い灰色の世界。全てに飽き、全てに失望し、やがて体験したことが無い死を渴望す

る。

死にたい訳ではない、死んだことがないからやってみたくなる。ただそれだけだ。

人はやがて太古より恐れた死すら娯楽の一つとして昇華させるだろう。

果たしてそれは幸せか？不幸か？生憎私はそれを知る術はないが少なくとも望んで死ぬような人間ではないよ。

愛を唄う少女を世界中がバカだと笑ったら世界は末期だと思わない？私は別に思わないけれど。

まとめ、暇。

ようするに暇なのだ。この英雄が蔓延る世界で旅だけで満足できると思った私がバカだった。日本人たる私はどうも日本人特有の病気、「仕事病」らしい。

そういえば日本人は趣味をある程度の義務とステータスとする。会社の面接でも「ご趣味は」の項目が丁寧にもあるぐらいだ。履歴書に趣味を書くなど私から考えれば病気にしか思えない。

無理に趣味を作ろうとする必要など無いのだ。

この趣味も「仕事病」である日本人の特徴だろう。

さて、私はなにをしよう？まさか軍勤め・・・否、それは天和様を裏切るに他ならない。それ以前に規則正しくおいつちにおいつちにと毎日生活するのは面倒だな。

ならば・・・そうだ。

あれをしよう。私の夢だったではないか。

幼稚園の頃「将来の夢」という題名で私が発表した事を思い出す。周りは宇宙飛行士やサッカー選手やアイドルなどと今現在彼ら自身が笑い飛ばすであろう夢を発表していたが私は一人だけ異彩を放ったのを覚えている。少なくともあの陽気な両親が引きつった笑みを浮かべていたのはあの時ぐらいだ。

私が二歳の時、父親が連れて行ってくれたあの夜。

そっだ、私は恋をしたのだ。

今でも鮮明に覚えている。ならばこの世界で幼稚園の夢を叶えることもまた一興。

私は「っふ」と小さな笑いをこぼすと夜に沸く町へと歩き出す。

いいだろう、この波才。この漢の夜に一筋の光明を与えたもうぞ！！

私は新たに自分の道として……。



屋台おでん屋を制作する。

人と触れ合う客商売とかしたい 店を持つのは無理 屋台 日本人  
クオリティが欲しいな おでん。

という思考の流れだ。我ながら天才だと思う。

正直、焼き鳥屋かそば屋も考えてはいたが……。おでんだろ、常識的に考えて。

私は鶏ガラのこってりだしでいくことにする。

#### 【BGM】地上の星

まずはなけなしの金を全て使って屋台と材料を調達する。  
この世界はどちらかと言えば江戸時代のそば屋のような屋台の形式が非常に多く、それが主流だろう。

もうそもそもこの時代に屋台とかねえだろとかは考えない。常識に  
囚われてはいけないとミラクルフルーツが言っていた。

既存の屋台を買う方が楽だと思いい中古の物を購入。  
鍋は特注で鍛冶屋に頼んだ。

シヨバンニが一日で……。じゃなくて鍛冶屋の親方が一日でやって

くれました。

もうつつこまない。この世界ではそれが常識なんだ。この世界で麻帆良大結界が張られていてももう自分は驚かないと思う。もう気にしたら疲れるだけだ。

いよいよ材料もそろえて肝心な煮汁を製造開始だ。

山から汲んできた新鮮なわき水をまず鍋の中に満たす。

ポリタンクなんて便利な物はない。なので瓶や桶で取る必要がある。

・・・自分一人で無理だったので明埜と忍びの皆さんに手伝ってもらいました。忍びの皆さんが呼ばれた内容でちよつとキレかけたなんて事実はない。

鍋に水を入れて烏ガラを入れる。ここで肝心なのはこの世界は当然ながら火は薪を燃やす事によって発生する。絶対に激しい炎は出ないのだ。だから火の調節が・・・

そう持っていた頃が私にもあった。

ばりばり強い火が出ます。

そもそも麻婆が出てきた時点で気が付けば良かった。

中国は漢時代まで冷食が中心だったが唐時代から薪を使った煮炊き  
が中心となっていた。

宋時代の商業の発展とともに石炭が流通し始めることで強い火力で  
調理することが可能になり、「火力の芸術」と呼ばれる現在のよう  
な中華料理の基礎が出来たのだ。

この世界はいきなり唐の時代の薪を使うという手法。おまけに何故  
か石炭を使用しないにもかかわらず激しい火が薪で起こる。それこ  
そパラッパラのチャーハンが出来るほどだ。

多分この世界の物理学者は相当頭を捻らせることだろう。もうぶっ  
ちやけ石炭とかいらさないんじゃないだろうか？工業革命起こるのか？

・・・気にしたら負けだな。うん。

そのまま強火でひと煮立ちして灰汁をとる。その後ことこと弱火で煮て昆布をいれて味がきつくなりすぎないようにまたことこと。

味は醤油をとみりんだ。みりんは度が強い酒から製造し、醤油は・・・  
・何故かある。餃子と一緒に店で出てくる。なんか疲れた。

それを味を見ながら入れて無事完成。

具はこんにゃく、玉子、がんも、つみれ、たこ足、その他練り物系  
統だ。幸い魚が豊富な土地なので練り物には困らない。

大根は無かった・・・卑弥呼に会いに行こうか悩む。おでんといっ  
たら大根だろうに。

餅巾着はつくれそうだがいかんせん手間が他よりも多い。

取り合えずこれでがんばろうと思う。

「苦節二ヶ月！！ ようやくこの国で合法的におでんができる日が  
来たか！！」

【BGM】終了



結果としては無事お客さんに受け入れられました。

A級グルメではないにしてもB級グルメとしては大成功です。夜の  
疲れた町人達の密かな楽しみになっているようです。

私が仮面をしていることで怪しげな雰囲気があるのもまたいいとか。

いや、実に良かったです。こりやお店出す日も近いね!!

でも私、とことんぬけているようでして……。

「それでの、冥琳のやつが相変わらず五月蠅いのじゃ!!」

「へえ」

「ちいとばかり休憩しての、酒を飲むだけというのに全く!!」

「へえ」

「おい、店主!!聞いておるのか!?!」

「へえ」

「それでの〜」

このお客さん絡み酒がやばい。

しかも無視しようが話し続けます。

髪は白くて長く、赤い服は露出が多い。そして妙に年寄りくさい話し方をする。

何より胸が大きい、天和様も大きかったがそれとは比較にならないぐらい大きい。天和様がメロンだったらこの人は西瓜でしょう。

私は胸で人を決めません。

尻です。女は尻なのです。

そういえばどうでもいいですけど孫策も胸が大きかったですからねえ。孫呉の地つてのは胸が豊かな地なのでしょうか？あの曹操も呉で兵を起こせばよかったのに。  
そしてこのお方。

「黄蓋さん、そろそろ止めにしては？」

「何を言うのじゃ店主、まだまだこれからじゃよ」

そう、あの呉の黄蓋さんなんです。

おい、これ嫌がらせだろ。

適当にぶらりと屋台を引きずりながら旅をしていてここで商売をしていたら、いつの間にか固定客になっていました。なんだろう、誰かが逃がさないように毒々しい糸で私をふんじばっているような気がします。私そっちの趣味ないんだけどなあ。

「店主、酒とつみれとがんもじゃ」

「へいへい」

そう、これがわたしのうっかりです。

この呉の土地は魚が捕りやすいので練り物が作り易いのでやってきましたが虎の巣ですよ。でもお値段以上の条件なので少しぐらい危なくてもいいのです。

虎穴に入らずんば虎児を得ずと言いますからね。

練り物のために虎の巣のと真ん中にいます。

というか虎を接待しています。

商人てのはですね、例え親の敵だろうが何だろうが客なら今できる最高の接待をする必要があるのです。ここ、テストに出ますよ。

話していると黄蓋さんは怪しい仮面を被った男が変な食べ物売っていて、それがうまいという話を聞きつけて場合によっては取り締まるために来たようでした。

ですがいつのまにか彼女の愚痴を聞くはめに・・・結構重要な事口

走っているような気がするのですが大丈夫かこの軍。

聞けば孫策は相当蜂蜜娘にお怒りのようですね。こりゃこの世界でも独立するかな？

あと周瑜さんマジがんばれ。この人同様孫策もかなり癖が強いようで、そんな彼女達をまとめ上げる周瑜さんの胃はどれほどのものやら。

正露丸あつたら送ってます。

「にしても店主、この『おでん』という物は酒によく合うのう」

「ええ、これは私の祖国の食べ物でしょ。こちらのお酒もいいですが故郷のお酒もおいしいですよ？」

「むむ！お主の故郷の酒とやらを是非飲んでみたいのう」

「あゝ言っておいて何ですが難しいですね。一からやるとなると十年ぐらいはかかるかな？」

ビールなら数年でいいと思うんですけど清酒やら大吟醸は難しいよな・・・そもそも水の形態からして違う。

ワインもそれよつの環境を整えないと駄目なので放浪している私には無理です。

そもそもこのおでんの汁を作るだけでもかなりの労力と時間がかかりましたし。

みりんとかすごい制作がめんどいんです。酒から造り出すのには骨が折れました。

当面の目標はからしかな・・・。

明埜達にアブラナ科の植物であるカラシナを探してもらっています。からしがあればもつとおでんの味が深まるでしょう。

なんか明埜のほほが引きつってましたが多分気のせいでしょう。

「それは残念じゃのう・・・」

この人ほんとお酒好きだなあ・・・。

だってここんとこ毎日この屋台に来てるもん。というより真っ昼間も酒飲んでるらしいです。

肝臓死ぬぞ。

まあこの人が通い詰めているおかげで商売は良い方に向かっていますけどね。そういえばこの人以外の孫策軍の人も来るのかなあと心配になったのですが、黄蓋さんはここを秘密スポットというか愚痴る場所として隠しているそうです。

それ以前に屋台だから移動できるし、見つからないようにしているんですけどね。

「まあまあ、この卵はサービスですよ」

「さーびす？」

あ、そうか。

ついつい母国語が出ちゃいました。  
怪しまれぬようにしないと目をつけられちゃいますからね。

「私の国の言葉で売買した後にはモノが残らず、効用や満足などを提供する。つまり私からの心配りですあ」

「それではお主が損するのでは？」

「な〜に長期的に見てお客さんが通ってくれた方が利益が出るもんです。短期で利益を求めてもこの商売はしょうがないですからね。それにそういうお客さんは選んでいるつもりですぜ？あっしも商売人ですからね」

「ほう・・・ならば頂こう。それにしてもお主、この『おでん』とい先ほどのさーびすの考えといい中々の知識を持っているのではないか？確かこの前お主が話した市場に関する話も面白いものであったしの」

そう言っ目て目を光らせる。

あ、これやばい。

人材マニアが私を見る目と同じです。

それにこの前私も酒を飲まされてうっかり話した区画整理や人の心理分析の話が仇となったか。

こっちのお酒度数がやばいんですよね。なるべく気をつけてはいたのですが・・・というかこの人も相当酔っていたはずなのに覚えていたんですか。

汚いなさずが黄蓋汚い。

「いえいえ……自分なんてちょっと人より小賢しいだけでさあ」

正直目をつけられるのはマジ勘弁です。

せつかく平和に屋台で生活しているのに何が好きこのんで歴史に介入せにやなんのですか？

確かに自分は普通よりは強いですが、死なないというわけではありません。

ほとぼりが冷めたら天和様達と合流して、のんびりと昼間はマネージャー、夜は屋台の狐仮面として生きていくんだ。

「ほう……だがそのちょっと小賢しい人間こそ今我らは欲しているのじゃ」

あ、だめだこの人。

まだ諦めていないや。

そろそろここも潮時かなあ……。

ここはつみれとかの練り物が作り安いから好きだったんだけどしょうがない。

軍勤めは厳しいですし、私は平和にのんびりと暮らすのですよ。

でもどうしようかなあ……思ったより商売するの楽しいんですね。

次は焼き鳥屋でも始めるかな。

翌日。

思い立つたら吉日と言いますし、さっそく準備を始めました。

よく考えれば呉は有名所です。

そんな所に居ればこうなるのが当たり前なんですよね・・・というよりなんでここの人達は普通に町中闊歩してるんですか？おかげで結構有名な人とか目にします。

孫策さんとかもよくぶらぶらしていますよ？いや、仕事はどうしたっていう。

よく眼鏡の褐色の女性に連れ戻されてます。

大丈夫かこの国。

他の所でも目をつけられることもしばしば・・・あれか？逃がさな  
いってか？意地でも働けってか？

そうだ！！地味な人が治めている所に行こう。

少しでも目をかいくぐって平和に生きてやりますよ！！  
ええ！！



・・・なんかフラグ臭いのは気のせいだと思いたい。

地味・・・地味・・・地味ねえ。

公孫贄？

よし、公孫贄の所にも行きましょう。

まだ反董卓連合は出来ていませんし、しばらくは平和に過ごせそうですからね。

そう思いながら見納めにと町をぶらぶらしています。

すでに屋台は売り払いましたし、明埜達には七味の材料を探してもらっています。

からの材料は貴重なので栽培出来るよう懐に大切にしまっています。

狐の仮面を身につけているため変な視線をもらいますが、なじみのお客様さんは気軽に話しかけてきてくれます。話しかけてくるお客様さんには警備の兵の人もいるので、皆さんの警戒した視線は次第と無くなっていきました。

人々が行き交うこの町は・・・うんうん、今日も平和



「人質を放しなさい」

「放せと言われて、はい、そうですかーって聞けるかよ!」

・・・返せ!!私の平和な日常を返せ!!

心で号泣しながら見れば人だまりが見えています。

穏やかじゃないなあ。

少なくとも今の声を聞いてうわあ!!楽しそう!!とか考えられる人は多分いかれているか馬鹿の二択です。つまり私はいかれています。バカだというわけです。

と言うか今の声聞いたことがあります。孫策さんですね。

あの黄巾党以来ですねえ・・・嘘です、たびたび町中で酒飲んでるの見ました。もの凄い色っぽかったです。

でもこりやますます嫌な予感がします。

こう言うのには関わらない方が・・・いって解っているのに見ようとしてしまう悲しき庶民の野次馬魂。

つつつと騒ぎの方へ惹き付けられるように移動していく。

民衆に混じり影の方から覗いて見ようとすると

「お主はおでん屋の店主ではないか?」

こそこそ声で話しかけてくる人がいました。

見れば私と同じように影から覗く黄蓋さんの姿が。

いつも屋台で見せる頼りなく酒臭い姿はなく、武人としての心構えであることが感じられます。こりやだらに嫌な予感がします。

何があつたんだ？

貧乳党の連中が呉で拳兵したのか？この国は胸が大きい人が多いですからね。ならば尻の良さを彼らに教え込まねば。

「どうも……。いったい何があつたので？」

「うむ……。実は黄巾の残党がこの町に潜んでいたところを孫策殿が見つけたらしくての」

……。ほう。

「当然引っ捕らえようとしたのだが、残党共は捕まるぐらいならと自棄になって人質を……。お主、どうした」

黄蓋さんは雰囲気が変わった私に驚いているようです。

あれです、私今怒っちゃってます。でもそれをだだ漏れになってしてませんよ？鋭く、針のような殺気。

それを感じた黄蓋さんはやっぱり普通じゃありませんね。

でもそれよりも今は黄蓋さんの話したことが重要だ。

あいつら馬鹿ですね。どうしようもない馬鹿です。

ああ、気に入らない。本当に気に入らない。

本当は覗いただけで済ませる気でしたがそれならば動くしかないでしょう。

「ちょっとこの件、私に任せてもらっても？」

「……大丈夫なのか？」

「ええ……その隙に隠れて様子をうかがっている兵達に命令しちやうてください」

実はすでにこの野次馬の中に兵士が紛れ込んでるんですよね。何故解るかって？

そりゃ一般人と兵士じゃ纏っている気が違いますよ。

「お主はやはり……解った。頼むぞ」

「はい」

そう言って私は群衆をかき分けて行った。いらつぎ、手を強く握り込みながら。

「いやぁ……これはこれは黄巾党の残党さんは何をなさっているの？」

突然現れた狐の男にその場にいた全員が驚く。

孫策さんが隣まで歩み寄った私を警戒しつつ、私にしか聞こえないような声で言う。

「……ここは危ないから私に任せてくれないかしら」

おうおう孫策さん、凄い殺気ですね。  
でもね。

今回ばかりは全部丸投げ、任せるわけにはいかないんですよ。  
あんな気に入らない連中ほっとけて？  
馬鹿言っちゃいけませんよ。

私は笑い仮面に手をかける。

「お久しぶりですね・・・孫策さん」

仮面を少し上げる。

私の顔を見た孫策さんは驚くが直ぐに警戒を強くし手渡しに殺気を向けてくる。

「貴方・・・まさか」

頼みますからその殺気を私に向けないでくれませんかね。  
正直漏らしそうなくらい怖いんですが。

「尻ぬぐいをしに來ただけですよ、私はね」

「・・・」

少なくとも味方・・・というのは解つてくれたみたいです。  
こういう頭の良い方は私も好きですよ。

「期を見て貴方はお願いしますね」

「・・・解つたわ」

少し間を置いて孫策さんは了承してくれたようです。まあ現状では打つ手もないですね。あれなら私を殺せばいいですからね。

まあ、殺される気はないので精一杯味方になりましょう。そうやって私は前に行く。





ああ、気に入らない。本当に気に入らない。あいつらマジで何やってんだろっ？

本当に救いようがない、どうしようもないくらいに救いようがない。

ああ、気に入らない。

## 第十六話 失踪する黄巾のパラベラム（後書き）

屋台をすることは作者の長年の夢でした。

幼稚園の発表会が夢というテーマで屋台をやりたいといって先生が引きつった笑みを浮かべていたのを覚えています。

なので小説でやった。後悔はしていない（おい

おでん 呉

焼き鳥 魏

そば 蜀

だったのですがなかなか決まらない。呉は黄巾兵のイベントがある、魏は天和がらみのイベントがある、蜀ははらぺこメンツとの絡みが……どうしよう。

近くにいた友に聞く。

「おでんと焼き鳥とそばどれが良いと思う？」

「おでん、あ、はんぺん入れてね」

「おう、わか……あれ？」

おでん美味しかったです。

おでんの記述に関してふざけんなと思った人。

貴方は正常です。これからもそのままの貴方でいてください。

作者も悩んだんだ。でもね。

恋姫の公式小説にケンタツキーとコーラが出てきたからもう作者も何を信じて良いのかわかんないんだ!! おまけに本編でも石炭使わず木だけでチャーハンとか麻婆とか作ってるんだ!! 中華鍋で!!

……と、見苦しい私はここまでにして久しぶりの武将紹介は以前感想覧でやることに決めたあの人です。

長き髪を二つにまとめた少女が剣を構えた。くりつとした目は覚悟を決めており、静かに息を吐くと。その剣を自らの足に……。

突き刺そうとしたが一人の男に止められた。

「お願い!! お願いだからその手をどけて? 統!!」

「どけられるか!! つうか何しようとしてんの!？」

「だから言ってるでしょ!! 私は足が不自由なの!! だから足の筋を切って伸ばして少しでも歩けるようになるのよ!!」

「だからって剣持ち出すなあほ!!」

「いやよお!! 過去の偉人みたいに戦場で私は風になるのよお!!」

ザシュッ

「」「あ」「

「というアホですがどうぞお願いします」

「私は留賛!!この国の神風になるわ!!」

「……」

孫権は汗を額に浮かべ微妙な笑い顔を顔を浮かべてることしかできなかつたという。

対する姉の孫策はとても良い笑みだったが。

チリーンチリーン

「……」

チリーンチリーン

「……」

この戦場で戦っているのは甘寧、そして新しい武将の留贊だった。その腕をまずは確かめようと思ったのだが、その武に皆驚かされた。彼女が奮うトンフォーにより一発で多くの兵が空を舞う。実に頼もしき姿なのだが……問題が一つあった。

「らららららああああ〜ゲホゲホ!!らららあーい!!!!」

「あの、姉様。なんで留贊はあんな声出しているのかしら?」

「あ〜本人が楽しいなら良いんじゃない?」

あの孫策でさえ乾いた笑い声を漏らしている。

留贊は何故か変な歌い声を上げながら髪を振り乱して戦っていた。見ている自分たちでさえこの有様なのだから敵方はさらに混乱しているだろう。

さらに甘寧の鈴の音が合わさることによりもはやこの戦場は混沌と かしていた。

「鈴が、鈴の音が聞こえてくる!?!」

「じ、地獄からわき出したような声……」

「だ〜れが地獄じゃ……!!ららららーい!!!!」

「「ギャー!!!!」」

確かに、確かに強いのだが。すばらしい武将なのだが……二人は目

を合わせると盛大にため息をついた。どうも呉の将達は一癖あるようだ。

これ以降彼女は「戦乱の狂歌」というあだ名がついた。彼女が出る戦場は歌で溢れ、その歌が戦で聞こえたとき呉は必ず勝利した。

「ゲホゲホ……」

「りゅ、留賛様。体調の方は？」

「すごぶる悪いかな……でも敵さんは待つてくれないみたいね」

彼女は魏へと攻めたが病により撤退を余儀なくされた。この時彼女は重い病にかかっていた。彼女は目を鋭くする、どうやら追撃が来たようだ。

今の自分では陣立てすらままならない。

彼女は將軍を示すの曲蓋と印綬を懐から取り出すとその若者へと渡す。

「行きなさい、この……これだけは汚すことは許されないのよ」

「そ、そんな！？留賛様も早く逃げ」

チャキ

「行きなさい……さもなくば貴方の首を叩き折る」

「……分かりました。ですがどうか、どうか生きて帰ってください  
!」

そう言うとその若者は馬に乗って走り去っていく。

それを優しげな目で見ていた留賛はやがて見えるだろう敵へ向けて  
振り返る。

「らら……げほげほ」

歌おうとする血が込み上げてきた。それを服の袖で拭う。  
彼女は悲しげに笑みを浮かべた。

「……もう、歌えないみたい」

留賛、字は正明。

会稽郡長山の生まれで、黄巾賊と戦った際に指揮官の呉桓を斬った  
変わりに、足を負傷し曲げる事ができなくなってしまう。

身体に障害を抱えてしまった留賛は、兵法書や歴史書を読みあさる  
日々を送ったものの、歴史書に登場する英雄達のエピソードを読ん  
ではため息をついていた。やがて彼は一大決心をする。

「私は足が萎えてしまっこのままでは死んでいるも同然だ。足の  
筋を切って、伸ばしたいと思う。」



当然親戚一同大反対だが彼は実行。なんとか歩けるようにまでその足を回復させた。その話を聞いた呉の？統は彼を孫権に推薦することのでめでたく呉の武将となる。

彼の一番の特徴はその戦い方にあつた。

髪を振り乱つつ天へ向つて叫び、声を張り上げて盛大に歌い、留賛に続いて左右の兵が歌い出すというものだった。

この時の彼の部隊は決して負けることはなく不敗神話を打ち立てている。

ぶっちゃけ変態集団も顔負けだと思つ。

だが彼が73才、戦に出た際重い病にかかる。彼自身に撤退命令が下り、退却している最中に追撃を受けた。彼は重い病により歌うこともできず、陣立てをすることもままならなかつた。彼は死をこの時悟つたとされる。

「私は将となつてからというもの、敵を撃ち破つて旗を奪い、一度も負けた事は無い。しかし今は、病が重く動く事もままならず、兵も貧弱だ。お前たちは逃げよ。一緒に死んでも無益だ。」

だが彼らの部下はそれを拒んで共に戦おうとしたが、病で動かぬ体で無理をして刀で斬りつける事で強引に撤退させる。留賛自身は蒋班の追撃をうけて戦死。

「俺が戦う時はいつも決まつた戦い方があつたが病でそれもかなわぬ。ここで死ぬのが天命なのだろう」

と言い残し最後の戦に赴き73歳の生涯を閉じた。

別名「戦場のVOCALOID」。

もうマジでいたのかという人です。不敗神話に死ぬときは歌えなかったとかもつ……ここにいるぞよりもよっぽど濃いキャラ。

この人を書くのなら「私の歌を聞けええええ!!」って言わせてみたい。

第十七話 黄天は衰退しました（前書き）

孤独はこの世で一番恐ろしい苦しみだ。どんなに激しい恐怖も、みんながいつしよなら絶えられるが、孤独は死に等しい。

くゲオルギウく

## 第十七話 黄天は衰退しました

「おやおや？これはこれは・・・ずいぶんと物々しいですねえ」

ふらふらと泥酔者のように、だが確かな足取りで男は現れた。

ざんばら頭に狐の仮面、どこをどう見たとしても「怪しい」の一言につきない男の出現によりその場にいた者達は目を奪われた。

誰もが計りかねる中彼はただ一人思考の海へと沈む。

数は3人で人質は老人が1人ですか。

・・・ほんとこの馬鹿共はなにをやっているんでしょうね。

そう思って小さく舌打ち。

いやもうこれイライラしすぎて頭が痛くなってきたんですけどね。  
この世界保険ないんですからとつとつその原因を詰んじやいましてよ  
うか。

「お、お前は誰だ!？」

緊張に絶えられなくなったのか、黄巾の残党は声を荒げて叫ぶ。黄巾党だけではなくそれはこの場にいる中で孫策以外の全員が考えている疑問であった。

その言葉に波才は飄々と頭をかきながら首を傾げ、さも当たり前だと言わんばかりに口を開き言った。

「え、通りすがりのおでん屋の主人ですよ？」

本人は心から言ったのだが黄巾の残党達は顔を怒りよって赤くし、剣を持つ手が震えている。  
どうやらからかわれたと思っっているらしい。

もう一度言う。彼のこの言葉はいたって真剣だ。

「巫山戯たこと抜かすんじゃないねえ！！」

そう言つて激昂した黄巾の男は持っている剣を人質である老人に当てる。

老人は「ヒッ」と短く小さい悲鳴を上げるとただでさえ曲がっていた腰を更に曲げて縮こまった。

それを見て思わず眉をしかめる。

「（嘘じゃないんだけどなあ・・・）」

内心波才はため息をつく。

そろそろ真面目にやらないと人質の命が危ないですね。まったく、

なんでこんな馬鹿な事に真面目にならないといけない。余りにも馬鹿らしくため息が出てくる。

少なくとも、巻き込まれた老人の方が私よりも気の毒だ。こんな馬鹿な事で死なせたくはない。ああ、馬鹿らしい。なんで私がこんな馬鹿らしいことに付き合わねばならない？

自分から言い出したがこれは余りにも馬鹿らしい、なので付き合い合わせるを得ない。ああ、馬鹿らしい。見ているだけで虫ずが走る。

がしがしと頭をかく手には薄く血管が浮かんでいる。波才は目の前の黄巾の残党と同様、それ以上にいらいらしていた。

波才は内心この連中に付き合うのも見るのも聞くこともしたくはなかった。だがそれ以上に波才から見て彼らは醜悪で救えなくて惨めで。ようするに彼らが存在することに耐えられなかった。

波才はかぶり続けた仮面に手をかける。

この仮面は外したくはないが、この中にいる一人の残党は見覚えがあった。正直こんな連中に素顔を見せるのなら死んだ方がマシだが孫策と約束してしまった。

そうでもしなければ彼らは生き延びる恐れがある。そんな事、こんな連中が生き残り、孫策の物語に傷をつけるなど私には耐えられない。

そしてゆっくりと仮面を外す。

徐々に現れた顔はどこにでもいるような普通の顔。

対して特徴があるわけでもない。

綺麗だ、醜いと言うわけでもない。

隣を通り過ぎたとしても気になることはない普通の顔。

周りにいた群衆も、黄蓋もその顔を見て特に感じ入ることはなかった。

だが黄巾の残党の一人は違った。

その顔を見た瞬間、その顔に目を奪われて固まる。彼は一度陣中で見かけたことがあった。それ以来忘れたことはない。忘れたことはない。

呆然とたたずむ一人に他の二人は何が起こったのか理解できない。やがてその一人の黄巾党の残党は絞り出すようにその名を呼ぶ。

「は……」

黄巾の最強の将の名を。

「波才……將軍」

その絞り出された声の名前を誰もが理解した瞬間、その場にいた全員が固まり、動けなくなる。

先ほどまで「なんだ」とばかりに睨み付けていた二人の残党も今で

は驚きの余り、開いた口がふさがらず空気が肺と行き来する音だけがその口から溢れる。

それはその場にいた群衆も、黄蓋ですらも同様であった。

やがて群衆の一人が耐えきれずに声を上げる。

「波才……ってあの黄巾党の波才か？」

その声を皮切りに他の群衆も次々に声を上げる。

「何度も官軍を撃退したあの……」

「し、死んだはずじゃ」

「な、なんで波才がここに」

誰もが死んだと聞いていた名を持つ男が現れたことに困惑し、理解出来ない。

黄蓋もその名に驚いたが納得の表情を浮かべた。

孫策から黄巾の軍を滅ぼした後に追った一人の黄巾の男の話を知っていたからだ。孫策を打ち破る武、そして全てを知るような言動。彼は天の者だと孫策は言っていた。彼女のかんがそう告げているとも。

その者の名は波才。

あそこに立っている、いつも話していた店主がそうだとは思ってもし



なかった。

だが納得した。

そうじゃなければ彼が語る話は、料理は、言葉について説明が出来ない。

彼の故郷というのがおそらく天の国なのだろう。

だとしたら自分はずいぶんといい思いをしたことになるが・・・それよりこの現状が問題だ。

「（じゃが何をしにここへ来た？孫策殿が退いたということは害はないじゃろうが・・・）」

だが彼女もまた波才の行動に戸惑い、決めかねていた。聞けば追われておりこの場で目立つ必要はないはずだ。

あの残党達の味方をするのだろうかと考えたがそれならば策殿が退くはずはない。

ならば何故？

黄蓋は油断無くどこに転ぶのかまるで分からない場を注意深く観察しながら考える。

だが、そんな戸惑いを見せる者達とは違い歓喜にその声を上げる者達もいた。

「は、波才將軍が来てくれたぞ！！！」

「やった・・・やったぞ!!!」

「これでもう怖いものは何もねえ!!!」

それは黄巾の残党達であった。

彼らは絶望の表情から一転、勝ち誇った勝者の顔へと変わっていた。彼らは周りを囲まれ、人質を取ったものの生き延びられるか分からなかった。

だがそんな時に駆け付けるように現れたのは黄巾の英雄だ。故に彼らは笑い、喜びに体を震わせたのだ。

それ故に黄巾党の残党は気が付かなかった。

冷たく、侮蔑の表情で彼らを見つめる波才の姿に。

「波才様我らをお助けください!!!」

一人の残党の男が声を上げる。

彼らは信じていたのだ。波才が助けてくれると。

だがその声に波才は動かない。ただ頭をかきながら退屈そうに足で土を弄ぶ。

そんな波才の姿に戸惑民衆と黄巾の残党達。

「は、波才さ」

聞こえなかったのだろうかともう一度その名を呼ぼうとした、その時。

「貴方達は十分いい思いをしたじゃないですか」

声を遮って発せられた声はあまりにも冷たく、氷のような声。

その言葉は確かに波才から発せられていた。

そして波才自身の体から周りを圧倒する重く、どす黒い重圧が周りを黙らせる。

黄巾党の残党は喜びの顔から一転、啞然とした表情を浮かべた。

救世主を見つけた彼らから見て、救いの神は一瞬で死神へと姿を変えたように見えたからだ。さらに先ほど対峙した女の武人とは比較にならないような死を波才から感じ取り、顔を青くする。

そんな彼らを波才は鼻で笑う。

彼の再度開いた口から飛び出すのは夥しい呪詛の嵐。

「村を襲って、金品を強奪し、女を奪い、いつたい何人の血をすすってきたので？」

笑った波才をみて男達はゾツとした。

笑う波才の顔には『無』。

彼らを嘲笑うこともなく、哀れむこともなく、侮蔑することも、怒りを向けることもない。

なんの感情も浮かんでいない人形のような冷たい顔。

黄巾党の残党のみならず、周りから様子を見る民衆すらも怯え、一歩足を下げた事によって波才達の周囲にはより大きな円が出来上がる。

波才は一切それを気にせずただ残党達を見続ける。呪詛をはき続ける。

「何人の罪もない人間を殺してきた？どれぐらいの罪もない人間を殺してきましたか？楽しかったでしょうね。自分よりも弱者を踏みにするのは。貴方達みたいな馬鹿は強くなると調子に乗って自分の事しか考えないですからね。踏みにじられる弱者なんか気にも止めないでしょう」

誰も動けない。

彼の言葉には不思議な力が宿っていた。だがその力はとても禍々しく、触れれば全てを飲み込むほどの負の濁流。

自然と波才の周りからは音は聞こえなくなり、ただ波才の声のみが場を支配する。

そして「でもね」と波才はその言葉に付け加える。



「弱者はそのままでもいいなんて思っではいませんよ？」

そう波才は笑う、否、嗤った。

その笑みは言いようのない恐ろしさと醜さ、その声は余りにも重く、聞くだけで精神がすり減る。

もはやこの場の全てを波才はその手に握りしめていた。

周囲の波才を見る目には怯えと恐怖が浮かんでいる。

「私達が起こした反乱のように与えられた怨は必ず返ってきます。それが世界の法則つてものですよ。ちよつと歴史を調べればそれが嫌でも解ります。この漢でさえ生まれる前には振りまかれた怨により陳勝・呉広の乱が在ったのですから。貴方達は張角様を盾にしてその怨をたくさんの方に振りまきました。でもその分いい思いをしましたよね？」

そう問いかける波才の顔は怒りに満ちていた。

その顔を向けられて三人の残党達はヒツと短い悲鳴を上げる。

「貴方達にはその怨が返ってきただけです。それをそんな被害者ぶって罪もない人質を取り、巻き込み、甘ちゃんなことを言うとはいただけないですね。馬鹿ですか貴方達？」

クスクスと笑うその子供のような仕草が、かえって黄巾党に不安と絶望を与える。

やがて笑い声に絶えられなくなったのか、それを振り払うように彼らの一人が叫ぶ。

「お、お前だって俺らと同じ黄巾党じゃねえか！！何を偉そうに！！」

「そうですね、私も黄巾党でしたよ？」

だが波才はそれを受け止めた。  
受け止めた上で彼は言う。

「だけど貴方達と同じというのは納得が出来ない。なんの罪も無い民を人質に取るなんて考えることすら馬鹿らしい。ああ気に入らない、貴方達が気に入らない」

殺気にその場にいた全員が恐怖の表情を浮かべる。  
それ程までにすさまじく、『死』を強制的に感じさせる。  
それは黄蓋も例外ではなかった。

「(な、なんとという殺気。儂が恐怖に震えているじゃと!?)」

歴戦の将さえも震えさせる殺気。

それを目の前の青年は出している。

背後にいる黄蓋でさえその殺気に震えるのだから、正面からその殺気で射貫かれている黄巾の残党達は気が気でなかった。

「私達はもともと腐った人間と腐った国を変えるために立ち上がった。重税をかけられ、税が払えずどんどん生活が苦しくなっていく者達のために私達は戦った。まあ、大半はそういう理由じゃなかった気もしますがそれでも同じ弱者を襲うことはしなかった。なのに、いつのまにか他の黄巾党の連中はその腐ったやつらと同じになった。私の部下達のような苦痛に泣く民にも牙を向けた。失ってはいけない人として大切な物を失ってしまった。だから私達は消えなくてはならない。そんな者達はいてはならないのだから」

波才が彼らを見つめる目はいつの間にか殺気から憎悪へと変貌していた。

「なのに貴方達は何を、何をやっているのですか？張角様が新たな時代への犠牲になった。もうそんなことする必要はない、くわを持って畑を耕したり、店で働いたりしなくちゃならないってのになんで剣を持って罪のない民を傷つけ続ける？貴方達はもう戻れないんですよ。人の金を奪い、生活を脅かすことに慣れた獣は殺されなくてはならない。獣になった者は退治されなくてはならない。死神が



いずれその首を取りに来るのを待つしかないんですよ」

誰も話す事が出来ない。

彼の言葉はとても悲しい響きを持ち、聞く者全ての心を握った。黄巾党の残党ももはや何も話さない。ただただ、絶望の表情を浮かべていた。

そんな黄巾党達を見つめて、波才はため息をつく。髪を手で乱雑にかいた。

「まあ……案外その死神は近くかも知れないですけどね」

彼がそうつぶやいた瞬間、黄巾の残党達の背後に影が舞い降りる。

それに気がついた残党達が呆然と後ろを振り向いた。

彼らはこの時初めてこんなにも影は黒いことに気が付く。

それを確認した波才はまるで役者のように優雅に微笑む。

もつともその笑みは仮面の下に隠れているために誰も見えはしないはずなのだ。なのに周りの人間は笑ったと解る。

そして波才は手を伸ばす。

その影へ向けてか、はたまた黄巾党の残党達へ向けたのか。それは波才しか知らない、波才しか語れず波才のみが理解出来る。

この時、黄巾党は影に怯え周りの人間達は波才を無心に見つめていた。

この光景がまるで劇の一幕のように彼らの脳裏に焼き付けられる。

だがここに在る光景の真相は英雄とその他がただいるだけに過ぎない。ただ、それだけ。

「死神さん、その人達を救ってあげてくれませんかね」

「誰が死神よ」

そう、一人の英雄とその他の人間だけしかここにはいない。

影は口を開いた。

影、孫策は人質を取っていた男の首をはね飛ばした。  
首から溢れる返り血が孫策を彩る。

瞬く間に静寂の時が壊れた。

劇は悲劇に、悲劇は血によってのみ彩られる。

「な、いつの間に!？」

その瞬間鋭利な刃が戦を描いて宙を薙ぐ。その軌道には驚きの声を

上げた男の首があった。

結論、男は死んだ。気のせいだろうか、はね飛ばされた彼の目は孫策を見ていた気がする。サッカーボールのように地面にバウンドしてしまっただからもう知らないけれど。

驚きの声を上げる黄巾の残党がまた一人切り捨てられた。

既に辺りには酷い血の臭い。生臭い匂いが辺りに充満し、どろどろの液体がそこらかしこで広がっていく。

それを皮切りに野次馬であった群衆も叫び声を上げその場から離れようとする。

最後の一人である残党の男は何か生き延びようとふと目を周りに向けると、一人の男の子が呆然とその光景を見ているのを見つけた。その男の子にとってこの光景は何を思わせたのであろう？少なくともこれが彼に影響を及ぼさないことはまずない。

残党の最後の男はしめたとばかりにその場に呆然としている一人の男の子へと走り寄る。

だが彼はその場で彼らと相対していたのが孫策だけではないことを忘れていた。

仮面をつけていた男が。元凶である彼らの希望であったはずの男が。

その男の名は。

「おいおい、あれだけ言ったのにまだ罪もない民を盾にしようと思いませんか。ああ、気に入らない。やっぱり貴方達は気に入らない」

波才。

彼はやれやれと男の進行経路へと躍り出ると肩をすくめる。

「う、うおおおおおおお！！！」

残党の男はもはや何も考えられなかった。

ただ、目の前のこの男、波才を殺すと獣のように叫んで彼に剣を振り上げた。

振り下ろす。

波才は動かなかった。

男は笑った。

殺したと。

だが男は波才に傷が無いことに気がつく。

そして今振り下ろしたはずの自分の剣を持った腕が無いことにも。

「え？」

疑問に彼は声を漏らすが誰もその疑問に答えない。

いや、例え答えていても男にその声は届いたかは解らない。

男は自分の視線が落ちていくのを感じた。  
目の前には地面。

衝撃が男を襲う。

最後に男が見たもの、それは崩れゆく己の体と憎々しげに自分を見  
下ろす波才の姿。

男は首を切り落とされ絶命した。  
その死に方すら知らずに。

～裏通り～

数十分後。

私は裏通りに来ています。

何故って？

そりゃあんなことしたからには目をつけられちゃいますからね。

それに元黄巾党將軍だし？

孫策さんに恨みがあるかもしれないし？

すぐにすたこらさつさと逃げてきましたよ。

仮面も装着し、準備万端。

・・・。

やっぱり人を殺すつてのは嫌なもんだなあ。

彼らも農民であり民だったが、暴政により賊になり、血に飢えた獣になつてしまつた人達。

そもそも国がしっかりとしていればこんな事起こらなかつたんですよね。

それに偉そうに言つていても私も元は黄巾党の一人。

そんな彼らが強奪した食料も頂いていたかもしれませぬ。

本当に私には彼らにあんなことを言う資格は在つたのでしょうか？

「無かつただらうなあ・・・」

でも気に入らない。

気に入らない。ああ気に入らない。そんな資格は無いだらうが無かるうが、人を殺すのは嫌であるうがどうだらうが気に入らない。

終わった物語にしがみつき、惨めに足掻くその醜悪さたるや吐き気が込み上げてくる。

確かに終わるうがその物語に殉じるしかない人間がいることは確かだ。だが彼らにはその選択をする必要が無かつた。無かつたがそれを諦めきれずにしがみつき、あのように馬鹿な姿をさらしている。

あまつさえ、英雄の肩書きに傷をつけるなどもう耐えられない。最高の美酒に醤油を垂らしてどうするつもりなのだあいつらは。

とてもじゃないが我慢などできやしない。



まあ、もうこれはよそう。今更死んでいる人間に対しうだうだ考えるのはもつたいない。その時間が無駄だ。

「人は鬼にはなれるが、鬼は人にはなれない」

彼らは結局鬼になってその鬼から抜け出せなかった。既に心の底まで獣に、鬼になっていた。

私は人に情をかけれど鬼や獣にかけるものは持ち合わせてはいない。

だが、私は既に人を殺している。

違いなどほんの僅かだ。ただその僅かな違いこそが私と彼らを分けた。その違いは僅かなれど大きいという矛盾を秘めているが、何よりも大切な物だ。

「まあ、結局はあの人達と落ちるところは同じかな」

いろいろ考えたが死んだなら落ちるところはあいつらと同じだろう。ただ私は後悔はしない。それを信じ、生きる覚悟があるからだ。

覚悟があるのだから後悔などしない。

落ちるならば笑って死んで落ちてやる。

「人は物語を紡ぐ、ただ紡げるのは生者だけ。死者が物語を紡ぐなどあまりにも馬鹿らしい」

死んだ人間が物語を紡ぐ、そんな事は無い。結局どんなに自分という存在を残そうとも物語は終わりを死んだ瞬間に遂げるのだ。

では死んで生き返った人間はどうだろうか？少なくとも自分はその部類。

だがそれは死すらも自分の物語を彩るために必要なアクションだ。そのようなパフォーマンスはさらに物語を加速させる。

でもそれってまどろっこしいと思いませんか？

私はそう思いますよ。私は華々しく生き、死んでいく方がよっぽどいい。その華々しくをどうとるかはその人次第だが……。ま、それも一興というもの。

「そう思いませんか？」

私はくるりと笑って振り向き、いるであろう人物の名を呼ぶ。

この人はどう思うんだろうか？

彼女の物語は紡がれ続ける。

私とは違い多くの人間に好かれ、愛される物語がだ。

今はその物語が汚れなかったことでよしとしよう。





「ねえ・・・孫策さん」

貴方はどんな物語を見せてくれるのですか？

## 第十七話 黄天は衰退しました（後書き）

恐ろしいことが起こりました。

何故か小説三本分（この話の続き）が朝起きたら消えていた。

必死になって昨日の夜を思い出す。

- ・ 昨日疲れて眠気に襲われつつも無事帰宅
- ・ 取り合えずパソコンを起動
- ・ いろいろと整理を開始

……いろいろと整理したあたりで多分本編も整理しちゃったんでしよう。リアルで「うわああああ！！！！」って叫びました。

というわけで次回は多分二週間ぐらいは遅くなります。

このついでに書きだめの董卓連合編を完結させたいなあと思ったり。

そういえばこの前の「戦場のボーカロイド」の人氣に吹きました。そうですか、みんな歌が好きですか。作者も大好きです。

今回は本当にマニアックな武将？紹介です。

「働きたくねえ……」

呆然と寝転がりつつ司馬懿はため息をついた。

「いやあな、わざわざ中央出向かんでも俺こころ一体取り締まって

るから普通に生活できるからね。あんなどろどろの中心に身を投げるとかしたくもねえよ」

司馬懿は中央に出向けと言う報告を無視していた。

そもそも自分は名譽欲など無く、お金だってこころ一体を取り仕切っているために苦労していない。出向く理由がない。

「……………あなた」

「お？張春華？どないしたの？」

気が付けば妻の張春華が扉を開けて立っている。その手には自分がうんざりしている例の書類が。

「……………曹操様からの要請。都に来て欲しいって」

「……………、あゝなんか風邪っぽい。おまけに体の節々が痛い。これは中風だな。つつうことで出向けないって事で」

そう口笛を吹きそんな様子で言い放った司馬懿だったが何か落ちる音が聞こえたので視線を動かす。張春華が手に持つ書類を盛大に地面にばらまきがくがくと震えている。

「……………医者、お医者さん呼ぶ。あ、薬、薬は……………どこ？そ、そう。華佗呼ばないといけない、あ、でもお薬が先」

あわあわとその場で右往左往する彼女に司馬懿はため息をつく。

「だから、仮病使うからっていつてんの」

その言葉に彼女はきよとんと固まった後満円の笑みを浮かべた。

「……っほ。良かった司馬懿、健康」

呆れる夫を後目に彼女はひとり胸をなで下ろした。その姿は周りから見れば本当に微笑ましいばかりだろう。

そう言つて仮病を使つていた司馬懿だが当然偽る必要があるので寝床から動けない。

「とはいうものの暇だわなあ。そうだ、確かとつておきの書が……つてこりや日干ししないとだめだな。匂いその他諸々がやばい。おい、誰がいる？」

「はい。司馬懿様」

「ちよつとこれ外で干してきて」

「ん？やべえ。ちよつと寝ちまった。そう言えばあの書物は」

そう思い外を見て彼は驚愕する。

空が曇り雨が降り出していた。まだ小雨だがこのままでは。

「っちよそれやばい！？誰か！！誰かいるか！？」

だが返事は一向に帰つてこず、雨はますます本降りに。



司馬懿は舌打ちして寢所から身を乗り出すとその書物を自ら回収してしまった。  
ほっと一息ついた彼であったがその姿を見る者が一人。その家の女中が見てしまっていた。

だがその場にいたのは二人だけではなかった。

その日の夜。

昼間の事で頭を悩ませる彼女の部屋に扉を叩く音が。

「はい、どなた様で……奥様？」

そこには司馬懿の妻である張春華の姿があった。  
だがその顔は幾分か柔らかく彼女にしては珍しい笑みを浮かべている。

「……あのね」

「はい？何でございましょう」

「いったいなんだ。そう思った女中だがその次の言葉で固まる。

「死んで」

翌日、司馬懿は朝一番の報告に慌てる。

「はあ！？この家で殺人！？」

「は、はい」

「なんで直ぐに俺を呼ばねえ!？」

「奥様が大事にする必要は無いと……」

「張春華が?……ちょっと呼んできてくれ」

しばらくして彼の部屋に張春華が現れる。

その顔は普段と変わりないものであり、彼は首を捻らせる。

「おい、お前が口止め頼んだのは本当か?張春華」

「……うん」

「お前それは「私が殺したから」……え？」

「私が殺した。だってあの子司馬懿が外に走ってたの見てた。だから殺した。司馬懿、中央行きたくない。この話、曹操にされる、召し抱えられる。司馬懿、かわいそう」

司馬懿は頬が引きつった。目の前の妻はいつもと変わらない笑みで笑っており、その目には何とも言えない険呑さを秘めていたからだ。

「司馬懿、大丈夫?震えてる」

張春華

司馬懿の正室であり、妻になる前、若い頃から道德にかなった行動をし、人並み以上の知識を備えていた。

ある時、司馬懿が俊桀との噂を聞いた曹操は、使者を出し配下に迎えようとした。だが、司馬懿には仕官する気が無かった為、中風（仮病）と称して引きこもり、断っていた。そんな時、書物の虫干しをしている所に突然の雨が降り、慌てた司馬懿が外に飛び出し、書物を抱えて家の中に放り込むという出来事が有った。ところが、悪い事に家から飛び出した所を家の下女に目撃されてしまうのである。病で引きこもっているはずの男が元気に外に飛び出てきた。これを曹操に知られれば、偽りを語ったとして一族郎党皆殺しもあり得る。そう考えた彼女は、目撃した下女を殺害し口封じをしたのである。

流石の司馬懿もこれにはドン引きし、以後彼女を警戒するようになる。なおこの話は疑惑があるが……あまりにも凄すぎる。下手すれば1800年前にヤンデレが完成されていてそれが彼女かもしれない。歴史に残るヤンデレ疑惑である。

司馬懿は伏夫人、張夫人、柏夫人と側室を娶り、寵愛した。それゆえ次第に彼女は司馬懿と疎遠になってしまった。

司馬懿が病を得て寝込んだ時、彼女が見舞いに訪れると、「小憎らしい女だ。普段はまともに話もせぬのに、こんな時にだけ顔を出す。一体何の用だ？」と皮肉った。思うところが有ったのだろう、彼女は怒りと恥ずかしさのあまり「断食」して自殺を図ったのである。しかも、息子二人を巻き添えにするというおまけ付きで。

息子達も断食していると聞いた司馬懿が、彼女の元を訪れて謝罪し

た為断食を止め、事なきを得た。

この息子達は司馬師・司馬昭・司馬幹であり、魏、晋を支えた大木に他ならない。彼女の息子達はすべからく有能だったようだ。

何気に妻めとりまくりの司馬懿さん。もうこれ北郷くん認定受けても良いと思うのだが。そんな彼にこんな対応する彼女もクール、まさにヤンデレ。

さらに謝りに来た司馬懿は「お、お前が心配じゃない！！息子達が心配だったんだからな！！べ、別に他に意図はない！！」と言い放ったといわれる。

ツンデレとヤンデレで意外と夫婦仲は面白かったようだ。1800年前にツンデレとヤンデレが結婚という非常に面白い出来事が起きた可能性があるとか胸熱。

もうこれ作者がキャラ作らなくても十分だよ！！1800年前からのヤンデレ文化とか胸熱ですね！！

ちなみに三国志大戦で使われる軍師SR張春華カードの絵柄は必見です。さあみんな！！ググるんだ！！

第十八話 空、未だ青し。(前書き)

人生において、万巻の書をよむより、優れた人物に一人でも多く会うほうがどれだけ勉強になるか。

く小泉信三く

## 第十八話 空、未だ青し。

「やっぱりばれてたか」

いいえ、かんです。

はずれていたら今日の夜、私は布団の中で思い出して恥ずかしさの余り悶えてました。 たぶん。

そう言つて物陰から姿を現したのは、まだ返り血が服の所々についている孫策さん。

あの後直ぐに追つてきたのだろうか、服が血まみれのまま着替えられていない。

美人はどんな姿をしても綺麗だよくいうが・・・流石に血まみれの美人はきついと思うぞ？

血まみれで笑う美人さんを見て貴方はどう思います？しかも血に濡れた剣を帯刀済み。

少なくとも「マジかわいい!!」とか思う人はポジティブ過ぎて羨ましいくらいです。

まず命の危険を感じましようよ。

仮面で隠れていますが、今の私の顔は真っ青です。そりゃあ私だつて沢山人を殺してきました。因果応報、殺される覚悟もあります。でも覚悟があると命が惜しいという思いは全くの別物です。

うわゝ孫家の宝刀が鈍く輝いちゃってるよ。

ですが、こんな血まみれだからこそ放つ英気というモノもある。

この場が戦場ならばあの血化粧で孫策の姿は引き立てられ、味方の士気は否が応でも上がる。反対に敵、つまり相対している私のような人間は頬が引きつり今にも逃げ出したくなる。

うん、逃げ出したくなる。

慌てながらも冷静に観察している私ははたして心が強くなったのか、はたまた私の男としての本能が強いのか。こればかりはどうも白黒つけがたい。つけてもどっちたたずな気もしないでもないですからね。

「いつから解っていたの？」

「いつからでしょうね？」

「いや・・・こっちが聞いているんだけど」

「なにそれずるい」

「ずるいって・・・ねえ、この会話前にもしたでしょ？」

「はて？何の事やら」

私は口を隠して笑う。

別にとぼける必要はないんですけどこの人からかうと面白いんですよ。

それに孫策さんは呆れてしまっています、ホントになんともなく気

がついたが正しいんですよ。

だって孫策さん殺気が無いんだもの。

かつて私があった時の彼女は殺気ましました。

寒すぎてもう身震いしてしまうほどですよ。

ですが今の彼女からはまるでその寒気が無くよって身震いもしない。

殺気があればどんなに気を隠していても解るんですけど・・・もしかしてこの人、私に殺意がない？

悩み腕を組んで唸る私を見て疲れたように笑っていた孫策さんでしたが、気を取り直したように私に向き直ります。

・・・正面から見て思うんですがやっぱりこの人は美人だなあ。

少なくとももつり目だった目が優しくなっているのから、殺意はやっぱり無いのでしょうか。

・・・でもその化粧は本当に止めてください。  
本当に心臓に悪いです。

「まずはお礼を言わね。貴方のおかげで私の民を救うことが出来た」

・・・ああ、そういうことですか。

でもこれは結局の所、自己満足ですからお礼を言われる義理などありません。

こんな馬鹿者にも譲れないプライドみたいなものはあるのですよ。

・・・小さじ一杯分ぐらいは。



「尻ぬぐいをしただけです。別にありがたられる事なんてしたつもりはありません。それにあいつらは気に入らませんでしたからね」

自分が気に入らない、許せないから手を貸しただけであって、別にあの人達が人を殺そうが奪おうがどうでもいいんですよ。  
あ、天和様達に害をなすなら別ですよ？

遠くでやる分には別にいいんですが、近くでピーチクパーチク騒がれるのは嫌なんです。耳元で騒がれるなどたまったもんじゃない。目覚めが悪くなるじゃないですか。

それにしても人を殺してありがとう・・・ねえ。

元日本で平和に生活していた私にそんな日が来ようとは、思いもありませんでしたね。

命を奪ってありがとう。殺してくれてありがとう。  
うーんどうも自分には合いません。やっぱり戦は英雄達に任せるべきですね。凡人たる私は平和に屋台を引く姿がお似合いです。

孫策さんはクスリと笑って口を開く。

「それでも救われた事には変わりないしね。本当にありがとう」

そう言つて孫策さんは優しげに笑いました。

これが孫策さんの本当の顔かな？

とても優しくもあり強い、そう連想させられるいい笑顔ですね。

・・・でも目の奥に何かありますね。これあれです、時代劇とかで悪代官が町娘を得るために一計案じる目です。うわくぶつちやけ逃げたい。

何を考へてるのか全く予想できないんですよこの人。曹操とはまた違った魅力を持つ英雄さんです。

ま、ここは本人に聞くのが一番ですね！！

・・・あ、でも怖い。いやいや、私だつていっぱしの人間なのですから。やましい事はあるし無いですからね、聞いても良いでしょう。

大丈夫ですよ？ね？

「それで孫策さんは私の首がご所望で？」

「そうねえ・・・最初はそう思っていたんだけど、もっと欲しいのものが出来たのよ」

とりあえず、命が救われましたね。

一回勝利を掴んではいますが、それは油断していたこともあるでしょうから。

正面からやりあつて二回目はどうなることやら・・・あ、ちょっと想

像したら何故か遺影に自分の姿が収まってました。  
そうか、逃げるが勝ちか。

正直怖いお姉さんと戦うなんてしたくありません。

何が悲しくて『小霸王』なんて本来は厨二病満載なはずなのに、これ以上ないくらい似合う人と殺し合わなくちゃならないんですか。私は一般人ですよ？か弱い民衆ですよ？戦うんだったら銃ください。

「あなた、私の元に来ない？」

「へ？」

私の元に来ない？

ええと・・・わたしのもとにこない？

え、もしかしてスカウト？

なんで殺し合って首に剣を突きつけた人間にそんなこと言えるんでしょう？

あ、そうか。この人お酒で酔っているんで・・・あ、目がマジだ。

そうだ、お酒の飲み過ぎで頭がいかれて・・・理性ありありだ。

なにそれこわい。

「お断りします」

即答です。

「あら・・・何故かしら？」

「ぶつちゃけ平和に暮らしたいです」

「へ？」

驚かれているようですが絶対に嫌です。

だって孫策ですよ？

入ったとたんあれじゃないですか、たぶんSEKIHEDIまでまっしぐらじゃないですか。

しかも孫堅さん居ないってことはその時点でパラレル展開、オリジナルルートまっしぐら。死亡フラグもあるよ！！です。

嫌です。死にたくはありません。

私は関わりたいと思ってはいますが、血が舞い、体の一部が舞う戦場のど真ん中に出てまで実感しようとはとてもとも思えないです。そりゃあやんなくちゃ駄目だとか死ぬぞとかなら諦めますけど。

そもそも事務も仕事も好きじゃありません。それほど戦いたいわけでもありません。死にたくありません。そうなると軍に所属する事自体OUTな気がしてなりません。

いや、入るのも楽しそうなんですけど私は自分で物語を作るよりも見る方がいいのですよ。それに屋台の楽しさを知っちゃったからなあ・・・。

平和最高、私は屋台で生きていく。

「貴方・・・それだけの力がありながらこの乱世に何も感じないの？」

「宝の持ち腐れだと？それは買いかぶりすぎですよ。それに私が居なくともたいして変わりませんよ」

イレギュラーが何だつてんですか。

そんなの三国志の人間が女になっている時点で霞んでますよ。

私に力がある？笑わせてくれますね。私は特別ではない、貴方達英雄とは訳が違うんですよ。

正直、特別でもない私が天和様達を守れただけで十分です。神様に感謝しても良いぐらいです。

それから実際に曹操さんや孫策さんと出会って解りましたが案外この乱世、早く終わりが来るかも知れません。なんかそんな気がするんですよ。

だって情報で聞く限り時間すつとばしているいろいろな将達が集結してますし。

なんですか黄巾時代に孔明と？統が参戦してるって。

なんですか董卓の軍師が賈？って。

なんですか呉に陸遜がいるって。

お化け軍師に化け物將軍共に蹂躪された黄巾党。

黄巾党よく持ったと思います。あんたら凄いや、ただの農民なのに数頼みでよくやったよ。賞賛は出来ないうすけどね。

「確かに民は苦しんでいます。でもそれももうすぐ終わりが来るでしょう」

「……なぜかしら」

「貴方達がいるからですよ」

こればかりは自信を持って言えます。

「それは……あの時私に言ったことと関係があるのかしら？」

「ええ、正直私はもういなくてもいい存在だと思っているので」

「ふん」

そう言つて孫策さんはつまらないという顔をしていますね。  
つまらなくて良いんですよ。

普通という怠惰な時間が一番いいんですから。

……ん？何か悪い事考えた顔になりましたね。  
すんごい嫌な予感がします。

「それは天御使いとしての答えなの？」

え、今この人なんて言いました？

天の・・・何？



「貴方はこの世界の人間じゃないんでしょう？」

お、落ち着けこれは孔明の罠、じゃなくて孫策の罠だ!?

ほ、ほら。そうやってからかって真意を引きずり出そうとしているんだ! 騙されないぞ! 私はこちら見えても察しがいいですから貴方の目を見れば……。

本気みたいですよ( ^o^ )ノ

ど、どこでばれた? ええと……駄目だ。心当たりがありすぎる。なにやってんだ私。

思わず過去の私をぶん殴りたくなりますがここで慌ててしまつては更にはまっけていくぞ。

そ、そうです。ここは気取つて余裕を持った態度でいれば!!

私はまるで道化のように仮面をこつこつと叩きつつ彼女を見つめる。手汗が、背汗がやばい。

「何故そう思われたので？」

そうだ。まだ慌てるような時間じゃない。さあどんな理屈で来る? 全てをこの私が全身全霊を込めて否定してあげ

「かんよ……」

……今なんて言いましたこの人。

「へ……？」

「だから『かん』」

なにそれこわい。

それって理屈とかで解決できないですよ。この話はここで終了で……したら終わるがな!!

こんなんでも私の屋台生活が壊れるなんて絶対にお断りします。全力で否定しましょう。

なんかもう駄目な気がしますがそれでも諦めません。燃え上がれ私のコスモ!!

私はやれやれと首を振りため息をつく。

「ハア……孫策さん。疲れてるんじゃないですか？本当に私が御使いだつたとしても、なぜ黄巾党は負けたんでしょうね。私が天の意志ならば絶対に負けませんでしたよ？」

「だって貴方、勝つつもり無かったじゃない」

・・・ほう。面白いこと言いますね。

「・・・なんでそう思われたので？」

「貴方と会ったときに聞いた言葉、それを考えるとどうも貴方が勝ちたいなんて思えなかったのよ」

へへあれでそこまで解っちゃいますか。

時代の英雄は伊達じゃないってことですかね。

「何故かしら？」

そう言っただけで聞いてくる彼女の顔は嘘は許さないって感じですね。嘘付いても彼女の『かん』ってやつでばれそうな気がするしなあ。

年貢の納め時かな？

しょうがないからお話しますかね。これだれにも話した事無いのに。あら恥ずかしい。

「正直勝てるとは思っていませんでしたよ」

「ならば何故貴方はあの反乱に参加したの？」

「巻き込まれてしまった大切な人達を守るためですかね……。まあ欲を言えば勝ちたかったですけど、そんな甘い夢は見られないと思っただんですよ」

「……それはどうして？」

「曹操さんです」

「曹操……黄巾討伐で名を上げた1人ね」

そうなんですなよえ……。張角様は名も無き兵に殺されて死体は炎で焼けてどれだかわからない、というのが皆さんの見解です。疑っている者もいるでしょうがいまさら調べた所で証拠なんざ在りませんしね。

太平妖術？

あれならおでんの制作の際、薪の代わりにしました。よく燃えました。

まあともかく黄巾の乱で一番名を上げたのは火計を仕掛けた孫策さん。

二番手はもっとも多くの黄巾党を撃破した曹操さん。

三番手は義勇軍で一番民心が高い劉備さん。

見事に三国の前触れですね。

まるで三国志ファンの理想郷じゃないですか。全員女性ですが。

「あの人を見た瞬間思っただけですよ。あ、自分たちはいらなくなつてね。この人は私なんかがいなくても彼らだけで時代を築く。それは孫策さんを見て確信へと変わりました」

「……私が時代を築くと？」

「ええ。ですからあの時は楽しくなりましたよ。もともと新しい時代への贅として負けたことにちよつとした不安と心配が有りましたが、孫策さんもいる、曹操さんもいる、劉備さんもいる。ならば心配はもう無いなってね。だから私はもう戦いなんてしませんよ。貴方達が私達が欲したすばらしい国を創ると信じていますから」

「……貴方はその国を創るために協力はしないのかしら？貴方がいればもつと早くその国が創れるかも知れない、多くの民が救えるかも知れない」

「そんなことは無……」

「有るわ」

私の言葉は彼女に遮られる。

私はしばし熟考し、再び口を開く。

「……それは、貴方の『かん』ですか？」

そう聞くと孫策は笑って言う。

「ええ、私の『かん』よ」

溢れ出る英気、力強い微笑。

これが英雄が持つ魅力……。

嬉しいですね、英雄に貴方は必要だと、特別でもない私を必要とされるのは。

もうぶっちゃけ勢いであれば私を使ってみるがいい！！とか言い出したくなりますね。すごいすごい、魅力チートは伊達ではない。これでは英雄達がどんどん彼女に下に集まるのもよく分かります。

ま、それは天和様に会う前だったらという話。

自分がかつての戦乱の世に生きていなかったらという話。

自分が黄巾党でなかったらという話。

私が私でなかったらの話です。

「悪いですが、私には心に決めた主君がいるのですよ」

「そう、残念だなあ」

そう言って笑う孫策さん。

あれ？もうちょっと強引に連れて行くことするのかなとばかり思っていました。

「無理矢理連れて行くことはなさらないので？」

「貴方はそれで聞くような人間じゃないでしょう？それに貴方には一回負けているしね。力づくってのは貴方に対して無理になって」

そう笑っているのですが……。

……やっぱりこの人は人を引きつけるものがありますね。何より人を見ぬく目がある。

英雄の持つべき魅力、惹き付ける力。

「それで？その主君の元で貴方は天下を獲るつもりなの？」

「いえ、平和にのんびりと表舞台上がらずに過ごさつもりですが」

「え？」

すごい意外そうな顔してますね。

いや、だからそもそも戦うのは嫌なんですって。謀略も胃が痛くなるし、働きたくないし。何が悲しくて特別な連中と戦えと。

確かにそういう道もありますが、他の道も十分魅力的ですからね。

……ないとは思いますがそれらが全て遮られない限りは軍勤めはな  
いですよ。

あれ？なんか自分で考えててフラグっぽい。気のせいですかね。

「え？冗談？」

「ところがどっこいこれが現実です」

「……」

なんか考え込みながら見てくるんですけど。

「ん〜貴方、結局舞台上上がる気がするんだけどなあ」

「え？それもかんですか？」

「ええ、『かん』よ」



そういえば明埜もそんなこと言ってた気がします。・・・大丈夫だよね？

もう黄巾党終わったから問題ないよね？モブとして生きていけるよね？

働きたくないでござる！！絶対に働かないでござる！！……なぐんてね。

ですが、この人には見逃してもらおうなら恩ができますよね。

いくら町民を助けたとはいえそれは自己満足ですから、下手に条件を付けられたりこの件をほじくり返されるよりはちよつとだけ手を貸した方が良いでしょう。

それに今の会話にてこの人の物語を間近で見たい、と思ったのもまた事実。

というよりそれを解つてこの人会話を誘導したのでしょうか？

汚い、さすが孫家汚い。

でも、もうちよつとだけ平和を満喫したいなあ。

こつち来てから戦いの日々だったし、たぶん今この人に付いていたら絶対に仕事まみれになる気がするんです。

なんかこの人仕事しなさそうだし。

ま、ちょっとだけならいいか。何事も体験するのが一番だと日本の両親にも言われましたからね。

人生体験体験、仕事に就くことも生きる上で貴重ですから。

そう決心した私は残念そうに口をとがらす孫策さんに・・・貴方なに子供っぽいことしてるんですか。もう娘って年でもないだろう。

と考えた刹那彼女の顔が悪鬼のような笑いを浮かべる。  
汗が額から伝い落ちる。

「今何か考えたかしら？」

「いえ、何故そう思われたので？」

「『かん』よ」

かんぱねえ。この人絶対ニュータイプです、ピキピキピーンとか音鳴っちゃってるタイプです。

冷や汗を垂らしながら私は先ほど決心したことを述べる。

「でも今回ここで見逃してもらおうのなら恩が出来ますよね・・・それはいずれか貴方の所へ返しに行こうと思います。客将としてね」

すると孫策さんは嬉しそうな顔になり、すぐに眉を八の字に。あれ？この人ならすごく喜ぶと思ったんですけどねえ。少なくとも曹操だったら絶対いい笑い浮かべてますよ？なんか月くんみたいだな。

「恩？良いわよ別に。民をこっちは助けてもらっているわけだし、そんな押しつけがましく言うためにここに来たわけじゃないから」

・・・やばいです。人として出来ていますねこの人。私の好感度が上昇しました。やっぱりこの人は面白い、英雄たる人です。

それにこれは私のプライドの問題、生き方の問題だ。悪いが退くつもりは毛頭無い。

「貴方はそれで良いかもしれませんが私は良くないのですよ。それ

にずっといるというわけではないのです」

すると孫策さんはいいこと思い付いたとばかりに私に笑いかけます。嫌な予感しかしないのですが。

「そうねえ・・・なら貴方の主君ごとうちに来ない？今なら私の妹が二人いるんだけど一人付けてもいいわよ？」

おい、おまけで自分の妹よこす人なんて初めて見たぞ。

それはさておき孫策の妹？

ええと・・・孫権と孫尚香ですかね。

後半はかなりの賢母になるでしょうが前半は・・・二宮の変など年取った後の行動がやばすぎです。

老後の孫権はかなりとちくるって劉備軍を撃退した陸遜を死に追いやったなど言われているぐらいです。

老後は尻に敷かれるどころじゃなく潰されちゃいます。というより結婚なんてしたくない。結婚は人生の墓場です。

この世で一番体に悪い食べ物って知ってます？私はウエディングケーキだと信じています。

というか披露宴に出される食事全てが殺傷力大です。

この人の妹なのでそれはそれはかわいいのかもしれませんが、流石になあ。

「謹んで遠慮させて頂きます。まあ少しだけおじゃまさせてもらう程度なので。まだいろいろと見て回りたいし、のんびり過ごしたいんですよ。時が来たら少しですが手伝いに行きます」

「そう・・・つまり二人つけるということね」

話を聞けや。

「例え二人つけようが孫家が全員付いてこようがこれは変えませんが。まあ万が一にもないでしょうけど気が変われば分かりませんが」

「うちえ。うーん、ほんとはすぐに来て欲しいし、ずっといて欲しいとただけど・・・しようがないか」

納得してくれたようです。

これで呉へ遊びに行くのは決定ですか。

ぶっっちゃけ面倒くさいのですが、まあこれも乙なものということだ・・・なんでしよう、やっぱりのんびりすごすのが無理に感じてくるのですが。

「それでは、またの機会に」

「ええ・・・あっ忘れてた」

その場を去ろうとする私を孫策さんは呼び止める。

「なんででしょう?」

「祭が言っていたおでんっていう食べ物食べてみたいなくお酒に凄く合うらしいじゃない?」

「ムリダナ(・x・)」

手でバツテンを作つて孫策さんの願望を否定します。

「ガーン」と言う音が鳴つたのではないかと錯覚するように孫策さんはあからさまに驚きます。  
器用ですね。

「え、なんで?」

「屋台を売ってしまったのでムリです」

そう言うつとすごい残念そうにため息を付きます。

なんだかすごい罪悪感が。

それにしても黄蓋さんといい、呉の皆さんホントにお酒好きですね。私、お酒弱いのに孫呉に来たとき生き残れるだろうか?アルコール中毒とかで死なないか?

「あゝ孫策さんとここに来たときにでも作りますよ、それではまたの機会に」

そう言つて私は肅々とその場を去ります。

慌てて移動する必要も無くなりましたしね。

でもなんか逃げられないような気がします。

いえ、表舞台に立たされそうな気がするといつか・・・なんていうか。ああ、これが『かん』ですか。

気のせいだと思いたい

・・・それにしても孫家はあれです。

私の中ではブラック認定企業です。何故だか怖いお姉さんに囲まれながら仕事詰めにさせられそうな気がします。

割と早く恩返してとつとと屋台生活がんばろうと私は決心して足早に歩き出した。

（孫策 side）

ふふ、なんとか彼を一時的ではあるけど私達の仲間に取り込む事が出来た。

波才は武人としては私を負かすほどの実力があるし、天の知識は料理だけでは無いはず。

必ずやこの孫呉に新しい風を呼び込む。

それに祭から聞いていたおでんが今すぐ食べられないってのは残念だけど約束もしたしね。

祭から聞いたおでんの数々・・・それに新しいお酒の製造法を知っていると聞く。

それだけでも大収穫ね。私達の所に来たら作らせてみましょう。

・・・なぐんか忘れてる気がするわね。

忘れるという事はたいしたことでは無いだろうし、せっかくの良い気分だからお酒でも飲んでいこうかしら。

そう思った孫策は酒屋に向かうべくその場を後にした。





（波才 side）

こんにちわ、波才です。

私は今

「いたぞー!!」

孫策さんの兵に追われています。

「ってなんですか!? 何で追われているのですか!?!」

「策殿の命令じゃ!! おとなしくお縄につけ!!」

そう言って弓矢を五月雨の如く連射してくる黄蓋さん。

どうでもいいですけど今避けた矢、当たれば死んでましたよ!?!?

「その孫策様に了承をもらったんですよ!?!」

「嘘をつけ！！未だにお主の捕縛命令は終わっていないわ！！」

ちよつと孫策さん何してんの？

あれですか。

おでんの恨みですか。

食べ物への恨みは恐ろしいですか。

あ、もしかしてこれは夢か。孫策と出会った事も、今こうして命の危険に晒されていることも、そもそもこの時代に来たことも夢だったんです。

ほら、目が覚めればそこにはおじやる丸の目覚まし時計があつて、コーヒーを読みつつ朝のニュースを

「っふ！！」

シュパッ

頬をかすった矢。流れる我が血液。

やべえ、これ現実だ。

「だから今の矢首狙ってましたよね！？死にます！！私死んじやいますよ！？」

「安心せい、お主なら避けられると信じておる。実際に避けておるではないか」

そう言つて剛毅に笑う黄蓋さん。  
あ、これあれだ。命令無視して絶対に楽しんでやってる。  
こ、この白髪頭。

「そんなんだから嫁の貰い手がないんで「ありったけの矢を放て！！殺しても構わぬ！！」・・・え？ちよつと何言ってるのかわから・・・ってなんか沢山来たー！！！！」

振り返れば雨の如く此方へ向かつてくる矢が。  
何とか剣を抜いて奇跡的に捌ききるも

スコン

仮面の眉間にクリーンヒット。  
これが、顔面セーフってやつですか？なんか全然セーフじゃない気がするんですけど！？  
仮面がなければ死んでいた。

そして黄蓋さんの威圧感がマツハでやばいです。なんか鬼のような形相に変わっています。というか捕縛命令ですよ？さつき殺してもいいとかいってませんでした？呉の兵隊の皆さんなんで「」愁傷様」みたいな哀れむ目してるんですか？

黄蓋さん。捕縛ですよ？捕縛なんですよね？なんか殺気出てるんですけど？

「さあまだまだいくぞー!!」

「勘弁してください!!」

そう言って叫んだ私の声は誰にも届かず、私は結局夕方まで逃げ続けました。

女性へのからかいは止めましょう。命が消えます。

・・・孫策軍へおじやまするの止めようかな。

胃がマツハに痛い。

## 第十八話 空、未だ青し。(後書き)

孫策死亡フラグを折る回、どうも皆さんお久しぶりです。気が付いたら昼食の時間が過ぎていく味の素です。でも活動報告にフェイト系クロスのせてたんで実質は約十日ぶりですね。

前回の悲劇から何とか復帰……実は四話消してました。その結果中身がもう作者ですらよくわからんものに。あれです、書き物が書くほど上手くなるのは作者以外の人達です。

誰か……文才をくださいorz

あ、そういえばこの前、地震以来初めて仙台行きました。

今まで買えなかった物をいろいろと補給、小説でFate/Zeroに、レイセンに、ダンタリアンの書架に……。

すると私の目に「俺の妹（ry）」が。

「友達がはまってたなあ……」と思いつつ、なんとなく見てみると。

「魔法少女まどか マギカ」のキュウベエさんが桐乃にアドバイス！？

「黒猫と京介の関係？」

「真実を知りたいのなら確実な方法があるよ。」

「桐乃が僕と契約して魔法少女になればいいのさ！」

気が付いたら手を伸ばしてました。  
やべえ、初めて帯で購入しそうになったわ。というか、あんたなに  
してんの！？

ゲフンゲフン、すみません。取り乱しました。

さて、今回の武将紹介は以前リクエストもらったけれどやってな  
った人です。

「きゃはははは 楽しいなあ楽しいなあ」

少女は一人、部屋の中で嗤っていた。

身長は小さく、僅かに典章や許緒よりも大きいほどしかない。頭に  
色あせた青のずきを深く被っているため目は見えない。

服も華やかとは遠く、まるで普通の文官のような服装をしている。

「ばっかみたい ばっかみたい」

それだけ見たら普通の少女であることだろう。だが彼女の周りには  
膨大な書簡が山積みになっており、一本の蠟燭に明かりをともし  
て彼女はにやにやとそれを見ている。

「関羽の馬鹿、呉の食料庫から強奪してこっちに来たんだ ばっか  
みたい 待てばやがて呉が関羽を殺すね 私達は耐えればいい」

そして少女はその書を閉じた。

実はこの部屋を埋め尽くさんばかりの資料はただ一度の戦、これか

ら少女が挑む戦のためだけの資料。つまりたった一回の戦で彼女はこれほどの情報を欲したのだ。

「これ、勝ったね」

「きゃは お久しぶりだね関羽ちゃん」

「徐晃……久しぶりだな。同郷のよしみでいう、早速だが降伏しろ。既に宛城は水計により水浸し。曹仁ともども降伏しろ。于禁は既に降伏したぞ？」

「（于禁ちゃんかあ……きゃは どうでもいいね）ばつかみたいばつかみたい」

「何がおかしい!?!」

関羽は城の上で笑う徐晃にいらつき怒鳴る。すると徐晃は先ほどとは打って変わり、険みな光をその目に宿した。そして関羽に聞こえないような小さな声で呟く。

「……ぬかせ。目に物言わせてやろう小娘が。人を顧みぬ刃は武にあらず」

「全軍進め」

徐晃は兵を進ませる。彼女はあの後城から脱出、そして現在関羽が



立てこもる陣へ向けて向けてゆつくり、ゆつくりと軍を進ませた。

「ucciい！！あれでは攻められぬ！！仕方がない！！一時軍を退かせる」

「！！敵に動き在り　こりや勝ったね」

慌て軍を退く関羽に徐晃は最後までゆつくりと幾重に軍を重ねて追い込んだ。

関羽は追い払おうにもその厚さに手を出せない。結果として、彼女の軍は関羽の包囲網まで九メートルの所まで接近することとなり、たまらず関羽は撤退した。

「徐晃！！貴様戦では困頭を攻撃するのではなかったのか！？」

「ばつかみたい　ばつかみたい　戦に騙し合いはつきものよん」

更に彼女は止まらない。敵は困頭と四冢に陣営を出していたが、徐晃は困頭を攻撃すると宣言しながら、実際には四冢を攻撃した。関羽は自ら歩騎五千を率いて四冢に駆け付けたが……彼女に押されていた。

「（なんと！？私が押されている！？馬鹿な！？）」

「きゃはははは　負ける　負ける　……我が兵達よ今が好機！！」

「しまつ抜かれる！？退却しろ！！早く！！」

「おせえよ!!」

その後の彼女の軍の勢いたるや凄まじい。瞬く間に退却する関羽軍に食らい付くと蹂躪、包囲陣に突撃をかまし撃破。その怒濤の勢いに関羽軍ではおぼれ死ぬ者も少なくわなかつた。

この戦の戦い方に彼女の主君曹操は大変喜んだ。

「徐晃、貴方のその戦い方はすばらしい。私は今までの戦いの人生で貴方ほどの武人は見たことはない。何でも欲しいものを言いなさい」

「ありがたき幸せ でも欲しいものなんか無いよ」

彼女は多大な戦果をもたらした。あの関羽を撃退したのだ。何故彼女は褒美を求めぬのか曹操には理解出来ない。曹操は尋ねた、「何故?」。

その瞬間、徐晃は誰もが見惚れるほどの凄絶な笑みを浮かべた。

「古来より素晴らしい君主に出会える者は少ない、私は曹操様に出会えた。そうなればその主君に仕え、その主君の下で闘うのは当然。何を厚かましく欲しようか。私は曹操様の下で闘う以上の喜びをしないのだから」

徐晃、字は公明。

関羽と同郷であり、最初は楊奉に仕えており後に曹操に帰順する。

その頭角はかの名族、袁紹と闘った際に現れた。

ある人物が降伏すると偽り、城に立て籠もって抵抗した。これに曹操は大変怒り、すぐさま撃破せよと命じた際、彼はなんと降伏を促し成功させたのだ。これに曹操はこれに疑問を感じ呼び出すと「今あの城を落としたら他の城も抵抗するでしょ。だから降伏を認めた方がやりやすいよ。」（作者訳）と言い放ち、曹操を感心させた。この戦に彼は伏兵を用い勝利に導いた。

韓遂・馬超らが叛乱すると曹操は黄河を渡れないことを心配して徐晃に尋ねた。すると彼は「あいつら蒲阪を守備することを考えない馬鹿ばっか。私に精銳くれればそこを突破し陣営を築いて敵を分断しちゃうよ。」（作者訳）と言い放ち四千の兵と共に出陣。この陣の構築の際、五千の兵の夜襲を受けるも撃退し、馬超を撃破した。

張魯征討の際も無双をかましており、囲まれた味方の将を救いて敵の陣営30以上を破壊し勝利へと導く。

徐晃の人柄は慎重でつつましく、出陣のときには遠くまで間者を出しておき、勝てない場合のことを想定したあとで戦いを始めた。敗走する敵を追撃するときは兵士は食事の暇もなかった。その戦い方はかの有名な孫子に例えられる。

彼はつねづね嘆息して「古人は明君に巡り会うことが苦難であったが、私には幸運にもそれができた。手柄を立てて力を尽くさなければならず、我が身の名声を心配するつもりはない」と言っていた。ついに交友を広げたり、力ある者に頼ったりすることはなかった。

そゝらを自由に飛びたいな〜はい！徐晃コプター！！

失礼しました。無双でおなじみ徐晃さん。……なんかまとめていて

もうこれ以上ないぐらい凄い人。他にも他の将が酒宴で浮かれているときに、彼だけでなく兵も落ち着いて勤務していて曹操を感心させたらしい。

なんかもう理想の上司。

作者は基本イカレキャラで書きつつ、ここぞと言うときは解放させます。

というかこれを書いていて蒼天航路の「逃げるときは軽（ry）を想像し、笑えてきたのは秘密。

ちなみに関羽は徐晃との戦いの際、呉から食料強奪しました。おい、仁義はどこに消えた？

第十九話 命短し、創れよ乙女（前書き）

世の中は美しい。それを見る目を持っていればね。

〈映画『聖メリイの鐘』より〉

## 第十九話 命短し、創れよ乙女

（????? side）

何の特徴もなく、自分だけが特別であろうと希望することなくいきられる人間などいない。

特別を望むのが普通なのだ。なのに、なのに普通の彼女は……ははは。

ああ、面白い。面白い。

この特別だらけの世界で、この英雄が謳歌する世界で普通？

ああ、それはなんて喜劇？悲劇？

彼女は普通、間違いなく普通。普通だけれども彼女がこの世界で特別な存在であると理解出来た。

彼女は私とは違い特別、ああ、特別なのだ。

だが特別なのに普通。

様々な英雄達が特別で在るこの世界で特別であるものの英雄ではなく、魅力もなく、力もなく、かといって無能ではなく、力がないわけではなく、魅力がないわけでもなく、覇気が無いわけでもない。

ただ普通。普通という言葉がこれほど当てはまる人間はいないだろう。

彼女と私の違いはなんだ？特別では無い特別と特別でありながらの普通。この違いは果たして何？

ああ、面白い。これは面白い。

孫策は死を前にして英雄たる姿を見せてくれた。だがそれは私はある程度分かっていたと思う。何故なら彼女は英雄だから。この世界が特別たる、英雄たる彼女をそれ以外の死に方で死なせるのなら私は幻滅せざるを得ない。

英雄が命乞い？命だけは助けて？金ならいくらでもとか言ったりする？そんなこと言ってたなら私は首ちよんぱしてたでしょうねえ。いや逆か？もらう必要のない首だから撥ねなかったか。

そして世界は私に……いや、彼女に応えた。

彼女は英雄なのだ。

どこまでも英雄、英雄の中の英雄。

きっと死に様もそれはそれは素晴らしい輝きを見せてくれるだろう！！

だが　　は？特別であり普通である彼女は最後にどんな姿を見せてくれる？

分からない、普通だからこそ予想もつかない、普通と言う存在はここまで得体が知れず理解ができない者だとは今の今まで考えたこともなかった。

面白い。ああ、面白い。普通がこの英雄が謳歌する世界でどこまで足掻き、どんな物語を紡ぐのか。

普通は語られない、後の世に語られることはない。

だからこそ、見てみたい。

普通と言う存在が紡ぐ物語を、普通であり特別な存在がどんな終わ

りを迎えるのかを。

私が孫策さんに仕えたら？曹操に仕えたら？え？結局天下を分ける戦いに巻き込まれてどちらかの英雄が勝ちました〜一緒に戦った仲間達と分かち合いましたよ〜パチパチパチ（ワーワー）。

そんな予感がするんですけど。

ねえ違います？そう思いませんか？英雄が負けるんですか？負けないでしょう？だってこの世界の英雄達はみんな女性という世界からの特別扱い受けてるんですから。特別扱いほど先が読めるものはないですよ。だって強いんだもの。だって他の人間よりも全ての能力が逸脱しているのですからね。そりゃ負けませんよ。いや、それでもいいんですけどね。王道として英雄の戦いも楽しみたいものですし。出も私はこう考えると世界に愛されるのが幸せなのか疑問も感じますね。

だが　　は違う。普通だ。どこまでも普通で私の方が特別である彼女より上であるかのように思えてしまう。

まるで誰にも予想出来ない物語、特別な普通に特別ではない特別が組み合わさればそれはさらに誰にも予想出来ない物語へと変貌する。

それこそ私も英雄もこの世界すらも理解出来ないような、ね。

心臓がばくばくと動いている。こんなときは初めてですね、しかもそれが普通の人によるものなど誰が予想したでしょうか？負けても良い！！死ぬのは許されませんが黄泉の縁にまで、三途の川まで追い詰められても良い！！その未知なる物語が見たい！！見たいのですよ！！！！



天和様には手紙を送り、孫策は途中遊びに行ってくればいい。ああ、  
なんでしょう。よりどりみどりじゃないですか。  
知ってます？二兎追うものは一兎をも得ずといいますが、二兎手に  
入れられるのは二兎追った者だけなのですよ？

ああ、貴方は私にどんな一生を見せてくれるのですか？見せてくれ  
るためならこの波才、第二の忠誠を貴方に誓いましょう！！ああ楽  
しみです、実に楽しみだ。

彼は嗤った。楽しそうに。楽しそうに。

〔波才 side〕

偶然……という言葉を感じるだろうか？

私はつい最近まで信じてはいなかったと思う。

何故なら全ては必然で、万が一の可能性なんてものは無いと思っていたから。起こるべくして起こる、なるべくしてなる。私はそう考えて生きてきた。

だが、ここに来て私は偶然と言う言葉はやはり無いのだと理解する。

この世界に来る確率、前世の記憶を持つ確率。

前者は過去ならばあり得るが、武將全てが女性などというパラレルワールドならそれこそ奇跡だ。私は計算なんぞ得意ではないが何億分の……いや、何兆分、もしかしたらそれ以上の確率の不可思議に遭遇している。

そして後者、前世の記憶を持つ確率……こんなもの考えるだけ馬鹿げている。

これ一つで一体どれほどの宗教を敵に回すのか考えるだけで恐ろしい。そもそもこれは確率とか偶然ではなく、もはや奇跡だ。

この奇跡も起こるべくして起こったのか、そうでないのか。私には分からない。

だが、今これだけは言える。

「ぜってえー誰かの陰謀だ。ぜってえー誰か私をどこかの軍に入れようとしてやがる」

事の始まりは、幽州に向かう前に一度洛陽行ってみたいかも、とか言って洛陽に立ち寄った事から始まる。

この時代の都を一目見ようと洛陽を回っていたところ、一人のアホ毛の少女が物欲しげにお店の前に立っていた。最初は無視でもしようかと思っただが、……その、あまりにもつぶらな目で切なげに見ていたのだった。たまれなくなり、お昼時も近い者だから「せつかくだから一緒に食べませんか」と誘った。

お金がないと言葉少なげに話した少女に私は「構いませんよ、私が払いますから」と言いました。

いや、だってあんな捨てられた犬のようなかわいそうな顔をしていたら助けたくもありませんよ。

お金も売上の分が予想以上にあつたので大丈夫だ。一人や二人どうってことない！！と思っていました。

この後地獄を見るとは知らずに。

積み上がる皿。騒がしい調理場。啞然とこちらを見る客。激しく動くウエイトレス。そして顔が青くなる私。

私が瞬きをしている合間にも一枚皿が積み上がっている。

え？なんですかこれ。

目の前の女の子、私が奢っているアホ毛の少女はスタイルが良く、細身です。

なのに質量保存の性質を無視するが如く次々と口の中に消えていく料理。

どう計算しても彼女が食べた量がその細いウエストに収まっているとは思えません。彼女の服装は露出が多く、おなかも見えるのですがどんなに食べてもふくれていないのです。

「（人体の神秘ってレベルじゃねえぞ！！おい！！）」

自分の頼んだ料理を食べるのも忘れてその食べっぷりに釘付けになりました。

そして結果は言わずともいいですね、金欠です。すっからかんになりました。

『おーあーるぜつと』の形になった私。流石にやり過ぎたと感じたのでしょうか、この少女は私に「……お礼。うちに来る」と琉生並みの無表情で迫ってきました。

最初はどうせ宿無しだしいいかなあと軽い気持ちでついていこうとしました。ですが、ここでやけに小さな少女が現れました。なんでもこのアホ毛の少女を捜していたとのこと。健気なお嬢さんだと感心したのもつかの間。

次にこのアホ毛の少女が口走った名前に体が凍り付く。

「ん、陳宮。お客さん」

「へ？恋殿の客人なのですかっ？」

この健気な小さい少女の名前、陳宮というらしいです。

聞いた瞬間その場を走って逃げました。後ろから呼ぶ声が聞こえま

したが無視して走りました。後ろを振り向いたらアホ毛の少女がもの凄く速さで追いかけてきたので、更に走りました。

いや、陳宮って董卓軍の将ですよ。

このままのこのこついでいたら間違いなく董卓軍の目に触れます。董卓軍ということは帝のお膝元です。

いくら帝の権威が此度の乱で失墜しているとはいえ、ノコノコと官軍の本拠地で見つかるのかももう死亡フラグじゃなくて「死亡確認！」になるでしょうが。

ただでさえ官軍相手には暴れすぎたんです。大抵は皆殺しにしたのでここで働く生き残りはいないと楽観したいですが、もし、もしもいたら間違いなく私の人生が詰みます。

……ん？なんか今頭に『董卓軍ルート』とか訳の分からないものが浮かびました。

ははは、なにそれ。ないない……ない……よね？

そう笑い飛ばさそうとしました。

でも先の孫策の事を思い出すと笑えませぬね。

あの場で客将と言い出したのは私の一分の誇りもありますが、客将となることで余計なフラグを叩き折ろうと考えたのです。

あの場であっているんだからもう大丈夫だ、と考えていましたが甘かった。もう甘かった。

これ、確実に落とすにきてやがる。

「これぐらい日本の二一ト対策もしつこければ働く人も増えると思

うんですけど……」

まったく。笑えない話だ。

だが、こうなった以上一応の配慮として、どこかに所属という線も考えるべき……。

「……なぐんで、そんなわけないでしょ、偶然偶然」

たまたまですよ、たまたま。

偶然天和様と会って、偶然孫策さんとあの最後の黄巾党の場で出会って、偶然黄蓋さんが常連客になって、偶然孫策さんと再会して、偶然董卓軍の人と出会って、偶然その人にご飯を奢っただけじゃないですかあ。心配性ですね私は。

はっはっはと一人森の中で笑います。

……私の頭から三本の青筋が下がっているのは気のせいです。  
いや、偶然って怖いね。

えてして偶然は、必然性の欠如によって定義されることから、必然性の解釈次第で、多様な意味をもつ。ようするに解釈のしようでどうとでもなるのだ。だから、これはあれだ、新たな可能性を見付けるための肯定的な生き方として偶然が必要なんだ。

そして偶然を認めることで、私は人として成長できるのだ。たまには偶然も良いよね！！

そう乾いた笑いと共に私は今、森の中を幽州へと向けて進んでいる。何故森の中か、理由が二つある。

まず一つは……悲しい事に先の洛陽の件にて金銭が尽きた。

もう宿にも泊まれず、食料も買えないが、この時代の山の豊かさを舐めてはいけない。

美しい川からは魚がとれ、森では野ウサギや蛇などの動物を獲ることが出来る。山の幸が満載だ。

流石に寝るのは万全の注意が必要だが、これ以上ないぐらいに人が生きていける場所はない。

やはり人は自然が必要なのだと実感出来た。

……熊？猪を狩る？

率直に言いたい。  
死ぬ。

一度見たがあいつらアオアシラにドスファンゴだった。どこのモン  
ンだっつーの。

私が主人公や英雄なら圧倒的な剣術や武術によって、逆に捕食する  
だろうが、生憎私にかかっているのは主人公補正ではなく、悲しい  
事に現実補正だ。

つまり死ぬ、直ぐ死ぬ、圧倒的に死ぬ。

私が現代で学んだ武術は対人用であって、対獣用では断じてない。  
というか獣なら銃が普通だ。

この世界の住人は恐るべき事に聞いた話で狩ることがあるらしいが  
……あゝ明埜もそう言えば小さいときに虎を殺したらしい。まあ取  
り合えず、一言言わせてくれ。

「勝てるわきあねえだろおおおおおおおおおおおお！！」

その声で隠れていた鳥が飛び立つ音に、私は思わず身を縮ませて辺りを警戒する。つい声に出してしまった。

思わずターンXの人になってしまったが、あれだ。無理だ。

私は気が使えたとしても勝てる自信など全く無い、自分は一般人なのだ。熊の腕力に、猪の突進に勝てる次点でそもそも人間止めていることに、何でこの世界の住人は気が付かないのだろうか。

というわけで、猛獣なんぞと闘わない。あつたら気を殺して隠れる。

二つ目は……フラグ破壊だ。

普通に考えて森の中で、特別側の人間と出会う確率なんぞ、まず少ないと私は思う。

少なくとも街道を進むよりは数倍は確立が下がると見ている。これで私は無事幽州に辿り着くことが……できたらいいなあ。

もしこれで駄目なら、私はそんな星の下に生まれたのだと諦めるしかない。

……かなぐり不満だが。あれだ、反乱でも起こして暴れて帰ろうかなあそんな時は。

そんな物騒なことを考えていると、何やら妙に清々しい風が私の髪を撫でた。

「この感触……よかった。ちょうど咽が渴いていたんだ」



私はほっと一息をついてその風の下へと歩き出す。  
やがて現れたもの、それは。

「おお、綺麗だ」

目の前には広い川が流れていた。水がキラキラと輝き、透き通っている。思わず感嘆の声を私は漏らした。

すぐさま川辺に走り寄り、手で水をすくって飲む。この世界の水は生水だから気をつけなければならぬが、慣れてしまえば問題ない。冷たい水が咽を通り、ほてった体を覚ます。

うん、空気も水も美味しい。

この世界は自然がたくさんあり、排気ガスなども当然無いために、空気すら味を感じる。植物も生き生きとしていて、動物も自分らしく生きている。

本当に自然が豊かだ。

この川もそれは例外ではなく、鳥が木にとまって歌を歌い、葉は青々と茂り、裸の女性が水浴びをし、花が美しく咲いている。なんと美しい……。

……ん？なんかおかしくね？

ええと、再確認します。

鳥が木の上で歌を歌っていて、葉が生き生きとされていて、裸の女性と目があつて、花が綺麗で……。

……ん？裸の女性？

「「……」」

髪は赤くてポニテールでスタイルは普通で、胸も普通で……えと、冷静に観察してる場合じゃないですよ。その女性と目が合ってます。

しかも彼女は生まれたままの姿、要するに裸なわけです……その。

「なっとなっとな!!」

女性が狼狽えながら後ずさっています。あゝそうかあ。この時代つて、割とこういうふうには川で水浴びするのってデフォでしたよね。

……これは不味い。性犯罪者はいけない。

やったら社会的に死ぬ犯罪第一位であるそれに手を染めたら周りから白い目で見られ、肩身が狭くなり、近所で噂をされて。ついには

家族総出でその場所から引つ越さなければならなくなる。

あ、でもこの場合しようがないから冤罪になるか？

見たくて見た訳じゃない！！見せられたんだ！！

っ違う！！それアウトです！！もういろいろ駄目です！！って落ちて着け、今はそんな事考えてる場合じゃない。

目の前の女性は今や顔が真っ赤、これは下手に対応を誤れば誤解されかねません。

そうだ、落ち着いていくんだ。

大きく深呼吸して……っよし！！落ち着いて対応すれば実は大丈夫的なオチに！！

「えと、まず」

「うわあああああ！！」

だよね〜そんなオチで済ませられるんなら警察はいらないですよ。女性は剣を持って私に斬りかかって……斬りかかって！！？

とっさに避けましたが逃げ遅れた髪が私の体から強制退去させられました。泣き別れた髪が宙を舞う。

……あ、やべ。死ぬ。

いや！？殺す気でしたよね！？今避けなければ死んでましたよね！？警察どころじゃねえぞこれ！！

むしろ私がおまわりさん呼びたいんですけど！？

「忘れるおおおおおおお!!」

「忘れます!! 忘れますからその剣を置いて!!」

「そんな私の気持ちなど全く関係なく、頭目掛けて振り下ろされた剣……え? 死ぬんですか私?」

「悪いのは私ですけどこんな所でこんな理由で死ぬわけにはいかない!!」

「というかこんな所でこんな理由で死んだらいろいろやってられません!!」

女性の懐に飛び込み、剣を握る腕を絡め取り膝に溜めを作る。

気を体に集中させ背筋力を強化、多少強引にでも引き寄せる。

歯を噛み締め、右手を自分の後方に突き上げると相手の肩甲骨あたりをめがけて腕を筋肉で挟み込む。

女性は突然のことに驚き、抵抗してもがくが既に重心は前に崩れ、力はよりどころを失い意味がない。

そのまま私は水面に女性を叩きつける。

地面に叩きつけるよりは威力はないがそれでも無力化するのには十

分。衝撃により女性の手から剣が飛ぶ。

受け身が取れないためになすすべもなく水に沈んだ女性。だがまだ目には意識がある。

手を伸ばし水の牢獄から抜け出そうとする。

させるか。

無防備な腹部目掛けて腕を引き絞り、正拳突き。  
更に咽へ必殺の一撃を……って。

殺してどうする!?

慌てて女性を水の中から抱え上げるが……。

「……………」

意識がない。

嫌な予感が頭をよぎる。

素早く心音と脈を確認。だが幸いにも心音は止まっておらず、脈は

正常。

……よかった。この人思ったよりも頑丈らしく、気絶しているだけのようだ。

思い出せば振られた剣は、武を知らない人間のものでは無かった。その道の人なのかもしれない。一般人ならば下手すれば死んでしま

う。

……。

先の武を垣間見せた嫌疑と、その身から溢れ出る特別臭、一瞬このまま女性を放置して逃げようかと悩んだが……流石にそれは、あれだ。

酷すぎる。

ため息をついた私は女性を看病すべく抱え上げた。私って結構甘いですわねえ。

「いや、助かったよ。まさか水浴びの最中突然気を失うなんてなあ」

そう言って笑う服を着た女性。しばらくしてこの女性は目が覚めました。

え？なんか女性がおかしいこと言ってないって？

……。

いいじゃないですか。この女性は川で気を失った。私はそれを助けた。目覚めた彼女は不思議なことに記憶がなかった。私は親切に何が起こっていたのかを教えてあげた。おかげで彼女には感謝されている。

それで良いじゃないですか。私凄いいい人です。

「うーん……なんかお腹が痛いなあ」

ツギク

「倒れたときに岩にぶつけたのではないのでしょうか？」

「あ、そうかもしれないなあ。おお！！そうだ。まだ恩人の名前を

聞いてなかったよ」

そう言つて私に笑いかける女性。……心が痛い。もの凄く痛い。胸が、胸が苦しい。

胸に手をやり苦い顔を見せる私に、女性は心配そうに私を労る。

「つて大丈夫か？お前もお腹痛いのか？」

「あゝそうかもしれませんね。最近いろいろと疲れと悩みが多だありまして」

「……そうかあお前も苦労してるんだなあ」

お互いため息をつきます。

ああ、よく分からないがこの人とは気が合いそうだ。

「何か貴方も悩みがあるのです？」

「ああ、実はなあ」

そこから始まるのは聞くも涙、語るも涙なお話でした。

自分に人望が無く、人が来ない。がんばっても普通の結果しか出せない。というか私って何なんだろう？

など見ていて気の毒になってきます。



……ん？

聞いているとこの人割と重要な職に就いてるっぽいんですけど。汗がたたりと額から流れます。あれ？やっぱりその、そんな展開？いやいや、流石にそれは……無いよね？

「あの〜」

「でなあ……ん？なんだ？」

「まだ貴方の名前聞いてなかったんですが、教えてもらってもよろしいでしょうか？」

「おお、そうだったな。すまない、すっかり忘れていたよ」

頼む、頼むから予想と外れてくれ。

そこら辺の一般人であってくれ。私は見たいのであって体験したいという気持ちはそれ程ないんですよ？

つな！！ほら、村人Aとか名乗れよ！！

「私の名前は公孫贄、真名は白蓮。ああ、お前には命を救ってもらったから真名で呼んでもらいたい」

そう笑う女性、公孫贄。私もつられて笑います。

お互い無駄に良い笑顔……ああ、だめだこれ。もうこれ逃げらんねえ。

「つちよ！？なんで泣いてるんだ!？」

「……あ、いえ。貴方の真名を教えてもらえたことが嬉しくて（あはははは、もうどうにでもなぐれ）」

「え／＼／……そ、その……なんだ。照れるな」

思わず涙が出てきました。孫策、董卓と来て公孫贇ですか。だめだこれ。もういろいろ諦めるしかないのか。

「でも嬉しいなあ……私の真名でそこまで喜んでくれるって」

悲しげに笑う公孫贇。

さらには大きいため息を……あゝなんかスイッチ入っちゃいましたね。酒に酔った天和様と地和様辺りの匂いがぶんぶんします。

「私はやっぱり地味だからさあ。それにほんとに何やっても普通なんだ。」

……なんか話しづらいので流されましょう。

「私ってさあ……居る意味ないのかなあ。同じ地位でも曹操とか袁

紹とかに比べて地味だしさあ」

ん？これはいろいろと駄目ですね。もしかして彼女は取り違えているのでは？

「そんなことはありません、貴方はよくやっています」

「お世辞はいいよ・・・桃香にも魅力で負けて兵を持ってかれるし、星には逃げられるし・・・私はもう駄目」何を言っているのですか」  
・・・え？」

これはいけませんね。

お世辞？特別側の、物語を作る人間が何をぬかすのです。……あゝ  
なんかいらいらしてきました。少しばかりかつを入れてあげましょ  
う。

「白蓮さん、貴方、王の条件を知っておりますか？」

「王の条件？ええと、だな……」

そう言うと彼女は考え込む仕草を見せた。

「王とはみんなを導き幸せにする……その為には今の私みたいに普通じゃなくて」

「普通は王ではないと？普通以下でも王になれるものはいましたよ？」

「そ、それは」

「王とは、力量など必要無い。武や知識などまず二の次。必要なのは器、魅力、配下の三つのみです」

「……ずいぶんとはつきり言っただな」

「言いますよ、王が前線で戦う。それもまたよし。王が自ら策略を立てる。それもまたよし。ですがそんなのは本当に必要なものではない。器がなければ王にはなれない。多くの苦難、絶望、死を乗り越え、部下達の全てを受け入れ肯定し、なお満たされない器が必要である。ここで多くの王が分けられる」

「分けられる？」

「王は孤独である、王は仲間と共に歩む、全てはそれを包む込む器次第なのですから。種別が違ってくるよ」

聞く限りでは前者は曹操、後者は劉備か？本当に王も様々で面白いものだと感心させられる。

「次に魅力。人を惹き付け、自らの命すら惜しくないと思わせる狂気なる魅力。これがあるからこそ人はその人のために戦えるのです。何が悲しくて何の魅力もない者に付き従う」

「魅力がない……か」

白蓮は何か思い辺りがあるのか、顔を青くして考え込む。だが私はそれに構わずに続ける。

「最後に配下、これが重要です。そもそも君主に最も必要なのは、万を蹴散らす武勇でも、人の裏をかく知勇でもない。人を使う能力です。当然、全てをこなせばそれがよいですが、優秀な部下を使える能力さえあれば君主は事足りる。かの漢の始祖の劉邦がそれにあたる。優秀でも部下を使えない者、凡人だが部下を使える者、どちらが国を安寧に導くか分かるでしょう」

「……」

「白蓮さん、私が見たところ貴方は平凡です。これと言ったところで秀でるところはない、少し強い程度の私にも勝てないでしょうし、こんな所で見ず知らずの人間に愚痴るなど愚か者でしょう」

そう言うと彼女はますます顔を青くし、反対に拳を赤くなるほど握りしめる。

だが私はそんな彼女の頭へと手を運び、撫でる。

白蓮は驚いたように顔を上げて見るが、私は構わず微笑み、撫で続ける。

「ですが、私は貴方はその三つがあると見ましたよ？」

「え？」

「貴方は自分という存在をよく理解し、その上で国を良くしよう、民を救おうとする気概と意思がある。幽州の民をその両手で抱え込む器がある」

先ほどの彼女が言った「みんなを想い、幸せにするよう導く」。この言葉にどれほどの想いを彼女が乗せているのかを、私は痛いほど理解出来た。

本当に彼女は幽州を守りたいと思っている。だが、その力が己になりと思うが故に苦しんでいるのだ。

「魅力は……残念ながら私が知る貴方の対抗馬達に比べて低いですね。でも確かにあります。貴方を慕う民がいるでしょう？貴方のために死んでくれる兵士がいるでしょう？」

「…っあ」

私は彼女が黄巾党から守り抜いた話を聞いている。確かに将達からは酷評されているが、民から彼女に対して不満が出ているなど聞いたことがない。

普通に政治をしている？それがどれほど難しいのかこの世界の将達は理解出来ないのだろう。曹操や孫策などのあまりにも化け物が多すぎるこの世では、どうしても彼女は霞んでしまう。

普通に政治が出来る、良くもなく、悪くもなく。良いが故に出る弊害がある、悪い故に出る弊害がある。

何故誰も普通が良いと分からないのだろう。理解しようとならないのだろう。

「そして今貴方が一番悩んでいる事。それは最後の将です。違いますか？」

「……ああ」

「なれば貴方が見付けなさい」

「私が……見付ける？」

「ええ、そうです。この世界は広い、その多くは曹操や、貴方のお友達の劉備の下へ行くでしょう。ですが貴方が本当に自らをさらけ出し、本心から礼を尽くして誠意を見せて触れれば、きっとその心に感化されて貴方の魅力に気が付く者が居ます。断言してもいい。その者は曹操に誘われようと、劉備に誘われようと心から貴方と繋がれば貴方を選ぶはずです」

私は彼女の頭から手を引く。

何故か白蓮は残念そうに「あっ」と声を漏らした。

私は彼女に背を向けて、空を見る。どこまでも、どこまでも青い中華の空。

この空はきつと日本、邪馬台国にまで続いているのだろうか？

「決して折れぬよう。貴方は貴方なのです。曹操は曹操、劉備は劉

備の王があり、道がある。貴方は貴方の王を見つけ、そして進みなさい。どうです？元氣、出ました……か？」

笑いながら振り返った私だったが……最後の言葉がなかなか出てこなかった。

それは何故か。

……白蓮さんが目を輝かせて、私を尊敬するまなざしで見っていた。心なしか頬が上気している。

え？何これ？

戸惑う私をよそに彼女は今まで考えられもしなかった、晴れ晴れとした笑顔で笑う。なんか握り拳を作っているぐらい元氣だ。

「そうだ、そうだよな！！私は私なんだ！！桃香ではない、幽州の公孫贇なんだ！！桃香のように、曹操のようになろうと思っていたから駄目なんだ！！」

うんうんと頷くと、彼女の変わりように惚ける私の手を両手で握り込む。

いや、顔が凄い近いんですが……。

「私は私だけの王になる、私だけの道を進む王となる！！」

……まあ多少元氣すぎな気がしますけど、結果オーライですね。



私も若干苦笑しつつ微笑む。やっぱり笑顔の女性はいいものだ、暗い顔してるよりもよっぽど魅力がある。

まあ、そうは言ってもこれからの公孫贖は大変だろう。なんせ董卓連合という大激戦。膨大な財力と、豊富な土地を持つ袁紹と戦う事になるのだから。

私も影ながら応援させて……。

「だから、だからその為に私に力を貸してくれ!!」

……はい？

「頼む、お前の力が必要なんだ!!」

「いやいやいやいやいやいやいや!!私が言ったのは優秀な配下、私凡将以下、理解しました?」

「お前は私よりも強いのだろうか?」

……あ、そういえばそんなこと言っちゃった気が。

「それにあれだけのことを言える見聞と知識、そしてそれを扱える力があると私は見た!!」

くそつたれ！！昔からの悪い癖だ！！どうも一度熱が入り込むと抜け出せなくなる。

今回もやっちゃったよ、もうやっちゃったよ。

「いやいや、そればかりは貴方の勘違いだと……」

「私には今お前だけしか見えない！！私が生きていくために、私が王となるために、私が私の道を進むためにお前の力が必要なんだ！！頼む、力を貸してくれ！！私を支えてくれ！！」

ついには白蓮さんはその場に跪き、両手をついて、さらには額を地面にこすりつけて私に懇願し始めた。

その姿は……OH。

ジャパニーズ D O G E Z A。

貴方なんでそれ使えるの？土下座の始祖ですか？

というか、確かに痛いほど思いが伝わってくるんですけど。何いきなり実践しちゃうんですか貴方。

思わず逃避するも流石にこのままの状態は大変に不味い。

私は孫策と同じように彼女の申し出を断ろうと口を開……

こうとして止めた。

ちよつと待て。これは好機ではないか？

自らを思考の海に沈める。

別に客将ならば問題ない。白蓮さんの軍に入れば曹操もおいそれとは手を出せないだろう。

確かに私には天和様、地和様、人和様というかけがえのない主がいる。言つては悪いが私の優先順位は彼女よりも天和様達へと傾いている。これは他の誰であろうとこれは変わることはない不変の決まりとなつているが……。

今の状況ではとてもじゃないが側にいることは出来ず戻れない。それに彼女の軍へ入つた方が、いざという時はそれを盾に天和様達を守ることが出来るし、天和様達が平和な世を生きるための……言つては悪いが踏み台に出来る。

それに孫策・曹操とは違い、彼女であれば抜けようと考えれば、抜け出せるのではないか？

あの二人の英雄なら、それこそがんじがらめに抜け出せないような事をしてかしそうだが、彼女はそれを行える力は見分ける通りだ。ぶつちやけ英雄だと思えない、普通だが特別という訳の分からないものだ。

それに、これが最も重要だが。

「（もう、逃げられない気がする）」

流石に何度もこの手の人間と出会いすぎだと感じる。

ここで断つても、私の縁は強く太い、確実に誰か特別側の人間を寄せ付ける。ではここで聞く分の残りの特別側を並べてみる。

劉備

あ、なんか駄目だ。それ以前に明埜が毛嫌いしていますし、私自身もあれ以来ちよつと苦手です。いや、楽しそうだが彼女の配下たる面々を見るとな。悪いが私とは馬が合いそうにない。

袁術

そもそもなんで選択肢になつてる？いや、面白そうだが胃が。

袁紹

おーっほっほっほ。

……もう分かつたと思う。自分として生きられて、抜けることが出来て、ちゃんと話を受け止めてくれる。

これ以上の優良物件は無いのでないだろうか。良くも悪くも普通、戦うとしても袁紹だ。勝機はある。

いざという時は逃げればいい。なんとも物語を見るのに最適ではないだろうか。

……だが、問題が一つある。

それは彼女が面白いか、そうでないかという問題だ。

いくら周りが面白くても自らの軍がつまらないなどもつての他。やはり全ては劇的に動き、楽しくなければならぬ。それが私の生きる道なのだから。

それに彼女が値するのなら、私の矮小な力やちっぽけな命程度、くれてやっても惜しくはない。怠惰な日常よりも劇的な日々、どうせ軍に入るのならそんな日常を過ごしたいと思いませんか？

「白蓮さん、一つ聞かせてください」

……試すか？

〈公孫贇 side〉

やっと、私は見付けることが出来た。

ずっと悩んでいた。私は幽州を守るのに相応しくないのではないかと。

桃香が来て、星の奴が私よりもあいつに目を奪われていたのは知っている。私は桃香みたいに魅力がある人間じゃなかった。努力をした、認めてもらおうと、必死になって生き抜いてきた。そのかいあって幽州の太守に命じられた。認められた、嬉しかった。

……黄巾の乱、名が広がったのは私ではなく、私を訪ねて頼ってきた桃香の方だった。

私には有能な部下が星しかいない。対して彼女は関羽、張飛の二人の猛将を従えていた。

羨ましかつたよ、私にも星という有能な客将はいるが、彼女は私に對して忠義を見せてはいなかった。命を賭して尽くすには、値しなかったらしい。

對して桃香は二人の忠義と想いを一心に受けていた。きっとあの二人なら桃香のために死ねるのだと思う。

私は嫌になった。友達のはずなのに桃香が無性に妬ましく、羨ましかつた。

だから最後に私は桃香に「出て行ってくれ」と言葉に潜めて伝えた。その際桃香が兵を募っても良いだろうかと尋ねてきたが、私はそれを一瞬の間を置かず認めたよ。すぐに、すぐにでも桃香に出て行って欲しかつた。こんなに醜い自分を見られたくなかつた。

でさ、笑える話なんだけどな。私が何度も、何度も呼びかけても応えてくれなかつた民がさ、桃香になら応えてくれるんだよ。私の民が、幽州の民がだぞ？笑えるだろ？面白い話だろ？

私はその時無性に笑えてきたのを覚えている。

桃香が出て行った後、星もこの軍を去っていった。

……私は止めもしなかつたよ。

どうせ私には彼女を従える魅力も、器もないのだから。

なんだかそんな自分が無性に嫌になって、虚しくなって。私は頭を冷やすためにここに来た。

ただどいくら水を浴びようと、心を落ち着かせようとしても、私は胸の空虚さを埋めることは出来なかつた。

……ここまでしか記憶にない。なんだかその後、もの凄い恥ずかし

い思いをした気がする。

気が付けば目の前に狐みたいな仮面を被った男がいた。そして私はいつの間にか、そんな赤の他人の男に愚痴っていた。何だか無性にこの思いを誰かに伝えたくてしようがなかったんだ。

……あいつはそれを全て受け止めた、受け止めた上で私を叱咤し、認め、道を示してくれた。

暗雲と汚泥に塗れていた世界がぱつと明るくなった気がしたんだ。いや、した。目の前が急に広くなって、今まで見えなかったものが見えて。救われたんだと思う。本当の自分を彼は見付けてくれたんだともう。

そう感じた瞬間、私は彼がどうしようもなく欲しくなった。私を初めて『公孫贖』として認めてくれた、しっかりと根本を見て私を評価してくれた。

分かるか！？今まで誰も、私でさえ知らなかった『私』を見付けて、導いてくれたんだ！！私はその時以上の喜びを知らない。

だから側にいて欲しい、私を見て欲しい、見守り、共に戦って欲しいと私は願った。

恥も醜聞も捨てた。素のままの自分で私は今彼に請い願っている。私に仕えて欲しいと、道を共に歩んで欲しいと。

どれぐらい頭を下げていたか分からない。一瞬だったし、長かった気もする。

突如私に彼からこんな事を言われた。

「白蓮さん、一つ聞かせてください」

私は顔を上げて彼の顔を見る。仮面で覆われていて、今どんな表情をしているのか分からないが、輝く二つの眼光が真剣さを帯びているのを感じた。

息をのんで私はその先を待つ。

「貴方はこの大陸で何を成し遂げるおつもりで？」

「この幽州を守りたい、民を安寧に導きたい」

「私が言ってるのはこの大陸中ですよ。全てを治める？全ての民を救う？何でも良いんですけど。貴方は無いのですか？お友達の劉備はこの漢の民全てが笑って暮らせる幸せな世界を作りたいそうです。曹操はこの大陸に覇を唱え、天下を我が者にするそうです。それは孫策も同じ、貴方はこの僅かな幽州にしか目を向けないのですか？貴方の器は全ての民を救おうとは思わないのですか？」

「無理だ」

私の言葉に彼は動きを止めた。

「私はそれを成せる人間ではない。私に出来る事は、私の願いは今この両手に抱え込んでいる民を救うこと、ただそれだけ」

「……では、貴方がそれだけの力を手に入れたらどうですか？」



「力？」

「曹操の覇気、劉備の魅力、孫策の地勢。この三つを得られるとしたら何を望む？私には出来ませよ？そういうものがあるのですから。望むままの願いと希望を叶える書が。言いなさい、その願いを。平凡が特別になる、鶏が鳳凰へと変わる事が出来る。貴方も望むでしょう？特別を！！劉備のような英雄になることを！！！」

そう叫ぶと男は懐に手を突っ込み、取り出したのは一つの巻物。

私は彼のその言葉を馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばすことが出来なかった。何故なら今の彼から発せられる気、いやこれはそんな生やさしいモノじゃない。

『鬼気』

体が震えた。今日の前にいるのが同じ人間だとは思えなかった。人がこれほどまでこんなにおぞましい、負の感情の嵐を起こせるのか？

「さあ、貴方は得たいですよ？力？特別になるべき力を。劉備すらも超えられるかもしれませんよ？」

「………いらない」

「っは？何ですか？貴方は普通のままで行くと？この乱世を？」

確かにそれは、あれだ。無謀だよな。桃花の魅力？欲しくてたまらない。  
でもそれはいららない。

「ああ、いらない」

「……何故です？」

「だってさ」

お前が教えてくれただろ。

「それ、私じゃないだろ」

彼はその言葉を聞いて固まる。

同時に、辺りに無造作にまき散らされていた彼の鬼気が消滅する。

彼は肩を震わせる。もしかして、怒らせてしまったんだろうか？

でもさ、私じゃない私なんて気持ち悪いと思うだろ？特別な力を得たってさ、それは自分の力じゃないんだから。己の力で自分を変える必要なんて無いだろ？

私はもう決めたんだ。私は私として生きていく。私として生きられ  
たなら、死んでも悔いは無いと。

民は私を信じてくれている、ならば私はそれに私として応えるべき  
なんだ。



……泣いて良いか？

途中男が言っている言葉が心にぐさぐさと刺さる。

なあせめて、せめて断るんでもさ、もうちょっと言葉選んで欲しいなあ。

涙が込み上げそうになってきた私。だが、それも次ぎにかれが言い放った言葉により吹き飛んだ。

「客将です」

「え？」

「私は自分が信じる主がいます。その人のために私は生きています。で、客将です。それに私はちょっと訳ありなんですけど、それでも私でいいのですか？」

「……言っとくけどさ、私の小さな器は全く満たされていないんだよ。お前一人どうということはない。全部受け止めてやるさ」

「あははは！！なればこの命かけて見ても面白いですねぇ〜いや〜見誤ってました。貴方普通だけど普通じゃない」

「なんだそりゃ」

私は笑った。仮面の男は更に声を上げて笑った。

客将？良いじゃないか。私のために戦ってくれるんだろ？私のために命賭けてくれるんだろ？

ならそれで十分だろうに。

「そ、そう言えば私の名前まだ言っ  
てませんでしたね。あゝ腹が痛  
い」

「ん？　そう言えばそうだな。教  
えてくれないか？　流石にこれからの  
仲間の名前も知らないんじゃない  
かな」

男は仮面に手をかけると、一  
気に外した。

現れた顔はどこにでも良そう  
な平凡な顔。だが彼の力はよく知  
っている。

男はまるで役者のように腕を  
曲げて私に頭を垂れる。

「私の名は波才、真名はない身  
ですが貴方に第二の忠誠を誓わせ  
てもらいますよ」

「改めて、私は公孫贛、真名は  
白蓮。私の真名はさっきも言った  
通り預ける。よろしく頼む」

そう言っ  
て互いに笑い合う。

今日は良い日だ。自分を見付  
け、共に道を進む配下を客将と  
言えど手に入れた。

しかも名の聞こえた波才と  
同じな前だとはな……なんて  
いう偶然……ん？

波才？

「なあ、もしかしてさ。あれか黄巾党の波才か？……済まない。同じ名前だったんでな。にしてもあの黄巾党の波才と同じ名前なんて相当珍しい……」

「いや、本人ですけど？」

「え？」

「私、本人、分かりました？」

そう言つて不思議そうに自分を指さす波才。

そうかあ、黄巾党の波才本人か。これはますます良い拾いものをしたなあ………つて!？」

「波才いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!??」

「つちよ!?!白蓮?もの凄い睡とんできてるんですけど!?!」

あれ、私の明日はどっちだ!？」

## 第十九話 命短し、創れよ乙女（後書き）

波才がハイになっている回。大丈夫です、次回で沈静します。

公孫贇軍への参入はヒロインが天和達という時点で決めていました。

白蓮の中の人 スクールデイズの世界

天和の中の人 スクールデイズの言葉

やっべえ、おら書くのわくわくしてきたぞ。

それにしても、かなり好き嫌いが分かれる話だなあと思います……。どちらの方にも一応は読んでもらえるよう何度も書き直したのですが……何分3ヶ月前の内容なんてそうそう覚えていませんorz

番外編の黄巾エンドの最後の誰かのセリフはこの話から始まっちゃいます。

急に話が進みます、作者がギャグもの書いてます。なんていうか駄文過ぎて笑えてきます。

それでも「構わん、やれ」という方はどうぞ、これからもよろしく願います。

それでは今回の武將紹介に移ります。

今回の武將は地味で無双のモブキャラに出てるぐらいのあの人はです。

「本当に出て行くのかのお？」

「ええ、悪いけど決めたのよ。私は劉備殿についていく」

徐州の城で陶謙は一人ため息をついた。

目の前に立つ女性は気が強そうなつり目に、清んだ赤の髪を靡かせて自分を見ている。

彼女こそは陶謙にとって懐刀だった。外交に秀でており、人を支える才があった。

手放すのはあまりにも惜しい、だが彼女は既に決意を固めているようであった。

「……ふう。お主には負けたよ、孫乾。だが何故そこまで劉備殿に浸透しているのだ？」

その問いに彼女はふっと笑みを浮かべると、人好きが良い笑みで笑う。気が強そうな顔が、この時ばかりは一人の幸せを見付けた女性の顔になっていた。

「私は……あの方に天下を見たの」

「ふえ〜公祐ちゃん、もう勉強したくないよお」

「はいはい、それじゃ次はこの項目を」

「うわ〜ん！！公祐ちゃんの意地悪！！」

それから彼女は彼女に尽くした。

己の学んだ事を全て彼女のために費やす覚悟を決めたからだ。

「ど、どうしよう！？私達曹操さんの武将の車冑さんを……！！？」



「……朱里？私ね、曹操に反旗を翻す時が来たと思うんだけど」

「……それしか手はありません、ですが私達だけでは」

「北方の名家、忘れたわけじゃないでしょう？」

「孫乾さん！？まさか袁紹さんを！？」

「え？どついつ事？」

「桃香、私に命じて。袁紹を動かせと」

主の危機に、北方の名族の下へと一人旅立ち、そして動かした。幾多もの知識を引き出し、利害を説いた事によって劉備の危機を救った。

「本当に……たどり着けるのであろうか？」

「たどり着けるのでしょうか？違うわね。たどり着くの」

道を劉備の母親を連れて進む関羽。曹操の軍より主の下へと帰還するべく関羽は歩みを進めた。だがその距離は長く、険しく、千里もの大旅であった。

関羽は弱気になっていた。たどり着けるのか、と。

「だが……」

「くどい!」

突然の怒声に関羽は思わず立ち止まる。見れば孫乾は鬼のような顔で彼女を見ていた。

「天下を支える武を持ちながら何を弱気になつているの!? 貴方を待ち焦がれる主君の気持ちの一片でも理解出来るのなら、ただ歩みを止めなさい!」

「やった! やったよ! ついに蜀を手に入れた!」

「こら、桃香。そんな子供みたいなまねは止めなさい」

「えへへ、でもこれも孫乾ちゃんのおかげだよ! これからもよろしくね!」

「……ええ、そうね。ちょっと咽が渴いたから水を飲んでくるわ」  
そう言つて彼女はその後にした。

平然と歩く孫乾、だが廊下の途中で思わず立ち止まると咳き込む。口に当てた手、それは血で濡れていた。彼女は青白い顔で微笑む。

「……もうちょっと、貴方の天下を支えたかった」

劉備が蜀を手に入れた数ヶ月後、彼女は病死した。劉備の仲間達はみな泣き崩れ、彼女の冥福を祈つた。

「支えて……支えてくれるって言ったのに。孫乾ちゃんは本当に…」

…いじわりゆぐす、ふええええええ」

そして、劉備は声を上げて三日三晩泣き続けた。

孫乾、字は公祐

劉備が蜀建国前から付き従った功臣。文官のような働きが多いが武官である。

彼女は徐州刺史の陶謙が亡くなり、その遺言で劉備が後任者となると、彼は師の鄭玄の推挙を受けて、劉備に仕官して従事となり、糜竺・糜芳兄弟（劉備の外戚）、簡雍とともに各地を転々とした。

また、劉備が曹操の配下である車胄を殺すと袁紹へと決死の外交をし、盟約を結ぶことに成功する。さらに演技では関羽が曹操の下から千里の道を帰還する際励まし、その旅を成功させた。汝南郡で曹操の部将の于禁と李典に敗れた劉備は、糜竺と孫乾を、荊州牧の劉表のもとに派遣した。両人は劉備を受け入れるように手続きをまとめた。その功績で従事中郎となった。

が、劉備が蜀を落として数ヶ月後に病死する。この時の彼の功績は劉備軍でも目を見張るものであり、かの孔明よりも位は上であった。

劉備が流浪時代から付き従った。外交官です。この時期の劉備は危険のど真ん中でした。呂布を討った陳珪・陳登父子などの人材が彼を見捨てる中、彼女は劉備にただ付き従い、何度も彼の命を救いました。

また、劉表が劉備を受け入れた際。彼女を劉備と同じ待遇でもてなしたことから、彼女がいたからこそ劉備を受け入れたという説があります。彼女がいなければそもそも蜀は生まれなかったかも知れません。

縁の下の力持ちがこれほど似合う武将はそうはいないでしょう。

## 第二十話 家畜に神は居ない(前書き)

「僕はずっと山に登りたいと思っている。……でも明日にしよう  
おそろくあなたは永遠に登らないでしょう。」

レオ・ブスカリア

## 第二十話 家畜に神は居ない

「物足りない・・・これは物足りない」

執務室で波才は呟く。

私は流石に波才と名乗るのは時期的に不味いと単経と名乗っております。たしかそんな人が公孫贗軍にいたなあと思い出したので。仮面を装着し人相も隠している私が何故この軍で違和感なく仕事しているのか不思議でなりません・・・まあ皆さんが良いのでしよう。結果も出していますしね。

あと天和様に手紙を送ったところ「私の事もう嫌いなのかな？」って妙に字が濡れた跡付きの手紙が来ました。

いろいろ無視して天和様に会いに行きました。

天和様嫌いになるとか香川県がうどんを嫌いになるぐらいありえませんが。

安心してくださり「がんばってね」と応援していただきました。ああ、やっぱり天和様は私にとっての救世主です。

でも去り際に「夫を待つ妻ってなんかいいよね」とおっしゃっていましたがどういう意味でしょう？いい人でも見つけたのでしょうか。

その際にはこの幽州のお金全てお祝い金で送って上げたいです。

……いや、比喩表現ですからね。精々十分の一ぐらいです。

仕事が一段落落ち着き、だいぶ遅い昼食を取っていた私。昼食はそれなりの物で味も悪くはない。だが添加物大盛りの料理に慣れ親しんだ舌はいかんせんこの味には中々なれなかった。

「呉ならば塩を塩田で取りやすくできるんだが・・・。内陸部だから塩層を発掘すべきか？いや、金がかかりすぎるし断念するべきか」

単純に味が物足りないという理由で塩層まで発掘しようとする自分に少しは呆れますが・・・割とこれ死活問題ですよ？

そういえば豚とか牛とかも味が物足りない。待てよ、あれは確かえさにまで拘っているはずだ。

「私達でリンゴだけしかえさを与えない豚とか作ってみるか？」

一番身近なのは食料です、食さえ変えれば人々の心ですら豊かになる。だからこそ私は食に拘るです。決して自分が食べたいわけではありません。

「いや待て、じゃがいもは無くともこの時代に里芋はある。ならば里芋でポテトチップスもどきが出来るのでは！？更にこの世界は砂糖が私の知っている時代に比べればまだ扱えるレベル・・・ケーキやチョコを制作できるか？オーブンは石窯でいけるが冷蔵庫は・・・調理器具辺りはいけそうだが・・・ケーキはいけるかな？・・・むう。ここはポテチで我慢すべきか」

この漢の大地にポテトチップスを広めよう。会社名はケルビーで。マスコットは鹿っぱいあれにして。なんかいろいろなところに喧嘩売ってる気もするが多分気のせいだろう。

・・・流石の私も赤いズボンをはいた丸い耳のネズミをまねるのは止めにしよう。よく解らんがこの世界が終わる気がする。いや、ドアラ辺りならいけるか？

某球団のアイドルキャラクターをまるぱくりしようとしている波才だったが扉を叩く音で意識を戻される。

「はいはい入って来て構いませんよ」

ぎいっと開いた扉から入って来たのは白蓮だった。

「・・・話がある」



「二つにはありません」

「話がある！！」

強引に手短にあつた椅子を引き寄せて白蓮は座る。

その動作はどこか荒々しい。流石の波才もこれには諦めて大きなため息をついて次の言葉を促すことにした。

「・・・それでどんな話ですか？」

「まず一つ、お前が言っていた二毛作、二期作、輪作を実行している。既に成果が出始めているのもある。これで内の食料や穀物は確保された」

「おお、それは良かった」

私は先も言った通り私は食料の重みをいたいほど理解しています。食料が満ちあふれば人の心は豊かになりそれを加工して二次産業を発展させることも可能。そのまま売つても良しだ。

二毛作は同じ耕地で一年の間に2種類の異なる作物を栽培する。

二期作はその耕地から年2回同じ作物を栽培し収穫することによって多くの収穫を上げる事が出来る。まあこれは多くなりすぎて需要を上回る供給になるという欠点もあるがこの世界では二次産業が余り発達していないし多くの食料があるというのはメリットにしかならない、

その分税収下げれば良いんですから。でも調整するところはしないと駄目なんですけどね。

再生茎を利用した二期作栽培技術は10aあたり200kgと300kgの収量があげられます。ばねえ。

輪作は同じ土地に別の性質のいくつかの種類の農作物を何年かに1回のサイクルで作っていく方法。これにより栽培する作物を周期的に変えることで土壤の栄養バランスが取れ、収穫量・品質が向上、連作での病原体・害虫などによる収穫量・品質の低下の問題を防ぐことが出来るのです。

「お前の言った通り木の灰とか木くず、貝殻を砕いた物を蒔いたら確かに土壤が豊かになったらしい。それらは既に実行に移しているよ」

「あれ？糞とかはまだ実行されていないのですか？」

「・・・反対意見が強いからなあ。正しいんだろっけども実行できる空気じゃないよ」

白蓮はため息をつくが、まあこれはしょうがない。

民でも女性の反対意見が特に多い。

試験的な段階にもかかわらず、流石に臭いし排泄物だし余計受け入れられないんでしょうかねえ。

それにそれなりのものになるまで大体半年はかかるはず。更に失敗する可能性を加味すれば……だったら現状維持の方が十分かあ。

「ん〜まあいいでしょう。そこまで強要する気もないしあくまでやり方の一つして覚えていてください」

「分かった。それと千歯扱きもなかなか好評だ。これは我が軍の機密の一部と・・・」

「あ、それ売りに出して良いですよ〜」

「・・・は？」

惚けた顔で私を見る白蓮。いやあ、これはむしろ売った方が良いでしょうよ。

「肥料の素ならまだ不思議な粉として隠せますが千歯扱きは農民に普及させるつもりだし正直盗まれてもおかしくない。だったら盗まれる前に幽州の特産物の一つとして今のうちに儲けた方がマシです」

「ん〜そう言われればそうだな」

「手始めに近くの袁紹辺りに何個か恩を売るつもりで渡しましょう。あの人は生産するよりも買った方が楽だと思っでしょうからね、あ、顔良さんを通してくださいね？あの人なら価値が分かるはずですよ。あとは使者には弁を立つ者を。指示はこちらで出します」

「袁紹かあ・・・」

白蓮は嫌そうですけど私だって嫌です。でも豚もおだてりや木に登る、今のうちに布石を打たねば。

・・・うん、これぐらいである程度目を逸らせればいいのですよ。後は媚びへつらう手紙かぁ・・・めんどくさいなぁ。でもこれからのことを考えると必要なですよね。

「それで、次は何ですか？まさかこれだけなわけないでしょう」

「ああ、まだある。町の区画整理と清潔に勤めてるよ。その為に人員を採用するなどして働かない無法者などを上手く扱っている。治安も兵士の巡回経路の変更などでだいぶ良くなったよ」

疫病が起こるなんて嫌すぎます。清潔運動で働かない人達を半ば無理矢理雇って町の美化に努める。貧民街の人達を採用するのは骨が折れるでしょうねえ。だってあの人達心が折れているんですもの。毎日炊き出ししたりしているのに全く働こうとしない。働けるのに心が折れて働かない。

でも無理矢理ですが働かせるおかげで最近は貧民街もござっぱりしてますねえ。別に腕が無くとも目が見えずとも声が出せなくても「働ける」ですよ。

擬似的就職案内所と指導所立ち上げて良かったですね。

「後お前のいうとおり兵達の訓練で使う水に関してても試験的な運用で効果が出た。でもなんで水に塩を入れるだけで脱水症状だっけか？死者や倒れる数が減るんだろうな。これで訓練も効果的に出来るようになったよ、兵士達からの声も上々だ。ちょっとお金がかかるのが難点だが命には変えられない。士気の上昇にもあれは一役買っ

てる」

この時代は水だけですからねえ……人間の生きる糧である塩分が水だけでは失われる一方です。

白蓮の言う通り塩は割と高価ですからお金はかかっちゃいますがしよすがないでしょう。税収も安定してるので負担にはまだなりませんから。

あ、そう言えば思い出した。これを聞かないと。

「白蓮、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「ん？」

「この医療系の件なんですけど……切られたなどの負傷の際、傷口を水だけで処理するのは不味いですね」

「ん？どこがだ？」

白蓮が不思議そうにしていますが……これ、結構笑えませんか？問題ありすぎて笑えます。あれ？結果的に笑っている。

あれか……この時代では医学が発達してないから病原菌の意識とか無いのかもなあ。そもそもこんな時代に細菌に関しての知識がある方が異常なのか。

つまり消毒の意識がない。消毒をしなければ最悪はガス壊疽を起こして足を切る羽目になる。

ん？・・・病気の馬を兵糧攻め中の城に投石機で投げつけるとか結構楽しそうかもしれない。

お腹が空いたときに目の前にはお馬さん！うっめくと病気塗れの馬食べてぽっくり。さらには疫病が広がるとか胸熱です。

これは手の一つとして考えておきますかね。

・・・じゃなくて今の問題はこの衛生意識だ、これはやばい。夏場に食中毒や疫病で軍壊滅だって十分ありえる話なんですから。

「切り傷の場合では、初期の段階については蒸留させた度の強いお酒を振りかける、最悪の場合は熱した刃物を押しついたり切開して患部を切り取り、白灰・炭・塩を混ぜた物を練り込んでおいてください」

ガス壊疽。

さつき軽く触れたが、切り傷などの創からガス産生菌が組織へ侵入すると、壊死に陥った組織内で増殖が起こり、毒素をつくって全身に影響を及ぼします症状だ。この戦いの世においてなりやすい外傷である。

菌が進入すれば最速で数時間で症状が始める。傷の痛みが強くなり、最初は赤くはれ、壊死により創は褐色から黒色になって腐敗臭やドブ臭を発し始める。

進行すると多量の毒素や壊死物質が血中に流入することにより、貧血、血尿、黄疸などの症状が現れ、敗血症、多臓器不全症。こうなればもうこの時代では手の施しようがない。

本当はペニシリンなどの投与が必要なのだが……生憎、私はどっか

の医者みたいに江戸時代にタイムスリップして開発できるような知識はない。なので膿の切除、及び消毒と軽い抗菌薬を作成するのが精一杯だ。あとは薬草学で何とかするしかない。

「それと、料理の際の手洗いは徹底してください。使用後の食器類を洗う場合は、水に炭を細かく砕いたものを混ぜて洗うように。あと数日に一回程度は熱した熱湯につけてください」

「それでどんな結果が得られるんだ？」

「前者は傷の治療の効率が上がリ、後者は食中毒の発生を未然に抑えられるかもしれませんが、夏場には効果的でしょう」

「なるほど・・・それは凄い」

嬉しそうに笑っていた白蓮だったが急にその目がきついものに変わる。

「それで、これが最後だ」

「どござ」

どござやらこれが白蓮の本命らしい。  
今まで以上に真剣な目をしている。さて、白蓮は私に何を望むのですか？





「頼むから書類仕事もつとしてくれ!!」

「だが断る」

そう言うと白蓮は「っとなっとな・・・」と固まり動かなくなる。そしてふっふつと熱が上がってきたようで某タイガー道場のあの人みたいにガー!!と激昂する。なにこれ面白い。

「いや、私どんどんアイデア出してますよ。それこそ他の国が涎ものの知識。それだけで十分じゃないですか」

「確かにそれは言えている！！でもな！！うちは万年人材不足なんだよ！！さつきまでのやつ波才は進言しただけで実行は全部私任せじゃないか！？頑張りはするけどもう限界が近い！！頼む！！働いてくれ、もっと仕事してくれ！！」

「単経です。その名前次ぎ言ったらこの軍出て行きますよ」

よく見れば白蓮の髪に艶は無く枝毛が反乱を起こしている。目元には大きな隈があり、目は血走り頬は痩せこけている。出会った頃の彼女はまだ美人であったがこの有様ではどう見繕っても三十路の疲れたキャリアウーマンにしか見えない。恋人もいなくてこの先の未来に絶望を感じているような設定がありありと目に浮かぶ。

「そう言えば酷い顔してますね。休んでは？」

「だから休めないんだよ！！お前が言う中には特殊で上の人間しかつていうか軍の中核をなす人間で私かお前しか扱えないものが多いんだよ！！さらに通常の案件でお前が本来なら判を押ししたり決定すべき物も回ってきてるんだよ！！私に！！」

そう言っ頭をかきむしり拳を握りしめる白蓮。

「だから今回も私がここに来てるんだよ！！もう四日も寝ていないんだ！！お風呂にだってもう1週間も入っていないし！！」

「白蓮、女の子としてそれはいけませんよ。君主の姿がそんなんで



「いや・・・だって」

そう言つて次ぎに発せられた言葉に思わず白蓮は意識を失いかけた。

「ぶつちやけ漢文嫌いです」

これが波才が働かない最大の理由だった。

確かに彼は過去に前世で黄巾党として漢の大地にいたのだが字などまるでわかりなどしない。逆にこの世界で一般大衆までもが字が分かり食堂にメニュー表があること自体が異常なのだ。本来ならそんな民が字を読めるなどあり得ない。字が読めるのは学者ぐらいの教養がある者だけなのだから。

蜀の名将である王平でさえ十字ほどしか字が書けなかったといわれている。なのでこの世界に来たときにメニュー表が受け入れられていることに彼は一番驚いた。学校が国で作られてないのに識字率が高いなどそれこそ天の国ですらありえない。

一応彼とて現代の日本で学業に身を投じていた人間だ。漢文に触れる機会は決して少なくはない。

だがその難解な漢字だらけの文面と面倒くさい配置に日本語に慣れ親しんだ彼は酷くそれを嫌ったのだ。英語ならまだ異文化やグロ―バル化により必要であると理解出来るが何故面倒くさい漢文をやらなければいけないのだ。

そう考えるために彼の漢文の成績は大変悪く、彼の成績が三番手四番手に落ち着いたのはそう言う理由がある。

まして誰が女の子だらけの三国志の世界に行くと予想出来ただろうか。

想像して欲しい。

「俺、将来は女の子だらけの三国志の世界に行つて文官になつてやんよー!!」

もう親が泣き崩れるセリフだ。正直いたら間違いなくクラス中から敬遠されて、親には精神病院で現実と空想の区別を明確にするよう言われるだろう。

波才だつて日本では将来の夢は「公務員」「銀行員」と語っていた。だれが進路のアンケートに「三国志の世界でうんぬん」などと書くだろうか。

そういうこともあり波才は嫌いで苦手なまま一切漢文を受け付ける事は無かった。

そしてまさかの漢の大地に立つことになる。

ここだけの話、天和と地和と人和は「クソツタレ!!」何が悲しくて漢文を書かなくてはいけない!!言葉が日本語で通じるなら字も日本語でいいじゃないか!?!というかあの異常なほど苦労した英語が一切の役にたたないとかあの単語に費やした時間返しやがれ!!」という絶叫を出会つてから数日後に聞いて、冷や汗を流したという話がある。

そんな彼にとって漢文まみれの書類を見るなど余りにも苦痛で耐え

られないのだ。

これが曹操や孫策の所ならば無理矢理にでも詰め込まれたらうが、公孫贛軍ではそんなことあるはずもなく。結果こうして白蓮は目が血走っているのだ。

だが流石の彼にも仏の心はあるし自分の理不尽さを理解しているのか。しなくてはいけないと感じてはいるのだ。

事実君主である白蓮がこの状態はまずいものであり、兵の不安にも繋がる。それ以前に綺麗な女の子がこんな荒れ狂っている姿を見るのは内心辛いものがある。

年貢の納め時か〜と諦めかけた彼だったが悪魔のひらめきが到来する。

いるではないか、優秀な部下が。

「明禁くかもん!!」

そう天井に向かって声をかける。

すると「がこつ」と言う音がして天井の板が外れ、そこから一人の人間が執務室の中へと舞い降りた。

「旦那、ナンカヨウカ？」

「な、単経！？こいつは何者だ！？」

見知らぬ包帯で顔を覆った、いかにも不審者ですと自己主張が激しい人物に思わず声を上げる白蓮。

彼女は明埜。波才の懐刀である。

だがその姿は以前とは少し変わっていた。袖が長いことは変わりがないが、真っ黒な服で袖には龍が蛇と喰らい合うという模様。さらに前まで顔や頭部を隙無くぐるぐる巻きにしていた包帯は少し間隔が開けられ、髪が数束飛び出している。背には金の刺繍で大きな目が二つの×印で閉じられている姿が書かれている。

波才は暑そうだと内心思っているが明埜がどう思っているのかは不明である。

明埜は白蓮を見て煩わしそうに舌打ちし、波才へと向き直る。どうやら何か不満であるようだった。

「旦那、最高二旦那ハイケテイルコト八間違イ無イガ女ノ趣味八同意シカネルネ」

「・・・」

「ちょ単経！？なんで否定しない！？」

「彼女は馬元義、主に諜報を担当しておりこの軍でも影ながら活躍しています。お互い初対面でしたね」

「頼む！！頼むから否定してくれ単経！！悲しくなるから！！」

「ウルセエナア。ナンカ臭ウ女ヲイイ女扱イハ無理ダロ」

見えない矢が確かに白蓮の心臓にクリティカルヒット。クルクルと回って白蓮は椅子から転がり落ちる。

「確かに彼女は臭いですが臭くても普通でも今の私の主ですよ。貴方も信用してあげてください」

「確カニ臭クテ普通デモ旦那ノ主ナラシヨウガネエ。俺ノ名ハ馬元義、真名ハ明埜ダ」

更に二本の矢が倒れている白蓮に到来し、二度ほど体が大きく揺れる。  
なんとか彼女は立ち上がり再び椅子に座る。正直よく再び立ち上がったと思う。

「……どうせ私は普通に臭い女だよ。私は公孫贊、真名は白蓮。最近どうも間諜の量が少ないとは感じていたが」

「ソユコト。マ、ヨロシク頼ムゼ」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら机の上で手持ちの手裏剣を器用に回



す明埜。

白蓮は波才から間諜を消すためにある人材を動かしているとは聞いていたが、自身の多忙と波才が紹介を行わなかった事から彼女とは初対面。

・・・第一印象は当然ながらあれだったようだ。包帯でぐるぐるの人間に見た瞬間好印象を抱けと言う方が無理な話だが。

「・・・はあ、お前も癖があるけどその部下も結構癖があるなあ。でも何で今の今まで黙っていたんだ？別に毒を喰わば皿までって言うぐらいだし、私は何も言わなかったぞ？」

その質問には明埜も同意したのか波才へとその答えを仰ぐ。

二人の視線を波才は受け止めるとうんうんと腕を組んで頷いた。

「いえ、忘れてました」

まるで反省の色が無いその言葉に明埜は楽しそうに笑うが反対に白蓮は頬が引きつっている。

「それで、お願いがあるんですけど。頼めます？」

「ア？旦那ノ命令ナラナンデアロウトカマワネエ。何ダ？」

うって変わり真剣な顔になる自らの主に明埜もまた険呑な光を目に

宿す。

その空気に白蓮は思わず唾を飲み込む。

「美須々、琉生の二名を呼び寄せてください。あと同胞達も」

「ソレハ吉報ダ。特ニアノ脳筋ハ狂気乱舞スルダロウナ。ダガモウチヨット早く呼び寄せてモヨカッタンジャネエカ？」

「忘れていました」

「・・・初メテ旦那以外ノ誰カニ同情シタワ」

明埜が珍しくうんざりとした顔で苦笑いを浮かべる。  
だが彼女よりも強くこの言葉に反応したのは人材不足で頭を強く悩ませている白蓮だった。

「まさか、新しい人材が入るのか!？」

目を輝かせて身を乗り出す彼女に波才は苦笑しつつ頷く。  
ふうつと一息をつき、安心した様子で椅子に座る白蓮。

「そんなわけであとちょっと我慢してください」

「そつだ・・・って待て。お前もやるんだよな?お前も仕事やるよな?」

「ははっ何を言って・・・」

笑い飛ばそうとした波才であったが固まる。

白蓮は笑っていた。それはもう気持ちが良いぐらいに良い笑みを浮かべていたのだ。  
内心冷や汗をかく。ちらりと横にいる明埜に助けを求めようとするがその姿が無い。

「（に、逃げやがった。逃げやがりましたね）」

明らかに普通を脱した怒気を放つ白蓮に思わず椅子から立ち上がり一歩下がる。

今の白蓮は曹操の軍にも劣らない殺気を放っている。

本当に良い笑みで白蓮は波才に笑いかける。

元来男とは女には勝てないと決まっている。それは何故か。男よりも女の方が攻撃的な笑みを浮かべることが出来、怖いからだ。

波才はやりすぎた。いくら普通とはいえ目の前の女性は曹操や孫策と同じく『特別』側の人間であり男の天敵である女なのだから。

白蓮はすでに限界を迎えていた。・・・疲れ、限界を迎えていららしている人間を見たことがあるだろうか？それが今の彼女であった。ようするに。

「仕事、しよつな？」

「……はい」

もの凄く怖い。

（明埜 side）

「マアイクラナンデモ流石ニナ。男ト女ノ喧嘩ホド関ワリタクナイモノハナイナ」

犬も食わない喧嘩に首突っ込むのはあまりにもめんどつくさい。  
完璧に旦那の自業自得だ。

・・・美須々や琉生は自分とは違い相当悲惨な目に合つたろう。  
自分は間諜を束ねる者として子飼いと同じように暗躍する必要があり、文官や武官のまねごとをすることはないが、内政、及び軍備担当であった琉生や美須々はあの様子だと間違いなく相当な量の仕事をさせられることになる。

自分が主がこの軍に来てからしていることは主に内の毒を握りつぶし、この庭を汚す雑草の駆除。ついで他国にばらまいた種を成長させることだ。

だがどうやらそこに新しい項目が追加されるな。

そう思い自らの胸元に手をつ込み一枚の紙を取り出す。  
それは先ほどの自己紹介の際主から密かに受け取った物。

期待に胸を膨らませて開くと、そこにはこう書かれていた。

『宦官、及び董卓周辺の動きと諸国の動きを探ってください』

その先の見て彼女は口の端を持ち上げた。面白い、何で旦那はここまで面白い事を見付けられるんだか。  
思わず堪えていた笑いが漏れる。

これが起これば時代が変わり、世界が慌ただしくなる。それはなんて愉快で面白いんだか。

そこには短く一言だけ書かれていた。

『反董卓連合が生まれるか否かを』

「イイゼ、旦那。最高にクールツテヤツダナ、南蛮メグリナンカメ  
ジヤナイ刺激的ナ、俺好ミナ中身ダゼ。ケケ、気分ガ高揚シテキヤ  
ガツタ」

言うやいなや明埜は周辺に向けて短く何か言葉を発する。とたん、  
周りに潜む気配が大きくうねり、そして消えた。

今か今かと待ち続けた明埜の親愛なる者達は、己が主の名により動  
き出す。

見届けた明埜は顔をにやつかせる。南蛮で波才の調味料を探しや、  
間諜の駆除をしていた彼女にとって、この仕事は久しぶりのやりが  
いがある任務であった。

大きく背伸びをするとききと腕を鳴らす。

「サテ、俺モ動クカ。マズ八洛陽」

そして気が付けば明埜の姿は消えていた。誰もいなくなった城の廊  
下に、一陣の寒風が吹き渡る。

数週間後 波才side

「人は・・・虚しい」

筆を置いて波才は呟いた。

「働き、働いて気が付けば老いている。自分のしたいことと夢を切り捨てて必死に働いて、気が付けばもう夢と自由を好きに出来る体と心ではない。それはなんて虚しく悲しいのか」

悲しげに目を伏せる。視線を窓の外に向けると鳥達が自由に飛び回っている。

「人は知恵と技術を得て気が付けば自由を失っていたのかもしいないな。あの鳥達のように自由に羽ばたこうとしても人の社会はそれを許さない。果たしてこれが地上の支配者たる人間のあるべき姿なのか、その姿のために真の幸せを捨てたのではないのか。あの鳥達のように何も考えずに飛び回ることこそあるべき姿だったのではないのだろうか」

儂げに微笑む波才、ゆっくりと視線を動かした。

「そう思いませんか白蓮、琉生！！もう書類仕事は嫌です！！どれだけでも終わりやしねえ！！あの時旅は飽きたとのたまった自分をぶん殴りたいですよ！！」

「そんな戯れ言ほざいてる暇あったら手を動かさせ手を！！まだ山ほどあるんだ！！今日も徹夜になるぞ！！」

「・・・！！」



こんにちは。波才です。

今修羅場の真つ最中です。夏場のコミケの原稿を仕上げるばりの忙しいです。

いやあ、もしかしてこれってあれですか？デスマーチですかね。

あはは、死ねます。人間行くところまで逝くと無意味に笑いが溢れます。

デスマーチ。

ソフトウェア産業で長時間の残業や徹夜・休日出勤の常態化したプロジェクトメンバーに極端な負荷を強い、しかも通常の勤務状態では成功の可能性がとて低いプロジェクト、そしてこれに参加させられている状況を主に指す。

BYウイキ

今の私達ですね。成功確率が高い分なお諦められないし捨てられない。

プロジェクトが死に向かう過酷な状況でメンバーが行進する、という意味で「デスマーチ」と呼ばれる。メンバーは心身ともに極めて重い負担を強いられるため、急激な体調不良、離職、開発の破棄と

もとれる中途半端な状態での強引な納品、最悪の場合には過労死や自殺に至る危険性を孕んでいる。

BYウイキ

頭が痛いです。もう三日も寝ていません。自分の意識がどこか遠くにあるように感じます。

白蓮も琉生も目元に大きな隈が出来ており目が血走り、目玉が飛び出んばかりに書類と格闘しています。

私も酷い顔をしているのでしよう。

デスマーチは具体的には以下のいずれかに該当するものと定めている。

- 1 . 与えられた期間が、常識的な期間の半分以下である
- 2 . エンジニアが通常必要な人数の半分以下である
- 3 . 予算やその他のリソースが必要分に対して半分である
- 4 . 機能や性能などの要求が倍以上である

BYウイキ

幽州情報

? 与えられた期間は無制限だが考え無しに献策したために山のように多く、次々とそれぞれに関しての事柄が溢れ出てくる。

？文官が足りない、そもそも人材全般が足りない。実質今この三人がこの国を回している。

？予算は現在調達中。むしろリソースが多すぎて人材不足もあり処理できない。

？倍以上ですまされる話では無い

うん、間違いなくこれはデスマーチだ。

果てしなくデスマーチだ。

え？この作業白蓮一人でやってたの？

すごいがんばりやさんですね。今度暇があつたらぶん殴ります。

机にはちよつとしたビル群が出来上がりさながら都会のような有様である。更に妙な熱気が籠もっており、そこにいる面々も皆目が血走っている状態だ。

この様子をおかわりを持って入って来た兵達が、睨み付けられて逃げ帰るといふ事件が既に数回起こっており、兵士達の間ではここは『魔窟』と呼ばれ始めていた。

「ああ、美須々はまだ戻らないのか!？」

「美須々もうしばらくすれば帰還するかと!!そろそろ賊もでなくなる頃ですので本格的に此方に巻き込めます!!」

美須々は現在盗賊狩りで治安の上昇・民心UP・金銭補充の真つ最中であつた。同じく過労で死にかけており、これからの地獄おかわりを知つて彼女の髪は黒から真つ白に変わるだろう。

言葉を交わす間にも波才と白蓮は異常な速さで書類を片付けていく。だが、どれだけこなそうとも増えるばかりだ。時節此方に向かつてくる文官がおかわりを持ってくる姿を見て二人は顔を更に青くする。

「・・・!!」

「え？何ですか琉生・・・って美須々は字が読めない！？知りません！！そんなの今の私のように根性でどうにか出来ます！！」

「・・・!?!」

「ああもう！！大丈夫ですから手を動かしてください！！この書類の塔をバベらせる作業に徹するのです！！」

この日、波才は働くことの大変さを知ったとかさそうでないとか。

## 第二十話 家畜に神は居ない（後書き）

夏ですね、死にますね、助けてください。味の素です。

『<http://www.omoshiro-sindan.com/koihime/>』

の恋姫無双診断、作者が「あじのもと」でやってみたら華雄でした。なんかいろいろと申したいことがあります。あれか、猪ってか？ちなみにこれをこの小説の主人公である『はさい』では是非診断してみてくださいな。多分相性一位の人にみなさんツツコミが入るでしょう。少なくとも作者は吹いた。麦茶返せ。

めんどくさいと言う人は作者の活動報告に載せていきますので是非見てください。きっと誰もが突っ込むはず！！

……それと蚊は全滅すべきだ（おい

武将紹介のリクエストは今受けている分を消費し終えるまで打ち切ります。前回急にたくさん来たので作者の頭はハテナ妖精です。地道に書いてくべ〜。

今回の武将紹介は……モゲロ。

「ご主人様」

「ん？愛紗か。どないした」

ある晴れた日のことである。関羽に呼び止められた北郷はあくびをしながら振り向いた。

「いえ、関索を見ませんでしたか？」

「あゝ確か南蛮行ったとか言ってたな。あれだよ、多分フラグを回収しに行ったんだよ」

「ご自分の息子になんて言いぐさですか」

呆れながらため息をつく関羽。二人の間には三人の子供が出来ていた。性格が母親に似た清廉な長女の関平、一刀に似て非常にめんどくさがりやでありながら武の才を一番受け継いだ次女関興、そして

「いやだつてよ。武者修行に行つてくるとかいつて嫁さんをもらつてくるのあいつぐらいだぞ、多分」

「……良くも悪くも関索は一番ご主人様の血を引いておられますから」

「ぜつてえそれ褒めてねえよな。いや、流石の俺でも『私を倒したらお嫁さんになってあげる』なんてやつとフラグは立てたことない。第一俺は桃香とお前と鈴々の三人と結婚。あいつは新記録で四人目狙つてるぞ」

三男、関索。良くも悪くも北郷のあれな血をついだ男である。

「それはそうですが……」

「この前は盗賊退治に行つてくるとかであれだぞ、盗賊姉妹井ゲツトだぞ？いくら俺でもあれはないわ。あいつ俺とかの次元じゃねえ。リア充は死ぬべきだ」

「ご主人様が言えた義理ではない気がしますが……」

「それはそれ、これはこれ」

既に彼は受け継いだフラグ構築能力により三人の妻を得ていた。

「お父様！！関索を見かけませんでしたか！？」

「あ、お父様だ〜夫をみてなくいく？」

「あら、お父様。本日はお日柄も良く……早速ですが夫はどちらに？」

「噂をすれば……」

見れば誰もが目を引くほどの美人。しかも彼女達全てが関索の嫁ときた。

……なんとなく一刀はむかついたので。

「おお、なんかまたフラグ立てたらしい」

「……へえ」

「……ふうん」

「……ほう」

「ご主人様、いい加減な事を「父さん！！」……」

諫めようとした関羽、だがそこへ問題の声が聞こえて来る。振り向けば南蛮に出向いた関索がこちらに走ってくる。……片手に毛皮を被った猫耳の少女の手を繋ぎながら。一刀と関羽は頬が引き攣り、三人の嫁は気のせいだろうか。頭に角が見える。

「おお、早いお帰りだな。……で？その子は？」

「うん、ええと」

「花鬘……です。関索のお嫁さん」

「……な、なあ、確か花鬘ちゃんってさ」

「孟獲殿の娘……でしたよね」

「あれ、母さんと父さん知ってたんだ。うん、でもそんなの関係ない」「あるわボケ！！」「ぶほお！？」

関索は三人の嫁にぶっ飛ばされ、一刀と関羽は自らの息子のあれさ

に頭を痛めたという。……もげる。

関索、字は維之

演技でも史実でも全く記述が無く、その存在を近年まで疑われていた関羽の息子。

だが花関索伝という物語により一躍躍り出た超リア充である。モゲ口。

ここでは花関索伝の中身を紹介しようと思う。モゲ口。

劉備・関羽・張飛が青口桃源郷の子牙廊で義兄弟の契りを結ぶが、その時、関羽と張飛は後顧の憂いを断つために、互いに相手の家族を殺すことにした。

関羽の家にやってきた張飛は、命乞いをする息子の関平を殺すに忍びず、供としてつれていくことにし、また関羽の婦人であった胡金定も見逃してやった。この婦人が身ももっていたのが関索である。モゲ口。

彼がある事情から鮑家荘へと訪れたが、その入り口には、三娘が自分と戦って勝った者を夫とすると記してあった。関索は喜び勇んで決闘開始。そのままもげてしまえ。

「俺の娘は誰にもやら「娘さんをください!!!」ぐふあ!!!」

「父さん!?おのれ!!!妹は誰にもやら「娘さんをください!!!」ひでぶ!!!」

と愛ある男達をぶっ飛ばして権利を獲得。娘である鮑三娘はこれに怒り勝負を仕掛けたが。



「……僕の勝ちだ!!」  
「私の負け……ね（あ、でもこの人凄い綺麗。前婚約結んでた廉康とは比較にならないぐらいイケメンじゃん）」（マジで書かれていますモゲロ）

と生け捕られて結婚を承知。関索はイケメンだったようだ。死ね。  
この後、王桃・王悦という盗賊の頭目をしていた娘も側室として娶って一緒に戦っている。

男勝りの女性を見つけては対戦を申し込み、父譲りの武芸でねじ伏せ、力を見せ付けて自分のものにしてしまうという、もはやナンパの手口でこの二人も困ったのだ。

さらに他の話では南蛮王の娘である花鬘すらも「目と目が合う、瞬間」みたいな感じでストレートで側室に。こいつ魅惑の魔眼でも持ってたのか？

武勇ももう俺最強じゃね？並に酷い。曰く

- ・ 枯れ木を引き抜いて振り回し、賊を退散させることができた。
- ・ 曹操に招かれた宴会で武将を素手で絞め殺す、怒った曹操を逆に包囲してフルボッコ。

- ・ 姜維・張飛・劉備が勝てない武将に何故か不思議なことが起こりまくって勝利できた。

- ・ 陸遜や糜竺・糜芳や呂蒙を生け捕ったり殺害したり。無双すぎワロタ

などと軽い俺最強ものである。なんつうか凄すぎて逆にひいてしまっ。モゲロ。

逆に考えれば明の時代の墳墓から発見されたことから数百年、下手すれば千年以上前に書かれた「俺最強&ハーレム」ものである。つまり今の最強もの書いている私達とあんまり変わりがないのである。

古来の俺らが最強&ハーレムものを書いたんだ!!と考えるとまあこの関索というキャラも許せ……るわきゃねえええだろおおおお  
お!!!!

軽く作者の黒い部分が多かった気がする今回の武将紹介ですが、皆さんはどう思います? 作者は……もげれば、良いと思うよって思います。

第二十一話 其の嘆こそ私の糧也 (前書き)

皆、子供はあまり出来ないようですが、陽気に育てて下さい。  
あなたをきらいになったから死ぬのでは無いのです。

小説を書くのがいやになったからです。

みんないやしい欲張りばかり。

井伏さんは悪人です。

～太宰治の遺書より～

## 第二十一話 其の嘆こそ私の糧也

『私、この戦いが終わったら天和様達と平和に暮らすんです』

『あれ？靴のひもが切れちゃいました』

『英雄なんかと一緒にいられるか！！私は自分の世界に戻るぞ！！』

『はは、帰れば天和様と地和様と人和様に温かい現代料理を作って上げるんです。早く帰りたいですねえ』

『なあに、直ぐに戻りますよ』

『この戦いが終わったら、曹操と仲良くするのも一興かな……』

『別に、三国を統一してもかまわんのだろう？』

『公孫贄様がでるまでもないです、ここは私が……』

『この私の考えがあれば絶対に死なないですよ！！』

『つくそ！！弓が打てやしねえ……ほらっ！！』

『私の家族ですか？そうですねえ、妹と姉、そして型破りな両親がいてですね……』

『ん……何やら物音がしたような……ま、気のせいでしょう』

『子供？戦場に不似合いですね』

「大丈夫、必ず帰って来ますよ。私は不死身の波才ですから」

「ねえ、私達生き残れるでしょうか？」

「ふむ、白蓮。これが終わったら二人で飲みに行きませんか？」

「え？これ？……天和様達へのお土産ですよ。最近合っていないですからね。いつかきつと帰って手渡ししたいなあと／＼」

「体が軽い……こんな気持ち初めてです！！もう、何も怖くない！」

「っよし！！これぐらいでいいですかね……」死亡フラグ全集波才版

「……！！」（汗）

ズバンッ！！

波才の頭に特大のハリセンがマツハで飛来した。

当然波才は腰掛けていた椅子から転げ落ちるように吹き飛ばすと、盛大に部屋の壁にぶち当たって制止する。

見れば琉生が自分の上半身ほどのハリセンを構えて、肩で呼吸をしていた。……どこからだしたのだろうか？

「る、琉生。どうしたのですか？なんでそんな『それ以上いけない

「!?! 的な目で私を見るんですか?」

「……………!?!」

「ふむ……………」

「……………!?!」

「わけがわからないよ」

ズバゴツ!!

やれやれと首と手を振る波才目掛け、ハリセンは後頭部ではなく顔面にクリーンヒット。

机と椅子を吹き飛ばして横転し、波才は沈黙して動かなくなった。

……………どうでもいいことだが、彼はテンションが上がると周りのことが分からなくなる人種のようにだ。

「琉生、主が起き上がらないのですが。後何か法事に使う金属を鳴らしたようないい音が聞こえた気が……………」

「……………」(チャキ)

「気のせいですね。うん、気のせいです」

冷や汗を流しながら、美須々はぶんぶんと首を何度も縦に振る。だがそのうち、落ちていた例の書簡……………もとい『死亡フラグ全集波

才版』に気が付くと、彼女は素早くそれを手に取った。  
恐る恐る開いてみる。

「……上から七番目と九番目は私としても賛同したいのですが」

「……イヤ、ナンカコレ選ンドライケナイ気ガスルゾ。『カン』ダ  
ガナ」

嬉しそうに目を光らせる美須々に対し、横から覗き込んでいた明埜は呆れ顔で内容を読み取っている。

この場合どちらが正解かは分からないが、題名から察するに明埜が正しいのだろう。

歯ぎしりしながら、明埜は倒れ伏している自らの主目掛けて、手短に落ちていた本を投げつけた。

そして蛙が鳴くような音を聞き取ると、彼女は美須々の手から書簡を奪い取って突きつける。

「デ？俺ノ記憶ダト、旦那八脳ミソノ代ワリニ蟹ミソガ詰マツテイ  
ル姉妹ヘ向ケテ手紙書イテルハズナンダガ………ナニコレ？旦那  
八脳ミソノ代ワリニ麻婆デモ詰メタノカ？」

「明埜！！」

すると、ぱっと起きた波才が小走りに明埜へと近づき、その肩を両手で掴む。

その目は真剣そのものであった。故に明埜は眉をしかめて考える。もしやコレはただのしょうもない書簡ではなく、暗号や隠された何かを示す書簡なのか？  
そう思い明埜は若干考えを改め

「それは私のデスノーげふんげふん、もといやったらいけない死亡フラグ集です！！これがあれば例えどんな絶望的な状況であろうと主人公である私は」

「琉生、ヤレ」

「……」「(ビリビリビリビリ)」

「NOoooooooooooooooooooooooooooo!?!」

何故か琉生は執拗に細かくそれをちぎりまくると、側にあった蠟燭に火を付けて完全にそれを消しにかかった。

途中波才はそんな彼女を止めるべく涙目で駆け出そうとしたが、美須々と明埜に腕を掴まれる。

残念ながら明埜はともかく美須々に勝てる腕力は無かった波才は、燃え逝く自分の死亡フラグ集を呆然と見送ることになった。

「ひ、酷い。貴方達に情はないのですか!?!」

「情は無いです。忠誠心はあります」

「情ツテ食エンノカ?」



「……」（じと目）

「（駄目だこいつら。人として終わってやがる）っくー！ならば何故こんな所に来たのです！？皆さんだつて仕事があるでしょう！？」

「そうですね、主が私達に重大な用事があるからって押しつけた仕事山ほどありましたよ。ええ、山ほど」

「アア、何故力疲レキツテ帰宅直後ノ俺マデコイツラニ巻キ添エニサレタワ。……ッデ？何？旦那ノ重要ナ用事ツテソレ？ア？ナメテソノ？……ツウカサ、手紙ハ？」

「……」

「いや、漢文で手紙書くのがめんどくさくなったので。だったら慣れるためにもなんか別のもの書こうかなあとおも」

瞬間、波才の服の袖に大きな切り傷が刻まれた。

見れば、琉生が異常なほど冷たい目で剣を抜いていた。

見れば、美須々の頭に怒りの四つ角がでまくってバキっぽくなっていた。

見れば、明埜が袖から手裏剣を出してそれを『封』と書かれた壺の液体につけていた。

慣れるためにあれを何故書くのかという疑問よりも、あれのために私達は地獄を見たのかと彼らは鬼気を発散する。

流石に身の危険を感じざるをえなくなつた波才は慌てて胸から紙を取り出す。

そして汗をかきながらもぎこちない笑顔を作る。

「う、嘘ですよほら！！出来てます、出来てますから。遊び心がちよつと出ただけで」

「だったら直ぐに仕事やれやああああ！！」

「旦那、反抗期ツテ親へノ愛情ノ裏返シナンダトヨ。ツウワケデ死ネ」

「……………」(ツチャキ)

「え、みなさん？落ちついてまずは話し合いを…………アーーーーー！！！！」

今日も幽州の空は青かった。  
そして。

「天和様へ。」

波才です、いろいろあって公孫贇軍で働くことになりました。

あ、大丈夫です。もちろん客将なので何かあればすぐにでも駆け付ける所存です。

最初は働きたくなゲフンゲフン、戦いたくは無かったのですが、天和様が無事過ごせるようにと平和な時代を築くために少し公孫贇様のお手伝いをするにしました。

決して見ていていじりがいがゲフンゲフン、嫌がらせをゲフンゲフ

ン、とにかく私は望んでここにいます。

私は少し暴れすぎて知られているので多少落ち着くまではここに  
いるつもりです。

ご心配をおかけしていると思いますが、私を信じてください。  
きつとあなた方の元へと戻ってまたみなさんのお手伝いをさせて頂  
きますから。

この手紙と一緒に送らせていただいたお菓子は私の手作りです。紅  
茶と大変合うのでお召し上がりください。  
それでは、また会いましょう」

「みんな!!波才さんからの手紙が来たよ!!」

「え、本当なの天和姉さん!?どれど……なんだか墨で所々汚れて  
いるわね。もう、もっとしっかり書きなさいよね!!」

「本当だあゝ波才さんたらうっかりしすぎだよ!!」

「……天和姉さん、地和姉さん、これ多分血だと思っ」

「え?」

後にこの手紙によって一波乱あったのはまた別の話である。

「なあ、なんでお前らそんなに衣服が乱れてるんだ？あと、なんで波才は頭と腕に包帯巻いてるんだ？」

「「「……………」」」

「……………美須々・明埜・琉生、何で三人とも目を逸らす？」

「あれですよ、白蓮。若さ故の過ちというやつです」

「……………？まあお前が言うなら良いんだけどさ。それで？重大な事って何だ？」

軍議室、その名の通り軍の方針を定め、行動するための議論を交わす場所。

急な呼び出しで白蓮が来てみれば……………語るに及ばない。本来ならば無表情な兵達もこの時ばかりは冷や汗を流している。

最初は呆れ顔で尋ねた白蓮だったが、波才が周りを覗く素振りを見せると眼を細めた。

波才の意図を読み取った彼女は兵達に向き直る。

「……………お前達、ご苦労だった。後は下がっていい」

「「「「っは！」」」」

よく訓練されているのだろう。

白蓮の一声によって彼らは背筋を伸ばして応え、一糸乱れぬ動きで続々と扉から出て行く。

私は彼らを驚きを持って見送り、白蓮は誇らしげに微笑む。

「ほえ、凄いもんですね。よく訓練されている」

「だろ？美須々と琉生のおかげだ。……これで大丈夫か？なんか言いたいことがあるんだろ？」

「ええ、ちよつとした事があつたようで。それでは明埜、お願いします」

先の兵の動きを見るに、公孫釐軍の兵達は着実に精強な兵へと変貌している。

軍に問題は無い、ならば後必要なのは。

「了解、ソレジヤ報告スルゼ」

白蓮自体の覚悟ぐらいか。

明埜の一言で空気が変わる。

美須々は誇らしげな顔を武人として固める。琉生も目を細めて明埜に向き直り、一言一句聞き逃さないという構えだ。

明埜の顔も余裕があまり見えない。……こりゃ当たり前引いちゃったかな。

「……………」

ただ一人を除いてみんな真剣な顔をしている……一人を除いて。

白蓮……エアープレイカーとか名乗ったらどうですか？残念キャラになっていきますよ？貴方の普通キャラという唯一の個性が失われ始めますよ？

白蓮を白い目で見ていた明埜だったが私へ向き直る。

さあて、楽しい楽しい話し合いの始まりだ。楽しすぎて涙が出ないことを祈りたいね、いやほんとに。

「後数ヶ月後、反董卓連合が結成サレルダロウ」

「なっ!?!」

「……………」

身を乗り出す白蓮。その顔は驚きに満ち溢れていて、見ている分には大変気持ちが良い。

どうやら彼女にとって、この件は全くの予想外だったようだ。

黄巾の乱が終わったのだから、平和な世が来るとでも思ったのだから。まあそれで平和が来るんだったら人間の世界じゃないわな。

人がいる限り争いなんざ無くなんないさ。

一方、私を含めて美須々・琉生の三人はついに来たかっという感じ。美須々は目を輝かせている、やはり武人としての血が騒ぐのか？同じ武人である琉生はのんびりとお茶を飲んでいるが……まあ人それぞれかね。

私は内心ひやひやです。うひゃ〜イヤだなあ。

あのチート連中とやりあうのですか。まあ徐栄や高順の名を聞かない分ましかな

？もし特別側に彼らの名があつたなら……ああ、想像もしたくない。あれ？なんか川が見えますね。向こう岸に孫策に似たグラマスな女性と、なんか酒飲んで騒いでいる盗賊っぽい人達があります。

うわ〜……まだそっちに逝きたくはないんですけど。

「元八涼州ノ田舎者。ソレガ今デ八漢ノ中心人物ダ。帝モ董卓ヲ支持シテイルシ、サゾヤオ都ノ偉イサン方八面白クナイダロウナア」

そう言つて愉快そうに笑う。

この子は本当に楽しんでるのが見て取れる。これから起こる沢山の争いがたまらなく面白いのだろう。

白蓮はそんな明埜に引き気味だ。うん、言っちゃ悪いが私だってひく。

……にしても董卓の奴。もうちょっと上手くやれなかったのかね。宦官程度飴をちらつかせれば、立場的にも良い具合に立ち回れただ

るうに。

そう思い余裕ぶっていたのですが、次の一言には私も思わず惚けてしまった。

「アイツラ、ツイニ袁紹ヲ言イクルメテ董卓ノ座ヲ奪オウト思ッタミタイダ」

……はい？

見れば私だけでなく、全員が同じように今の言葉を自分の脳内で反復し、再確認している。

……どうやら結論が出たようです。出たようなんですけど……みなさんもの凄い苦い顔をしてらっしゃる。そりゃねえ、理解したくもなかったらうに。

「……なあ明禁、波才。私はどうも都の奴らが馬鹿としか思えないんだが」

白蓮さん呆れています。

美須々も私も呆れています。

琉生は私が作ったクッキー食べています。

いや……だつていくら名門とはいえ、袁紹を唆すとか正気ですか？例え董卓を倒したとしても、その御旗が袁紹では余りにもたよりがありません。



それとも下手におだてて傀儡にでもしようか？

それは甘いですよ、だって顔良さんがいますから。

あの頭が年中春の人達を支え続けた人間をなめてはいけません。きつと彼女が傀儡などにはさせないでしょう。

仮に傀儡になったとしても、袁紹では勝手に国ごと巻き込んで自爆しかねません。

何が悲しくて地熱発電でがんばれるのに原発を国のご真ん中で作り始めるんですか？

……取り合えず、一言言わせてください。

うわぁなんかすごいことになっちゃったぞ。

「マ、イクラ袁紹デモ一人ジャ勝テナイコトグライ理解シテイル、ダカラ巨大ナ連合ヲ作ルダロウナ。タブン口上ハ

『今洛陽の民は悪名高き董卓の暴政により苦しめられていますわ。帝も同様、帝を救い！民を救うのですわ！！おーっほっほっほ！！』

ミタイナ感ジカネ。……ナンカ疲レタ」

「はぁ………ため息が出てきますね。所で質問を一つ」

「何ダ？美須々」

「本当に董卓は暴政を強いているのですか？」

真剣な表情で美須々は明埜に問う。

あ、私も気になる。ここの董卓はどんな人間なんでしょう？

やっぱり豚みたいに肥えていて、ワンピースで例えるなら初期版アルビダの姉御みたいな感じなんでしょう？

……あ、やべえ。もの凄い吐き気が。

せめてドラゴンシスターズの董卓を……あのスレンダーな姉御肌ならば。

「ゼーンゼン。洛陽八平和ダッタシ民八善政ニ喜ンデルゼ」

「はぁ……本当にため息が尽きませんね」

「……明埜、質問があります」

「ん？何ダヨ旦那？」

「董卓ってあれです。豚でしたか？」

「……少ナクトモ人間ダッタゾ？」

いや、そうなんですけどそうじゃなくて。

若干頬が引きつり気味の明埜に、更に詳細な董卓像を聞き出そうとする。

だが。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！……てことは何の罪も無い董卓を打倒するために私らは踊らされるって言うのか！？」

「待ってください白蓮！！それよりも詳細な董卓像を聞くべきなので」

「……主、ちょっと黙っていてください」

「イエス、ママ」

思わず敬礼してしまった。

最近なんだろう、主である威厳とかそこら辺が無くなってると思う。まあそんな物はとうの昔に廃品回収に出しましたけどね。威厳とか誇りとかは強い人間が持てばいい、弱者はそんなもの背負って生きられなどしない。

……そして誇りを背負った白蓮にはどうやらこの件は耐えられないらしい。

彼女は衝動的に席を立って美須々を問い詰めていた。その目は怒りに染まっている。

白蓮は正義感が強く優しいですからね……この話は納得できないのでしょうか。まあ、納得できないなら出来ないでいいですけども。

「そう言うことになりますね。白蓮さん、彼女は奪われる事になった。時代の生贄に選ばれた。たったそれだけなんですよ」

「そんな……そんな巫山戯たことが有って良いのか！？」

拳を握りしめて机を叩く。

だが、義憤に燃える彼女には冷めた自身を見つめる八つの目に気が付かないようだ。

私は静かに目を瞑ると、ため息をついて口を開く。

あゝあ、董卓はつまんないや。こっちに来て本当に良かった。

「董卓さんも私達と同じで時代への糧として選ばれてしまった。美須々の言うようにそれだけのこと。たったそれだけ。……なんともつまらない話だ。まったく、神様はなんだってこんなどうしようもない結末を望むんだか」

私がそう言うところの場にいる全員が目が集まった。

「まったく、悲劇にも喜劇にもなりやしない」

ああ、つまんないつたらマジつまらん。

奇跡も因果もあつたけれど、結局ここも波才として生きた自分としての世界と代わりはないんだ。日本とも代わりがないんじゃないかな？

その代表格たる董卓は……つまらないの一言につきちゃっよね。

だからさあ白蓮。

……私をさあ、親の敵を見るような目で見ないでくださいよ。

というか、なんで私がそんな目向けられなくちゃならないんですか？

「波才……お前は何も思わないのか!？」

いや、何も思わないって……ねえ。なんで逆に貴方はそこまで想えるんですかね？

というか白蓮、もしかして貴方。

「白蓮は反董卓連合には参加なさらないので？董卓ブツ殺さないんですか？」

「当たり前だ!!お前は何を言っているのか分かっていないのか!？」

どっちが分かってないんだか……。

白蓮、貴方何言ってるのか分かっていないのかい？はあ、なんて夢物語何だか。現実と空想の区別がついていないのかな……？

まあ白蓮は本当に、実にお優しいね。チョコレートを口一杯に詰められたような気分だよ。

うん、つまり何が言いたいのかってね。

胸くそが悪い。

この人はそれだけだ。感情だけで今話している。

……やっぱりこの人は英雄の器ではない。

世の中は正しい事だけでは回らない。正しい事が最も必要とされるのに、最もバカにされるのが正しい事なんてね。もうこの世界は矛盾で出来ていると言っても過言じゃないんじゃないかな？

それが理解出来ているか、理解出来ていないか、それが大人と子供の境目だと思う。

『どこまでも可能性が広がっている』そんな夢物語を子供は抱くけれど、彼女はまだそう思っているのかな？

私は深くため息を付いて頭を手でぐちゃぐちゃにかき回す。

白蓮、キミは道化ではいけないんだよ？道化でいても良いけれど、芯から道化に身を委ねるのは見ていて辛い。

正しい事は悪いことではない。

正しい事は正しいのだから。

でもね、正しい事を出来る時と、出来ない時がある。今はその時だ。いかんせんこの世界の人間は良くも悪くも人がよすぎる。

私を睨み付ける白蓮。ああ、早く目え覚ましてくださいな。

「では董卓さんの元について曹操、劉備、孫策、袁紹、袁術と戦うと？おお、愉快愉快」

その言葉に白蓮さんが止まりました。

そして焦ったように口を開く。……おいおい、マジで道化になっているのですか。

笑えないですよ、おい。

「な、なんでそんなことに「なるんですよ。まさか傍観者としてこの件が済むと？何とも愉快な頭をお持ちのようで。頭を一回冷やしなさいな、白蓮」……」

済むわけ無いんですよ。

愛と勇気と希望と正義？

それ、どこのアンパンマンだつつうに。

この世界は甘くはない、甘いのは英雄に対してだけ。ただの特別な人間に温情を与えるなんてほどお人好しじゃないんです。

この世界は三つの花があったとすれば、その全てに等しい水を与えることはない。一つの花にだけ水を与え続け、二つの花を枯らすのがこの世界なんだから。

「ハッキリいいいます。これは先の黄巾の乱のように力在る者が飛翔する良い機会です。これに乗り遅れること、それはすなわち自国が滅びます。このいくら董卓さんに罪は無かるうと死人に口なし、勝つて殺してしまえば私達はどつとでも言えるのですよ」

あまりにも厳しく、非道な言葉に啞然とする白蓮。

一方、私の配下である三人は当たり前前としてそれを受け止めている。

……つてこの三人と比較することはおかしいかあ。

どつしようつ結局、私が決めた事に彼女たちは従うでしようつからねえ。

「それで民の名声を得て勝者はさらなる高みへと昇ります。おそろくこの連合の後はそれぞれの者達が争う乱世へと突入する。その際に有能な人間や、名声はいくらあつても困りません。ですからこの反董卓連合には何らかの形で関わらないといけないんですよ。もしそうしなかつたら、とてもじゃありませんが私達生き残ることはできませんよ?」

「……そんなの解らないじゃないか」

「解りますよ」

ずばつと言わなければ、この人は納得できないだろうなあ。例えそれが辛いことであつたとしても言うしかないのです。



貴方は私の主君なんですよ？臣下がはつきり言わなければ何を言え  
ってんですか。

「これから乱世で戦う者の実力を見極める事が出来ることと、もし  
かしたら乱世になるさい同盟を組むべき相手を見つけれられるかも知  
れません。それは乱世においてかけがえのない財産になります。そ  
れにこの軍には将がまるでいないのを忘れていませんか？私達は客  
将ですよ？私は反董卓に入るべきだと思いますね。崩れ行く敵軍か  
らは将を得ることはできませんが、連合という形態からは得にくいで  
すよ。それに曹操や貴方のお友達の劉備と戦うのは我が軍にとって  
もきついです。というか死ぬ」

どう考えても負ける。

そもそもこの幽州から洛陽を支援するなど、距離的にも時期的にも  
あまりにも馬鹿げた考えだ。

仮にやるとしても一体どれほどの優秀な人材がいることか……。私  
は凡人ですよ？

白蓮がまるで塩をかけられたナメクジのように元気がなくなってい  
く。この世界では塩は割と貴重品なのでナメクジにかけること自体  
が間違っているのだが。

彼女は決して馬鹿ではありません。

おそらく私が言っていることを理解しているでしょう。……でもそ  
れを認めたくはないんだろうなあ。

別にいいんですよ認めなくて。認めるんじゃない無くて割り切る事が必  
要なんだから。

「まあ最後に決めるのは貴方です。私はその答えに何も言いませんよ」

さあつて。言うこと言ったら疲れたから昼寝でもしようかなあ。そう思って私は席を立つと、話はこれで終わりとはかりに背を向けて扉へと歩く。あく咽が痛い。少し熱を入れすぎたかな。悪い癖だわ。

……ああ、そうだ。

もう一つ言っておかなければ。

私が向き直ると、白蓮は肩を僅かに揺らして覗くように見る。

「でもね、貴方がもし董卓に味方する場合は出て行きます。静観するというのが手ですが、滅びる国の民は何を思うのでしょうかね」

その瞬間、なんと形容しがたい表情に白蓮は変わった。

この顔。見ているだけで自分が気落ちしてきますよ。

「それでは、そろそろ仕事に戻ります」

そう言って私は振り返らずに部屋を後にする。

あんな顔見たんじゃ昼寝する気も無くなってくる。少しばかり残っている仕事を終わらせよう。

廊下を歩いていると、時節文官が私に向かって頭を下げてくる。彼らに軽く礼をとりながら私は部屋に向けて歩を進めた。

廊下に降りそそぐ日差し、空を飛ぶ鳥の声、青々と輝く木々。どれもこれもが煩わしく感じる。

「生きていると、悲しい。生きていることは、悲しくない……か。自分が自分で無ければぶっ殺している」

こぼれるように出た言葉は自分でも理解が出来なかった。一体なんて意味で言ったのか、そもそも意味が有るのか無いのか。

……ま、いつか。柄でもないことを考えるよりは、何も考えない馬鹿の方が救われる。

「悩め、笑え、楽しめ。それでこそこの世は謳歌出来る」

立ち止まり、空を見ればどこまでも蒼き空。

ああ、無情だ。

空には蒼天が輝いているか。  
黄天は未だ空に昇ったことが無いというのに。

第二十一話 其の嘆こそ私の糧也 (後書き)

夏ばてで書きだめを消化し続ける日々………昇華し続ける日々だ  
つたらどんなに有意義だったか。まったく新しい物が書けません。  
死ぬ。

そう言えば実家帰った日のこと。

「母さんや、飯は？」

「お茶漬けの素あるよ〜あと鮭ほぐし」

「お、いいねえ。(準備ステンバイ)………つよし!!後はお湯を沸かしてお茶を」

「何言ってるの?これ入れればいいじゃない」

(冷蔵庫からよく冷えた十六茶をじよぼじよぼ投入)

「な、何するだー!?!?!」

「え?冷えておいしいよ?」

………うん、ご飯のほかほか感とお茶の冷たさが合わさってなんて言うか。その、取り合えずみなさんも作者の気分を味わってはいかがでしょうか?

今回の武将紹介は………なあとこれ?

「「「ゴツトヴェイドー!」」」

「「「違つー!ゴツトヴェイドーよ!」」」もう一回!」

「「「ゴツトヴェイドー!」」」

「「「違つわあ!」」」ゴツトヴェイドーよ!」もう一度!」

漢中の城にて行われている訓練……なのだろうか。  
訓練生と思わしき男女が額に汗を浮かべながらポーズを決めている。

「甘い！！甘いわぁ！！蜜の夜の新婚さん並に甘い！！」

「教祖様！！私独身なんで分かりません！！」

「俺もです！！いい人が見つかりません！！」

「うわー教祖様！！俺だ！！結婚してくれ！！」

「まだ若いから積極的にアプローチをかけなさい！！若さで攻めるのよ！！そして最後の奴は千回腕立て伏せ！！もっと男らしくなったら考えてあげるわ！！」

「……はい！！分かりました！！」

その彼らの前で指導する女性。

彼女こそかの名高い五斗米道 「違っわぁ！！ゴツトヴェイドーよ！！」……ナレーションに入ってこないください。彼女こそが教祖である張魯であった。

無事指導を終えたのか、腕立てする一人を残して解散する。

「教祖様……何も貴方様が直々にやることは」

「あるのよ。多くの人を救うためには多くの力ある者が必要なの。

私が動くことで将来多くの人を救われるのなら……この程度どうと  
いうことはないわ」

「……おお……」

思わず彼女の周りにいたお付きの者達が感激して涙を流す。

温かい雰囲気にも包まれるが、そこへ何やら騒ぎが聞こえて来る。

「お願いします！！この子を、この子を助けてください！！張魯様  
にお目通りを！！」

「ええい、張魯様は忙しいのだ！！多くの者があの方を待っている



「こうして俺はあの方に救われてな。この話を何度も聞かされながら大きくなり、やがて俺自身もゴットヴェイダーと共に苦しむ人々を救おうと夢を抱いたんだ。あの方は自身の領土の貧しい人々にもお米を分け与えてな、私達の中であの方はまさに神様だった」  
「ふ、ふーん。そうなのか」

誇らしげに笑う華陀とは反対に心なしか北郷は顔が引き攣っているように見える。

「……なあ、それってさ。黄金に輝くライオンから力もらったってその張魯さん言ってなかった？」

「おお、何故その秘密を知っている？身近な人間でさえあまりあの方はその話をしないというのに」

「（あ、やべ。俺どんな顔したらいいんだ？取り合えず、勇者王乙とか言えいいのか？）」

「ちなみにあの方は先の話の腕立てをしていた男と結婚してな……」  
「それ伏線だったのかよ！？」

張魯、字は公祺。

必殺技はゴットファイ……いえ、何でもないです。

祖父は道教教団の教主（五斗米道）の創始者であり、道術で人々を惑わし、道術を学ぼうとする者から五斗の米を受け取ったことから「米賊」とも呼ばれた。この五斗が名前の由来なのだろう。その死後は父の張衡が継いだ。張魯は父の張衡が亡くなると、その後を継いだ。しかし張衡死後の巴蜀では、張脩の鬼道教団が活発になっ

ていった。



張魯の母は巫術に長けた美貌の持ち主で、益州での独立の野心を持つ益州牧の劉焉の家に出入りし、盛んに取り入った。恐らく母がいなければゴットヴェイダーは生まれなかつただろう。この母のおかげで彼は劉焉に信用されて張脩を殺害する命をうけ、教団を一つにまとめ上げた。

蜀で太守が劉焉から劉璋に代わると、独立したためにこの母親を親族共々殺害された。これにより劉璋との確執が生まれる。このうち彼は街道を敷くなど公共事業に力を注いだ。このため民衆の支持を受けた五斗米道は繁栄し、漢中は一大勢力となった。この他にも流民に対し無償で食料を提供する食堂を設けたり、悪事を行ったものは罪人とせず3度まで許し、4度目になると罪人と評して道路工事等の軽い労働を課すなど、張魯は独特の支配方法で信者を増加させていった

張魯は曹操に攻められた際に、弟が出陣するが戦死（曹操の軍を何度か退けた事から彼の国がどれほどの精強「富んでいたのか」がここで分かる）。配下の進言を取り入れて「国家のものだから」と財宝を焼き払わずに蔵に封をして手をつけずに置いたために曹操を感じさせ、降伏後も一定の地位と五斗米道の存続を許される。これにより現在も民間宗教として五斗米道は信仰され続けている。すげえ。

別名お米の人である。日本が米食なのも彼の影響のおかげである（嘘）

みんな、ご飯を食べるとき一度でいいからこの人を思い出して欲しい。

……特に意味はない（おい



第二十二話 英雄よりはやーい(前書き)

人間は自己の運命を創造するのであって、これを迎えるものではない。

〜ヴィルマン〜

## 第二十二話 英雄よりはやーい

私は主を信じている。

あの方の道は私の道。

あの方が死ぬときは私が死ぬとき。

あの方が戦う時は私が戦う時だ。

その思いは変わらない。

あの日出会い誓ったその時から、この美須々という人間はあの方の下で死ぬと決まっていたのだから。

その事に後悔も未練もない。そんなものは必要が無いのだから。ただ私はあの方の後ろに続けばいい、迷いなど無く、躊躇うことなく、ただあの方の道を進めばいい。

それが私、武人として生き、武人として逝く我が天命。

……だが今回は解らない。

一体主は何を思ったのか？何を思ってあのような突き放す言葉を白蓮さんにかけてのだろうか？

白蓮さんは主が出て行った後も椅子から動くことなく、口を一文字に結んで膝を手で掴み震えていた。

その顔は俯いていてよくわからなかったが、あの様子ではしばらく

は仕事が出来る状態ではない。彼女とて馬鹿ではないのだ。あのようない方をされれば思うような所は多く苦悩するのは分かりきっている。

……そして最後の言葉。

私も主が出ていくのならこの城から、白蓮さんから離れる。

私は主の配下であって白蓮さんの部下ではない。白蓮さんの命のために自分の生涯を捧げ、この身を猛火の中に投じることなど考える事すらしていない。

私は主の下で死ぬ。その主の道が白蓮さんの道を辿るのであって、白蓮だからこそ辿るというわけではないのだ。

それは明禁、琉生も同じはず。

だがあそこまで言われて彼女は大丈夫なのだろうか？立ち直れるのだろうか。

主は優しい、だがそれは天和様達に限ったこと。他の他者に対して、主は慈悲はあれど哀れむ、悲しむなどしない。

それは私も同様のこと。もちろん私達は他者側の人間だ。

私と天和様達、主は間違いなく天和様達を選ぶ。あの方は両方を助

けられる道を探すなどというお方ではないのだ。  
切り捨てる存在は切り捨てる。他の百を殺して望む一を救う。

それが波才という存在。

実際それで構わないと私は思っている、その道を私自身が選択したのだから。

私を選ばれなかったことではなく主が天和様達を助ける道を選んだことが重要なのだ。その主が選ぶ道こそが私の道、なれば選ばれぬ私はそれを笑いながら眺めて死んでいく。

主が自分の進みたい道を進めたことに喜びを感じて。

それを白蓮さんは分かってはいない。

あの人は主がただ優しいと勘違いしている。

そんな人間ではない。あの時初めて出会ったときの印象は実を言えば私の中で変わっていない。自分の利益と楽しさだけを追い求めて世界の理など軽くその手で引き裂く。他人の幸福も踏みにじらない程度に踏みにじる。それが波才という人間、私の主。

他者を幸せなどあの人にとってなんの感慨も抱かない。

……だが私はここで考える。

それは当たり前前のことではないのかと。

考えてほしい。

他者の幸せを望む人間は、その幸せが自分の存在と背反する時、はたして祝福出来るのか？

自分が欲しいものを、追い求めていた物が他者の手に渡ったときはたして諦められるのか？

己の幸せを切り捨てて他者の幸せをとれるのか？

普通の人間なら誰しも思う者ではないのだろうか。許せないと。

主はそれをおおっぴらにしているだけなのかもしれない。

人間は誰しも心の奥底ではそう思いながらも表に出しなどしない。

だが、主はそれを出している。

いや、出し過ぎているのだ。

だからこそ人間臭い。誰よりも人間臭くて、誰よりも臆病で、誰よりも……。

いや、だからこそあの人は人間ではないのかもしれない。

人ならあんな顔で笑えない。だが人ではないのに人らしいのが主なのだ。あの人は人以上に人らしい、多くの地獄を生きて求めて死んで。

熱を持たない人。どこまでも冷たく燃え上がる炎。それが波才という人間。波才という化け物。

白蓮さんはそこに初めて触れたのだろう。その闇に、矛盾に、異常に。

ああ、そうだ。私が何であの方を毛嫌いしたのか今理解出来た。

イヤなのだ、どうしようもなく自分を見ているようでイヤなのだ。

誰しもが欲望に忠実に生きたいと思っているが、それは叶わない。

何故なら人の生きる中でそれは許されないのだ。人が文明を創る上でそれは許されない、誰もが大平の幸せを得る上でそれは許されないのだ。

そしていつしか人はその人間としての欲を、本能を無意識に己の奥底に閉じ込めるようになった。

あつてはいけないと、自らがあらんとする存在を否定してひたすら奥に、自分としての根源に隠すようになった。

そして、それを畏怖するようになったのだ。

だからこそ波才は恐れられる。

あつてはいけないものを自分として表に出しているから。認められないものを認めて生きているから。

だからこそ波才は人を惹き付ける。

真に人間らしく生きているから。

人間の人間たる存在を肯定しているから。

それはなんて……素晴らしいのでしょうか。

だが白蓮さんは……決して強くはない。それを見て耐えられるほど強くはない。

普通、そう。普通なのだ。

悪いが普通ではあの人の闇には耐えられない。よほど強い人間、英雄と呼ばれる者達ですらそれに耐え扱えるのかすらも分からないというのに。真の主と関われるのは私達のようにどこか壊れている、もしくは曹操や孫策、劉備などの英雄達。そうでなければあれに耐えられなどしない。正視できない。

あの会話が後々の悔恨にならぬだろうか？



思わず歯を噛み締める。

私は主が無事なら白蓮さんがどうなるかと構わない。確かにあの人はいい人だ、私のような得体の知れない人間を信用してこのように重用してくれる。主を受け入れてくれている。友達になれといわれたら喜んで自ら私は進み出る。

だが私の覚悟は親、子供、親友であろうと主が殺せと言われたら殺せるぐらいは出来ている。

あの方は私の人生だからだ。

この国を出るなど主の言葉であれば迷いすら感じないであろう。

だが、あのせいで白蓮さんが主を、この国を害する選択をすることもありえるのだ。人間という生き物は弱い。自分の思い通りにならなければ内心良く思う者など一人もいない。白蓮さんは仮にも幽州の相、主の名前を知る彼女は主を容易くこの国の敵に出来る。

それが分からないほど主は愚かではない。馬鹿ではない。愚かで馬鹿ならばあの黄巾の戦いを生き残れなどしなかった。無残に英雄達に殺されていた。

その主が何を思ったかまるで白蓮さんを敵に回すかのような言い回しをする。どう考えても利益など得られない。悔恨にしかならない。

主ならもつとうまく反董卓連合に誘うことも出来たはずなのだ……。言い方など私と違い教養が在る主はいくらでも変えることは出来る。それこそ白蓮さんを反董卓思想に例え真実を知っていても引きずり込むなど造作もないはず。

解らない。

あの方の考える事は常に解らないが今回の事もよく解らない。

いったいあの方は何を求め、何を見ている。

気がつけば主の部屋の前にいた。

無意識のうちに答えを欲していたのだろう。

……主に聞いてみましょう。

まあ、例えそれがどんな答えであろうと私は納得し、受け入れる……

…受け入れてしまうでしょうね。

答えなど意味がない。

主の口から出た言葉に意味があるのです。

決心し扉を開けるとそこには

「……ん？どうかしたのですか美須々」

狐の仮面を身につけて何かの作業に勤しむ主の姿がありました。手に何かを持ち、削っているようだ。

「いえ……少しお聞きしたいことが」

「ふん……入られては？」

「っは、それでは失礼して」

部屋に入らせてもらう。

主が手に持っているのは小刀のようなものだった。どうやら木を削っているらしい。

主の部屋には壁にお面……狐や豚、何とも形容しがたいものなの様々なお面がかけられている。

本棚には兵法書、それになにやら若い女性向けの雑誌などが並んでいた。

「阿蘇阿蘇」

「孫子の兵法」

「糞みそ技巧」

「月刊吸血鬼〜かりちゅまお嬢様の受難〜」

「兄貴の下着格闘技」

「使い魔の躰方〜桃髪お嬢様監修〜」

「グリモアの書」

「ダゴンの書」

「聖 おねえちゃん」

「私の弟がこんなにかわいいわけがない」

……おかしい。何かがおかしい。  
明らかにおかしい物がある気がする。  
なんでしょうこのもやもや感は。

……まあ主ですからね。  
気にするだけ無駄でしょう。

「ふうん、珍しい。うちの3人娘の1人が相談なんて。まあ取り合えず入って、その寢床にでも座っててもらえますか。悪いけれど椅子は二つ無いもので、お茶入れるからちよつと待っていてください  
ね」

私は主の言うとおり寢台に座ると主がお茶を差し出した。  
受け取ったのを確認すると主は椅子に座り、仮面を外してお茶を一口飲むと私に問いかける。

「それで？なんの相談ですか？」

「先ほどの白蓮さんへの話の件です」

「ん〜あ〜あれですか」

そう言つとつんつんと頷いた。

「私は何故あのような話し方をなされたのか解りません。説得するにしても主ならばもっとうまく白蓮さんを主が望む方へ導くことが出来たのでは？」

そういうと主は首を傾げた。

本当に不思議そうにえ？と今にも口に出す。

そう思わせる表情。

「……質問していいですかね？」

「なんなりと」

「君は私が白蓮を自分が望むようにしたいと思っていると思うのですか？」

「違うのですか」

「うん、結局は選ぶのは白蓮ですから。彼女が選んだ道に私はついていきます。それともう一つ、私は白蓮に説得していたと言っけれど、君は私が白蓮にどうして欲しいと思っていると感じたので？」

それは……。

「反董卓連合に入る事を勧めていたのでは？」

あの会話から私はそう感じた。  
他の道は許さない、そう言っているように思えたのだ。  
だが、主からの答えは私が全く予期しない答えであった。

「はずれ」

そう言うと主はお茶を口へ運ぶ。

私は思わず啞然として惚けてしまった。そんな私を見て主は笑いを堪えているようだ。

「正直、私は白蓮が傍観しようが董卓に味方しようが全然構わない」

……ますます解らない。

「ですが最後に主は言ったではありませんか」

「ん？董卓を選んだら出て行ってくて？そりゃ董卓は詰んでいるからなあ」

「詰んでいる？」

「ええ」

主はお茶を持ったまま腕を組む。

いや……それはいくら何でも無理があるのではと思っただが出来ている。

案外やればできるものなのか。

「董卓はね、内から来る毒と外から来る矢に勝たなくてはならない」

内から来る毒……都の高官や宦官、外から来る矢は反董卓連合か？

「ハッキリいってムリゲーです。詰みです詰み。そもそも董卓は洛陽で帝に信用されながら宦官連中と戦うことが間違っている。郷には入れば郷に従え、戦わずに勝つ方法をとれば良かったんだ。でもさあ董卓は優しかったんだろ？ 宮中を全て敵に回しても民を助け、帝を救った。本当に優しい、だからこそ董卓は死ぬ。あの既に腐った魔窟で戦うなんざ無謀もいいとこさ、今回の件を仕組んだのも高官や宦官の連中だ。さっきでこそ彼らを笑ったが、それは彼らの未来への見通しが甘すぎたという点だけ、董卓を殺すという点では花丸の大当たりの策ですからね」

そう言っただけは笑う。

楽しそうに、楽しそうに。

「それに袁紹の放つ号令はさっき言ったとおりとても魅力的な話。時代の英雄達は集まって我先にと董卓の首を狙うでしょう。私達の時みたい」

「ですが董卓軍には私達とは違い、呂布などの猛将、陳宮や賈馮などといった知将もいます。訓練された軍で迎えうち、勝つこともあり得るのでは？」

「ありえるだろうねえ。でもさ、それは外からの矢であって内の毒ではない。あの何進を殺し、先代帝を傀儡とする権力と力がある宦官連中に高官連中の毒から戦時中に守れるかな？無理だと思っね。守るためには呂布や、張遼、華雄といった武があり忠義がある連中じゃないと。でもその1人でもこの戦いからはずれたら負けるだろうね。それに例え生き延びたとしても、それを許すほど袁紹はおおらかな人間じゃない。必ずや暗殺とか手を打つだろうね。袁紹がやんなくても宦官連中が何進の時みたいにやるんじゃないかな。」

そしてお茶をまた一口。

「董卓は詰みだ。例え、彼女に味方しそれを全て防ごうともそれは味方した者の物語であって董卓の物語ではない。そんな董卓の物語を私は見るつもりも聞くんもいない。そんな董卓に味方するぐらいたらとっとと出て行って孫策さんの軍に入った方がマシです。あの方がまだ退屈じゃないし見ていて気持ちが良い」

そう主ははっきりと言った。

その声には意志の強さが表れている。

「ま、というのが董卓軍に与するなら出て行くよって言う理由ですかね」



「孫策……と言いましたか？」

「うん……一応約束してますから。いつか行くよってね」

驚いた。まさか孫策とそのような約束事をしているとは。

それならば白蓮さまに客将扱いで入ったことも頷ける。主から聞くに孫策は英雄と呼ぶにふさわしい魅力があるらしい。

惹かれたと話していたから、孫策殿は主にとって見たい物語なのだろう。主としてもなにかしらの要因で不本意ながら白蓮様に味方しているのかもしれない。

「……美須々。君は今、私が不本意ながら白蓮に味方してると思っていないですか？」

え？そう思わず声が漏れる。

「それは違いますよ」

私はその言葉と主の目に、体が芯から凍っていく錯覚を覚えた。  
……解らない。

それ以外に白蓮さんに仕官する理由が正直見あたらない。

孫策という大御所の仕官口が整っているのに何故？

孫策にくらべ白蓮さんは魅力がある人間には感じられない。

「ねえ君は白蓮のことどう思います?」

「彼女は良くも悪くも普通です。何事もそれなりにこなしますが、秀でていると言うわけでもありません。それに英雄としての素質もなく正に普通と呼ぶしかありません」

今この場に白蓮さんがいたら間違いなく落ち込むでしょう。それぐらい酷い台詞を言っている自覚がありますから。でもこれがほとんどの者が抱く公孫贖の評価。

「ねえ……普通って何ですか?」

そう主は机に茶の入れ物を置きながら私に聞いてきた。だが私はその答えに渋った。

「普通というのは……平凡であり……一般的といえますか」

「うん、普通は特筆すべき属性を持たない状態のことさ。どこにでもありふれている、新鮮味がないって意味で使われているかな。君もそう言う意味で彼女を評したんじゃないですかね?」

「ええ。……そうではないと?」

「いんや、彼女は普通だよ。私から見ても君の評価と代わりがない」

そう言って主が笑う。

「でもさあ……ただの普通の太守が普通に黄巾党を普通に撃退して普通の評価をもらい、普通に町を特に問題もなく普通に治め、普通に何事もこなしているのですよ」

主は口に茶を含め、飲み込む。

次に笑った顔はまるで人をバカしたような、そう。狐を思わせる笑み。

「それって面白くないですか？」

主が可笑しそうに椅子に寄りかかって頭をかいた。  
私はその意図を計りかねてただ主の話の話を聞くだけに徹する。

「こんなさ……荒れた時代に、普通に民を暮らして生かせるんですよ。確か一時期趙雲さんがいたらしいですがその前も、その後も黄巾党の残党はいたんですよ。徒党を組むぐらいはね。彼女はそれを白馬陣といましたか？騎馬で撃退しておかげで彼女の町の民は平穩に暮らしている。ここまでしたら高評価とはいかなくとも評価はしてもらえます。なんせ他の太守は逃げ出したり、負けたりしているわけですからね。彼女はこの世界にとって特別な存在であることに間違いはない」

……私でも主が言いたいことが解ってきたかもしれない。

「彼女に大敗はありませんよ、少ない負けで彼女は勝ち続けてきた。なのに彼女は普通と評価される。しかもよく考えてください。彼女の将は誰が居ますか？」

「……将、名のある人間はいません。また誰もが才気に欠け、精々普通の文官止まりです」

「そうですね特に目立った者は居ないそれこそ一般の兵と文官だけ。でも彼女は一般の兵と文官とは違うでしょう？彼女1人でこの幽州を實質支えていたことになります。彼女は人を使うことも普通なんです。普通なのに普通の評価、普通と人々には評価される。これって異常ですよ？異常なのに普通なんですよ？」

「異常なのに普通？」

「ええ、彼女は果たして大衆と変わらぬ人間ですか？なんの特徴もない民や兵士や文官と同様なのですか？」

私はその言葉に戸惑う。白蓮さんは確かに普通と言う枠に収まる人間、だがその普通は決して一般の普通に収まるものでないのだ。だがそれを上手く言い表すことが出来ない。

「ね、彼女は特別なんですよ。この世界という本に綴られる登場人

物として最初に書かれるべき人間。曹操、孫策、劉備と同様にね。でも貴方は彼女達……劉備は女だっけ？まあどっちでもいいですね。彼ら英雄と比べるには余りにも不相応だと思つたのでしょう？」

「……」

「遠慮などしなくて良いですよ」

「白蓮さんには悪いですが……彼女は特別と言えど英雄ではありません。そもそも比べること自体が間違っている気がしてなりません」

意を決してそう言った私に主は歪な笑みを見せる。

そう、この笑みこそが主の本質。無邪気にこの世界に楽しさと面白さを見いだしぐちゃぐちゃにかき乱す。この世界という画板にいくつもの色を塗りたくってぐちゃぐちゃにする。

だがそれは何故か美しい色を生み出していくからこそ人は主に惹かれる。

今、この主は笑っていた。楽しくて楽しくて仕方がないと言わんばかりに。

「普通と言う壁が高すぎますか？」

「はい。普通ではこの乱世は生き抜けません」

「……では質問です英雄は英雄の死に方をするのでしょうか。では普通は？」

「え？」

普通の死に方？

「普通に死ぬって……どんな死に方ですか？」

「そ、それは……」

「この乱世に、英雄達の旗が翻るこの乱世に普通に相として生きていく特別な彼女の道とは？」

「……」

主は更に笑みを深める。

「貴方も分かっているのでしょうか？一般大衆の有象無象の輩とは彼女は違うのですよ？特別という枠でくくれば彼女は曹操・孫策・劉備と同じなのですよ？」

「……」

「貴方達は英雄という枠で見ているからこそ彼女の面白さに気が付かない。そもそもこの世界は普通であることを許される世界などではない。愚か者が英雄か、特別にはその両極端しか存在しないはずなのだから。その枠の狭間にいる。本来存在することを許されない

その枠の狭間でもがくのが白蓮なのですよ」

私は思う。これは主でしか気が付かない。

他の者達には夢がある、信念がある、力がある。だからこそ仕えるに相応しい者達に彼らは仕え、この大陸で戦う。そもそも愚か者に仕えるなど彼らにとって論外。英雄こそ彼らは魅力に惹かれ、夢に惹かれ、まるで蝶のようにその甘い蜜に吸い込まれて集まっていく。

だが主はそんなことなど考えない。この大陸の未来を憂うこともなければ信念も誇りもない。

ただこの人が求めるのは面白さと楽しさだけなのだから。

逆を言えばだからこそ主は気がつけた。主は英雄と愚者など差別をしない、ただ面白く、楽しく、先が見えないものを見たがる。

英雄達の最後……それはさながら神話の一角のように死んでいくのだろう。英雄達の道はさぞや後人から見て華々しいのだろう。儂いのだろう。

だがその狭間に存在する者は？

誰者がそんなものにそもそも興味などわかない。何故なら英雄などではないのだから。彼らが仕えるに値する魅力も力量も蜜もまるで足りないのだから。無いわけではない、足りないのだ。

だからこそ彼女は見向きもされない。目的地に着くための道しるべを終着点と見定める者がどこにいる。

それは主だからこそ、純粹に自分の欲求のみを求める壊れた人だからこそ見つけたのだ。

「彼女のどこに新鮮みがない！？彼女のどこに特筆すべき特徴がないと言うのです！？特別という範囲でくくられるのなら彼女以上に特筆すべき人物はいない！！むしろ特別という範囲で曹操や孫策や劉備こそが普通と呼ばれるに相応しい！！英雄？そんな存在など三人もいる！！普通はここにしかいませんよ！？この異常な世界で特別では無い特別と特別で在る普通の二人が出会い、紡ぐ！！なんてそれは新しいのでしょうか！！英雄の物語なんざ吐いて捨てるほどある、たまたまこの時代に英雄が三人もいただけなんですよ！！」

「……………負けるかもしれませんが。彼女は英雄の器ではないのですから」「それがどうかしました？」

かろうじて穴をついた私だったが、すっかりその時は忘れていたようだ。

私と出会った時に、出会ったときこのお方は言ったではないですか。

「勝利などというものに何の価値があります？負けようと面白い物語は面白いのですよ？」

この人はぞつとするような笑みで笑いかける。

ああ、この人は壊れている。

死んで欲しくないと、最も大切な人達が願っているのにこうして死へと無意識に飛び込んでいこうとしている。



「この世界は異常だ、その中で普通で太守になっている彼女は異常だ。異常なのに普通、普通なのに異常。白蓮は下手をすれば曹操以上に面白い人間ですよ?」

話を終えた主は仮面を机に置き、お茶を飲む。

……何も言葉に出せない。

「私が力づくで従うと?馬鹿を言っちゃいけません。自分が仕えたくない者に仕えるぐらいならその場で舌嚙んで死にます。戦いたくないのですからせめて主は選びたいんですね、私は」

恐ろしい。

この方も恐ろしいが何故か普通という存在が恐ろしい。普通が恐ろしいということがまあおかしい。

その異常を成立させている白蓮さんと壊れている主。

何故この二人は出会ったのでしょうか。

「……主、白蓮さんは今後どのように考えているので?」

「袁紹あたりにでも負けたのでは」

「……彼女は愚者ではないはずですが」

「白蓮は良くも悪くも普通。普通の範囲を飛び出した者には勝てない。負けて死んだかもしれないね。それも面白いですけど、まあ

私達が来たのでどうなるかはしらないですけどね」

この人は白蓮さんを何も思っていない。真に思うべき相手は天和様達なのですから。

他にこの人は一切の情をかけない、人の道を外れすぎている。『外道』と呼ばれるに相応しい人がこの人以上にいるのでしょうか？

一体この人はどこでここまで歪みきったのでしょうか。

でも、それが当たり前なのだと思いますこの人に仕えている私は更に歪んでいる。

歪んでいる人に望み仕え、幾多の命を奪って来た私は歪みきっている。

その事に後悔も何も無い私、それは明埜も琉生も同じ。私達の兵も同じ。

……でも。

「主」

「何ですか美須々」

「私達は歪みきっていますね。今幽州は混沌の渦の中にあるように思えてなりません」

「混沌……ですか。言い得て妙ですね」

嬉しそうに笑う主だが、それに「でも」と私は付け加える。

「それは白蓮さんを中心に回っている。混沌の渦の中心は台風の目のように穏やかなのでしょうか？それとも実はもっとも混沌としているのは白蓮さんなのでしょうか？果たして、一番歪んでいるのは私達なのですか？」

その問いに主はきょとんとしてしばらく考え込む。

そして唸り絞り出したように声を発した。

「もしかしたら……一番おかしくて歪んでいて壊れていて、それで人間らしいのは白蓮なのかもしれないね。うん、そこまではこの私も考えませんでしたよ。美須々、貴方ますます私と同様におかしくなってきましたね」

私はそれに笑い返す。

「それは実にめでたい話です」

主の部屋の扉をそつと閉めると、私はゆっくりと歩み出す。

私達は混沌。

どうしようもなくぐちゃぐちゃで、もはや白にも黒にもなれやしな  
い存在。

だがその混沌を扱っているのは白蓮さん、貴方だけ。曹操が孫策が  
望んだ混沌を扱うのは貴方だけ。

扱われているのか扱っているのか、だが確かに彼女の手に私達は握  
られている。

……白蓮さん、貴方次第なのですよ？主の言い方でいうならば、そ  
う。

貴方の物語なんですから。

私は頬を釣り上げて密かに笑みを浮かべながら、幽州の城の廊下を  
一步一步、確実に進んでいった。

## 第二十二話 英雄よりはやーい（後書き）

主人公が黒い？いいえ、ケファイアです。真っ白です。作者的に真っ白なのです。

今回のサブタイトルは多方面に喧嘩売ってる気が……ま、いつか。

みなさんお久しぶりです。味の素です。

多分あと1、2話挟んで本格的に連合編突入、なげえ。

ところで、作者はもう疲れました。世間は夏休みだそうですね。作者の夏休みは遠い彼方です。

更新速度は来年にならないと上がらないかなあ……本当に地震は大変な傷残していきやがりました。ええ。本当に。

今回の武将紹介は……不細工？美人？

「うっ……お外出たくないよう。皇帝さんのお嫁になんて行きたくないよう」

「いや、賈南風ちゃん？お母さん困るんだけど。そんなこと言われたらお母さん権力握れなくて困るんですけど」

「お母さん！かわいい娘と権力どっちが大事なの！？」

「権力」

「ガーン」

とある部屋にて。母と子が言い争っていた。

方や鋭き眼光を放つ色白の女性。方や褐色で母親譲りのつり目だが優しき小柄な少女。容姿や性格はほとんど違えど家族であった。





## 賈南風

晋の功臣である賈充と後妻である郭槐の長女であり、皇帝の寵愛を受ける皇后。

色黒で醜く、性格も陰険で、結婚しても子を身籠らないだろうと言われた。「米がないならお肉の粥を食べればいいじゃない」と言っていたらしい。すげえ、マリーが生まれる前からマリマリしてたようです。

一方で頭はやたら切れたらしく権謀術数を操った。幼い頃から腹黒い父に教え込まれたのだろう。ちなみに彼女の父は魏の重臣であったが、真っ先に晋に鞍替えし重臣となった。それも孔明も真っ青なほど鮮やかな手口で。親子二代の真っ黒家系である。

皇帝の後の座を巡った衛？が彼女を恨み、「皇帝が暗愚」と先帝である司馬炎に告げたために（実際あれだったらしい）司馬炎は彼女の夫を訪ねて政治の事を聞くことにした事があるらしい。もしこれで夫があれば皇帝の地位は夫から離れ、自分は皇后ではなくなる。彼女は配下のスネーク達からその報告を受けると、すぐ模範<sup>カンベ</sup>解答を用意して夫をサポートし危機を乗り越えた。この話から彼女が如何に機敏に富んで有能であったのか分かるだろう（ちなみに余計なことした衛？は後にしっかりと彼女によってデストロイされました）。

賈南風は陰険で嫉妬深く、司馬衷も彼女を恐れていたという。自ら



人を殺したと史書に描かれている程であり、司馬衷の別の身重だった側室を胎児ごと殺した時は司馬炎も激怒して賈南風を洛陽の一角に閉じ込めたほどだ。

さらに先ほど述べた通り彼女は行動力もあり、先帝が亡くなると自分の政敵をクーデターを起こして皆殺しにした。

かつての恩人であった前皇后でさえも監禁して餓死させ、クーデターに協力した功労者も用無しと見るや一族事デストロイ。他にも邪魔と見るや廢太子させたり、その相手を撲殺するなど行動力ありすぎである。

だがそんな彼女も、300年に挙兵した司馬冏や司馬倫達に捕らえられた。

「犬を繋ぐのに頭でなく尻尾を繋いだか」とやたら格好いい言葉を残し、毒酒を飲んでその命を絶たされる。

このお酒、金粉が体を害すほど入っている金屑酒というのだが……うん、何とも言えない。

享年44才。一族は因果応報で皆殺しにされた。

『晋書』『資治通鑑』によると、賈南風は淫乱で、亭主の司馬衷以外にも密通しており、さらには道端に美少年がいるとこれを捕まえ、一夜を共にするとこれを殺すということを行っていた、と記載されているがなんという逆レイプ。

不細工に犯されるとかマジ勘弁、そう思う人もいるかも知れないが……昔の日本人の美意識を考えるんだ。あんなのっぺり顔が好まれていたのだ。

作者が本当に不細工だったのか不思議に思い調べると

「身長が小さい（当時の女は160が平均、つまりそれ以下）」

「少女体型であり貧乳信望者歓喜」

「色黒」「アジア系褐色」

「歯が （表記不明、尖っていたらしい）」 「八重歯っ子来たわぁー!!」

「性格が悪い」「ドS」

「淫乱」「エロゲ」

「当時の中国の美人の基準がふくよかな女性 （ようするにぽっちゃり）」 「すらりとした少女体型」

つまり、褐色系エヴァンジェリンみたいな感じであった可能性が高い。当時の美意識と現代の美意識は違う者なのだから、もしかしたら彼女は現代で美女だったのではないだろうか。

もうこれドストライクな人が続出ではないだろうか。作者はもうロマンティックが止まらない。

ひゃっはーこれだから歴史は止められねえぜ!!

第二十三話 わたしにこのででたたかえというのか（前書き）

I t i s t h e c o m m o n w o n d e r o f a l l  
m e n h o w , a m o n g s o m a n y m i l l i o  
n o f f a c e s , t h e r e s h o u l d b e n o  
n e a l i k e .

（誰でも不思議に思うことには、これだけの多くの顔があるのに、似たものが一つもないことである）

（ S i r T h o m a s B r o w n e ）

## 第二十三話 わたしにこのてでたたかえというのか

約一ヶ月後。

やたら偉そうな使者が幽州の城へと現れた。付け加えるなら派手な装飾と衣服。

袁紹からの使いだと聞いて誰もが服装については納得した様子である。

「（……いや、あのセンスには納得していませんよ？バブル期のおばちゃんですらあんな金ぴかな格好はしないだろうに）」

波才はため息をつきながら考え込む。何の使者なのだろうか。

それは予想通り、当然ながら袁紹からの反董卓連合に関する檄文であつた。

既に各地に使者が飛んでいるとは聞いていたので、何の不思議もない。ああ、ついに来たかと彼らは時代が変わることを感じた。

使者の前に現れた白蓮の顔は厳しい。以前話した内容から大まかな事は理解しているのだろう。

ここが決め所ですねと波才は一人目を光らせる。

使者は一礼すると白蓮の前に進み出る。そしてご丁寧に董卓の非道を語り尽くす。

高慢なその姿は真実を知るものからみればいつそ滑稽に見えた。

帝を誑かしている、民を苦しめている、国を脅かしている。董卓の所業許すまじ！！

影にて潜む明埜は笑いを堪えるのに必死のようだ。肩をしきりに震わせて腹を抱えながら、音を立てない程度に柱に平手を何度も叩きつけている。

美須々は目を瞑って成り行きに身を任せていた。同じく琉生も目を瞑っているが……船をこいでいる。

一方、事情を知る波才話を一切合切聞き流していた。

使者の語る内容も自分が予想したものと変わらない。そう、全くの予想通りだったために開始五分で聞くことを止め、脳内で好きな曲を話が終わるまで何度もピートし始めた。

自分が決めるのでは無い、白蓮が、つまり『波才が仕える王』が決めることだと割り切っていたからだ。

事実決めるのは白蓮であり、波才自身にそんな権限はない。

付け加えれば『可哀想な女の子を助きたい』なんて崇高な精神を彼に求めている人間は、もはやこの軍に誰一人としていなかった。

そんな波才の考えは至ってシンプル。

『犠牲になるならなればいい、ご愁傷様って拝むぐらいならしてあげても良いです』

命が軽いこの世界で一々犠牲者のこと考えるなどくだらない、無駄に心が疲れるだけだと彼は割り切っていた。

黄巾党時代に多くの同胞を失っていた波才。だが『死んだ人達の命

も背負って』などという崇高な気持ちなどさらさら無い。

『背負わず』とも『受け止める』覚悟はあった。一人の凡人に何万もの命を背負う事など無理に等しいと考えている。そもそもそんなものを背負っていたらやりたいこと出来ないジャン、というのが彼の持論であった。

だが、そんなくだらないとあくびを噛み締めて一笑している波才とは反対に、白蓮の様相は見ていて痛々しい。

王座に座る白蓮は苦虫を噛み締めた顔で使者を睨む。

真実を知らなければ彼女は喜んで反董卓連合に飛びついただろう。

真実を知らなければだ。

だが知ってしまったえばその連合は私利私欲に塗れた英雄達の宴、狂乱の戦禍。

真実はいつだって人を苦しめる。

だが人は真実こそ至上の蜜として追い求める。これなんて矛盾なのだろうか。

白蓮は顔を歪ませる、苦悩に満ち溢れた彼女の顔は事情を知る良識ある者なら目を逸らさずにはいられないほどであった。

君主としての自分、誇りある武人としての自分、人間としての自分。その二つが背反し、白蓮の心で大きな戦火が荒れ狂っているのだろう。

使者は董卓の悪逆非道の行いに彼女が怒りを募らせていると感じたのか、ますます声高らかに話す。

すると白蓮さんはますます己の葛藤により苦しい表情になる。

額には汗が浮かぶ。

すると使者さんは……とぐるぐると無限回廊に囚われたが如く。流石の波才でさえこれには白蓮に同情した。嫌なループですねと。

だが、どんな物事にも終わりは来る。

使者は一通り語り終えると反董卓連合の誘いを申し出る。その姿からは当然受けるのだろつという強い自自信が感じられる。

波才はちらりと横目で白蓮を覗い観察すると手が握りしめられ震えているわ事に気が付いた。

波才はそれを見て内心ため息をつく、しばし答えを客室で待つようお願いして、使者を丁重にを客室へと案内させた。使者の姿が見えなくなったのを波才は確認すると。

「白蓮様、決断を」

思えば仕官したとき以来、初めて敬語を使ったと心の中で彼は苦笑する。

あえて敬語を用いることで波才は圧力を白蓮にかけたのだ。思えば波才と白蓮がこうやって面と向かって行う対話は一ヶ月ぶりであった。

白蓮はどうするのだろうか。董卓につくのであろうか

もしそうするのなら波才は愚か者の烙印を白蓮に押すつもりであった。

何故ならばその為の用意を白蓮が何も行っていなかったからだ。

不利であるならばそれなりの用意を事前にしなければならぬ。しなければならぬにも関わらず白蓮はあの日から何も行ってはい

なかったのだ。

あの時すぐさま董卓につくと動けばまだ負けたとしても本質的な勝ちを得られた。とはいっても砂粒のように小さなものだが……それでも0と1は全くの別物である。

その僅かな希望に全てをかけるといってもまた乙なものだっただろうと波才は考え手はいたのだ。

しかし、この時点で董卓に味方する道は既に消失している。例えば味方をしようとも董卓と共倒れであることは間違いない。百害あつて一利なしなのだ。

もし白蓮がそれでも何も行動を起こさずしてただ感情のみで動くのなら、波才は完全に彼女を見限るであろう。

そのケースになった場合は孫策か劉備の軍にでも赴くのも一興、と彼は考えていた。

だがそれは無いであろうと波才は確信していた。

あれだけ言ったのだから傍観などしない、むしろ傍観する意味が解らないと。

傍観が許されるのは舞台の外だけ。役者がぼおつと舞台の上で突っ立っててどうするんですかっつう話ですか、と。

白蓮さんはそれが解らない愚か者ではないことを彼は理解していた。そんな愚か者ならそもそも選択肢を用意する必要も無いのだから。つまり、選択肢をいくら用意しようとしても既にこの場で彼女が進む道は決まっていたのだ。

いくら悩もうとも道は他にない、一方通行なのだから。



「「「……………」」」

美須々、明栳、琉生はも静かに時を待っている。控える兵士達も誰も動かない。

彼らには主の口から出る言葉に従うだけ。それが臣下の務めというものであるからだ。

「（白蓮言い出しづらいでしょね。今、彼女の中ではさぞや面倒くさい葛藤が渦巻いているのでしょうね。民を守るのか、自分の感情を取るか、どうすればいいのかと。そもそも選択肢は一つだけなのにね。だが、それが分かっているからこそなお悩み、苦しむ。何をやるべきか理解している上での苦悩というのは、想像を絶する苦しみを与えるもの。今の彼女は悲痛すぎて見ていられませんよ）」

872

本当は波才も静かに答えを待っていたい。だがこのままでは埒があかない。

いつまでも使者を待たして不信感を持たせるのは不味い。かといってこのままでは彼女は動けないであろう。

波才は汚れ役を背負う決心を固めた。

「白蓮様、もしや…董卓に与するおつもりですか」

白蓮はその言葉を聞き、齒を噛み締めて俯く。波才は微笑む。

そうですよ、貴方は分かるでしょう？貴方の愛する民、自分を信じこの幽州に残った兵達を自分の感情如きで死なせてはいけない、と。

『王』としての自分をとらなくてはいけないことを彼は白蓮に再び叩きつけたのだ。

白蓮は目をかっとなくと、王座から勢いよく立ち上がった。そしてこの場にいるに、自分の心を切り捨てを振り切るように叫んだ。

「我らは反董卓連合に参加する！！」

一瞬の間。

「……………つは！！！！」

波才含めた全員が王に跪く。今、この時を持って董卓としての命運は完全に消えたのだろう。もとより波才にとって董卓の命運など実にもいいものではなかったが。

「単経、使者をここに呼ぶのだ！私の口から直接伝える！！」

自分で決めたのだと、迷いなどないと、そう伝えたいのだと、このことを波才は理解した。

そして同時にそれは強がりであることも。震える手を力強く握りしめることにより誤魔化している事に、彼は気が付いていたのだ。

……このままだと白蓮が壊れる。しばし時間を空けて訪ねるべきか。波才は頭を下げつつ、何とも形容しがたい笑みを浮かべたのであった。

私はその日の夜、白蓮様の部屋を訪ねるべく夜の廊下を進む。静かな夜に聞こえる虫の鳴き声はなかなか風流だ。

……それにしても、今日一日で我が軍はずいぶんと忙しくなったものだ。既に軍備は着々と進んでいる。

琉生は兵の訓練のさらなる向上に。

美須々は軍備を着々と進めている。

明埜は董卓軍の動きを知るために間諜の量を増やし、工作を始める。

いや、『こうなるだろうと予測してあらかじめ備えていたので仕上げを行っている』というのが正しい。

とおの昔から既に準備を固めてきていたのだ。無許可で。

先を読み動くのは当たり前のこと、客将の身には出過ぎたまねかも

知れませんが、仕えている間は最善の働きをするつもり。

え？もし白蓮が連合に入らなかつたらどう始末付けたのって？  
そんなものどうとも言える。軍備の増強なり模擬訓練などのた  
まっておけばいいこと。

それに私は彼女が連合に入るだろうと内心あの時に確信していた。

彼女は一人の白蓮なのではない。一人の王なのだから。

王たるものが個人の感情で動くことがどれほど愚かな事か、彼女は  
知っている。その王としての彼女を私は信じている。

……別に王だけの彼女を信じているわけでもないわけだが。

やがて白蓮の部屋の前に部屋に着く。

中には人の気配がすることから中にいることは間違いないだろう。

「白蓮、波才です。入ってもいいですかね？」

「……………」

無言ですが扉が開く。

のんびりと部屋の中に歩を進めるが……暗い。  
明かりをつけてはいないようですね。

暗いのでどのような顔をしているのかよくわかりませんが、白蓮は  
椅子にそのまま力なく座ります。

私もそこら辺にあった椅子を持ってくると彼女の正面に座った。

「……………」

お互い話す事はなくただ時間だけが過ぎる。  
最初に口を開いたのは白蓮だった。

「笑っていいよ。私はさ、董卓を見捨てることを躊躇った。最後の最後まで」

その声は今にも消えそうなか細い声でした。

「笑いませんよ」

その言葉を聞いて白蓮は乾いた笑いを漏らす。

「ハハハ…私は馬鹿だよ。民を守る、それが私の第一の使命であり当たり前のことだ。それをさ、董卓の話聞いたときに忘れてしまつてさ。……波才に怒鳴っちゃつてさ、波才は当たり前のこと言っているのにな。そして波才が手助けしなかったらあの時決断することが出来なかった…馬鹿だよ私は」

顔は見えない。

ただ彼女がどのような顔をしているのか想像できる。

「なんでだろうな…董卓はわざわざ宦官や高官を敵に回してまで帝を助け、民を助けた。なんで私みたいな人間に討たれなくちゃいけないんだろうな」

「……………」

「なあ教えてくれ波才。私は…幽州の民を助ける王として相応しいか？」

その質問に私はしばし考える。

果たして今の白蓮に応えて良いものなのか……結論として私は答え

877

「治世においては貴方は名君でしょう。ただ今は乱世、王として相応しいとは思いません」

非情と人は言うでしょうね。

でもね、ここで嘘を許せる世ではないのですよ。

「そうかあ…ハハ。なんで私はこんな人間なんだろうな。曹操みたいに王としての力もない、桃花みたいに人を導く魅力がない」

ダンッ！

机を激しく叩いた音が部屋中に響き渡る。

「なんで私は！！私はここまで力がないんだ！？決断する度胸もない、先を見て民を守る力もない、私は本当に……」

暗闇に慣れた目が白蓮の顔を見る。

その顔は後悔と怒りに染まり、目からは涙が伝っていた。

「無力だ」

嗚咽を漏らして泣く白蓮。

それを見て私は思う。

本当になんで彼女のように優しい人間が乱世に巻き込まれるのかと。

天和様も白蓮も同じ、

これは本来生まれなくていい苦しみだ。

私がここにいなければ何も知らずに連合に参加し、董卓軍を滅ぼしただろうに。

私がいることによってこれは起こったと考えれば……まあなんとも救いがない話だ。

董卓も白蓮と同じなのだろう。

明埜が言っていた、董卓は優しすぎると。あれは純粹に民を助けた

かつただけだと。ただ助けたくて彼女は宦官と対立したのだと。

そして馬鹿らしいと。

この乱世において優しさなんて通じはしない。

騙し、騙され、反吐が出るような策謀が謳歌するこの乱世において、優しさなど愚の骨頂だ。

董卓は帝など見捨てれば良かった。民など見捨て、外道になりければこんな危機には陥らなかつた。私のように己を捨てさえすれば良かったのに……。

優しいが故に今死に瀕している。

世界は残酷だし、狂っている。

人が争わなければこのような苦悩は生まれえない。だが争いがあるからこそ、人は可能性が見いだせる。

争いは善である、悪であるなど差別しない。だからこそ戦争は平等だ。だからこそ時代を築く。

そして平等に苦痛を、怨を有象無象の区別無く与え、振りまく。

白蓮や董卓はおそらくそのような戦争に耐えられる人間ではない。

曹操や孫策などの英雄こそが、それらを真に理解し受け止められるのだろうか。

「貴方は人として間違っただけではないですよ。そして無力でもない」

白蓮は人として間違っただけではない。

そして、それは誰にでも言える。



誰もが間違つてなど無く、誰もが正しいからこそ争いは起る。

「貴方はこの幽州を守り続けて来た。多くの人間が貴方を評価しなくとも貴方は仕事をこなし続け、ついには太守にまでなられた」

私は白蓮を抱きしめた。

人は人の温かさでしか真の安心を得ることは出来ない。  
だから私は優しく抱きしめる。

「私はね、貴方だから客将としてここに入ったのですよ？曹操でも、劉備でもない。白蓮だからこそ私は貴方に仕えているのです」

「…嘘だ。私は無意識のうちに波才を無理矢理従えた。波才は嫌々従っている、そうじゃないと波才ほどの人間がうちになんて来ないさ。それぐらい知っている。城の者が言っていたよ。私はそれを知っている、例え客将でも波才が離れていくのが怖くて聞けなかった」

力ない、余りにも弱い声。

城の者がそんなことを……。

ですがそれは間違いですよ白蓮。

「ならばその人間を殺しに行くので教えてください」

その言葉に白蓮は驚いて私の顔を見る。

ああ、分かる。これは怒りだ。

今の私はさぞや良い顔をしているのだろう。

「その人間は侮辱した。私を、白蓮を。誰が嫌々？巫山戯たことを言うな。もう一度言う、私は白蓮だからこそ従っている。誰が望まぬ主君に従おう、望まぬ主君に従うぐらいならこの舌を噛みちぎり自害します。私は白蓮こそが我が主君であると感じたからこそ貴方の側で仕えている。そのような私の主君を乏しめ、あざ笑う侮辱に私は耐えられませんからね」

啞然として私の目を見る白蓮。

私は正面から見据えて言う。

そして白蓮から離れると、臣下の礼をとる。

「我が主君、貴方は民を守りたいという。そして董卓すらも守りたいという。ならば私にそう命じてください。今の貴方は私の主君、貴方はここにいる、貴方が選んだ選択でここにいる。命じてください」

「む、無理だ」

「私が今まで無理なことを進言しましたか？」

「……………」

「私はね、白蓮」

そう言えば、本心から彼女と話し合うのはこれが初めてになるのか。

「董卓の命なんざどうでもいいのですよ」

「っな!？」

「驚きました？私には何故貴方が驚くのが分かりませんがね。私はね、白蓮の物語を見たいのですから」

「私の……物語？」

「ええ。白蓮が白蓮自身で決めた白蓮だけの道。そこになんで董卓如きが入り込む隙があるのですか。そんなものあるわけないでしょう。そんなものじゃ満足出来ませんよ」

「……分かっている、分かっているさ!!董卓が助けられないことなんて「っは?何言ってるんですか?」……え?」

「白蓮、私は助けられないとは言っていないよ?」董卓如きに貴方が惑わされるな』と言っているんです」

「……」

「董卓なんぞに縛られる?違いますよ、貴方が董卓を操るのですよ。捨て駒にしても良い、助けても良い。貴方という道が董卓に続くのではない、貴方という道の過程に董卓がいるのですから」

だから。

そう言って私は跪く。

「命じてくださいな。貴方が物語を創る上で董卓は殺させたくないのでしょうか？ならば殺させるな、助けろと命じればいいじゃないですか。私は貴方の臣下なのですよ、主の期待に応えぬ臣下がどこにいるのです？」

主君の為に死地にすら喜んで向かう人間。

少しだけ、美須々・明埜・琉生の気持ちが理解出来る。私はいつから己が馬鹿と呼んだ存在になったのかと、笑みを浮かべた。

対して白蓮は波才に目を奪われていた。

主君の為に己の誇りや信念などいらぬ。ただ、主君の為に存在するかのような形容しがたき姿。

白蓮はその姿に心を奪われた。

いつもくたびれていて、仕事がいやだと怠ける彼からは想像もできないその光景に、胸から熱いものが込み上げてくる。

……そして、その中には自分が知らない感情も含まれていることに気がついた。

思わず頬を赤くする。今の彼女にはこの感情は理解出来ない、興奮しているだろうとそれを無理矢理に理由付けて拳を握り込む。

涙はもう止まっていた。

もう、泣くことは止めた。

立ち上がる。

白蓮は驚くほどに清々しい気分であった。この暗い部屋、その全てが無のように見えない中で、今自分が見えるものは波才だけだった。何故彼だけが見えるのか分からない、でもこれは……きっと。

敬語など、求めるような言葉などいらぬ。

ただ、堂々と整然と命じればいい。

それこそが彼が、波才が求めること。

理解した彼女は涙を拭う。

理解した彼女は顔を引き締める。

そう、彼女は王なのだから。

「董卓を救え」

「御意」

短く、余りにも短い言葉の紡ぎ合い。

だがその短い言葉こそがこの場に相応しいものに想える。

王と黄天に生まれた道化。

今、ここから公孫賛の物語は始まったのかもしれない。

「とうとうわけで董卓さんを助けます」

仮面に工具に、怪しげな道具。

中には龍の爪とか鱗、白虎の心臓などいかがわしげな物がそこら辺にある怪しげな部屋。

ここは私の地下の作業部屋です。部屋の扉には板がかけてあり、

『入った人がいたら宦官へ昇進させちゃいます』

と言う文字が書いてあります。

これできつと城中の兵士さんが押し寄せて来るだろうと思ってお茶を用意してるのですが、部下である三人娘以外は来ません。

あるえ〜？

一度白蓮さんが来たのですが、開けて中を見た瞬間何事もなかったように閉めて、何事もなかったように帰ってしまいました。……何故でしょうね。

あと一回、曹操さんとこの間諜が入って来ました。

嬉しくて宦官さんにしてあげようと思いい四肢を固定していざ宦官の

世界へ……と思ったたら、知りたくもないことをべらべらと話してくれました。

よっぽど嬉しいんだと思って宦官にして故郷に帰してあげました。泣いて喜んでいました。

いいことをした後は気持ちが良いですね。

何故か後ろで美須々は顔を青くしていましたが。明埜は大爆笑してたのになあ。

で、その時の歓喜の声が城中に聞こえたらしく、城の皆さんにはここは「魔の部屋」として近づく人はいません。

なんで魔なのかは気になりますがまあいいでしょう。

とにかくここは聞き耳をたてる者もないので内緒話にはちょうど良いですよ。

「……………」

昨晚あったことを話したら皆さん急に黙ってしまいました。

琉生以外の二人は口を開けて惚けています。

ちなみ琉生は私が制作したモツツアレツラをむきゅむきゅと食べている。

いつか作っておいたチーズがちょうど良い感じに出来てきたので振る舞いました。

先に白蓮に試食してもらったところ大喜び。

この三人も気に入ったようです。

次はワインかな？

南蛮探ればほとんどの果物がありそうなので、数年がかりではあり

ますが制作してみますか。  
モツアレッツラモピザとかグラタンに使えるいろいろ料理の幅が  
広がりますね。

……って二人が何故かニヤニヤしています。  
なんででしょう。

「どうなされたの？」

「どうなされたって……ねえ？」

「ケケケ……旦那ラシイツチャラシイナ」

そう言って顔を合わせて笑いあう二人。

この空気は暖かくて好きなんです……なんかもやめますね。

「まあいいでしょう、と言うわけで董卓を救出します。明禁、間諜  
と仕込みお願いしますね」

「イイネエ…久シブリノ本職ダ。南蛮観光モ悪クハナイガヤツパコ  
イウノガイイヨナア。アレカ？旦那風ニ言エバ『ロマンティックガ  
トマラナイ』ダツケカ」

「微妙に違う気がしないでもないですが、まああってるかと」

彼女には私の料理のために材料探しをやってもらってましたからね。



本当にお世話になっていきます。

明埜は袖の中から資料の束を取り出すと、私に「ホレッ」と投げ渡した。

思わず受け取るものの……えくと、あなたの袖はどらえもんの四次元ポケットですか？

手裏剣といい、鎖鎌といい、薬品といい、たまに酒が出てくる事すらある。謎だ。

あ、もしかして「枯れた樹海」フストカーベット?つまりぶつ殺す。

「アゝ忍ノ数ヲ増ヤサネエト。ソノタメニ曹操ノ方ヲ少ナクスル必要ガアルナ」

「構いませんよ。忍には何時でも動けるようお願いします。最悪、貴方が軍から抜けても構いません」

「……内政と軍備の面で明埜が抜けるのは厳しいですね。私と琉生の二人では補えぬ所があります」

「……………」

琉生と美須々はいい顔はしませんね。

出来ぬ事はないでしょうが、人が減るのはやはり厳しいですか。

「私としてはあと一人、せめて一人使える人材が欲しいところです」

苦し紛れに美須々が声を上げる。

何気に人材不足です。いや、よくこの四人で回せていると褒めても良いでしょう。一人というのも最低限の数。本当はあと五人いようが足りません。

国を回したり戦をするのに将はいくらあっても足りない。

でも、全く来てくれません。

みんな曹操とかおーほっほっほとかに流れていきます。

おい、お前ら英雄もいいが普通もいいもんだぞ？今なら飴ちゃんあげるぞ？

とは言つたものの、ああ、望みは薄いでしようなあ。

馬鹿げた事言つても言わなくても来ないんですもの。みんなそんなに英雄が好きか？私も大好きだよ。でも今回はかりは妥協して欲しいですよ、はい。

妥協なんて言つたら白蓮は涙ぐむでしょうが、本当に苦しいのだ。私以外少数精鋭であると誇りたいがですが少数すぎて死ねます。戦の前に過労死で死にます。

おい、この世界に労災はないのかつての。

無理なのが解っているのか美須々も諦めながら言つてまよね、絶対。

「それにもう一人いれば波才四天王に……」

何か言つたようですが小さくて聞こえませんでした。

隣の明埜は聞こえたのか「何言ってるんだ？」みたいな顔で見えています。

琉生は何故か目を輝かせている気が……後で聞いてみますかね？

「無理でしょうね……董卓から将を引き抜かないとこの先戦えません」

「……トイウカソウシナイト戦ウ以前ニ内政ノ過勞デ死ヌナ」

「戦で死ぬのならまだしも、書類に埋もれて死ぬのは……」

「……………」

何気に一番琉生が抗議の視線を向けてきます。

ほとんど彼女が軍を統括してるので疲労もそれなりになるのでしょう。

聞けば一回書類に埋もれていたところを美須々に保護されたようです。

ごめんね、琉生。

過労死するなら先鋒はたぶん貴方です。

……私は最後まで生き延びて見せます。

「……………」

なんか更に琉生の視線が厳しくなった気がしますが多分気のせいでしょう。

「基本方針としては余り戦わず、獲物は最上を狙いましょう。単純明快、下手なことやれる労力なんてないですから。人材の確保及び我が主の名声を高める。これを基準とします。部隊は既存の訓練された兵のみを使いましょう。何かご質問は？」

「主、新型の投石機及び弩砲、長弓兵はよろしいので？それと馬の鞍なども」

「使えば楽になるでしょうが目をつけられますからねえ……他の群雄達に下手に目をつけられる方がやっかいです。なのでそれらは使えません。それに、兵は数が足りませんって」

そうそう、新兵器の開発に成功しました。

新兵器の開発をしようとレビュシエットの開発に成功。

こちら既存の物は移動が出来ますが射程距離、発射物の重さと量に不安を感じます。

ですがトレビュシエットは動けず、固定型ですが巨大な錘の位置エネルギーを利用して石を投げるので射撃距離を自由に調整でき、精度も高い。

記録によれば最大約140?の物を300メートル飛ばしたという化物です。

この時代から約1000年後のオーパーツですがまだこの程度は再現可能です。

次にバリスタの製造。

対城壁、迎撃用に製造しました。

どうしても投石機では放物線を描いてしまうので水平線上には狙えません。

その為にバリスタを製造。

それと歩兵用にクロスボウを作ろうかと思ったのですが短距離であり、打てる量が少なすぎるので却下。

ならば時間はかかりますが生産が楽であり、長距離である長弓を採用。

火薬があれば戦いの幅が広がるのですが製造が難しく時間がかかるためそこら辺は諦めましょう。

無い物をねだつてもしょうがないですからね。

それにどれもがまだ開発に成功というだけで、実装するにしても数が少ない。作るお金もない。

比較的安価な長弓兵も私の配下である黄巾党の残党達の兵達2000名がやっと使える程度だ。

こう考えるとクロスボウは使いやすから作るべきか…。

「ナラ旦那ノ重装兵ヤ騎兵ヤ長槍兵モダメダナ。目立ツシソモソモアレハ白兵戦用ダ、城攻メハ別種。ソレニ金銭ノ都合デ重装兵ヤ騎兵ハ数が少ナイ。……コウ考エルトマジ貧乏ダナ公孫贗軍（ウチノ家）」

本当に貧乏です。

夢に向かって羽ばたこうにもお金が無くて羽ばたけません。

嫌な時代になったなあ。夢で飛ばせるよ、お金とか現実臭いのいら  
ないから。

商人の誘致や国土の発達で以前よりも財政は数倍はマシになったの  
ですが……ああ。

領土は手狭。そもそも商人が来にくい場所。便利になるにつれて問  
題が。お金が足りない。資材も足りない。というか人材が足りない。  
人材が足りない。

大事なことなので二回言いました。  
せめてもう少し有能な人間が後数人いたらいいのですが。

お金もこれ以上やろうとするとどうしてもものし掛かってくる問題で  
す。  
いくら実入りが良いと言ってもなあ。……袁家の広大な領土と膨大  
なお金が羨ましいです。

でもそれだけの好条件な所で君主が馬鹿というのはなあ。

正直、上がりっかきとして武将もある程度有能であれば天下十分狙  
えますよ。

外交策で他国を味方につけてうまく立ち回り、この連合で名と地位  
を得て内政により国土の発展を図る。

袁家という名門のネームバリューを最大限に利用し、人材・外交に  
有利に。

それにこの群雄時代で広大な領土と膨大なお金を持っているってだ  
けでよっぽどの馬鹿をやらない限り、袁家は負けませんで。

一番はじっくりと焦らず、確実に仕留める。

そうすれば問題は無いでしょう。  
でもそれには明瞭な確固たる王が必要なのですが…。

「オーホツホツホ」

ああ、幻聴が聞こえた気がします。

兵士もろくに訓練させないでなにやってるんですかあのお馬鹿さんは。

私の華麗な袁家の兵達が負けるわけがないって何それギャグ？

数で勝てるなら黄巾党が今頃全土を闊歩してますよ。

故に兵に走る者有り

弛む者有り

陥る者有り

崩る者有り

乱る者有り

北にぐる者有り。

凡そ此の六者は、敗るの道なり、將の至任、察せざる可からざるなり。

孫子さんの言葉です。

敵を見ずに戦い、兵を將が下ろしきれず、將が自分勝手に戦い、陣形なにそれおいしいの？状態、訓練もろくにせず、己らを過多に見て敵を見ず。

これが戦で滅ぶ者の道だ。だからこそ上に立つ者は聡明でなければならぬという言葉です。

……まとめ役の顔良さん。

貴方はおそらく私達の敵になるでしょうがそれでも言いたい。

とりあえず職場変えなさい。

おすすめは過労死ルートである公孫贗軍です。

普通な君主と楽しい仲間達がお待ちしています。

笑顔がある意味溢れている素晴らしい職場ですよ？

「現状では通常の部隊で行きます。……それと、宦官連中には踊ってもらいましょう」

「踊る……とは？」

「彼ら舞台は決定していますが出番はまだ決まっていないのですよ。下手すればいつまでも上がらないし、ならば私達が出番が引きずり出しちゃえばいいのですよ。まあ最初で最後の舞台になるでしょうけどね」

そう言うと美須々は頭にはてなを浮かべている。

反対に明埜は楽しそうに笑っている。どうやら理解出来たようだ。

……琉生？琉生はそこでお茶菓子食べています。

「ケケケ…ホント旦那八悪ダナ。ソレデ勇者様ヲ演ジテ哀レナ才姫様救ウツテワケカ。確カニイイ考エダナ。才姫様八旦那ニ惚レルネ、デキレースツウヤツカ」

「????？」



「ダガ、ソレダト後々宦官共二氣ガツカレルンジャネエカ？連合モ董卓ニ逃ゲラレタトナルト面目ガアレダシヨ」

「だ・か・ら、宦官なんてみんな殺せばいいじゃないですか、もちろん董卓もね。董卓も大陸中探せばもう一人ぐらいいるでしょう？」

「確カニソレナラ上手ク収マリガツクワナ。デモソウソウ見ツカルカネ？」

「顔もぐちゃぐちゃにすれば良いので面相はきにしないでいいですよ。髪と背丈似てれば十分。首は晒されれば腐れてさらに気にもならなくなるし。……くれぐれも捕獲の際に足跡残さないでくださいよ明禁。トラップツールだけ持って行って雷光蟲忘れたとかも無しですよ？調合できやしねえ」

「……マア心配スルマデモネエヨ旦那、任せトケツテ。ヤル瞬間マデ生カシテオク必要アルダロ？時間アルダロウシソノ間部下二代ワリデ遊バセテモイイカ？最近ゴ無沙汰ラシイカラ士気ガアガルワ」

「んゝまああまり乱暴はしないでくださいね？違和感が検分した際に見つかつたら危ないし」

「薬漬ケニスレバ抵抗ナンザシネエヨ。ナンナラ旦那ガ最初ニ食ウカ？ソレナラバナルベク面ガイイノ選バナエト」

ここまで一切口を挟まなかった美須々であったが（理解出来ていなかったのだらう）、『食べる』の一言に思わず身を乗り出す。

「明埜、董卓って食べられるんですか？美味しいのですか？」

「テメエハ死ンデ口食欲馬鹿（美須々）」

「へ！？何故ですか!？」

「はいはい、喧嘩しない。明埜、私は魔法使い目指してるんで食べません。顔なんざどうせめちゃくちゃになるんですから体が似ているのを選んでくださいな」

「……意味ハワカラネエガ真意ハ理解シタワ、理解シタクモネエケド。ソリヤソコニ八手又カネエツテ、又イタラ全部パーダロウガ」

「????？」

美須々……これを解れとは言いませんからせめて自分の名前を間違えずに書けるようになってください。

琉生は最近文官も行けるようになってるのに貴方は自分の名前すら……。

ん〜順調に軍議もどきは進みますが不安ですね。

この世界は余りにも優しく、壊れている。

なにか強制力があることは先の大乱でよく解りました。

なればこそ、この連合。得られる宝は全て得なければこの先、世界に愛された者達に勝てる可能性すら無いのかも知れません。

明埜から渡された資料を眺める。動員出来そうな兵は2万か……。

後將軍袁術、冀州牧韓馥、豫州刺史孔？、？州刺史劉岱、河内太守王匡、勃海太守袁紹、陳留太守張？、東郡太守喬瑁、山陽太守袁遺、濟北相鮑信。

彼らが実際には参加していた者達だがこの世界で参加している中で目立つのは袁術、袁紹、公孫贛、曹操、劉備、馬？ぐらいかなあ。劉備がこの時期既に領土を得ているのと孫堅が死んでいるというのがネックですね。

やはりパラレルワールド、目立つ者達がとことん目立ってます……面倒くさい。

パラレルワールドの呂布とか止められるのでしょうか。どないすんべ。

多分私達では勝てないでしょう。となれば他の方々にお任せしましょうか。

しかし、呂布を除いても捕らえるべき勇将。

私では彼女達は止められもしないであろう。私の武勇などたかがしれている。

だが、私には幸いにも一級の武を持つ部下に二人も恵まれた。本当に私にとって過ぎた部下ですよ。貴方達は。

そう思い彼女達へと視線を動かす。

美須々、琉生。貴方に私達の命運を託しま

「琉生……董卓って食べられるんですか？美味しいのですか？」

「……私にそんな趣味はない。味は人それぞれ」

「ほう！！董卓の味は人によって変わると、それは素晴らしい！？  
それは是非私も食べてみたいですね」

からからと楽しそうに笑う美須々に、明埜と琉生と私は何とも言えない視線を向ける。

……あれ？何か急に不安になってきた。

ねえ、大丈夫だよね？

……ねえ？



あああ…あああ…あつあああああ…！ふああああんつ…！  
野菜屋さんからおまけつけてもらって良かったね母上！ああああ  
ああ！かわいい！母上！かわいい！あつああああ！  
この！ちきしょー！やめてやる…！現実なんかやめ…て…え！？見  
…てる？絵の母上が僕を見てる？

絵の母上が僕を見てるぞ！母上が僕を見てるぞ！絵の母上が僕を見  
てるぞ…！

頭の中の母上が僕に話しかけてるぞ…！よかった…世の中まだま  
だ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおおお…！僕には母上がいる…！やったよ母  
上…！ひとりでできるもん…！

あ、母うえええええええええええん…！いやあああああああ  
あああああああ…！

あつあんああつああんあ母上ああ…！は、母上…！母上ああああ  
ああ…！母ううううああああ…！

うううううう…！俺の想いよ母上へ届け…！三国志の母上へ届け  
…！

「何やっているんだ馬鹿息子があああああつああ…！…？」

「そげぶっ…？」

女性が書かれた絵を見ながら、女性のものであろう服を抱きしめて  
いる男。

彼をきつね色の髪の毛の眼鏡をかけた少女が蹴り飛ばす。顔面にクリー  
ンヒットして宙を回転、鈍い音と共に落下した彼であったが…何  
故かその顔は不気味なほど笑顔だった。

そんな彼を少女は胸元を掴みあげて持ち上げる。

「ぐ褒美www来たこれwww」

「母親の服抱きしめて何とち狂った事ぬかしてやがる孟宗…？」

「違うね、愛だね。これは母上への愛だね。というか肩で息をして

頬を上気させた母上マジ萌える！！」

「いつぺん死ねええええええ馬鹿息子おおおおおおお  
お！！」(ドグシヤア！！)

「ご褒美あざああああああああす！！」(ブフオオオ！！)

何度殴られても笑顔。そんな彼の名は孟宗。

父を亡くした彼は、幼き頃孔明や鳳雛と同じく学問所に通いつめ、  
母親一人の手によって育てられた。

幼き頃からの猛勉強の努力が実り、彼は宰相の器があるとまで評さ  
れるにいたる。現に今やかの有名な呉の将の軍史となっている。

だが、重度のマザコンだった。

「母さん！！母さんの寢床の雨漏りが酷いよね！！寝てる間に僕が  
屋根に張り付いて雨を受け止めてあげるよ！！」

「んな馬鹿な事ぬかす暇あったら忠勤に励めやあああああ！！」

「ごふああああ！！出た、母さんの拳だ！！これで後1000年は  
戦える！！」

呉の重要な収入である魚の管理をするようになってからは。

「母さん！！魚を沢山僕自ら捕ってきたよ！！さあ新鮮なうちに」

「籠五つなんて食べるか！？というかお前がそんなことやったら悪  
徳官吏に疑われて私までご近所の目が痛いわあああ！！」

「ごふああああ！！母上最高！！」

などと……まあ、母親思いであった。

だがそんな彼の愛する母親は重い病にかかった。

「母さん！？大丈夫！？」

「…………五月蠅い馬鹿息子。…………長くはないかな」

「！？？」

「あゝあ、ごほごほ。げふうー！！」

「母さん！？」

「…………死ぬ前に、タケノコ食べたかったな」

儂げに笑う母。季節は冬。タケノコなど生えてはいない。それは彼女自身も十分に分かっていた。

だが、額に汗を浮かべて苦しげに笑う母に彼はいても立ってもいられなくなる。

「僕が、僕がとつてくる！！」

母親の制止を振り切り彼は山を駆け、竹林へと辿り着く。雪に覆われた竹林。彼は自らの手が霜焼けになり、赤く腫れ上がるのも気にせず懸命に手で掻き回す。何度も何度も。だが見つかるはずもない、冬に出るタケノコなどないのだから。

だが彼はそれを知つていようと、涙をこぼしながらも、雪に打たれながらも必死に手を動かす。もはや手の感覚などない。自らの体は氷のように体温を奪われる。

それでも頭に苦しげに笑う母を思い浮かべると手を動かさずにはいられなかった。

「どこだ！？どこなのだ！？母親の願い一つ聞けぬ男に国が守れるか！！くそつたれが！！」

涙し彼は天を仰ぎ願う。そして自らの剣を抜き放ち己が咽に突きつける。



「天よ！この孟宗の命が惜しければ我が願いを聞き届ける！我が才が惜しくば我が願いを叶えるのだ！」

涙を流し天へと咆哮する。

すると、突然、雪が溶けてあたり一面からタケノコが生えてきた。

天は彼の命を惜しんだのだ。

彼は喜びそれを持ち帰って母親に食べさせる、すると母親は病気が瞬く間に癒えた。だが

「……母さん、その、なんで私土下座してるんですか？」

「あんなね、何馬鹿なことしてんの？私が死んだら俺も死ぬ？ふざけんな」

「……ごめん」

「あんたはこれから長い人生生きるの。こんな一人の老いぼれのために命かけんじゃないわよ」

そう言つて母親はそっぽを向くと、ぼそぼそと顔を赤らめて呟く。

「……ありがとう。でも死ぬんじゃないわよ馬鹿」

「……！？母さん俺だ！！けっこ「やつぱ死ぬ馬鹿息子！！」ぎざああああああ！！！」

孟宗、字は恭武。

江夏の人。呉の大臣。「二十四孝」の一人に数えられる。

南陽の学者・李肅の元で学問に励み、昼夜真面目に学問に打ち込んだことで才能を認められるようになり、李肅から「お前は宰相となるべき器だ」と称された。始めは驃騎將軍朱拋の部下であったが、やがて朱拋も彼の才能を認め、呉興の県令となる。最終的には呉の最高官位の一つである司空まで上り詰めた。高官に昇っても、陸凱や丁固らと共に常に国家の行く末を案じ、腐心したという。

非常に親孝行な人物として知られており、彼の母親にまつわるエピソードが正史にもいくつか記されている。

朱拋の軍営に母を呼んで共に暮らしていた時、雨漏りがひどい事を孟宗が母親に謝罪したところ、母親から「今はただ忠勤に励むべき時です。雨漏りがひどいぐらいで泣く程の事ですか」と言ったことが朱拋に伝わり、孟宗は魚を管理する塩池司馬に任命された。

魚の管理を仕事とするようになった孟宗が、自ら網を投げて魚を捕り、漬物にして母親にたべさせようとしたところ、母親から「魚の管理をするのがお前の仕事です。そんなお前が私に魚を送ってきては、悪徳官吏の嫌疑を避ける事はできません」とたしなめられた。

数ある中でも特に有名なのが孟宗竹の由来となった話だ。

あるとき彼の母親が重病になった。かれはせめて母親の好物である筍を食べさせたいと思うが季節は冬。とれるはずがない。

それでも彼は竹林へと赴き、必死に探して天へと懇願するとその祈りが通じたのか。なんと筍が生えてきたのだ。

彼がそれを喜び勇んで持ち帰って母親に食べさせるとその病気は瞬く間に治り、ついには天寿を全うした。

それを伝え聞いた世の人々は、彼の母親を思う心に筍が応えてくれたものであると噂した。この筍がいわゆる「孟宗竹」モウソウチクで、このエピソードにあやかって名付けられたといわれている。

また、彼の母親が亡くなったとき孫権が業務停滞を防ぐため服喪を禁じる法令を出していたが、孟宗は母の葬儀のため禁を破ってしまった。本来なら死刑になるところであったが、顧雍や陸遜のとりなしもあって、罪一等を減じられたというエピソードもある。

作者が書いたらあれになってしまったが、実に優秀で親思いの男だ。

……すごい男だ。

彼が上り詰めた司空は三国志で言えば曹操や董卓、そしてかの有名な孔子がついた位である。彼がどれほど優秀であったかが伺える。

……なんで作者は彼をこんな風に書きちゃったんだろう？

第二十四話 この中に1人、お人好しがいる！（前書き）

オーケストラを先導しようとする者は聴衆に背を向けねばならない。

くジエームズ・クルークく

## 第二十四話 この中に1人、お人好しがいる！

どうも波才です。最近のマイブームは夜の幽州の町を配下と（普通の兵隊さん）一緒に巡る事です。

仕事終わりの濁り酒うめえ。大人な幽州でうっはうは。えっちいお店は性病が怖いのでいけません。

……別にいけなくてもいいよ、ほら、私って魔法使い目指しているし。

まあそれはおいといて、反董卓連合のみなさんが集まる地点にやっとの事で到着しました。

この時代には自動車なんてあるわけもなく、当然馬に乗ってきたんですけど……腰が痛え。

思わず腰に手をやって擦る。まったく、くらがな馬乗りがここまできついものだとは……そりゃ私だって前々世で馬に乗りましたが現代日本で馬乗りするわけもなく、今の私の乗馬技術は無くなったにも等しいです。

そんな私にとって幽州からの長旅はかなり応えた。

本音を言うところの集合地点に着いた時点でベッドにルパンダイブしたい気分だ。

まあそんなことしたらけつに蹴り入れられるが。

もう一つ、疲れた理由がある。

今私は狐の仮面を付けてはいない。代わりに付けているのはジェイソンのような目と口の所が空いた麻袋だ。

何となく気分を選んできたが後悔している。蒸れるし暑いし、かといって代えは持ってきていない。

人間勢いでやったことは後悔しかしねえ、と自分の馬鹿さ加減に呆れていた。

そんな陰鬱な気分を紛らわすべく、周りを蠢くやからを観察する事にした。

いろんな所の兵隊さんがたくさん蠢いている。まだ蟻の群れ見ている方が気分が晴れるな。様々な旗が自らを主張するように風に揺られているのを見ると、何とも言えない無糞悪さが込み上げてくる。

……にしても、みなさんずいぶん勢力ごとに服装違いますね。地域の違いか？にしてもここまで露骨にそれが表れているのも珍しい。

特に三国志の主要人物というか有名所が独特だな。

解りやすくして良いですけど、これって下手に奪われて鎧を他所に使われたら大変では？解りやすいのも仇となりますからね。

指定された地点に赴く途中に見えたお堅い感じの青い鎧は曹操さんとこのかな。

まさに戦場で戦う兵士の服装と言ったところか。様々な戦いに臨機応変に対応できる、ようするに標準的な鎧。まあ色は普通って感じではないが。

さらに奥の方を見れば呉の旗が風に揺れている。

呉の赤い服はずいぶんと機動性重視ですね。急所などの要所のみ鎧を装備しているだけだから極めて動きやすい。

軽いので移動能力や素早い陣形の変化に対応し、船の上でも戦いや

すい服装と言ったところかな。ああいうのは初めて見るので想像するだけで面白いですね。

彼らがどんな戦いをするのかとても楽しみです。

そして何気なく本陣と思われる所へ視線を動かすと……。絶句した。

趣味の悪い金ぴかの鎧が行き来している。おいおい、なんだあれは？今日はギルガメッシュの記念日か？あいつ確か並の酒には満足しねえぞ？

あれだと太陽の下で戦うには味方同士で太陽の光が反射し合い、目くらましになっちまう。

防御力はあるんですけどあれはないだろう。というよりこの時代にメッキを施すなんてどんな成金かっつての。

少なくとも関わりたくはないなあ。

そんな事を考えているうちに横を緑の鎧が通り過ぎる。他と比べる点としては頭に兜がないことがあげられる。つまり視野が広いっつうことだ。多少防御面は落ちますがそれを補える。

風の変化も感じ取れるので曹操さんの所とは一長一短かな。

みなさん個性的ですねえ。

それに比べて我が軍は公孫贛軍なので普通です。

色も地味、兵士達も地味、君主も地味。

結局は普通が一番。

「お、おい。あれはどこの軍だ？」

「ありや公孫贛軍じゃないのか」

「見て見ろよあの異様な姿と先頭に立つ変なもの被ったやつ…なん  
かおかしいぞあいつら」

あるえ？

みなさん何故か注目浴びちゃってます。

私何か間違っちゃいましたか？

我が軍の兵士の内私の部下、黄巾党時代に私に付き従っていた人達  
がまた私のもとで戦いたいと来てくれたんですが彼らの服装はちょ  
っと違います。

本当にちよつとですよ？

馬にまたがり全身真つ黒な甲冑に身を包んでそれぞれがハルバート  
持っているだけです？

ちなみに馬も装甲済みです。

しかもその全てが私の鉾石の知識と氣の特殊な精錬たる製造法、波  
才のアトリエ方式により、独自の金属の生成に成功。

軽く、堅く、鋭く。

秦の始皇帝時代に作られた製法の一つにオーパーツがあつた。それ  
はなんとメッキ。

この時作られた特殊な製法により生成されて研磨された剣は、現代  
においても錆びず、曲がらず、輝きを失わずに光り続けている。漢  
の時代に作られた剣は錆びつき、朽ちているのだ。

何らかの過程で失われて歴史の影に消え去ったオーパーツ。

それを応用、発展！！



日本刀で一番切れる刀って何？それは車のスプリングで作った刀さ  
！！氣とかまつたくない世界で五十人切ってもまだ切れるとか異常  
過ぎる。

こっちに持ち込めばさらなる異常！！オーパーツと現代で混ぜ合わ  
せてチューニングしてシンクロしてアクセルシンクロ！！

これぞ公孫軍の突撃部隊たる鎧連隊！！

幽州の時代の先取りは世界一いいいいいいいいいいいいいい  
いいいい！！！！なんて……。

……ってあれ？

なんで彼らがここにいるんですか？

お留守番でしたよね？

鎧達はお留守番のはずですよ？

なんで秘蔵の兵がここにいますか？

おい、テンション上がってよく考えなかったけれどこれおかしいぞ。



ああ、いい天気ですね。

「死ぬがよい」

「ちよつと待て！？今割と本気でやっただろ！？下手すりゃ死んでたぞ！？」

いや、逆に聞きますけど何で貴方普通に生きてるんですか？感覚的には「殺った」って感じが確かにしたんだけどな。

「すみません、次は確実に仕留めます。琉生」

「謝るところはそこじゃってうおあああ！？」

後ろから琉生が斬りつけるも、すんでで転がって避けた白蓮。泣き別れた髪が風にながれて消えて行く。  
惜しい。あと少しで首を刈れましたね。

「琉生……？お、お前は私を本当に殺そうとしないよな？な？」

いましてがた殺気増し増しで斬りつけた相手に向かってそんな言葉言えるなんて、ある意味凄い。  
関心するなあく憧れちゃうな。

と、ここで白蓮が目を見開く。あ、ようやく解ったようですね。顔

が土気色になっています。

口の片方だけつり上がって乾いた笑いをこぼす白蓮。ついでに機械仕掛けの人形のようにぎぎぎと私を見つめる。こっちみんな。

そこで私はここ一年で天和様達にも見せたことのないような、すばらしい笑顔で見つめ返す。

白蓮さんも全てを超越したような笑いを見せてくれます。  
良い主従関係でしたね。

「主、なぜ幽州にいるはずの鎧連隊がここにいるのです？って何を  
しているんですか？」

そこに姿を現す美須々。

白蓮の顔には希望の女神を見つけたような表情。

「ええ、実は」

かくかくしかじか四角いムーブ。

「全員での顔合わせがあるので殺すなら死なない程度に殺してくださいね。それでは」

美須々、もの凄い「どうでもいいからとっとと働け」っていつもの

顔止めてくれませんか？  
その笑顔で何人のメンタルがランゴスタな新社会人が潰れたと思っ  
ているんですか。

あ、見捨てられた白蓮がブルーハワイ並みに真っ青だ。  
青蓮に改名したらどうですか？なんかそっちの方がカッコいい。

残念ですが白蓮、その救いの女神は私の部下です。というより貴方  
の武将全員が私の部下です。

ついでに貴方が連れてきた鎧連隊の面々も今白蓮の周りを囲んでい  
る。ええと、こんな時なんて言うんだっけ？あ、思い出した。

まさに四面楚歌。

礎歌の代わりに明埜のヘビメタでも聞かせて上げましょうか。この  
状況にはピッタリです。

「さて、言い訳があるのなら死ぬ前に聞いて上げますよ」

やっぱり良い笑いで話しかける私。

琉生は今か今かと私の指示を待っています。あ、目が白蓮の首と胴  
体を交互に見ていますね。私としては首がオススメですよ？

そう目で話すと彼女の目線が首に固定しました。  
めでたしめでたし。

「パイパイちゃん!!」

ん？

聞き慣れない声ですね。

どなたでしょうか？

そう思って私が振り向くと……そこには桃色の髪をなびかせて走り寄る少女がいた。

追記、彼女の胸が……OH 揺れてやがる。

）劉備 side（

洛陽の民が酷い目に遭っている。

そう聞いた私はいてもたってもいられずこの董卓連合に参加した。まだ兵は少ないけれども頼りになる愛紗ちゃんに鈴々ちゃんに星ちゃん。

それに軍師の朱里ちゃんに雛里ちゃん。

みんながいればきつとどんなことでも乗り越えられる!!

そう思ってここに来ただけ。

「うわあ。すごいね、あの人達」

私が見たのは全身を鎧に包んで見たこともない槍のような物を持った部隊。

よくわからないけどすごい感じがするよ。

それにかっこいいなあ…。

「……よく訓練もされていますね。それに彼らが纏っている空気が他とは違います」

「うん、曹操さんの所もすごいけどそれと同じ……それ以上かも知れませんがそれにあの鎧は……」

そう言って考え込むのは朱里ちゃんに雛里ちゃん。

へえ!!すごいすごい!!

曹操さんと同じぐらい強いなんて。

これで洛陽の人達もきつと助けられるよ!!

「すごいのだ!!かっこいいのだ!!」

鈴々ちゃんも目を輝かせて見てる。

「だよねだよね!!かっこいいなあ……」

「桃香様!!もう少し落ち着きを持って冷静に彼らを見てください」

そう呆れて言う愛紗ちゃん。

えと……冷静に見るんだね。

冷静に……。

冷静に……。

「え、うん。…かっこいいよね?」

がくつと体が崩れた愛紗ちゃん。

うん、やっぱり何度見てもかっこいいよ!!



「……………」

あれ？星ちゃんが何故か真剣にあの人達を見てる。

「桃香殿。彼らは伯珪殿の兵のようですよ」

その言葉に私と愛紗ちゃんと鈴々ちゃんが驚く。

え？確か私が黄巾討伐の時にいたときはあんな人達いなかったよね？

「白蓮殿の兵ですか…彼らのような者達は見たことがありませんね」

「鈴々も見たことないのだ…！」

一緒に白蓮ちゃんの所で黄巾退治をしたことがある二人も私と同じみたい。

「話によれば公孫贄さんのもとに黄巾の乱が終わった後、有能な方々が入ったとは聞いています。その人達なのではないでしょうか」

「話によれば農政改革に軍の改革、町の開発を行って公孫贄さんの町は以前よりもはるかに良くなったと聞きます。これはその彼らの軍なのかも知れません。それにしてもこんな兵隊さん達…初めて見ます」

「ふむ…だが白蓮殿に付き従い、なおかつ有能とは。どのような者達なのでしょうか」

心底驚いたと笑うをする星さんに白蓮さんのことを知る人達は乾いた笑いを漏らす。

星ちゃんや私達が去るとき白蓮ちゃんは……なんていうか、うん、よかったね白蓮ちゃん!!心強い仲間ができたんだね!!

……そうだ!!久しぶりだし白蓮ちゃんに会ってみたい。それに白蓮ちゃんの新しい仲間の人達も紹介してもらおう!!

「あいさつしてこよう!!おいパイパイちゃん!!」

そう言って私は走り出す。

「と、桃香様!?!白蓮殿は無害でしょうが彼らが危険であることも……って聞いてください!!」

（波才 side）

突然現れた少女。

桃色の髪、どことなく女子高生の服（イメクラっぽい感じはするが）  
、間違いなく特別側の人間だ。

この状況に目を可愛らしくパチクリさせている。

「というかパイパイちゃん！！って誰ですか？白蓮のことですか？

ジッと私は白蓮の胸を眺める。

「な、なんだよ」

「……はあ」

「なんでため息！？」

彼女はパイパイっていうほど大きくありませんよ。

並です並。

普通です。

決っっっっっっっしてそんな大層なものは持ってません。

「……というか桃香じゃないか！？」

今度こそ救いの女神が現れたと喜ぶ白蓮。いや、その救いの女神貴方の名前間違えていませんでした？

にしても桃香……真名なのだろうが、どこかで聞いたことがあるよ  
うな名前ですなぁ。

誰だっけか？

そう思いまじまじと少女を見つめます。

「……………」

うん、解りません。

髪は桃色。『とうか』の『とう』はもしかしたら『桃』と書くのか  
もしれない。

相も変わらずこの人達は変わった髪の色ですね。

服はイメク……変わった学生服みたいなのを着ています。あと胸が  
大きいですね。

彼女がパイパイちゃんと呼ばれるべきなのでは？

って何を考えているんだ私。

……妹よ。兄はもう駄目です。セクハラ親父になってしまいました。

軽く自己嫌悪に陥っていると。

「あ、もしかして貴方が白蓮ちゃんの最近仲間になったって言うお  
友達ですか？」

こちらを伺うように顔を覗き込んできた。その時彼女から香る匂い  
は何とも言えない良いものであった。

……にしてもこの少女、この状況でよくそんな事言えますね。

そして私のこの麻袋マスクはスルーですか。そうですか。  
え？別にへこんでなんていませんよ。本当です。

でも彼女、脳天気というかのほほんとしすぎといいますが……。普  
通はこんな麻袋警戒するだろうに。

私はため息をついて右腕上げます。

それを見た連環馬の皆さんが肃々とその場を離れる。よく訓練され  
ているなあ、我ながら感心する。

その光景を見て彼女も感動したのか「うわあ〜」と目を輝かせる。

……やっぱりこの子場違いなのでは？

というより私の麻袋には突っ込まないのですか？いいかげん泣くぞ  
ボケ殺し。

全員が退いたことを確認すると彼女へと向き直る。

「はい、白蓮とはとても仲良し、みんなの友達の単経です」

そついうと「やっぱり」と笑いながら言う少女。反対に恨みがまし  
く見つめる白蓮。

あ？私の予定をさんざんめちゃくちゃにしてくれて、あげく自立ち  
まくって何睨んでやがるんですか白蓮。  
殺気ましまして睨みます。

ギョ

ツサ

目を逸らしてももう遅いです。

まあ連れてきちゃったのはしょうがないし、舐められないようにある程度の牽制になると思えばいいかなあ。

役にたつのかもしれないし。前向き考えよう！！ほら、過負荷……じゃなくて可符香ちゃんもポジティブに生きろっつてるし。なんか嫌な文字に変換されたけど気にしない！！

「あ、あの〜どうかしたんですか？」

「へあ？あ、いえいえ」

この子、桃色リボ……天和様とかぶるなあ。

桃色脳天気さんが……春先にいる愉快的な人みたいな感じになってしまします。

いや、あながち間違ってもいない気がしなくてもないなあ。

この子のほほんとしすぎですよ。というか桃色の髪とか……この世界の髪の色素はどうもおかしい。

あ、そうだ。これで行こうかな。

「白蓮が私の困ることをするのです」

よよよと泣き崩れるまねをします。

うん、きまい。

麻袋男が泣き崩れてても普通は同情なんてわかないもんですが……。

「駄目だよ白蓮ちゃん!」

うん、人が良すぎ!!

「い、いやその……」

ギロリ

「何でもないです。ごめんなさい」

否定しようとする白蓮を、私は少女から解らぬように睨み付け黙らせる。

しょうがないなあ……いい加減かわいそうになってきたので条件付きで手を打ちましょう。

「仕方ありません、連合の皆さんに一発芸を披露して回るか、この連合の間は語尾にちゃんとつけるかのどちらかで手を打ちましょう」

「いや、それ手を打ってないよな!？」

何を言っんです。

良心ポツキリ価格の手打ちです。

……ってそういえばノリで言いましたけど一発ギャグってこの世界にもあるんですか？

あゝ気にしたら負けですね。常識に囚われてはいけないってルイージが言っていたし。

「私、白蓮ちゃんの一発芸見たい!!」

「と、桃香!? 嫌、嫌だって絶対!!」

お。

「うーん、じゃあ語尾『にゃ』を付けて!!…白蓮ちゃんなら絶対にかわいいと思う!!」

「だああああ私に味方はいないのかあああああああ!?!」

……。

私と少女の目が合う。

お互いに笑顔かつ無言で手がちりと握手。

今、私達の心は一つ。

白蓮っていじると楽しいよね

お互いの心が通じ合う。ああ、これぞグローバル化。



「いや！？なんで私よりも単経と仲良くなっているの！？」

無粋ですなあ今私達は友情を確かめ合っているのですよ。

そう思い私は改めて少女を見つめる。

あれ？

そう思い再びこの子を見る。

明らかに特別側、そもそも白蓮と仲が良いだけでそれは確定事項。

何よりこの子自体何か言いようのないものが溢れ出ている。オーラみたいなものが。

……この子の目、おかしいですね。

純粹、一切の曇り無き眼。綺麗過ぎる、あまりにも汚れがなさ過ぎるのだ。

様々な英雄と武将を見てきましたがその誰もが心の奥に黒く渦巻く何かがあった。

孫策。

一見優しげに見える奥に潜む業火。自らを飲み込む狂気と炎。

曹操。

剛毅なる覇者の目の奥に潜む悲しみ。王故に背負う業の重さに嘆き叫ぶ心。

この世界の誰もが目の奥に何かがある。深く、深い何か。

だがこの少女はそれがない。天和様達と同じだ。一切の闇がない。だからこそ戸惑う。もしや彼女は巻き込まれたのだろうか？いや、その割りには戸惑いがない。ならば天和様と同じく消え行く者なのか。

言っちゃ悪いですが彼女には孫策や曹操みたいな王としてのモノは無く、武将・知将の持つ剛気も無い。いや、魅力は異常なほど溢れている気がする。溢れすぎて気分的にラフレシア見ている気分だ。

……魅力チートか。やっぱり天和様とかぶっている。

アイドルとして似たような連中は後からどんどん湧いてくるが、それをどう捌ききり個別化を図って昇華させるかがPの重要な役目だ。うむむ、閣下みたく黒さを天和様を持たせるべきか？純粹かつ悪の乙女キャラはこの時代にあうのだろうか……いや、いける！！

この波才Pの腕の見せ所か！？

「えと？その、大丈夫ですか？」

「黒い衣装に赤いリボン……いける」

「へ？」

「あ、いえなんでもありません」

「……？あ、そういえばちゃんとした自己紹介していなかったね！」

なんか脱線しすぎてた気がします。多分気のせいです。  
それしてもやっぱりこの子……。

優しすぎる。

優しすぎるからこそ人を引きつける魅力。

だがそれはこの時代にはもっとも人が持つべき大切なモノであり、  
もっとも必要がないモノだ。

……彼女と関わっても利益は無いでしょう。

この先、足手まといのようなそんな人間はいらないです。  
ですがそれだけで拒むのは人として駄目ですよね。

純粋なお友達としてならいいかもしれません。というか是非ともな  
りたいタイプです。

間違っても味方にはしたくはないタイプですが。

……ほら、男の正義キャラだと上条さんみたく熱くて許せるけれど、  
女だと何故かラスククラインっぽくてなんか……その。  
すんげえ腹になんか抱え込んでる気がして胃が痛くなる。

あれ？そういえばラスクだっけ？ラクスだっけ？

「そうですね、私は性は単、名は経。公孫贗軍の客将をしております」

そう言って軽い礼を一つ。

「貴方は？」

さて、この少女は誰なのでしょう。

この場に相応しくない人間。彼女はどこのお人好しさんですか？  
少女はにこりと笑うと私の手を取った。

目を光らせていた私だったが……次の言葉でその余裕はどこかへと  
吹っ飛んだ。

それほどまでに予想外すぎた。

「私は性は劉、名は備、字は玄德！！よろしくね！！」

( 。 。 )

( 。 。 )

……え？マジ？

「はぁ……主と白蓮さんのまんざいに付き合ってたのでは私の胃が持ちません」

痴話げんかよりもたちの悪い何か、と美須々は内心評している。言い得て妙なのかもれない。実際に一軍師が発言するにしてもあの子供のよような口論もどきは、少し常識がある者なら眉をしかめる。美須々はかろうじて常識人の枠に収まっている分、内心ひやひやしなから彼らをいつも見ていた。

「主も分かっておられるのに何故あのような……ん？あれは」

ふと目を動かせば、自身と同じく黄巾時代からのつきあいがある同胞の姿がそこにあった。

蒼い髪のショートカット、龍の装飾を施した双剣。

「琉生ではありませんか？何を見ているのです？」

声をかけるが琉生は視線を動かさない。

何があるのかと見れば何も無い……いや、彼女が見ているのは連合の最初の難関である？水関の方角。

「？水関に何かあるのですか？」

「……………」

「それとも虎牢関？」

「……………」

「もしか本拠地である洛陽ですか？」

ここで初めて反応があった。反応と言っても目が僅かに細るといふ些細な動きであったが。

ふと、ここで美須々は考える。

よくよく考えれば自分は琉生の素性を知らない。彼女自身がそれを

話すような人間ではないという事もあるが、そもそも話す必要などまるで無かったからだ。自分とて主以外には話した事がない。

必要が無いことを知ることもある事もないのだ。

それに来るものは拒まず、去る者は追わずが波才のスローガンな事。個人に対する過度な深入りは禁止されている。

自身は農民あがりの賊であるが、琉生はお嬢様とだったい過去を持ち得ても全くおかしくはないのだ。

いわれ無き罪で身分を落とされたり、財産を奪われたりするなどあの腐った漢王朝では珍しくもない話し。

主の場合、琉生は山で拾ったなどと公言している。それもどうかと思うのだが、肝心の琉生がそれを肯定するのだからしょうがない。

「……作戦に支障が無い程度ならば何も言いません。貴方は私よりも頭が良いですからね」

やがて美須々は考えるのを止めた。

頭脳担当は専門外である。自分は槍を振るっていい。後は知らん。つつか自分のことで精一杯なのに他人に深入りしてどうするのだ。という結論に達したらしい。

大きく背伸びをしてその場を立ち去った。

彼女が去った後も琉生はしばらく先を眺めていた。

最も、先ほどとは表情は一変していたが。

「…………ふう」

苛立たしげに息を吐き出す。その顔は今や険しく、普段の彼女を知るものならばこれがあの琉生なのかと驚愕していただろう。

穏やかな水面は今や湖畔の主である龍が荒れ狂い、晴天であった天は裂かれ、生命の大地は震えている。



彼女は今にも舌打ちと唾を飛ばしそうな勢いで荒々しく立ち上がると、再度視線を洛陽へと動かした。

「……貂蝉、何故貴方がこの外史にいますのです。もしや邪魔する気ですか？かつての私の意趣返しのつもりか？」

殴り捨てるように言葉を吐き出した彼女は、再び能面のように『無』を顔に張り付けて歩き出す。

それは彼女がいつもと変わらない『顔』ではあったが、どこか憤りを、怒りを感じている。

横を通り過ぎた兵士は思わずそう思い、礼をとりつつ身を震わせた。

琉生はただ先を見て歩き続ける。

まるで過去を、現在を、未来さえも振り切るように。

「もし、そうならば……殺さざるを得ないでしょうね。矮小な存在に身を墮としたとしても、あの時の私達のようにやすやすと止められるとは思わないことです。かつての貴方が私達を止めたように、私は貴方を止めましょう。この外史の、我が主のためにも」

密かな決意は風に乗れ、蒼天の空へと飛翔する。

黄天は、未だ空には昇らず。

第二十四話 この中に1人、お人好しがいる！（後書き）

Q. 琉生がなんかミステリアス&なんか波才が自由になってきた。これ収集つくの？

A. 大丈夫、両方直ぐにいつも通りに戻る。

久しぶりの原作組、やっとだ………やっと原作キャラを出せる。次回から毎回原作キャラが出るんだ、作者は嬉しくてたまらない。

さて、秦のオーパーツの所ですがマジもんの話です。ダマスカス鋼みたいに神秘的な、伝説的な剣として中国の博物館にその剣の現物が飾られているとか。製造法が分からない剣………神秘的剣が現実存在するという事実。

………これぞロマン。

それと今まで武将紹介ですが、紙芝居以外の武将紹介部分はマジもんです。

でも流石に前回みたいに「晋にはエヴァンジェリンがいたんだよ！」「みたいな事いたら次の日からチーム内で孤立するんで止めましょう。

うーん、美的考察は結構マジもんで本当なんだけどなあ。流石にエヴァとは言いませんが可能性は大です。紳士達は喜ぶべき。

今回の武将紹介は………強く生きろ。

「やべえ………やっぱ項羽×范増だわ。范増×項羽とか誰得やっちゅ

う話し」

「何やら楽しそうね、陳登」

「あ、曹操さん。曹操さんもそう思いますよね？ やっぱ項羽×范増  
つすよね」

「……仕事よ」

「スルーっすか。泣けるっす」

自らの主が呼び出さすにわざわざ訪ねて来たというのに、彼女は未だ床の上に寝そべり、本を眺めていた。

短く束ねられたツイントール、ソバカスにぐるぐる眼鏡という何とも言えない姿で服を着崩してる彼女に、曹操は盛大なため息をつく。

「貴方を見てると本当にあの呂布を討った人間なのか、未だに疑問に思えてくるわね」

「討ったって……私は影からいろいろやっただけっす」

「呂布と袁術の同盟を妨害して両者を破滅に追い込み、なおかつ自らの親族三人を人質に囚われていたのに、依然呂布を包囲して圧力をかけ続けるのは貴方ぐらいよ。さぞ呂布は貴方を不気味に思ったでしょうね」

「ひどいっすね〜私はただの文系、眼鏡っ子っす」

そうからから笑う陳登に曹操は笑みを深める。

陳登。姿からは判断し難いが性格は誠実、物事に対し沈着であり思慮深く、また文学的才能に溢れている。内政、軍事面も任せられる。

「貴方が劉備から私に乗り換えたときは何をやらかす気かと内心ひやひやしたものでけど」

「いや〜長いものには巻かれるっつていうのがうちの家訓っす」

「まあ良いんだけど。はい、これ」

「なんすか？」

「次の相手よ？」

そう言つて渡された紙に書かれた内容に陳登の眼鏡はずり落ちた。

「……あの、持病のドライアイが」

「もう少しまともな理由思い付きなさいよ。それに貴方は常々彼女について言っていたじゃない、速く何とかするべきって。あと貴方が負けたら背後から襲われた曹操軍は終わりだから」

「何それ怖い」

そこには「孫策躍進」の四文字が踊っていた。

「あゝ鬱陶しいっす」

陳登はもどかしさを覚えながら自らの眼鏡をかけ直す。

二度だ、既に孫家から二度も大軍が送られていた。しかもそのうち

一回は自軍の十倍。

もうね、死ねと言つのかと。

だが、恐るべき事にその全てを彼女は撃破した。

もっとも撃破したという結果に彼女が満足するというわけではなかったが。

「……あ、もうやつちゃえばいいや。誰かいるっすか？」

「っは！……ここに」

「劉表に目を向けさせた上で……場所は……」

「しかしそう上手くいくのでしょうか？」

「いくつすよ！先代だつて猪、孫策だつて今まで見た限りは同じです。それよりうまくやれっす」

その数日後、孫策没すの音が大陸中に響き渡る。暗殺により息絶えた。

何よりもそれに喜んだのは他でもない、陳登だった。やっとこれで休める。おきに入りの本を読む！！  
そう思った矢先……。

「姉様の後を継ぎ、私がお前達を倒す！！」

妹の孫権が進軍してきたわけである。もう彼女は泣いた、枕を涙で濡らしまくった。

「……もあやだ。お家帰る」

「ちょ陳登様！？貴方の今の家はここですからね！？というか敵前逃亡したら首はねられますから！？」

「絶望した！！戦乱の世に絶望した！！クソツタレなんて時代だ！！曹操さんに援軍要請！！」

「私達は！？」

「伏兵で迎え撃て！！こうなつたらあいつら親子三代に渡つて顔に泥付けてやるっすううう！！」

実は親の時代から彼女の一族は土地的に呉とやりあっていた。因果なものである。

無事追い返した陳登。悲しみを背負った彼女にとって孫権は敵ではなかった。というか先代孫策に自ら剣を持って切り込んで二度勝利している彼女に、何故孫権が勝てると思つたのか疑問である。

何はともあれ彼女は今度こそ安心した。これでようやく本当に本が

読める。ビバ！！平穩！！  
そう思っていた矢先。

「うおえええええええ（びちゃびちゃびちゃ）」

彼女は口から大量の虫を吐き出していた。祝いで食べた大好物の刺身に当たった。なんかもう女として終わっているような図であった。彼女はまたも涙で床を濡らした。  
呼び出されて治療した華佗は、何とも言いにくそうに言い放つ。

「……三年後、再発するかもしれない」

「……ねえ、私になんか恨みあるっすか？」

陳登、彼女は大変優秀ではあったが不幸パラメータは上条さんすら超えていたとか。生きる。

陳登、字を元龍。

誠実であったが思慮深く、文学的才能にも秀でていたため、25歳で孝廉に推挙され、東陽の県長となる。老人をいたわり、孤児を養育するなど、民衆のための統治を行った。

その後、飢饉が勃発すると、徐州の刺史であった陶謙に推挙されて典農校尉となったが、どのような作物がその土地に合うか調べ、堀を造り灌漑を整備したので、稲が豊かに実り貯えられた。さらには海賊一万余戸を帰順させるなど、武の面でも活躍を見せた文武両道な人物である。

後に徐州が呂布によつて奪取されると呂布に仕えた。呂布に嫌々ながら仕えた彼は暗躍、曹操と内通し袁術との仲を不仲に追い込み、父と共に謀して袁術を大敗させた。さらに呂布を孤立無援に追い込むことに成功させる。

曹操が呂布を攻めて下？まで進軍してきた時、陳登は曹操に帰順して呂布討伐の先駆けを務めた。呂布が籠る下？城には陳登の弟3人がおり、呂布は彼等を人質として利用し陳登に圧力をかけたが、陳登は屈することなく、呂布への包囲を次第に狭めていきついには呂布軍は瓦解した。

この功績により伏波將軍に任命される。

布討伐後、陳登は長江・淮水流域で非常に人望が厚かったため、江南を併合する野望を抱くようになったという。彼は対孫呉の武將として曹操に呉の方面へと配置された。

孫策が侵攻してきた際、陳登は城門を閉ざし、兵士たちの喚声を静まらせてわざと弱々しい防備であることを強調した。そして孫策の軍隊に緩みが見えたことを望楼から確認すると、一気に城門を開いて輕騎兵を突き進ませ、敵の背後を攪乱させた。

孫策軍は慌てふためき、陣容を整える間もなく、陳登みずから陣太鼓を叩いて突撃する兵にさんざんに打ち破られた。陳登はこれを追撃し、万単位的首級を挙げた。

思わぬ敗北に激怒した孫策はすぐさま大軍を編成しなおし、再び広陵に迫ったが、陳登は冷静であった。功曹の陳矯を曹操の元に送り援軍を要請すると、すぐさま薪を積み上げ各所にそれを配置し、孫策が迫ると一気に火を付けた。火勢は強く山々に燃えうつり孫策軍は恐慌をきたし、また城中で兵士たちに万歳を唱えさせあたかも援軍が到着したかのように見せかけると、孫策軍はまた壊乱状態とな

って退却した。陳登はこれを伏兵を多数配置して追撃し、またも一万余の首級を得たという。

もうこれ呉ハンターって言っても良いよね？つか波に乗った孫策を受け止めきる所か惨敗させるとかこの人マジアリエナイ。

また、孫策の暗殺の真犯人は彼ではないかと言われている。

孫策に撃破された嚴白虎の残党を扇動して暗殺させたとあるが、その時期があまりにも彼にとって利が多く、彼が動いた場所や時期から言えば疑わしいものであったからだ。

煙のないところに噂は立たない。もしかしたら、孫策の真の暗殺者は彼だったのかもしれない。今は歴史の闇の中であるが。

孫策の二度の進撃を防ぎきる。さらに208年には侵攻した孫権も撃破。やっぱり呉キラーである。

呉の孫策が二度目の進撃をした際の彼の兵力はなんと十分の一だった。大軍をもともせず打ち破った彼はチートだ、間違いない、チートだ。

さらに彼は一度劉備に仕えてが地元領主の関係もあり、曹操へと帰順。にもかかわらず劉備は彼を

「文武両道で、勇氣と志を持っている。彼のような人間は古の英雄を見直してもそうそういない」

とべた褒め状態であった。あるいみ劉備の人たらし度が伺える話でもある。

内政チート、軍事チート、陰謀チートな彼であるが、意外にもその死に方はあれな死に方である。



好物の刺身食って胃に寄生虫湧いて死にました。

一度は華佗に治療されたが、その際に記述に寄れば三升の虫を吐き出したとある。漢の三升は現代に換算すると約480グラム。妙に生々しくリアルな数値なのがなお恐ろしい。

その三年後に再発するかもという嫌なフラグを残して華佗は去っていった。華佗先生の病氣予言とか死亡フラグも良いところである。

三年後にもう皆さん予想通り再発、なんとか彼はフラグブレイカーというかフラグの張本人である華佗に治してもらおうとしたらしいが、彼はすでに曹操にデストロイされていた。

結果享年39才、なんとも残念な死に方である。

彼が亡くなった後に孫権は勢いを盛り返し、一大勢力を築き上げた。曹操は彼がいたならばこうはならなかったであろうと悲観したという。微妙にブーメランで曹操に帰って来たようだ。

恐らくあと十年彼が生きていれば、呉は追い詰められ、動けなくなっていただろう。逆に言えばここで彼が死んだからこそ呉は三国の一員になれたと言える。

……というか、呉が躍進しないと蜀も生まれなかったから、彼が死ななかつたら蜀も生まれなかった？

そう考えると、恐ろしいことに彼が生きていたならば蜀も呉も生まれなかった可能性がある。ある意味彼が死んだからこそ三国時代が訪れたのかもしれない。

あ、やっぱりコイツチートだ。

呉の天敵の武将と問われたときに張遼ではなく、陳登と応えたら結構コアな三国志ファンではないのだろうか。と、味の素は味の素な

りに愚考してみたり。

番外編 武将紹介〜袁紹 飛翔編〜（前書き）

久しぶりの武将紹介……なんかやると言っておいてすんごい間が空  
いちゃった。

五ヶ月前には完成していた作品です。

本編は忙しくて補充出来ないので、つなぎとして投下。

番外編 武将紹介〜袁紹 飛翔編〜

「どうも味の素です。まともに武将紹介しろやあ！ってことなのでまともな武将紹介書いたらまさかの三部構成に……いやあね。官渡の戦いを絡めるとどうしても。もうこれは袁紹編というより官渡までの流れを語った紹介でしょうね。……どうしてこうなった」

「白蓮だ。自業自得だ、諦める。というか本当に袁紹の紹介するか？」

「ええ、言ったからにはやらなくてはいけないでしょう。というか董卓連合編にも入ったし、ここで紹介しとかなないと紹介の機会逃します」

「私としては麗羽を見てるからなあ……若干心配なんだが」

「恋姫の袁紹はあれですが史実の袁紹は中々面白いですよ？少なくともおーほっほっほとか言いません」

「なんだろう、それだけで安心している自分がちょっと悔しい」

袁紹 えん しょう

性が袁、名は紹、字は本初

「袁紹は汝南汝陽の生まれであり、父の袁成は五官中郎将です。祖父は司徒であることからかなりの名門です。彼は威厳があり、土を敬う。貧しかろうが富んでいようが問わずに行動をともしして対等の礼儀を行ったので彼はとても好かれていました。宦官に「こいつばねえ」と目をつけられるくらいです。余りに人気者過ぎて容認出来なくなつた叔父から頼むから仕官してと言われたくらいです」

「おいおい……麗羽からは想像も出来ないな。そこまですごかつたのか？」

「彼は間違いなく有能です。彼は名門とはいえ妾の母を持ちます。母の身分がある程度の差を作るのにも関わらず、彼の仕事に就いてからの躍動は馬鹿になりません。あつという間に袁家の一番星になりました」

「本当に有能なんだな。その少しでもこっちにあれば私は苦労しないのに……」

「その後は可進と共に宦官を討伐、この時董卓がやって来ました。部下は

「董卓はやばいって!!殺さないと絶対悔恨になるってば!!今はあいつら遠征で疲れているから討ち取れる!!」

と言いましたが彼は

「え？無理無理、あの魔王と戦うとか正気じゃないから」

臆病でして董卓に怯えて何もしてませんでした。

「以外と臆病だな…」

「彼はここぞという時の決断に弱かったのです。董卓はその後、帝の廃立をしようとします。しかしその場に異議を唱える者が居ました。それが袁紹です」

〈洛陽 side〉

「私は反対です」

「ほう、袁紹。だがな、今の皇帝は愚か者だ。天下を統べる王は王でなくてはならないのだ」

そう不適に董卓は笑う。

「あの馬鹿な王を民達は許しはしない。その点陳留王劉協は王としての威厳と力を持っている。彼を王にすることこそ民が望むことであり、天下を大平へと導くことになるのだ」

これに袁紹は理路整然と答えた。

「たしかに今の陛下は年はお若い。ですが未だ彼の天下に悪いことがあったとは聞いていません。もし董卓殿が儀礼に反して貴方の考え通りに、現の帝を廃して劉協様を立てればおそらく他の者も黙っていないでしょう」

これに董卓は剣に手をかける。  
辺りに殺伐とした空気が流れた。

「ぬかしたな小僧」

その声には殺気がありありと含まれている。

「今天下の器は我が手中にある。この俺がやろうとすることに誰が逆らおうとする？」

これに袁紹は跪いて答えた。

「これはもはや国家、ひいてはこの大陸の大事な問題です。一度、外に出てこの件を話し合いたいと思います。」

「ふん、劉氏とはもはや名だけが先走りしているだけの意味がないガラクタだ」

その言葉に辺りは騒然とする。  
もはや董卓は明言したのだ。  
漢など我の下にある者だと。  
だがその中でも袁紹だけは平然としていた。

「天下に力のある者ははたして貴方だけですかね？」  
そう述べると彼は礼をとり、その場を去った。

「終了」

「正面から董卓と言いつたのか…臆病なのかそうでないのかよくわからないな。というか最後の置き土産がやたら格好いいんだが…」

「冀州に逃亡した袁紹、彼に董卓は懸賞金をかけて追おうとしますが部下に止められます。」

彼に今懸賞金をかけては躍起になって私達を打ち倒しにかかります。四代続く名門をなめてかかってはいけません。彼に集められた者達は脅威となりましょう



と言われたためです。その後彼は反董卓連合を決起しますが失敗、袁紹はこの時帰るべき土地はありませんでした。そこで彼は逢紀の策に沿って公孫贇に韓馥を攻めさせ、韓馥には使者を送って袁紹に帰順すべきだと説得させました。そしてしめしめとおいしく韓馥の領土ゲット。うめえ」

「……おい」

「そしてこの時袁家の最高の懐刀である沮授・田豊を配下にしていきます。かくして袁紹は冀州を手に入れたのですパチパチパチ」

「パチパチパチ……じゃねえ！！なんだよそれ！？完璧に私利用された捨て駒じゃないか！？」

「騙される方が悪いのです。白蓮さんが怒ったように公孫贇も大激怒、これにより二人の仲は最悪になります。でもこの策を行って公孫贇だけが文句を言うと思います？」

「そりゃあ……許されないよな。騙して人の城を奪ったわけだし」

「その通りです。おそらく民衆の反発も強かったでしょう。ですが彼はかなりの善政を行いました。短期間で冀州をまとめ上げると改革を行います。結果、もはや壊滅寸前であった袁紹軍は精強な軍へと変貌しました。ちなみに官渡で曹操と対決しますが先に兵糧が切れたのはなんと守る側の曹操だったのです。このことから相当彼らの行った善政はすばらしかったのでしょう」

「そ、それはすごい。こっちの麗羽はもう強い領土を持っていたからなあ。おまけに民はほっばいて金ぴかの鎧とか作っていたし……」

同じ袁紹とは考えられないな」

「さて公孫贄は黙って見ているわけにはいきません。袁紹と仲違いしている袁術に同盟を求めべく公孫越を派遣します」

「そういえばなんで袁術と袁紹はそこまで仲が悪いんだ？」

「それは袁術が袁紹を見る目は妾の子が生意気だと言うものだったのではないかと。袁術は適流の人間です。先ほど言ったようにこの時代は母親で大体の身分が決まります。それがいつの間にか妾の子である袁紹の方が有望視され、反董卓連合では自分を差し置いて盟主という立場になったのですから面白いわけがありません。作者は原作で袁術が「わらわが……」と盟主なりたいと言っているときに周りの人間が横入りして邪魔しているシーンがありました。それ見てちょっと悲しくなりましたよ」

「なるほどな……自分こそが正しい血筋だとかそういうお家の問題は深いよなあ……」

「お家問題はこの三国志でも例外ではありませんよ、呉とか魏とかも酷かったですからね。さて、派遣したのはいいのですがこの直後、袁紹と袁術の間に戦闘が勃発、袁術配下孫堅と袁紹の戦いの中で公孫越は流れ矢に当たり戦死しちゃいました。なんという残念な子」

「……なんだか間抜け過ぎて泣くに泣けないな」

「そこらへんの部分は真の前の恋姫の白蓮さんと似ていますよね。死んでもスルーされ、あげくに真名も無しとかいう残念臭がごとくなく」

「悪かったな！！残念で！！どうせ私は」

「そして公孫贇軍と」

「って無視かよ！？」

「無視です。公孫贇軍と袁紹軍の戦いは始まります。界橋にて対峙する両軍、公孫贇軍は中央に歩兵3万余が方陣を敷き、その左右を騎兵1万余が固めるといふものです。これに対し袁紹軍の布陣は先陣の？義が盾を構えた兵士800人と1000張の強弩隊を率い、その後に袁紹自身が率いる数万の歩兵構えるといふものでした」

「……ちよつと待て。それってもしかしくなくても騎兵を完全に意識したものでないか？」

「お、気づかれましたか。その通りです。騎兵の戦術を熟知した対公孫贇マスター？義の奮闘により、袁紹軍は公孫贇の部将の蔽網を捕虜にするなど見事勝利しました」

「…なんだろう、何故か涙が出てきた」

「まあまあ…これは貴方でないですから。白蓮も負けましたけどね」

「お前慰める気がないだろ？」

「YES」

「」の鬼！！」

「HAHAHAそれは褒め言葉です。ですが公孫贇軍もただでは負

けませんでした。公孫贇は敗走した騎兵をまとめ上げ手薄になった本陣を奇襲します。ここでまとめ上げる公孫贇もすごいですね」

「えへへ」

「白蓮は褒めていません」

「……薄々解っていたよこんちくしょー！ー！ー！」

「その時の様子です」

〈本陣 side〉

弓矢が雨のごとく降り注ぐ。

そんな中で剣を持ち馬にまたがる袁紹。

その姿に従事の田豊は唾然とする。

慌てて田豊は言った。

「袁紹様！！危険です！！はやく垣根の裏に避難を」ならぬ！！「っな！？」

袁紹は堂々と正面を見つめ、叫んだ。

「大丈夫たるものは垣根に隠れてまで生きようとするものではない！！！」

剣を抜き放つともっとも激しいであろう前線へと馬をかけていく。後ろに続く味方の数は少ない。だが袁紹は公孫贄軍へ突撃を仕掛けた。

味方は奮起して反撃を行い、公孫贄は小さい部隊が袁紹の本隊だとは気がつかずに退いていった。

魏史より出典。作者訳。

〈終了〉

「なんだろう。余りの噛ませ犬の扱いにまた涙が出てきた」

「すみません……今回は彼が主役なので」

「ああ……そうだよな。でも袁紹って意外と武闘派なのか？君主自ら戦いに行くなんて」

「ええ、彼は意外と武闘派です。自ら剣をとって戦うことも少なくはありません。若い頃はヤクザまがいの事もしていましたからね。なかなかの度胸もあったようです」

「へえ……てつきり後ろでふんぞり返ってるのかと思ったよ。ますます麗羽とは違うなあ」

「さて、この負けた公孫贄。和解したのはいいのですがその後、劉性を持ち、皇族の身分の者に珍しく、公正清廉で領有地には常に善政を敷いた劉虞を殺します。これは公孫贄の失策ではないかと思えますね」

「なんでこんな時期に私は劉虞を殺したんだ？」

「劉虞は異民族との仲がとても良かったのです。彼は贈り物とかもして懐柔策をとっています。ですが公孫贄は強行派でした。その仲互いによつての争いのためです。正直、公孫贄の異民族嫌いは相当なものです。これは多分過去の戦いのせいではないかと思えます」

「過去の戦い？」

「ええ、とある太守が異民族を抱き込んで反乱を起こしたのです。そこへ公孫贄は異民族対策の将として戦ったのですが……深追いして補給路を断たれ、管子城に籠城します。この籠城は二百日を超え、食料が無くなり馬を、馬が無くなれば革製品を煮て食べ、それすらもなくなれば人を食べるといふ地獄のような有様でした」

「それは…ひどいな」

「援軍は来ない、ならばせめてもの一矢をと部下達と別れの杯を組み合い、出撃。これによりなんとか帰還できたのですがその時の戦闘と帰還中の寒さで大半の兵が死にました。このときから公孫贄は異常な執着を異民族に持つようになったと私は感じます」

「……」

「対立した公孫贄は劉虞を捕縛、市場を引きづり回りました。その時の劉虞の助命を何人もの人々が懇願したのですが……」

劉虞が雨を降らせることができたら助ける。皇帝になれるほどの人物なら簡単に雨を降らせることができるだろ？あ？出来ない？なら死ね。

B Y 公孫贄

「と無理な要求をし、雨を降らせる事など出来るわけもなく、劉虞は処刑されます。この事件で公孫？は一気に信望を失い家臣たちに不満が高まりました」

「我ながらこれはないと思うぞ……せめてもうちょっと言い様はあったんじゃないか？」

「ですよね〜流石にこれは酷すぎです。これで公孫贄は敵を作りすぎました。袁紹はかつて劉虞を皇帝に推していたことがあるくらい入れ込んでいたので当然大激怒、さらには劉虞に懇意にしていた異民族のみなさんと遺臣も大激怒。ぶっちゃけ救いようがありません。だめだこいつ」

「うわぁ……負けて戦力が減ってるのに何してんだよ私は」

「これにより鮑丘の戦いで公孫贄は破れ、十年はこめれると言われた難攻不落と名高い易京城に引きこもり生活を始めます。もちろん、機会があれば逆転しようとするものの既に若干チート軍団になりつつあった袁紹陣営にはそんなあがきは効きません。たくさんの知将がいたわけですからね、策は全て看破されました」

「もうどうしようもないよな……いくら難攻不落とは言え引きこもってばかりでは勝てないし。味方もいないし」

「それにこの時期の公孫贄の人間不信はやばいところまで言ってます。家臣を遠ざけ、文書を縄でつり上げて見るといづぐらいです。人として末期過ぎて泣けてきます」

「そこまでなつたら人として終わりだな……」

「最後には公孫贄は味方にすらも見捨てられます。籠城戦の最中、公孫贄が城外にいる自軍の兵士を見殺しにした事から公孫贄軍内の公孫贄への不信感が高まり兵の殆どが袁紹のもとへ走ってしまつたのです。これを好機とした袁紹は地下を掘り進みついに城を落とすことに成功、公孫贄は家族共々自害したのです」

「なんかもう……私駄目駄目だな」

「どうみても劉虞を殺すのは失態ですよ。冷静に考えれば板挟みになること解るでしょうに」

「うう……」

「これにより河北の覇者、袁紹が誕生します。そしてついにあの一大決戦「官渡の戦い」へとなるのです。まあこれで天下の流れは決



まったのでしょね

「え？だってまだ三国にもなっていないじゃないぞ？蜀も呉も出来ていないだろう？それに領土も地図を見れば解るけどみんな同じぐらいいじゃないか」

「いくら領土が同じとはいえ蜀と呉は未開の土地が大半ですよ？それに河北と曹操の中原は昔から人が慣れ住んでいる土地なのでたくさん人間と開発された土地があります。それにいくら呉や蜀などの国ができたとはいえ、大陸の商業の中心は官渡に勝利した魏の地域ですから、ぶっちゃけこれで天下は魏へと流れたのですよ」

「そ、そこまでなのか」

「そこまです。例えるなら蜀と呉は魏への挑戦者ですよ。さて、ここで戦うであろう曹操と袁紹の戦力を見てみましょう。作者が見た視点です」

960

### 曹操

- ・？州、豫州、徐州、司隸
- ・ただ董卓のあばれっぷりでこの州うちいくつかはまともに機能してはいない
- ・優秀な人材豊富
- ・劉表、孫策、馬騰などといった多方面の敵を抱えている
- ・しかもほとんど真ん中の位置なのでかなりきつい
- ・屯田兵や、それらの外敵から守るために動員できる兵は3〜4万ちよつと

## 袁紹

- ・冀州、幽州、并州、青州
- ・洛陽が破壊された今、中華最大の冀州を持つ
- ・なんとたつて精強な騎兵が豊富な地域を持つ
- ・先の公孫賛との戦いにより異民族とも良好な関係、つまり異民族も動員可能
- ・前に述べたとおり食料などの物資はもはやカンスト状態
- ・有能な人材を抱え込んでいる

## 例

武では最高峰の張ウチノカミ? など

知では沮授と田豊

- ・外敵は曹操のみ
- ・動員数はおそらく十数万

「あれ?この戦いってもつと多くの人数の戦いじゃないのか?曹操数万に袁紹40万とかだった気が」

「あれ誇張です。こんなもんですよ?作者が昔見た中国の教科書では曹操3万、袁紹軍10万ぐらいだった気がします。それでもやはりですが」

「そうなのか……でもこれってどう見ても曹操に勝ち目がないだろ」

「曹操もそう思ってたよ?なんせ戦の前に怖気づいてジュンイクにねえ俺って大丈夫?って聞いていたぐらいですからね。でも最終的には曹操が勝ちます。このまま行けば勝っていたのは袁紹な

んですけどね。そこには袁紹に様々な事が起こったからなのです。その模様と流れは後半の方で解説させていただきます」

『番外〜ジュンイクの激励は褒めすぎ〜』

「なあ、そういえばジュンイクってどうやって曹操を励ましたんだ？」

「え〜とそれは十の勝因と敗因を言いました」

「十の勝因と敗因？」

「こづいづこと言ってます」

袁紹は面倒な礼儀作法を重んじますが殿は自然のままにしております。

これが「道」が優れている第一の勝因です。

袁紹は逆（天子に刃向かうこと）の行動をとっておりますが、殿は順（天子に従うこと）の行動をとっております。

これが「義」が優れている第二の勝因です。

袁紹はただ寛容なだけです、殿は厳しさを持ってそれを正し、上の者もそれをわきまえています。

これが「治」の優れている第三の勝因です。

袁紹は寛大に見えても内心は猜疑心が強く、自分が用いる人を信用せず、親戚ばかりを信用しますが、殿は人を信用し、親戚を特別扱いすることはありません。

これが「度」（度量）の優れている第四の勝因です。

袁紹は策謀は多いが決断できず、時機を逸して失敗しますが、殿は決断力があり臨機応変に対処なされます。

これが「謀」（策謀）に優れている第五の勝因です。

袁紹は先祖が築いた基礎を元に高尚な議論と謙虚な態度で評判を得ました。

したがってうわべを飾った議論好きの人間ばかりが集まります。

殿は真心と誠意を持って人に接し、功績があつた者には惜しみなく賞与を与えます。

これは「徳」に優れている第六の勝因です。

袁紹は飢えや凍えを目の当たりにすると哀れみを顔に出しますが、目に触れないことには考慮が及びません。

殿は目の前の小さなことについては時には無視することもあります  
が、

大きな問題については目に見えない所まで考慮し、処置しないことはありません。

これは「仁」（仁愛）に優れている第七の勝因です。

袁紹は有力な部下たちが権力闘争を繰り広げ、讒言が飛び交っていますが、  
殿は道義をもって部下を治め、讒言の入り込む隙間はありません。  
これは「明」（聡明さ）が優れている第八の勝因です。

袁紹の善悪の判断は常に定まっていますが、殿は善については礼を持ってこれを推し進め、悪については法に沿ってこれを正します。

これは「文」（政治・法律）が優れている第九の勝因です。

袁紹は好んで虚勢を張りますが、軍事の要点は知りません。  
殿は少なきをもって多きに勝ち、用兵は神のごとくであり、部下もそれを頼りに、敵はそれを恐れています。  
これが「武」に優れている第十の勝因です。

「うわあ。確かにこんな言われたら奮起するわ。でも褒めすぎじゃないか？」

「味の素もそう思います。悔しいことに袁紹に関する項目は大多数が当たっていますが、かといってここまで曹操はすげえつつう訳でもないです。……そうだ、こんな話があります」

曹操の下へと国外の使者が訪れた。

だが曹操は使者と会うことに難色を示す。彼は周りとは比べれば頭一

つ分小さく、舐められるのではないかと考えたのだ。曹操はかなりの身長コンプレックスだったので、だんだんと不安になってきた。

そこで彼はある配下の一人に自分の身代わりを任せ、自分自身はその側に控えて様子を見ることにした。

結果としてはそれはうまく行き、無事に謁見は済んだ。

曹操は訪れた使者がどのような感想を抱いたのか、と疑問に思い、ある配下の一人に探らせることにした。

そして無事に探り終えた配下が帰って来たので、曹操が訪ねると。

『なんかあの曹操とかいうのまったく覇気無いし、怖くなかった。あら楽勝。……でもなんか側に控えてたちっさいおっさんが、めっちゃくちや怖いオーラだしてたしそっちの方が怖かったわ。あのちっさいおっさんばねえ。』

と言われたことを報告された曹操は。

『よっしゃ！！おい！！そいつ殺しに行くぞ！！』

と激昂して怒り狂い、部下が数人掛かりで止めたという。

……というかこんな話し書き記して歴史に残すなよ。

「あゝ……なんか華琳辺りが聞いたら同じようになるな、この話。」

「ノーコメントで。他にも徐州大虐殺とかやつちゃってます。ぶっちゃけあれしなければ、可能性の話ですけど劉備の抑えにもなった

「かもしれないですから」

「劉備は反乱をあそこで起こしてるからなあ……民心が高ければ起きづらかったと言うことか」

「他にも徐州には人材マニア涇ものの連中盛りだくさんでしたよ。代表的なのは孔明とか」

「え？」

「いえ、徐州に孔明いましたよ。徐州大虐殺で逃げちゃいましたけど」

「な、なんだって！？それは本当なのかキバヤシ！？」

「だれがキバヤシですか。本当ですよ。これも可能性ですけど曹操軍にもし徐州大虐殺を起こさなければ曹操軍に孔明参入していたかもしれません。他にも呉の二張の片割れなど内政チートが豊富だったんです、この地はね。みんな徐州大虐殺で逃げちゃいましたけど」

「そう考えるとやっぱりこれ褒めすぎだよなあ」

「まあ曹操さんメンタル少し弱いところありますから。こうでもないし動けなかつたんでしょうね」

番外編 武將紹介〜袁紹 飛翔編〜（後書き）

武將紹介にさ……何日もかけるってなんかあれだなと思ったんだ。だからこれは三日連続投下しよう、うん、そうしよう。

間違いやら修正が起こらない限りは連続で投下します。

PS

この前三食抜きで二日間徹夜したけど、よい子のみんなはやらないように。

あれやると胃液が込み上げてきてめまいが起こり、自分が今何しているのか気が付かなくなるから。

どんなに寝なくてもご飯ちゃんと食べようね 味の素との約束だよ



## 番外編 武将紹介 袁紹 官渡編 ？

「さていよいよ官渡の戦いです。曹操は示威行為として曹操は兵を率いて黄河を渡り、黎陽に進軍します。さらに于禁が別働隊として延津に移動。対袁紹の陣を形成します」

「いよいよ戦いが始まるわけか」

「いいえ、この曹操の行為に袁紹は動きません。公孫贛の引きこもりは約二年も続いたので早々には動けなかつたんですよ。それに公孫贛との戦いが終わってまだ半年、いろいろ足りません。ここからはしばらくこの状態が続きます」

「あれ？じゃあなんでこの時期から始めたんだ？」

「それはこの時期、袁紹軍や曹操軍にとって命運を分ける出来事が多くあつたからです。まずこの時期、曹操の宿敵であつた張繡軍が曹操軍に下ります」

「へ？た、確か張繡軍って曹操にかなりの打撃を与えたりしている敵だろ？確か息子も殺されたはずだ。曹操を敵としている袁紹につかなかつたのか？」

「たぶん賈？の進言では？あの人ほど世渡り上手な人はこの三国時代にいません。おそらく賈？は曹操の勝ちを予測していたのではないかと。それに曹操軍の数が少ない今こそが、彼の息子を殺した罰を受けることなくそのまま投降出来る、そして大変に良い扱いを受けるだろうということを理解していたはずですよ」

「ふむふむ……」

「ちなみに賈？は赤壁での敗北を予測していました」

「え！？それは本当なのか！？」

「はい、他にもたくさんの方の敗北を予測し、曹操に進言しますが……まあ聞かなかったのです。作者から見ても賈？の進言はほぼ100%です。チートですチート。孔明よりこの人です。この張繡軍の投降には曹操さん大喜びだったようで領邑二千戸という半端無い恩賞を与えています。これすごいですよ？魏への建国の際にあの張遼に与えられた領邑が二千六百戸と言えればどれほどのすごさか解ると思います」

「これを見極めて賈？は下ったのならすごいな……」

「そしてこの翌年、反曹操の水面下で行われていた作戦が露見、全員デストロイ。さて、この件には劉備も唖んでいました。そして曹操による劉備討伐軍が形成されます」

〈劉備軍 side〉

「この張飛様に任せれば王忠なんざ雑魚雑魚雑魚お！！」

この時期、曹操軍から送られた兵を劉備は撃退、おそらく張飛がが  
んばった。

「さすが益徳！俺らに出来ないことを平然とやってのける！そこにしびれる憧れるう！！」

「へへん、ん？……………」

「あ、益徳どうしたよ？」

「…………やべえぞ義兄。曹操が来るみたいだ」

「…………マジ？」

「マジ」

「……………」

「……………」

劉備の選択肢

逃げる

逃亡する

すたこらさっさ

「よし！…逃げるぞ！…」

「あ！？ちよつと待ってくれ！…雲長はどうするんだよ！？あいつまだ下？だぞ！？」

「大丈夫だって！…あいつにや曹操を引きつけてもらえばいいさ！…なんかその気になれば千里の道を曹操軍から帰ってきそうな気が

するし」

「ちょっとまって!!それ言ったら俺は長坂坡で仁王立ちしなくちゃ行けない気がするぞ!?!」

「ははは!!なぐにこの機会に雲長に引きつけてもらってれば袁紹がこっちに来やすいだろ?長く引きつければ引きつけるほど美味しいぜ!!それにたぶんあいつなら大丈夫だろ!!」

「……それもそうだな!!よっしいくか義兄!!」

「おつね!!」

（関羽 side）

がんば

劉備より

「……………」

「あの〜関羽様?」

「ふ」

「ふ？」

「ふざんけんな！！あの馬鹿共が！！耐えられるわけが無いだろうがああああああ！！！」

「で、では曹操に下るので？」

「……いや、それは無いわ。しかし、一時的にだが曹操に頭を下げるしかなかるうに（ハア）」

（終了）

「というわけで関羽は曹操に一時的に下りました」

「……………（啞然）」

「あゝ驚かれてもしょうがないかなあと。まあこの劉備の読みはずれてしまうんですけどね。劉備の願いは叶わず袁紹は動きませんでした」

「え……………関羽の犠牲は？」

「ぶつちやけ無駄です。それどころか投降した関羽のおかげで袁紹軍は二枚看板を切られてますし」

「……………と、ところでなんで袁紹は動かなかったんだ？攻めるのには

絶好の機会だろ？それに戦いが終わってしばらく立つし準備も出来てたんじゃないか？」

「あゝそれはまた袁紹サイドで見てもらいたいと思います」

△袁紹軍 side△

「あゝもう！！なんで劉備が反旗を翻した時に攻めなかったのよ殿は！？」

そう怒るのは田豊。

「だゝかゝらゝ子供の病気だったって言うてるっしょ？ばあさんしつこいっしょ」

そういらだちながら言い返すのは逢紀。

「子供の病気いあんた馬鹿！？天下を狙うのに子供の病気ぐらいで期を逃してどうするのよ！？それに何が婆さんよ！？私は永遠の17才よ！！」

逢紀の胸ぐらを掴んでガンガン揺らす田豊。  
小さな体に似合わない大声で怒鳴り散らす。

「耳が痛いっしょ!!俺に怒っても困るっしょ!?!あと永遠の17才は痛いっしょ!?!」

「な〜に〜」

「ちょ、その剣をしまえっしょ!!」

「二人とも落ち着けや。これぐらいで落ちるほど袁家は弱かねえよ  
そう呆れながら仲裁に入ったのは審配。

「お前名前に逆の態度とれやwww」

そうぶぎゃーと笑うのは許攸。

「お前達、そこまでにしたらどうです。袁紹様がいらっしやいますよ」

落ち着き冷静な態度を崩さないのは沮授。

彼らが袁紹の軍師達である。

「ふむ…。それでは軍議を始める。沮授」

そう威風のある声を放つのは袁紹。

今、彼ら是对曹操による話し合いを始めた。

先に口を開くのは沮授。

「公孫贇は凡愚な者達しかいませんでしたが曹操軍は精鋭。公孫贇よりもおそらく苦しい戦いになります。田豊殿はどうお考えで？」

「私は断じて反・対！曹操と対決する機会は今もう無いわ。それに公孫贇との戦いの傷がまだ癒えなかつて言うわけじゃないでしょ。そんな状態で戦うことなどせず、気長に待てばやがて勝手に曹操は弱体化、対する私達は強化される。それに都の帝に親愛なる手紙を送ればいいじゃない。曹操が邪魔したら逆賊扱いできるし、ここはじわじわと追い詰めるべきよ！！」

「あゝ悪い田豊。俺は贇成だわ」

頭をかきながら声を上げたのは審配。

「こっちは数倍の兵力だ。それに先の大戦でいくら疲弊したからってまだまだ戦えるぞ？ここは勢いがあり、曹操の兵の数が増えないのが好機だ。俺も曹操の強さを知ってるが時間与えたら駄目だろ。やっぱ攻めるべきだと進言する……てか沮授。お前の意見聞いてないんだが」

「私は田豊に同意します、今は戦う時ではないでしょう。曹操は敵が多い、今ここで最大勢力である我らが負けてしまつては取り返しがつきません」

「最強の俺らが負けるとかwwwマジあり得ないしwww」

「可能性です。ですがその可能性は今高く馬鹿に出来ない。長期の構えをとれば確かに曹操の力も上がりますが現状で最高の力を私達が持つのであればそれ以上の勢いで我らの力は上がり、曹操は追い



つけないでしょう。なにも不確定な今、決戦に向けて動く必要はありません」

「……っち」

彼らの話し合いに袁紹は動かず耳を傾けていた。

場は均衡状態。

だがそこに一石を投じるものが現れた。

「ぎゃはははははー!」

「「「「「この不愉快な声は…」」」」」

ある者は顔をしかめ、ある者は笑い、ある者はあくびをしている。

彼の名は

「今あ戦わずしていつ戦うわけえ？お前らひみより過ぎてんじゃねえかあ？天下の袁紹が曹操如き小童に負けるとか言いたいわけえ？」

そう唾つのは

郭図。

彼もまた袁紹の軍師である。

この時、袁紹が動いた。

「私の意見も郭図や審配よりだ。もはや曹操の行動は目に余る。今こそ私が動くべきだ」

「なっ!!」

この言葉に三者三様の様子を見せるがその中で一番驚いたのは田豊。

「馬鹿言ってるんじゃないわよ!!」

「……田豊、これはもはや決定だ。もしや私の決定に口を出すのか？」

「当たり前よ!!何を望んで君主を死地へやる人間がいるのよ!？」

「田豊殿、そこらへんに……」

「沮授は黙ってなさい!!殿!!私は断じて反対よ!!殿のためにもこれを認めるわけには行かないのよ!!」

（終了）

「なあ、いろいろおかしくないか？」

「大丈夫だ、問題ない。この君主の決定に田豊は強く反対します。ですが袁紹はこれを拒否。それでもしつこく言う田豊、ついに投獄されてしまいました」

「な、おいおい……これはいくら何でも短絡的じゃないか？いろいろな意見が出るから反対意見も出るのは当然だろ？確かに強く言い過ぎかも知れないけど投獄は」

「これには実は裏話があります」

「裏話？」

「はい、逢紀は田豊と不仲であり、それと同時に田豊の正直さとその才を恐れ、袁紹に讒言（上司に対して根拠の無い中傷を述べ、相手を陥れること）を行なっていました。その為、袁紹は次第に田豊を疎んじるようになっていたのです」

「なるほど、それにしてもまさか子供の病気のためにはなあ……これも田豊が言ったからあれなのか？」

「でしようねえ。あそこで田豊の進言通り攻めればおそらく袁紹は勝っていたと思います。この時期の袁紹は常に王道を意識したような行動が多いです。背後からの奇襲は王道ではないと感じたのかも知れません」

「絶好な機会を逃してしまったわけか……。ってことはこの呉の戦いは田豊の言うとおり攻めない方が良かったのか？」

「あゝその件に関してはすごく難しいです。実際に曹操よりもはるかに軍力は上でしたし、田豊の進言も正しいっちゃ正しいのです。様々な戦略で勝つ手段も十分あったのですよ。ですがこの後に私は袁紹がとんでもない間違いを犯したと感じます」

「とんでもない間違い？」

「ええ」

〈袁紹 side〉

「なあ袁紹様よあ」

その声を君主にかけたのは郭図。

「郭図か。申せ」

「俺はよおどうしても危ないと考えてることがあってなあ」

「……………なんだ」

ニタアと嗤う。

「沮授さあいくら何でも権力集まりすぎだろ？」

「……………」

「確かにあいつは有能だがなあ監軍の役目全部は大きすぎね？公孫  
贗の時から思ってたんだよ。あいつこの戦いに反対してたぜ？それ  
に何だか曹操にも評価されてるし？これってさあ」

その笑みをますます歪める。

「不味くね？」

「終了」

「袁紹は沮授が統括していた監軍の役目を郭図・淳于瓊に三分割し  
てしまったのです」

「これってそこまで酷いことなのか？よくわからないけどさ」

「これだから残念って言われているんですよ（はい、これはすごく  
不味いのです）」

「なあ………考えていることと言ってること逆じゃないか？あ、目か  
ら汗が」

「この沮授が監軍の統括をし、他の者達が足なり腕となるのは公孫  
贗戦で完成された必勝パターンなのです。どれぐらいの必勝パター  
ンなのかというと」

例？

「もう、何も怖くない！！ティロフィナーレ！！」 マミル

例？

「やったか！？」 やってない

例？

「大丈夫、テストまであと三週間もあるし、直前に勉強すればいいや」 結局勉強しない。

例？

アンパンマンの顔が濡れる 「新しい顔よ！！」

例？

「お前のライフはゼロだ！ひよっひよっひよ！」 「何勘違いしてるんだ？まだ俺のターンは終わってないぜ」

ぐらいのパターンです。

もう勝ち確定です。

それ以前に一大決戦前だったつうのに指揮系統の大幅な変更するのははっきり言って馬鹿ですよ。そして沮授はこれを知り「ああ、我が

軍もここまでか」と事前に敗北を予見します。官渡に行く前に一族の財産分与をしてから戦に出かけました」

「負けるのが解っていたのに戦場に行ったのか……」

「沮授は袁紹の本当の軍師です。河北四州はほとんど彼のおかげでなったようなもの。劉備に孔明、曹操に荀彧、孫策に周瑜、袁紹に沮授ですよ。戦と内政、両方に深く通じる彼を使いこなせなかったのもまた袁紹の敗北の原因なのでしょう」

「そこまでの存在だったのか……羨ましいなあそんな人材がいて」

「……（哀れみの目）」

「いや、せめて否定してくれよ!？」

「いや、人間不信になる人には無理じゃないかと」

「つつがは!?!」

「この後陳琳によるスーパーぷぎゃーWWWタイムというあの檄文を得ていよいよ官渡の戦いの始まりです。ちなみにこの陳琳の文は今でも探せば見られるのでどうぞ見てみてください」

「いよいよ官渡の戦いか……」

袁紹軍 side

「まずは黄河の渡河、圧力をかけながら南下しましょう」

沮授はそう進言する。

そもそも渡河は時間がかかり、兵も一時的に分断される。更に進軍も遅くなるために奇襲されるとやっかいだ。古来より渡河中に攻撃されての敗北はよくあること。なればこそ圧力をかけて退かせれば

「あゝなにいつちやってんの？」

声を上げたのは郭図。

「だゝかゝらゝ初陣でそんなびびってちゃ話にならないだろうがあ。袁紹様、まずは顔良將軍を先行部隊として投入しようぜえ。華々しく錦をかざろつじやあねえか」

「郭図殿…それはあまりにも」

「解った」

「つな！？殿！？」

「私は郭図の案をとる。顔良をつれて先陣をきれ」

「……」



「終了」

「これに曹操は自ら出陣します。そしてこの時彼はとある降将を用いたのです」

「それってまさか」

「曹操 side」

「ふむ……」

顔良の隊は俺の首をとりに来たか…。

「張遼！！前線を切り崩せ！！」

「っは！！」

「そして今こそその武を見せるのだ！！」

「関羽！！」

曹操の横を駆け抜けて行ったのは関羽。

「つな！？何故劉備の臣下であるお前が「黙れ」…………え？」

「貴様に恨みは無いが死んでもらう……………というか死ねえ！！」

「え？ちよ、お前何でそんな鬼気迫る顔して「問答無用！！」グハア！！！」

〈終了〉

「とういうわけで顔良ボツシュート」

「なあ、関羽もの凄いい切れていない？」

「気のせいです。さて、いきなり二枚看板の片割れがやられた袁紹は、もう一人の武將を派遣。まあこれも数人の臣下に「そろそろやめれ」って言われてたのにもかかわらずに実行しちゃったわけですが」

「…………ああ、頭に血が上っていたのかもな」

〈曹操 side〉

「飲め飲めえ!!」

「いきいき!!いきいき!!」

「よし裸踊りしちゃうぞ!!」

「支払いは任せる!!バリバリ!!」

「ヤメテ!!」

「曹操様もささ、飲んでください!!」

「ふむ…お?これはよい酒……」

「何やってるか…!!」

そこへ見事なアップパーカットを入れられた曹操。

見ればそこにいるのは軍師の荀攸。肩を荒げて呼吸している。

「痛いのだが…それ以前に君主に手を出したら打ち首ものだぞ?荀攸」

「何いきなり宴会やってんの!??」

「いや、あの数に勝てる気がしないって言うか」

「おい!!何言っちゃってんの!せめてなんか策考えろや!!」

「失礼だな荀攸。ちゃんと策なら考えているぞ?」

「なんだ…心配させるなよ。それでどんな作戦なんだ？」

「うむ、『あとは野となれ山となれ作戦』といってな」

「はいダウト！！それ何も考えてないんですよ！？実は何も考えてないんですよ！？ふざけんなこんちくしょー！！！」

「じゃあお前がやれよみさえ」

「だれがみさえじゃ！！私は荀攸です！！はあ…こつこつのはどうですか？」

「ふむ、言ってみろ」

「まずは延津に向かう、これで私達が背後から突くと見せかけるのです。おそらくこの動きをみて袁紹軍は西に主力を向けるはず。私達は軽騎を使って薄くなった軍を突くのです」

「ふむ…」

「どうだい殿？」

「ごめん、もう一回言って」

「ちゃんと聞いてるやあ！だから陽動かけて分散させて白馬を強襲しようぜって言ってるのー！」

〈終了〉

「なあ曹操にカリスマがかけらもないか？」

「気のせいです。そしてこの後、食料で文醜を釣り上げて二枚看板はオワタ状態に。初戦で曹操軍は二連勝したのです。その後は官渡まで下がります」

「二枚看板ってなんなんだろうな…？」

「いや、ぶつちやけかませ臭がします。この後の戦闘でも特に影響が無かったのでぶつちやけ居なくても良かったのでは？二枚看板（笑）ですよ」

「間違ってもこっちの二人には言えないよな…」

〈袁紹 side〉

「二枚看板が敗れたか…ならば私自ら動く」

「お待ちを」

それをいさめようとするのは沮授。

「やはり曹操は中々やるようで。ここは持久戦に持ち込むべきでは？」

それに呼応するように許攸も進言する。

「正面で曹操と戦うとかwwwそれなんてムリゲwwwここは曹操と対峙するときに別働隊で本拠地を奇襲すべきwwwそれで皇帝保護できれば最強じゃね？www」

「奇策など使わぬ。あくまで王の道を進むのだ」

袁紹は沮授と許攸の意見を聞き入れず、しかも沮授の軍権を剥奪し、官渡への進軍を再開した。

「ちょっとあいつ調子に乗りすぎwwwつか正攻法で勝てるほど曹操甘くないしwww」

「いい加減にしろや馬鹿が」

〈終了〉

「その後さすがに袁紹もこれはないと感じたのか圧力をかけながらの南下を実行します。これに曹操は砦をいくつも作って防ごうとしますが…」

〈曹操 side〉

「曹操様！！砦が全て突破されました！！」

「いや、あの数で正攻法で来られたら無理ですって。隙も初戦であそこまで負けたからか、ないですよ」

「あ、慌てるな！！まだ慌てるような時間じゃない！！」

「いや殿！？早く行動しないと不味いですよ！？」

「ま、まてこれは孔明の罠だ」

「誰ですか孔明って！？」

「よ、よし！！ここは派手に戦おうじゃない！！どうせ二枚看板はないんだから大丈夫！！きっとできる！！だって俺天才だし？諦めたらそこで試合終了ですよってアゴがたぶたぶな人も言ってたしね！！」

数日後

「諦めるわ」

「「「おい！？」「」」

「終了」

「曹操はこれを打ち破ろうと迎撃するために一万ほど率いて行きませんが大敗。数千人の死者を出します。」

「さすがにいくら兵法に通じてても数が多ければなあ」

「戦いは数だよ！！ですからね。というか最初から正攻法でいけば負けないってのに……まあ結果として袁紹軍はこれで官渡まで到達。猛攻撃が始まりました」



（曹操 side）

「曹操様、敵が櫓を用いてきます！！」

「落ち着け馬鹿者が……対策は既にとつてある」

「し、しかし」

ヒューン

ドガシヤア

「な、あれだけ苦しめた櫓が！？」

曹操軍は敵の櫓への対抗策として、霹靂車と呼ばれる兵器で反撃し櫓をことごとく破壊。

これは投石機を遠くへ跳ぶよう改造されたもので、精度も上がっていた。

「ん？あれは地下から来るつもりだな」

穴攻めを看破しこれを撃退する。

だが確実に曹操軍は追い込まれていた。

兵士は疲労困憊、誰もが先の見えない戦いに疲れ切っていた。

「曹操様…我らは勝てるのでしょうか？」

「勝てるからこそ戦うのだ！私には常に勝ってきた！この戦いもいずれは同じ結末へと導かれるだろう」

「おお…」

「俺は部屋に戻る」

ガチャ

バタン

「いや！…どう考えても勝てるビジョン浮かばないんですけど！…  
どうやってあの数捌けばいいのよ！…食料ももうまったくない！！  
頭が…：…頭が痛い！！割れるようだ！！あ、もうここは許昌の荀？  
に手紙書いじう！！」

「苟？ side」

「曹操様からの手紙ですか。官渡は苦しいですからね、どれどれ」  
「どうも！！みんなのアイドル曹操です。」

「病気が進まれてるようですね」

「実は官渡がかなりやばい。どれぐらいやばいかっていうとマジやばい。」

「曹操様のおかげでそう感じないのですが」

「それでさ！！いい考えが浮かんだんだわ！！」

「おお、流石にそこまで落ちてはいなかったようですね」

「官渡撤退して許昌に引きこもるんだ！！」

「訂正します、駄目だこいつ」

〔曹操 side〕

「おお！！ついに荀？からの手紙がどれどれ」

どうも親愛なる曹操様。

貴方の大変すばらしい考えにこの荀？、膿汁が耳から溢れてきます。

「っはっはっはそう褒めるな」

それではこの件についての感想ですが。

死ね。

「え？」

こちらら食料集めるの大変なんですよ？

本拠地攻めさせるとか馬鹿ですか？

公孫贇でさえ食料万全にして籠もったのにこっちは食料無いんですよ？

そんなアホなこと書いてる暇あったら他のこと考えてください。

死ね。

「なんで二回も言ったの!？」

〈終了〉

「曹操軍は奮闘しますがやはりここは多勢に無勢。食料ももはや足りなくなり、苟くに手紙を出して励ましてもらったりしています。相当不安だったようです」

「いや…励ましてもらっているのかこれ？」

「気にしたら負けです。ですがそんな曹操に天が味方したのか、袁紹軍は河川の氾濫により多くの食料を失います」

〈袁紹 side〉

「兵糧はどつだ」

「あああ？駄目だなあ。慢性的な不足が続いているぜ。このままでは軍から離反者が出始めるなあ」

袁紹軍は先の河川の氾濫により、食糧不足が続いていた。

「ここは全ての備蓄を集めるのがいいんじゃない？」

「ふむ、ならば場所はどこだ？」

「烏巢だなあ」

「お待ちください!!」

郭図の進言を遮ったのは沮授。

「いくらなんでも戦場に近すぎます!!ここは白馬辺りにするのが」

「お前さあ…軍権ねえだろ？」

「ですがこれは…」

「逆によつ、ここまで近い所におくとは思わないぜえ？裏をかくんだよお裏をな」

「良いだろう、鳥巢に置く。確かに裏をかくにはちょうど良いだろう」

「んじゃあ袁紹様、淳于瓊でどうよ？」

「ああ、そうするとしよう」

沮授は目を伏せた。

手は震えているがそれを手を握り押さえつける。

「（……もはや天下は決まったのでしょうか）」

〈終了〉

「これにより食糧不足は改善されました。逆に曹操軍はもうかつかつ。必死になって曹操は袁紹の備蓄がどこにあるのか探しますが見づかりません」

「そう考えると袁紹は良い決断をしたのかな。白馬よりも鳥巢の方

が数十キロも近いし」

「そうですね。このまま行けば勝っていたでしょうね。ですがここで曹操軍に絶好の機会が訪れたのです」

「絶好の機会？」

「ええ、それこそが曹操が手に入れた勝利への鍵」

〔曹操 side〕

「曹操様、敵の輜重隊を焼き払ってきた。だが数が多すぎてこの程度では意味がない」

「ご苦労…やはり、この程度では意味がないか」

そばに控える賈？が口を開く。

「聞けば袁紹も輜重隊を狙っている。劉備も汝南に入って許都を攻める準備をしているようだ」

その言葉に曹操は険しい顔になる。

「我が軍の備蓄も残りあとわずかだ。このままでは負ける」

「そうだろうな。何か、何か手があればいいんだが」



悩む二人。

だが

「殿？ちよつと報告がある」

そんな二人の元へ荀攸が慌ただしげな様子で走ってくる。

「なんだ？」

「ああ、実は

許攸が降つて来た」

「終了」

「何が起こるか分からないのが戦乱世ですよ？白蓮」

「そうだなあ、ま。平和な世が一番だな」

番外編武将紹介〜袁紹 官渡編?〜（後書き）

Q・なんかいろいろおかしくない？

A・作者のシリアス度があくつと下がった

どうも二夜連続こんばんわ。一二時だと流れてしまうので、ちょっと後に投稿してみました。次回からもそうやっていこうと思います。

ちなみに作者は三国志大戦で漢軍の袁紹（憂国の大進軍）を使っています。

田豊のおっさんとのコンボはなかなかですよ。

他には暴虐、苦楽、陰陽など普通の人は使わないのばかり使っているのです。

いや、だって楽しいんだもの。

というわけで、第二回終了。次回で袁紹編は終了です。

番外編 武将紹介 袁紹 官渡編？

曹操 side

「おおwww猛徳マジ久しぶりwww」

「久しいな……許攸。それでなんのようだ？」

許攸は曹操の少年期の親友であった。

「あゝ袁紹マジ無理wwwマジ勘弁www人の話聞かんし俺の家族投獄されるとかwww」

「（どうせ、貴様が賄賂を取っていたのだから。昔から金には五月蠅かったしな）」

この時期許攸の家族は法を犯したために投獄された。

また許攸は、朝廷に対して造反を画策したこと、性格的に金銭に強欲な所があるために袁紹にはあまり認められてはいなかった。

曹操の参謀荀イクは「許攸は貪欲で身持ちが修まらない」、「審配と逢紀は、許攸の家族の犯罪を見過ごせない」と言っていたがその通りになったわけだ。

「俺に降ると？」

「おおwwwでももちろん手土産もあんどwww」

そう笑う許攸。

「お前さ？勝ちたくない？wwwこの決戦に勝利できるいい話があるんだがwww」

「ほう、話して見よ（やはりただでは降っては来ないか）」

「袁紹軍の兵糧の大半は淳于瓊の守る烏巢にあるんだわwwwここの攻めればかつるwww」

その言葉に荀攸が思わずはっとする。

「なるほど…盲点でしたね。淳于瓊は袁紹軍古参の将、それほどの重要な命を受けても可笑しくはない。それにここから奇襲として向かうことはできる…」

だが賈クはそれほどいい顔をしていない。

「おそらくは厳重な警備だろうね。それに援軍も来るだろうし。しかもそこを任せられるほどの将だ並大抵ではないと思うけど。曹操様と面識はあるのかな？同じ職場だったからね」

「一緒に西園八校尉として働いた事があるが…よく解らんやつだったな」

そこで曹操は目を閉じ、静かにあけた。  
その目には熱き炎が渦巻いている。

「烏巢には俺が行こう。この戦いはここで決まる。俺が負ければ袁紹が、俺が勝てば俺が天下を得る」

「確かにそれが一番でしょう。ここの守りは曹洪に任せべきかと」

「荀攸の言つとおり曹洪を守将にする。賈クは何かあるか？」

「何もないね。乱世の姦雄がどこまでやってくれるのか楽しみだ。ここで曹操様が勝てば確実に歴史が動く、まあそれでも無理なら」

乱世の姦雄に向けて賈クは笑う。

「そこまでの人間だったと言うことだね」

その言葉に曹操も笑った。

く 烏巢 side く

「淳于瓊様？」

「…来るわ」

「へ？」

そこへ聞こえたのは氣勢が上がる軍の雄叫び。  
響き渡る怒号、断末魔。

「袁紹様に伝令を伝えなさい。私は行くわ」

「っは!?!」

「来たか曹操……」

陣幕から出れば向こうに見えるのは赤き炎。  
空には延々と煙が立ち上っている。  
剣を抜きはなつ。

「この淳于瓊、易々と倒せると思わないことね!?!」

『曹操自ら軍を率いて烏巢を奇襲』

「はあああああ!?!」

「おおおおおお!?!」

『烏巢の守将である淳于瓊に苦戦』

「曹操様!?! 敵の援軍が!?!」

『さらに袁紹軍からの援軍により苦境に立たされる』

「落ち着け！！もはや退路など無い！！ならば前に進むのみ！！！」

『だが』

「馬鹿な！？こっちは兵が倍以上はいるのに！？」

『曹操、自らの采配によりこれを全て押し返し』

「食料に火を付ける！！」

『烏巢を攻略、守将である淳于瓊を捕らえた』

目の前には捕縛された淳于瓊。

彼女の鼻は乱戦中に負傷し切り落とされたために無い。

「淳于瓊、お前は何故私に敗北したと思う？」



それに淳于瓊は苦笑しながら答えた。

「何故つて…それは天命じゃないかしら？」

「天命？」

「そう天命。こっちは貴方の軍よりも多かつたし、援軍も来た。貴方は自ら精鋭を引き連れてきたとしても戦況は私達の方が有利だった。この均衡が崩れたのは天命以外にありえないわよ。わざわざ貴方が尋ねるような事じゃないわ」

そう力なく笑う。

「（昔の仲間に手をかけるのは気が進まぬ。それに俺を押し返した統率力もある。ここは）」

曹操は帰服させようと考えていた。

だが

「ちよつと待てこらwww」

それを遮るように声を上げる者が居た。

許攸である。

「そいつ鼻をやられたんだぜwww鏡見るたびに曹操に恨み募らせるぞ？www切つちまえwww（おいおいふざけんじゃねえよ。こいつが入ったら俺の立場がねえじゃねえか）」

許攸を曹操は一瞥する。

その目には少なくとも好感は抱いてはいない。

静寂が場に満ちた。……だがそれを破ったのは他ならぬ淳于瓊であった。

「曹操殿：貴方はちょっと甘いわ。乱世の姦雄なんですよ？折角私に勝ったんだからその勝利を有効活用しないと」

「……………そうか」

曹操は目をつぶった。

それを見て淳于瓊はもの悲しげに自らの鼻があつた場所を見る。儚げに笑った。

「それに……………この顔で生きていくのはちょっと女としてつらいかな」

〈終了〉

「これにより曹操は鳥巢を攻略に成功。淳于瓊を処断します」

「まさか味方の裏切りによって負けたのか……」

「実はこの奇襲を予見して沮授は淳于瓊を援護するため事前に蒋奇率いる別働隊を派遣し、曹操の奇襲に対応するよう進言していたのです。ですがその意見を袁紹は聞き入れず、結果として後手に回って先の二枚看板に続き、兵を率いる将を失ったのです」

「沮授は解っていたのに袁紹は聞かなかったのか…もしかして袁紹

が負けたのは自分の部下の意見をしっかりと聞かなかったからなのか？」

「そうでしょうね。先の田豊、そして沮授。優秀な配下の意見を聞かず、誤った判断をし続けたのが彼の敗因です。もし袁紹が田豊と沮授の意見を聞き入れ、行動していれば負けることはなかったでしょう」

「仲間を信用することは大事なのになあ」

「…正直、公孫贇が言うのと重いですね」

「悪かったなあ！！人間不信で！！」

「後実は鳥巢に援軍よこしたのにも裏話がありました」

「……良い予感はないなあ」

「袁紹は鳥巢に曹操軍現ると聞くと配下の二人が曹操がいらない城を攻めると鳥巢に援軍を出すべしの二つに分かれました。ちなみに城攻めは出れば負け軍師考案です」

「出れば負け軍師……何となく解るのがあれだな」

「それで援軍派は曹操舐めるべからず、曹操がいなくとも城は堅固なり。そもそもそうでなければ曹操自身が出るものかと主張します。城攻めは……まあ想像つくと思います。曹操はいんなら楽勝！！って主張です。で袁紹は意見を選べず両方の案を採用しました。これが最後の分かれ目だったのでしょう」

「優柔不断なところが最後までつきまっていたのか……」

「これにより袁紹は撤退します。これに曹操軍は容赦ない追撃を実行しあと少しの所まで追い詰めますが

袁紹は間一髪逃走に成功。ですがこの時逃げ遅れた者が居ました：沮授です。沮授は曹操とも旧知の仲であったため、曹操は配下に迎えようとはしましたが沮授はこれを拒否。曹操は沮授の能力を惜しんで処刑しようとはしませんでした。沮授が曹操のもとから脱走しようとしたため、やむなく処刑されました」

「最後まで自らの主君に仕え続けたんだな……」

「さらに悲劇は続きます」

〈袁紹 side〉

負けた。

天下はすでに曹操へと流れた。

優秀な将も失い、兵糧も失い、度重なる追撃により兵も数少ない。

……そういえば沮授と田豊は戦うべきでは無いと言っていたな。

ふふ、聞かなかつたばかりにこの醜態か。

「のお、逢紀」

「ん？殿どうしたつしょ？」

「城にいる田豊は今頃どうしているだろうな。田豊の言つとおりだ

った。田豊の策を聞いていればこのような結果にはならなかっただろつに」

城の牢の中に田豊はいた。

既に曹操に敗北したという報告は受けている。

「田豊様！！これで貴方は牢から出られますね！！」

この世話をしてくれている兵とも長いつきあいになってしまっていた。

心配し、私を信じてくれていた兵にとって田豊がこの牢から出られるというのはとても嬉しい事であった。

だが田豊の表情は暗い。

「…田豊様？」

「無理でしょうね」

いつも気が強く、はきはきとした精気が彼女には無い。

声も力ないものとなっている。

思わず焦って兵は声を上げた。

「な、なぜです？田豊様の言うとおりになったのだから殿はきつと」

この言葉に力強く田豊は言う。

「無理よ」

自らの主君の声に思わず逢紀は内心ほくそ笑んだ。自分にとって田豊とは犬猿の仲であり、仲が悪く、常に対立していた。

その田豊を今こそ貶める機会だと思ったからだ。

「殿」

「私は常日頃から逢紀とは仲が悪く恨まれている。その逢紀はきつと私の事を殿に悪く伝えるはずよ。あいつのせいで多分私の策は受け入れられなかったしね。それに私が正しいというのは気に入らない、だから……」

「あの小娘は牢の仲でほら見たことかと殿を馬鹿にして笑っておられますぞ？」

「私は逢紀の讒言により殿に処刑される」

く終了く

「この逢紀の言葉により激昂した袁紹に処刑されます。この死を田

豊は予見していました」

「そんな…あれだけ忠節を尽くしたのに。ついに袁紹の二人の優秀な軍師はいなくなってしまうたのか」

「歴史家の孫盛は、「田豊・沮授の謀は、古の張良・陳平に匹敵するものである」と讃えています。この例に例えた二人は漢の高祖、劉邦に仕えた大軍師です。事実、沮授の進言を無視し始めてから転落が始まりましたし、『三国志』の注釈者である裴松之も田豊のことを「主君を誤ったがために忠節を尽くして死ななければならなかった」と慨嘆しています。さらには郭図もこの敗戦の責任を張コウに押しつけてしまいます。流石のそんなのはごめんとだと感じた張コウ、後に魏を支える名將はこの時を持って魏へと参入したのです」

「後の世にもそこまで言われているのか…なのに郭図、逢紀と許攸はとんでもないやつだよ」

「許攸は曹操軍に降ったあとにも傲慢で官渡の戦果は俺がいたからだなどと言って反感を買って処刑されます。ですが逢紀は同じほど憎んでいたはずの審配を、「私情と国事は別問題である」として懸命に弁護してその命を救っています。正直、逢紀についてはよく解りませんよ」

「ん…なかなか判断出来ないなあ」

「流石の曹操もこの後すぐには北へと行きません。いろいろと戦いで不足してましたからね。そして202年5月、袁紹は失意の中で死にます。当代随一の名声を誇り、河北に君臨した彼の器量は、決して低いものではなくむしろ高かったのでしょうか。ですが官渡の戦いで彼は決断に迷い、沮授、田豊の進言を疑い、終始後手に回

った。曹操とは違い、部下を信じ切れなかったのが敗因です」

「だよなあ…信じれていれば負けてなかったんじゃないかって私も思う」

「ですがここで当主が死んだら起こってしまう例のあれが起きました」

「……まさか」

「ええ、お家争いです。袁紹は事前に後継者を決めてはいませんでした。これによりお家争いが起こります」

「おいおい、親の敵である曹操が狙っているってのに後継者争い始まるのかよ…」

「もともと袁紹は後継者を定めてはいません。彼は長男の袁譚に青州に、次男の袁熙に幽州に、三男の袁尚は溺愛していたのか、手元に置いていました。これで後継者争い起こるなって言うのが無理な話です」

「明確にしとかなくちゃいけないよな…今でも昔でも」

「参謀の審配・逢紀は袁尚を、郭図は袁譚を支持することで後継者争いは起こりました。これを好機と見て曹操は北上、流石にやばいと思ったのか郭図と袁譚は袁尚に増援を要請しますが、逢紀が連れしてきたのはわずかな兵のみ。流石にこれには切れて逢紀はデストロイされます」

「うわぁ…」



「最初は曹操軍対袁譚軍で始まりましたが流石にこれはやばいとうやく気が付いたのか袁尚も参戦、この戦いは半年続きます。ですが次第に曹操軍が袁譚・袁尚を追い詰めてついには彼らは敗走、長期戦の構えを彼らはとりました。曹操はここでいったん退きます」

「え？勝つてたのになんで退くんだよ」

「かなり苦戦したんです。それに半年間で進んだ距離もわずかですから袁紹が死んだのだからすぐに河北を平定出来ると油断していたのでしょね。それに波に乗る曹操軍に半年間も耐えているんですよ？すごくないですか？」

「協力すればそこまで戦えるのに……」

「これも袁紹の失敗ですね。ちゃんと決めておけばある程度は戦えたことがこれで証明されているのですから。郭嘉は「あいつらほつとしても後継者争いで勝手に疲弊するから今決めなくても良いだろjk」と曹操に言いました。曹操も郭嘉の進言を受け、勝ち取った都市の黎陽に部隊を留め、許都へ撤退します。そして劉表を攻めると陽動もやります。で、結果また後継者争い」

「えげつないことするなあ曹操も。というか袁兄弟もやばいことぐらい解れよ……」

「袁尚は数で勝る自軍を率いて、平原にいた袁譚に猛攻撃を行いました。これに袁譚は焦ったのかとんでもないことしてかしました」

「何をしたんだ？」

「曹操に助けを求めました」

「……………は？」

「だから曹操に助けを求めたんですよ。曹操に『降伏』し、援軍を要請したんです」

「はあああああああああああああああ！？」

「一族の内紛の解決に部外者を引き入れるのはとてもやばいことです。というより言わなくても冷静に考えれば解ることですよ。曹操はこれを受理、再び河北へと進軍します」

「馬鹿だ…どうしようもない馬鹿がいる」

「流石にこれには同盟を組んでいた劉表も驚いたのかポルナレフ状態になりました。すぐに二人にはそんな事止めて仲良くしてよと講話を送りますが二人はこれを黙殺します。もうこれオワタ状態ですよ」

「ここまで来たら引けなかったのかもな…」

「袁尚はこの時ギョウを拠点としていましたが平原に攻めたために空っぽでした。これを狙い撃った曹操ですがここで思わぬ苦戦を強いられます」

「え？なんでだ？もう袁家には名だたる人材はいないはずだろ？」

「審配です。軍師審配が堅固な守りを築き上げこれを迎え撃ちました」

（ギョウ side）

「田豊、沮授、お前ら正解だったわ。やっぱり曹操は強いわ」

そう審配は青空に向かってつぶやく。

空にはかつて、主君と共に歩いた仲間の顔を浮かべた。

「曹操がこっちに向かってくるってよ。それで俺は曹操と戦おうとしてるんだぜ？」

そう自嘲気味に笑う。

「馬鹿だよなあ。勝てるわけ無いのに。既に俺がここで戦おうが天下は曹操の元に流れたってのよ」

兵は倍、いやそれ以上。

援軍の見込みはない。

誰がどう見ても、自身がどう考えても結果は分かりきったことだった。

「許攸みたいに投降したほうが楽だったのによ。やっぱりここで俺も下ろつかね？」

そう顔を俯けた。

その時



袁紹様こそが私の唯一の主君だと。  
袁家こそが私が輝く場所だと。

「ああ、酷い君主を持ったもんだ。そこはさ、せめて生きろとか言うところだろうが。それにしても難儀な人を主に持ったもんだね。まさか死んでも出てくるとは」

歩く。もはや迷いなど無い。

敵は確かに多い、そして練度も高い。だがそれがどうしたというのだ。

俺はなんだ。俺は軍師だ。

それぐらいどうにかしなくって何が軍師だ。

その目は爛々と輝き、口には笑みが浮かぶ。

さあていつちよやるか!!

「一世一代!!袁家の軍師ことこの審配!!袁家の栄光と王道を見せてやるよ!!」

「さあ行け!!敵は我らよりもはるかに少ない!!このような小城などすぐに落とせる!!」

迫り来る敵!!敵!!敵!!

自分の倍、いやそれ以上の数を有し、練度も高く、士気も旺盛。だが小城などつてのはいたただけねえ。

ここにいるのは袁家の軍師たる審配だ!!

軍師つてのはどうにかならねえ状況をどうにかするためにいるんだよ！！

「矢を三段うちで放て！！お客様には絶え間なき矢の雨を喰らわせてやれ！！」

「審配様！！敵兵が城壁に！？」

「慌てんじゃねえ！！熱い煮え湯をごちそうだ！！石のおまけもつけてやれ！！」

『204年春、袁尚不在の？を守るのは、補佐役の審配』

「っは！！曹操の内通者を見逃すほど俺はお優しくはないんでね！！」

『曹操軍は敵の内通を利用したり、』

「おいおい、穴攻めとは公孫釐の時の意趣返しのもりか？本家にやるとは馬鹿じゃねえの！！」

『穴攻を試みたが、全て失敗』

「全軍一軍となつてあたれ！！」

『審配の巧みな反撃に苦戦を強いられた』

「まさか……ここまで審配がやるとは」

曹操は思わずため息をついた。

彼に優秀な人材を推挙し続けた荀イクは審配はたいしたことは無いと評価を下した。

「審配は独り善がりで無策である」と。だからこそ驚く、その評価が外れたことに。

このままここを攻めても被害が増すばかりだ。

「仕方がないな……周りの拠点を落としここを孤立させる。更に水攻めを行うとしよう。そうすればいくら審配といえども降伏するはずだ」

周囲の川を決壊させて水攻めを敢行。完全に審配は孤立した。

だが彼はそれでも諦めない。

波のように押し寄せる曹操軍。

それらを全て防ぎきる。

だが2007年8月

軍は限界を迎え、東門にて審配の甥、審栄が門を開放。

曹操軍が城内に雪崩れ込み、市街戦。

審配は捕らえられた。

「審配。お前はよくこの城を守った。それをとぼすものなどいない」  
目の前には曹操。

俺は今曹操の前で縛られている。  
俺は縛られるんじゃないや無く縛る側が好きなんだけどなあ。

「審配、この曹操に下れ。お前のその才覚はここで散るのには惜しい。共に乱世を生きるのだ」

おおう、あの曹操からの誘いか。いいねえ。

俺にはそこまでの価値があるのかい。

「その才、私のもとで使う気はないか」

その答えは一つに決まってるんだろ！！

「無い！！この審配の知略、髪一本まで俺は袁家のために用いる！」

「……最後にもう一度聞く。この曹操の元に来る気はないか？」

「くどいわ！！俺は袁家の臣下なり！！二君に仕えるなど怖気が走る！！我が主は北にあり！！」

「……沮授といいお前といい袁紹は良きは配下を持った者だ。お前達が最後まで貫いた忠誠、長く語り継がれるだろう。連れて行け」

袁紹様……今、貴方の元へ行くぜ。



「袁家に栄光あれ！！」

ザシュツ

『審配は主君である袁尚を方角を向いて処刑された。死ぬまで貫いた忠誠、審配は袁家に仕え続けた忠義の将としての烈士の名を死して得た』

く終了く

「なあ、お前審配好きだろ？ひいきしただろ？」

「ああ、大好きさ！！ひいきもするさ！！」

「そこまで来ると清々しいなあおい！！」

「曹操は審配に投降を呼びかけましたが彼は断としてこれを拒否して処刑されました。これを機に袁家の瓦解が始まります。その後北へ逃げた袁尚を袁譚は無断で攻め。これにより口実を曹操に与えてしまいました。主君である袁譚及びその軍師の郭図、彼らはなんと曹操軍を一度押し返しましたが戦死。袁尚は烏丸族へと助けを求めましたが……」

「求めたが？」

「張遼が無双で烏丸族を撃退します。張遼はまだ敵が陣形を完成していないのを見ると突撃。遼来々で敵将を討ち取り倍以上の数をあつさりと撃退します」

「張遼…すごいな」

「実は作者は三国一番の武力チートは張遼だと思っています。なんですか呉の大軍十万を八百の兵で撃退するって。しかも正面突破で。張遼は是非武将紹介したい人物の一人です。これでさらに公孫康の元へ逃げますが…首だけにされて曹操へ送られます。これで『四世三公』と呼ばれた名門袁家は滅びました」

「なんだか袁紹はちゃんと聞けば勝っていたような気がするな……」

「私もそう感じますね…後継者争いもなければまともに戦えてちょっとは違う歴史になったでしょうに。虎の子は虎を産むとは限らない、呉や蜀も同じですが、ちょっともの悲しさを感じちゃいますよね」

これで袁紹の武将紹介は終わりです。作者はもうこれは官渡とか滅亡まで書いても良くねと書きましたがいかがだったでしょうか？作者は楽しかったです。

次は張遼や甘寧などの手頃な恋姫武将を紹介できたらと思います。

お付き合いがありがとうございました。

番外編 武将紹介〜袁紹 官渡編〜 (後書き)

これにて武将紹介終了。

今回は劉備と出会ってなんかうんちゃらかんちゃらする回です。  
その次がおーっほっほっほ。

第二十五話 桃髪ってみんな個性すこくない？（前書き）

人生とは、切符を買って軌道の上を走る車に乗る人には分からないものである。

くサモセット・モームく

## 第二十五話 桃髪ってみんな個性すくくない？

こんにちは。波才です。

目の前の女の子がどんなマイナー武将かと思っただら大物来ちゃいました。

「私は性は劉、名は備、字は玄德！！よろしくね！！」

わあい、なんていい笑顔なんでしょう。

私も笑いますが額に汗が浮かんでいます。

理由？あの荒くれ者で勢いで役人殺すような劉備がどうしてこうなったのか、今の僕には理解出来ない。

もうこれあれでしょ。誰だか解りませんが私に対する盛大な嫌がらせでしょう。

サプライズとか言っただけ私の胃を殺しに来てるに違いない。

あとね、彼女は解らないかも知れませんが隠れている明埜が殺気満開で見えています。いや、駄目ですからね？貴方が姿出したら声ではれますからね？

隠れている明埜と目が会う。

「（コロシタイ）」

「（いや、駄目ですって）」

「（頼ム、殺サセテクレ。先ツチヨダケ、先ツチヨダケダカラ）」

「（なんかいろいろその言葉の使い方おかしくないですか!?!）」

どこでそんな言葉覚えてきたんですか。

やっぱあの私の作戦が邪魔されたときのことねに持っているようで。

「桃香様!！」

更に声が聞こえました。今度はいつたい…。

OK落ち着け。

まずは整理です。

黒髪&サイドポニテだからと言ってここで素に戻ったら惨事なんて目じゃないことになる。

そうだ、たかが美しい黒髪の長髪に私の大好きなポニテが絶妙に組み合わさり、すばらしいハーモニーをかもし出してるだけじゃないか。

……だめです。押さえ切れていません。

この人なんでこんなに私の好きなものピンポイントで内蔵してるんですか!?!?

私は黒髪で長髪でポニテの人が大好きなんですよ！？これで和服とか着ていたら多分私は血を吐いて死んでいたでしょう。大和撫子は無敵です。

ツゾク

今なんかすごい殺気が近くと遙か彼方から感じました。なんか中に誰もいない感じって言うかなんて言うか、その、異常にどす黒い殺意って言うか。

明埜が喰い殺すような目でこの三人を見ている。

それはいい、いや良くないですがもう一つの殺気はどこから跳んできたんですか？

何でか解らないですけど私はとても……そうだ。

ナイスボートな気分になりました。

まあそれはともかく二人の少女がやって来ました。

うち、ポニテの女の子は劉備に注意をしていますね。

もつともです。そもそも友とはいえ人の陣地に一人で来るなど無謀すぎるでしょう。脳天気ちゃんにもつと説教してあげてください。

武器は……黒髪のポニテの子が青龍刀、赤髪の子は巨大な蛇矛。

それで劉備とここまでの仲といえば。

「まあまあ……関羽殿。彼女も反省しているようですしここら辺にしてはいかがですか」



そう笑いかけると黒髪の少女、関羽であろう人物は驚いたような目で私を見る。

そりゃこんな麻袋被った人間に急に自分の名前を当てられれば驚くわ。

止める意味はありませんがここで止めれば劉備の私に対する好感度が上がりそうな気がします。

涙目ですからね、きつとちよつとした恩を感じるでしょう。仮にも劉備なのですから恩を売って損はありません。

それにここからの問答を繰り返すにはちょうど良い緩衝材になるでしょう。

「仮にもここは公孫贄の陣地です。あなた方の陣地ではありません。そこでそのような見幕で貴方の主をしかつては良くない噂も立ちましよう。もちろん貴方のおっしゃることは正しいですが劉備殿も反省しているご様子、こちらでお止めについては？」

見ず知らずの麻袋にそんなこといわれたのが不満なのか、関羽は顔を顰める。言われていることは最もだと理解出来る頭はあるのか、劉備さんへのおしかりは打ち止めのようにです。

劉備さんにだけ解るよう目で合図すると目を輝かせて私を見てきます。

いや、なんだろう。

そこまで純粋な目で見られると困るのですが。

「貴方は誰です？何故私の名前を知っているのですか？」

疑いの目で訪ねてくる関羽さん。予感的中の模様、このまま明日の天気でも占いましょうか。

訝しげにというか、胡散臭げに言うべきか、彼女が一番正しい反応です。

覆面男と談笑とか出来る劉備がどうかしてますって。

この人たらしめ。だ、騙されんぞ。

「私の名は単経、白蓮様の下で客将をしている者です。それと貴方の名前ですが、そのような美しい髪と容姿、その青竜刀。そして劉備殿と言えば武名名高い『美髪公』こと関羽殿以外いません。おそらくこの大陸の誰が見てもそう答えるでしょう」

お世辞も砂糖一杯にのせましょう、お堅いタイプの彼女にはこれが良いと見える。

誰だっつて褒められて嫌なわけがない。

「む、むう。だがその『美髪公』というのは初めて聞くな」

「おや？民達も私もあなた方の義勇兵達による武勇はよく聞きますよ。戦場で長き黒髪で青竜刀を持って戦うその美しい少女とその武勇。どれもよく聞かれています」

「な、う、うむ」

そう笑うと顔を赤くしてうろたえている様子。うん、なんとかごまかせそうですね。

彼女たちなら白蓮の同盟相手に向いているでしょう。

もとより学友ですからね、それに劉備はあれですが……やはり関羽や張飛などといった将は馬鹿に出来ない力を持っているようです。

孫策を思い出すわゝあの人も英雄だけど、部下いなくちゃ絶対に成り立たないもの。

単独で国はれんの曹操ぐらいじゃない？例外でうちの普通ちゃん。

……というか明埜はこの二人から逃げ延びたのですか。

それだけで明埜は賞賛に値しますね、あんたすげえよ。今度その逃げ足教えてよ、何でとは言わないけれど。

「貴方は張飛殿ですね」

「にゃ？鈴々の名前も知ってる！？」

「当たり前ですよ。その赤き髪と巨大な蛇矛。黄巾討伐で名高い劉備殿の猛将である張飛殿以外他なりません。一騎当千の力を持ち、戦場を駆け回る武勇は劉備殿や関羽殿と同様に聞き及んでいますよ」

そういうとこれまた「えへへ」と照れながら頬をかいています。なんだか可愛らしく思えてその頭を優しく撫でると、「ふにゃ」と

か言いながら気持ちよさそうに眼を細める。  
まるで猫の相手をしているようだ、やべえ癒されるわ。

……明埜？殺気を私の背中にまで浴びせるのは止めてくれませんか？  
というかなんか殺気増してませんか？

身近な所から嫌な予感を感じたので撫でるのを中断し、私は懐から布袋を取り出した。

……心の中でのぶ ボイスだったのは内なる秘密だな、うん。  
そしてその中へと手を入れて三人にあるものを差し出す。

「ああそうだ、折角ですからどうぞこれを」

「うわ〜かわいい……」

「これは……」

「兎なのだ!!」

飴です。

よく職人さんがやるような飴細工であり兎の形をしています。なかなか取れないはずの砂糖も普通にあるこの世界ならではのお菓子です。

それに兎というのは女性受けしやすいように配慮しています。

もちろん化学調味料なんて無い！！というかこの世界にも流石に化学調味料なんかあるわけ……無いって言えないのがなんか悔しい。

「これは私が作った飴です。よければめしあがってください」

「すごいこれ飴なんだ！！かわいい………なんだか食べるのがもったいないなあ」

「いえいえ、兎さんもあなた方に召し上がってもらえるならば本望でしょう」

そう言っつて私は笑います。

まあ顔は見えないんですけど。

「そうかな？じゃあ……いただきます」

「と、桃香様！不用意に食べてはなりません！！」

「美味しそうなのだ！！」

「くら鈴々！！」

……… 関羽殿は苦勞人ですね。

劉備殿と張飛殿は言っつては悪いですがのほほんオーラ全快、無防備すぎです。なんか涙が出てきそうでした。

あ、やべ。天和様思い出す。

というかこの人天和様とキャラかぶってない？訴えれば勝てるか？

「大丈夫ですよ、これから共に戦う私からの贈り物です。それにこれは甘くて心の疲れも癒します。関羽殿にはちょうどいいお菓子です」

そういつて「ほらっ」とばかりに一つ私の口に放り込みます。

うん、甘くて美味しいです。

やっぱり甘いものはいいですね。

そんな私の様子を見て大丈夫と判断したのか関羽殿もいぶかしげに劉備殿達と同様に手に取ると、三人は口に飴を含む。

「あ」

「おお……」

「美味しいのだ!!」

三人は三者三様の反応ですが幸せそうな顔をしている所を見ると気に入ってもらえたようですね。

さて、何気ない行動に見えますが他人の差し出した食べ物を口に入れるというのは並大抵のことではありません。なんせこの乱世は毒殺も珍しくはない、食べるといふことは下手すれば自分の命にも関

わるのだ。

つまりこれは自分の命を差し出した、私はそれに答えたと言うこと。この時点で本人は気が付かないでしょうが「私は彼女たちの信頼に応えた」という楔が無意識のうちに打ち込まれるのです。

この時代、命が軽い乱世ではそれがもつとも顕著に表れます。これも立派な外交なのです。物事の始めは食事から始まる、口と行動を少し軽くするために。

「どうやら気に入ってもらえたようで嬉しいですね」

そう笑うと劉備さんが目を輝かせて私に尋ねます。

いや、笑っても顔は見えないですけど雰囲気ぐらいは伝わるでしょう。

ああ、でも美味しいって言うってもらえるのはいい。

日本にいたときも妹によくお菓子を作っていた……あ、目から汗が。妹もお返しによくクッキー作ってくれたよ。

何か気が付いたら食べた記憶無かったけど。思い出そうとすると手が震えるからいいや。

「これって単経さんが作ったの？」

「ええ、お菓子などを作るのが好きなんです」

「すごい！！私こんな美味しいお菓子初めて食べたよ」

劉備さんはもう大丈夫かな？

なんだかんだで彼女は芯が強そうですから、例え誰かが私は危ないと言ってもきつと「単経さんはいい人だよ！」とか言って養護してくれるでしょう。

性善説をよるこんで信じそうな程のお人好しっぽい。

……なんだろう。

心が痛い。もの凄い痛い。お願いですからそんな目で、そんな目で見ないでください。

「もつと欲しいのだ！！」

目を輝かせてる張飛さんも大丈夫っぽいですね。

ここはもう一つ餌付けしておきましょう。

餌付けって……駄目だ、私いろいろと人として駄目だ。

取り合えず人として終わってます。妹よ、お兄ちゃんもう駄目です。お前に胸張って会えるような人間じゃなくなっちゃいました。

覆面の中できらりと光る……汗です。

これは目から流れる汗です。他に何だっぺんですか！？

「はいどござい」

飴が入った袋ごと渡します。



これにはみなさん驚かれたご様子。そりゃ砂糖は私が知っている時代よりは易いとは言え、高級品であることには違いはないのだから。飴なので当然ながら多量の砂糖を使っています。それにこの飴細工はかなりの精巧品、もはや嗜好品の域に一步踏み入れているかな？

我ながら中々の出来です。

さすがにこれには関羽さんも予想外だったよう。

「よ、よろしいのですか？」

「構いませんよ、あなた方のような美しい女性に喜んで食べてもらえるなら本望です。それにこれから共に戦う仲間なのですからね」

そついうと慌てて赤くなる関羽さん。

なかなかうまくいつてる。基本劉備軍は善人の集まりだわ。

ただでさえ怪しい格好してるんですから詮索はされたくはありません。

それに第一印象は悪くはないようですね。物事の全ては第一印象で決まりますから。関羽さんはまだ警戒していますが残りの張飛さんと劉備さんとは良い雰囲気です。

劉備自体はあれですが部下が魅力的ですからね。味方になってくれたら嬉しいです。

そついえば私を見る気配がまだ感じていますね……。三人……。うち一人はあったことがある気がします。

劉備関連で私があったことがある武将といえば……。趙雲か。

それに残り二人には武人の切り裂くような気がない所を見ると軍師？  
それもただ者ではないですね。これは例の軍師のお二方？鳳凰と青  
龍か？

私は思わず笑みをこぼす。すげえ、やっぱすげえよ劉備軍。最高に  
熱い軍だ。

やはりここで劉備を味方に付けておくのに超したことはない。  
上さえ落とせば後は芋づる式に行きそうですからね、劉備軍は。

……だが、この劉備はどんな思想を持っている？見た感じただのお  
人好し、いや、確かに魅力はチートレベルだが……むう。

「そう言えば劉備殿？貴方はどのような思想をもっておられるので  
すか？」

「思想っていつと？」

「貴方はどう思い義勇軍を立ち上げたのですか？」

別に本心を語らずともよし、だがその一片には触れさせていただき  
たい。

「苦しむ人を救いたい！！みんなが笑顔で過ごせるような世界にし  
たいの！！」

「へえ」

その瞬間、一部の者達はこの場の空気が変わったことを敏感に感じ取る。

すぐさま各々の得物にとっさに手を伸ばしかけ、止めた。

一部の者達、それは白蓮、明埜と言った波才と深い関係を持つ者達であった。

劉備が声を発したその時、彼女達は言いよのない寒気を感じた。肌を無機質な百足が這いずるような、冷たい蛇の鱗が擦れるような生物的悪寒。人という自然界に生まれた一生物としての本能。

それは、あまりにも歪過ぎた。

では、何故それをこの場にいる劉備達や一般の兵士が感じる事が出来なかったのか。

それは単に彼に触れたことが無かったからだろう。

そう、彼女達は『単経』を知っているだけであり、『波才』を知らないのだから。

劉備が語る物語、それは乱世においてどうしよう無く矛盾し、滑稽であり、道化の戯言であった。だが、どうしようもない魅力が『確かに』そこにあるのだ。

人が無意識のうちに美しく、心惹かれるものに本能的に手を伸ばす。理性では抗えない、人間としての堪えきれない衝動。それが彼女にはあった。

戦えば、人が死ぬ。平和のために、人は死ぬ。

誰もが笑うために、誰かが死ぬ。

その矛盾に彼女が気が付いているのか波才は知らない。

それ以前に彼女が矛盾という歪みに対して気が付こうが気が付くまいが、それは波才にとっては路傍の石を眺めることと何ら変わらないことだ。

彼がただこの少女に見いだした一点、それは。

「素晴らしい……素晴らしいですよ劉備さん!! 貴方は……ああ、もう素晴らしい!! なんて貴方のような人がいるんですか!？」

「へ? あ、その、ごめんなさい?」

「何を謝る必要があるのです!? 貴方ほど素晴らしい人はいません!! むしろ私が貴方に詫びたいぐらいです!!」

仮面に輝く二つの光。きらきらと輝きながらもどこか蛇のような冷

たさを併せ持つ。

もはや波才はその感情を抑えることが出来なかった。人目をばからず彼は劉備を賞賛する。

彼女の人柄、行動、思念、信念、発言をまるで恋い焦がれた乙女に愛を語る男のように、ただ吐き続ける。

最初はあわあわと顔を赤くしていた劉備であったが、やはり自分の道を認め、賞賛されて悪い気持ちになる人間はいない。

彼女とて例外ではなく、その嬉しさを堪えきれずに顔に表れている。それは張飛も同様であり、照れくさそうに頬をかいた。

「ぜひ！！ぜひ！！ぜひ応援させてください！！貴方のその夢、希望はとても尊く素晴らしいものなのですから！！」

だが、そんな三姉妹のなかで唯一関羽だけはどこか波才の違和感を感じていた。

最初はからかいや、嘲りの言葉をうちに秘めているのかと考えた。だが、彼の今の姿は昔劉備と出会い新たな境地を見出した己の姿と同じだった。つまり彼は本当に劉備の言葉に胸打たれたいるのだ。

……ではこの違和感は？

「あ、す、すいません。ご迷惑をおかけしましたね。どうも興奮してしまつとこう、なんていうか、ははお見苦しい所をお見せしていません」

「……いえ、単経さんが認めてくれて正直私も嬉しかったから。その、おあいこってやつでどうですか？」

「おあいこ……ふふ、そうですね。なんだか劉備さんとは仲良くなれそうな気がします」

「あ、実は私もそう思ったんです」

「おやおや……では、劉備さん」

仮面の男は笑って己自身を指さした。

「私と友達になりませんか？」

その言葉を聞き、とっさに関羽は劉備の前に進み出て彼女をかばいたいという衝動に襲われた。  
だが、理性によってそれは押しとどめられる。

別に、彼はおかしな所はないのだ。いや、おかしいのだがおかしくはない。

共感し合うからこそ共に手を取り合う。  
そこに自分が入り込む隙はないのだから。

だが、この違和感はどう説明すればいいのだ？  
この胸騒ぎはなんなん

「はい！！あ、私の真名は桃香です。これからよろしく願います」

「私は真名無いんですよ、だから親しみを込めて絶対神と呼んでください。神様でも可」

「分かりました絶対神さん！！」

「………すみません、単経と普通に呼んでください」

………気のせいだ。うん、多分気のせいだ。  
妙な徒労感を感じて関羽はため息をついた。

「もう少しこうやって桃香さんとお話したいのですが………すみません、どうもこれから軍を統括しなければならぬので」

「あ、そ、そう言えば急に訪ねて来てすみませんでした！！」

「いえいえ、ここで貴方に会えて友好を結べたと言うだけで私としては僥倖です。それでは、張飛さん、関羽さんもお気を付けて」

「鈴々は鈴々と呼んでくれて良いのだ！！お兄ちゃん面白いから真名で呼んで良いよ！！」

「おや、これはこれは………まさか二人も今日一日で友達が出来るとは」

いつの間にやら、他の二人からも関羽へ向けて期待の目が向けられる。実を言えば、関羽は己の真名を単経に進んで与えたいとは思えなかった。彼に対しての言いようのない違和感は結局の所ぬぐい切れてはいなかったのだ。

ジッ

だが、信頼する妹と尊敬する長女の視線に耐えかねたのか。彼女はそれを己の中に杞憂だと押さえつけることにした。

「私の真名は愛紗と申します。単経殿、どうぞよろしくお願いしたい」

「おお、改めまして単経と申します。よろしくお願いいたします愛紗さん」

単経から差しだされた手。

それはくすんだ白の手袋に覆われており、肌の色さえ分からない。

自らも手を差しだして握りあったその感触は、どこか人の温かさを感じると共に。



人形のような冷たさを思わせた。

波才は劉備が去った方角を眺めつつ、満足げに腕を組む。今回の出会い、最後の英雄との出会いに波才は満足した。これにて、曹操・孫策・劉備の三国時代の英雄が彼の目の前に全てさらけ出された事になる。

劉備との出会い、理想を夢見る彼女と現実主義のリアリストである波才は、一見水と油のように相容れない存在に見える。だが、それは大きな間違いだ。

劉備と波才はよく似ている。似すぎていると言っても過言ではない程に。

それは

チヨンチヨン

深く思考する波才であったが、肩に何やら軽い違和感を覚えた。  
誰かにどつやら恐る恐るといった手つきでつつかれているようだ。

振り返るとそこには……。

「なあ……私忘れられてないか？」

涙目の白蓮がいた。

「ええと……その……」

忘れていました。アア、忘れていたとも!!

と、言えるほど波才は非道ではない。でも忘れていた。

ぶっっちゃけ後半から空気というか、ほぼ最初から空気だったのだ。

つまりぶっっちゃけいらないう(ry

「……白蓮さん、世の中には知らなくても良いことがあるのですよ  
」?

深刻そうな顔でとつさに声を出す波才。

あれ？これってもしかしなくても逆効果？と気が付いたが既に遅し。

「忘れてたんだろ！！どうせ私はあれだよ！！うわああああああ  
ああああん！！」

涙の軌道を描きつつ走り去る白蓮。

なんだなんだと陣幕から兵が顔を覗かせる。だが白蓮は駆け抜けた。  
というか、走るしかなかった。

実を言えばこの時波才は「夕飯までには帰るんですよ」と咽まで  
出かかっていた。

が、この後の事を考えると彼は顔が青くなった。

そつだ、顔合わせの軍議があるのだ。

思わず波才は第129回脳内会議を実行。

Q・白蓮がいない誰が出るの？

A・お前が出る。

Q・孫策とか曹操といるんですけど。

A・そんなことよりポケモンしようぜ！！

Q・お前伝説廚だろ？やりたくねえ

A・うわ、お前みたいにベトベトンみたいな変なポケモン使う奴よ  
りマシだし

Q・死ね

A・お前が死ね

何故か後半おかしくなったが、それぐらいやばいのだ。  
いくら美しい女性達とは言え、中身はバリバリの三国武将。しかも片方には喧嘩を売りまくっており、下手すれば彼女のドリルで波才の肛門が開発されかねない。

ちなみに当然ながら曹操はそんな趣味はない。

もはや波才の頭はショート寸前だった。完璧に自業自得だったが、命の危機に思わず衝動的に白蓮へと走り出そうとするが、足をとられてその場に崩れ落ちる。

だが、波才はそれでも遠ざかる白蓮に手を伸ばした。

ちなみに考え手欲しい。

涙を流して走り去る白蓮。

その背を儂げに手を伸ばして追い求める波才。

「白蓮！！私を……私を……」

思わず心が欲するままに波才は叫んだ。

「私を捨てないで！！」

思いつきり顔からこける白蓮。

ズザザザアゝって。それからピクリとも動きません。……大丈  
夫ですか？主に顔。

って。

あれ？周りの兵士のみなさんなんでそんな驚いた顔で私を見るん  
ですか？

明埜？貴方そんな鳩が豆鉄砲喰らったような顔してどうしたの？  
美須々？貴方わざわざ走って戻って来てどうしたんですか？あの琉  
生ですら額に汗浮かんでいます。

なんだこれ？

「あ、主？」

「どうしたんですか美須々？というかなんで皆さん固まってらっしゃるのです？」

「い、いえ。何でもありません」

そう言っつて顔を赤くしてもじもじしています。

……なんだこれ？

私なにかしました？

〈劉備軍 side〉

「すごいいい人だったよ！！」

「たくさんお菓子もらったのだ！！」

「ふむ……」

顎に手をやり何やら考え事をしている趙雲に孔明が声をかける。

「星さんはどう思います?」

「まず隙がない……どうやら私達のことにも気が付いていたようだ。それにどこかで会った気がする」

「面識があるのか?ならばあの男の正体も知っているのか?」

その言葉に関羽がいぶかしげな様子で訪ねる。

彼女自身、袋で顔を覆っている時点で余り単経のことを信用はしていない。

何かやましい事があるのか……はたまた顔に傷でもあるのか。

「いや、私の知り合いにあのような物を顔に被っていた者はいない」

そう言ってお手上げとばかりに手を組む。

「だが何も隠れてみていたのは我らだけでは無く向こうも同じようだな」

「」「え?」「」

「む？ずっと見られていたのに気が付かなかったのか？」

「え、え？誰か他にいたの？」

「まったく解らなかったのだ」

「わ、私としたことが」

関羽は思わず考える。

気が付けば彼の会話に引き込まれていた。あの場で主導権をいつもまにか握っていたのはあの男。始終あの単経という謎の男のペースで話が進んでいた。

それこそ他に目が行かないほどに。気が付けばあの単経の土俵に上がっていた。

思わず関羽は目を見開く。

「やれやれ、桃香様や鈴々ならともかくお主までもか」

「油断なりませんね……」

同時に孔明も彼らには驚いていた。

まずあの兵達だ。単経が行ったわずかな動作ですぐにその場を去ったあの動き。並の統率力と訓練ではあのようにには行かない。誰もがあの謎の男のことを考える。あれは何者だと。



……立った一人を除いてだが。

「でも仲間だから大丈夫だよ。なにより白蓮ちゃんのお友達だしね、きつと私達とも仲良くなれるよ。」

「桃香様、そうは言っても」

「大丈夫!!ね?」

そう、劉備はまったくといっていいほど彼のことを疑っていなかった。

だが彼女ほど臣下達は人を信じられない。劉備がこのような優しき性格だからこそ彼女達が支える必要があるのだ。

その一人である関羽が彼女を諫めようとした、その時。

「忘れてたんだろ!!どうせ私はあれだよ!!うわあああああああああああん!!」

「「「……………」」」

公孫贖の悲しいほど悲壮感が漂う叫びが聞こえた。

この場の誰もが気まずくなり、互いに目を合わせる。

「「「(忘れてた…………)」」」

もともと挨拶をしに言った本人のことを誰も忘れていた。  
気まずい、もの凄いきまずい雰囲気は漂う。見れば涙を流しながら  
走る白蓮の姿がそこにあった。

「えと……ごめん、白蓮ちゃん」

「忘れてたのだ……」

「白蓮殿……」

走り去る白蓮の後ろ姿はなんとも同情を誘う。  
だがそれだけでは終わらなかった。

「あ、単経のお兄ちゃんなのだ」

鈴々が指さす方を見るとそこには力なく座り込む、噂の単経の姿が。  
単経はもはや遠くにある白蓮の背中に手を伸ばす。

「あやつ、何をやってるのだ？」

冷や汗をかきながら関羽はつぶやく。  
先ほどまで考えていたような怪しく、不可解な男の姿はそこになく、  
まるでどこかの劇の一幕のようだ。

一体何を……そう思った矢先、聞こえたきた声は。

「私を捨てないで!!」

「……」

その言葉に遠くの公孫贇が転ぶのが見えた。見ていて気持ちが良いほど。

なんだろう？この胸のもやもや感は。一同は先ほどまであれほど悩んでいたのが馬鹿みたいに感じた。

これも作戦なのか……？にしては心のそこからの叫びのようだったが……。

無言で仲間と目を合わせる劉備軍。言いよのない疲れが押し寄せて来る

「え、えと……悪い人じゃないよ!!」

困ったように笑う劉備の言葉に、さらに疲れが湧き出た彼女達は盛大なため息をついた。

結局の所、単経という人間について彼らは何も知ることは出来なかった。

得たものが有るとすれば。

「……ハア」

徒労だつたりする。

白蓮が元に戻るまで実に一刻もの時間がかかった。

顔が赤い白蓮が袋を被った波才を小一時間怒る姿は、妙に滑稽であったのは言うまでも無い。

お互い落ち着き、納得したところで波才はふと、白蓮に問いかけた。

「白蓮？念のために聞いておきますけど。貴方は桃香さんの事は恨んでいますか？」

「へ？何で私が桃香を恨まなくちゃいけないんだ？」

「自らの民を持ってかれたあげく魅力負け。ここまでされたら大抵の人間は恨みますよ？」

「じゃあ私はその大抵の人間じゃないってことだ。もしや、そろそろ普通脱却の道が見えてきたのかも！？」

「はは、ぬかしおる」

「……地味に傷つくなあ」

苦笑する白蓮を見て笑う単経。

単経はこの連合に来るまで内心穏やかではなかった。その理由がこの君主様である。

かつて劉備は公孫賛軍に所属していたが、離脱する際多くの民を兵として連れて行った。これは無理矢理ではなく、民が自ら進んで志願した結果である。

だが、それは公孫賛のメンツを潰す事となる。

かねてより公孫賛が呼びかけても応えなかった己の民を、劉備は横から奪い去っていった。その数も数百ならともかく数千という数の民をだ。

確かに公孫賛は劉備よりも劣る。だが、それにより幽州は優秀な兵と民を失ったのだ。恨まないはずがないと波才は確信していた。

だが、その答えはNO。

「そんなの今更な話しさ。事実、私は桃香に魅力で勝てるとは思っていない。それに徴兵を認めたのも私だ。あいつが出て行くように仕向けたのも私だ。全部自己責任、恨むなんて筋違いだろ」

波才の中で白蓮のランクが上がった。

頭で分かっているとしても、それを納得できる人間はなかなかいない。人にそれを押しつけ、自らの所業を顧みず他者の苦言をもらしては悔しがる愚か者が大半である。

人は自らの行動と結果、そして成果をよく見つめ直すことで成長する生き物。

愚か者はどんどん堕ちていき、昇るべきものはなお飛翔する。

「聞けば貴方の元を去った趙雲は劉備の元にいるとか」

「お前本当に意地が悪いよな……。別にあいつはあいつさ、私に合わないっていうならしょうがない、止めようもない。それとも何か、お前は私があいつの足に子供のようにながみついて懇願する様でも見たいのか？」

「……そんなことないですよ？」

「何で語尾が半音上がってるんだよ！？……ああ、私はお前がたまに分からない。さっきの時だって一瞬ひやっと来たんだぞ？」

「あれですか、劉備についていくとでも思ったので？」

「もしそうだったらお前を殺して私も死ぬ」

笑い飛ばそうと波才はしたが、思いの他白蓮の目がマジだった。

一瞬静寂に満ちたがすぐに「冗談だ」と白蓮は笑った。

……依然目は変わらずにマジであったが。

「違くてさ、お前と桃香って似ているだろ？同族意識ってやつか？だからあんなにお前喜んだんだろう？」

その問いに一瞬波才の体が大きく揺れた。

「……まあそうでしょうね。彼女も己が思った通りに偽らずに生きている。思うがままにね。多少ベクトルが、方向性が違うだけでしよう。彼女は全のためという欲望に、私は己のためという欲望に生きていますから。」

「例えるなら、『傷口を優しく慈しむように撫でるのが桃香。傷口を興味深げにつつくのが単経』って所かな」

「中々良い例え……貴方やっぱり少しは劉備のこと恨んでるでしょう」

「恨むつつうより嫉妬だな。持たざる者の特権だよ。それくらい許してくれよ？」

許すも何も無い、人間である以上、時代や年代、身分を問わず、誰もが少なからず持ち合わせている感情。それが嫉妬だ。

これは悪い感情ではないと波才は思っている。  
有名な漫画家である手塚治虫は、嫉妬の鬼だったらしい。仮面ライダーで有名な石ノ森章太郎が彼に初めて自分の原稿を見せた際、手塚治虫はそれを破り捨てた。駄作だったのではない、あまりにもそれが素晴らしくて嫉妬に駆られて破ったのだ。  
更に彼は妥協を許さない、ある赤の色が上手く出せないことに気が付いた彼は、少年の頃に血を用いて完成させた絵があるほどだ。

どこまでも深い向上心、探求心。それがあるからこそ己より上の存在を妬むのだ。むしろ向上心が無ければ妬む必要などないのだからむしろそれをバネにどこまでこの白蓮が成長するのか、そう思うと波才は期待を抱かずにはいらなかった。

「ふふふ、そうですね。持たざる者の特権ですものね」

「そうそう。……って、お前も嫉妬することあるのか？」

「そりやありますよ。むしろ持たなすぎて嫉妬しまくりです。マジパルパルです」

「そっかあ……私からすればお前は持っているように見えるんだけどな（ボン）」

始終和やかな雰囲気では二人は軍をまとめる。

だが、魔の手はすぐそこまで伸びている事を彼らは知らない。



\*。? )

ツゾクウ!!

「ん?どうしたんだ単経?」

「い、いえ。なんだか事前に胃薬が必要な気がしまして」

第二十五話 桃髪ってみんな個性すくくない？（後書き）

前半ぐだらぐだら過ぎるけど、取り合えず投下。多分二話みたい  
後で大幅改正すると思います。

武将紹介はモチベ上がらないのでお休み……。

最近本当にモチベが上がりません、あれか。この小説地味に三ヶ月  
書いてないからか？まったく書きだめが増えず、減る一方です。

なので投稿予定の別作品書いて、無理矢理モチベを上昇させる今日  
この頃。

作者は『書きだめ喪失』失踪』なので、のんびり書きだめ補充して  
ます。

……取り合えず、今のごたごたが済めばいいなあ。

第二十六話 会議は踊る、されど進まず（前書き）

人間は思想を隠すためではなく、思想を持ってない事を隠すために語ることを覚えた。

くキルケゴール

## 第二十六話 会議は踊る、されど進まず

どうも波才です。

あの後、真っ赤になった白蓮に怒られました。

もうあんな変なこと言つなどのこと。……そんなに変なこと言いましたっけ？

それはおいといて、今私は各国の群雄さんが集う軍議に出ております。うわ〜みんな女性だね。やりにくいっいたらありゃしない。

何故か私が出た時に様々な思惑と、陰謀の視線を受けました。いやん、えっち。

……まあ取り合えず、いろいろありましたが一言言わせてください。

「さて皆さん。何度も言いますがけれど、我々連合軍が効率よく兵を動かすのに辺り、たった一つたりないものがありますの」

あの馬鹿を止めてください。

クルクルドリルヘアーを靡かせて近所のおばちゃんの如くこの軍議の中で一人声高らかに話す。あの馬鹿。

\*。?。(

おーっほっほっほっほっ！

もしかしてこの人ってやつぱしなくてもあの人ですか？  
見た瞬間感じましたよ、こいつ？（ばか）だ。

初めて聞きましたよおーっほっほっほって。  
正直見るまで信じられなかったのですが見てしまったのだからしょうがない。いや、しょうがないんですけどね。

金髪ロールで高飛車でお嬢様で馬鹿って何この個性の塊。  
こんなアニメでもそうそう見かけない天然記念物は、どっかの施設に秘密兵器とせずとしまっていた方が良いでしょう。というか  
そうしろ。

その方が私のため、ひいてはこの国のためにも良いはずですよ。

「（ねえ白蓮）」

そう言っつて一類の望みにかけて隣に座る白蓮に話しかけます。

「（なんだ？）」

「（あれ本当に袁紹ですか？どっかのかわいいそうな人連れてきただけじゃないんですか？）」

「（………残念な事に本人だ）」

波才は目の前が真っ暗になった。

このまま倒れてはお金が半分になると堪えます。  
無いって…そりゃ無いって。

降りしきる弓の中を男らしく戦った袁紹がこれ？

あの混乱しきつた国をまとめ上げた袁紹がこれ？

名族（キリツ）が名族（笑） になつてますよ。

「兵力、軍資金、そして装備……全てにおいて完璧な我ら連合軍。  
而してただ足りないもの。……さてそれは何でしょう？」

少なくとも貴方に足りないのは頭です。

「まず第一に、これほど名譽ある目的を持った軍を率いるには、相  
応の家格というものが必要ですわ」

いや、そんなものより頭が必要です。

「そして次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅出来  
る、すばらしい能力を持った人材こそが相応しいでしょう」

ふむふむ、そんなものより頭が貴方のもっとも今手に入れるべきも  
のです。

「そして最後に、天に愛されているような美しさと、誰しもが嘆息  
を漏らす可憐さを兼ね備えた人物。……そんなこそ、この連合を率  
いるに足る総大将だと思うのですが、いかがかしら？」

そうですね、それよりも貴方は頭が必要だと思つんです。

一言言わせてください。

何一つお前にはねーよ！！あつたとしても親の七光りの家格だけだよー！！

あとお前に対して出てくるのは嘆息じゃなくてため息だよ！！

そう突っ込みたくなるのを必死に押さえ込みます。

っっこみたい…すぐっつこみたい。ハリセンで思いっきり頭をぶっ叩きたいです。

中に何も入ってないでしょうからさぞいい音がするでしょう。

「……で？貴方の挙げたその条件に合う人間は、この連合の中にいるのかしら？」

同じく百合ドリル……じゃなくて曹操さんが相当いらついた感じで詰問する。

「さあ？私の知るところではありませんけれど。でも世に名高いあなた方ならば、誰かお知りじゃありませんの？」

「そうね。案外身近にいるかもしれないわね」

「ええ、そうでしょう。そうでしょうとも。おーほっほっほ」

おい、誰かはさみ持ってこい。そのドリルぶった切ってやるから。

俺が日本のBOUZUならぬAMAにしてやんよ。

諸侯のみなさんもあきれ顔で見えています。

要するに総大将になりたいんでしょうね。

史実ならば曹操さんが推薦するんですが……。

「……………」

まったくその気がない。いや、気持ちには分かる。

私ですか？嫌ですよ。

下手すりゃ巻き込まれるし、ここで目立つのは不味いですから。それに推薦するってことは後見人、つまり利益のない責任を被せられるわけです。公私混同以前に全然おいしくありません。

さらに袁紹の性格を見るに何か押しつけられそうです。

例えば……栄えある先鋒もらっちゃう予感がします。

やったね波才君！！

目立つし被害も受けるよ！！

全然良くねえよ！？「何がやったね！！」だよ！？  
かといってこのままぐだぐだだと私の胃が死にます。こうなれば目立ってしまふこと覚悟で袁紹が自身を推する状況へ誘導するしか……。

「すみません！！」

その声に私を含めた諸侯の面々が一人の少女を見る。  
意を決したように声を上げたのは



「こんなことしてる間に、董卓軍が軍備を整えちゃいますよ!」

劉備……ですか。

孔明などはいないようなので彼女自身が行動しているようです。

これはもしかしたら私の見解違いで本当は彼女は出来る人材なのではないでしょうか?

お手並み拝見と行きましょう……。

あと、どうでもいいですけど董卓軍とつくに軍備整えていると思いますよ?

こんな連合なんて状態になってるのにまだ整えてないとか連合組むまでもない。

「あら、そういう貴女はどなたかしら?」

「平原の相、劉備です。……ねえ皆さん。皆さんは董卓と戦うために集まった訳でしょう?なのにこんなところで味方の腹の探り合いをしていてどうするんです!」

……ハイ?

「こうしている間にも、圧政に苦しんでいる人達がいるかも知れないのよ……!」

……へ？

「あら。新参者は良いことを仰りますわね。じゃあ劉備さんとやら。貴女にお聞きしましょう。この連合を率いるに相応しい人物はだあれ？」

「……もう袁紹さんで良いんじゃないですか？だって袁紹さん、総大将になりたいんですよ？」

「あらあら。この私がいつそんなこといいました？だけど……そうですわね。なり手が居ないのであれば私がやってさしあげてもよろしくてよ？」

……WHAT？

「なら決まりね。袁紹が総大将になりなさい」

「我らも劉備の提案に異存はない」

「妾も問題ないぞよ」

「つちよ！？劉備さんマジツすか！？いやいやいや！それでいいの！？あ、ダメだ。何か言っちゃったぞみたいな、ほくほく顔してやがる。あれ何も考えてないよ。」

……というか臣下さん何で彼女だけ出してきたの！？生贄！？生贄なのか！？

口々に賛同し始めた諸侯を後目に、自分は仮面の中の空いた口がふさがらなかつた。

白蓮が小声で話しかけてきます。

「（なあ……私達はどうする？）」

「（……汚れ役は劉備が背負いました。賛同にわざわざ異を唱える必要はありません）」

「（汚れ役？取り合えず解った）私達も問題はないよ」

おいおい、流石にあれではきついぞ。劉備はどうやら魅力にパラメータ振りすぎて他がやばいようだ。

あれだよ、初心者がパワーだけに「一発当てればいいだろ」とかいって全振りしたパターンだ。素早さ上げた奴に問答無用でフルボッコにされるあれだ。

最後に白蓮が言うと袁紹は嬉しそうに笑う。

あ、なんか殴りたい。

「あらあら？みなさんそうですの？」

「……私は陣へ戻る。決定事項は後に伝えてくれればいいわ」

そう言って立ち上がる曹操さん。何か背後に修羅が見えるんですけど

ど。

「私も自陣へ戻らせてもらう。後ほど通達してもらえればそれで良い」

続いて立ち上がるのは褐色の眼鏡の美女。

……この人孫策の代理人でしたよね。

孫策さんが来たら大変だったわ。あの人勘がいいしねえ。

いや待て。この女誰だったかな？

そう悩む私をよそに二人はこの場から去って……。

そう思った刹那。

曹操さんが立ち止まる。

そして振り返ると私達を一別するように見まわした。……否。

視線の先にいたのは私だ。

射貫くような、見定めるような目で私を見つめる。

そして何事もなかったかのように去っていきました。

こりゃ不味いかな？

「なんじゃあの二人は。身勝手にもほどがある」

そう憤慨するのは袁紹とどこか似たような雰囲気を持つおちびちゃんですが……。

まあ彼らの気持ちは解ります。

既にこの場で得られるような情報はなく、居て得になるようなものもない。

それに途中で帰るということは少なからずこの残っているメンツに不愉快などの感情を起こさせるものですが、それすら顧みずに帰ったということはおおよそ見定めたと言うことなのでしょうが。

まあいても胃が痛くなるだけですからね。

私も帰りたいです。

すんごい帰りたいです。

「ふんっ。私に任せると言った以上、私の指示に従って頂きますわ」

言ってることは間違ってるだけだけど不安になるのはなぜでしょうっ？

「さて、劉備さんとやら。貴女のおかげで、私が連合軍の総大将という責任の重い仕事をする事になってしまったのですけれども…

…」

あ、やっぱりそうきますか。

いかにも劉備に責任があると含ませながら話すその姿は……殴りた  
い。

「洛陽を不法占拠している董卓さんの軍勢は、私達連合軍とほぼ同  
等の規模。……となれば如何に総大将が優れた人物であつても苦戦  
は必至でしょう」

あんたが総大将ならなおさら苦戦するでしょうね。

「そ・こ・で。私を総大将に推した劉備さんに、一つお願いがある  
のですけれど……」

「私にお願い、ですか？なんたる……」

「簡単なことですわ。連合の戦闘で勇敢に戦っていただければ良い  
のです。あ、もちろんその後ろには私達袁家の軍勢が控えています  
から、何も危険なことはありませんわ」

おお！やったね劉備ちゃん！！先陣をきれるよ！！  
ドンドンパフパフッ！！

「そ、そんな」

「これほど名誉ある役目を、この私自らお願いしているのですから、  
きつと受けてくださると信じていますわ」

要約、捨て駒になってね。後ろには私達がいるから逃げられないよ。あ？総大将の命令に刃向かうの？ってことだわな。

つまり断れません。ありがとうございました。

劉備さんはすっかり顔が青くなっていた。そりゃそうでしょ。

だってこの連合で一番兵の数が少ないし、それで被害がもつとも多い先陣をきれてんですから。

いくら優秀な将がいても戦いは数だよ！！兄貴！！ですからね。というよりそうなるのを考えないでさっき話してたんですか。

思わずため息をつきます。

流石にこれはまずいですね。

劉備とはこれから友好関係を築いていきたいのにここで潰れてもらっては話にもなりません。

おそらく孫策さんは味方を作りたいので劉備に手を貸すでしょうが……それでも限界つてもんがあります。

少ない数でどうにかする策はあるのでどうにかはなるでしょうがどうにかなるだけですからね。

やっぱり被害は大きいです。

しょうがないなあ……。

「すみません、袁紹様ちよっとよろしいですか」

そう控えめに私は手を上げた。

「あら、貴方はさっきの……」

「単経です」

このドリル私の名前忘れやがったな。空っぽの頭なのに何も入らないとかがどうなのよ。

「そう単経さん。なんの用ですか？」

劉備さんが心配そうな目で私を見つめる。というか期待している。全く困るならそんなこと考えもなしに言わないでくださいよ。

「袁紹様の余りの素晴らしい案にこの単経……！感服致しました……！」

そついいながら膝を地面につく。

「おーほっほっほ……！当然ですわ……！」

劉備と白蓮が驚いたように私を見てきました。



劉備さん、そんな泣きそうな目でこっち見ないでください自業自得です。

白蓮、お前までそうなっちまったのかと絶望の表情浮かべないでください。

私はちゃんと考えがありますから。

「しかしながら袁紹様。そのすばらしい案ですが……一つ問題があるのです」

「あら？なんですか？」

「劉備軍の兵が少なく弱すぎるのです！！これではとてもじゃないですがあの袁紹様の邪魔をする愚か者共ですら倒すことが出来ません！！加えて華麗なる袁紹様様の軍名が果たせなければ、この連合はおろか、袁紹様の名前にまで傷がついてしまいます！」

「っな！？ちよつと劉備さん！ちゃんとなさい！」

「え、えと。すみません！」

うわ〜……こんな上司持ったら、入社当日に辞表を顔に叩きつけてやる。

そして頭に手を置き悲観するようなオーバーな動作をする私。我ながらこれはないわ〜。

「ですから袁紹様の精鋭を五千ほどお貸しになってはどうでしょう

「？」

「うづん……そうですね」

後一押しか……私はちよつと失礼と袁紹に近づき進言をする。

「（今更ここで劉備から変更しては総大将の名に傷がついてしまいます。それにここで兵を貸せば万が一劉備やつが手柄を立てたとしても劉備だけではなく袁紹様の手柄にもなります。それに懐の大きさを下々の者達に示すことは悪いことではありませんまい。袁家の大きさを見せつけてやりましょう）」

「そうですね……解りましたわ！劉備さんに兵を五千貸し与えるのでがんばってくださいまし！！」

「さすが袁紹様です！！その美しさ！！優雅さに適う者はいますまい……！」

はーはっはっは。

こうなりや行くとこまで行っちまえ。

「おーっほっほっほ！……ところで貴方……お名前は？」

……つぶち。

怒鳴りそうになるのを押さえます。落ち着け私、来るべき時が来たらこいつは毒がない蛇や、蜘蛛が溢れる風呂にたたき落としてやる。

「単経です。私は常に素晴らしい袁紹様の味方でございますゆえ。覚えて頂ければ光栄のき・わ・み!!」

「ふむふむ単経ですわね……覚えましたわ!」

「はは〜」

いつかその年中春な頭をご開帳してあげましょう。

軍議が終了後、劉備さんには拝み倒されました。

仲間ですから当たり前です。

困った時はお互い助け合いましょうと言うと目をキラキラさせて更にお礼を言われました。お前は某CMのチワワか。

今は自陣に返り、結果を三人娘に報告し終わったところです。

「それにしても袁紹には呆れたもんだ」

そうでしょうねえ。

だって作戦が「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍ですわ」「ですもの。

それ作戦じゃなくてスローガンでしょうが。

「桃香も災難だよ……お前のおかげで助かったけどさ」

「その災難は彼女自身が呼び込んだものですよ」

「そうは言ってもだなあ……」

「貴方は劉備に同情なさるので？」

「お前はそうじゃないってのか？」

むっとしたように白蓮は私を見ます。

いや、どう考えても同情の余地がないですよ。

「白蓮、貴方は連合の軍議での劉備ことをどう思いました？」

「どう思ったって……民のことを思いやり、自ら進んで発言して」

「ハイ駄目です」

「え？」

まさか白蓮までも同類とは……こりゃ帰ったら勉強させてあげないと駄目ですね。

「彼女は三流です。いえ、四流と言っても良いかもしれませんが。なんせああいう場での基本の物事を理解してないのですから」

「基本の物事？」

「彼女は手札を切っていなかったでしょう？」

「……手札？」

私は姿勢を正し、正面から見つめ合います。

さて、某王国の王子様のモノマネでもしますか。いや、ラノベも勉強になるもんだ。

「あのような者達が集まる場での話し合いでのこつは自分の持つ札を切ることにあるのです。お金でも、武力でも、権力でも、それこそ家柄でも良い、自ら札を手札から切って進めるのです」

「……………」

話を聞いてくれる分あのバカドリルの数万倍もマシですね、うちの君主は。

「あそのこの根源には物資、兵、お金などの自分の国を支える物を如何にして少なく済ませるかという思惑があります。その為には考えて札を切っていく必要があるのです」

「札……か」

「札です。あの話し合いの場ではそれを見極める事こそが必要なのです。敵の様子を話し合ったりするだけではありません。あの場の全てが敵なのです。あの軍議で何が必要で、何をされたくなくて、何をこちらに押しつけないのか、それぞれの思惑を一挙一動から探り、読み合うことこそあの軍議の真の目的」

それを聞いて驚く白蓮。

おそらく彼女も敵は董卓軍のみだとか思っていたのでしょね。

「その為には私達は自らが持つ貴重な札を切る必要があるのです。こちら言い分で相手の目的を引きずり出し、思いを、考えを引きずり出し、それを元にこの連合、はてはこの戦いすらも読み解く。ついに自分しか見えなかったのが全てを知ることになるのです」

そう、それこそが必要なのだ。  
それを知ること始めて戦場に立てる。

「だれもが自らの札を必死になつてかき集め、たぐり寄せ、そうやって国を強くしていくのです。全ては自分の国のために、民のためにね。それを劉備はどうですか？」

今思い出しても呆れてくる。やっぱりあいつフリスク……じゃなくてラスク？

あ、マジで忘れた。

「腹の探り合いをしている場合じゃないよ。洛陽の民が苦しんでるよ……バカですか。自分の民の事すら考えず、あのよに感情を優先してなんの益も得ずに自分の札を全てさらけ出した。それで得たのは何でしたか？」

「なるほどな……そりゃ単経も呆れるわけだ。桃香は何も考えなかった、ただ自分の思いのみを優先したんだ。確かに人としてそれは正しい、正しいけどあの場では正しくはなかったんだな」

「そうです。だから自業自得と言ったんですよ。袁紹ですら自らの札をつまく使って劉備を引きずり出したというのに……劉備さんはこういう場には向きませんね」

「あいつ昔から優しいからなあ……」

「ですがそれ故に今回は馬鹿を見たんです。言っときますが劉備を

助けるのも私達に利があつたからですよ？」

「利？」

「劉備に恩を売る、袁紹に気に入られる。この二つでどれほどの危険を回避出来ると思うので？この連合で徐々にそれを仕上げている。この連合が終わった後にも有効な札のできあがりです。少なくとも劉備用の札はほぼ完成ですね」

「はさ……単経はすごいな。そこまで考えていたのか。それに比べて私は」

「白蓮さんは劉備のように私達が不利になるよう札を切らなかつた。それだけで合格点です。でも劉備さんも素晴らしい人物なのは確かです」

そう言うと思議そんな顔を白蓮はしますが……いやいや、私は彼女を嫌っているわけではないのですよ？

「彼女だつておそらくは自分の信念を笑われる事だつてあつたでしょう。彼女の願いは素晴らしいものではあるがこの時代の覇者達には受け入れがたいものですからね。でも例え笑われようともとばされようともその信念を曲げなかつた。自分の道を進み続けた。それはどれほど強く、素晴らしいのでしょうか」

そつだ。私は劉備が羨ましい。

あのように自分を偽らず人を思い、純粹に信じる道が羨ましい。



それは自分には出来なかった。  
主に仕えるため、生きるためとはいえ結局は自分はこの時代に流されたのだ。

自分の平和を信念を諦めて自分の道を造り替えた。その道を例え世界が認めても自分は認められない。

だが彼女は今も自分の道を信じ進み続ける。例え他者がなんと  
言うに信じて進み続けた

だからこそその道を共に歩む臣下を惹きつけるのだ。自分の道を進み続けた彼女には不思議な魅力がある。

それがたまらなく自分にはまぶしく羨ましいのだ。

私はもう戻れない。

変える必要が無かったかもしれない自分を変えてしまった。獣に墮

ちたモノが人に戻れぬように戻れないのだ。

どんなに後悔しても、どんなに羨んでも。

だがその道の先に天和様達の、白蓮の笑顔があるのならそれもいいのかもしれない。

いつの日か、また私が天和様達のライブの手伝いをしてみんなで笑って……。

白蓮はもう争う必要がない中で日々を地味に過ごす。

これこそが私が望むものなんだ。

ちょっとしたわがままですよ。

ずいぶん天和様達には心配をかけているようですが……。このわがままは解ってくれているようです。

本当に自分は素晴らしい人達を主に持ちました。

思わず笑いながら白蓮を見つめます。

「さて、私達も動きますかね」

よっこらっせつと立ち上がる。こきこきと首を回しながら、頭の中の盤上に駒を配置。

限りある札で一発勝負、ベットは白蓮の命だ。

……私は死んでも逃げ延びてやる。

「やるんだな？」

「ええ、私のふがない主の望みですからね」

「悪かったな。ふがない主で」

苦笑しつつ白蓮も立ち上がった。

さて、いつちよ行きますか。

我らは我らの成すべき事を成す。

天下万民を救うなどと言うことではなく、まずは自らが出来ることをしていくのです。

「はてさて、その前にまずはお昼寝するか」

「いや、戦支度しろよ!？」

## 第二十六話 会議は踊る、されど進まず（後書き）

武将紹介は時間無いのでパス、生姜か太鼓上手い人をやる予定。

作者は家では準ゼンラーマン状態（ご想像にお任せします）です。

冬でも夏でも変わりません。

取り合えず、次回は天和辺りの幕間入れときます。なんか久しぶりに出すよね、張三姉妹。みんなこの物語のヒロイン忘れてないよね？……ね？

そう言えば三国志大戦でR陳宮が思ったより使いやすい。でも醤油に焼かれやすい。業炎にどう勝てとorz

番外編 悲しみの向こうへ（天和side）（前書き）

注意

これは本編に繋がる天和さんの暴れっぷりを書いた、そして作者が深夜のノリで書いた話です。

ヤンデレってこうじゃなくね？とか、私は味の素のギャグとか見たくないって人は見ないように気をつけてください。

以上を許せる方はどうぞお読みになってください。

番外編 悲しみの向こうへ（天和side）

「波才さん分が足りない」

その声にそろばんを打っていた人和は口をあんぐり開け、首が機械仕掛けのようになりながらやっとなこさ彼女の姉、元黄巾党代表取締役張角こと天和を見た。

「波才さん分が足りないの」

続いて鏡を見ながら自らの髪を結んでいた地和も目を見開き、口ポコップのようになりながらやっとなこさ彼女の姉、大人気アイドル「数え役萬 姉妹」の長女こと天和を見た。

「ね、天和姉さん？その……大丈夫？」

「どこか……悪いところでもあるの？」

素直に頭がおかしいんじゃないの？と言わなかったことに彼女らの姉妹の仲の良さが表れているのだろう。

額に汗を浮かべ頬を引きつらせる二人に天和はいつもと変わりがな

い満円の笑みを見せる。  
見る人全てに安らぎと元気を与える彼女の笑みだが今この場で姉を心配する二人にとっては逆効果でしかない。

「うん、大丈夫だよ。ただ波才さん分が足りないだけなの」

「（だからそれがおかしいの！！）」

二人は目線を合わせると彼女達にしか解らないような高度な目の会話を始めた。

「（ねえ人和、天和姉さんあんなっちゃってるけどなんか最近あったの？というか波才さん分って何！？）」

「（いえ……特に何も無いと思う。公演も上手くいっていたし……あと私が知りたいわよ地和姉さん）」

「どうしたの？」

天和は不思議そうに首を傾げながら急に黙り込んだ妹二人を見ている。

「（と、取り合えず様子を見ましよう。あと波才さん分とかいうのは人和が聞いて）」

「（見事に押しつけられたわね……）」

「（だ、だってなんか怖いんだもん）」

「（私だって同じよ）」

きよとんと眼をぱくりさせている姉。

押しつけられた人和は一つ貸しと地和に目で合図すると関わりたくなかったが本質を突くことにした。

「ねえ……天和姉さん」

「ん？何かな人和ちゃん」

「波才さん分って何？」

ごくり

唾を飲む二人の妹。

「波才さん分は波才さん分だよ」

「だから詳しく説明しなさいよ……！」

元来余りこつという空気が好きではなく苦手な地和はついに限界を迎



えたようだ。

今の彼女の姿を彼女のファン達が見ればMに目覚めていただろう。もの凄い見幕で姉をまくし立てる。

だが流石というべきか天和は自分のペースを崩さない。

ニコニコ微笑みを絶やさない。

「地和ちゃんそんなに起こったら皺が増えるよ?」

「余計なお世話よ!!そうじゃなくて何意味の解らないこと突然言うの!?!波才さん分って何!?!何なのよ!?!」

「波才さん分は波才さん分なの」

「つよし!!表へ出なさい天和姉さん!!胸が大きいからって調子乗るんじゃないわよ!!」

「地和姉さん落ち着いて。何か本音漏れてるから」

「本音って何!?!私が胸に執着してるって言うの!?!いい!?!女は胸で決まるもんじゃないのよ!胸は女の要素であるけど胸だけが女の胸なわけないの、だから胸は女の胸ならぬ……」

「姉さん、何か私の中の胸がゲシュタルト崩壊してるからもう止めて」

「えゝ人和ちゃんには崩れるほど胸無いじゃん」

「あ?」

いろいろ脱線しかかっているのを見かねて人和は止めに入る。が、結果として眼鏡が鈍い輝きを放つ事になった。

しかしまだ冷静な部分があったのか、猫のようにふーふーと呼吸が荒く今にも飛びかかりそうな姉を見かねて、人和が背後からがっしりと地和を抑える。

「天和姉さん、私もその波才さん分つていうのを詳しく知りたいんだけど」

三女でまとめ役である人和は落ち着いて冷静に尋ねた。

内心彼女も気が無かったがここで自分までもが慌てたらいけないと押さえ込んだ。

「うーんと波才さん成分つていうのは」

だが次の瞬間彼女はそれも全て忘れて頭の中が真っ白になった。

「波才さん成分つて言うのは波才さんから発せられる成分でね、波才さん成分が無くちや全人類が滅んでしまうの。HHH（波才さんから発せられるホルモン剤）とも別名言われていて、全人類が細菌戦争から生き残るための救世主的な存在なの。でも私だけがそれは取れば十分なの。波才さんに余分な女が引き寄せられちゃうから

HHHは諸刃の剣なの。三国共同医薬開発機構がそれを狙っていて桃色の年中頭が春の農耕牛や、頭にドリルを装着した年間発情期の百合レッドや、若さを妬む日焼けサロンの売女がいるけれど私はそれら全てを殺さなくちゃいけないの。波才さんは私だけのものなのもう波才さんのお土産だけじゃ抑えきれないの」

真っ白になった。

というよりは実の姉が発した言葉の羅列を読み込むこと、理解することを彼女の脳は拒否した。

人 and の精神は既に崩壊寸前、彼女の防衛本能が働き人 and は意識を手放した。

地和は人 and よりも精神が強かったのかかろうじて立ってはいるが、その両足は生まれたての子鹿のように震えている。それでも立っているのは彼女の意地なのであろう。だがそんな地和に天和は無自覚で容赦ない爆撃を与える。

「波才さんは私の物なの。誰にも渡さない、誰にも触れさせない、私の、私だけの波才さん」

いつも通りの天和に変わりがない。

口調も、雰囲気も、声の高さも、行動も、仕草も。

何もおかしいところはなかった。

だからここそこまで進行していたとは。

目が霞む。



ってあんなに楽しそうにやっていたじゃない！！天和姉さん！！」

「波才さんと会おうまではね。でも波才さんと会ってそう思ったらアイドルとして終わりだと思っの。もう身も心も波才さんに捧げるの。波才さんお帰り、私にします？それとも私にする？それともわ・た・し？つきや／／／」

頬を赤く染めて悶える天和。

その姿は紛れもなく恋する乙女であるが、触れればじゃがいもがポテトチップスに加工されるような危うさを放っている。

「つで、でも波才さんに天和姉さん以外の彼女が出来たら……」

そこから先の言葉を彼女は発することが出来なかった。

何故なら彼女の首にいつの間にか包丁が添えられていたからだ。

冷たい刃物の感触に体温が凄まじい勢いで下がり、心音がえらく大きく聞こえる。

視線を首元の包丁から上げるとすぐ目と鼻の先には天和の姿がある。距離は確実に数メートルは離れていたはずだがそれを一瞬でこの状況に持つて行った姉に恐怖が巻き起こる。

そして何より違うのは「目」だ。

先ほどまでのいつも通り輝いていた乙女の目は今やどこまでも暗く、冷たく、氷のような目が変わっている。

「地和ちゃんは意地悪だよ。そんなことさせない。そんなことは許さない。そんなことは認めない」

殺される。  
死んでしまつ。

そう思わせるものが天和の体から発せられている。

「で、でもそうなら」

「んも、地和ちゃんは用心深いなあ」

そう言つて天和は地和の首元から刃物を退けると、手を後ろに組んで体を左右に揺らしながらその場でくると回って腰を沈め、地和に微笑む。

そしていつも通りの口調と声で言った。

「その時は波才さんを殺す」

ツゾクー！

体に冷たい金属を差し込まれたような錯覚に地和は陥った。

「え……なん、で」

「だって波才さんがかわいそうじゃない？そんな売女に纏わり付か

れるなんて。万が一にもそんな売女に人生注ぐなんてことがあったら今世紀最大の悲劇だよ。だから殺す、殺すの。そして波才さんのいないこの世界に未練はないから私もその時は死ぬの」

以上の文面を輝かしい笑顔ですらすらと天和は言い切った。

啞然とする地和。

だが気が付けば彼女のすぐ目の前に天和の顔がある。

「っひ」

「だから、そんな事心配する必要はないよ？地和ちゃん。それとも何？地和ちゃんはまさか波才さんを誑かす売女にでもなるつもりなのかな？」

地和はもう終わったと思った。

私は死ぬんだと。

だが、そこで落ち着きを取り戻した彼女はあることに気が付く。

ごく僅かだが甘い匂い、甘い匂いがするのだ。

それは天和から漂っているようだ。

そしてよく見れば彼女達姉妹でなければ解らないほどつつすらとだが天和の頬が赤くなっている。

もしかして……。

「天和姉さん、お酒飲んでる？」

「もう地和ちゃんたらお酒なんてのんれないよ」

ビンゴだ。

微妙に言えていない。

流石にこれはおかしいと思った、いくら何でも逸脱しすぎている姉の原因はお酒らしい。

いつの間に飲んだのだろう。

ほっと胸をなで下ろすが、そこで地和はあることに気が付く。

お酒は飲んでいる。

お酒は飲んでいるが……酒の入っている天和にとって、今の言葉はマジだと。

「よし、ちよつと波才さんの所行ってくるよ」

「天和姉さんちよつと待って！！行っちゃいけないって波才に言われているじゃない！！」

「愛があれば！！愛があればいんだよ！！」

「駄目に決まってるでしょうがああああああ！！」

「それなら波才さんを殺して私も死ぬ！！」

「何でそうなるの！？」



既に謎の天和ロードを進み始めた天和を止める術は地和には無かった。  
だめだ、このまま行ったら波才が死ぬ。  
そう諦めかけたその時。

ガチャ！！バタン！！

「何があつたんだ！？大丈夫か！？」

「おいおいなんだこの惨状は……」

「で、出番なんだな！？」

扉を駆け足で開けて入って来たのは黄色い三連星。

「良かった、お願い！！天和姉さんを止めて！！このままだと波才が殺されちゃう！！」

「な、何を言ってるんですか地和様、天和様がそんなこと……」

一笑しようとした彼らだが天和を見てその言葉から先は出てこない。

彼女は生きる。  
ただ波才のために。  
彼女は求める。  
波才の愛を。

禍々しき、怨と血の臭いを漂わせ、墮天使の如き誘惑の煽情を煽る。誰もはその姿を見てひれ伏し、赤子は泣くことすら忘れ、ただ死を待つ。  
溢れる黒き波動を纏いて生きとし生けるもの全てをどろりと流れる愛で包む。

『大賢良師』、『天公將軍』、『数え役萬 姉妹の長女』、『ももいろのあくま』。

赤子の如き無垢な瞳で人を狂気と死へと追いやる。

その名を張角、真名を天和という。

「っふ」

「「「「（なんか今変なナレーション入った！？）「「「」

ともかく天和の様子がおかしいことと本気で波才の命が危ないことを知った二人は覚悟を決めた。

「正直、乱暴な真似はしたくはねえが……波才の旦那の危機とあつ

「てはそうもいかねえ!!」

「俺らは命を、こんなちつぽけな命を救って貰った!!悪いがここで引くわけにはいかない!!」

「い、意地なんだな!!」

そんな三人を鼻で笑う天和。

いつからか彼女からはほがらかで温かい人を癒すような物は消え、見る人全てが恐れ、敬い、ひれ伏す。

霸王のそれに変わっていた。

「死んじやうよ?一号さん達死んじやうよ?今なら歯を全部へし折るぐらいで謝れば済ませてあげるよ?」

「「俺達は旦那に真名で呼んでもらうためにもここで死ねないんじゃないあああああ!!!(だな!!)」「」」

「そう、それじゃ」

瞬間、天和はその場から消えた。

「死んじやえ」

ドガッグシャベキ

「つくほお!?!」

グシャグシャグシャ

「あべし!?!」

ゴカッドゴドゴドゴ

「ぎゃあ!?!」

地和は声が出なかった。

あの「そんな重い物持てな〜い」とか言って子供が持てるような荷物ですら嫌がる姉が、波才によって魔改造され、大の大人十人が襲いかかっても無傷で勝てる一号達を投げ、吹き飛ばし、蹂躪している。

具体的に言つと、一方的過ぎて三人の戦闘は擬音ですまされた。

れが、これが愛の力なのか?

ここまで愛の力というのは凄いものなのか?

というか波才はこんな愛受け止めたら死ぬんじゃないのか?

ついに彼女を止めるものはいなくなった。

三人は大地にひれ伏し、ピクリとも動かない。

「もう、壊れちゃったの?」

手の甲に着いた血を舌で舐め取る。

その姿はとても妖艶で美しく、そんな場合では無いと解ってはいるが思わず見惚れてしまった。

もう止められないのだろうか？

もう波才は死んじゃうんだらうか？

もう波才の紅茶を飲めないんだらうか？

今度こそ地和は絶望の表情へとその可憐な顔は塗り替えられ、空を仰ぎ見た。

「それじゃ、行ってくるよ」

後ろ歩きのまま扉に進む天和はいつもと変わりが無いお出かけの挨拶を言う。

振り返り扉の外へ。

いけない！しっかりしなさい地和！

輝きを失いかけた目に、再び彼女は熱き炎を込めた。

今の自分ではあの姉に勝てない、だからあの三人を何とかして再び姉さんに向かわせないと！

「人和！起きなさい！」

「……波才さん、そこは。あ、だめ、波才さんの大きすぎて」

「起きろやあああああああああ！何一人で良い思いしてんの！？私夢でもそんなの見た事無いよ！？何、何が大きいの！？あれか、波才のうまい棒か！？うまかったか！？美味しかった！？何味だった！？」

「波才さんのはうまい棒じゃなくて『三国無双』だから。2の頃の呂布であって欲しいから、間違っても最近の柔らかか呂布であってほしくないから」

「あんだ最後願望なってるんだけど！？」

未知の電波を受け取り始めた人和を必死に揺すぶる。

……例え目を覚ましても彼女らはアイドルをやっているのだろうか？

「っは！？私のアイドル生命の危機！？」

「人和、ちよつとというかだいぶ遅かったわ！もう手遅れよ！そんなことよりも今姉さんが」

「そんな……天和姉さんや地和姉さんと同類だというの？天和姉さんみたいに、いい年してあんなぶりっ子キャラを演じていたり、地和姉さんみたいに『みんなのいもうと（笑）』と同じだなんて嫌！」

「おいこら人和、楽屋裏来い。久しぶりにきれちまったわ。……っでそうじゃなくて！あれ！」

虚ろな目の地和の顔を天和へと向けさせる。  
そこにはゆっくりと扉を開こうとする姉の姿が。

「いけない！あのままだと波才さんがNICE BOATに!？」

「あんたやっぱ変なもの受信してるでしょ!？でも取り合えず今ど  
うすればいいの!？」

「そうよ、こんな時こそ……え〜と、その。さ、黄色い三人さんが  
いるじゃない！その人達は？」

「ダメよ、あいつらやっぱ役にたたない！」

「……姉さんさりげなく酷いわね。……ふむ。」

人和は何か思い付いたように、倒れ伏している三人に。さりげなく  
さっきの言葉でとどめをさされた三人に向けて叫んだ。

「お願い、お兄ちゃん達！姉さんを止めて！」

「「「!？」」」

三人の体が一瞬大きくびくりと動いた。

更に人和は、異常に冷たい目で見つめる姉に視線で促した。



「え、え〜と。……お願い、お兄ちゃん」

その時、不思議なことが起こった。

「う、うおおおおおおお！」

「ふんぬらばあああああ！」

「アイアムリターンなんだな！」

三人が異様な闘気をみなぎらせ、ゆっくりと立ち上がる。目は異様に輝き、迸る闘気が部屋の中を渦巻いた。

「天和様、悪いが先にはいかせない」

「そつだ、妹が、俺達の妹達の願いを叶えなくてはいけない」

「涙は……見たくないんだな」

「へえ、まだ立ち上がるんだ。でもさっき負けた弱者さんが何のよ  
うっ？」

「「「「つふ、今の俺達は妹のために戦う戦士。先ほどの俺達とは違  
う。そう」「」」」

それぞれが歴戦の猛者を思わせる構えを取り、ニヤリと笑う。

「『超三連星（スーパー兄貴）だ！』」

何故か『かませ臭』が漂う名前だが、あのデコッパゲとは一応全く関係ないことはここに記しておく。

「チビ、デブ！黄巾ストリームアタックを仕掛けるぞ！」

「おう、泣いたり笑ったりできなくしてやる！」

「もう、何も怖くないんだな！」

今、女帝に三人の戦士が挑みかかった。

（以下、ダイジエスト）

「つな！？俺を踏み台にするだ！？」

「中に誰も……いませんよ？」

「黄巾党の名に誓い、すべての妹に愛を！」

「行動を起こさないと何も変わらないって事。欲しい結果があるなら、それ相応の行動を起こさないとだめなんだから！」

「絶好調であるなんだな！」

〈数日後〉

あの惨劇から数日が経過した。

途中で天和が運動したことにより、酒の酔いが回り倒れると、限界を迎えていた三連星も倒れ伏した。

天和はあの時のことをすっぱりと忘れており、いつも通りの天和へと戻っている。

力も性格も元に戻っており、「アイドルはやっぱりみんな喜んでくれるから楽しいね」と楽しそうに笑って言ってる姿を見て地和と人和は安心した。

実質的な被害は一号達だけであった。

#### 被害内容

大腿骨頸部骨折、肋骨骨折、上腕骨頸部骨折、中手骨骨折、橈骨骨幹部骨折など、上げればきりが無い。

全治六ヶ月

何故生きているのか不思議なぐらいだが、無意識に殺してはいけ無いと解っていたのだろうか。

ぶつちやけ死んだ方が数倍マシである。

スーパーハイパードクター華佗がこれを診察した際

「よく生きている……生きながらの死だ。これをしたのは人が魔かと戦慄していた。

地和と人和はその問いに答えられなかった。ぶつちやけ妹とはいえ白黒つけがたい問題だった。

少なくともあの時の天和は人間と呼ぶには余りに禍々しかったと二人は思っている。

「ねえ、姉さん。もし、もし波才さんに恋人出来ていたらどうなると思う?」

「人和、それ天和姉さんの前で行ったら死ぬからね。冗談じゃなくて。取り合えずお酒は飲ませない方が良いわ」

そんな二人と離れて天和はのんびりと空を眺めていた。  
そしてだれのも聞こえない小さな小さな声で呟いた。

「波才さん分が足りない」

）  
T O  
B E  
B A D  
E N D  
？

番外編 悲しみの向こうへ（天和side）（後書き）

天和何してんの？って言われたので書いた。後悔はしていない。

ぶっちゃけいろいろ酷い。

連合終わったら天和さんがやってくる予定です。やったね波才さん、キミが好きなカオスが訪れるよ、ハハッ！

それにしても、最近は文が進みます。よくわからないけれど、モチベが随分上がった模様。このまま続いて欲しいなあ。

第二十七話 三言担い手（前書き）

己の感情は己の感情である。己の思想も己の思想である。

天下に一人もそれを理解してくれる人がなくなつて、己はそれに安んじなければならぬ。

それに安じて恬然としていなくてはならぬ。

（森鷗外）



## 第二十七話 三言担い手

どこかで、とんでもない命の危機にさらされ始めた気がします。何ででしょう？

思わず空を見れば青天の霹靂。

雲一つ無い空に、過去の人間達は何を思い描いたのだろう。風が心地よい。

……吹き抜ける風に鉄の臭いが含まれていなければ、なお良かっただろうに。

血の臭いと怒号が飛び交う。金属が無数に打ち鳴らされる。

そうです。

今、私は戦場のど真ん中です。ですが私の周りには変な空間が空いています。戦いながらもちらちらとこちらを見てくる兵がいるのですが……そんなよそ見してたら死ぬぞ？

まあいつか。原因は分かってるんだよ。

やれやれと肩をすくませながら、問題の人物を睨み付ける。

「貴様……何者だ!!」

「何者だと思っつ？」

「っむ……知らん!」

「では知らない存在なんだ！つまりここにいる私は知らない存在であり、貴方とは顔を知っている間柄ではないのだ！貴方が知らないってということは、今の貴方にとって私は実はどうでもいい存在なんだ！さあ、私は放って置いて早く貴方が求める人の所へ！」

「おお、かたじけな……って騙されるか！」

目の前には銀髪、露出が多い服装で槍斧を構えたこの女性がいます。

お前あれだろ。華雄だろ。知力2だろ？

何故だ？何故こんな事になったんだ？目立ちたくないのになんで敵将に絡まれているんだ？

確かあれは36万年、いや、一万四千年前だったか？

1121

「前回のあらすじ、おーっほっほっほの作戦「ガンガンいこうぜ」」

「……なあ桃香は大丈夫なのか？」

「たくましくなりましたね……白蓮」

そう私に聞くのはご存じミス普通こと白蓮です。  
最近スルーすることを覚えられました。私涙目です。

「孫策と協力するだろうってお前の予想は当たったみたいだけど……二人合わせてもあの難攻不落絶対無敵七転八倒？水関を攻めるにはまだ兵も足りないし苦戦するんじゃないか？」

「……なんですかその厨二病通り越して精神科と結婚式挙げてそんな呼び名は。むしろ過剰装飾すぎて落ちる前振りみたいになってませんか？」

「……っでどうなんだ？」

スルーですか。そうですか。

「あゝ聞けば？水関の将である二人のうちの華雄は蛮勇であり、自分の感情に流されやすい人物だと聞きます。確かにあそこは籠もっていればこの連合全体ともまともに戦えますが引きずり出せばそんなもの関係ないですからね」

「つまり、挑発して引きずり出すっていうことか？」

「正解です。まあもう一人の将である張遼も、どちらかといえば気性が荒いですからね」

ほんとなんでこの二人に任せただ？

この戦いではむしろ冷静で落ち着きがある将が良いと思うのですが、これはどう考えても配置ミスですよ。

今私達は第一の関門である、？水関に来ています。左右は絶壁に囲まれて一方方向からしか攻められないという難所です。私達は劉備達とは違い後ろの方です。

まあ劉備は受け流して本陣を巻き込むでしょうしから、こっちに来ても避けようと思えば割と避けられることができるという良い位置です。

ようするに少し高みの見物レベル。

……普通に考えれば向こうさんが負ける意味が解りません。

いくらこちらが多かろうと一方方向では城攻めみたく包囲できないので攻める兵の数は限られます。さらに連合軍は寄せ集めで、遠くから遠征中。

長期戦が見込まれる戦いでは、兵達の望郷の念と疲れにより時間が経てば帰るしかありません。

連合軍なんていろいろな人間ないろいろな思惑で参加してるので結束なんてあつてないようなものだし。

普通に戦えば普通に勝てます。

さらに別働隊で兵糧の寸断を行えばより効果的です。

……まあ今回は内側の毒も既に及んでいるのでいざというときは最終手段としてその毒を利用すればいいのですが。

でもそれにも必要ないだろうなあ。いくら武勇に優れているからって、状況も判断出来ない将を採用するなんざ馬鹿げてます。今は洛陽に行ってもらっている明埜の事前の調査により、華雄は猪武者との情報に確定しました。

いや、最初は嘘だろうか、三日合わずば刮目すべし言いますからと明埜達に身辺捜査を頼みましたがマジでした。

華雄……史実ではお前むしろ上司に振り回されて死んじゃったかわいそうな武将でしょう？

そもそも？水関で戦う以前にお前孫堅と戦って死んだるし。この世界は演技中心だからせめて冷静な将かと思いきや、どこからそんないらぬ性格引つ張って来たんですか。

多分挑発は成功するでしょうね……情報で見る限り張遼で抑えられとは思えません。

将の暴走で終わるなんて馬鹿らしいにもほどがありますが、白眉の弟の登山家の事もありますし案外笑えませんかよ。

善く兵を用いる者は、道を修めて法を保つ。故に能く勝敗の正を為す。

戦いの基本を知り、道理を弁えれば勝利は得やすく、負けても最悪の事態にはならない。

まったくこの世界のベストセラー孫子の兵法にも書いてあるじゃないですか。

……まあ華雄は本よりも武ばっかり鍛えてそうな気がします。

しかも抑えられそうにないとかそれなんて爆弾？

同じ脳筋でも美須々の方が聞き分けが言い分マシです。

将なんですから自分の感情よりも軍、ひいては主君の事を優先しましょうよ。

さて、戦闘開始の号令がかかりました。早速前の方で動きがあったようです。風に乗って流れてくる声は関羽かな？

うわぁ……結構酷いこと言ってます。

ん？この光景どこかで見たことがある気がしますね。

……あれだ。

三国無双3での五丈原の戦いだ。

司馬懿に対して挑発するあれです。

懐かしいなぁ……私的にはあの頃の無双が一番輝いてた。

「……なに遠くを見てるんだ」

「いえ、ちょっとホームシックに」

「ホ、なんだそれ？」

だがしばらくしても動きが見られない。

「なぁ……本当に成功するのか？」

白蓮もじれてきてますね。

心配になったのか私に聞いてきたのだろう。

私達の兵は冷静にしつけてあるので動きませんが、ちらほらと我慢が出来なくなってきたりしている方々も出始めてますね。

主に袁紹軍。

きちんと統制とりましょうよ……。

「ん〜たぶん張遼ががんばってる感じですね」

結構頭にきていると思うのですが粘るなあ。

ん？

この声は

「孫策も味方に入りましたね」

「え？解るのか？」

「いや、声に聞こえたので」

「……距離結構あるんだが」

ちょっとそんな化け物を見るような目で見ないでくださいよ。

気が使えれば身体能力がもろもろ上がるので意外といけるんですよ？

呉では黄蓋さんとか魏では楽進……さんはまだ早いかな？私だけではなく結構使える人はいますから。つて落ち込んでる場合じゃないですね。

風に流れるこの匂いは戦の香り。肌がぴりぴりとなります。

そういえば、これから英雄同士の殺し合いなのか。初めて見ますね。わくわくしますね。

一人笑う波才を不思議そうな目で見る白蓮。だがそんな彼女を意に介さずに、子供のように目を輝かせながら波才は白蓮へと振り返る。

「来ます。号令を」

「……はあ。お前の規格外は今に始まった事じゃないよな。全軍！戦闘に備えろ！！」

「」「」

どんな酷いこと言ったんでしょう。向こうさんやるき満々ですよ？ん、貧乳とか言ったのかな？

「でもこっちに来るのか？」

「さっき丁寧にも伝令が来ました。大物が来るのでしっかり対応



してくれとのことです」

大物ですが小物ですよね。

……心のどこかでこんなのかからないでほしいなあと思っていたのは秘密です。

いや、かかってくれた方が楽なのでいいのですが……ねえ？というより部下も止めましようよ。

「まあ、おそらく孫策と劉備で手柄は手に入れたはず。もしこっちに向かって来としても、統率のきかないはぐれ一般の兵だけでしょうね」

「ああ、だから美須々と琉生を後方に置いたのか」

それ以前に英雄同士の戦いに無理して私達が参戦する必要は無い。物語は見るものであって編集するものではないのだから。ここで戦う必要性も皆無ですし、まあ気楽に行きましようよ。

「目立つとキツイですからねえ……ここぞと言うとき以外には目立たないことにしています」

「私的には華々しくやりたいんだけどなあ……」

「華々しく散りたいのならご勝手にどうぞ」

「……お前まだ怒ってるのか？お前の私兵団の件」

少なくとも理由がしっかりしていれば怒らないよ。  
なんですか目立ちたかったって。  
死ねば良いんじゃないですか？

まあここは孫策と劉備の両軍の力。  
見させて頂きます。

そう思ったことが私にもありました。

気が付けば目の前にいるのは敵軍の将。  
噂のあの人が来ちゃいましたね。あっはっは、夢なら覚めるこん  
畜生。

「お名前とご用件をどうぞ」

「我が名は華雄、用件は……って何を言わせるのだ!？」

なんで？

なんで目立ちたくもないのに空気読まないで私の前に来るんですか？あれか、実はみんなグルで私をはめようと裏で打ち合わせしてるんじゃないんですか？演技中心なら貴方は関羽とでも戦っていてください。

「ハア！！」

そんな事考えていると、華雄は槍斧を私に向かって薙ぎ払ってきた。速い。

落ち着いて回避し後退する。見る限り、その力は波才が今まで見た中では最上級であった。速さは趙雲や孫策には劣るが、一級の武将には変わりがない。ただの猪武者ではないのか、と波才は内心歯がみする。

「貴様……ただの兵というわけではないな」

「いえいえ、名もない雑兵ですよ？孫策さんはあちら、私はお帰り願いたいのが本心です」

そう言ってさりげなく波才は関羽がいるであろう方向へと指を差し

た。

「いやですねえなんで関羽とやらないでこっちくるんですか。え？私じゃやって？嫌ですよ。だって怖いじゃないですか！何が悲しくて英雄と正面向かって殺し合えと？」

恐らく、武人が彼の本心を知ったら間違いなく軟弱もの呼ばわりするだろう。だが波才にとっては本当に死活問題なのだ。

「ふん、私の攻撃を見切ってかわせる雑兵がいるものか！」

変なところですねー！！

そのするどさをもうちよつと知性に割り振ればいいのに！！

ああ、美須々や琉生は……後方でしたね。

誰が……ああ、私でしたね。

これってもしかしなくても私がやる必要が……いや、まだだ。

「華雄さん、まず落ち着いて話を「聞く耳もたん！」ですよね」

無理だと解っていましたたよこんちくしょー！！

……まあいいでしょう、時間は稼げました。

こんだけ稼げれば十分ですよね。

気が変わったのを感じ取ったのか、華雄は静かに笑みを浮かべながら構えを取る。

「ほお……覚悟を決めたようだな」

「あんまりふざけてたら怒られそうなので。あ、貴方の軍やばいですよ〜?」

「何!?!」

「孫策軍と劉備軍に包囲されて大変大変なのですよ。早く行かないと危ないですね〜」

指揮官がいない軍など有象無象の群れと同様。たやすく崩れ去っていくでしょうね。

華雄の軍は今や統制を失い、困い込まれていた。あと一刻も持つまい。待機していたはずの張遼すら、慌てた様子で飛び出してきたようだ。

「貴様あ……その為に私を」

いや、貴方が勝手に引っかかってただけじゃないですか。しかも自分が原因ですからね。

そんな目を向けられても困るんですが。

「まあ私は戦うのが苦手なので見逃してあげても」せめてお前の首だけでももらおう!」「あるえ〜?」

いやいや帰りましょうよ!そこは帰りましょうよ!ああもう、これだから戦闘狂は苦手なんですって!!

「な、何故です!?!」

「お前のような怪しいやつ言うことを信じられるか!どこに敵軍の覆面人間を信じるやつがいるのだ!」

そう言って槍斧を構え突っ込んでくる。

「ごもつともです!」

正しすぎて反論できない!!

……ああ、もうやるしかありませんね。

華雄は侮っていた。

目の前の男は先ほどからごちゃごちゃと言葉をこねくり回してばかり、武の一片すら感じる事が出来ない。

さらに自分が武器を持ち、飛び込んで行っているにも関わらず剣すら抜かない。さらには構えすら取らない。

明らかにこちらを愚弄するか、諦めているように思えた。

目の前の男は、彼女の戦友である仲間のような鮮烈な殺気が無いばかりか、戦を担う者の香りすら華雄には感じる事は出来なかった。

故に、華雄は波才を侮っていた。

確かに波才は凡将である。戦場を制す武も、軍略を扱うだけの知も彼は彼女達のように持ち合わせてはいなかった。

だが、彼は人が嫌がる事を見つけ出すことに関しては一流の才を持っていた。

本来ならばそれだけでは何の役にもたたない。そこを貫くだけの策と武を扱う力量が無いからだ。

しかし相手が油断しているのならば話は別だ。

相手が無防備にさらけ出した首を噛むことに、躊躇するような人間では決して無いのだから。

華雄が間合いに入った波才目掛け、手に力を入れて己の得物を振り

上げた、その時。

波才の姿が消えた。

「（つな！？）」

とっさに腕を退こうとする華雄。

だが彼女の目に前に、突然波才は肉薄しながら再び現れたのだ。

武人としての本能で、華雄は全身に力を入れる。次の行動に備えると共に、一時的な離脱を彼女は無意識のうちに望んだのだ。

波才はそんな華雄に音もなく、ただ自然に接近すると。

重ね合わせるように彼女の体に触れた。

ぶつかったわけではない、突き飛ばしたわけではない。ただ優しく包むように華雄の正面に現れ、その脇を通り抜けるように。

慌て華雄は振り返ろうとする。しかし何故か華雄の体は、その意志に反して前へと突き進む。いや、崩れていった。

覆面の男とすれ違うように崩れていく我が身体。なんとかそれに抗うべくとっさに足を前に突きだし体勢を整えようとする。

「（……え？な、何故だ！？）」



その足は自分の意志とは無関係に宙に浮いていた。目の前に迫る大地。せめて、せめて受け身だけでもと望む。

しかし体には力が入らない。まるで大河に抗う一本の葉のように、華雄は何度も自らの体に檄を飛ばす。何度も、何度も。動け、動け、動けと。

だが、叶わなかった。

踏み込んだ勢いそのままに、広大なる中華の大地へと自身の力で叩きつけられる華雄。

激しい衝撃が彼女を襲う。波才が一級と評した彼女の力、それが彼女自身に牙を剥いたのだった。

「つかあー!!」

肺の息が全て衝動的に吐き出される。全身に衝撃が伝わり骨が軋む。瞳孔が激しく動くが、このままでは危険と判断。

幸いにも正面からではなく側面から全身を殴打したために脳震盪は起こることなくすぐさま立ち上がった。

その有様は酷いものだ。もとより露出が多く、肌が大気に触れて動きやすい、風を感じるために戦闘で有利な服装であった。しかしその身軽さが災いした。

地面に直に肌を叩きつけてしまうことになり擦り傷、内出血が体の所々に出来てしまっていた。それでも戦意を失うことなく、華雄は

武具を構える。

しかし襲い来る激痛に、顔を顰めずにはいられなかった。

華雄は目の前の覆面を睨み付けた。

追い打ちをかけることもなく、飄々と構えることもなく、ただ華雄を見ている。かぶり物をしているために、どんな表情を浮かべているのかすら解らない。

それがいつそうの焦りと恐怖を巻き起こす。

怒りもあつた。だがそれ以上の得体の知れないものに、武人としての自分が落ち着けと囁くのだ。

波才が華雄にしたことはどうということはない。

ただ体にぶつかったただけだ。いや、ぶつかったのではなく触れたと言うべきか。

ただのそれだけ、それだけなのだ。

後は華雄が勝手に倒れて勝手にこの有様。

華雄は必死に理解しようと思ひ出す。

おかしい……それにしては不自然すぎた。華雄は自分の武に自信を持っていて。転ぶ？幾多もの戦場を駆け抜けていたのにも関わらずそんなミスを？

勢いを、力任せにぶつかって来られて飛ばされたのならまだ理解できる。

だが波才がしたのはそんなものではない。

ただ、ぶつかっただけ。  
そうぶつかったただけなのだ。

投げられたわけでもない、押されたわけでもない、たたきつけられ  
たわけではない。

華雄の額に初めて汗が浮かび、流れた。

まるで目の前の人間が行ったものが理解できない。今度下手に考え  
無しで飛び込めば、自分は死ぬのではないのだろうか。

「退いてくれませんか？」

「!？」

何を言っている。

この私を見れば解るだろうが有利なのはあの覆面だ。  
何故自らそのような事を言うのだ？

「何を考えている？」

「この場での決着を私は望みません。それに貴方に勝てる自信がそ  
こまでないものでして」

そう言っつて肩をすくめる。退きたくないというのが本心だ。だが…  
…勝てるのか？

葛藤で顔が歪む。そんな私の心情を読んだのか、覆面は大きくため息をついた。

「貴方には答えが一つしかありません。部下の悲鳴が聞こえませんか？」

その言葉に思わず耳を此方へと傾ける。いや、傾けなくとも解る時間をとられすぎた。このまま戦い続ければ私に付いて来てくれる部下が……だが。

「構いませんよ。どうぞ」

こいつは心でも読めるのか？

私の心の流れを理解しているように私に促す。

ッ！！

「次は……次は負けぬぞ！！今は退く、だがこれでは終わらせん。いや、終わらせはしない！！必ずやこの醜態の恥を注ごうぞ！！」

華雄が下がりながらも咆えた。

その言葉を受けても、微動だにしない謎の男に、彼女はまたも苛立ちを募らせたのだった。

華雄及び張遼は虎牢関へ後退。

おそらくそこでの戦いこそが私達の真の戦いでしょうね……。

波才は過ぎ去った戦場で黄昏れていた。

己の立ち会った猛将を思い浮かべ、同時に自らの左肩を見る。

波才の左肩は赤く腫れ上がっていた。

波才は顔を顰めた。

彼がしたことは『柔よく剛を制す』、合気を行ったのだ。

合気の神髄とは己の力を用いず、相手の力を利用する。相手が強ければ強いほど、自分の技は破壊力を増す。

波才の力では華雄を倒すことなど無理な話、だがその華雄自身の力というのなら話は別だ。

華雄は自分の誇る武を己自身に受けたのだ。おそらく誰が見てもぶつかって倒れたようにしか見えないだろう。しかしそれは当人達でしか理解が及ばない、武の掛け合いの結果なのだ。

では勝てたのか、と問われれば分からないと波才は答えるだろう。

その証明が彼の左肩だった。

波才は確かに華雄の動きを捕らえたと感じた。しかしそれでもなお彼は華雄の速さとその重さを完璧に受け流すことは出来なかったのだ。

華雄は強い。

なにより恐ろしいのは速さに凄まじい力が加わること。

趙雲、孫策など一撃一撃に鋭さがあり、吹き飛ばすというよりは貫き通すような武と例えられる。だがそれとは正反対なのが華雄の武。一撃一撃の重さが尋常ではなく、相手の武ごと吹き飛ばす剛の技。

確かに人よりは力はあるが、岩をも破壊する一撃をいなせるかと言われれば否。

そしてここでわざわざ決着をつける必要など無い。

華雄にはここで退場してもらおうよりは、生きて次の難関である虎牢関に向かわせるべきだ。厄介者を抱えてもらった方が、戦術面でも数倍。いや、数十倍有利にたてる

そして次に相まみえるのはあの呂布。あの油虫が演技補正お付けて参戦するのだ。

「（黄巾党三万を一人で壊滅させたんですって。はははワロス）」

それに一日に千里走るといふ赤馬赤兎馬もチートであった。

歴史書だと比喩表現だがこの世界だと現実になっ  
ていてもおかしくない。当時の漢の1里、この世界は不明だが、  
史実ではおよそ414.72メートル。  
千里だから×1000、つまり。

「(え?1日に約414キロメートル走る?なにそのハイブリット  
カー。なめてんの?現代の車文明に喧嘩売ってんの?)」

波才はため息を押し込めることが出来なかった。

華雄でさえいつぱいいつぱいなのに誰が呂布と戦えるものか。おそ  
らく剣で受け止めればそのまま押しつぶされ、受け流そうとすれば  
木の葉のように吹き飛ばされるだろう。

それに呂布を飼うなどという高望みは抱いていなかった。

同時に華雄も論外。

確かに武は凄まじい。しかし……いや、まだ降ろせる可能性がある  
分考慮しておくべきか。

彼女の主に対する忠誠は本物だ。董卓のことを視野に入れれば可能  
性は低くないのだから。

……ほんとに忠誠があるんだったらもう少し主のために考えようよ、  
と思うがそこは気にしないでおく。

となると狙いは……。

「……明埜にも動いてもらいますかね」

下手に長引けばその分こちらもつらい。次の虎牢関も流れ作業の如く、他の人達に任せましょう。別に白蓮はどうだか知りませんが、武勇なんざ欲しくはありませんしね。

そう思い波才は自らの陣営へ向けて歩き出す。

惨めだ、惨めだ。そう心の中で自分ではない何かか呟いては消えて行く。

振り払うよう波才は首を振った。

「いてて……これ、ひびは入ってないかな。入ってないといいなあ」

己の磨きあげた武は、彼女達へと届きはしない。

痛む肩を庇いつつ、彼は歩を進める。一歩ずつ、一歩ずつ。

「……畜生が。だからあんなやつらと正面から戦いたくないんだよ、くそつたれ」

寂しげに呟いた彼の言葉は、乾いた風と共に誰もいなくなった戦場へと消えて行った。



## 第二十七話 三言担い手（後書き）

お芋が美味しい時期になってきました。そしてこたつから抜け出せない時期になりました。

ぶつちやけモチベが上がっている今が書き時ですので、後書き武将紹介はまだちょっと先になりそうです。

そういえば味の素は、この前ぱるぱる妬ましいこと、東方で有名な橋姫さん所にお邪魔してきました。なんか無性に作者はパルパルしていたので行くしかないと思って。

行ってビックリ、縁切り神社だったんだ。切れる縁がないんですけど、切った分繋げてくれないかなあと思いつつ手を合わせて帰って来ました。

で、帰る途中に旧友出会って麻雀大会……あれ？パルパルさんで来てくれたのか？

第二十八話 彼女のドリルは人の心を抉るドリルだ。(前書き)

女と猫は呼ばないときにやってくる。

くボードレールく

## 第二十八話 彼女のドリルは人の心を抉るドリルだ。

どうも、右手が疼く波才です。

つく、お、俺の右手が。

……いや、大丈夫ですよ。別に中 病なんてなってないですからね？次回からエターナルフォースブリザード相手は死ぬとかやりませんから安心してください。

どっかの薬味みたいに魔法世界編突入！！とかないんで。

……。

ちよつと面白そうだなあとか思った私は多分過労で疲れてますね。普通に昨日の痛みが引かないだけです。

やっぱり歴史に名を残す武人となんてやり合ったら死にますね。次からは逃げます。ええ、逃げますとも！！

私の命令は常に命を大事に！！

いざという時は配下二人に任せて私は逃げます！！

「主……何か、その、私の立ち位置的には間違っていないけれど、それでも酷いこと考えてません？」

「え？何その具体的な質問。なにそれ怖い」

「やっぱり考えてらしたんですか……」

「……」

非難的な目を向けてくる美須々と琉生。

そんな目で見られても、特殊な性癖を持たない私は嬉しくありません。仕方がないので、私は両腕を広げ、まるで宣教師のように悟りきり、陶醉する表情で二人に笑いかける。

「大丈夫ですよ……二人に何かあったとしても貴方達は私の心の中で生き続けるのです」

「それ死んでますよね？絶対死んでますよね？……いえ、主のために死ぬのは構わないのですが……何んでしょう？この胸のモヤモヤ感」

「……」

美須々はどこか納得しない表情を浮かべながら、自らの胸をさす。一方、琉生はどこか諦めた顔で私を見ている。なんですか、その休日に早朝から長蛇の列でパチンコに並んでるおじさん方を見る目は。

美須々はしばらく己の心情を見つめ直していたが、考える事に疲れただけであらう。

悩ましげに息を吐き出した。だから失礼だつつうちに。

「まあいいです。それよりも問題は……」

そう言つて彼女はまるで何かが存在するかのようには虚空を睨み付ける。その顔は嫌悪で彩られており、まるで親の敵を睨み付けているように思えた。

彼女は決してただ何も無いところを睨み付けていたのではない。その先にあるもの、それは。

「劉備め……恩を仇で返すのが彼らの流儀なのですか。結構なことです」

そう、彼女が見ている方向に構えているのは劉備の陣。

先の戦いの功労者であり、この連合でも既に有名になっている時の人だ。ただしこの時の人は千数百年語られるわけだが。

琉生も美須々と同じように見るが、あからさまな変化はない。物静かな彼女がそもそも美須々のようになったら、それは天才の前触れだろうに。

目が細丸程度だったということは、琉生も美須々と内心同じ事考えていると言つことが。

「以前にも主の悲願を妨害した。だが、それは敵であったからだ」と

自らに言い聞かせて我慢できます。ですが今回は……」

あ、美須々の背後に噴火寸前の大山が見えるわ。おかしいなあ〜今布陣している場所って盆地なのに。

顔も見る赤くなり、般若のように顔が歪む。

その口から汚い罵倒が出る前に、私は彼女を制止する。

「まあまあ……美須々、これは私の不手際ですよ。手の内を隠しすぎた結果がこれなんですから」

「主はそれで良いのかもしれませんが手助けしてやったのにも関わらず主に怪我を……すみません。出過ぎた事を」

私の雰囲気を感じて自ら一歩退いた美須々、空気の読める子は好きですよ。

まあ、言っちゃなんですけど今回は自業自得です。

自ら背後に二人を追いやって勝手に負傷とか……ないわ〜。

いや、劉備が敵軍を受け流して本隊を巻き込むとよんだところまでは良かった。実際そうだった。

……なんで。

なんであんの髪の毛脱色猪女はこっちに突撃して来たんすか!?!?それも自分の部下ほっぽいて!!

まじありえねえ、

あれか、目の前に敵がいたからか？敵がいたら突撃するんですか？普通あそこは本陣行くでしょうが！！何！？本能で戦ってんの！？否定しようとするが……ふと、私は否定要素が見つからないことに気が付いた。

何だか無性に悲しくなったので考えるのを止めた。

「まあこの件はここまでにしましょう。むしろ次からが本番です」

私の空気が切り替わった事を理解し、彼女達は無意識のうちに背を正す。

既に明埜は洛陽に向かわせた。時期に策はなるだろう。

先の戦いでは軍師がいなかったが、この戦いでは陳宮がいるなあ……。

さらには呂布などの新たな猛将に次第によっては董卓の片腕の賈？が来るかもしれない。

……陳宮はまだいいとして問題は賈？。あのチートがこの世界でも健在ならばもの凄くめんどい。

まあ、めんどいというのはあくまで正面から戦った場合。搦め手で体内の毒を暴れさせればいいでしょう。

聞けば董卓に賈？はたいそう入れ込んでいるみたいですからね。その危機と聞けば飛んで行くぐらいだとか。

ははは、おおくなんと美しい友情なのでしょう？

……いや愛か？この世界では割と百合百合しい所多いですからね。  
曹操とか曹操とか曹操とか。だからこそ私は曹操に捕まるわけには  
いかない！！天和様達が毒牙にかかったら思うとそれだけで鼻血が  
……じゃなくてそれだけで手が怒りに震えます。

「主？鼻血が出ているのですが？」

「え？あ、ああこれはちょっと熱くてですね」

「ええと、風が吹いているので寒いと思うんですけど」

「……………」

目の前にはいかがわしげに見ている琉生と美須々の姿が。  
こ、この空気何だかすんごい嫌なんですけど。なんか小学生がいた  
ずらして一人の女の子泣かしたら、その友達や全く関係ない女子に  
囲まれて謝れコールされるぐらい気まずいんですけど。

額から汗が流れる。

誰かこの状況何とかしてくれないですか？

そう思い内心大慌てしていると……。

……あ、誰か来ますね。助かった！！誰だか分かりませんが最高で  
すよ！！もう愛してます！！

誰かがこちらに向かってくる気配を感じほっと一息。  
やった、これでこの状況は打開できる。話をそらせる！！



人としてやってはいけない責任逃れ1位を躊躇いもなく実行しようとしていた波才だったが……次第に向かってくる気配の正体が掴めてくると仮面に隠された顔を青くした。

「久しぶりね、今は単経つて名乗ってるのかしら」

背後から聞こえる凜とした声。

正面の美須々、琉生の二人が仮面を被つていても分かるほどの怒気を放つ。

波才は内心大きなため息をつきながら振り返った。

「あいや〜お久しぶりですね、曹操さん。人の陣のど真ん中にアポ無し突撃とか引きますよ？」

そこにいたのは『乱世の奸雄』こと百合の代名詞、頭の良い方のドリル、チビの三拍子。

今最も会いたくない人物ことNo.1の曹操さんの姿がありました。

何しに来たんだこいつ。というかなんでうちの君主よりも早く来てるの？

私の言葉の真意を理解してか、まるで薔薇のような笑みを浮かべる。ようするに刺々しいのだ。この笑顔を向けられては、並みの人間は震え上がってしまうだろう。

……つまり僕は震え上がってました。悪かったな、ヘタレで。

「私は強引に押すことが好きなの。……夜の方もね」

「うわっ艶やかで色っぽいはずなのに、全然魅力を感じねえ。なんか寒気するんですけど。というわけで私に対応するのはきついので白蓮と乳練りあっててください」

「悪いけれど……私の愛でる対象に彼女は入らないわ。貴方だったら考えてもいいけど」

「ぬかしよるwww」

笑い飛ばそうとするも口元が引き攣っているので上手く笑えない。おい、白蓮早く戻ってこい。私の胃が穴どころか融解するぞ。

「公孫贖なら劉備と談笑してたわよ？」

うわっ凄い言い笑みでノゾミガタタレター。

こいつサドだ。ぜってーサドだ。なんでこんな良い笑みで笑いかけてきてんの？サドなの？百合なの？

つうかなんで心読んでるの？

「というか、何で私の正体分かったの？」

「声聞けば分かるでしょ」

「ごもつとも過ぎて反論出来ませんね。……っで？何用ですか？」

「用件は一つだけよ。貴方達三人……人数が一人足りないわね。四人共に私の軍に入りなさい」

その言葉に後ろの部下二名から怒気が膨れあがる。

美須々にいたっては得物に手をかけていた。おそらくは私が一声かければ、曹操目掛けて飛びかかるだろう。

対して曹操の脇に控える二人、外見の情報から分析しておそらくは夏侯姉妹。二人も同様に驚きを隠せていない。……というか赤と青のペアルックってあんだ。な、仲がよろしいことで。

……あ、良いこと思い付いた。

私はとびつきりの笑顔で夏侯惇へと顔を動かす。

「と、曹操さんが申していますが夏侯惇さんはどう思います？」

「認めない!!」

即答かよ。

「というわけで私も認めません!!いやあ、夏侯惇さん気が合いますね。ちよつと飲んでいきませんか？良い酒のつまみが入ったんです

「よ」

「おお！それは楽しみ「姉者……」つむ！？貴様あ！私を騙したな！！」

おい、夏侯惇。曹操の頬が引き攣ってるぞ。

「春蘭、下がりなさい」

「いやしかし！？」「下がりなさいと言っているの……」「……っは」

不承不承に夏侯惇は下がりを睨み付ける。いやさ、私も貴方があそこまでノリ良いと思ってもみませんでしたよ。

……半ば予想外だよ。だから私のせいじゃない！！

「で？答えは？」

「と曹操さんは申していますが夏侯淵さんは」

「貴方の答えは？」

「曹操さん、答えを急ぐことが貴方の美德ですか？」

「あら、くだらない引き延ばしに付き合うのが貴方の生き方かしら？」

「はい」

「……」

頬が引き攣っている。曹操の引きつり顔はレアかもしれない。

くだらない事に付き合つことほど楽しい事はない、と考えている私はおかしいのだろうか？

あながち間違いでもない気がするものだが……。人それぞれか。

ま、コレに対する答えなどとうの昔に決まっているのだ。別にわざわざ応えるほどおつくうなものは無いと私は思いますね。

「まあコレ以上はぐだぐだになるんでここまでにしときますかね。

答えは『いいえ』」

「何故かしら？」

「白蓮ほど貴方に魅力を感じないから」

「……てつきり嫌いだからとか想像してたんだけれど」

「嫌いですよ？私は貴方が苦手で嫌い。ですがそれは認めないという意味ではないでしょうに。私は貴方を認めている。その力、魅力、容姿、全て私は貴方を高評価している。その上で私は貴方が白蓮ほど魅力が無いと感じたんですよ」

「貴様あ……華琳様になんて暴言を!!」

「下がりにさい春蘭。それで、私は公孫贄のどこに魅力が劣っているのかしら」

冷静なように振る舞ってはいるが、中は相当荒れ狂っているようだ。あの夏侯惇が一声で下がるほどの怒気を秘めていると……。

私はちらりと夏侯惇を一瞥すると広いデコに汗が浮かんでいる。凄いな、身近な配下にしか分からないほどの怒気しか漏らさぬか。

つち、化け物だな、私は人間だぞ。化け物には化け物を、龍には龍を向かわせてもらいたいもんだ。

「……夏侯惇さんに聞けば分かりますよ?」

「貴方……巫山戯るのもいいかげんに!!」

「落ち着けよ、乱世の奸雄。夏侯惇さん、貴方は何故曹操に仕えているのですか?」

最初先ほどの失態もあって口を出すことに躊躇いを感じていたようだが、曹操が目で促すところらを睨み付けて言い放つ。

「華琳様だからだ」

「姉者……もう少しだな、くわしく」

「はい、私も同じ。分かりましたか？曹操さん」

まさかと夏侯淵さんは目を見開き驚く。夏侯惇さんは何故か嬉しそうだ。

さて……とうの曹操さんは……って。

なんか笑いを堪えてるんですけど。

「そうね……そういうこと。分かったわ」

そう言っただけで私達に背を向けて去っていく。振り返り際に見えたその顔は、先ほどとは打って変わって歓喜に満ちあふれていた。

慌てて二人の姉妹はそんな彼女に追隨する。曹操は数歩歩いて振り返った。

まるでからかい相手を見付けた、心なしかそんな風に思えてしまった。

「貴方、蛇かと思ったら子供だったのね」

「へ？」

思わず呆けてしまった。

一体どんな言葉を浴びせられるかと身構えてみれば……『子供』？

からかっているのか？

そう思い彼女を見つめるが、その目の奥に鈍く輝くそれは真剣みを帯びていた。

幾多もの人材を見抜き、登用した曹操。その曹操が私に対して下した評価は……『子供』？

思わず私は尋ねた。何だそれは。

「子供……子供って年じゃないんですけどね」

「ええ、貴方は大きい子供ね。無邪気で、無垢で、純粹で、疑うことを知らない子供みたい」

「……」

「あら？自分では分かってないのかしら。まあその顔が見られたから、今日はよしとしましょう。それじゃ、また会いましょうね」

そう言つて再び踵を返すと、彼女は二度と振り向くことなく、二人のは以下を連れて悠然とその場を立ち去っていった。残されたのは呆然と佇む『子供』が一人とその配下が二人。

彼女が去った後、一人顎に手を添えて考え込んだ。

彼女は何をもつてして私を子供などと評価したのか。まあ、今日はよしとしましょう？つまりまだ諦めてはいない、私にはその価値があるとのたまわっている。なれば何故子供などと評価した人間を欲する。

ああ、意味が分からない。



考え込む私に冷ややかな目で、未だに曹操が去った方向を睨む美須々々が冷たく言い放つ。

「……主、曹操如きの戯れ言に付き合う必要などありません」

戯れ言……ね。どっかの戯れ言使いならばこの意味を分かるのでしようか。

分かったところで今更自分を変えようとは思えませんが……あんな言い方されたら嫌でも気になるでしょうに。やっぱり曹操はサドだ。

……いや待て。

「琉生、貴方はどうです？今の曹操の言葉、当たってますか」

私の問いに対して、琉生は無表情なまましばらく私を見ていたが、ついに一回頷いた。

美須々はそんな琉生に何か言いたげであったが、口を出したところでどうにもならないことぐらい分かるのである。結局彼女はただ見守ることを選んだ。

……まあそれが美須々という人間の利点だと私は思うよ。

でもまさか琉生も頷くか。何とも言い難いね、この感情は。自分の知らないところを他人に気が付かれるなんざ気持ち悪いっただらありやしませんよ。

……ま、いつか。美須々の言う通り今は曹操の言葉に付き合っているほど余裕もない。  
全てが無事に終わった後に、月でも見ながら酒を飲んで思い出せばいい。

「で？いつまで隠れてるんですか？白蓮？」

「え？あれで隠れてるんですか？なんで来ないのだろうと思いましたが」

「……」

三人が同じ方向を眼を細めて透視する。  
しばらくして観念したのか。白蓮が気まずそうにテント同士の合間から顔を出して出てきた。

「あ、あははは。……ばれてたの？」

「多分曹操も気が付いてたんじゃないですか？」

「ま、まじか……」

白蓮も少し気の隠し方学んだ方が良かったですよ？  
というかちらちらと見えてましたよあんだ。

「あ、あいな。それで曹操の誘いなんだが」

「お断りですよ。私は白蓮を見たいのですから」

「っな!？」

突如顔が真っ赤に染まって驚く白蓮に私は疑わしげな視線を送る。曹操なんかよりも重要な事はいくらでもあるのだ。さっさと終わらせたい。

「で、軍議はどうでした？袁紹と曹操が喧嘩してて胃が痛かったでしょう?？」

何故、袁紹と曹操が喧嘩……とは言っても言い合いになっているのかという先ほどの戦い、つまり？水関の戦いが原因だろう。？水関の戦いで華雄が飛び出してきたのだが、劉備と孫策はそれを受け流し本陣を巻き込む戦いをした。ならば本陣陣営の袁紹と曹操が言い争うことはないだろうと思うかもしれないが……。

曹操が華雄の軍をかわして袁紹軍に突撃させた。

更に曹操は撤退する華雄を追う（まあこれは名目でしょうけど）ここで？水関の一番乗りをしようと企んだ。まあ一番乗りは劉備か孫策でしたけどね。

この戦での戦功はほとんど華雄軍を撃退した彼らのものでしょう。

まあ戦功なんて興味ないですけどね。

白蓮は欲しそうですけど知らん。

というわけで曹操と華雄の軍の巧みな連携（？）で大損害を受けた袁紹軍。

その後の曹操の行動により更に頭に來たようです。

こうして第一次金色クルクルドリル大戦が勃発。

さぞや胃が痛くなる光景だったのでしょう。さつき曹操さんの機嫌が悪かったのもこれが原因でしょうねえ。

白蓮は赤かった顔が今や疲れきって心なしが青くなっている。信号機があんたは。

「……それが解っているのならお前が行って止めるよなあ」

「いやですよめんどくさい」

犬も食わない喧嘩どころではありませんよ。

そんな犬畜生も喰わないものをなんで人間たる私が食さなければならぬのですか。知ってますか？ドッグフードって泥の味しかしませんよ。子供の時につまみ食いしてトラウマになりましたから。

「はあ。取り合えずお前の予想通り、曹操と袁紹と同じく前線で戦う事になったが大丈夫か？」

諦めたのか白蓮は大きなため息をつきます。最近白蓮も疲れていま

すね。誰のせいなのでしょう？  
まあ白蓮の心配は解りますがそこまで大変なものではないです。

「大丈夫でしょうね。大方手柄を立て損ねておまけに大損害つけた袁紹がお怒りですから自ら率先して攻めるでしょう。曹操にも私スゲエみたいな所を見せたいと思うでしょうから、そこら辺は問題ないです」

あの人は見栄で動くからなあ。よく配下の二人ついていってます。でもついていっているということはやはり彼女達には魅力がある人間なのでしょう。

袁紹の魅力……ねえ。

\*。？。)

おーっほっほっほっ！

「いや、無いわ」

「主？」

「単経？」

「あゝ何でもないですよ」

なあ教えて欲しい。

\*。？。） の魅力とはなんぞや？少なくともボディはうらやまけしからんで金髪ロールのお嬢様キャラだが、それで馬鹿はないと思うんだ。

いや、馬鹿だからいいのか？古今東西馬鹿キャラは愛されるという法則がある。あれかな？愛嬌があるとか？

思わず腕を組んで思考の海に沈む。

……まあ私みたいな変人についてくる人もいるので、袁紹についてくる人がいても不思議ではないのでしょね。うーん、白蓮さんも面白いですけど今考えれば袁紹も面白かったのかもしれない。馬鹿が紡ぐどたばたコメデディーの物語は面白いと相場が決まっている。

顔良ポジションではなくて文醜&袁紹ポジションで馬鹿やるのも楽しかったのかも知れない。

あ、なんかそう考えると楽しそうな気がしてきた。

袁紹……ありかな？

「なあ、単経。お前さつきからくるくる表情変えてるけどどうしたんだ」

「袁紹に仕えるのもありだったかなあ〜って」

と私が言った瞬間何かが軋むような音がした。氷にジュース入れたら鳴る音とそれはよく似ていた気がする。

あれ？と思いい顔を上げるとそこには顎が地面につかんばかりに大口

を開けた白蓮と仮面が斜めにずれてちよつと顔が見えてる美須々の姿が。

琉生は……おい、なんでですかそのチヨップの構えは。なんか壊れたテレビを無理矢理直そうとするお母さん臭がしますよ？

「単経が……単経が壊れた」

ちよつと白蓮、何人を勝手に壊れもんになっているのですか。

「働きすぎたのでしょうか……主、私は何があっても一緒にいますからね」

いや、その言葉は嬉しいんですけどなんでそんな温かい笑みを浮かべているんですか？

「……………」

琉生「大丈夫ですよ、そんなもう手遅れだ見たいな目で見ないでください。」

もう、私なんか変なこと言いましたか？

〔洛陽 side〕

「それで……これはどういう事かな？」

執務室にて男は荒い声を上げる。

宮中の装いをしている男。彼は男としての機能を失っていた。代償にして大きな権力を手に入れたからこそ彼に後悔は一切無い。彼は宦官であった。

部屋は豪華な調度品に溢れ、彼がどれほどの富を有しているのかは一目見て分かる。

だがその強大な権力と富を持つ宦官の顔は酷く険しい。苦々しく渡された書簡を睨み付けていたのだった。

「どうやら先の方？水関は突破されたようです。ですが次の関に閉じこもる董卓軍に苦戦。撤退する恐れも大きいかと」



部屋に跪く間諜役の顔に包帯を巻き付けた人物の言葉を聞き、宦官は書簡を握りつぶした。

その顔は醜く歪み、真っ赤に染められている。怒りに震える男は激昂し、荒々しく声を上げた。

「董卓の愚か者が！これではますます帝の信用は奴のものではないか！？涼州の田舎者に土足で荒らされるなど許してなるものか！」

書簡を叩きつけ、何度も何度も踏みつぶす。既に肉屋のあの女のせいで何人かの重要な宦官が死んでいた。その上この連合を董卓のが撃退すればその名声が大陸に響き渡り、帝はますます董卓を気に入る。さらに後始末として董卓一派は宦官の命を狙うだろう。

「このままでは董卓によって我らは殺される！！つくそ！！つくそ！！」

冷静にそれを見続けていた包帯を巻いた間諜。

だが彼は小さく笑みを浮かべると宦官へ向けてぼつりと声を漏らす。

「いえ、今が好機かと」

その言葉につばと振り返った宦官は怒り心頭といった様子で男へ向

けて怒鳴る。

「何が好機だ！ここで董卓の配下共が貴様の言うとおり」「今董卓を殺してしまえば宜しいでしょう」「……何？」

睨み付ける宦官の視線を受け止めた男は静かに声を紡ぐ。

「董卓のお抱えの武人は誰一人この洛陽にいません。ついで賈？も虎牢関に出張っております。この洛陽に戻る前に董卓殺害の策を張り巡らすべきかと。さすれば賈？めは己自身の力では何も出来ない」と理解し、助けを求めるべく虎牢関の將軍達を呼び戻すはずです。そうなれば虎牢関は落ち、残るは洛陽のみ。例え董卓殺害の策が失敗しようとも外ので構える連合軍の面々が董卓を殺すでしょう」

宦官は流れ出る男の言葉を静かに聞いていたが、男の話聞くにつれて赤く怒りに染まっていた顔が喜びへと変わり、話し終える頃には満円の笑みに変わっていた。先ほどとは打って変わって宦官は喜びの声を上げる。

「つくく、はははははははははは！なるほどな。確かにお前の言うとおり好機であることに違いはない！」

しばらく笑っていた宦官は男へ向けてさぞ愉快だとばかりに言う。

「お前の考えを採用してやろう。どうだ？これが済んだらお前に褒美をやるぞ？」

「それは……光栄でございます。ですが今は目の前のことを着実に実行するべきかと。では私は再び調査へと向かいます」

「うむ、ご苦勞であった……くく、そうだ。今が好機だ早速他の者達と」

独り言を呟く宦官の男を彼は一瞥することもなく音を出さずにその部屋から出る。

外は雨が降っていた。美しい彫刻が彫られた宮中を濡らしている。どこからかカエルの唄い声が入る。

だれ見も見つからずに宮中を出ると、洛陽の町に町民の服を纏い紛れ込む。雨のせいか洛陽の大通りからにそれ程人の姿はない。男は洛陽の町を走った。

やがて一つの家の前で止まる。特徴があるわけでもなく看板が掛かっているわけでもなく。ただの一軒家、民家であった。

男は辺りを見回し人の気配が無いと分かるや閉じられている木の扉を二回軽く叩き、間を置いて五回叩く。

数秒後に反対側から男の声であろう低い声が発せられる。

「猫飴はいかが？」

すかさず包帯を巻いた男はそれに答える。

「猫飴バケツ一杯食べたいよ」

すると静かに扉が開く。姿を見せた男もまた顔に包帯を巻いている。男はその男に促され、奥の小部屋に入る。

するとそこには同じく顔に頬杖を巻き、袖が長い赤い服を着た女、明埜の姿があつた。

明埜は目を光らせて男に問う。

「首尾八？」

「馬元義様の思うがままに進んでおります。馬元義様の言葉通り言いましたが予想通り、十中八九進むかと」

「俺ジャネエヨ。旦那ノ思ウガママダナ」

彼らが何故宮中奥深くにまで潜り込み、活動していたかと言えばそれは黄巾の時代、尤も重要な事柄の一つとして波才が情報という物を周りが見ても呆れるほど重視していたからに過ぎない。

彼が過去に軍を作り上げた際まず真つ先にしたことは訓練でも演説でもなく、間諜の人間を育て上げる計画を立案することから始まった。

一人一人の信用できる逸材を見つけ出すと彼らが明埜に心から心酔するように誘導、そして明埜自身から自分が学び得た知識と現代の諜報技術と人間の行動分析と心理に関する教えをたたき込んだ（波才自身で教えなかつたのは明埜へ忠誠を向けさせるためであった）。これにより初期の段階から周りのめぼしい人間達のもとへ数十名、今や百を超える優れた間諜がこの大陸に飛んでいる。

何もこの男のように目的の人物にかなり近い存在になるばかりではなくその周りの人物、つまり両親や親友と友好を続けさせている間諜もいれば、その町で料理店を営んでいるものもいる。

例えば呉で孫策が行きつけの酒屋の店員がそうであるし、曹操が良く通い宮中に勧誘している料理店の店主もそうである。さらには袁術がよく買い付ける蜂蜜屋の店主も、孔明が買い付けるあれな本屋の店員も、明埜が率いる忍びの者達が潜伏しているのだ。

彼らには黄巾時代から周りからぬきんでた報酬が約束されていた。

楽しそうに笑うと明埜。それにつられて男も笑う。

だが男の笑いがどこかぎこちないことに明埜は気が付く。

「ン？ドウシタンド？」

「いえ、その」

どうにも煮え切らない様子で男は視線を泳がせる。

明埜は言いたいことをはつきりと言わない人間は嫌いな部類に入る。それは彼女の生まれ育ちも関係していることだったが、少なくとも彼女は例え部下と言えど例外なくもの申す事が出来る関係を築いて

きた。

だからこそ忍は信頼関係を築き上げると共に貴重な情報をだけではなく何気ない情報まで集め、それを組み合わせることで新たな発見を見つけ出してきたのだ。

そんな彼らにとって言葉を濁すことは多くの意味を持つ。  
だからこそ明埜は男に問い詰める。

「イイカラ言ッテミロ」

しばらく渋っていたが変わらず鋭い視線で見続ける明埜に覚悟を決めたのか明埜を見つめ返すと神妙な口ぶりで話し出す。

「あの猫飴がどうたらとかいう合言葉止めません？ 凄く恥ずかしいですしもっと他にもいいのがあると思っんですよ」

明埜がぴたりと止まった。

「仲間内でもあれ意味わかないし恥ずかしいしで不評ですよ？」

「エート。ソノダナ……ナンツウカ」

すると珍しく明埜の声が狼狽える。呪われた声と蔑まれたそれだが不思議とこの様では何故かわいらしく感じてしまう。しばらく躊躇していた明埜だったがやはり仲間内で隠し事は無しという信条と部下である男が話したのに自分が話さないのとは思い諦めた様子で口を開く。

内心やぶ蛇だったなと明埜は後悔した。

「イヤアナ。旦那ガドウシテモツツウンダヨ。予算ダイクラ請求シヨウガ何モ言ワズニ出ス旦那ガ、コレバツカリハユズレナイトカデヨ」

「馬元義様は気に入っておられるので？」

「アホカ！！何ダヨ猫飴ツテ！？何ダヨバケツツテ！？トイウカ山盛りデ飴食ベルトカ何言ツテンノ！？歯ガ死ヌワ！！太ルワ！！」

一通り怒鳴り散らすとゼイゼイと息を荒くする主の姿に若干頬を引きつらせて笑う部下。  
不憫そうに見つめる部下を睨み付けると「ダケドナ」とこぼすように呟く。

「ソレデモ、ソレデモ俺八旦那ノ望ミ通りニヤラセテアゲテェ……」

部下はそんな隊長の姿に思わず目頭を熱くした。

ちなみにゲームマニアの波才は暗号を決める際、一人深夜遅くまで悩んだようだ。

それで残った最終選択がこれと「ひらけ、ゴマ」である。どうも波才のセンスは果てしなく地を這いずり回っているようだった。



第二十八話 彼女のドリルは人の心を抉るドリルだ。(後書き)

なんだかんだで来年から東京に住むことになりました。

もしかしたら来週はごたごたするかもしれない……間を空けて、再来週に更新になるかもしれません。

それと作者が投稿している恋姫/zeroは、気が向いたら更新することにします。というかそうじゃないとこれ書けないので。

そういえば、用事で埼京線板橋駅で降りたんです。そしたら八チドリが飛んでました。私は初めて八チドリを見て、しかもそれが目の前で飛んでいるところ見られたとあって嬉しかったです。可愛かったなあ……。

……あれ？なんかおかしくない？

第二十九話 虎はいずこへと(前書き)

天がわしをもう5年だけ生かしておいてくれたなら、わしは眞の画  
家になれたらうに

〔葛飾北斎〕

## 第二十九話 虎はいずこへと

董卓軍が守護する虎牢関。

紫の髪を靡かせる女性は笑う。

「おー。来た来た」

この関を張遼守る張遼は迫る連合軍を眺め不敵な笑みと共に声を漏らす。

彼女は紫の髪を棘がついた髪留めで一つに束ね、青の陣羽織のよくな物を体に纏っている。だが一番彼女の特徴的な部分としては間違はなく、そのたわわな胸を覆う白いサラシだろう。

下半身には下着の代わりにふんどし、それを剣道の前半分だけを取り出したような服で隠している。

「来た来た……」

次々と現れる連合軍。

張遼の額に冷や汗が流れる。見れば不適に笑う笑みが引きつり、頬がびくびくと変なりズムをきざんでいる。

「来た………っつーか、どんだけ来るねん!!来すぎやろ!!」

張遼はまるで現代で言う関西弁で怒鳴る。どうやら彼女は報告からもっと少数の軍勢を予期していたらしいが、その予想以上に現れる連合軍。先の余裕はどこぞへと消え去ったらしい。慌てて振り返り報告した華雄へと彼女は振り向く。

「華雄……言うてた数と全然違うや……ってどないしたんや華雄」

だが彼女は華雄を見て驚く。  
腕を組んで佇み、張遼と同じように連合軍を見る華雄だがその表情は険しい。

「華雄!!」

反応のない華雄に張遼は声を強くする。  
するとここで気が付いたのか、体が小さく振動した華雄は張遼の方をゆっくりと振り向いた。

「ああ、すまない」

その反応に張遼は首を傾げる。  
いつもの華雄だったなら「そんなはずは無いんだが……」などと言  
い訳の一つも言うだろうに。だが華雄は謝罪するとすぐに首を動か  
し連合軍を睨み付ける。

異様な気配を感じ取った張遼は華雄に再度声をかようとする、だが。

「これでは作戦も立て直しなのです！まったく、軍師のねねの事も少しは考えて欲しいのですっ！」

陳宮が苦々しくつつんけんどんに両手を頬に当ててあっちゃんぶりけのあれをしながら言った声に阻まれる。

彼女、陳宮はこの董卓軍の軍師である。青緑の髪を二つに束ねたツインテールの彼女はどこか昔の学生チックな服装をしている。黒を基準とした彼女の服はたけが長く、身長が張遼の胸の位置ほどしか無く小柄な陳宮は服に着せられている感が否めない。

この発言に張遼は「あちゃー」と小さく呟いて不味いなとばかりに頭に手をやって目をつぶる。

華雄は短気であるがために、思うがままに発言する陳宮とはよく喧嘩をしていた。とは言っても陳宮が華雄にどつかれて呂布に泣きつくという非常にかわいらしいものだが。

これはまたかと目をゆっくり開けると……。

「え？」

驚いて目を見開く。

陳宮の声が聞こえないはずはなく、うなり声を上げながら陳宮へ向けて手を振り上げているであろう華雄が未だ連合軍を睨み付けてい

たからだ。

これには陳宮も驚いたのか「あれ？」と不思議そうに眺めている。

しばしそのまま睨み付けていた華雄だがその視線が一つを定めて止まる。

「すまない私の間違いだ」

「へ？え？」

「……兵の確認をしてくる」

「（あの華雄が自分の非を認めて謝った！？）」

陳宮は謝罪に驚かされたのかあわあわと慌てている。  
静かにその場を去る華雄を張遼は複雑な目で見送る。

「なあ華雄になんかあったんか？おかしいで」

「ねねは知らないのです。あの猪が何も言わずに大人しくしている  
なんて本当におかしいのですう」

「じゃあ恋、なんか知っとるか？」

「……（ふるふる）」

張遼の問いに深紅の髪を横に振る女性は呂布。

かの天下無双と名高く波才が最も危惧する人間である。体に入れ墨を彫っている彼女は張遼ほどではない（あれは素っ裸に等しい）が黒と白の中華の装飾が施された服は中々に露出が高い。

どうでもいいが腰と腕にベルトを使っているので波才が見たら突っ込むこと間違いないだろう（性的な意味ではない）。

彼女は寡黙で言葉少なく普段は大人しいが戦の時はまるで豹変したように荒々しく「天下無双」の四文字に恥じない、まさに呂布の名に相応しい戦いを行う。

しばらくうんうん唸っていた張遼だったが「まあええか、華雄やし」と普段の華雄が聞いたら間違はなく一悶着起こること間違いないセリフを言っただけ大きく息を吐く。

連合軍を改めて見た彼女は信頼する戦友の名を呼ぶ。

「恋。何とかなりそうか？」

「……………なんとかする」

「せやねえ……………。何とかせんと、月も賈駆つちも守れんか……………。それに、あんたの王国もな」

「……………（コクッ）」

意味部下に頷く呂布を微笑ましく笑みを浮かべてみていた張遼だが真剣な顔つきになり、連合軍を注意深く眺める。

「ん」。陣形の展開もなかなかやな。この手の定石は籠城やし、向こうもそのつもりやろうけど……あんまり、時間を掛けるワケにもいかんしなあ」

考え込む張遼、それに負けじと陳宮も頭を捻らせよいか考えはないかと考える。

それ故にこの張遼達の空間は張り詰められ、より一層風に冷たさを感じさせた。

これに一石投じる非常事態が起こるとは張遼も陳宮も呂布でさえも、誰も考えもしなかった。

「申し上げます！」

突然向けられた声に顔を上げてみればそこには董卓軍の兵士の姿が。何やら慌ただしく、何か問題が起こった事は明確だった。

「何や？敵の状態ならちゃーんと見えとるで！」

いささか余裕を見せながら張遼は兵士に接する。上の者たる自分が彼らに慌てたり怯えたりする姿を見せてはそれが兵士達に広がり実際の戦いで十分実力を発揮できない事を知っているからだ。



「はっ。あの……華雄殿が出撃されるようです」

だがそれを忘れてしまっただけで彼女は驚き目を見開く。

それは陳宮とて例外ではない。

その小さな顔を一杯に使って描かれる表情は何が起こったのかわからないと言わんばかりだ。

唯一呂布はいつともかわらずその表情を動かすことは無かったが。

「……………はあっ！？なんやそれ！」

「そ、そんなの聞いて無いのですっ！」

「前言撤回や！あの猪……！（結局は華雄は華雄かいな。だがこれはあかんで……）」

驚きもつかの間。

呂布から放たれる戦気により二人は目が冷める。

どこまでも深く、その威圧感に一般の兵は思わず汗を流した。

当の呂布自身は顔を伏せているために表情は読めないが……怒りに身を震わせていることを彼女達は感じ取る。

「……………出る」

「呂布どっ!」

「……しゃあないやろ!せめて華雄を引きずり戻さんと、月に会わせる顔が無いわ!陳宮は関の防備、しっかり頼むで!」

「分かったのですっ!」

虎牢関。

演技では「人中の呂布、馬中の赤兔」と評された無敵の武人呂布により連合軍は苦境に立たされる。、呂布一人に圧倒され、劉備・関羽・張飛の三人で追い払うも結局は董卓が虎牢関を捨てる事で通過

することになる。

要するに突破無理。

史実では孫堅のパパ無双で突破されているが彼（彼女？）は既に亡くなっている。これにより自然と演技よりに流れるのではないだろうか？

少なくとも呂布のチートは既に黄巾時代に証明されている今、演技の出来事が実際に起こってもおかしくはない。

つまり前線に参加している我々は死亡フラグのど真ん中という特別席に座りつつ濁酒をやけ酒している状況である。  
ようするにだ。

「帰りたい」

「おい、いきなり何をぶっちゃけてんだよ」

呆れるように私を見てくる白蓮ですけど……よく考えてみてください。三国無双で言うところの最近の柔らかか呂布じゃなくて無双3の頃のような暴れん坊呂布相手するんですよ？

しかもノーコンティニュー一回縛りで初見プレイ。

それ言ったら人生全部初見プレイですけどその中でも群を抜いてますね。

前線に曹操と袁紹が出るから良いものを。

「ぶっちゃけたくもなりますよ。おそらく敵が選択するのは十中八

九籠城戦でしょう?」

「……だよなあ。流石に二度も出撃なんて馬鹿はやらないだろう?」

「それで……」

頷こうとしていた波才だったが唐突にその動きが止まる。

「ん?どうしたんだ?」

「気のせいですかね?なんか軍氣っぽいのが董卓軍から昇ってるんですけど」

「そんな馬鹿な……」

そう笑い飛ばそうとした白蓮だが波才と同じく動きが止まる。その視線の先には徐々に開かれていく虎牢関の門の姿が。

「あ〜と。そうだ、波才。今晚のおかずはなにかな?」

「白蓮、目を背けなくなる光景なのは分かりますが現実を見てください」

正直私だって信じたくはないが董卓軍は相当馬鹿のようだ。どれぐらい馬鹿なのかという……もうおーほっほっほと同じで良くない

？つてぐらいだ。

「出てきた旗は華雄ですねえ。先日失態を取り戻そうと思って華雄が独走したんちゃいますか」

「後続の部隊も来たみたいだなあ。旗は……『呂』と『張』らしい」

あゝ『華雄をほつといて馬鹿やらせようぜ大作戦』は気持ちが良いぐらいに成功したようです。

呂布にお目当ての武将まで連れちゃいました。でもなんていうか……ねえ？

この胸のもやもや感分かるでしょうか。明埜に頼むまでも無かったですかね。

うゝんまさかここまで猪だとは考えてなかったので捕獲作戦なんざ考えてません。とりあえずトラップツールと錬金術の書？が用意できてないです。

曹操とかもここで捕獲なんざ考えてないでしょうかから普通に勝つことを目標にしますかね。

「どうするんだ？相手は一級の武将だぞ？美須々と琉生を当てるのか？」

「曹操が前方で引き受けるので大丈夫でしょう。流石にここで退いては彼女の立場は無くなりますからね。先の立場とはちがいますから」

二度も逃げたらもう連合から白い目で見られ、良くない噂も流れま  
す。それ以前に曹操という人間はここで退くことを認めないんじや  
ないかな？

……仮に退いたら私が馬鹿だっただけですな。

この局面を読めないのでは英雄としても興味がないしこの先おーほ  
っほっほ辺りとやって負けるでしょう。その時は私も一口かませ  
てもらおうかなあって。

思ったけど杞憂みたいですね。

「聞け！！曹の旗に集いし勇者達よ！」

ああ、いいですねえ。

「この一戦こそ、今まで築いた我らの全ての風評が真実であることを証明する戦い！」

英雄が生み出す戦の産声は。

「黄巾を討つたその実力が本物であることを、天下に知らしめてやりなさい！」

その瞬間隣で控えていた美須々から激しい怒気が溢れるが、私はそれを手で制した。

まだ戦う時ではないですよ。美須々。

それよりも今は楽しみなさいな、この物語の一幕を。

「総員突撃！敵軍を全て飲み干してしまえ！」

ああ良い声です。覇気が籠もりこの大陸中を蹂躪するかのような重き声。

きつと他の二人もこの声を聞こえずともその力に改めて彼女が自分たちの敵であると自覚したでしょう。英雄は英雄同士引かれ合うものです。スタンド使いみたいだね。

それにしても……。

思わずうつつとりする。

私は決して彼女の信望者では無い。むしろ嫌い、大嫌いです。

そもそも私は同性愛なんて非生産的なことは認めません。でも曹操以外の同性愛者は区別も差別もしません。

むしろ祝ってあげるくらいです。だって人にはそれぞれ生き方があ  
るしそもそも同性愛は自然界ではおかしなことではないのですから  
でも曹操の場合は認めない。

……… すいません、単純に曹操が嫌いなだけみたいです。

でもこれは違うんですよ。

そんな嫌いかか苦手とかそんなものでくくれるほどこれはつまらな  
いものではないですよ。

見ているだけで何だか胸が熱くなってくる。何かか込み上げてくる。



彼女から目が逸らせなくなる。

ようするに惹かれてしまふんですよ。人として彼女に。

どんなに嫌いだろうがどんなに殺意があろうが、彼女のカリスマにはそんな些細なものどうにでもなるのですよ。

だからこそ。

「ふふふ……」

私は不敵に笑う。

美須々と白蓮が怪訝な顔で私を見る。

だがそんなことどうでもいい……。きつと、いやそうに違いないのだろう。

私は曹操が羨ましいのだ。

彼女は私がどれだけ望んでも得られないものを与えられた。孫策も、劉備だってそうだ。

彼女達は英雄、私は凡人。

この差はもはや高すぎてその頂が永久に見えることはない。絶望的なくらい高すぎてもはや笑えてしまふぐらいだ。

……何故、なぜわたしはここまで小さな存在なのでしょうね。

彼女を見ていると如何に自分が小さな存在なのかがよく分かる。

自分の笑みが無意識につり上がるのを感じた。

この笑みは寂しさやわびしさ、苦悩や妬みなんて実にどうでも良い物ではない。

これはいずれか来るべき時への……。

いけませんね。自分という器を見誤っている。  
悪い癖です……。

「単経いいいいいいいいいい！！！」

ふと私の耳に雑多な声が侵入し犯してくるのを感じ取る。

この声は……うつつうしい、実に鬱陶しい。

思わず舌打ちを飛ばし、声の主へと視線を飛ばす。猪が驀進してこちらへと向かって来ている。

別に貴方が何をしようが構わない罪も無い民を虐殺しようが味方を敗北に導いて死なそうが、それこそ貴方が勝っても負けても構わない。

だが今はいけない。

この神話の絵画で目を輝かせてみとれてひたっている私の邪魔をすることはどうもいただけない。

「なっどうする！？華雄が突破してここまで」

ええ、解っています。実にゆゆしき事態です。  
私の気分が害されました。

白蓮の声を右手を挙げて遮り、制す。  
そして静かに目を瞑る。

「美須々」

我が右腕の名を呼ぶ

美須々は仮面の下から覗かせる口をまるで二日月のように歪める。  
八重歯が覗き、目を爛々と輝かせる様はまるで血に飢えた吸血鬼のよう。

事実、彼女はもう血が吸いたくてたまらないらしい。  
彼女自身気が付いていないようだが無意識に手に持つ棍を握りしめている。

「琉生」

我が左手の名を呼ぶ。

彼女はこの戦場をまるでつまらない盤上の将棋を見るかのように眺めている。美須々と反対にこの戦場に対して一切の興味が無いといわんばかりに。

だが私が呼ぶことでその目を引き絞られた弓のように鋭さを見せて、冷たい雪風が吹き荒れている。

この空間で波才達以外の全員が寒気を感じた。

目の前で戦っている英雄達とは違う何か、それをこの三人は持っている。

何より仮面でなく彼らの名を呼んだのだ。

その事に白蓮は焦りを見せ、波才を咎めようとしたがその顔を見て凍り付く。

あまりにも感情がない。笑ってはいるのだがその笑いこそがあまりにも「笑い」という壁を通り越し、さび付かせている。何もない笑いなのだ。人としてこんな笑いをうかべることが出来るのかと白蓮はゾツとする。

だが、止めなくてはいけない。

「単経、ここで華雄を殺して良いのか？」

その言葉に三人は白蓮へと振り向く。

「ここで華雄を殺して、私に利益があるのか？」

波才は頭が良い、本当に頭が良くて、魅力があって自分なんて本当は霞む存在だ。

他の三人だつて本来ならば自分の側にいるような人間ではない。それは白蓮自身よく理解している。自分がどれほどの力を持つ人間なのかなんて桃花と出会ってから痛いほど理解した。

私には特技もない、魅力もない。全てが普通で一般的で、誰も私を振り向きなどしない。

だが何故かこの波才は自分を立ててくれた。

本来ならそれまでのように影に隠れてしまう私を表にたたせる。だから私は彼が来てからは桃花や曹操のように表舞台に立ったかのようにならなければならない。いや、実際に立っているんだと思う。

この男は人の上に間違いなく立てる。私以上にその素質が在り、桃花や曹操と同じぐらいの魅力があるように私は感じる。

なのにこの男は自分を立たせる。何もかもが普通でつまらない私を立ててくれる。本来なら立て無いはずの舞台の上に。

だからこそ私は波才の主として見極めねばならない。

私は彼に立てられた。本来なら彼が立つはずの道の上に立たされて生きている。

誰もが馬鹿にする、お前では無理だと。お前では出来ないよ。

だが波才だけは馬鹿にしない。むしろ自分をなげうって私の側にいる。

今、私は怒っている。

ああ、どうしようもないぐらい怒っている。

その目に私を見ていないことなどとうの昔に知った。

波才はいつも私を見ているが見ていない。私を透してその先を見ている。

今まで私と接してきた人間も私の先を見ていた。星がその一人だ。彼女は私を認めてはいるが共に歩く主としては見てはいなかった。私に仕えているという過程で桃花に出会い、その魅力に気づいて去っていった。

だがこの男は私を見ている。見てはいるのだが、私自身を見てはいない。

親しく接してくれる。幽州を考えて、私を考えてくれる。だが、見てはいないのだ。

波才は私を何かの結論に行き着くまでの過程としか見てはいない。今の私を見ていない。

この男が私を見ずにその先を見ていることを知った。それを知ったとき私は泣きたくなった。自分を見てはいない、自分を立てて支えてくれるけれど私を見てはないのだ。

だから。

「なあ、単経。どうなんだ？」

私を見させる。

私は解らない、ここで華雄を殺して利益になるのかどうなのか。だが目の前の波才は確実に何か魅入っている。自分を立てて支えてくれる、少しでも私をとうして何かを見ていた目が今や全く別のものを見ている。

私は今の彼にとってどうでもいい存在なのだ。

そうどうでもいい存在らしい。

思わず頬がつり上がる。波才が人でない笑いをうかべるのなら私もそれをうかべている。今ならその理由が解る、どうしようもないぐらいに気に入らないのだ。どうしようもないくらいに気に入らないからこそ笑う。獰猛な笑みを、肉食獣の如き血に飢えた笑みを。

許さない。それを許さない。

私は今波才を見ている。波才も私を見ている。

お前は望んだ。私の配下であることを。私の命令に、私の思いにお前は答えるといった。ならば今お前は私に答えられるのか？私を見ずに他の何かに囚われているお前に私を見られるのか？

私を見る。波才……。

私は波才を見た。仮面の下に隠された彼の目を見た。

〈波才 side〉



私は今驚いている。

この目の前で私を睨み付けている主に曹操と孫策と劉備の面影を見た。

今や彼女に先ほどまでの優しさも焦りもない。直ぐ側に華雄軍が迫ってきているのにただ私を見ている。

その目に命の輝きが宿っていることに私は驚きを隠せない。

彼女の体から今溢れているもの、普通ではあり得ないもの。絶対に私が入る事が無いもの。

英雄が放つ気にそれはよく似ていた。

曹操が私と出会って発した。

孫策が私へ向けて放った。

劉備が私に握らせた。

特別で在る者が出せるもの。特別で英雄のみが出せるもの。それが今この白蓮から発せられている。

普通なのに。

彼女自身は変わっていない。あくまで普通、どこまでも普通。

歓喜に体が震えるのを感じた。

ああ、見誤った。見誤りましたよこんちくしょう。私はどうも馬鹿だったようです。

彼女は普通だ、『普通』であり英雄なのだ。

私は知っていたはずだ。彼女が自分とは違い特別で在ると。だが心のどこかで普通であると侮っていた。彼女の本質を見てなどいなかった。

ははは、自分は英雄などに仕えているのではなく公孫贄に仕えていると思っていたのに、その実は英雄に仕えているなどなんてお笑いぐさなのだ。

「美須々、琉生」

私は彼女達に命じる。

「適当にいなしてください。決着は洛陽で」

「……御意」

「……」

二人は静かに頷きかけていく。

私は白蓮へと向き直る。

その目はどこまでもまっすぐで、愚直に前を向いていて。でも、心配で不安で。本当に人間らしい人ですよ貴方は。だからこそ貴方と共にあることに悔いはない。

「貴方は、本当に私の主なんですな白蓮様」

「いつも通り呼べばいいさ『単経』」

互いに笑い会つ。

それは心からの笑い。

「お前が私を見るだけでいいんだよ。お前の今の主は少なくとも私なんだから」

「なんとも情けないお言葉で。まあその通りですけど」

「酷いなあ……って流石にのんびりもしてられないな」

今は曹操がまだ抑えているがあの様子ではそろそろ綻びが出来る。むしろ張遼と呂布をよくあそこでせき止めているものだ。華雄の一匹程度は逃してもしょうがない。

……いや、むしろあれは私達を巻き込もうとしているな。穴を作る

ことで一気に此方へと董卓軍が流れ込むようにやっている。

つまり手始めに華雄が来て上手い具合にそのえさに食いついた私達へ向けて大きな穴を作ること二人の董卓軍の虎が食らい付かんと迫ってくる。

なんて嫌なやつだ。

これをやっているのは相当人間としてひん曲がっている奴に違いない。

「ええ、全軍包み込むように一番隊、二番隊は華雄方面で引きつけ、三、四は左から。五、六は右から行きます。途中助けに他の将が来ますがあえてぬけさせますよう。敵も痛手を受けているようなのでここで無理に決めようとは思わないでしょうから」

「……本隊は？」

「威圧だけして頂ければ結構です。むしろ下手にやると敵が本気でかかってきますよ？窮鼠猫を囓むってやつです。ここは曹操に大部分の衝突は任せて補助に回りましょう」

「わかった」

指示を兵に出す白蓮を見て私は決意する。

いいですよ。白蓮。

私は貴方を見ます。貴方の物語ではなく貴方を見ることを誓います。

だから、

「ん？どうかしたのか？」

「いえ、貴方らしく生きて欲しいなと」

「…………熱でもあるのか？それとも悪い物でも食べたのか？何か悩みがあるのか？」

「……………」

おおきくふりかぶってスライダーの如き拳をたたき込み白蓮を落馬させた。

ちょっと優しさを向けてたらこれだ。

私は目を回す白蓮を睨み付ける。何ともまぬけな顔。さっきの姿が嘘のように思えてしまう。

…………でも、この顔に私は見惚れたんですね。そう思って仮面の下で私は密かに笑った。

ちなみに白蓮は泡を吹いていた。



この二人は多くの英雄達と殺し合ってきた人間だ。黄巾党という敗北者の集まりを磨き上げ、曹操に認められるほどの将の才と実力を兼ね備えている。

決して華雄は彼らに劣っているわけでは無い。だが彼女達は二人、華雄は一人。

いかなる武人でも同等の実力を持つ物二人と戦うなど苦戦は必須。

さらに彼女達は即席のチームワークではない。何度も黄巾時代に互いを錬磨しその型や武や癖などは互いに把握している。

だからこそ彼女達はまるで一人の武人のように華雄へと連携して攻撃をたたき込む。

この時になって華雄はようやく頭が冷え始めていた。

どう考えても勝てる要素がない。

今の自分では勝てるどころか逃げ出すことも出来ず、ここままでは確実に負ける。

負けるということは死ぬということだ。

そうなれば……あの男に、単経に我が一撃をたたき込むことも叶わぬではないか!!

思わず歯が砕けんばかりに噛み締める。

「はあああ!!」

華雄は敵の将の片割れに隙が出来たのを見てそこへ己が得物をたた

き込む、だが。

「かかりましたね」

「……」

それは作られた隙であった。

その片割れの将、琉生はもう一つの剣をすばやく鞘からからぬき放つと華雄の武器『金剛爆斧』を大きく逸らさせて大地へとぶつける。これに華雄はその体を流されることになる。

「しまっ!?!」

「殺しはしません、殺さないだけです」

驚きの声を上げる華雄に美須々の棍、『森羅』が襲いかかる。

それは吸い込まれるように華雄の首へと吸い込まれる、かに思えた。

美須々はとつさにその場を飛び退った。

間髪を入れずに美須々がいた位置へと偃月刀が突き刺さる。

少しでも反応が遅ければその身を貫かれて間違いなく死んでいた。

さらにそれに目を奪われた琉生の下へと刃が迫る。

とつさに琉生はそれを両手の剣で受けることによって吹き飛ばされたが、もしこれを一つの剣だけで受け止めようなどと考えていたのなら受け止めきれずに無様に大地を転がっていただろう。



「あーっ！ やっとおった！ この、どあほう！ とっくと帰るで！」

「……………」

新たに現れた二人の猛将に美須々と琉生は静かに間合いを計る。

だが紫の髪を持つ女性、張遼はそんな二人を警戒しつつ華雄を羽交い締めにする。

一見無防備のように思わせるこの行為。

美須々と琉生は彼女達へ手を出せない。

もう一人の将、呂布が牽制するかのように味方の前に進み出て二人を睨み付けているからだ。

その実力を先ほどの一撃と動きで理解しているので二人はうかつに動けない、動くことを許されない。

「張遼！ 離せ、私はまだ戦える……………っ！」

「どんだけアホ晒しやあ気いすむねん！ せめてそついう事は、虎牢関の上からにとき！」

「はーなーせー！」

「撤退や！ 撤退！ 虎牢関に戻れば、まだ十分戦えるわ！ 皆もはよ戻り！」

「だがあいつらがまだ……！」

そう言つて美須々や琉生に向けて指を差す華雄だが。

「あゝ行つて構いません。貴方達三人を相手にするのは骨が折れるでしょうから（それにもともとそのつもりでしたからね）」

「……」（ツス）

二人は張遼と華雄の漫才により毒気を完全に抜かれていた。美須々はやけに疲れた顔をしているし、琉生もその目を見れば解るが相応今の二人の漫才で気が抜けたようだ。

これが張遼の作戦ならまだ格好がつくのだが……本当にやっているのだから気が抜けるというものだ。もとより追い払う程度で構わないと言われていたのだからここで退いてもらえるのは嬉しい限り。

それに。

二人の視線は呂布へと向けられる。

もし華雄では無く呂布ならば二人で相手をしても勝てたどうか解らない。少なくともあのよう琉生が油断していたとは言え吹き飛ばされる鋭い一撃、その動作。どれをとつても華雄とは比較にもならない。

張遼もやはり実力者であることに違いはない。先ほどの漫才の最中

でさえ私達の動きを観察し、いつでも迎え撃つことを想定していた。その一見隙だらけに思わせる隙の無さは中々の物。

この二人は相当骨が折れるだろうと美須々と琉生は判断した。

「ま、このまま行けばどうせ洛陽でも出会つのでしょう？ねえ……  
そこの貴方」

そう言つて美須々は扇情的で攻撃的な視線を張遼へと向ける。

「ん？うちかいな」

「ええ……先ほど私に向かって槍を投げた貴方です。名を聞かせてもらつても？」

「張遼や。そういうあんたはどうなんや？」

「まあ、神速の。私は……名乗れないんですがね。仮面の名前で翁とでもお呼びください。にしても張遼とはそれはそれは」

そう言つて美須々は口を歪ませた。

その姿を見て張遼も同じく顔を好戦的に歪ませる。

「さぞや楽しい殺し合いが出来るのでしょうね。いいですか張遼、私以外のつまらない雑魚共にその首を奪われないことを願つており

ますからね」

「弱い奴ほど良く咆えるっていつやないか。翁のことちやうか？」

「くすくす……洛陽で楽しみにしておりますよ。琉生、行きますよ。主がまつているでしょうから」

そう言つて美須々は琉生を促して背を向ける。

「あゝ張遼」

だが途中で立ち止まると馬に乗り込む董卓軍の将達に向けて声を発する。

「なんや？まだ咆えたりないんか？」

「ふふ、その時を楽しみにしています。……早く、洛陽に向かつては？」

「そう言えばさつきから洛陽洛陽……まだ虎牢関は落ちてはいな」

「……霞」

嘲りの笑みを浮かべて美須々を一笑に切り捨てようとした張遼であったが呂布に遮られる。邪魔されたという不満の表情を隠す事無く

彼女は呂布へ向けて声を荒げた。

「いま取り込み中や！」

「……ねねから連絡」

「何や。手短にな」

連絡役の兵士が前へ進み出ると額に汗を浮かべて報告を開始する。始めはいらつきを隠せない張遼だったのだがその報告に驚愕させられる。

「報告です！さきほど賈馱さまより連絡があり、非常事態あり。虎牢関を放棄し、至急戻られたしとのこと！」

「なんやて……！？誤報とちゃうんやろな」

「印は董卓さまのものだったそうです。陳宮様さまは既に撤収の準備を始めておいでです！」

「十常侍のヒヒジイどもめ……。都に誰も残しとらんかったのは失敗やったか。詠のアホ、ぜんぜん大丈夫やないや……。え？」

ここで思わず彼女は目を見開く。

先ほどであった仮面の女……。翁と名乗ったか？

『ふふ、その時を楽しみにしています。……早く、洛陽に向かつては？』

自信に満ちた何かを知っているような口ぶり、洛陽に向かう？それはまるでこの事態を。

その違和感に気が付いた彼女は美須々へと視線を移そうとするが、既にその場には誰もいなかった。

「……霞」

「っちい、今は後や！それより恋どないしたんや！？」

「……関に人」

え？と思い虎牢関を振り向けばそこには。

「人って……ちよっ！やばいっ！あの軍、劉備のどこか！奴らに突入されたら、ウチら帰るところがなくなるで！」

そう、劉備にが虎牢関に攻め込んでいる。それも既に虎牢関に味方の兵がないために押され始めている。もしここで落とされては逃げ道はなくなり、洛陽へ向かうことも出来なくなってしまう。そうなってしまうては洛陽の月の身が！？

「……先に行く」

流石の呂布にも焦りが見える。とはいっても親しい身である仲間で見えないような些細な違いなのだが、あの呂布が慌てているのだ。

彼女とて都の家族が心配でたまらないのだろう。

「任せた！ほら、華雄もさっさと戻る！」

「う、うう……」

華雄を引きずりつつ彼女は考える。

あいつらは何者だ？少なくとも何かある事は間違いない。

駄目だ、考えれば考えるほど頭がごちゃごちゃにかき回される。

「ええいもう！いったい何が起きているんや！」

「おおつ、どうやら虎牢関は無入なのですか？」

「っは……」

「何かの罠か？」

その翌日、忍びからの報告により虎牢関が無入であることを知らされた。  
まあ何も知らないのは白蓮がそうというのは仕方がない。

「……なあ。単経、お前何か知ってるのか？」

うんうん、知りたいのですか、ならば教えてやっても……。

「……やっぱりいい」



そう言っつて白蓮は立ち上がると陣幕の外へと向かっつていく。  
え？あの、その？

「聞かなくていいので？今の貴方なら教えて上げますよ？」

「昔の私は駄目だったのかよ……」

そう言っつてため息をつく。

だが彼女は一転してにこっつと笑っつて私を見てきた。

「お前は私のために動いてくれているんだろ？私はお前を信じているからな」

正直います。

私はこの時の彼女はあまりにも魅力的で。  
うかつにも彼女に……白蓮に

みとれてしまった。

）天和 side

「!？」

「ん？どうしたの天和姉さん」

「……地和ちゃん、人和ちゃん」

「「？」」

「私、幽州に行く」

その言葉に地和と人和は驚き姉を止めに入ろうとする。  
だが彼女のその表情に固まり動けなくなる。

「波才さんに悪い虫がついたかもしれない」

この時の天和は不気味なほど良い笑みを浮かべていたと後に妹二人は語った。

## 第二十九話 虎はいずこへと（後書き）

そう言えば最近、ニコニコの方でモチベアップのために無料のweb恋姫始めました。

四サーバの呉にて活動しているんですが……あれだ。

呉はすごいゆっくりしてってね！、状態です。

のんびりやってます。なんか蜀に飲み込まれそうだけれど気にしない。金髪ドリル（頭が良い方）が領土掘りに来ているけど気にしない。

興味があり、ものすごい劣勢な状況が好きなマゾのお方は、ぜひ呉へとお越しください。作者はややMだと信じたい。

<http://app.nicovideo.jp/app/a>  
p51

SSの方はのんびりと書いております。最近は余裕が出来て嬉しい。調子が良いので漢女の聖杯戦争も更新しておきます。

第三十話 僕達には英雄がない。(前書き)

偉大になるということは、誤解されるということだ。

くラルフ・ウォルドー・エマーソンく

### 第三十話 僕達には英雄がない。

「公孫贇ってさん付けすると『公孫贇さん』ですよ？それ太陽みたいな感じ何でこれから公孫ダーズベイダーに名前変えてくれませんか？」

「なんか息が苦しそうだし夏場暑苦しそうな名前だから遠慮させてもらおう」

「じゃあ公孫スカイウォーカーで。『選ばれしものだったのになあ』と言ってみたい」

「なんでちよつとしんみりしているんだ？あとお前が私の事嫌いなのはよく解った。で、どうするんだ？もう何日も洛陽を攻めつぱなしだぞ？」

白蓮の言う通り、現在戦線は膠着状態にあった。

この洛陽に撤退した董卓軍だが既に閉じこもって何日も経過している。袁紹と袁術のダブル馬鹿、じゃなくて脳みそが欠落というか、そもそも詰まっていたのかすら危うい二人が中心に攻城してはいるが攻めきれない。

事実ここを落とされれば終わりなのだ。

流石に華雄も出撃などという愚行は二度と犯さず……犯していた。三度と犯さず……犯しすぎだと思う。

まあともかく敵も必死なのは間違いない。

明埜との連絡も取れないが大方予想通りだろう。わざわざ洛陽に退

いたとうことは策はなつたという事に違いあるまい。

唯一、波才が気にしていたことは遷都する可能性であった。史実で董卓が行った焦土作戦。あれが実際に行われれば、おそらく演技通りの展開になつたであろう。しかし董卓に限ってそれはないと、波才はある程度に目星をつけていた。

彼女、董卓は優しすぎるからだ。

ここの民を見捨てられない、もし見捨てられるなら宦官とあんな対立の仕方なんぞしないだろうに。

馬鹿だと笑うことは容易いが……いかんせん、波才には笑えないことだ。彼女の物語にはまったくもって興味のかけらもない。それでもその生き方には畏敬の念を抱いていたからだ。

だが正しい事ばかりではこの世の中を生き抜けない。

なんともはや、正しい事より正しくないことをなす方が生きられるなどこの世はなんと残酷なことが。きつとこの世界を作り上げた神は面白半分で作つたのだろうに。そう波才は苦笑する。

明埜は神の存在を否定するが波才は信じていた。こんなにも悪意がある世界いなのだ、あまりにも歪みすぎて作為的なものしか感じない。恐らくはその根源に私は神がいるのだろうと。

「（……にしても董卓がいいやつねえ。私の想像では演技基準だからとんでもない豚か、『女帝』って言葉が似合うような董卓を想像していたのですが）」

どうも演技や史実の『董卓』の印象が強すぎたのか、いまいち『優しい董卓』が想像できない。少なくとも戦う敵が自分にとって嫌な奴なら遠慮なく殺せたであろうに。

世の中正義の反対は悪じゃなくて正義、みたいなこともあるから複雑なのだ。勇者と魔王のように二極化されていたら解りやすくてやりやすいものを。

「とはいえ……この状況は果てしなくめんどいですねえ。なんせ向こうは待ってるだけで勝手にこっちが崩れてくんですから」

「そうだよなあ」

なんせ反董卓連合のチームワークは凄い。

「ジエットストリームアタックを仕掛ける!!」

「解った!!じゃあ夕飯はそばにしよう!!」

「さて、ここは神に祈るんだ!!」

「そんなことよりカバディしよう!!」

「ちよつと待て!!?何で四人いる!??」

というぐらいのチームワークだ。

ぶっっちゃけ順調にいかねば本拠地まで追い詰めたとしても、容易に崩壊してしまう連合なのだ。

もうぐだぐだ過ぎて笑いすらおきない。波才からすれば旬が過ぎた一発芸人を見ている気分だ。実にやるせない、しかも本人達が無駄にがんばるので更にやるせない。



「それでどうする？」

「……そうですねえ。あ、そうだ」

波才は名案とばかりに手をぽんと叩く。

「白蓮が洛陽の前で踊るのはどうでしょう？」

「……一応聞いておく。どんな効果が見込める？」

「洛陽のMPが吸い取れます。あと私が大笑い出来ます」

「お前やっぱり私の事嫌いだろ！？」

「ははは」と笑って明後日の方向を向く波才。  
それを見た白蓮は大きなため息をついて頬杖をつく。

「まったく……お前他の軍でそんなこと言ったら間違いなく首をはねられるぞ？」

「でしょうねえ。流石に何で自分の首が今も胴体と離婚調停結んでいないのか不思議でなりません」

ますます疲れたように白蓮はため息を吐く。今この連合で間違いな

く一番の苦勞人は彼女であろう。なんせこんな性根が腐っている家臣を飼い慣らしているのだ。

「まあ私は白蓮になら正直この首あげても良いと思っっていますよ」

その言葉に驚いたように私に振り向く白蓮に波才は心からの満円の笑みを浮かべた。すると彼女はぱつと目を逸らす。心なしか顔が赤い。流石にからかいすぎたかと波才は苦笑いを浮かべ、椅子に体を預けた。

「さて、ここらで真面目にやりますかね」

「え？あ、ああ。そうだな、うん、そうしよう」

「さて、気を取り直して献策させていただきます」

↳ side 波才↳

私は顔を引き締めて彼女を見つめる。まだ頬が微かに上気しているが……支障はないはずだ。現に彼女も何故かいつも以上に私を真剣に見ている。

………というか見つめすぎて怖い。なんだこの殺気は？  
早く話しましょう。

「特に具体的な行動を取る必要はありません、また私達が策を連合に述べる必要性もありません」

「……は？」

この言葉は予想外だったのか惚けて彼女は口を開ける。

「正気か？このままだと間違いなく連合は瓦解するぞ？」

「これが私達だけの戦なら即座に動かなくてはなりません。ですが今は連合という形態を取っている。つまり下手をすれば普通は得られないような情報を彼らに掴まれてしまいます。現に私もいくつか掴んでいますからね」

劉備と孫策の同盟に関する事、袁術が皇帝を目指している事、曹操と劉備が史実とは違い漢王朝を利用する兆しがない事、軍の編成状態及び訓練状況、軍の主要人物と相互関係、戦い方による性格と戦法、現在の軍備の状態。

これらよりこれから先の大陸での進行状況を見極める素材として調理を開始するのだ。料理人によってどう調理するかは試行錯誤しているがおおよその先は見えてくる。

特に今は袁紹と曹操が重要だ。袁紹と曹操のおおよその軍全体の方向性と性格が把握できたがこれより先にどんな人材が入るかによつ

て大きく変わってしまった。食材は新鮮なものを即座に手に入れて調理する必要がある。

「……何もしないと？」

「そうではありません、何かするでしょうからそれに乗っかって利用しようとは私は考えています。今のところ劉備と曹操辺りが何かを思い付いたときは始めるでしょうから」

劉備は最初の？水関での行動力から動かないなどと言うことは絶対はない。最初の戦いで降軍備もあまり消耗していないために何らかしらの行動を起こす可能性がある。

曹操もそれは同じだ。こんな状況が続くなど私達と同じく前線に位置するからには望むはずもない。

必ずや何らかしらの行動を起こす。

何より彼女はそろそろ大きな、劇的な勝利が欲しいはずだ。

最初の戦いでは関に一番乗りの素振りを見せるものの結局は孫策と劉備に持って行かれている。二回目の虎牢関も敵は撃破するが呂布に阻まれて落とすには至らなかった。

これに関しては劉備も同じ。聞けば私達が奮闘している隙に虎牢関を攻め落とそうとしたが呂布に阻まれて失敗。なんでも関羽と張飛が揃っても呂布を止められなかったらしい。

……どんな化け物だ呂布は。

だがこのおかげでずいぶん展開が読めるようになったのは間違い

ない。

なんせ無理に攻めても落とせないのだと解ったのだから。現に今洛陽は落とせる気配が無い、仮に無理攻めしようともお抱えの看板達が束でかかって勝てないと劉備は理解したはずだ。それに彼女は確実に仲間を大切にするタイプの人間。仲間を失う危険が多い賭けにベツトするはずがない。

そして曹操にもこのことは耳に入っただ。無駄に間諜が多いのだから、知らないわけがない。

彼女は関羽に入れ込んでいる。この連合中にも押しかけて勧誘したらしい。

つまり実力は認めていて彼女が側に置くに相応しい武があると理解している。そんな関羽が張飛と立ち向かって勝てない武人だ。

彼女も無理攻めなんぞはしない。

ここまで結局話していて何を言いたいのかと言えば、持久策を取ると言うことだ。間違いなく。

無理にかかっても勝てないなら敵を弱らせればいい。

穴に潜む虎へ自らの手を入れる必要は無い、火の煙でいぶりだして弓矢で針の山にしてやればいい。

そのためには軍全体で方針を固める必要がある。だから彼女達は必ず全体の軍議で指針を示すのだ。

ようはそれに乗っかるうという話

……え？孫策？

彼女は動けない。もし彼女が独立勢力ならば考えてもいいだろうが、生憎彼女の現状は猿の子飼いです。

先の戦で戦果は上々、それほど問題もないはずだ。

これを話したものの白蓮は納得がいかないと顔を歪める。  
どこか駄目なところあったんだらうか？

首を傾げる私に彼女は若干きつい言葉使いで言い放った。

「単経、お前が言うことも理解出来た。だが一つ聞きたい。お前は洛陽攻略の策を既に思い付いているんじゃないか？」

私はその言葉に間を置かずにこくりと頷く。

白蓮はますます顔を歪めた。

何故だらうか？そう思っていると。

「何故、私達が待たなくてはいけないんだ？」

……ああ、そういうことか。

「恐らくお前はその答えが既に出ているだろ？多分この洛陽を攻め始めたときには既にでてたんじゃないか？」

「お解りでしたか？」

「仮にもお前は私の配下だらう？いい加減お前という人間も解って

きたつもりだ」

「……それって採用したこと後悔していませんか？」

「……流石にここまで性格と人間性が歪んでるとは思ってたよ」

むむむ、白蓮も言うようになったね。

一体誰の影響やら……昔の純情だった白蓮を返せ！！

「いや、多分お前のせいだと思うんだが……」

あーあー何も聞こえない。

「まあいいよ。お前がそうやって話を逸らして私が気負うことがないように気にかけてくれるのは解るからな。でも今回はそれは不要だ単経」

「……本当にかわいくないご主君になっちゃいましたね」

「ほっとけ」

本当……かわいくないですね。私達。

そう思ってた私と白蓮は互いに笑う。

本音を言うところまで成長するとは思わなかった。成長しても普通

と言つのは笑えるが。

「納得できませんか？」

「ああ、悪いが出来ない。策があるのにそれを使わないことで死んだ民がいるからな」

本当、貴方はまっすぐ。  
まっすぐだけれど、前を向いて行きたいのだけれども自分はそんな生き方が出来ないのを彼女は知っている。

だから今彼女は泣きそうな顔をしているのだ。  
どうしようもく悔しくて、悲しくて。でもそれでいいんですよ、そうじゃなかったら私は貴方に仕えてなどいないのですから。

「でも、仕方がないんだな」

「ええ。理由を言いましょうか？貴方にはきついかもしれませんが」  
「頼む、せめて死んでいった者達への言い訳をしたい」

自分を偽らずそういえるのにどれだけの勇気があるのか……私には無理ですよ。白蓮、貴方は誇って良いです。この私が貴方を英雄と認めます。

だからこそここで言わないのは彼女への侮辱になる。彼女の物語に



『偽り』など必要が無いのは目を見れば解る。

私は息を吸い込み、口を開いた。

「曹操や劉備、孫策の軍が言うことと私達が発言するでは重さが違います」

「重さ……か」

「既に彼女達は抜きん出ておりその策を示すのはむしろ当然のこと。なんせ今や誰もが彼女達の力を知り認めている。そんな人間がこの均衡を破る策を示せば驚けど」「ああ、やはりこいつらは凄い」と納得はつきます」

でも、と私は彼女を見る。

「私達は、どうですかね」

私達は彼らに比べて一番の弱者だ。この連合で最弱を名乗っても過言ではないのだ。だがそれは一般大衆が噂すればいいこと。内心彼女達はいい加減私達に気がつき始めている。

当初、曹操の間諜が思いの他優秀であったのだ。そのため公孫贇軍の深部に辿り着く者達が多かった。ある程度であれば不審に思われるためにえさをばらまき、帰らせるつもりであった。しかし深部に

辿り着いた彼らを帰すわけにはいかない。

結果として初期の段階で多くの曹操の優秀な間諜を処分せざるを得なかったのだ。

その後なんとか無事に隠す事に成功し、少人数しかたどり着けなくなった。ある程度のおやつ程度の情報を掴ませ、曹操の下へと帰らせられるように調整をしたのだ。

だが最初の処分した間諜の数はいくら何でもごまかしきれない。

……これら一連の行動を、曹操にばれている可能性もなくはない。

私達は自らの反意を義憤を生かすために鋭き牙を自ら折り、去勢した犬だ。

ただ奥に残した一つの牙で全てを制するために堪え忍んできた。だがそれもここで露見したら台無しになってしまう。今まで隠していた分の反動が大きく、多くの目が私達を観察し見破ろうとする。

「ここで何かしら行動を起こせば私達を見る目が変わる。もしかしたら優秀な人材も来るかもしれないだろう」

「そうかもしれませんがね。でもね、厳しいことをいいますが貴方には集まりませんよ」

その言葉に彼女の体は一度大きく震えた。

「いえ、言い方が悪かったですかね集まりはする。でも定着はしな

い

「何故だ？」

私は今さぞや酷い顔をしているだろう。

何故なら私は嗤っているのですから。嗜虐的な嗤いを浮かべて彼女に言葉を投げかけている。

自分でも何故嗤っているのかは解らない。

でも同時に泣いている自分もいるような気がした。何故だろう。何故、私はいつからこんなにも壊れてしまったのか。

「定着するための大樹である貴方自身に魅力がないからだ」

「……」

「この時代の英雄には夢がある。この世界の英雄には夢がある。誰もが純粹にそれを追い求めて正道を歩んでいく。彼らは軍を見ず人を見る。彼女達は自らが仕えるに値するか、その命を賭すに値するか、自らの野望を望めるかを」

椅子に深くおろしていた腰を上げて前のめりになりつつ白蓮の目を見つめる。彼女もまた私の目を見ている。

「白蓮、貴方は魅力がありますか？力がありますか？飢えた英雄達に自らの血肉を与えて肥やせる英雄の英雄足るものを持っています」

か？曹操、劉備、孫策に勝てますか？」

「……ないな。それがないから星は私の下から去っていった」

揺れぬはずがない言葉の槍衾に、囲まれた彼女は目を逸らさない。彼女は普通であるが故にこの言葉に耐えられない。内に隠した傷はどれほどのものか……。

私ですら自らが特別では無いと知ったときに死にたくなった。誰も特別を望む、誰もが英雄になりたがる。

だが人はいずれ気が付くのだ。なれないと。

人としての自分としての限界に気が付いてしまう。

なれぬと知ったとき、人は諦めて魅力を失う。物語を失う。

「確かに我々の下に人は集うはず、ですが我々が求むは英雄です。ただの兵などいくら集まれど呂布が黄巾兵を蹂躪したように変わリませんよ？……まあ英雄がいなくても勝てる方法がありますけどね」

「……大方、私が認められないものだろ？」

「ですね、毒矢などの暗殺。内部攪乱や風評による民の先導。とことん毒を喰らうとこまで喰らう作戦ですね。正道が大好きな方々には効果的ですよ？まあ私も白蓮も納得できないでしょうからしないですけど」

そんなもの見たくもない。例えるなら三国無双で出陣する前に毒を

飲ませられたり、内乱で出陣出来ないなどの新コマンド搭載とかそんな感じ。  
なんかすつきりしないですね。

「私達は彼らと同じように真似事をしたり普通にやったのではまず勝てないですよ。人も義も天も志も手に入れている彼女達に対して、私達はやっとそれらを手に入れようとしている最中なのですから」

このままでは曹操や劉備や孫策とかいつている前にまず袁紹に負けてしまう。

豊かで漢の伝統を紡いできた向こうの土地に対して、今まで異民族に奮闘してきた田舎だ。  
精々どんなにがんばっても東京VS仙台ぐらいの差がある。

幸い向こうは馬鹿が王座についているからいいもの……。

「今はただ潜み、耐え、雄飛の時を夢見るのですよ」

あゝ疲れました。我ながらよく噛みませんでしたよ。  
そう思って用意されている水を口に含んだ。咽が小さく上下する。

……まあいろいろ言ったけどあれですね。

「決めるのは白蓮です。もしかしたら私は間違っているかもしれないな

い。この世界で私のようにただ堪え忍ぶだけでは報われないかもしれない。貴方の考えている方が正しいかもしれない」

椅子に寄りかかって背もたれに身を預ける。乾燥した木が軋む嫌な音が無音の空間に響き渡る。

「御主君、貴方が決めてください。先人たる王は多くの意見を聞き判断して滅び、名を残してきたのです」

事実この三国志でも呉で二張と呼ばれ、孫策に孫権を任された能力が高い人物である重臣張昭は赤壁の戦いで降伏を進言している。対して周瑜の抗戦意見を孫権は採用し呉を存続させた。

二人とも優秀な人物だ。君主にはその判断力が問われる。ぶっちゃければどんなに能力がなろうと判断力さえあれば配下の将の意見を採用して国を豊かにすることが可能なのだ。

別に私は自分を優秀だとは思ってはいない。あんな化け物軍師共に並ぼうなどというおこがましい雑念はとうの昔に切り捨てた。だがそれでもここで目立つのは不味い。一応考えているつたない策が台無しになる。

「お前の言うことは解った。でもわざと侮られてどうするつもりだ？」

「……一応、『二虎競食の計』を考えています」

「どうやら白蓮は理解したらしい。  
あれ、なんか能力上がってない？」

「……やはり乱世は終わらないんだな」

「終わってくれたら私も帰れるんですけどねえ」

お互いに深いため息をつく。

これが終わったら私達公孫贛軍の相手は袁紹以外にあり得ない。恐らくそう遠くない未来に彼女は攻め込んでくるはずだ。

あの国力相手に真面目に立ち回るなど馬鹿げている。今は相手にとって都合がいい存在であり、従順な姿を見せればいい。こちらは従属するような態度を見せて袁紹軍を支援、媚びるように手紙や貢ぎ物を送り目を曹操に向けさせる。そのまま争わせ、互いの国力を減退。もしくは隙を見せた袁紹の背後を攻める。

曹操は理解でき、見破るだろうが袁紹は見破れない。  
仮に袁紹背後より攻めた場合、官渡から襲撃地点まで退くことは袁紹軍にとって難しく曹操軍の追撃にあうだろう。逆に曹操軍も袁紹との戦いにより得た領土は少なく、投資した資産の方が大きい。つまり国力が著しく落ちる。

これぞ『二虎競食の計』。

だが、これには将の獲得が必須だ。

これは迅速に行わなければ曹操からの停戦要求が袁紹と行われる可能性がある。袁紹はこれを結ばないわけにはいかず、曹操はこれ以上兵を減らしたくないはず。私達はそうした場合手に入れたばかりの領土と共に戦うことになる。確実に勝てるかもしれないが疲弊する。

そうなれば勝ったとしても私達の戦を観戦しながら国力を回復させた曹操軍に攻められ、たやすく打ち破られるだろう。その為に一回の戦闘で袁紹が持つ都市の大半を制覇、及び大多数の戦力を削る必要があります。

ですがこれには公孫贇軍人材が足りなさすぎる。それにこれが成功しても曹操と戦う事は必須ですからねえ。

どう考えても優秀な将がいるのだ。ウチの美須々と琉生だけでは不安がぬぐえない。

「解った、お前の案を採用する。にしても」

そう言うと彼女もまた椅子にもたれかかる。いつの間にか彼女は笑っていた。

「そうかあ……悔しいなあ。情けないなあ」

この言葉に思わず胸が締め付けられる。僅か二つの『悔しい』、『情けない』に彼女はどれだけの思いを込めたのだろう。



白蓮とて努力をしなかったわけではない。それこそ太守になるぐらいに死にもものぐるいで努力をしたはずだ。なのに気が付けば自分より劣っていたはずの劉備に抜かれており、勝てないと宣言されている。

努力をし続け、血を吐いてまで手を伸ばしたのに彼女は負けているのだ。決して日々の修練を怠ったのでは無かるうに。

「……貴方は貴方らしく生きて頂ければいいのですよ」

私もまた同じか……いや、諦めたから彼女の勝ちか。

敗者から遅れる言葉などたかがしれているが……それでも言わせて欲しい。

「貴方は公孫贇なんですから。他の誰でもないんですから貴方だけの物語を紡いでください」

彼女は私を見ずに、ただ一言返した。

「ああ、そうだな」

それから数日後、連合に参加している全諸侯を集めた軍議が開かれる。

そこで開口一番に曹操が提案した策に周りは沸いていた。

「……攻め続ける？どういう事だ？」

私好みのポニーテールをした馬超が首を捻らせる。

「うわ……えげつないですねえ……」

「張勳、どういう事なのじゃ！妾にも解るよう、説明してたも！」

張勳が口を引きつらせて恐る恐るといったようにそう漏らした。

だがその主君である袁術は理解が出来なかったのか彼女の服をつまんでひっぱり彼女に問いかける。

盟主である袁紹は「間断なくとつくにせめておりますわ！！」とか言っ  
て皆さんから微妙な目で見られていますね。

一回辞書で間断の意味を引いてきたらいいかと。

曹操は鼻で笑って得意げに説明し出す。

「簡単な事よ。今の散発的な城攻めの方法を変えて……そうね、一日を六等分にでもしましうか」

その言葉に興味を引かれたのかいやにちみっこい蜀陣営の女の子が身を乗り出す。

「そうして、一つの隊が六分の一ずつ攻め続けるという事ですか？」

「そうよ」

「一日の六分の一しか攻めないようでは、いつまで経っても城なんか陥ちませんわ！」

「麗羽の言う通りなのじゃ！残りを昼寝されたらたまらんぞ！」

……。

え？

思わず今のは聞き間違いかと思いき周りの皆さんの様子を見る。

「……………」 あからさまに馬鹿を見る目をしている曹操

「……………」いつか絶対独立してやると最決心を固めたような目をしている孫策。

「……………」開いた口がふさがらないといわんばかりのちみっこい軍師

「……………」なんかもう駄目なやつを見るような目な馬超

その後、無事張勳の教えにより馬鹿二人は理解したようです。そんな一日に一体ずつ攻めるわけないでしょうに。みんなが感心する中、うちの君主様はどうも良くない顔をしてらっしゃる。

「……………」公孫賛、私の策に何か不備があったかしら？」

「いや、驚いて声も出なかったと言っただけだよ」

「……………」そっついうことにおきましょっか」

……………ああ、この空気は嫌だ。なんていうか女の子同士の腹の探り合いは肌寒くなるものがある。

その軍議の帰り道。

「……単経」

振り返った彼女は硬い表情だった。

「この戦い、勝つぞ」

言いたいことはたくさんあるだろうに。しかし、結局の所はこれだ。勝つのだ、勝つしかない。勝たなければ意味がない。ならば勝てばいいのだ。幸いにも目の前の連中は正道しか歩めない連中。しからば、こちらは下の下の策を取ればいい。剣の達人にマシガンをつつ放す、まあこれくらいでなければ。

「ええ、我らの勝利を掴みましょうぞ」

波才は嗤い、白蓮は笑った。

第三十話 僕達には英雄がない。(後書き)

先日、母と何の因果かゲーセンに行きました。

そんで母親がしていたのが某豆腐屋のカーゲーム。そこでの母の言葉。

「っちょよ！？母さんブレーキブレーキ」

「ブレーキなんてない！！」

それで良いのか元教職員。

どうもこんばんわ、いろいろと不安な味の素です。風邪ひいて更新ちょっと遅れました。みなさんも風邪にはお気をつけください。

……そう言えば、うちのお母さん高校に私を送ってもらった帰りに事故ってた事ありました。しかもうちの学校の先生と。

クラスの友達に「お前の母さん事故ってるぞ」って朝一番に言われた時にはマジ冗談だと思った。

第三十一話 将星乱舞（前書き）

君の書いた原稿は優れているし、独創的だ。だが、優れている部分は独創的でないし、独創的な部分は優れていない。

く サミュエル・ジョンソン く



### 第三十一話 将星乱舞

「……あかな」

目の前に広がる自軍の姿を見て張遼は無意識のうちに呟いた。

ここ連日、連合軍は以前とは全く異なる戦い方を行っていた。

始めはいつもよりもしつこいほどに攻めてくると疑念を持ったがその攻城が夜にまで及んだ時、ようやくその意図に気が付けた。

敵の軍の旗が入れ替わり交代し攻め立てている。

始めは劉備だった旗がいつの間にか曹操、公孫賛と入れ替わりに攻城を行ってくる。

敵の攻城はやむ気配が無い、一方此方軍は日夜戦い続け疲労が積み重なり徐々にだが押され始めていた。

この時やつとうちらは分かったんや。向こうは大軍であり連合という形態であり、複数の勢力で同時に攻めるよりもそれぞれ個々の軍で動いた方が効率がよい。

なおかつ誰かの軍が攻めているときは休むことが出来る。

つまり絶え間なく続くこの攻城はこの先も途絶えることはない。

それを理解したときのうちの行動は早かった。

賈馱が即座に複数に軍を分割。此方も向こうと同じ体勢を整えた。

耐えきれば勝てる戦だった。連合という形態でも間諜によればうまく機能していない。いずれ仲間割れを起こし自分の家をほっとくわけにもいかずこのこと帰って行くそう思っていた。

だが箱を開ければどうだ。

見回す兵は誰もが疲れきり、徐々に負傷者、死傷者が増え始めている。

徐々には言っているがいずれ限界が来れば爆発的に増えるのを目が見えていることだ。

董卓軍は連合と同じ戦術をとつても勝てはしない。

何故なら此方は本拠地であるからだ。連合とは違い本拠地での休息はそれほど意味をなさない。夜も洛陽の町中に響く敵軍の声で、兵はおるか民ですら休まることはない。

この民というのが問題だ。

既に城にはいくつもの不安の声が寄せられ、街の中で起こる不祥事も連日発生している。聞けば町中に黄巾の残党が潜んでいて弱り目とばかりに牙を剥き始めたらしい。

常時ならば直ぐにでも調査し鎮圧できるために問題ではない。だが今は兵をあまり割けず、取り締まることさえ困難な有様だ。

このことが更なる不安を民に与えてしまっている。

さらに一度は宦官を大人しくさせたがこのままでは更に何かをやらしかねない。

民の反乱に宦官の暗躍、どれも今のうちらでは止めようもない。

「……せめて、虎牢関であれば」

言っても変わらないとはいえずにはいらなかった。

虎牢関であればこのような戦い方を連合にされても同じく休むことが出来る。さらには民の心配などどうにでもなった。離れていれば民への情報操作も容易い。だが本拠地での攻防では隠す事など出来るわけもない。

華雄が出陣したのは確かに予想外……いや、想定内だったが取り戻すことが出来る失態だった。

問題はその次ぎ、宦官達の暗躍……。

張遼は思わず手に持つ武具を握りしめる。

あれが予想外だった。賈馱がいるからと自分に言い聞かせていた所もあるかもしれない。

戻らなければ確実に月は死んでいた。この戦の最中よくあそこまで張り巡らしたものだ。いや、むしろこの戦だからこそか。

救えて後悔はしていない、だがこのままではいずれ負けて月の首がこの洛陽の広場に飾られるのは火を見るよりも明らかだ。

せめて、せめてそうなる前に一か八かが出るしかない。

おそらく賈馱も同じ事を考えて……。

いや、待て。

張遼はあの虎牢関で出会った女を思い出した。

「ふふ、その時を楽しみにしています。……早く、洛陽に向かっていますか？」

あの女は確実に何かを知っていた。それはもしかしてこのことではないだろうか？

決戦の地は洛陽。

そう言っていたあの女、構え、佇まい、華雄を追い詰めた武。まず普通では無い。

彼女は知っていた？この洛陽で宦官が暗殺行おうとすることを？董卓軍が洛陽まで退くことを？

「……面白いやないか。上等や、その口割らせたる」

（波才 side）

「白蓮が魔法少女になって戦う夢を見ました。なんか夢の中で『正義と愛の使者！まじかる 白馬！』とか言っていました」

「いきなりお前は何を言い出す……なんだその期待するような目は」

「いつもは普通の女の子だけれどピンチに隠された力が解放され無双とか」

「お前は私を何だと思ってるんだよ……」

「……普通」

「悪かったな！！普通で！！」

軽く鼻で笑って天を見上げる。

うん、清々しいほど青い空だ。お日柄もよく、良い感じの天気。バケツトにおにぎりを詰めてピクニックがとても似合う日だろう。

悲しむべきは血の雨がまもなく降ることによって、せっかくのおにぎりの味がしなくなることか。

「白蓮、戦なんか投げ捨てて遠足行きませんか？」

「……それは二人だけか？」

「ん？美須々や琉生に明埜を連れて行きますけれど」

「……まあどつちにしろこの戦が終わってからだろ。いや待て、この連合期間内にたまっているだろう仕事が山ほどあるんじゃないか？」

「分かりました。白蓮はお留守番ですね」

「お前の私に対する忠誠心に疑念が湧いてきたよ……」

「今更ですか？」

「……もういい。なんか戦の前なのに疲れた」

盛大なため息をつく白蓮。なんだか最近自分をを含めてみんなため息ばかりをつくことに波才は気が付いた。

その事について彼女に上奏したところ、白蓮はいかにも「お前が言

うな」と言わんばかりに波才を睨みつける。

いや、一応自分も被害者なのだが。

「所で、今日の軍議なんだが……やっぱりあれか？」

「でしょうねえ。いつもよりも反撃が弱かった事と、炊煙がいつもより多いらしいのであれでしょうねえ」

反撃が弱いということは何かするために力を蓄えていること。炊煙が多いということは何かのために軍を大きく動かすということだ。どうやら向こうさんはこのままでは自利損だと出撃する一大決心を固めたらしい。

今回の軍議ではその確認、及び対処のための策などを話し合うのだろう。

一応偽りの可能性もあるが……いつちゃんだがそんな時は普通に攻めればいい。時間が経てば経つほど此方が有利になる。

それにしても決戦……。

やはり本拠地まで追い詰めたのが大きい。あのまま馬鹿正直に虎牢関などで戦ってはこうはいなかつただろうに。

董卓軍全体を動かすと下手すれば同士討ちにも発展する夜はない。つまり昼間。早ければ今日で遅ければ明日か？

さて考える。

董卓軍はどう攻める？ここまでの劣勢から覆せる策などそうはない。外部勢力からの手助けは無いみたいですが……援軍の宛もないみたいですね。

ならばこの籠城はただ堪え忍ぶだけの末期の戦い。むしろここまで自軍を追い込んだ上で行える策など限られている。

その上策はなつた、これ以上時間を取れば向こうは内側から瓦解する。それは連合側も同じだが先に訪れるのは向こうだ。

このまま攻め込んで来るのだろうか……来るしかないな。何か策があるなら私ならもつと早く手を打っている。早いうちにやらなければ兵が疲労するだけ、何も疲れきるこんな時まで待つ必要など全く無い。

結論、攻め込むのは確定。

……駄目だな。いまいち素材が足りない。此方の連合としての勝利はほぼ確定なのだが、公孫贛軍としての勝利はこのままでは掴めない。

仕方がない。軍議まで待とう。

「そういえば美須々、琉生。貴方達張遼と呂布を見たんですよね？」

「はい。両名なかなかの武人でした。特に呂布です」

うくんやっぱり天下無双か。

「琉生を一撃で吹き飛ばしました」

「……マジ？」

「いえです」

私から教えた英語を胸を張り言っただぞ、と誇る美須々を私は無視して琉生に判断を仰ぐ。彼女は静かに頷き肯定の意を示した。

「あ、あの主？もしかし……」

「琉生、呂布の武。受けてみていかがでしたか？」

「……」

彼女は静かに首を振り、目を瞑った。

あ、マジでやばい。しゃれにならないくらいやばい。

琉生は首を振って否定をするが、目を瞑るということをよっぽでは無い限り表現しない。ただの首振りなら日本沈没レベルで済むが、そこに目を瞑るがプラスされると世界滅亡レベルになる。

……え？大げさすぎる？

だって呂布の武力、天下無双状態で武力28の速度上昇ですよ？この世界では落雷とか赤壁で燃やせばOKとか出来ないんですよ？

「主？その、お気に障り……」



「具体的にはどれぐらいです？美須々何人分ですか？」

「……」

手を振って否定する。美須々で比べるとかそう言う問題じゃないぐらいですか……ちよつと待て。美須々は夏侯惇を止めれはす。聞いた分には十分魏の猛将と互角レベルだ。

……ちよつと待て。それってこの連合止られる人間がいるのか？そいえば劉備は妹二人と趙雲でも相手にならなかつたとか言っていた気が……。

「これは呂布は無視しかないな……って美須々？貴方なんで涙目なんでしょうか？」

何故か美須々が目頭に涙をため始めている。

「あ、あの主。私のいえすはどこか間違つてましたか？」

「取り合えず鼻かみなさい。間違つていないのですけど日本人な私は普通にやってくれるとありがたいです」

「……ぐす、えつぐ。分かりました」

うん、絶対意味分かっていないだろうけれど、これ以上追求したら

本気でへこみそうなので止めよう。

「そんな不名誉な事、妾はイヤなのじゃ！」

「そうですね！今日からしばらく、貴方達だけで城攻めをなさい！これは連合総大将からの命令ですわよ！」

うわ〜なんてお空が綺麗なんでしょうね。ほんとこんな日はピクニックにちょうど良い。サンドイッチをバスケットに入れて草原のど真ん中で

「単経、帰ってこい」

「……ちよつとぐらい夢見させてもらってもいいじゃないですか」

「夢はな……覚めるものなんだよ」

「誰が上手いこと言えと」

起きても辛いならずつと寝ていらればいいのに。この世は無常だ。

事の始めは曹操の軍師の猫耳（何故か私を方を睨む、なんかしたっけ）がそろそろ敵が決戦を仕掛けてくるだろうとこの場で発言したことから始まる。

本日攻城を行ったのは公孫贇軍と曹操軍、彼女達も攻城の際に異常に気が付いたのだ。何人かが私達公孫贇軍陣営に確認の視線を向けてきたので白蓮は静かに首肯する。猫耳の見立ても自分と同じように今日明日中。

さて、ここで問題が起きた。

なんせ此方は攻め続けなければ意味がない。

向こうが攻めてくるだと？よし！軍を退いて迎え撃つ体勢を整えるんだ！とか言っていたら休む時間を与えてしまうからだ。

つまり、誰かが攻めているときに鉢合わせになる。これはある意味で決定事項だ。当然その攻めている軍は大きな被害は確実。

「絶対！イヤですわ！そうだ、劉備さんが私の代わりに出撃なさい！」

「え、ええ！？私達！？」

「むう〜イヤじゃイヤじゃ！妾は出撃しとつない！」

「……はあ。仕方がないわね、私が出るわ袁術ちゃん」

「はいはい、孫策さんに任せちゃいましょうね」

すげえ。曹操さんの顔が般若だ。あ、芸人の方じゃないですからね。もの凄い不愉快だと言わんばかりの顔。そりゃそうだ、ここが勝負所なのに降りちゃったんですから。かくいう波才も何故か変な笑いが止まらなかった。

というか少なくとも袁術はそんなこと言ったら駄目だろ！？全然忠誠心が無くて独立する気満々の人間にこんな機会与えたら調子に乗るし武勇伝に泊が付くかも知れないし、その泊に俺が釣られたクマ―状態になるし。

あ〜こりゃ孫策独立の日も近い。

見立てだと孫策独立はもうちょっと遅かったんだが早めておこう。なんか袁術は蜂蜜あれば生きていけそうな気がする。

「あのお……私の軍は兵が少ないのでまた貸していただけたら」

「だ・め・で・す・わ！！たまにはご自分のお力でどうにかなされたらどうです！！」

「……私の兵を貸して上げるわ」

すげえ、たった一回兵を貸したただけであの尊大な態度とれるとか……いや、たった一回でも貸しただけで凄いことなんだが、あのおーほっほっほオーラが全てを台無しにしていることは言うまでも無い。

一方、曹操は本当に苦し紛れの軍貸しを劉備に行った。もし最初の功労者でこの連合に好印象を残した彼女が、いきなり散っちゃったら連合の兵の士気が落ちることは間違いないからだ。

少なくとも敵を勢いづけ、こちらの兵が弱気になることは確実。それを考慮したのだろう。

ちなみに私達にそんな余裕無い。あつたら兵を分けて裏から攻める手をとっている。うちは兵の面でも人材不足。将は英雄に、兵になると袁紹にさえ持って行かれるしまった。

もう笑えよ、幽州の人気の無さに笑えよ。

人はゲームみたいに急に増えたりなんかしない。一応将来の幽州のために育児政策を行ってはいるが、成果が出るのは何年後からになることか。

「それでは、これで軍議を終了とする」

「というわけで軍を三部隊に分割します。美須々と私、白蓮、琉生の三部隊。白蓮が本隊一万、琉生が三千、残党である同胞達二千の私達の部隊とします」

「二千？私が連れてきた鎧連隊五百は使わないのか？」

「あれは琉生の部隊に組み込みですね。白蓮が本隊で攻め立てている最中に敵が打って出たら、鎧連隊を中心に退く体勢。敵は恐らく騎馬を中心に追撃を仕掛けて来るでしょうから彼らのハルバートで槍衾を作ると共に、盾により騎馬を牽制。敵の機動力をそげ落とします。琉生は場合によっては正面の将を上手い具合に引きつけ、い

なしてくれれば結構。馬鹿正直に一騎打ちなんてしないように」

「……」

「念のために言っておきますけど、華雄にならないでくださいね」

「……（心外だと言わんばかりの目）」

まさか白蓮がネタで連れてきた鎧連隊が役にたつとは……一発ネタじゃなかののか。

「主、私達はどうするのですか？」

「遊撃隊ですね。現段階ではいまいち分らない所が多い。状況に任せて好きなように動ける隊が欲しい」

とはいったものも、自分たちの攻城の時に敵が出てこないのが一番良いことに間違いない。

先ほど述べた戦術で退いている間に早く味方が来ないと、私達は確実に負ける。

「……へ？なんでって？」

いや……呂布がね。チートなの。

この世界の住人、割と普通に鉄とかぶつ壊すからさ。うちの鎧連隊の鎧は現代配合でいろいろ混ぜて作っているからお金がかかる分普通と比べてすんごい堅い。

堅いんだけど……あいつらにとって木綿豆腐か堅豆腐かぐらいしか  
違くないんだ。うん。

だってあいつらぶっ飛ばすんだもん。

美須々と琉生に実験頼んだときの事思い出すわぁ。

「これは……堅いですね」

「でしょう！新配合で堅さを既存の鎧の1・6倍、衝撃を緩和させるようにしましたから。この世界の鉱石は非常に素晴らしい、このまま行けば堅さ2倍も夢じゃありません！」

いやぁ何回切っても名がある武器は刃毀れ所か切れ味も落ちないから、鉱石もすごいのかなあって思ったら予想以上でしたよ。

ふふふ……お金はかかりますがそれ以上の成果が見込め

ドカーン……

そつどカーンと成果が……ドカーン？  
振り向くとそこには。



「……………」

吹き飛ばされた鎧。若干いらついた目をした琉生の姿が。

そして彼女は吹き飛ばした鎧に勢いよく走り込み、落下して来たところを更に吹き飛ばす。

え、ちよつと琉生さん？なんでそんなに執拗に鎧をぶつ飛ばすんですか？なんでそんな怖い目してるんですか？なんか頭に怒りの四つ角浮かんでんですけど。

「おお！なるほど！たたつ切れないならぶつ飛ばせばいいんですね！はあああああ！」

え、何その発想。怖い。

同じく頭に怒りの四つ角を出現させていた美須々が、琉生と同じようにお手玉を……………」

どつかんどつかんぶつ飛ばされる鎧。多分生きていたら殺してくれと叫んでいるはずですよ。

……………」あれ、何だろう。目から涙が。あれ私の苦勞の結晶なんですけど。

あんな簡単に……………」あんな簡単に。

「はーはっはっは！たかが堅いだけでは……………」って。申し訳ありません

ん！私如きががつい調子に……主？心なしか主の目がどこか遠くにある気が」

「……（妙にすっきりした目）」

あ、あははは。夢じゃ、これは悪い夢なのじゃ。

「主？主いいいいいいいいいい！！？」

「……（お腹が空いたような目）」

「おゝい単経。目が遠くを見ているぞ」

「あ、主？何故かもの凄い罪悪感が押し寄せてきたのですが……」

「……」

っは！？

「あゝ大丈夫です。諭吉さん三人分ぐらい大丈夫です」

「「「……」」」

え？なんでそんな哀れむ目で見てくるの？

「そ、それで？もし私達以外の時に出撃したらどうする？」

「白蓮は無難に戦うよう心がけてください、お願いします。欲張るとか、何かするとかしなくていいんで」

「……なんかその口ぶりだと、あんま期待されていない感が否めないんだが」

「……呂布とか、華雄とか、張遼とか。止めます？」

「済まん、私が悪かった。普通にやらせてもらおう」

わかりかしマジで言ったのが分かったのか、青い顔をして目を逸らされた。

おい、決闘しろよ。

「琉生、貴方の場合も同じです。私達がやりたいこと、分かりますよね？」

「……」

「頼みましたよ」

「主、私達遊撃隊はどうすればいいのです?」

「まあ遊撃と言ってもやることは同じですよ。美須々、貴方」

私は嫌らしい笑みを浮かべながら彼女に問いかける。我ながら意地悪が過ぎると思うのだが、まあこれは持って生まれた性分だ。私の部下になったのが運の尽きかね。

「張遼に勝てます?」

その問いに彼女は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔になり、次ぎに頬を膨らませて顔を赤くする。

「何をおっしゃるのですか主。私は主のなすべき事をなすために全てを犠牲にするのです。そんな曖昧な表現ではなくいつも通り、ただ命令を下せばよろしいのですよ」

「美須々、張遼の捕縛を命じます」

そう私が言つと彼女はその場に跪いた。

「この命に代えましても、その命を果たして見せます」

すんごい嬉しそうな顔で笑う美須々に、内心私は薄ら寒さを感じる。自分の命以上に守ろうとする物を見つけた人間って、正直怖い。自分の命を守りながら何かをなすのは難しく、自分の命を失うこと前提に行動すれば大抵のことはなせるもの。ああ、怖い。

って他人事のように言ってますが私もその一人なんですけどね。あはは、笑えやしねえ。」

「それでは最後に、無理して洛陽一番乗りはしないように。もしするなら」「一番乗り！」って己の得物ぶん回しながら叫ぶこと。美須々と琉生は用件が済み次第、洛陽に明埜の手引きで忍び込みます」

「二番目の意味が最も意味が分からないが……三番目の件はどうしてお前らだけなんだ？」

「白蓮には目を引きつけてもらいたいですよ。私達は宮殿に侵入して重要な書類やこの漢の大陸の詳しい資料などを強奪しますから」

「せめてもうちょっとマシな言い方してくれよ」

白蓮は若干苦笑気味だったが、真剣な顔に変わる。

「全てはお前達にかかっている。頼むぞ」

「うーん、曹操の時に出陣してきましたか……やばいなあ」

「主！用意は出来ました！」

「直ぐに出撃の指令を白蓮に飛ばしてください、先ほどの内容を忘れないようにともお伝えくださいね」

「っはっは」

「琉生、貴方の予定を変更します。華雄を見つけ次第引きつけて、そのまま形だけは曹操軍を補助する形に持ち込んでください。華雄は恐らく貴方を見れば来るはず、もし気配が無ければ挑発してでも誘導しなさい」

「……」

美須々と同じく身を翻して自分の隊に駆けていく彼女を見つつ私は考える。

敵はよりによって曹操の時に出陣。この状況はきわめて不味い。まだ劉備や孫策ならばいいものの、曹操か。呂布は恐らく彼女達に任せることが出来る。実際に劉備軍は割と呂布に好戦的な構えを見せているからだ。

問題は曹操の悪癖だ。

聞く限り、正面から曹操軍とぶつかっているのは私達の目当ての張遼と賈馱。連合が参加することで撃退確率90%越えなのは間違いない。熱い確率だな、パチンコだったら腰が浮くぐらいだ。

問題はその後。曹操は撃退した後ほぼ100%で張遼を追うだろう。既に史実とも演技とも違う結果になっている今、史実と演技での最終結果である『張遼が魏国入り』のイベントがここで発生する可能性は大いにある。

まずは敵の撃退が最優先だが……。

「主、我ら精兵二千の出撃準備完了！白蓮さんの部隊は琉生と共に出撃、目録ではまもなく戦闘に入ります！」

「劉備、孫策は？」

「既に戦闘に入った模様！劉備は呂布と陳宮隊、孫策は華雄隊と抗戦中！」

「……美須々は五百を率いて我が隊から分離なさるよう。私は琉生と共に華雄隊と当たります。この意味、分かりますね？」

「……っは！！我が武は主の導きのままに」

さあ、始めますか！

私は目を薄暗く輝かせた兵達の前に立つ。

ここにいる誰もが命を散らせる覚悟があると知っている。ここにいる誰もが私が死ねと言ったら死ぬことを知っている。

だから、命じてやるのだ。  
死ねと。

「お前達！何の因果か私はまたここで軍を率いている！本当に世界は気まぐれで残酷で面白い！」

その言葉に彼らは一切の言葉を漏らすことなく私を見つめる。  
目に確かな『熱』が籠もっている。



「全力だ！全てを出し切り相手に思い知らせる！私達を嘗めている奴らに、その生意気な顔に刃を突きつけてやれ！！」

敵などいない。だが壊れている私達にそんな区別は付かないんです。

「私達は死に場所を探していた！なんともいい場所じゃないか！だが、今ここで我らの命を奴らに奪われるなどありえない。何故なら我らはやつらに飲み込まれるには、あまりにも生きてここにいるからだ！」

死にたくないだけ。私は死にたくはないのだ。あの孫策みたいに死を静かに受け入れることは出来ない。最後の最後まで、私は足掻く。失笑されようとも、馬鹿にされようとも、私は最後の最後まで足掻こう。

今一度言う、私達は今、ここで、生きている。

「そんなお前らに教えてやる、『エンジョイ&エキサイティング』  
！！魔法の言葉だ！！全部楽しめばいい、窮地を楽しめ、敗北を楽しめ、死を楽しめ、殺す事を楽しめ。この世の全ての生の縮図が今この戦場にあるぞ！！さあ叫べ！！」

そして私は拳を振りかぶり声高らかに叫ぶ。

「『エンジョイ&エキサイティング』！！」

「『『『『』エンジョイ&エキサイティング』!!』」」

その言葉に兵達は雄叫びを上げる。なんで戻って来たんですか。なんでここまで言われてなおその目に戦気を宿すのですか。ああ理解が出来ない。自分もその一人なれど理解が出来ない。

平穩を捨てて自ら死地に飛び込む自分を、彼らを。私は生涯理解することはないんだと思う。

……そういえば、これの元ネタのあいつら一人残らず全滅してたよな？

あゝまあ大丈夫だと信じたい。

「全軍！蹂躪せよ！」

その一言に皆歓喜し、口から飛ばす唾を気にせずにかんだ。本当に、なんでみんなそんな笑顔なんだっての。

呆れながらも私はこの時気が付かなかった。私自身が一番歪な笑みを浮かべていることに。

私を先頭に千五百の獣達は董卓軍に牙を剥いた。

向かってくる兵、この兵は家族がいるのだろうか？もしかしたら年老いた母がいるかもしれない。帰りを待つ妻と子供がいるかも知れない。

私は彼の首を馬上からはね飛ばした。

剣を振り上げたのは初老の兵だった。この人はいったいどれほどの人間と繋がりがあるのだろうか？あの黄巾の時代を生き抜いたこの男は、もしかしたら多くの人に慕われていたかも知れない。

私は走りざまに彼の胴体を一刀のもとに深手を負わせ、転倒させる。顔を前へ戻すと、

後ろからカエルがつぶれるような音が聞こえた。

槍を突き出してきたのは、まだ十五ほどのあどけなさを残す少年だった。日本だったら高校受験だろうか？友達と馬鹿な話をして、一緒にテレビゲームをして。私は彼ぐらいの時はそんな平和な日常生活を生きていた。

私はその槍を切り飛ばし、その少年の腕を切り落とした。

人が、人が簡単に死んでいく。

これが戦場なのだ。多くの英雄が名を馳せる戦場。その背景には彼らのような多くの犠牲がある。

物語を作る、そのためにはあまりにも多くの人が死ぬ。

家族がいた、恋人がいた、好きな人がいた、妻がいた、子供がいた、親友がいた。

幸せであり、不幸であり、情欲があり、彼らは確かに生きていた。

彼らは散っていく。この戦場という狂った机の上で死んでいく。その彼らの血で英雄の物語は描かれる。

こんな世界だ。万を超える屍の上に一人の英雄があり、その英雄の目が後世に語られる。

曹操、劉備、孫策。この三人のが後世に語られるまでに何十万人が

死んだ？おい、死した者達よ。

お前達は何も語られてはいないぞ？お前達は何も残していないぞ？

お前達は何を思い死んだのだ？

なあ、数多の歴史の犠牲者達よ。我が同胞のように笑って死んでいけたか？

どうしても、私は自分の姿と彼らの姿を重ねざるを得ない。一度死んだ身として、歴史の影に消えて行った凡才として。彼らはあまりにも自分の『友』でありすぎたのだ。

一人の兵を切り捨てる。

いつの間にか琉生の姿を私は見つけた。

同時に軍気を感じ取る。曹操の軍気が増した。

私は彼女へ駆け寄る。

「琉生、曹操は終わりを迎えようとしています。終わらせてはなりません、分かりますね？」

「……」

琉生は馬の手綱を力強く握りしめ、その眠たげな目をかっとな開く。

私は辺りを見回す……見つけた。

駆ける、私は駆ける。

多くの血が、腕が、叫びが。凡夫達の声が戦場にこだまする。

「つちい！ん？貴様は！！」

「……お久しぶりですね」

華雄、お前には見えますか。華雄、貴方には分かるか。

戦いという狂気に目を濁した者に、この地獄が分かるのか。同じ知性を得た者達が、まるで獣のように歯を突き立て合うこの地獄を。ああ、私には無理だ。耐えられない。英雄よ、お前達はこの声を背を得るのか？この声を背負った上で『英雄』になるのか。だとしたら私はとうてい英雄にはなり得ないだろう。

「のこのこと現れおつて！はあああああ！！」

俯く私に華雄は容赦なく血で彩る得物で斬りかかるが琉生がそれを受け止める。

この世界では当たり前なのだ。そして私はこれを望んでいたのだ。何という矛盾、私は命を重んじつつ軽んじている。何という矛盾、戦いを否定し、肯定する。

ああ、なんと私は狂っているのだ。

「なっ！？貴様はあの時の！！」

「琉生」

「……」

私達は反転する。『曹』の旗へと。

「おのれ！逃げるのか！」

華雄は顔を赤くし、私達へと馬を走らせる。兵達もその華雄に続き、さらに孫策軍も彼らへと殺到する。孫策軍には既に埋伏の兵を仕込ませている。手はずはとうの昔から完了済みだ。

道中も多くの兵を切り捨てた。血にまみれた剣を捨てて、敵兵から槍を奪い取り突き進む。

目の前に張遼の旗を追いやった曹操軍の姿を確認、見回すと曹操と夏侯惇の旗が見えた。妹の方は確か呂布へと向かっていたはず。

間に合ったか。

そのまま曹操軍を私の軍は突っ切る。逆に琉生は軍を反転、曹操軍を巻き込む形に持ち込む。

琉生が静かに手を上げると、兵達は素早く陣形を構築にかかる。僅か数秒で完成されたのは『方円の陣』。更に正面からぶつかる位置の鎧連は大地に盾を突き立て、槍袞を形成する。

瞬く間に華雄と曹操、孫策軍と琉生が入り乱れる混戦へと発生。

途中、私は曹操を見つけた。

苦渋の表情で彼女は私を睨み付ける。

「（よくもやってくれたわね）」

そんな声が聞こえた気がした。

私はそんな彼女に三日月のような、幼い子供のように無邪気な笑みを飛ばすと一気に駆け抜けた。

生きてるのだ。地べたに這いつくばって、汚物を嚼つてでも、自分は今ここで生きている。

生きているからこそ、やつらに一杯食わせることが出来た。

「生きる事は……難しいものだな」

皮肉にも、多くの命が散っていくこの場で自分は改めてその事に気が付かせられたのだった。

美須々 side

「どこへ行くのですか？張遼」

「うち。なんやなんや、曹操まいたと思つたら次はあんたらかいな」

見つけた。ついに見つけた。

「……主が貴方の武をご所望です。下りなさい」

「えらい直球やないか。曹操の軍を無理矢理に華雄と戦わせて、何のつもりかと思うとつたらそういうことかいな」

「ええ、私達には貴方が必要です。貴方の力が必要なのです。だから曹操に渡すわけにはいきませんでした」

「……ほんまに直球やな。でもな」

「分かっています。私は貴方を一騎打ちで倒した。それなら理由になりませんか？」

私は張遼の言葉を遮るように私は声を発する。主は本当に私達の部類の人間を理解している。



彼女は仕える者が居る。我らは無理矢理奪い取るのだ。

「もし、私が負けるたのなら去ってもらって構わない、そして追わない、そう主は仰いました。我らもそれに従います」

「……一つええか？」

「何でしょう？」

「お前はどこまでこの戦の真相をしつとるん？」

「……全ては主が白蓮さんの願いを叶えるために」

「公孫贇の願い？」

「白蓮さんは言いました」

この場には私達の他に誰もいない。  
ならば真実を言うだけのこと。

「『董卓を救え』。全てを知った上での白蓮さんはそう望まれました。そして主と我らはその願いのために動いている。これで、答えになりませんか？」

その答えに面を喰らった表情になる張遼。だが次第に頬を膨らませ、  
ついに。



敵を殺す。

……今回は殺してはいけないんですが。

でも、そんなことは関係ないぐらい楽しみです。あの、あの張遼と戦える。なんと甘美な時なのでしょう。ああ、頬が上気していくのを感じる。心臓の鼓動が早くなる。

「我が名は名乗れずとも心は主の下に！我は公孫贖軍の将にて単経の配下なり！」

「よっしゃ！董卓軍、張遼！そんなら無理矢理にでも名乗らせたるわ！」

さあ、全てに終止符を。

### 第三十一話 将星乱舞（後書き）

めだかボックスのアニメ公式がついにオープン……見た感じは良さそうだが、地雷になるかどうか。

というか球磨川くんが『』つけてればぶっちゃけどうでもいい（おい最初恋姫でいくかめだかでいくかで味の素は恋姫取りました。たぶんめだかだったら、今頃漢女の方は球磨川くんが主役はっていたでしょう。

おかげさまでお気に入りか2500超えました。やっと中堅はれるようになったのだろうか？これからも精進していきたいと思えます。

第三十二話 俺の配下がこんなに戦えるわけがない（前書き）

君主同志の戦争だって、ちょうど我々が隣人と喧嘩するのと同じ理由で始まるのである。

〈モンテーニユ〉

### 第三十二話 俺の配下がこんなに戦えるわけがない

波才が駆け付けたときには既に始まっていた。  
美須々と張遼の誇りと、信念を賭けた決闘が。

美須々は馬の横腹を蹴り怒号の声を上げ、それに続くように美須々の馬は張遼へむけて猛進する  
対して張遼も同様に馬の横腹を蹴り、たずなを握ると笑みを浮かべて馬を走らす。

二人があと少しで交差する、そう思われたが美須々は馬の背を蹴り飛翔。

太陽を背後に張遼へ肉薄、並みの将ならば反応できぬ錬磨された一撃を突き出した。

張遼は応戦すべく偃月刀を空中にいる美須々々へ向けて薙ぎ払おうとする。だがその背後に輝く太陽がそれを妨げ、結果としてその一撃は無効。

結果先制を制したのは美須々々であった。首元へ突き出された棍を憎々しげに張遼は引き戻した偃月刀で薙ぎ払う。

この一連の流れは全て美須々々が導き出した応え。

戦場で与えられた条件下で有利に戦う事、これを兵法と言う。  
かの宮本武蔵がわざと遅れて小次郎を送らせて、波打ち際で得物の長さを隠して闘い、日を背にして勝利した。今まさに美須々々が行ったものだ。

同等以上の相手と戦う時に、何も正面堂々戦う必要は無い。一瞬、一手先駆けて勝利するための技法が兵法なのだ。

そして一瞬一手というが、達人同士の戦いはそれが命を左右するのに十分な条件であることは間違いないだろう。それを勝ち取った者を卑怯などというのは、与えられた条件を有効に使えない愚か者の妄言。

今一瞬、美須々は張遼を凌駕したのだ。

「っちい！」

張遼は顔を歪め棍を偃月刀で弾く、美須々は空中で回転し地面に着地すると、アクロバットな動きで腰に棍を構えなおす。

いつもの頼りない、おちよくられ涙目になる美須々の姿はそこにはなかった。

存在するはただ一人の武人のみ。

口から息を吐き出した美須々が、張遼目掛けて大きく一步踏み込む。そこから瞬く間に距離を詰め一撃を見舞わんと腰を下ろした。……だが。

「ぶるるうッ!」

「っ!」

それをいなししたのは張遼ではなく、その張遼が乗る馬。

近づいた美須々を見るや後方に後方に下がり、その脚で彼女を蹴飛ばさんと馬脚を繰り出してきた。

美須々はこれに驚きつつも冷静に対処すべく側面へ飛び反撃を試みるが、この異常な事態に誰を相手にしているのかその一瞬彼女は忘れていた。

そう、武人の殺し合いは一瞬が命取り。

「そこやあああ!!!」

素早く突き出された紫の偃月刀。見ればそれは的確に美須々の首を捉え、殺さんと迫っていた。

とっさに美須々は頭を横へ逸らす、完璧には躲しきれず肩を軽く挟む結果となった。それでも致命的な隙をいなし結果としては十分。なんせ命を失うかどうかの瀬戸際。肩に激痛が走るが幸いにも深くはない。

反撃を繰り出すべく棍を持ち直すも傷からの痛みが反応が送れる。命を奪わんと再度繰り出される偃月刀に舌打ちをし、一度体勢を整えるべきといなし後方へ飛ばうと試みた。

「ブルルッ!!」

「つつかは!?!」



そこに張遼が乗る馬による蹴りが美須々の体へと吸い込まれた。身体が浮き、肺にあるありったけの空気が吐き出される。涎が口から飛び、胃液が込み上げ、涙がこぼれるが激痛を堪えて地面を転がり受け身をとりつつなんとか距離をとることに成功。

「っげほっげほ、くおおッ……」

苦悶の声を漏らし、こぼれた涙を受け身をとつさ際に土だらけになった手でぬぐう。

まともに受け身がとれなければそのまま馬に踏み付けて死ぬか、張遼の槍で殺されたかのどちらかだっただろう。

呼吸を素早く整え、張遼を己の得物で牽制しつつ分析する。美須々は張遼を相手にしていると理解していたはずだが、どうやらそれは間違いだったようだ。

馬。

自分に立ちはだかる壁は張遼のみならず。馬との阿吽の呼吸による人馬一体の攻撃。

改めて観察する。馬に騎乗する張遼は不適な笑みを浮かべているが、油断無く偃月刀を構えている。

だが、その張遼が乗る馬も同様にもし人間ならば不適な笑みを浮かべているのだろう。

美須々は身体が震えるのを感じた。

張遼の乗る馬が美須々を睨みつけているのだ。

明確な敵意を持ち、まるで武人のような殺気を目に纏って私を睨みつけている。

幾多もの戦場を渡り歩いた美須々にとって、今まで何人も人間に殺気を持って対峙されたのか。それこそ多すぎて数え切れない。

だがこのように戦場の乗り物である馬にこのような殺気をもって対峙されたことなど、一度も彼女は無かった。

確かに馬にも意志はあり、戦場で馬が出せる五割の力を引き出させるために互いに認め合うことは必要だ。

馬は生き物、怯えもすれば恨みもする。その頭の良さを美須々は理解しているつもりだった。

だが、あれは異常だ。

明確な敵意を持ち、主人とまるで一体化したが如く巧みなチームワークで美須々に牙をむいてくる。

これが人馬一体。

騎馬を扱ふ事に関しては董卓軍一と言われる神速の張遼の馬術。

「なんや、もう終わりかいな？」

余裕しゃくしゃくと言わんばかりに槍を肩に担ぎあげる張遼。

挑発によって思わず頭に血が上り、切り掛かりたくなる衝動にかられる。だが美須々は彼女の主、波才が自身を見ている事を思い出し踏み止まる。

既に醜態をさらした、これ以上晒すわけにはいかない。

落ち着け、慌てるな美須々。まだ慌てるような時間じゃない。

もう一度深呼吸をして自分を落ち着かせる。

美須々は再度確認を行い状況を整理する。

胸に走る激痛から恐らく折れてはいないがヒビが骨に入っている可能性大。

肩の切り傷は浅いが血が流れることを考えると長期戦は不利、それ以前に長期に持ち込まれてはこの戦の対局を逃すことになり、敗北は必須。

張遼とこのまま抗戦し勝てる可能性皆無。  
人馬一体を崩すことを第一案として推奨。

美須々は静かに手を大地に置き、握り込む。  
そして棍を握りしめて笑う。

張遼が気配を察してか、肩に担ぎあげていた槍を静かに構えた。

「いえいえ、ここからが本番ですよ」

そう言って棍を張遼目掛けて突き付ける。

「今からぶつ殺しに……殺したら駄目でしたね」

「なんや？うちは武人としてここで死ねたら本望やで？」

「ふふ……なら武人としての貴方を殺しに行きます」

「……上等やないかあ。その仮面引っぺがしたる」

互いに口を歪めて笑う。

否、美須々は嗤う。

「小便はすませました？神様にお祈りは？部屋のすみでガタガタふるえて命ごいする心の準備は出来ましたか？張遼」

「……そこまで言うたんや、覚悟出来とるんやろな？」

「戦場に立つ以上それは当たり前じゃない？今更何を言ってるの？」

呆れたようにため息をついてやれやれと美須々は肩を落とした。

対して張遼は顔を鬼のように歪ませる。

今ここに、言葉遊びの時間は終わりを告げた。

互いに得物を構え、己が敵を睨みつけん。

「一片の慈悲もなく、ただ斬るのみ！！」

「張文遠、いくで!!」

駆け出す武人が二人。

一人は走り、一人は馬に乗り駆ける。

あつという間に互いの間合いに入るが、やはり馬上の張遼が有利か。高低差を利用して馬上から突き出される槍は鋭く速い。

その素速さたるや、並の兵なら見切ることなく死んで行くであろう。死に神の鎌の如く。

棍でそれをからめ、弾くがその重さに武器を持つ手が痺れ、鬨気に髪が逆立つ。

美須々は歪な笑みを浮かべ、口に弧を描く。

面白い!!

歯を噛み締め大地を足で踏みしめ、美須々は飛ぶ。

舌打ち鳴らした張遼はそれを見るや宙に存在する美須々目掛け偃月刀を横に一閃。

美須々は胸を反らしてそれをかわし一回転し、軽業師のように馬上の張遼目掛け蹴りを放つがそれを張遼は偃月刀を盾にし防ぐ。

美須々はその踏みしめた偃月刀から来る反動で後ろに高く飛翔。

この瞬間、張遼は歓喜に震えた。

何故ならばその着地の瞬間自らの愛馬が彼女に突撃を仕掛けるからだ。

まさかいくらあの身軽な猿のような敵でさえ空中で身動きはとれないであろう。しかし空中に存在するあの敵將に槍を投げてはその手

に持つ棍で弾かれるのがオチ。

だが着地の瞬間ならどうか。

着地の瞬間、踏ん張り飛び退るならばその踏ん張る瞬間の僅かな間に、己の愛馬に跳ね飛ばされる。

転がり避けるならばこの槍を突き出し、または投擲することでその命を奪う。

張遼にはその自信があった。

だが馬上に乗り、落ちる美須々に駆け寄る張遼は気が付かなかった。美須々もまた張遼と同じように歓喜に震えていることに。

空飛ぶ美須々はずっと、あの手を大地に握りしめていたあの瞬間から握り続けた手開き、走り寄る張遼へ向けて……否、その愛馬に向けて投擲した。

ずっと握りしめていたピンポン球ほどの石を。

一匹の馬の悲鳴が戦場にこだまする。

張遼が乗る馬はその場で主の意志とは反し急停止をかけた。馬の制御が聞かなくなり投げ出されそうになる張遼。

宥め落ち着かせようとすれど暴れ牛のように張遼の馬は暴れる。自らの愛馬に起こった異常に張遼は理解できない。

その隙を美須々は逃さなかった。

着地するとすかさず張遼目掛け駆ける、駆ける、駆ける。



一体どこをどうすれば人間の蹴りである馬の巨体を吹き飛ばせるのだろうか。

それ以前に、まず馬の蹴りを喰らって動けるのはおかしい。例え受け身をとったとしてもだ。

普通はそのまま闘うなど普通の人間ではない。

とどのつまりこれは人の理解を超えた戦いだっただ。

張遼が操る馬術も人間業ではない。まるで一体化しているかのよう  
に、言ってしまうえば大変気持ちが悪い動きで闘い続けている。

さらにはあり得ない体勢、例えば直角九十度で馬上から槍を繰り出し、例えば体操選手であっても転倒するような体術で馬を乗りこなしながら追撃を繰り返している。

それに対応する美須々も500キロの馬を蹴り上げ、約二メートルも飛び上がる。

解ってはいたもののやはり自分はこの世界で戦いは向かない。

波才はため息をついた。彼は思い知ったのだ。

英雄の戦いというものを、語り継がれる武というものを。

そんな波才などつゆ知らず、戦いは続いている。

張遼はとっさに馬から飛び降り、着地する。もしそのまま、されるがままに彼女の愛馬と共に地面に激突したならば、ただでは済まなかつただろう。

これも超人技だと波才は評価した。

バイクを思い浮かべて欲しい。



目の前には電柱があり、飛び降りなくてはならない。そうしなければ死ぬ。

だが実際に何人が飛び降りれるだろうか。それができないからバイクは死者が多いのだ。しかも転がるならまだしも、彼女は綺麗に着地ときたもんだ。

乾いた笑いしか出てこない。

美須々も流石にあの蹴り飛ばした体勢からの追撃は不可能なのか警戒して攻めない。

横に転がる愛馬を横目で眺めた後、張遼は怒り心頭といったところか。

激しい激情を押さえ込むように静かな声で、美須々に話しかけた。

「何しよったんや」

「失礼ながら貴方の馬の目に石を当てました」

美須々は明埜のように鋭い刃物を変化自在に投げることは出来ないが、頼み込んで投擲術を黄巾党時代に教えて貰っていた。心に戦友を思い浮かべ、美須々は礼を言う。

何事も生きる勝てになるとすれば躊躇せずに吸収する。

かつて野党として生きていた美須々は誇りを持たない。彼女が戦いで見いだすのは勝利のみ。

ただ、勝つために。ただ、生きるために。ただ、主のために。

それが美須々という武人である。

その言葉に更に気を悪くしたのか、張遼の声が荒くなる。

「ずいぶんなもんやな。うちではなく馬狙うんか？」

「残念ですが、どう考えても馬に乗る貴方には勝てないのです」

悲しそうな声。

だがまったくそうではないことはここにいる誰もが解っている。

「なんや、自分で自分の馬乗り捨てたやろ？」

「乗っていても貴方には勝てはしません。馬上での戦いでは貴方に軍配が上がるでしょう。貴方の馬術はすばらしい」

「お褒めいただき恐悦至極……つてところかいな」

気をよくしたのか満更でもないよう笑うが、一転して不機嫌なものへと変わる。

「つまりや、要するにあくまで馬術は負ける、だが馬術で無ければ……つてことやろ。それは」

「そこまで私は慢心してはいませんよ。馬から降りても貴方は強い、

それこそ今の私でも勝てるかどうか怪しいところですが」

そう言つて嗤う。

その笑いは狂気じみており、平和な世では許されない笑み。だが、波才にはこの場においてそれが最も相応しいものに思えた。

「それが楽しいでしょう？戦つて、戦つて死んで生き残つて。己の全てをただこの人生の一戦のみに捧げてつぎ込んで殺し合う」

対して張遼も猛禽類の如き凶暴な笑みを浮かべる。これが武人、人の命が軽い世界で屍の山を築き上げる異常者達。

美須々が、張遼が咆えた。

「さあ、殺し合ひましょう、生と死を感じましょう！！私達武人は戦いの中でしか生を見いだせない欠陥品、されどそれこそを望む！！」

「ご託はええ！！始めるで！！」

「ああもう殺したくてたまらない！！」

「抜かせ！！うちがぶつ殺したる！！」

おゝい、捕縛だぞ？殺してどうするんだ？

そんな波才の叫びは二人の耳には入らない。

張遼の偃月刀を美須々は棍の先で受け止め、しなる反動で体を張遼の懐に入り込み、正中線である胸線へと肘を繰り出す。

だが張遼は身を退くことでかわすと、美須々の体を蹴り飛ばした。

美須々は円を描くように足を滑らせてそれをいなすと逆にその足を片手で掴み、てこの原理で持ち上げ。

「AAAAAAAAAAAAAAAAッ！！！」

勢いそのままに大地へと叩きつけた。

「がはあ！！！」

反動で一回大きく張遼の体が浮かび上がると共に、口から飛沫が飛び美須々の頬を僅かに濡らす。

苦しそうに顔を歪める張遼目掛け美須々は容赦なくその首に棍を叩きつけようとするが、張遼のとっさに袈裟切りにした偃月刀がそれを阻む。

やむなく美須々は猫のように背を丸めて後方へと飛び退る。

楽しげに睨み付ける張遼。

次に彼女が取った行動に美須々は驚く。

なんと彼女は偃月刀を先の戦でしたようにこちらに投擲してきた。この場面で己の武器を！？内心焦り美須々はその偃月刀を受け止め

て弾くという選択を選んでしまった。

だが予想以上にその偃月刀は重く、美須々は大きく体勢が崩れてしまった。さらに不幸なことに傷を負った肩に負担がかかり、生物の本能的に押し返すべき力が一瞬霧散してしまった。

弾ききつたもの体勢が大きく揺れて、体は後方へと崩れる。

「（これはまず!?!）」

体勢を整えるべく後ろに伸ばそうとした軸となるべき足。

だがその前に、張遼は美須々の鼻の先近くまでその体を進ませていた。驚きを表情を隠せない美須々に、張遼は獰猛な笑みを浮かべると共に、右手で拳を作り彼女の顔を殴りつけた。

氣を纏った張遼の拳が、美須々の右頬に沈み、蹂躪した。構造上に僅かに浮き出た美須々の右目には、驚愕と耐え難い苦痛。

更にそれだけでは収まりが付かずと言わんばかりにその場で一回転し、回し蹴りで彼女を吹き飛ばした。その確かな感触、臍物を、骨を押し退けて張遼の蹴りが美須々の体を押し込む。

美須々は為す術もなく鼻から流れ出る血の線を描きながら吹き飛ばされ、地面を何度も転がり続けた。

大地に強くその身を打ち付けられた彼女の体は、まるで壊れた人形の如く。

やがて、彼女は動かなくなつた。そうだ、ウゴカナクナツタ。

数瞬の静寂。喧騒がどこか遠くに感じる、東南から吹き荒れる風の

冷たさ。

「はあ、はあ、……どや!?うちの勝ちや!」

その勝ちどきに、公孫贗軍に動揺が走った。誰もが目の前の危機を顧みずに、自らを統べる将へとその目を向けざるをえなかった。

そして彼らは見た。

不敵な笑みを浮かべ、槍を肩に堂々と大地に立っている張遼の姿を。ぼろぼろになり、大地に転がる程遠志の姿を。

彼らが信じる女将の懽然とした姿は、いまやどこにもなく。ただ、そこには一人の敗者がうち捨てられたのみ。

暗雲が立ちこめる。相対する董卓軍の攻撃が再開されるも、彼らはどこか焦りを覚え、実力で勝るはずの兵が圧されていた。それほどまでに彼らの美須々に対する信頼は強かったのだ。ここで崩れず以前戦線を保ち続ける彼らが異常なのだ。これが他の軍、まして波才の軍でなければ間違いなく恐慌に陥り、もはや軍としての形を成せなかつただろう。

その流れを敏感に感じ取った張遼は、終わったとばかりに大きく息を吐き出した。

強かった。

この名も知らぬ将は間違いなく強者であり、武人であった。

畏敬の念を込めて動かなくなった彼女に目を僅かに向けると、すぐ

さま今この場にいる将と思わしき袋人間へを睨みつける。  
この人間が恐らく、全てを計画し行ったのだろつと張遼はうすうす  
感じていた。問い詰めたい思いもあるが、今は何より時間がない。  
どのみち、この怪将の思惑は今ここで潰えたのだから。

「うちは勝った、約束は守ってもらつて」

万が一、契約を破るのであれば無理にでも突破する。  
馬はやられたが、氣勢はこちらに流れている。不可能ではない。

「はて、どなたが勝ったので？」

フザケルナツ！！

張遼の顔が怒りに歪む。

ここでこいつが約束を破ったということは、この名を知らぬ猛将が  
命を賭けて戦った武勲を貶したことに他ならない。

自分の仲間を否定し、あまつさえ誇りすらも汚したのか！？

だが波才は睨まれただけで肌が泣く張遼の視線を受け流すと、倒れ  
伏した美須々へとその見えない顔を向けた。  
そして。

「何をしているのです？ここで終わりなのですか、貴方が最初であった時に私に語った言葉は嘘だったのですか？」

倒れた美須々を冷たい目で、人形を見るような目で眺める。

「起きなさい美須々、まだ勝ってないでしょう」

そのあまりにも先ほどの彼女の戦いを無視するかののような発言に、思わず張遼は波才を睨み付けた。

彼女は武人である、そして武人として矜持があった。

あれほどまでに奮闘し、己と戦った武人に対しかけた言葉はあまりにも無情。彼女は弱くはない、むしろ傷を追い、馬に蹴り飛ばされ、血を流しながらも自分と互角に戦ったと認めていたのだ。

その認めた相手を、戦いきった武人に対しその仕打ちはあまりにも矜持に欠ける。

思わず張遼は袋を被った男へ向けて罵倒の一つでもと口を開きかける。

だが、彼女は知らなかった。

張遼はあまりにも美須々という武人を知らなすぎた。

彼女は知らない、彼女は己の武を誇るのではない。己の主君を誇るのだということ。

「……A」



その言葉こそが彼女の道しるべであることを。  
彼女が生きる支えであることを。  
彼女にとっての誇りであることを。

真に美須々という武人を見誤ったのは己だということ。

「AAAAAAAAAAAAAAAAツ!!!!!!」

美須々は口腔と鼻孔から血をこぼしながら立ち上がる。青く、赤く腫れ上がった四肢を強引に地面に突き立て、目を光らせて立ち上がる。

叫び、ただ叫び。ただひたすらに声にならない声を上げ続ける。

その姿は幽鬼の如きおぞましさをかもし出していた。

そうなのだ、彼女にとって恐ろしいのは敗北ではない。死ではないのだ

波才に見捨てられ、そのような目で見られる事以上に恐ろしいものはないのだから。

「つな、嘘やろ!？」

張遼が焦り、思わず声を上げた事も無理はない。

確実にあの一撃であの女の体は壊れているはずだ。現に鼻からも口からも血を流し続けている。

口から血を流すと言うことは内蔵系に深い損傷があるということだ。さらにあの時の蹴りの感覚からあばらの数本は打ち抜き砕いている。

ほんまに化け物かいな!?

張遼は慌てて己の武具を美須々に向けて構え、彼女の力を見誤った自分を恥じると同時に、ここまで戦う彼女に尊敬の念を抱く。

事実彼女が思う通り美須々の体は死に体だった。肩の傷は浅いものの確実に彼女の体力と血を奪い続けた。顔に受けた傷は鼻が折れていた。胸に受けた一撃は肋骨が二本折れ、三本にヒビ。さらに胸、腕の筋肉組織に受けた損傷は非常に大きいものだった。本来ならば痛みで立ち上がることも出来ない。

しかし、彼女はもはやその痛さを感じることはなかったのだ。それは己の誇りと信念だけではない。

「AAAAAAAAAAAAAAAAッ!!!!!!」

アドレナリンの多量分泌。

このアドレナリンは興奮する際に脳内で分泌される物質だ。

動物が敵から身を守る、あるいは獲物を捕食する必要にせまられるなどといった状態に相当するストレス応答を、全身の器官に引き起こす作用がある。

更にもう一つ。

「（ああ、素晴らしいイ！！なんと甘美なる心地よさ！まだ、まだ戦える！！主イ、見ていてくださいイ！！私はまだここにおりますぞッ！！）」

それは痛覚の麻痺。

血まみれや骨折の状態になっても全く痛みを感じないケースをも引き起こすこのアドレナリンは、今や美須々の体を無痛の戦士へと変貌させた。美須々の気の操作による負担と痛みと疲労を一切感じさせなくしていたのだ。

限界寸前の身体は無理矢理に気の操作によって動かされている。

だが美須々として武人であり、その異常に気が付かないほど愚かではない。

「（……この胸への圧迫感。体も通常より重く感じる。気の操作が……体の限界が近いのですね）」

自分の身体の異常に気が付いていた。手が震えている、今にもブラツクアウトしそうな意識。

立つことさえままならない、戦う事など通常時には断じて考えられぬ有様。

しかし彼女は戦い続けなければいけない、そして勝たなければいけない。

何故ならば、ここで負ければ彼女の主の物語は今ここで終わるのだ。  
足を曲げるな、目を閉じるな。

「（……勝負は、機会は一度……）」

側に転がっていた棍拾い上げ、握りしめる。

これ以上の戦いは己の武を濁らせる、下手をすれば二度と主の側に立つことはない。それは、なんと苦痛であるのか想像もつかないもの。

「……驚いたで。あの一撃を受けて立ち上がるとは考えもしなかったわ」

「全ては、主のために。ただそれだけのために……貴方を倒す……！」

その言葉に張遼は歓喜する。

今、今この戦場に、この戦いに武人としての境地があるのだと彼女のおかげで気が付かされたのだから。

「……ええで、そついうのはうちは好きやで……！」

己の武。

それは全て主のため。

美須々は必死に考える。あの張遼を打倒しうる術を。

生半可な一撃では逆に反撃を受けてこちらが押し負ける。己の武はもはや手の震えでなんとか武器を持ち、保てる状態。

殺せと言われれば自分が死してでも張遼をこの状態ならば殺せる自身がある。無痛の戦士である以上体を犠牲にするという禁じ手が仕えるのだ。

……だがそれでは意味がないのだ。

両名の生存、この掲げる勝利がはるかに遠く感じる。

その時。

『え？私の故郷の技？』

『はい！！主の故郷にある技を学びたいのですが』

彼女の頭にある記憶が沸き上がった。

湧き出る記憶の濁流、こんな時に思い出したのかと美須々は苦笑し、そんな己自身に感謝した。

最後まで、今この瞬間まであの人を思い描ける自分に感謝した。

「……いいですねえ」

「何を笑っているんや？」

その問いに美須々は狂気的笑みを浮かべると棍を突きつけた。

「今、この場に私という武人の最大の見せ場がある。自らの主君に見られ、誉れを授けられる絶好の機会がある、故に!!!」

笑いは嗤いに変わった。

その嗤いは自らの主君と同じモノ。人を喰らう嗤い。

「貴方には引き立て役になってももらいます」

あまりにも簡潔な言葉、あまりにも不遜な言葉、あまりにも今の彼女には無謀な言葉。

だが張遼はもうどうしようもなく楽しいと言わんばかりに叫んだ。この胸の震えを抑える術を知らなかった。

目の前にいるのは本物の武人、相對するは主君の命をまっとうせんとする忠臣。

これぞ、これぞ戦!!!武人の華舞台!!!

「ええでええで!!!かあ〜こんな戦いを望んでたんや!!!そこまで言ったんやうちを負かせないと大恥かくで!!!」

「ええ、勝ちます！！我が一撃を天命と心得なさい！！」

「ああ上等や！！行くで！！」

張遼は一気に踏み込んだ。いまや躊躇いは無い、この武人とその振るえる心そのままに戦う。

『そうですねえ……あ、こんなのはどうですか？日本の神秘の者達が使った技です』

そして一閃、それを美須々はあえて踏み込むことによりかわしきる。だがそれは張遼の必殺の間合いに自ら踏み込んだ事を意味した。決死の覚悟を受け止めて張遼は武人として誇りに思い、喜悦の思いに身を委ねつつ、さらに自らも踏み込み偃月刀を奮う。

『日本？』

『あ、いえ。そうですねこの技の名は………と言いました、私の故郷の暗殺集団である………が使ったと言われていますね。真実は知りませんが』

『おお！主はそれを使えるのですね！？』

『いや、人間業じゃないので無理です。というか現実じゃ無理………』

『（ジー）』

『（あ、この子人外でした）もしかしたら貴方は使えるかも知れな  
いですね』

『本当ですか!?!』

美須々はそれを必要最小限に捌き続ける。躲しきれず足が、腕が浅く傷つき血が舞う。それでも美須々は、ただただ防御に徹する。彼女は期を待ち続けた。それこそ最後、確実に彼女が張遼を倒せる時を。

「どうした!?!さっきの威勢はどこへ消えたんや!?!」

歯を噛み締め、震える手を必死に握りしめて闘い続ける。熾烈な張遼の武が、美須々の命を削り取っていく。

『む、難しいですね』

『難しいというか普通は無理ですけどね』

『……もう一回、やってみます』

『うーん、あ。美須々、もしかして貴方力づくで無理矢理やっていませんか?』

『えっ。』

『最小の力で相手の重心・体勢をコントロールし導き崩すんです。流れに逆らわず、相手の体の一部となりてその身を崩す』



「はあああああ！！」

張遼が偃月刀を突き出す。

それを美須々は棍絡めて受け流し、身をつめた。張遼はそれを応じるべく偃月刀を引き戻そうとする。だが。

「（つな！？）」

美須々は張遼の正中線上を捕らえ、棍の先を得物を持たない彼女の肩に押し当てた。突くのではない、押し当てた。

そして浅い呼吸と共に僅かに押し出し、棍を手放す。その結果、無意識のうちに肩の筋肉に力を込めた張遼は、自らの逆の腕が引き戻す力に引きずられる。

それでも流石は一流の武人、張遼は既に美須々が打撃をしかるべき所へと打ち込むのだと解釈し身を固めることに成功していた。

そしてこの一撃を防げば返し刃で彼女を、と考えていた張遼は気が付いた。

目の前に、あの女がない。

その瞬間、張遼は後ろから羽交い締めにかかる。何が、何が起こったのだ！？

はやる心の焦りをそのままに、顔を僅かに動かした彼女は、嗤う美須々の顔を捉えた。

そして気が付く、これこそがこの女が打ち出した最強最悪の見せ場

なのだと。

この神速と呼ばれた自分を、彼女は今ここで墮とすのだと。

『力は確かに重要ですが、同時に振り回される。分かりますね？』

『は、はい』

『だからこそ武人はその力を飼い慣らすのです。これは川を無理矢理逆流させているのだと私は思っていますが……もしですよ。その力を出し切った状態で『正』の流れに戻したら？』

『それはあ……』

『己の力の濁流に流され、人は容易く崩れるのです。柔よく剛を制す、柔に力は不要。ただ流れのままに力を在るべき流れに戻すだけ』

美須々は張遼の衣服を掴み取り、腰及び大地に根を生やした彼女の足を刈り取った。

この間に張遼はまるで自らが彼女の思うがままに動いているような錯覚を覚えた。自分が彼女の武の思うがままに動かされている。抵抗するべき力など、まるで存在しないかのように。

後ろに重心が崩れる張遼の足を更に刈り取り、美須々は天へと飛翔する。

「レッツ！！」

空中で気を関節に集中、蜘蛛のように美須々が張遼を絡め取ったそ



大地が抉れている。

こう表現する以外に言葉はなかった。爆心地に座して倒れ伏す張遼を中心に、地面が陥没。亀裂が刻まれていた。まるでロケットランチャーのような爆撃を受けたかのように。

張遼の姿も散々たる有様だった。四肢は力なく大地に打ち据えられ、呼吸は弱々しい。体面上はそれほどの負傷はないが、この技の本質は人体内部の破壊にある。筋組織は裂傷し、骨は折れ、髪は乱れて口の端からは血をこぼしている。

だが生きていた。美須々が首などの人体の急所にこの技を決めていれば、彼女として生きてはいなかっただろう。

だが自分は生かされた。それこそが美須々の本懐、波才からの使命だからだ。

殺す気で立ち回った。生かす気で立ち回られた。

そして、自分は負けた。ああ、どうしようもないくらいに。

地面に縫い付けられたまま張遼は、満足げに笑みを浮かべると。

「…………ガハッ！」

胸を数回上下、口から全ての酸素を出した。そして負けたのにも関わらず、清々しい笑みのままに彼女は意識を手放した。

そんな彼女を背に、美須々は静かに目を瞑る。

「『忍法・飯綱落とし』……お粗末様です」

日本が忍の為す技、もはや幻想と言っても過言では無い。  
その幻想を今、美須々は現実へと昇華させた。

言葉が出なかった。

本音を言えば私は彼女が、美須々が心のどこかで負けるかもしれないと思っていた。

当然だろう。合肥の鬼、演義ではなく史実に名を残すまごう事なき魏の英雄。僅か八百の手勢で呉の侵略を退けた逸話を持つ、魏の五  
大將軍が一人。呂布の右腕だった将。天下の武人。

『張遼』

片や現実が存在せず、演義という空想の物語の人間。それも最初に登場する関羽のかませ役であり、一刀のもとに殺された将とも言えぬ賊。

『程遠志』

結果など見えている。脇役が、主役級の武將に勝てるわけがない。

そつどこかで思っていた、はずだったのに。

「『忍法・飯綱落とし』……お粗末様です」

彼女は勝って見せた。

これ以上ないくらいに自分を信じ、自分が考えもしなかった事を成し遂げた。

どうすればいいのだ。どうすれば、どうすれば自分はこの将に報いることができるのだ。

最後の最後まで自分と共に在り続けたこの将に、自分はなんと語りかけてやればいいのだ!?

そう戸惑いを覚えた波才であったが、美須々の体が倒れていくのを見て思わず駆け出す。

抱え上げた美須々の体は、既に彼女は限界を超えていることを彼は理解した。この有様で人はここまで戦えるのかと波才は戦々恐々とさらに戸惑う。

言葉を、この忠臣に言葉を。

今までの自分の全てを総動員し、なんと語りかけるべきか悩んだあげく。出た言葉はあまりにも情けない。

「……よく、戦ってくれました。貴方は勝ったのですよ、美須々」

様々な詭弁をここにきてから語ってきたはずなのに、何故かでなかった。

これ以上に彼は語る言葉を知らなかった。

だが美須々は、それを聞いて満足げに微笑む。そしてぼつりと彼にしか聞こえないような、あまりにもか細い声で呟いた。

「私ではありません、主が勝ったのです」

美須々はそう答え、全身の力が抜けて完全に波才へと抱えられる形になる。胸を動かしているところから見ると、極度の疲労と負傷からの限界。

だが、消え行く意識の中で彼女は確かにその袋から見える波才の顔を捉えていた。驚きに満ちていて、まるで未知のものに触れた子供のような波才の顔を。

美須々は微笑みながら、眠りの世界へと落ちていった。

意識を失った美須々を支えつつ波才はなんとも苦い笑顔で笑う。

それは自重からか、驚きからか、嬉しさからか、楽しさからか、苦悩からか、怒りからか。あるいはその全てを合わせたような混沌としたナニカか。

それは彼自身しか知らない。あるいは彼も知らないのかもしれない。

「張遼と彼女を至急救護班の所へ連れて行きなさい。まったく、な

んと言っているのやら」

素早く部下に回収され運ばれていく二人をしばらく見ていた波才だったが、洛陽へ向けて振り返る。

美須々は成す事を成した。ならば自分が彼女に報いるべき行いは…  
…突き詰められた勝利。

そつだ、それ以外に自分にできることなどたかがしれている。ならば自分は、闘い続けて勝つしかない。

彼は立ち上がる。その全てを背負って。

「……さて、最後の最後。白蓮の願いを叶えに行きますか」

踏み出した一歩、それは何よりも美須々が望んだ一歩だった。



### 第三十二話 俺の配下がこんなに戦えるわけがない（後書き）

昨日はクリスマスでしたね。

貴方は、この日を楽しむことができましたか？

貴方は、この日を尊ぶことができましたか？

貴方は、この日を自分の大切な人と過ごすことができましたか？

貴方は、この日を子供の頃に信じていたサンタさんに会えましたか？

貴方は、この日を自分らしく生きていましたか？

貴方は、この日をクリスマスが好きですか？

私はカップラーメン食って寝ます（＾p＾）

忙しくて誰かと過ごせるかあ！？家に帰れるのは年越しぐらいじゃあ！

こうなりや嫉妬マスク被って暴れたらあ！

……と、冗談はここまでにして。

今回はちょっと手直ししたらものすつごい長くなりました。あれだ、4000文字ぐらい増えました。おかげで12時に間に合わなかったorz

でも書きたいことが書けた気がします。うん、楽しかった。

今年はこれで書き納め、みなさん。よいお年を！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5565q/>

---

黄巾無双

2011年12月25日01時54分発行